
白面ノ大帝(ハクメンノオウ)

ZERO(ゼロ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハクメンノオウ
白面ノ大帝

【Nコード】

N1474T

【作者名】

ゼロ^{セロ}
ZERO

【あらすじ】

突然現れた記憶を失った少年。

後に彼がこの魔法と言うものが存在する世界で何を成すのか？

此処より始まるのは一人の少年と仲間達の歩みの軌跡。

（この作品は多分にご都合主義で、完結前作品なので後の辻褄あわせが出てくると思います。

スピリッツ・コントラクト
また、主人公の性格や魂獣契約締結の相手も違う可能性があります
が、ご勘弁を。

第零話：記憶を失くした少年（前書き）

初めまして、ZEROと言います^^

このたび、にじふぁんで初めて作品を書かせて頂きました。

初心者ゆえに拙い文や誤字脱字などがあると思いますがお許し下さい。

また、この作品はどちらもまだ完結していない作品を元としています。

故に後々の展開と食い違ってくる内容なども出てくると思いますがどうぞ温かい目で見守ってください。

またハーレム嫌いや原作至上主義の方には受け付けがたい内容となると思いますのでそちらの部分もお気をつけ下さい。

第零話：記憶を失くした少年

This is not hero's story,
Tracks of revival of king who
lost everything. Stories of people
who carried out boast and
belief.

【これは英雄の物語ではない
全てを失った王の復活の軌跡であり、誇りと信念を貫く者達の物語
である】

Prologue

＼side???)

時々、見る夢がある。

起きたその時には全て忘れてしまいが、その夢を見た時は直ぐに解
るから。

内容は覚えていない筈なのに、何時も悲しい気持ちになって目を覚
ますから……。

＼side out)

その日、ある場所に一人の少年が忽然と姿を現す。

優しい光に包まれ静かに身を大地に横たえられた少年は、見た目
10代前半のまだ遊び盛りの年頃のように見える。

だが、その纏う白い着物のような装飾の服には痛々しい程の傷が刻
まれており、明らかに普通の少年とは違うようだ。

そしてもう一つ、明らかに同じような年代の少年少女とは違う部分がある。

それはそのか細い手に握られた一振りの剣・・・刃の欠け方や光沢を見れば、それが玩具で無い事は直ぐに理解可能だ。

傷だらけで本物の剣を持つ、光に包まれて現れた少年　　これだけを垣間見てもこの少年は普通ではない。

すると、少年を包んでいた光が急に弱くなる。

その光は静かに輝くのが収まると、8つのそれぞれ色の違う珠に変化すると少年に吸い込まれていった。

すると、どうした事か。

傷だらけの少年の傷が塞がっていく・・・服についていた血糊もいつの間にか消える。

ほんの少しの間に少年は傷が塞がり、血の跡も消えていた・・・。

更に手に握り締められていた剣も姿を消す。

静かに、それで居て一定リズムで呼吸を始めた少年は、そのまま今迄の傷が嘘だったかのように寝息を立て始めた。

「いや〜困ったな〜」

「・・・だから、近道シヨウなんて言わなきゃ良かったノニ」

そしてそこに近づく気配。

声から察すればどうやら女性、それも少女の声のようだが・・・。陽気な声と物静かな声・・・二人の少女がこの正体の解らぬ少年と出会うのはもう間も無くだ。

そして・・・そこから遂に始まる。

多くを失った王の、長い長い復活と再生までの物語が……。

「side 美空」

「おっ、やっと出れたね。」

あーやれやれ、本当に近道だなんて思ってたこんな森を通るんじゃないかな。

今頃、シスターシャークティがどれだけ心配している事か……ブルブル、やっべ〜っすね〜」

この少女の名は春日美空。

物語の舞台である埼玉県の麻帆良市にある学園都市“麻帆良学園”に通う華の中学生。

そして同じく都市にある教会で見習いシスターをやっているイタズラ好きの少女だ。

「……ミソラ、早く行こう」

そしてもう一人、この大人しい喋り方の少女の名はココネ・ファティマ・ロザ。

同都市にある麻帆良学園の初等部に在籍する少女であり、美空と同じく教会で見習いシスターをしている。

どうやら美空とは違い、外国人だろうか褐色の肌をしている。

この二人は教会でシスターをしているシスター・シャークティと言う人物を師事している。

その為か共に行動する事が多く、今日は偶々シスターに頼まれた買出しに言った際に真っ直ぐ帰らなかった為に遅くなり、近道をしようとして迷ってしまったようだ。

まあ、それでも道の開けた場所に出られたのだから運が良いと言え

ば良いのだが……。

「そうだね、ココネ。」

まあ、この辺まで来ればもう帰る道は解るから直ぐに着くよ。

あゝ、でも、シスターにはどう言い訳すれば良いんだか……」

「……別ニ、アソンデタって素直ニ言えば良い」

ボソツと呟くココネの言葉に顔を青くして首を降る美空。

彼女の師事するシスター・シャークティは大変母性に溢れ優しい人物だが一方では厳しく、怒ると誰よりも怖いのは美空自身が一番良く知っている。

「イヤイヤイヤヤツ!？」

ココネ、それは私に死刑宣告しているのと同じだって!! そんな事言ったら確実にお仕置き決定じゃんか!？」

……って、聞いているのココネ?」

シスターへの言い訳を必死に考えていた美空。

だが不意に、近くに居た筈のココネの気配を感じなくなり辺りを見渡す。

すると、ココネは何かを見るように座り込んで大木の下の方を見つめていた。

いや違う、大木ではなくその下にある“何か”に視線を向けていたのだ。

「どしたのココネ、何かそこにあるの?」

そう言って近付く美空。

ココネの見ている視線の先に居たのは、先程現れた白い着物のよう

な服を着た少年だ。

・・・と言つても、外見的には歳は美空とさほど変わらないだろう。

「うわ、もしかして行き倒れ？」

・・・にしては随分と汚れも何も無いけど、もしかして迷子かな？」

「・・・解らない。

ケド、寝てるミタイだよ・・・」

そう、少年は状況も何も気にしないまま眠り続けている。

このような少年をそのまま此処で寝かしておく訳にもいかないだろう、美空は少年の肩を揺らして声を掛けた。

「おい、こんな所で寝てると風邪ひくよ？」

もしも〜し、こんな所で寝てちゃダメだってば〜」

しかし、幾ら揺らしても揺らしても少年は起きる気配が無い。

それどころか一定の寝息を立てたまま、眠りから覚める様子すらないのだ。

・・・仕舞いには声を出していた美空の方が疲れて来ていた。

「ミソラ、大丈夫？」

「ぜ〜ぜ〜、全く起きないね〜この子。

どうしようか、まあこのまま放つて置いても誰かが見つけてくれるだろうけど・・・」

だが、それは拙い気がする。

これだけ服がボロボロになっていると言う事は、もしや何かに襲われた可能性もあるだろう。

生憎、血は流れていないようだが

その時、美空の脳裏に名案が思い浮かぶ。
上手くいけばこれだけ遅くなった事も誤魔化せるような、所謂“悪知恵”だ。

「そつだココネ、この子を教会に運ぼう。
シスター・シャーケティならこの子の治療も出来るだろうし、教会なら何かに襲われるって心配も無いしさ。
うんうん、そつしようー!!」

「……ミソラ、本音八？」

ジト目で美空を見つめるココネ。

「そりゃあ勿論、遅くなった理由を有耶無耶に出来るじゃん!!」
「……どうやら親切心もあるようだが、本音は怒られない様にする為の口実のようだ。
まあ本気で助けたいと言う思いもあるだろうし、五分五分と言った所か？」

更にジト目で見るココネに、美空は急かすように言う。

「あゝ、もうとにかくさっさと教会に戻ろう!!」

そう言うと美空は暢気に寝たままの少年に肩を貸しながらゆっくりと教会に向かって歩き出す。
そしてココネも美空の後ろに付いてゆっくりと歩き出した。

少女達はまだ知らない。

この少年が誰なのかを、そして後に何に立ち向かい、何を成すのか
と言う事を……。

教会に帰った途端、怒声が響く。

「美空、何時まで油を売っていたのですか!？」

凜とした怒気の中にもどこか優しさのようなものを感じる声。

この声の主は美空とココネが師事している人物であり、麻帆良の教会でシスターをしているシスター・シャークティの声だ。

……まあそれ以外に肩書きもあるのだが、それを此处で説明する必要はあるまい。

「あ、シスター、お怒りはごもつともです！ だけど今は先にこの子を見て頂けませんか？」

しかし美空も慣れたもの。

上手い具合にシャークティの怒声を流すと連れて来た少年を見せる。この様子を見れば、美空が何時も怒られている事は容易に想像出来るだろう……。

「何方どなたですか、その少年は……？
……!! 美空、直ぐに此方に連れてきて下さい、手当てをします」

まだ一言二言怒り足りなかったシャークティだが、少年のボロボロの姿を見て切り替える。

直ぐに奥に連れて行くと、傷の手当てをしようとして着ている白い着物のような上着を脱がした……。

だが

「・・・これは？」

「えっ、どうしたんすかシスター？」

「・・・ドウしたノ？」

上着を脱がしてシャークテイも美空もココネも目を疑う。

あれだけ傷だらけでボロボロになっている上着の割に、生身の身体の方には治療しなければならぬ傷が一つもなかったのだ。

変わりに夥しい程・・・下手しなくても一目で致命傷と言っても過言ではない程の古傷があちこちにある。

見た目はどう見ても少年だが、その傷の多さに流石のシャークテイも言葉が出なかった。

少しの間、時が止まった後。

シャークテイは静かに美空に言葉を投げかける。

「美空、この方は何処に倒れていらっしやったのですか？」

「えっ・・・あ、え〜と、教会の少し先にある森の開けた場所ですけど」

その言葉にシャークテイは額に手を当てて考える。

しかし、色々な事を考えても納得のいく答えには巡り合わない。

此処“麻帆良”に関係のある事柄や己のシスター以外の教務と照らし合わせてもこの少年とは繋がらない。

・・・第一、この少年からは自分の考える存在だったとしたら感じる筈の“あるもの”を全く感じないのだから。

「(さて・・・学園長に報告するべきでしょうか?)」

この少年からは魔力を全く感じませんが、明らかにあの身体中の古傷を見れば一般人と言う事も無いでしょう。

取り敢えず命に別状は無いようですし、この少年が起きるのを待つからでも遅くはありませんね）」

取り敢えず少年を使用していない部屋のベットへと寝かせ、起きるのを待つ事でこの日は終わった。

・・・いや、厳密に言えばそれでは終わっていない。

「さて・・・取り敢えず向こうの事は良いでしょう。

美空、何故少しの時間で終わる筈の買出しに4時間も懸かったのですか？ 私が納得の行く説明が聞きたいですね。

それに私の頼んだ買出しの帰路にあの森を通る必要は無かった筈ですが？」

「ヒ、ヒイツ!? あ、ああああ、あの・・・そそそ、それは・・・」

この夜、少女の悲鳴が教会から聞えたそうだ・・・合掌。

side out

少年は夢を見ていた。

何も見えない、何も聞えない唯真つ暗な道を只管ひたすらに。

行くべき場所がある訳ではない。

帰るべき場所に向かう訳でもない。

いや、それ以前に何故自分がこのような場所を歩いているのかすら

解らないのだ。

自分が誰なのかも解らない。

この先に何があるのかも解らないし、興味も無い。

唯、機械仕掛けの人形のように意味もなく只管歩き続けているだけだ。

その行為に意味は無い。

何故、歩いているのかも解らない。

だが、不意に少年の視線の先が明るくなったように見えた……。

そこへ向かうべきだろうか？

だが、人形のような少年にはそれ以外の道はない。

しかし不意にその明るい場所に進もうとすると足が重くなる。

そこに行こうとすると、無い筈の心が締め付けられる。

壊れた筈の心が、身体が、思考が、その光る場所に行くのを否定する。

そんな時……声が響いた。

『行けよ、 。 こんな所で寝てたつてしょうがないだろ？』

陽気で明るく、だが思い出せないその声。

更に続くように誰かの声が続けて響く。

『私達は……貴方と共に居ます』

優しげで、どこか儂くも聞える声。

『君、君は一人じゃないよ』

人懐っこい声。

『フン・・・私の認めた漢がこのような所で朽ちるなど許さん』

強く響き渡る声。

『殿、貴方はまだ死んではならない』

凜とした声。

『今の貴方なら大丈夫、自信を持ちなさいな』

聡明そうな声。

『我等もいずれ貴公と共に再び行く・・・それを忘れるな』

紳士的で誇り高き声。

『・・・だから、前を向いて』

物静かな声

そして・・・最後に響く声は・・・。

『・・・お前の道はまだ志半ばだ。

下を向くな、唯真っ直ぐに上を向け・・・そして、お前の護りたい

者を今度こそ護り抜け。

俺達夫婦は何時でも・・・お前の幸せを願っている』

『貴方の選んだ道を後悔する事は止めなさい。

妾は貴方を残して先に逝っただけど・・・貴方を護れたのだから後悔は無いから。

今度こそ誰よりも、幸せになりなさい』

全ての声がそこで途切れる。

少年は静かに重い足を引き摺りながら歩き出す。

ただ・・・その先に見える光へと向かって。

そして遂に、光へと辿り着いた

気付いた時に見えたのは己を見下ろす褐色の肌の少女、ココネ。

少年が目を開けたのを驚き、小さく呟く。

「・・・起きタ」

慌てて走るようにドアの外に出て行くココネを視線で追う少年。

そのままドアを見つめていると、勢い良く扉が開いた。

ココネがシャークテイと美空を連れて来たのだろう。

「良かった・・・あれから三日間も眠り続けていたのですよ?」

「んん? 三日間も寝てた?

そっか、三日間も俺寝てたのか?・・・って、誰?」

起きて第一声が“誰?”とは無礼な少年である。

だがシャークティはそんな事など気にせず自己紹介を始める。

「私はこの麻帆良の教会でシスターをしているシャークティと申します。」

此方の二人はこの教会で見習いシスターをしている春日美空とココネ・ファティマ・ロザ。

・・・起きていきなりで失礼ですが、どうしてあのような森に倒れていたのですか？」

その言葉に少年は考えるような素振りを取る。

そして・・・答えは予想外と言えば予想外、想定内と言えば想定内の言葉だった。

「・・・へっ、倒れてた？」

嘘、俺が？ と言うよりも“まほら”って何処の事？」

「はっ？ 貴方、麻帆良を知らないのですか？」

シャークティが返した言葉に少年は返す。

「知らないよ、そんな所。」

・・・ん？ そう言えば俺って誰だ？」

「えっ・・・ええっ!？」

まさか、ご自分の事も思い出せないのですか？」

そう・・・何と少年は記憶喪失に陥っていたのだ。

記憶の無い様なこの状態では、彼自身の事を調べる事も不可能だろう。

困るシャークティ達を他所に、少年は然して困る様子も無く他人事

のように返す。

「いや、名前は思い出せた。

あと、記憶喪失って奴だろうけど・・・名前以外が思い出せないだけみたいだな」

そう言うと少年は人懐っこい笑いを浮かべながら三人に名乗る。

「俺の名前は光明司こうみょうじ 齊さい。

えっと、“しゃーくてい”に“みそら”に“ここね”だったっけ？

宜しくな」

記憶を失った一人の少年。

彼の軌跡は、今此処に始まりを告げたのであった・・・。

第零話：記憶を失くした少年（後書き）

さて、いきなり始まりました今作品。

皆様の暖かい声援や感想、ご指摘などによって成り立っていくと作者は考えております。

なので感想の方には可笑しいと思った部分がありましたらどんどんご意見をお願いいたします。

・・・まあ、その際はオブラートに包んで頂けると作者も折れずにくむと思しますので、どうか身勝手ですが宜しくお願いいたします

第一話：吸血姫との邂逅（前書き）

では第一話です^^

辻褄が合わなかったり、時間の流れがおかしいですがご容赦を。

（作者は時間の流れを歪めて書いています）

第一話：吸血姫との邂逅

「シャークテイ、これ何処に置いときゃ良いんだ？」

「あつ、サイさん。それは奥の方に運んでおいて貰えますか？」

サイと名乗る少年との邂逅から約一週間程の時間が流れた。

当初、名前以外の記憶を全て失っているなどと言う事柄にシャークテイは直ぐ医者へと連れて行った。

そして診断してもらったのだが……。

）side 回想（

「異常なし、ですか？」

シャークテイの言葉にサイを診察した医師は頷き答える。

「ええ、脳には異常は見られませんが打撲などの痕も見られません。まさに健康そのものです、何処にも記憶喪失の引き金になるような原因はありませんね」

実に珍しい症例だったのか疲れたような表情をしている医師。そこで可能性として挙がる原因を述べた。

「あくまでも可能性の段階ですが、身体に負っている傷が切欠ではないでしょうか？」

昨今、親御さんや教師からの虐待や同年代の子供達からの虐め等が切欠で現実を逃避してしまう子供さんも多いです。

しかしそれには余りにも傷が大き過ぎると言う疑問が出て来てしま
いますか」

医師の示した可能性に悲しげな表情をするシャーケティ。

彼女は神に仕え、教会に訪れる人々に多くの教えや愛などを伝えて
いる身の上。

そんな彼女にとって、同じ人間の悲しい行いが原因ではないかと伝
えられれば心を痛めない筈がない。

・・・当の本人であるサイは解ってるのか解っていないのか人事の
ような表情をしていたが。

「サイさんの記憶は戻るのでしょうか？」

サイの事を心配したシャーケティは医師にそう聞く。

だが医師の方は目を伏せ、静かに首を横に振ると答えを返す。

「・・・難しいでしょう。」

あくまでも先程の説明は可能性の段階です、それに仮にそれが事実
だとすれば過去の辛い記憶のフラッシュバックから己を傷つける“
自傷行動”を起こす可能性もあります。

今はとにかく心を休ませ、落ち着ける事が出来る環境が必要ですね。
・・・」

医師のその言葉に決心したようにシャーケティは答える。

本来、正体の解らない存在はこの学園都市の裏にある“ある事情”
によって学園長に引き合わせなければいけないのだが、サイの身体
に刻まれた古傷や記憶を失っていると言う事と医師に告げられた事
が彼女にその答えを導かせたのだ。

「解りました。」

教会の見習いであるあの子達がサイさんを助けたのも主の思し召し
でしょう。

迷える子羊を再び路頭に迷わすも見捨てる事も出来ません・・・教
会で暫くの間、心を休めて頂きます。

その間、申し訳ありませんが警察などには暫く黙っておいて頂けま
すか？」

シャークティの言葉に医師は静かに頷く。

こうして記憶を失った少年サイは、一時的にだが教会で預かられる
事となったのであった。

しかし、ぼーっとしている事だけが生に合わないと思ったのかそれ
とも恩義を感じてか、サイは教会の掃除や男性しか出来ないである
う肉体労働などを誰に言われるでもなく率先してやるようになり（
勿論最初は断ったが、何度も何度も頼むのに根負けした）、現在に
至ると言う事だ。

（side out）

「・・・サイさん」

黙々と荷物を運んでいるサイの背に言葉を飛ばすシャークティ。

呼びかけにサイは立ち止まると声のした方向を首だけ回して見て言
葉を返した。

「んん？ 何、シャークティ？」

こう見てあどけない表情を見れば普通の少年に見える。

だが・・・この少年の目の奥底に見える“何か”はどこか、自分よ
りも年上に見える事もある。

記憶が戻らない現在にあつて、その正体を知る由はないのだが。

「いえ、それよりどうですか？ 記憶の方は戻りそうでしょうか？」

「ん〜、どうだろ？」

まあ、取り敢えずそんなに急いで戻らなくても良いんじゃないの？」

そのまま前を向き直すと奥の方に荷物を置きに行く。

再び戻つて来た所で、殆どの荷物を運び終わっていた故か、床に座り込むサイ。

そうして、先程の言葉の続きを語りだした。

「それに俺、別に記憶が戻らなくても困つてないしね。

何だか記憶が無いのはモヤモヤするけど、此処に居ればシャークテイのおいしい料理は食べれるし、美空やココネからは元気が貰えるしよ。」

・・・何でか解らないけど、今凄く充実してるって感じるんだ」

思いがけない言葉に一度驚いたような表情を浮かべるシャークテイ。だが、直ぐに嬉しそうな表情で微笑を浮かべていた。

その日の夕方。

珍しくシャークテイが麻帆良学園に呼ばれた為、サイは教会を抜け出して街の散策に出かけていた。

まあ本来教会を勝手に抜け出してはいけない身の上なのだが、偶には何があるのか散策したかったのだらう。

ちなみにシャークテイが麻帆良の中心と言っても過言ではない麻帆良学園に呼ばれたのには理由がある。

実は明日、麻帆良に訳ありのある教師が赴任してくる事になったのだ。

元々シャークティは教会のシスターだけではなく、臨時で麻帆良学園の教師もやっている。

更にそれ以外にももう一つやっている事があるのだが・・・それはまだ此処で語るべきではない事。

とは言え、この麻帆良に関係してくる事には違いないのだが。

「へー、こんな眺めの良い場所もあったんだ。

（しかし・・・やっぱり、見覚えが無いな。俺、こんな所に来た事無いと思うけど・・・）」

巨大な大木に登って辺りの光景を見ているサイ。

ちなみにこの大木は“神木しんぼく 蟠桃ばんとう”と言う正式な名称を持つ、学園都市・麻帆良の中心に聳え立つ樹高270mと言う他に類を見ない巨木である。

そんな巨木の頂点近くまで登っていれば、街の全景が見られるのは当然だろう。

「ま、いつか。慌てて記憶なんてものは取り戻さなくなっちゃって何とかなるだろうし。

さうして、陽も殆ど落ちたし、早く帰らないとシャークティやココネが心配するな」

そう言うのが早いかな、頂点近くの大木の枝から飛び降りるサイ。

本来ならば重症を負って当然、下手しなくても投身自殺すると同じような高さから飛び降りた筈なのに、彼は怪我一つ負う事も無く地にゆっくりと舞い降りた。

そしてそのまま暗くなり始めた道を教会に帰ろうとする。

丁度、その時だった。

「きゃあああああああああ！！！」

聞えて来たのは少女の悲鳴。

どうやら少し場所は離れているようだが、サイの耳にはしっかりと聞えていた。

「悲鳴！？ えっと・・・向こうか！！」

何があつたのか、何処で聞えたのか・・・そんな事は今はどうでも良い。

その悲鳴に心の奥底にある“何か”を刺激されたサイは、声のした方向へ向かって走り出していた。

我武者羅に走り続けるサイ。

本来サイはシャーケティと共に買出しに行った道位しか知らない筈だが、自然と足が声のした場所に向かって走っていた。

「（確か・・・声がしたのはこっちだったよな。

って、あれ？ どうして俺はこんな遠くの声が聞えたんだ？）」

己の聴力に少々の疑問を持つが、今はそんな事などどうでも良い。ちなみにこの時、サイは無意識の内におかしな気配を辿って走っていたのだが本人がそんな事を知る由も無いだろう。

走っていったその先には、倒れていて学生服の上着を掛けられている少女とその上着の持ち主だろう少女が困ったような表情で座り込

んでいた。

「悲鳴は確かこっちから聞えた筈……!!
あつ、その人、此処でさっき何か無かった!？」

急に現れたサイに驚く座っていた少女。

だが、何処と無くサイが悪人ではないと理解したのか此処であった
事の説明をし始めた。

「誰……？」

はっ、そうや……実は此処でウチの友達が襲われて、もう一人の
友達がそれを追いかけて行ってもうたんや!!」

慌てて言っているこの姿を見れば、状況が切羽詰っているだろうと
いうのは理解出来る。

サイは皆まで聞かず、大きく頷くと少女に向かって言葉を返した。

「解った、君の友達を助ければ良いんだね？」

じゃあ、危ないから君はその気絶してる子を連れて戻って!!

これから先は俺が……(って、あれ？ こんな事が昔どこかであ
ったような……)」

今のような状況に既知感デジャビュを感じたサイ。

だが今はそんな事はどうでも良い、何が居るのかは解らないが“前
とは違い戦わずに直ぐに脱出すれば良い”

そう思った時にまたもや頭の中に疑問が浮かんだ。

「(戦わなければ良い?)

俺は……何かと戦った事があるのか? ダメだ……思い出せれ
ない)」

しかし今は悩むのは後だ。
先程自然に追いかけてきた“何かの気配”を辿り、進んでいった方向を探知する。

そしていざ走り出そうとしたその時、後ろに居た少女が口を開く。

「あ、あの、所で誰？」

疑問を投げかける少女にサイは進むべき方向を見たまま答えた。

「俺？ ああ、唯の通りすがりさ。名乗る程の人物じゃないしね」

そう言い終わると、気配のする方向へ走り去って行った……。

その頃、サイの向かった先では。

黒いマントのようなものを羽織った人物が、赤髪のツインテールの勝気そうな少女を掴み上げていた。

「……フツ、愚か者めが。」

つまらん事に首を突っ込まなければ痛い目を見ずに済んだものを「

「く……苦しい……。」

て、てかアンタ……ウチのクラスの子じゃないのよ……」

そう、赤髪の少女はマントの人物の顔を見て気付いた。

そこに居たのは己の通う学校のクラスメイトだったのだ。

何故、クラスメイトが……しかも、クラスでも小柄の少女にこのような力があるのか？

そんな事を考えている暇も無く、意識は朦朧としていく。

ああ!!!?」

「マスター、ご無事ですか？」

顔を蹴られて憤るマントの人物。

いや、サイの蹴りの所為でマントが取れてその中から出て来たのは、明らかにココネと同じ年か少し上程度にしか見えない金髪の少女だった。

更に何処にいたのか、まるで人形のようにあまり感情の籠っていない喋り方をする少女が現れた。

「クツ、お・・・覚えていろ貴様!!」

誰だか知らんが、私の顔を足蹴にしたその報いを必ず受けさせてやるわ!!」

行くぞ、茶々丸!!」

ありきたりな子悪党の撤退文句を言いながら脱出する金髪の少女。

その少女を抱き抱えるようにして背中から火を噴き空を飛んで脱出する茶々丸ちやま丸と呼ばれた人物。

二人は見る見るうちに凄いスピードでその場所から去っていった・・・。

が、しかし

「待てコノヤロー!!」

誰が逃がすか、ううおおおおおおお!!!」

何とサイはそのまま地を駆けて二人を追う。

尚、赤髪の少女はこの後、サイが先程会った少女が様子を見に来た事により見つかり、意識を取り戻して寮に戻ったそうだ。

「マスター、先程の人物がまだ追って来ているようです」

「何っ!? チツ、ジジイが新しく雇った警備員か何かか。
オイ茶々丸、アイツは誰だか調べてみる」

頷くとデータを照合し始める茶々丸。

実は彼女、ガイノイドと呼ばれる女性型の人造人間である。
そのデータベースはこの麻帆良において三本の指に入る程に高く、
表の情報から裏の情報まで調べられないものは殆ど無い。
しかし……。

「マスター。」

今、私のデータベースで調べた結果、彼はこの学園の生徒でも教師
でもありません。

更には魔力も感知出来ませんので、カテゴリーとしては“一般人の
侵入者”と言う事になります」

「な、何だと!?

そ、そんな馬鹿な事があるか!? しつかりと調べろ!」

金髪の少女が驚くのも無理は無い。

今さらっと出てきた“魔力”と言うフレーズ、それに関係して普通
の一般人では金髪の少女に蹴りを喰らわす等普通は出来る訳が無い
のだ。

……だが、茶々丸から返って来た答えは金髪の少女の予想を裏切
る答えだった。

「もう一度データベースで照合してみましたがいよいよ結果は同じで

す。

それに魔力計測計を使い、再度計測しましたが・・・あの人物からは魔力が一切関知出来ませんでした」

「馬鹿な・・・じゃあ、やつは一体何だ!？」

魔力が計測出来んのなら、何故やつは私の顔を足蹴に出来た!？」

だが・・・その答えに答えてくれる者などいない。

だが魔力が計測出来ない、己の従者のデータベースにも無いと言う事はまさに“一般人の侵入者”と言う事だ。

彼女が科せられた事は、その“侵入者”を排除すると言う事。

「チツ・・・考えていても埒が明かん。

取り敢えず先程の感じならば実力者ではなく偶々上手く攻撃が出来ただけの素人だろう・・・降りるぞ、茶々丸」

「ハイ、マスター」

そう言うのとゆっくりと地に下りる二人。

二人が大地にしっかりと足をつけたその時・・・走って追っていたサイもまた、二人の前に辿り着いた。

「はあ、やれやれ。

やっと追いついたぞ・・・ってか、何で逃げるんだよ。そもそも聞きたかったんだけどアンタ誰？」

その第一声に金髪の少女がずっこける。

ブルブルと震えながら青筋を立てて立ち上がると、サイに向かって怒鳴った。

「それはこっちの台詞だ貴様！！ 誰が逃げただと！？
しかも貴様、まさかそれを聞く為に私を追いかけたのか！？」

「そうだけど、それが？」

再びずっとこける金髪の少女。

何という事だろうか・・・サイはどうやら途中から空を飛んで逃げたこの少女の正体が知りたくて追っ駆けていただけに過ぎないのだ。

「・・・馬鹿馬鹿しい。」

オイ茶々丸、適当にやっておけ それが終わったら記憶を封じて適当に外にでも転がしておく」

・・・どうやらサイの事を“頭の足りない人物”と認識したのだから。

興味を失った金髪の少女は、茶々丸に適当に戦わせてから記憶を封じようとしていた。

しかし、無駄に耳が良いサイは少女の言葉に返す。

「おい少女、記憶を封じるってどういう事だ！？」

「誰が少女だ、誰が！！」

まあ良い、私は寛大だしどうせ忘れてしまっただから教えてやろう。私は魔法使い、そしてこの世やこの麻帆良には多くの魔法使いが存在する。

しかし貴様のような一般人にはその存在を知られる訳には行かない、故にそれを見た者には記憶を消去しなければならないのだ」

律儀に突っ込み返す少女。

その間にサイの前には茶々丸が立ちふさがると、軽くだが攻撃を開

始した。

「・・・申し訳ありません、マスターのご命令ですので。怪我をなさらないように軽く致しますので、どうかあまり抵抗はなさらないで下さい」

放たれる一撃。

しかし・・・サイは自然に向かつて来た茶々丸の拳を両手で円を描くようにして払う。

そしてそのまま、懐に入り込むと掌低を放って吹き飛ばした。

「・・・なっ、くっ!!!」

「な、ななな、何イ!?!」

サイと対峙した茶々丸は元より、それを見ていた金髪の少女も驚いた。

まさか、目の前の素人にしか見えない少年が受けの技術の中でも難度の高い“回し受け”が出来るなど思いもすまい。

さらに掌打の一撃・・・いや、良く見えなかっただけで三発は打ち込んでいただろう・・・それで茶々丸を吹き飛ばすなどとは思っても居なかったのだから。

一方、攻撃を叩き込んだサイも自分の掌を見ながら首をかしげる。あの時、そう・・・茶々丸からの攻撃が放たれたあの時に身体が自然と動いたのだ。

「・・・どうやら油断していました。

少し、本気でやらせて頂きます　お怪我した際はお許しを」

吹き飛ばされた茶々丸は体勢を立て直すと攻撃に転ずる。

高スピードの蹴りでサイの腹を蹴り、空中に上げた後は上から組んだ両掌で地に叩き落す。
大地に叩きつけられたサイは、受身を取る事も出来ずに腹から叩きつけられた。

「ゲホツ・・・!？」

(な、何だあの子・・・まるで鉄の塊で殴られたみたいだ。

これじゃあまるで、アイツと同じ・・・ん？ アイツって誰だ?)

頭に浮かんだフレーズに疑問を浮かべるサイ。

だが・・・その油断が茶々丸に更に連撃を喰らわされる切欠となっ
てしまった・・・。

「グッ・・・がああ!! (考えてたって仕方が無い、今は目の前
に集中するんだ!!)」

くそ・・・まだまだだ!!」

サイの呻き声が口から漏れる。

だが、サイはゆっくりと立ち上がると茶々丸に向かって突撃を仕掛
けた。

しかし・・・。

「・・・無駄です」

魔法と科学の融合体たる茶々丸にとって、攻撃を見切る事は難しく
は無い。

勿論、達人の攻撃を避ける、見切るなどは容易ではないが・・・素
人に毛の生えた程度のサイの攻撃なら読む事など容易い。

向かって来た拳の手首を掴むと、そのまま腹に蹴りを叩き込んだ。

「グアツ・・・!!」

(くそ、くそ・・・強い。

だが・・・ダメだ、俺は・・・絶対に屈しない!!

此処で屈したら俺は・・・“あの時”と同じになっちまう・・・!!
「」

うめき声を上げて倒れこむサイ。

もう、この状態では立てないだろう・・・そう思った金髪の少女の
思惑をサイは見事に裏切り立ち上がる。

が、先程から何発も攻撃を叩き込まれていた彼は限界に近い・・・。
身体はガクガクと揺れ、息も荒れている・・・もう限界だ。

「・・・何故だ」

そんなサイを見て金髪の少女が呟く。

先程までには愚か者としか見ていなかったが、何故だろうか・・・
この少年の“眼”はある人物に似ていた。

「何故そこまでして立ち上がる？」

貴様が茶々丸に勝てないというのは、もう理解出来ているのだろうか？
素直に記憶を消されるだけで、これ以上痛い思いをしないで済むと
言うのに・・・何故だ？

それ以上は足掻いた所で無駄な事に過ぎん」

茶々丸もどこか悲しげな眼でサイを見ている。

彼女は確かに少女の従者であり、主の命あればどんな相手であろう
とも戦う。

だが・・・勿論、彼女もただの人形ではない。心も持ち合わせて
いるのだから。

「……が、俺の……だから……」

「……ん？ 何だ？」

ポロポロになりながら小さく呟くサイ。

それを聞き直そうとした少女……。そこで彼女の耳にサイの言葉が届いた。

「今の記憶が……俺の……全てだから……だ!!」

「何？ それはどういう……」

最後まで少女の言葉は続かない。

それはサイの目を見てしまったからだ。その眼は何時も不敵に笑い、英雄と呼ばれたあの男の眼とそっくりだったから。

「今の俺には……過去の記憶が……無い。

だから、シャークテイや……美空や……ココネと過ごした短い時間が……今の俺の全てだ!!」

それを勝てないから……自分より強いからなんて理由で……贖いもせずに消されたら……短い間でも一緒に居てくれた人達の思いを踏みにじるのと同じなんだよ!!!」

いや、それだけではない。

それは己が焦がれ、追いつけた男の仲間の眼にも似ていた。

何よりも真っ直ぐで、例えどんな事があるうとも己の誇りを貫き通す者達の目に……。

今の彼女にとって見れば誰よりも見たくない眼だ。己の焦がれた男はもう既に、この世に居ない筈なのだから。

「俺は・・・俺はもう、大切なものを手放したりしない!!
誰が相手だって、何が相手だって・・・もう、俺は下を向いたりな
んてしない!!」

それが俺が・・・俺が父上から託され、託した“誓い”だからだ!
」

「チイツ、何を訳の解らん事を。

茶々丸、やれ!! そいつの眼は・・・見ていて不愉快だ!!」

苛立った様に茶々丸に命令を下す少女。

いや、本当は少女は己自身に対しても不快だと感じていた　そ
れを、脳裏に浮かべてしまった事を払拭しなかった。

それは、サイの眼が一瞬でも“あの男”にそっくりだと思っ
てしま
った事。

あの何処までも真っ直ぐな目・・・薄汚れてしまった自分自身には
決していないあの眼差しに嫉妬しても居たのかも知れない。

主の言葉を聞き、茶々丸もまたサイを倒す為に狙いを・・・。

「・・・!? マスター!!」

彼から膨大なまでのエネルギー反応を確認!!　これは魔力でも気
でもありません!!

この力・・・解析不可能です!!」

「な、何っ!？」

そうして二人は見た。

サイの体から立ち上る虹のように輝く光を・・・。

正体不明のエネルギー反応はサイの体から眩いばかりにあふれ出し、
その両腕を包み込んだのだ!!

「何だ・・・何なのだあれば、茶々丸!？」

「ダメですマスター、解析不可能です!!!」

光はそのままサイの腕に何かを作り出す。

それはかつて、サイがこの世界に現れた時にその手に携えていた剣。そして金色に輝く、両手を覆う籠手だ・・・。

「・・・解る、解るぞ。」

殆どの記憶を失ったけど・・・ずっと俺の中にあっただんな・・・。

スサノオ・・・アスラ・・・!!」

それこそが魂より生み出された至宝。

強大なる力を持つ、神の名を冠す武器

アーティファクト
神具。

スピリッツストーン
魂石の力を得、進化する魂の太刀・・・七魂剣・スサノオ。

そして己が父より誇りと夢と共に託された、刹那の速度を得る籠手・
・・・六道拳・アスラ。

どちらも共に戦い抜いて来た、サイの神具。

強き想いにより今、サイの手の中へと具現化したのだ

「行くぞ・・・我が奥義、その身に受け取れ!!」

不動剣　アカラナータ!!!!」

二人はただ見ているだけしか出来ない。

それ程のその力は強大で、そしてその太刀を振るう少年の姿に少女

と茶々丸は魅入られていた。
そして剣から放たれた虹色の衝撃波が二人を飲み込み・・・たった
その一撃がこの戦いに決着を付けたのだ。

「クツ・・・無事か、茶々丸？」

「四肢や回路には問題はありません。
ですが・・・今の一撃でそれ以外の部分に損傷が激しいです」

その答えに驚く少女。

今まで優勢だった、しかも制限が掛かっているとは言えこの学園都
市内では五本の指に入る実力者の己と、己の最も信頼する従者の二
人がかりをたった一撃で覆した事に・・・。

「ば、馬鹿な・・・有り得ん。」

何だ・・・あの小僧は一体、何なのだ!？」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。
どうする、まだやるのか・・・？ まだやるなら・・・」

たかが一撃にて二人を此処まで追い込んだサイ。
ゆっくりと光は止み、二つの神具も姿を消した
サイはそのまま立ったまま、一歩も動こうとしない・・・余裕か、
それとも限界かは理解し難いが。

「クツ・・・この屈辱、忘れんぞ。」

次の満月には必ず・・・覚えておくが良い!!

我が名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル!!
アタナシキョテイ

貴様の名は!？」

そこでサイは静かに呟く。

「・・・サイ、光明司 斉だ。

エヴァンジェリンだな・・・その名、忘れない」

「サイ・・・貴様の名も忘れん！！

次に戦う時は・・・必ず私の足元に跪かせてから八つ裂きにしてくれるわ！！

帰るぞ、茶々丸！！」

そう言い終わるとそのまま闇に消えていく二人。

その後姿を消えるまで見つめた後、不意に目の前の景色が歪む。

「・・・はあ、はあ・・・はあ・・・。

七魂剣・スサノオに六道拳・アスラ・・・これが、記憶を取り戻す切欠になるのかな・・・？

・・・ダメだ、腹減った・・・きゅうううう・・・」

そのまま大地に倒れる 急の力の覚醒や受けていた攻撃によつ

て限界ギリギリだったのだろう。

それが金髪の少女エヴァンジェリンを追い払った事により緊張の糸が切れたのだ。

ゆっくりと目を瞑ると、サイの意識は闇に落ちて行った・・・。

第一話：吸血姫との邂逅（後書き）

第一話、いかがだったでしょうか？

途中でサイの口調が変わるのは仕様です、まあ記憶喪失ですから^^
解りやすく言えばスーパーロボット大戦OGSに出た記憶喪失のアクセル・アルマーさんって所でしょうか。

さて・・・こちらでも出たアーティファクト。

これは所謂ネギま原作のものより遥かに上位の存在です。

近いうちに説明なども書くのでお楽しみにどうぞ

第二話：機械仕掛けの少女（前書き）

さて第二話でございます。

前の話にも書きましたが、この作品は私が時間の流れを変えています。

その為、本来ではネギ君が来る前にイベントが起こる事は無いのですが……。

まあ、ご都合主義とご納得下さい^^

第二話：機械仕掛けの少女

「わわわ、何これ!？」

「凄いや、沢山の人が居る!!　これが日本の学校か」

朝の通勤ラッシュ、どこぞの『なんとかランド』の開園時の混み様が毎日のように繰り返される麻帆良の朝の光景。

老若男女関係無く朝から慌てて走るこの光景の中に、一際珍しい人物が居た。

いや、人物と言うより・・・“少年”と言った方が良いか？

その子供は人がごった返す日常茶飯事の光景を珍しそうに見ている。この姿から垣間見れば既にこの少年が麻帆良の住人ではない事が一目瞭然だ。

さらにその小さな身体に背負われているリュックサックやらを見れば、どうやら何らかの理由があつて此処に来た事は解るだろう。

・・・何故か布が巻かれた長物の、言い表すなら棒状の何かを持っているのが気にはなるが。

「いけない、ボクも遅刻する時間だ!!」

初日から遅刻なんて拙いや・・・今日からボクの修行の日々が始まるのに!」

スーツの内ポケットから年代物風の懐中時計を取り出して時間を確認する。

独り言から推測するに、麻帆良の初等部の転校生と言った所か？

だが、それにしてもスーツのような服装をしているのは余りに不釣り合いだろう。

・・・このような服装では生徒と言うよりも先生の方が合う様な気

がする。

慌てて走り出す少年・・・その大きいリュックサックと小さな体は実に不釣り合いだ。

少年が懸命に走るその姿に微笑ましさを感じながら道を開ける大人達。

この少年が表の理由も裏の理由もこの麻帆良に何をしに着たのかその理由を知れば、十中八九殆どの人物が驚くだろう。

さわやかに地を踏みしめ、駆け抜ける少年の名は“ネギ・スプリングフィールド”。

イギリスのウェールズにある学校を卒業し、日本の麻帆良に表向きは“教師として”赴任してきた、数えて10歳（満9歳）の少年。

その正体は麻帆良にて正体を隠して生活をしている“魔法使い”たちと同じく『立派な魔法使い』^{マキステル・マキ}と呼ばれる存在にならんと努力する魔法使いの卵だ。

イギリスの魔法学校を主席で卒業し、いざ修行内容が“日本で学校の先生をする事”などと言う無理難題を押し付けられた筈なのに、その表情は今から始まる見た事も無い世界への憧れから緊張しながらも嬉しそうにも見えた。

故にネギはまだ気付いていない。

この麻帆良でこの先に待つ、数奇な運命と多くの現実を。

その運命にはネギの血筋や生まれが関係し、簡単には行かないと言う事を。

そして・・・読者にも隠されたある秘密が更に過酷な未来を見せるという事を。

そしてまだネギは知らない。

この麻帆良で運命的な出会いを果たし、臆さずに前へと進んでいく

者達に会える事を・・・。
そんな先にみらい気付く筈も無く、ネギはこれから始まる生活に胸を膨らませていた。

さて、一方その頃。

この物語の主人公である、記憶喪失の能天気お気楽少年はというと。

「おっはよ〜、ココネ！おっはよ〜、サイ！！
つてあれ・・・ココネ、サイは？」

「オはよう、ミソラ。」

サイ、まだ寝てル・・・こんな事、初めテ」

元気に教会の礼拝堂に入つて来ながら挨拶をする美空。

彼女は元々、麻帆良学園の中等部の女子寮に住んでいるのだが毎朝の礼拝堂の掃除を日課としている。

最初の頃は眠い眼を擦りながら嫌々やっていた感もあるが、慣れて来たのか最近では率先してやるようになっていた。

・・・まあ、それだけではなくイタズラ好きで多少の成長はあれどまだ遊びたい盛りの少女にとっては此処で教会の居候のような風になっている同年代の男の子のサイや自分を内心で慕ってくれているココネと話せるのは息抜きの一つだ。

「へえ、珍しいね。」

いつもなら誰よりも先に起きて、礼拝堂の雑巾がけしてる筈なのに・・・」

美空の言葉にココネも疑問そうな表情をしながら頷く。

いつもならサイは『住ませて貰って飯まで食べさせて貰ってるのに

何もしないのは性に合わない』などと言って率先して礼拝堂の掃除や教会前の掃除に買出しなどをやっている。

しかも、教会に居候し始めてから一日たりとも遅れた事は無かった筈だが……。

今日に限って居ないと言うのは一体どういう事だろうか？

「さっき、見に行ってきた。

そしたらサイ、眠ってて揺すっても起きなかつた。

……最初に会った、あの時と同じ」

そう、確かに先程ココネはシャークティと共に起きてこないサイを起こしに行った。

しかし、幾らココネが揺すっても耳元で声を掛けてもサイは一定のリズムで呼吸をしながら眠っているだけだったのだ。

……尚、ココネは別としてシャークティは神への信仰が長い故か美空と同じ位の年齢だろうが男性の居る部屋に入るには少々の気恥ずかしさがあったそうだ。

まあサイが時より見せる、年齢不相応の眼差しが気になっていたという理由もあるのだが。

「サイさんも疲れているのでしょうか」

「あつシスター、おはようございます」

ココネと美空の二人で話しをしている所にやって来るシャークティ。美空の朝の挨拶に微笑みながら返す……シャークティもサイが此処に居候するようになってから随分と笑顔が増えた。

かつての厳しさも勿論あるが、それ以上にまるで肩の荷が少し降りたようにも感じる。

「はい、おはようございます。

サイさんが此処で共に生活するようになって2週間近くになりますね。

その間に彼は、誰よりも早く起き、文句一つ言う事も無く率先してこの教会の雑務や掃除などをしてくれました。だから、その疲れが溜まっていたのでしょうか」

確かに・・・サイは毎日、それこそ給与を貰って良い程の沢山の仕事をしていた。

教会の掃除、買出しの手伝い、荷物の片付けに周囲の草むしりから教会にやって来た客の案内まで様々な仕事をだ。

シャークテイからすれば頑張り過ぎていたように見えた為に一度本人に何故そこまで頑張るのかと聞いた事がある。

すると本人は心配するシャークテイを他所に至って能天気にごう返した。

『だって俺、美空やココネみたいに学校行ってないし。』

“働かざる者、食うべからず” って言うじゃん、それだけの事だよ

・・・つまりは彼は学校や仕事に行っていない代わりにほぼ一日近くを教会の雑務に費やしていたという事だ。

まあそれで疲れて寝て起きてなければ世話無いのだが・・・。

それに実際の理由は“教会の仕事が疲れた”のではなく“エヴァンジェリン&茶々丸との殴り合いで傷ついた体を癒していた”だけなのだが。

「サイさんの事はまだ学園長や他の先生方にも伝えていませんから余りお一人で麻帆良を歩いて回る事は出来ませんし・・・。

やはり、学園長達に伝えるべきなのでしょうか・・・？」

だが、それにはある懸念がある。
学園長や麻帆良の教師達は多かれ少なかれ“魔法”に関係している者達が多い。

そんな彼らにいきなり現れた身元不明で全身に尋常じゃない量の古傷がある記憶喪失の少年を会わせればどのような事になるのか理解しているからだ。

特に学園長はサイに大分興味を持つだろう。

件のイギリスから表向きは麻帆良中学の新任教師として赴任してくる子供先生のサポートなどのような形で女子中学校に入れられてしまう可能性もある。

更にそれ以外の懸念は・・・身元を調べる為に魔法で記憶を覗かれる事により、サイが苦しむ結果になるのではないかと言う懸念だ。

医師の説明では“記憶が戻る前に虐待による自傷や現実逃避によって記憶を失った”と言うような事が仄めかされていたが、シャークティはその説明では納得出来ない事もあった。

最初にぱつと見ただけであったが・・・サイの身体に刻まれた傷はどう考えても“自分でつけた傷”にしては大きかったり深過ぎるのだ。

更にサイの身体、あれは細いのではなく極限まで体を鍛えた結果、無駄な脂肪や筋肉が全て無くなった・・・言い方を変えるならアスリートやその道を極めた者達特有の身体の造りをしていた。

そう言った事柄から想定するに、サイは“そこまで自分を追い込まなければならぬ理由があった”のではないかとシャークティは考えたのである。

彼女達の生きるもう一つの世界

つまり裏の世界というのサイ程の年代で戦っている事は多くも無いが完全に無い訳でもない。

それを考えればサイが例えば裏の世界で幼い頃から戦場のような場所生きてきて、何らかの切欠で死に掛ける程の傷を負って記憶を失い、この麻帆良に紛れ込んでしまったのではないかと考えても何の不思議も無いのだ。

・・・そんなもしも“戦場”のような場所で戦い続けて来ていたとしたら、今の記憶が無い方が安らげるのではないかという考えもシヤークテイの脳裏には浮かんでいた。

「・・・ター、シスター？」

どうしたんですか、いきなり黙り込んでしまったんですか？」

「・・・えっ!?!」

そんな思考に耽っていた所に声を掛けられて驚くシヤークテイ。

見ればいきなり黙り込んでしまった事に心配になったのだろう・・・心配そうな面持ちで美空とココネが見ている。

そんな二人に『コホンッ』と一度咳払いをしてからシヤークテイは語り出す。

「とにかくサイさんは疲れているのでしよう。」

今日の所はゆっくりと休んで頂きましょう・・・良いですね?」

その言葉に美空とココネは頷く。

そして今日の所はこれで解散となった・・・

「よっしや、んじゃ行きますかね」

「・・・お待ちなさい、美空。」

何をどさくさに紛れて朝の掃除を逃げようとしているのですか？

そもそも貴女・・・サイさんにはかり掃除を押し付けて自分は簡単

な所ばかりやっていましたよね？

これからはちゃんとサイさんより先に起きて率先して礼拝堂の掃除をなさい、良いですね？」

「・・・えっ？」

い、いや〜シスター、流石にそれは・・・「良・い・で・す・ね？」

・・・はっ、はひい！！ 春日美空、誠心誠意やらせて頂きます！！！！」

そう言うので急いで掃除を始める美空にその後をのんびり付いていくココネ。

二人の姿を少し見つめた後、シャークティは静かに跪くと手を合わせ小さな声で呟く。

「・・・主よ、どうか迷える子羊に救いを。」

あの方がどのような方かは存知ません・・・ですが、もうこれ以上苦しまずに済むようにお守り下さい」

しかし神と言うのは意外とロクデナシだ。

もう既にサイは再び戦いの世界に足を踏み入れ始めてしまっているのだから。

＼side エヴァンジェリン＼

一方、サイが爆睡してる同じ頃

麻帆良中学校のエヴァンジェリンが在籍しているクラスの中では、茶々丸と彼女の生みの親とも言えるクラスメイトである人物、この学園ではマッドサイエンティストとしても有名な葉加瀬聡美と話をしていた。

「茶々丸、どう？」

昨日やけにボロボロになって帰ってきたけど、体の調子は大丈夫？」

「ハカセ、昨日は夜分遅くに申し訳ありませんでした・・・体の方の調子は大丈夫です」

「それは良かった、大分関節やら何やらにガタが来ていたからね。まあ何があつたのかはあえて聞かないけど、あんまり無茶ばかりしたらダメよ？」

葉加瀬の言葉に頷く茶々丸。

丁度そこに、彼女の主である吸血姫の少女がやって来た・・・この昼休み前のような時間にクラスに来るなど珍しい事なのだが。

エヴァンジェリン普段彼女は外因的理由により学校に必ず来なければならないが、屋上などでサボっている場合が多い。

しかしクラスに来たと言う事は、何らかの理由があるのだろう。

「ハカセ、茶々丸と話がある・・・向こうに行っている」

「はいはい、わかりました」

そう言うと葉加瀬はエヴァンジェリンの言葉に従い、そそくさとその場から離れる。

他の者達はおしゃべりや自分の趣味などをしている為か、二人の邪魔にはならない。

少しの間の沈黙の後、茶々丸が切り出した。

「マスター、学園長のお話は・・・？」

「うむ・・・桜通りの事を感じ付かれて釘を刺された。次の満月までは派手に動く事は出来ん・・・まあ、従者も居ない現実を知らん小僧一匹程度なら問題ないがな。それよりも問題は昨日現れたあの“サイ”とか言う小僧だ、何か解ったか？」

そんな問いかけに茶々丸は首を横に振る。

「いえ、改めて情報を集め検索しましたがやはり彼に対しては何一つ解りませんでした。

調べられた事と言えば、現在彼は麻帆良の教会にて居候と言つ身の上でいるという事だけです。

マスター、学園長への報告はいかが致しましょうか？」

茶々丸の言葉に一度顎に手を添えて考えるような素振りを見せるエヴァンジェリン。

そして少しの沈黙の後、小さく言葉を返した。

「いや、必要ない。

それに伝えてしまつてはつまらんだろう？」

奴は私が八つ裂きにする・・・必ずな」

その口調には何処と無く怒りを含んでいるように見える。

サイへの怒りだけではなく、自分自身への怒りのようなものもだ。

それは当然だろう・・・一瞬でもサイの目を見た時、その目がかつて己の前から姿を消した赤髪の魔法使いに似ているなどと思つてしまったのだから。

「（何故だ・・・何故、奴の目があの馬鹿と似ているなどと考えた
！！

それに・・・何故だ・・・何故あの馬鹿を思い出すんだ!？」

彼女自身の自問自答に答えられる者等誰も居ない。

その時、クラスに元気な誰かの声が聞えてきた

「ねえねえ聞いた!？」

今日から新しい先生が来るんだって~~~~~!!」

その言葉を聞いたエヴァンジェリンは晒う。

そう・・・彼女の目的とも言える人物が到着したという事なのだから・・・。

side out

その日の夕方。

またも人通りが少なくなつたその頃にサイは目覚めると、窓から外に抜け出した。

今日は一体どんな新しいものが見れるのかと言つ期待に胸を膨らませて。

記憶喪失になつた事は別に苦ではない。

寧ろ、見るもの見るものが新鮮に見える現状はサイにとって楽しさの連続であつた。

「さうて、今日は何処に行こうかな？」

シャークティが帰ってくるまでの間だけだから、遠くには行けなしな。

よし、じゃあ今度は昨日と反対の方に行ってみるか」

これが本当に記憶を失った人物の態度だろうか？
本当に能天気な人物で・・・もとい、深く考えない少年であった。

夕方の桜並木の河川敷・・・。

どっかの恋愛ゲームのシュチュエーションに出てきそうな道をサイは楽しそうに歩いている。

やはり時より大人びた眼差しを見せる少年も、こう言った姿を見ると歳相応の人物だという事が良く解る。

まあ単に、シャークティとの買出し以外は外に出られない為に珍しいと言つのもあるのだろうが。

「あゝ、やっぱ外は良いなあゝ。

シャークティに心配かけないように昼間は外に出れないけど、教会の中ばつかじゃ飽きちまうぜ」

そんな独り言を呟きながら歩くサイ。

ふと、その目に前に出会った人物が見えた。

「あれ、あれって確か茶々丸とか言ってたっけ？

あの幼女の従者とか言ってたロボ子ちゃんだよな・・・こんな所で何してんだろ？」

・・・名前を覚えている癖に身も蓋も無い渾名をつけるサイ。

どうやらコイツは意外と性悪坊主のようだ　ロボ子ちゃん　そんな茶々丸を何気なく見ていた。

すると茶々丸は木に引つかかっていた女の子の風船を飛んで取ってあげたり、歩道橋を登っているお婆さんを助けてあげたり、ドブ川の真ん中に流されている子猫を助けたりと実に良い奴であった。

・・・それを見ていたサイは目に涙を浮かべて小さく一言。

「良い娘や・・・ロボ子ちゃん、良い娘や・・・」

更に野良猫達にご飯を食べさせていたシーンを見て、先程以上に感動して居た。

だが・・・その時サイはおかしな事に気付く。

まだ夕方だというのに、人が一人も居ないのだ・・・幾らなんでもこれはおかしい。

「・・・何だ、一体何が？」

そう思つて辺りを見回していたその時。

「くくくくウ・・・ウアアアアア・・・」「」「」「」

そこにいきなり現れたのは・・・呻き声のようなものを挙げる何体もの泥のような姿の怪物。

茶々丸もその怪物がいきなり現れた事に驚いた。

「そんな・・・レーダーには何の反応も無かつた筈なのに・・・」

すると泥の怪物は茶々丸と子猫達を囲む。

どうやら、獲物を定めたらしい。

「クツ・・・」。

(今此処で私が戦つても勝つ確率85%以上)

しかし・・・この子達を護りながら戦えば・・・)「

そんな計算など興味なくゆっくりと徐々に茶々丸達との距離を狭める泥の怪物たち。

だが、そこに直ぐにあの脳天気馬鹿が来た！！

「どりゃああああああ！！！！」

泥の怪物に飛び蹴りを叩き込むサイ。

しかし、泥の怪物は碎けた部分を他の部分で補って体を修復すると、サイの方向を向いた。

「・・・貴方は」

「よう、元気がロボ子ちゃん。

多勢に無勢つてのは気に入らなかつたからな、ちと協力させてもらうぜ。

別に文句はないよな？ ほれ、とっととそのにゃんこ達を安全な所に連れてけよ」

その言葉に茶々丸は戸惑う。

この人物は、己の仕える主とつい昨日戦ったばかりではないか。

それが何故、敵である自分を助けてくれるのか・・・その意図が解らないのだ。

「あの・・・貴方は・・・」

何かを言おうとする茶々丸　だが、そんな事はお構い無しにサ

イは背を向けたままもう一度言う。

「良いからさっさと行けって！！」

それに“こいつ等は並の攻撃が通用しない”から、俺に任せろって！！

ハアアアアア・・・出でよ、七魂剣・スサノオ!!」

サイの手に握られる一振りの剣。

それは昨晚出せるようになったサイの神具の一つ。アーティファクト

この剣が己の記憶に関係しているか、何故出せるようになったのかは理解出来ないが、その二つの神具の名と使い方は脳裏に刻み込まれていた。

「さて・・・『ドロール』には泥を失くすのが一番だな。

『はくめんきゅうつひはでりじゅうつ白面九尾派導術 参尾・焰刃』!!」

唱え終わるとサイの持つ七魂剣の刃から炎が噴出す。

この術は所謂、初歩中の初歩といっても過言ではない術だ・・・元々サイには導術の才能は無い。

だが、初歩の術のみを使用して彼は何度も生き残って来たのだ。まあ、記憶戻らぬ今の状況にあつて、それを知る者が居る筈も無いのだが。

「（これは・・・魔法!? ですが魔力は一切感じない・・・）」

一方、剣から噴出した炎を見て茶々丸も驚いた。

何しろこの力を調べてみても、魔力は一切観測されなかったのだから

その炎を纏った剣で、サイは泥の怪物達を次々と倒していく。

胴を薙ぎ、その返し刃で上方向に向かって払う。

泥の怪物達は刃に灯った炎によって体の水分を蒸発させられ、砂と
なって崩れ落ちる。

そして少しの時間が経った後・・・もう既に泥の怪物は消滅していた。

「よし、終わりい!!」

剣についた炎を消すと七魂剣も共に消える。

まさにあつという間の出来事であった・・・荒削りな剣術だったが、それに茶々丸は救われたのだ。

「さうで、これで大丈夫だな。

あつ、ヤベえ・・・早くしないとシャークティが帰ってきちゃう!!
そんなじゃな口ボ子ちゃん、気をつけて帰れよ」

そう言うのと背を向けて走り出そうとするサイの背に、茶々丸は声を掛ける。

「一つ聞かせて頂きたい事があります 何故貴方は、私を助けたのですか？」

昨日の事を垣間見れば、貴方が私を助ける事に意味など無い・・・寧ろ、マスターと戦うのであれば真つ先に私を倒すべきでしょう？
それなのに、何故貴方はあの正体不明の存在から私を・・・」

これは茶々丸でなくても当然の質問だ。

普通は昨日今日敵対した（であろう）相手を戦力の低下を狙って倒すならば理解出来るが、助けるなどとは聞いた事も無い。

特に茶々丸は女性型人造人間ガインイドであり、コンピューターのような無駄などをあまり持たない思考を持っている。

そんな彼女からすればサイの行動の意味が解らない。

だが・・・サイは彼らしい言葉を返す。

「誰かを助けるのに一々理由が必要か？」

敵だとか味方だとかそんなの関係ないね・・・俺が助けたいって思ったから助けただけさ。

別にそれで良いじゃん、誰も傷付かなかったんだから、なんじゃな、あの幼女に宜しく」

そう言うとサイは颯爽と走り去っていく。

彼に打算や思惑など無い・・・唯“助けたいと思ったから助けた”と言う理由だけなのだ。

「・・・・・・・・」

そんなサイの去っていく後姿を見つめる茶々丸。

サイの言った言葉は効率を重視する彼女にとって、理解し難い事だろう。

だが

「サイ・・・光明司 斉・・・」

そんな風に小さく口の中でサイの名を繰り返す茶々丸。

思考や頭脳では理解出来なくても、少なくともそれは違う茶々丸の“何か”に、サイの言葉や名は深く刻み込まれたのであった・・・。

第二話：機械仕掛けの少女（後書き）

さて、二話は如何だったでしょうか？

ちなみに何か胸のもやもやを感じているその読者様、この作品はあくまでも“ネギ君”ではなく“サイ”が主人公です。

ですのでサイに有利な展開などが多いかもしれませんがご勘弁を。

さて・・・そのうち語る事になると思いますが、私の作品のネギ君にはまだ語られていない秘密があります。

勘の良い方はもしかしなくても気付いているかもしれませんが、取り敢えずはスルーでお願いします^^

では、このような駄作で失礼ですが、次も宜しければお読み下さい

^^

第三話：寂しがり屋のリトル・ガール（前書き）

はい、第三話投稿です。

本来のサイの性格はこう言った性格では無いのですが、作品で書き易いように敢えて馬鹿っぽい子に変えてます^^

さて・・・そろそろ時間の流れ的に『見た目はがきんちよ、中身はババア』のお嬢さんとの戦いの始まりですよ^^

第三話：寂しがり屋のリトル・ガール

「ふう・・・ヤベえ、ヤベえ。」

まさかこんなに遅くなっちまうなんてな・・・あゝあ、シャーケテイ怒ってるかなあ」

気付けば空にはもう星が輝いている。

まさか想定外の乱入者が現れるなど、サイ自身も考えていなかっただろう。

そこでふと、サイは顎に手を当てて今日あった事を考える。

「ドロール・・・あの泥の化物の事だよな。」

俺はあいつ等を知ってる　その倒し方も脳裏にいきなり刻み込まれた。

もしかして俺は、記憶を失う前はああ言った化物を倒して生活していたのか・・・？」

だが・・・思い出せるのは化物の姿と対処法だけ。

それ以外は今までと同じくぼっかりと記憶の中から抜け落ちているのだ。

思いだせそうに思いだせない、そんな歯がゆさをサイは感じていた。

そんな風に考え事をしてるといつの間にか教会の前に着いていた。中からは煌々とした明かりが点いており、誰かがいるというのは明白である。

「はあ・・・」

肩を落としながら溜息をつくサイ。

しかし、此処に厄介になつてゐる以上、シャークテイやココネなどに心配をかけた事を詫びねばならない。もう一度小さく溜息を吐くと、サイは意を決したかのように中に入つて行つた。

「た・・・ただいま、シャークテイ、ココネ」

恐る恐る扉を開けるとそう言うサイの目に、跪いて神に祈りを捧げているシャークテイの後姿が見えた。サイの小さな声が聞えたのか聞えないのかは解らないが、シャークテイは祈るのを終わらせると徐おもむきに立ち上がるとサイの方を向く。そして・・・。

「お帰りなさい、サイさん。」

駄目じゃないですか、今日は遅くなるなら遅くなると言つてくれなきゃ。

ココネも私も、ずっと夕食の準備を終わらせて待つてたんですからね?」

・・・シャークテイは怒つていない。

それどころか、まるでサイが“いつも夕方に少しの間出かけていた”事に気付いていたかのような口ぶりだ。

その言葉に呆気にとられていると、シャークテイが続ける。

「・・・気付いてましたよ。」

貴方が私の居ない少しの時間を外に出かけていた事は。

そして・・・それが毎日の楽しみだったという事も少し前から・・・

「

そう、シャークティはサイが少しの間だけ教会を抜け出していた事を気付いていたのだ。

気付いていながら、あえて咎める事をせずに知らないふりをしていたという事だろう。

それは何故だろうか・・・そんな事を考えていると、シャークティが頭を下げる。

そしてその口から紡がれた言葉は、サイの想像外の言葉でもあった。

「謝らなければいけないのは私の方ですよ、サイさん。

いつもこの教会の雑務や掃除や私の手伝いばかり手伝って貰っていたのに、サイさんの気持ちも考えていませんでした。

この教会ばかりに居るだけでは、本当の意味で貴方が落ち着ける訳ありませんものね。

本当に御免なさい・・・」

再び頭を下げるシャークティ。

「でも、これだけは知っておいて下さい。

私もココネも、いつも何も告げないまま出て行ってしまっから本当に心配していたんですよ。

短い時間でしたがココネにとってはお兄さんですし、私にとっては可愛い弟のように感じていたんですから。

・・・だから、外へ行くなどはもう言いませんから代わりに行く時は行くと伝えてください。

その方が、私たちも安心出来ますから・・・」

ほんの短い時間・・・人生の終わりが80年や90年と仮定するなら、サイとシャークティやココネ達が出会って過ごした時間はたかが2週間程度の事。

だが・・・その間に共に起き、共に食卓を囲み、共に仕事をして、共に眠りに着く。

それは例え時間が短かろうとも、必ず育まれていく小さな“絆”だ。短い時だったがココネもシャークテイも美空も、サイの事を家族のように思っている。

だからこそ・・・何も言わないで勝手に一人で行ってしまうサイに對して寂しくも感じていたのだ。

それを知ったサイは、先程のシャークテイのように深々と頭を下げると言う。

「・・・ゴメン、シャークテイ!!」

サイは記憶を失っている故に難しい事は言えない。

だがそれでも、此処でしっかりと謝るべきだという事だけは理解していた。

頭を下げているサイに優しくシャークテイは頭を撫でる。

そして・・・この日からサイはシャークテイの許可を貰って夕方以降の人気の少ない時間のみ自由に外に出るようになった。

それに近い内にサイを学園長に会わせて昼間も出られるようにしてくれるそうだ・・・。

この日、記憶を失った少年は“家族”という絆を得た。

この先がどうなるか、記憶が戻ればどう変わるのかは解らないが、天涯孤独といっても過言ではない存在だったサイにとって、これほど嬉しい事は無かつただろう・・・。

次の日の夕方

シャークテイに出かけて来ると言う許可を取ったサイは、またも昨

日歩いていた夕方の並木道を散策していた。
まあ、保護者（？）公認の散策など初めての事なのだから嬉しいといえれば嬉しいだろう。

「そう言えばシャークテイ、明後日には学園長とか言う奴に俺の事説明してくれるらしいな。

これで今度は昼間も堂々と外に出られるようになる・・・いやあ、ありがたいねえ」

そう言いながら何処に行く目的地も無くぶらぶらする。

空はまだ明るいが既に月が姿を見せており、ほぼ満月に近かった・・・。
そんな月を見上げながらサイは二日前にエヴァンジェリンに言われていた事を思い出していた。

「おお、そう言えばあの少女と戦った日って満月だったよな・・・。
もしかして“次の時”ってのも、近いかもしれねえな」

この少年、記憶は無い癖に変な所で鋭い人物だ。

事実、件の吸血姫は前回のリベンジの為に密かに準備を始めていた。

筈、だったのだが・・・実はある事情により、その計画を一時中断せざるを得ない状況にあったのだ。

その事情とは・・・。

「貴方はサイさん・・・？」

このような所で一体何を為さっているのですか？」

「・・・へっ？」

名を呼ばれて後ろを振り返るとそこに居たのは茶々丸だ。

しかも何故かいつもの服装である麻帆良中学の制服とは違い、メイド服のようなものを着ていた。

・・・彼女の趣味か、もしくは主の趣味なのだろう。

「おお、ロボ子ちゃんじゃんか、元気か？

・・・ん？ あれ、そう言えば今その掘っ立て小屋から出て来たけど・・・もしかして此処ってアンタん家？」

本当に無礼千万な小僧である。

サイの『掘っ立て小屋』と呼んだのは、アンティーク調で実にお洒落なログハウスだ。

だがこの小僧、ログハウス自体を知らないのだろう。

「はい、ですが正確に言えば此処はマスターの住んでいる場所です。サイさん、マスターに何か御用でしょうか？」

茶々丸の問いかけにサイは笑いながら返す。

「いんにゃ、全然用事なんて無いぜ。

そもそも俺が此処に来たのは偶々だよ・・・まあでも、あの幼女の面拜んで帰るのも何かの縁かもな。

ロボ子ちゃん、アンタの主の幼女居る？」

その言葉に一度何かを考えるような素振りをする茶々丸。そして何も無かったかのように無表情のまま、サイに向かって答える。

「・・・変わった方ですね、貴方は。

ですが申し訳ありません、マスターは唯今ご病気で寝込んでらっしゃいます」

「へっ？ 病気？
何、あの子なんか持病持ちだったの？ ありゃあ、がきんちよなの
に大変だねえ」

その問いかけに茶々丸は首を横に振る。

「いえ、違います。
マスターは昨日から風邪をお引きになっておりまして・・・」

『風邪・・・？』 おかしな事を言う茶々丸にサイはもう一度聞き返すが茶々丸は頷く。
まあサイもまさか、吸血鬼だの真祖だのなどと言う“人を超えてる者”が風邪を引くなどとは思っまい。

「・・・先程から、何を幼女だのがきんちよだのと・・・。
キサマ、そんなに死にたいのなら・・・今すぐ此処でくびり殺してやろうか？」

するとサイの後ろにあるログハウスから聞えてきたか細い声。
入り口のドアがゆっくりと開く音がしたと思ったら、そこには真っ赤な顔をしたエヴァンジェリンがヨロヨロしながら立っていた。
そんなエヴァンジェリンに向かって不敵に笑うサイ。

「おいおい、病気なんて言うから何かと思えば風邪かよ。
それにお前、そんな状態で外まで出て来んなよ。もっと症状が重くなったら、俺をくびり殺す前にお前がノックアウトするぜ」

「抜かすな、小僧が・・・。
まあ良い・・・キサマのような小僧など、今此処で始末して・・・」

しかし、エヴァンジェリンの言葉は最後まで続かない。そのままヨロヨロとそこに膝をつくとぶっ倒れて肩で息をしているのだ。

咄嗟にサイは走るとエヴァンジェリンの頭に手を当てる。

「うっわあゝ、こりゃ凄え熱だ。

こりゃ安静にしなきゃ拙いレベルだぞ……」

するといつの間にか茶々丸もエヴァンジェリンの近くに着ていた。そのまま倒れて居る彼女の足を持つと、サイに向かって“この状態”の説明をし始めた。

「申し訳ありません、サイさん。

マスターを二階のベッドに寝かせて頂けますか？ 何しろマスターは風邪以外にも花粉症も患っておられますので……」

「おう、良いぜ……二階に連れてきや良いんだな？」

快く快諾するサイ。

しかし本当に彼は、エヴァンジェリンに狙われている事が理解出来ているのだろうか？

いや、愚問であろう……サイにとって“敵味方”だの“命を狙われてる”だのは些細な事に過ぎない。

彼は唯、自分の心のままに動いているだけだ。

そのまま二階のベッドまでエヴァンジェリンを連れて行き寝かせると二人は一息ついた。

「しっかし、一週間前のあの時とはえらい違いだな。

なあ口ボ子ちゃん、コイツ本当にその“吸血姫”なんて奴なのか？

「何だかこの姿見てるとそうは思えねえんだけど」

「……サイも唯珍しさだけで外出をしている訳ではない。記憶を失っている事、この町の事を何も知らない事を考慮し、解らない部分を彼なりに知ろうと努力していたのだ。」

そして自分で知る事の出来ない事柄はシャークテイに教えて貰い、その過程でエヴァンジェリンの正体やその生い立ちを知った。

何処の世界でも情報を集める事は、敵を制する事も出来るのだから。

「……そう思われるのも無理もありません。」

魔力の減少した状態のマスターの体は元の肉体である10歳の少女のそれと変わりありませんから。

あの、所でサイさん……一つ、お頼みしても宜しいですか？」

茶々丸の言葉に続きを促す。

すると茶々丸は少し前の彼女なら多分、頼みもしなかっただろうに敵と認識しているサイに驚くべき頼み事をするのであった。

「ん、何よ？ 金貸してつてのと口座教えてつてのは無理だぜ。」

まあ口座なんてないし、金も一円も持つてねえけどな」

胸を張ってそう言うサイ。

完全に威張れる事では無いのだが、茶々丸は真面目に応答した。

「……いえ、違います。」

そもそもマスターは誰かにお金を借りなければならぬ程困つてもおられません。

実は先程外に出たのはツテのある大学の病院で良く効く薬を貰いに行こうとしていたのですが……それ以外にあの子達ネコにエサをやりに行かなければなりません。」

だからその間、マスターを看っていて頂けませんか？ 勿論、只では言いませんが・・・」

「おう、良いよ。

でも良いのか？ 俺は気にしねえけど、一応俺ら敵同士だろ？」

またもや即答するサイ。

本当にこの少年は敵だという事が理解出来ているのか？

だがサイにとっては、彼の口癖である“ It Doesn't Matter (関係ないね) ” が彼の性格を現しているとも言える。要はこの少年、『生きたい様に生きてやりたい様にやる』という生き方が自分に一番生に合っていると理解しているのだ。

命の恩人であろう人物から言われていても自由を愛し、それを破つて外に出たがる。

助けたいと思った人物の為なら、そいつが敵だろうが味方だろうが助ける為に喜んでルールを無視する。

誰よりも自由に生き、そして誰よりも自由に死ぬ・・・その過程でどんな事が起ころうとも後悔はしない。

そんな“ 風と言う存在の体現者 ” とも言える性格が“ 幼き頃の彼の性格 ” だったのである。

記憶を失った今、そんな己の昔の性格を自然と模倣しているのかもしれない。

「ハイ・・・サイさんにならお任せ出来ると判断しています」

そんな性格を茶々丸が理解しているのかしていないのかは解らないが、頭を下げて任せていく所を見れば、何か感じ入る事があったのであろう。

此処の所、様子がおかしいと言われていた茶々丸の算譜（コロ）に去来する

ものは何なのかはまだ解らないのだが。

茶々丸がサイに主を託して出かけてから30分程の時間が流れる。

「・・・さて、看てるなんて言ったのは良いが、どうしよっかね」

本来この少年は自由を愛する人物。

だが・・・何も考えていないとも言えなくも無い。

茶々丸からエヴァンジェリンの事を任されたのは良いが、何をしても良いのか解らず部屋の中をキョロキョロと見回していた。

「うっう・・・ケホケホッ!!」

うっう・・・の、ノドが・・・」

苦しそうに咳き込むエヴァンジェリン。

熱の所為でのどが渴き、苦しいのだろう

するとサイは・・・。

「やれやれ、しょうがねえな・・・ホレ」

何とサイは七魂剣を召還すると腕の部分を軽く切って血を出し、それをエヴァンジェリンに飲ませたのだ。

吸血鬼と言つのが血を飲むと言つ事をシャークテイから教えられていたサイは、それが一番効果があると思ったのだろう。

その考えは間違っておらず、少し血を飲み終わった後、エヴァンジェリンの体調は落ち着いた。

そんな静かに寝ている吸血姫の寝顔を見ながらサイは小さく呟く。

「静かに寝てりゃあ普通のがきんちよだな。

しっかし・・・吸血鬼って奴も風邪引く事もあるんだな、初めて知

「たぜ」

そんな事をしみじみ言いながら一階の方に目を向ける。

そこには大量のファンシーな人形達が所狭しと置かれている光景が映った。

その時、不意にエヴァンジェリンが魔まされるように寝言を呟つぶき始める。

「……や……める……」

サ……サウザンドマスター……まで……や、やめる……」

「さうざんどますたー？」

ああ、そう言えばシャークテイがどっかで誰かに言ってたっけその名前。

何だか“世界を救った英雄”だとか何だとか……」

英雄ヒロイ……その言葉を己自身で呟いた時、不意にサイの表情が変わる。

今までのようなどこか不敵で、馬鹿が付いても間違いないような明るい表情とは違う。

その目つきも、表情も、どこか歳不相応なまで見えた。

「……英雄、か。」

碌な響きではないな……そうやって勝手に奉られ、知らない所で多くの者が傷つく。

身勝手な連中の己の保身の為に、どれだけ多くの血が流れると思っている……」

口調も今までとは違う。

重苦しく、辛そうで……どこか償えない罪を背負って、許される

相手も居ないのに断罪を望み懺悔をする咎人のように見えた。

「……フツ、何を下らん事を。」

我こそが誰よりも身勝手ではないか。我の所為で……どれだけの者達が命を落とした事か。

我は所詮、世界を救えても 己の大事なものを何一つ護れなかった……」

これが本当に先程まで笑っていたサイだろうか？

それに『何一つ護れなかった』とは一体どういう事だろうか？

その疑問に答えられる者は此処には存在しない。

「う……うう……。」

い……いくな……いかな、いで……ナ……ギ……」

まだ魔されているエヴァンジェリン。

その目には悲しい夢を見ているのか涙を浮かべている。

そんな吸血鬼の少女の額にサイは手を置くと……。

「……今は眠れ」

静かにそう呟いた

すると、少女の熱の所為で真っ赤になっていた顔は赤みが引く。

更に魔される程に高かった熱も見る見るうちに下がり、エヴァンジェリンは穏やかな寝息を立て始める。

「……サイさん？」

丁度その時、後ろから茶々丸の声が掛かる。

だが茶々丸はサイの横顔や眼差しを見た時、別人ではないかと思っ

てしまった。

それ程までに自らの主の額に手を当てている少年の雰囲気は、今までと全く違ったのだ

「……貴公、この娘の従者か？」

「えっ……何を仰っているのですか？」

茶々丸の見たサイは、まるで今始めて会ったかのような疑問を投げかけてくる。

それに対して返答しようとする茶々丸……だが、それより先にサイは言葉を続けた。

「なれば安心せよ、体調は安定した。

それにこの娘を取り巻くおかしな呪法の内の一つは、私の血を飲んだ事により無効化された。

しかし残りの一つは完全に解く事はせぬ……許せ」

それは完全に別人だ。

しかも今、サイは何と言った……？

取り巻く呪法……それがもし茶々丸の想像している事に当てはまるならば、自らの主に科せられた呪の一つは解除されたという事になる。

「もう一つの呪法は、あの夜の再戦にて我を満足させれたら解こう。時と場所はそちらに任せる、それと少しは体を労われと貴公の主に伝え願いたい……」

それだけ言い終わると、まるで今まで意識を失っていたかのように瞬きするサイ。

「・・・あれ、俺今なんか言つてたような気がする。
つて・・・おお、ロボ子ちゃん　いつの間に帰って来てたんだ？」

そこに居たのはいつものサイだ。

つい先程とは全くの別人である・・・もしや彼は二重人格なのだろうか？

いや違う、あれこそが・・・先程のあの人物こそが“本来のサイ”なのである。

しかし、その事は本人は全く覚えて居ないようだ。

「ん、あれ・・・？」

なんだ、このがきんちよもいつの間にか熱下がってるじゃねえの。

じゃあもう俺は必要ねえな、ロボ子ちゃんも帰って来たんだしよ・・・俺が此処に居たら折角下がった熱もぶり返しちまうから帰るわ」

そう言うとそそくさと帰ろうとするサイ。

だが茶々丸がふと彼の後姿を見ると・・・今までと違っていている部分がある。

それは、今まで手首に巻いていなかった包帯のようなものが巻かれているという事だ。

しかも少々だが、紅い染みのようなものも付着している。

そこで茶々丸は先程のサイではないサイの言葉を思い出す。

『我の血を飲んだ』

確かにあの時、もう一人のサイはそう言っていた。

そこから茶々丸が計算するにサイが血を流している理由など一つしか考え付かなかった。

「待つてください、サイさん」

「んあ？ 何だよロボ子ちゃん。」

悪いけどそろそろシャーケティやココネと夕飯食う時間なんでね。

用事があるなら手短に頼むわ」

呼び止められたサイは茶々丸の方を向く。

何気に包帯を巻いた腕を隠すように立ちながらだ。

「・・・何故、貴方はそこまでしてくれるのですか？」

「ん？ ああ、何だ気付いてたのかよ。」

何、もしかして余計なお世話だったか？」

いつもの脳天気で馬鹿っぽいサイとは違う。

短い茶々丸の一言で何を言いたいのか直ぐに理解出来たのだ・・・

いつものは只のポーズと言う事だろう。

そんなサイに茶々丸は言葉を続ける。

「・・・あの夜の事を考えればもう解っているのでしょうか？」

マスターは魔法使いと呼ばれる者達の中でもこの麻帆良では一二を争う程の実力者。

そして・・・真祖の吸血鬼と呼ばれ、闇の福音と呼ばれたお方です。

言うなれば人の定義で言えば“悪”と呼ばれる存在なのです・・・

それなのに何故・・・？」

・・・そう、エヴァンジェリンの正体は普通の魔法使いが恐れる“悪の魔法使い”と呼ばれる者。

本来、魔法使いと言うのは世の為人の為に働くのが仕事だ。

しかし中にはそれらの道から逸脱して己の為に力を振るう者も出てくる。

それが所謂“悪の魔法使い”である。

さらに言うなら真祖とは、今現在では遠い昔に失われた秘伝によって自ら吸血鬼化した人間の事。

つまり、己の我欲の為に人を辞めた存在の事であり、立派な魔法使いを目指す者にとっては嫌悪と侮蔑、排斥の象徴なのである。

そんな人物を殺そうとするものは星の数程だろうが、助けようとするなど普通なら正気の沙汰ではないのだ。

だが・・・サイは茶々丸の言葉に心底疑問を持つような表情でこう一言だけ返した。

「・・・だから？」

「だから・・・とは？」

サイのその反応に鸚鵡返しのように聞き返す茶々丸。

それは当然だろう・・・多かれ少なかれ個人差はあれど、この麻帆良で自らの主の正体を知る者は殆どが良い感情を持っていない。

事情や裏の事を知っていて、それでも尚エヴァンジェリンを嫌わな
いのは学園長ともう一人位。

それなのに目の前の少年は全く気にしていないのだ。

「別にこのがきんちよが何だろうとそれがどうした？ 苦しんでる奴をそのまま放っておくのが良いのかよ？」

俺は別に打算も何も無い、ただ目の前で苦しんでる奴を放って置けねえだけさ・・・まあ、深く考えてねえだけかもしれないよ」

「ですが・・・もしかその選択は最も愚かな行為かも知れませんよ。

これによってマスターが復活し、かつての如く人の命を奪う行為をしたとしたら・・・その責任は貴方に・・・」

しかしその言葉も最後まで語られる事は無い。

サイは茶々丸の言葉にかぶせるようにして言葉を返した。

「はっ・・・関係ないね。」

日和見して誰も助けられねえのに彼は^{あれこれ}御託抜かすのが正しいってんなら、俺は馬鹿のまんまで間違ってるって後る指差されたって構わねえぜ。

それにな、男って奴は自分の選んだ選択に後悔しねえよ・・・もしそれでこのがきんちよが暴れるってんなら、何度でも何度でも止めるだけだ。

生きたい様に生き、やりたい様にやる・・・それが他人に迷惑かけねえならそれで良いじゃねえかよ」

そう・・・これがサイという少年なのだ。

他人の命令や他人の見方に従うよりも、己の意思で己自身で答えを見つけ自由で居る事を好む“自由な風”。

彼には善悪なんてものはない、自分が正しいと思った事をしてその結果自分に返って来るリスクも背負い込むというのが彼なりの選んだ生き方。

それが自由に生きると選んだ少年の答えなのである。

「サイさん・・・貴方は・・・」

まだ何か言おうとした茶々丸。

だが、サイはシャークティ&ココネ&美空からプレゼントで買った時計を出して時間を確認する。

「おっと、もう時間だ。」

んじやな、ロボ子ちゃん　　がきんちょにも安静にしるって伝えといてくれ

それと・・・“喧嘩”も楽しみにしてるってな」

そう言い終わると走り出すサイ。

あっという間に入り口まで走り去ると、その背に茶々丸がもう一度だけ語りかけてきた。

「サイさん」

「ん？　今度は何だ？」

すると茶々丸は小さく呟いた。

「・・・私の名は『ロボ子ちゃん』ではありません。
絡繰からくり茶々丸ちやまるとま・・・これからはちゃんと“茶々丸”と呼んで下さい」

一瞬、アホの子のような表情をするサイ。

だが、茶々丸のほうを向いて笑うと言葉を返してログハウスから出て行った・・・。

「はいよ、じゃあまたな“茶々丸”」

（side エヴァンジェリン）

熱も引き、何故だか体が軽くなったエヴァンジェリンはサイが帰るまでずっと寝たふりをしていた。

途中から目覚めていたと言うのがばつが悪かった訳ではない・・・

ただ、真意を知りたかった。

己が殺気を送ってもものりくらりとかわし続ける少年の真意が……。

そして良く解った。

何故、サイを見た時に己の慕い、焦がれ、求め、愛し、そして想いを告げられなかったサウザンドマスターと似ていると感じたのかを。サイの生き方は、あの道理を無視して己の信念を貫き通す男とそっくりなのだ。

飄々としておちやらけていて、根性が悪いという性格だったサウザンドマスター。

しかし、己の誓った信念や己の選んだ道に後悔も文句も言わずにただ真つ直ぐと進み続ける。

不敵で、少々自分勝手に、万人の望む英雄像とは少々違う『悪ガキ』が大きくなっただけの人物。

だがそんな真つ直ぐで自由な生き方が多くの者やエヴァンジェリンを惹き付けたのだろう。

「マスター？」

茶々丸もエヴァンジェリンが起きていた事には途中から気付いていた。

そして、何故布団から顔も出さずに居る事も薄々とだが……。

「茶々丸……悪いが一人にしておいてくれ」

その主の言葉に静かに頭を下げて外へと出て行く茶々丸。

布団で顔を隠していたエヴァンジェリンの声は……震えていた。

これだけでも『一人にしてくれ』と言う言葉の意味は察するだろう

「うっ……ぐすっ……」。

何故だ……どうして……どうして今になって今更……」。

何故……何故、死んでしまったんだ……ナギ……」

涙は枯れた筈だった……想いを伝える前にサウザンドマスターが死んだと聞いた10年前に。

しかし、耐えようとしても耐えようとしても溢れ出す涙に、エヴァンジェリンは声を抑えて泣き続けた。

かつての悲しみを思い出してしまったのだ、サウザンドマスターに似たあの少年によって

） s i d o o u t ）

第三話：寂しがり屋のリトル・ガール（後書き）

三話如何だったでしょうか？

この物語ではサイが主人公となるのでネギ君はあまり出てきませんが、原作のようなストーリーは後々描こうと思っていますのでお楽しみに^^

さて・・・実は勘の良い方は気付いているかもしれませんが、サイの性格は本来こういう性格ではありません。

実際の性格は『天真爛漫で上昇志向が強い、真っ直ぐな熱血漢』と言った感じですが、私の作品では他の人物を基にしたオリジナルな性格となっています。

（注：実はナギじゃありません）

実は元にしてるのはセガの有名キャラクター『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』です。

彼の性格は束縛を嫌い、自由を愛し、いかなる困難を前にしても変わらない。

また、正義や悪ではなく『自分が助けたいと思った者を助ける為ならルールも無視する』と言う生き方がこの作品には合うと思いますので^^

本来の性格の方が良いと思った方はごめんなさい。

さあ、そろそろ喧嘩の始まりです。

既に呪いの内の一つを解呪されたエヴァと、いまだに全てが明らかになっっていないサイ。

二人のバトルは一体どのような結末を生むのか？

それは次をお楽しみに^^

第四話：真夜中の決闘・前編（前書き）

遂に始まるサイvsエヴァ。

この戦いの行く先は何処へと繋がるのか？

まずは前編からお楽しみ下さい^^

第四話：真夜中の決闘・前編

「さうて、そろそろか」

そう呟くのは何故か夜の帳も訪れた時間、いつもなら既に教会の自分の部屋で寝ている筈のサイだ。
しきりに肩を回したり、首を回しながら・・・“その時”を待っていた。

かの少女から誘いがあったのが今日の夕方頃。
教会に来た美空が持つて来た一通の手紙が全ての始まりである。

↳ side 回想：夕方↳

「おっつす、サイ君。」

今日はシスターは遅くなるらしいから、先に寝てて良いってさ」

「え、シャークティ遅くなんの？」

おかしいな、そんな事朝一つも言わなかったけどよ・・・」

教会の入り口の掃除をしていたサイに美空はそう伝えた。

・・・話によれば、今日はこの学園都市で年に二回あるメンテナンスの日であり、夜8時から深夜12時まで一斉に停電となるらしい。その際にシャークティや他の先生達はいつも以上に見回りを強化するらしく、帰って来れないのだそうだ。

「へえ・・・シャークティも忙しいねえ」

どうやらあまり興味が無いのか、サイはそんな風に返す。

まあ、何しろ停電の所為で楽しみに見ているお笑い番組が見れなくなってしまうのだから、別に興味も持たないだろう。

さらに、今日は一切の明かりが無くなる為に危険な為かシャークテイには『外には出ては駄目ですよ』と言われている。

態々暗い中を散歩しても何も見れないと感じていたサイにとっては、寝る以外に出来る事が何もなかった。

「あ、そうそう・・・はい、サイ君」

そう言うと美空はカバンの中から一枚の便箋を出してサイに渡した。それを受け取りながらサイは美空に尋ねる。

「・・・何コレ？」

「ああ、それ今日の帰り際にウチのクラスのエヴァンジェリンさんって娘に渡されたんだ。

何だか大事な事が書いてあるらしいから、一人で読んで欲しいって・・・なに、サイ君いつの間にかエヴァンジェリンさんと仲良くなったの？」

サイは差出人の名前を聞いて手紙を取り出す。

中身を改め、ほんの少しだけ小さく笑うと・・・美空に言葉を返した。

「ふん、あんがと。

ああそうだ美空、今日悪いけどココネをお前ん所の寮に泊まらせてやってくれ。

明かりが消えればココネも不安だろうし、俺は直ぐに寝ちまうだろうからさ・・・頼んだぜ」

「ん？ うん良いよ。
そんじゃ〜私はココネ迎えに行つてから蠟燭とかでも買いに行く事にするね。」

そんじゃサイ君、また明日〜」

そう言うと手を振りながら去つて行く美空。

サイは彼女の後姿が見えなくなるまで手を振っていて、居なくなつた所で再び手紙に目を戻す。
そこにはこう書かれていた

『光明司サイ、本日の夜にこのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが貴様に戦いを申し込む。』

時間は午後8時10分、場所は麻帆良学園の大浴場まで来い・・・
逃げるなよ』

それと共にもう一枚入っていたのは教会から麻帆良学園の大浴場までの簡易の地図。

どうやらあまり麻帆良学園の方を出歩けないのを理解していたのだろう、意外にマメな人物である。

「フツ・・・上等だよ。」

丁度今日は何処にも出られなくて退屈してた所だ・・・楽しくやるうぜ、喧嘩をな」

嬉しそうにそう呟くサイ・・・。

この後、しっかりと食事を食べて準備運動をして時間を潰して“その時”が来るのを待っていた。

side out

「さて、と・・・そろそろ行くか」

辺りの光が停電によって消え、麻帆良を漆黒が包んだ丁度その時。座禅をして精神統一をしていたサイはゆっくりと目を開け、静かに立ち上がった。

地図の内容はもう既に頭の中に叩き込んである、暗闇で地図が見えなくとも問題は無い。

「麻帆良学園の大浴場に8時10分だったよな。

此処からなら5分もあれば行けるな・・・よし、全速力で飛ばすぜ！！！」

そう言うと大地を蹴って走り出すサイ。

表情は嬉しそうに、まるで今からピクニックにでも行くかのような顔をしていた。

そして丁度同じ頃。

光の消えた学園都市の遙か上の突端に、満月の光に照らされた人影がいる。

まるで光の消えたこの暗闇の町のような漆黒のマントを靡かせ、静かに眼下の町並みを見つめていた。

月の光に照らされて時より怪しく光るものは、この人物の牙だろう。雲に隠れていた月がその全てを現し、月明かりに照らされたその人物は　　長き金髪を靡かせ、不敵に笑っていたのだ。

「ククク・・・アゝハッハッハッハッハ！！！！！！」

戻った、遂に戻ったぞ・・・」

そこに居る女性は何を隠そう、満月の夜に魔力を全て取り戻した真祖の吸血姫であるエヴァンジェリンだ。

今迄の姿の時とは違い、その体からは溢れんばかりの魔力が満たされている。

実はこの学園都市にはエヴァンジェリンに掛けられた呪いである『登校の呪い』と言うものと、彼女自身の魔力を抑え込んでいる『結界』が張られている。

特に『結界』の方は学園全体に張り巡らされており、それによって大量の電力を学園都市自体が消費していた。

エヴァンジェリンと茶々丸はこの事に気付き、全体停電の際に封印結界への電力供給が停止した時に予備システムをハッキングして意のままに操ろうとした。

そしてその結果、8時から12時の間と言う極めて短い時間のみ“ダーク・エヴァンジェリン闇の福音全盛期”の力を振るう事が出来るようになったと言う事だ・・・。

「ククク・・・さて、始めようか光明司サイ。

貴様を八つ裂きにし、その血を我が復活の贄としてくれる・・・ククク、アハハハハハハ！！！」

そんな笑いと共にエヴァンジェリンもまた姿を消した。

・・・そう、みかわり幻想を完全に滅して心揺さぶられる事をこれ以上無くす為に。

一方、二人の壮大な喧嘩の始まる麻帆良の周囲には何人も的人物が居た。

実はこの日の昼間、世界樹の前でこの学園の最高責任者である学園長を中心に、学園の魔法先生と生徒が集結してある話し合いをしたのだ。

その内容とは・・・学園の結界が弱まる停電中の対応についてである。

「学園長・・・今日集まった理由はもしや・・・」

「ウム、なにやらエヴァンジェリンがこの期に何かを企んでおる様でう。

じゃがおかしい・・・エヴァンジェリンの狙いはネギ君であった筈なのに、奴はコンタクトを取ろうとせんのじゃよ」

頭が七福神のように伸びた姿からどう見ても人間に見えないこの老人が麻帆良の最高責任者であり、同時に関東の魔法教会の理事長も勤める近衛このえこのえもん近右衛門。

そして最初に会話の口火を切ったのがこの学園に勤め、美空やエヴァンジェリンに茶々丸の居るクラスの元副担任であるタカミチ・T・高畑たかはただ。

実はこの二人、エヴァンジェリンとは付き合いが長く、彼女が実は面倒見の良い人物だということを知っている数少ない二人。

しかし・・・今回の事については正直、二人の思惑などを越えていた。

「・・・エヴァの目的は当然ネギ君の筈ですよね。

なのに彼女はネギ君を狙おうとしていない・・・一体どう言う事なんだでしょうか？」

特に今語ったタカミチは、かつてエヴァを師事していた人物だ。そんな彼がエヴァンジェリンの思惑が理解出来ないと言う事は・・・他の連中など余計に無理だろう。

「ふん・・・あの“闇の福音”の事です、どこかで我々の油断を誘ってネギ君の事を狙う筈だ!!!」

最近の桜通りの件も奴の仕業でしょう・・・だから信用出来ないんだ!!!」

この声を荒げている褐色の肌の眼鏡を掛けているのはガンドルフィーニ先生。

いかんせん悪い人物では無いのだが・・・視野が狭いと言うか何と云うか、少々一つの事に目を当てて居過ぎるきらいがある。

声を荒げて他の先生に宥められていた・・・。

「ガンドルフィーニ先生、落ち着いて下さい」

「落ち着けだつて？　これが落ち着けるものか!!!」

ネギ君はあのサウザンドマスターの息子なんですよ!?　きつとい

つかは優秀な魔法使いになる!!!

それをあの闇の福音は・・・しかも、こっちに來て右も左も解っていないと言うのに!!!」

ガンドルフィーニの言葉に頷く先生や生徒達。

どうやら周りの者達の多くも彼の意見に賛成と言う事だろう。

・・・だが、ガンドルフィーニの言葉はどこか、ネギと言う人物を『サウザンドマスターの息子』としか見ていないようにも聞えた。

「あ・・・それで学園長先生。」

私達は一体何をすれば宜しいのでしょうか？」

シャークティが口を開き、そう学園長に尋ねる。

その言葉に学園長は少し考えるような素振りを見せると

「フム・・・そうじゃの。」

今の所エヴァンジェリンの目的はまだ解らぬ・・・しかし、念には念を入れて彼女とネギ君を見守り、もし戦闘になった際は一般に被害が出ぬように監視する。

やり過ぎた際には止めるが、それ以外は極力干渉せぬようにな」

学園長の決定に不満を漏らす者も当然の事のように居る。

しかし学園長は『ネギ君はこの学園に修行に来たのだから、この困難はネギ君自身が乗り越えねばならん』と言う力強い言葉にしぶしぶ従った。

だが・・・気付く筈もない。

エヴァンジェリンが戦おうとしているのはネギ君ではなく全く違う人物である事。

そして、もう既に英雄ナギが出鱈目な力で掛けた“登校の呪い”は解除されているという事を。

・・・サイの学園長達へのお披露目は、意外な形で実現しそうである。

＼side out＼

そして場面はサイへと戻る。

約束の時間に丁度着いたサイは、真っ暗になっている事と湯気の所為で奥まで見えない大浴場に来ていた。

「お〜い、遊びに来てやったぞがきんちよ。
どうした・・・このままかくれんぼで終わりって事はねえだろ、出
て来いよ」

相も変わらず緊張感のないサイ。

大浴場には水の落ちる音とサイが水の上を歩く音しかしない。

・・・だが、いきなり証明のようなものが点いた。

「ほう、逃げずに来た事は褒めてやる。

それに私の事をまた“がきんちよ”呼ばわりした事もな・・・どう
せ貴様は死ぬんだ、精々悔いの残らんように無駄口を叩いておけ」

そこに居たのはエヴァンジェリン。

それに従者の茶々丸と、名前を知らないその他四名・・・その他四
名は全員目つきがどこか虚ろだ。

どう見ても多勢に無勢、そんな状況を見てサイが最初に放った一言
は

「えっと、つつか誰だお前？」

その瞬間ずっこけるエヴァンジェリン。

姿をいつものがきんちよVerにすると思いつきり怒鳴った。

「私だ、私~~~~~!!!」

「おお、何だがきんちよだったのかよ。

おいおい、その貧相な体じゃ憧れるのも解るがな・・・仮装パーテ
イだったらこんな風呂場じゃなくて別の所でしろや。

つつか、最近のパーティは客に食いモンも出さねえのか？」

ウィットにとんだジョークを言い放ちながら挑発するサイ。
だが、相手もサイの思惑が理解出来ているのか不敵に笑いながら返す。

「ククク・・・ご馳走ならあるさ。」

貴様を八つ裂きにした後、貴様の血と言うご馳走がな・・・」

「そりゃ御免被りたいね。」

血を喜ぶのなんざお前と蚊位だろ？ 献血が必要なら他を当たれや。
ああ、献血ならついでにジューズも出せよ？」

二人は不敵な笑みを浮かべたまま見つめあう。
そして直ぐに、どちらからかは解らないが

「ク、クククク・・・」

「フ、フフフフ・・・」

この二人は実に楽しげに

「ククク・・・アハハハハハ！！！！！！」

「フフフ・・・フハハハハハ！！！！！！」

声を上げて笑い始めたのだ

サイの意図は別として、少なくともエヴァンジェリンは本気でキレているのは明白だ。

「フ、フフフフ・・・ダーク・エヴァンジェリヌガ・ノスフェラトゥ闇の福音、不死の魔法使い、ドールマスター人形使い。

数多くある仇名を持つ、600年もの歳月を生きた最強の魔法使いであるこの私をこれ程までに虚仮にしたのは貴様が初めてだよ・・・

「へえ、何だか根暗な渾名ばっかだな。

つつか何が最強だ、此処に居るって事はお前誰かに負けたんだろうが。」

『世界で二位の魔法使い』に訂正しろ、このがきんちよ」

“ブチッ!!!”

その言葉を聞いた時、遂にエヴァンジェリンの堪忍袋の緒が切れた。

「こ、ここのこ……このクソガキがああああ!!!」

殺す、貴様は跡形も残らん程に叩き潰してやるわあああああああ!

「!!!!!!」

しかし自称・最強の魔法使いである少女から殺気を向けられている少年は……。

「おいおい、600年も生きてるんだろ？」

あんまり怒ると血圧が上がっておっ死ぬぞ、もうババアなんだから体
劳われや」

さらに暴言を続けてゴリゴリとヤスリでエヴァンジェリンの神経を
削り取るサイ。

……コイツ、実はかなり根性悪いのではないだろうか？

そんな物言いに遂にエヴァンジェリンは戦いの始まりの口火を切っ
た。

「えい、埒が明かん!!!」

茶々丸、やるぞ!!! やれ……我が下僕達よ!!!」

「・・・はい、マスター。失礼します、サイさん」

そう言い終わるや否や、周囲にいた虚ろな目つきの少女達に命令を飛ばすエヴァンジェリン。

茶々丸は小さくサイに対して頭を下げると攻撃を開始した・・・。

「チツ・・・関係ねえ奴巻き込むんなざ面倒な。

おいがきんちよ、これは俺とお前の喧嘩だろうが！！」

放たれる茶々丸の蹴りをバク転しながら避けて怒鳴るサイ。

だが、実に悪人のような笑顔を見せながらエヴァンジェリンは言葉を返した。

「ククク、卑怯か？ それは私にとつては最高の褒め言葉だ。

言っただろう？ 私は悪い魔法使いだってな・・・アゝハツハツハツハツハ！！」

実はこれ、巧みなエヴァンジェリンの作戦だったのだ。

サイは口では色々言ったり、悪ぶったり、根性が悪かったり見えるが・・・関係ない者を巻き込む事はあまり好まない。

勿論自分の意思で、しっかりとリスクやら何やらを理解した上で戦いを挑んでくるなら問題は無いのだが。

さらにもう一つ。

一般のエヴァンジェリン自身のクラスメイトを使えば、あの厄介な“七魂剣”なる武器は使えないと考えたのだ。

まさに裏の世界を時には大胆に、時には狡猾に生きてきただけの事はある。

だが・・・エヴァンジェリンは大事な事を忘れている。

それはこの少年、光明司サイが己が調べられなかった“未知数”な部分がある人物であるという事。

そして・・・相手を傷付けずに戦う方法も持っているという事を・・・。

「はあ・・・やれやれだ、なつと!!」

攻撃を仕掛けてくる少女達をいなすサイ。

しかし、明らかに一般人としてはおかしな程の技術を持っており容易にはいかない　　流石は半吸血鬼化していると言える。

更に面倒な事に

「・・・逃がしません」

「ぐえっ!!」

実力を持つ茶々丸の少女達に紛れた波状攻撃。

さらに・・・。

「喰らえ!!　サキタ・マキカ魔法の射手　セリエス・グラキアリス連弾・氷の17矢!!」

「うを、何だありゃあ!？」

氷の欠片が矢のようになってサイを襲う。

そう、エヴァンジェリンの強力な魔法が攻撃に紛れて来るのだから始末に置けない。

まさに防戦一方。

更に始末の悪い事に今戦っている場所は麻帆良学園の大浴場、つまり大量の水がある場所なのだ。

このような場所で氷の魔法を放たれば、普通の平地で放たれるよりも厄介な事になる。

・・・此処で戦う事もまた、エヴァンジェリンの作戦の一つだった。

「どうしたどうした、逃げてばかりか!？」

色々な波状攻撃を避け続けるサイ。

「クソ・・・拙いな。」

何とか此処から脱出して、戦いやすい所に出ないと・・・」

余りにも不利な状況に必死に脱出する場所を探すサイ。

だが・・・相手はそんな時間も、思考の猶予も与える程甘い人物ではない。

彼女にとって見れば、その一瞬の思考の時間があれば充分だった。見ればサイは大浴場の浴槽の中に追い込まれていたのだ・・・。

「チツ、ヤベえ!!!」

エヴァンジェリンはサイの身体能力を考えれば例え半吸血鬼化している者が四人と己の信頼する従者が居たとしてもある程度避けられるのは想定していた。

彼女の本当の目的は、まるでプール並に広いこの大浴場の浴槽の真ん中にサイを追い込む事だったのだ。

そうすれば全身は水で濡れ、脱出出来たとしてもそれを利用して氷の棺に閉じ込める事が可能だからだ。

「フン、愚か者が・・・これで決着だ!!!」

ウエニアント・タロ母アモ及テクステンダントウル・アーエーリ
リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精、大気に満ちよ。

トウソドラム・エルクラキエムノロキヤス・アルバエ クリユスタリザイオー・テルストリス
白夜の国の凍土と氷河を・・・ 『凍る大地』!!!」

大地を凍らすように巨大な氷柱が現れる。

それと共にサイの居た周辺の水がどんどん凍り付いていった……。

「ちっ……クソ!!」

(拙い、このままじゃ直ぐに冷凍マグロになっちまう。

……俺は負けるのか? こんな所で……また負けちまうのか……!!!)」

徐々に全身を氷が蝕んで行き、もう後は首から上しか残っていない。身動きが出来ない状況で、サイは一瞬諦めそうになった。だが、彼はこの世界に現れてから今に至るまでに忘れてしまったある誓いを思い出した。

どんな時でも絶対に諦めないと……もう決して負けないと……。

「(違う……俺は、俺は誓った!!」

記憶が戻らねえから誰だか解らねえけど……もう絶対に負けねえって!!」

もう絶対に……手放さねえってなあ!!!!!!)」

氷の棺に閉じ込められるサイ。

だが、その閉じ込められるほんの少し前に彼の身体から“紅い珠”が出現した事に誰も気付いていなかった。

「フン……やはりこの程度か。

私を本気で怒らせるとは愚かな小僧だ。まあ良い、これでこの

小僧の血を吸えば、私は晴れて自由の身と言う事だ。

クククク……これでやっと私はこんな下らん生活からおさらば出来るのだな」

氷に閉じ込められたサイを見ながら呟くエヴァンジェリン。
完全にその動きは止まっている・・・そもそも、氷付けにされて生きていられる者など存在しない。
そんな氷の彫刻となってしまったサイを、茶々丸は複雑そうな・・・どこか悲しげな目で見ていた。

「茶々丸、これから忙しくなるぞ。

まずはこの愚か者から血を干乾びる程吸わせてもらおう・・・まあ、もう既に息の根は止まっているのだから関係ないか。
そうしたらこのような場所などずっとおさらばだ、良いな？」

「・・・はい、マスター」

茶々丸には感情と言うものの起伏は少ない。
更に自らの主である人物の為に作り出されたのだ・・・不満があるうとも、人工回路にノイズのようなものが走るとしても、命令には従わなければならない。
茶々丸が重い足を引き、氷付けのサイの方に向かおうとしたまさにその時・・・。
信じられない光景がエヴァンジェリンと茶々丸の目に飛び込んで来た。

「な・・・何だこれは!？」

「計測中・・・。」

信じられませんが、完全に停止した筈のサイさんの生命活動が再び再開しました。

更に未知のエネルギー増大、これは前回サイさんと戦った時と同じです」

その信じられない光景とは・・・氷に包まれていたサイから、炎のようなオーラが立ち上り始めたのだ。

炎のようなオーラはサイを凍らしている氷を徐々に徐々に溶かし始めている。

「ば・・・馬鹿な、そんな馬鹿な事があるか!?

あの小僧の生命の灯火は完全に消えていたのだぞ!?! それに完全状態の私の氷がこんなに簡単に溶ける筈が・・・」

「はっ・・・関係ないね」

誰かの言葉、少なくとも男の声だと言う事は誰が聞いても解る。

声のした方向をエヴァンジェリンは恐る恐る見る、するとそこには

先程まで消えていた目に光が灯り、不敵に笑っている少年が居た。

「こんな氷じゃ俺は止まらねえ・・・。

そしてありがとよがきんちよ、一度死に掛けたお陰で俺は大事な事を思い出した。

そして・・・俺が何かなのも少しだけな!?!」

氷は殆ど溶け去った。

その異様なまでに巨大なオーラと、まるで己が身を焦がす程・・・闇夜を照らす程に明るい光がエヴァンジェリンを一層慌てさせる。

このような強い光、今まで感じた事など一度もなかった。

「(違う・・・違う!! 何故だ、何故この小僧とナギが重なる! ? 違う、違う違う違う違う!!)」

くっ・・・ええい、やれ下僕共!?!?!」

「……はい、エヴァ様」「……」

本人は否定するだろうが、その光に懐かしく、神々しくも暖かい何かを感じたエヴァンジェリン。

しかし、その感情を振り払うかのように半吸血鬼化した少女達をけしかける。

少女達は命令のままにサイを

「退いてろ、三下共が……！」

お前等のような操られてるだけの連中なんざ眼中にねえんだよ……！」

「……なっ……きゃあああああ……?!?!?!?!?!」

一言……ただの一言の音圧でサイに向かって行っていた少女達は吹き飛ばされる。

しかし体勢を立て直すと、もう一度襲いかかるうとするが……。

「退いてろ、と言った筈だ。」

三度目はねえぞ……そこでとっとと眠ってる……！」

怒声が響いた瞬間、まるで操り人形の糸が切れるように倒れて気を失う少女達。

「な、ななな……何だと……?!?!?!?!?!」

馬鹿な、私の下僕化した者達を解除して気絶させただとお……!?!?

そ、そんな馬鹿な、有り得ん……!?! 貴様……貴様は一体、何なんだ……!?!」

そこでふとエヴァンジェリンは思い出す。

何故、力が完全で無かったとは言え・・・常に魔法障壁を展開してある筈の己に、魔力を感じないサイが蹴りを入れられたのか。

そしてその答えに気付いた時 何故己の身にサウザンドマスタ一の無茶苦茶な力によって掛けられた登校の呪いを解けたのか、更に何故こんなにも簡単に下僕達の呪縛を解けたのかを理解した。いや・・・理解させられてしまったのだ。

「ま・・・まさか、まさか貴様は魔力や力を感じないのではなく・・・力が強大過ぎて私を感じられないだけか!？」

そう、『半分』はエヴァンジェリンの言う通りである。

サイは所謂、道場や学校などで教わって勉強したタイプではなく、実戦の中で腕を磨いて来たエヴァンジェリン達よりのタイプの生粋の武人。

つまりは実戦向きであり、相手の強さによってより力を発揮しだす類の人物なのである・・・しかもその落差が凄まじく激しい。

その為、己が窮地に追い込まれば追い込まれる程に実力を発揮するのだ。

そしてもう『半分』の理由は、サイの失われた記憶に係している。彼の生い立ち、彼自身の存在、生まれ持った能力が600年もの歳月を生きて来ている筈のエヴァンジェリンの探查能力をおかしくさせているのだ。

己が眼差しに映る事、そして理解した事に呆然となるエヴァンジェリン。

その間にサイは大浴場を出ると、窓ガラスをぶち破って外へと脱出した

「何っ!?! 何処へ行く心算だ!?!」

ちいつ、追うぞ茶々丸!!」

「はい、マスター。」

しかし残り時間にご注意下さい・・・停電復旧まで残り35分26秒です」

「ちいつ・・・もうそんな時間か!!」

解っている、追いかけて直ぐに奴との決着をつけてやろう!!」

慌てて追いかけるエヴァンジェリンと茶々丸。

サイはそのまままるで羽でも生えているかのように身軽に木々や建物の屋根を飛び越えながら・・・麻帆良学園都市の端にある大橋に着くと動きを止めた。

「此処は・・・はん、そう言う事か。」

此処は学園都市の端にある場所だ、本来ならば私は呪いによって外に出れん。

だが・・・その呪いも貴様が解除してしまった筈だ、つまり貴様は私の魔力を封印する結界への電力の供給が始まるまで逃げ回る心算と言う事だな。

ククク・・・意外にせこい作戦だな、私も甘く見られたものだ」

『そうだ、己が力を感じれない筈など無い』

エヴァンジェリンはそう考えていた・・・でなければ一々、このような遮蔽物も何も無いような所へ来る必要もあるまい。

しかし・・・サイの口から出たのは、意外な言葉だった。

「逃げる？ 何で逃げる必要があるんだ？」

違えよ・・・今からやる事をあそこの建物の中でやったら、気絶してる連中やらこの学園の連中やらに迷惑が懸かるから出ただけだ。

それに、此処なら周りに邪魔になるモンねえし・・・とことん喧嘩を楽しめるだろ？」

「なっ!?!」

反論しようとするエヴァンジェリン。

だがそれよりも早く、サイの言葉が響き渡る!!

「目がある奴は良く見る、耳がある奴は良くかつぽじって聞け!!
我が名はサイ、光明司 斉!! 白面九尾が一族の血族にて、ゼクス・終局
因使の力を併せ持つ者なり!!

我が記憶完全では無かれど、かつて刻みし『誓い』と『誇り』は今
再びこの胸へと還った!!

我が信念のままに、真祖の吸血姫たるエヴァンジェリン・A・K・
マクダウエルとの決闘を!!」

それは何処までも誇り高い姿。

その声は何処までも凜とした奥底まで響く声。

その姿はまるで・・・誇りを貫き通し生きた偉大なる王のようにも見える。

その姿はまさに昔語りで吟遊詩人に語られる英雄のようだ

一瞬、その姿にエヴァンジェリンは魅入られる。

「・・・はっ!?!」

くっ・・・は、はったりを抜かすな!! おのれ・・・何処まで私
を虚仮にすれば気が済む!?!

(違う・・・違う!! あれはナギではない・・・なのに何故、何
故こんなにもナギと重なるんだ・・・!?!)」

急いで魔法を放とうとするエヴァンジェリン。

しかし、それよりも先にサイが七魂剣・スサノオを出すと呟き始め

た。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前！！ 行くぜ、がきんちよ！！」

九字護身法を唱えると、サイを視認出来る密度のオーラが包み込む。その強さは先程感じたように調べる事が出来ない・・・完全に未知数だ。

そして、サイは天に向かって叫んだ！！

『魂獣解 放オオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！』

その瞬間・・・。

日輪の光と見紛う程の光が、闇に包まれた学園都市をまるで昼間のように照らした

＼side 学園側？＼

「なっ・・・何だ、あの光は！？」

まるで夜が一瞬にして昼になってしまったかのような光を見て誰かが度肝を抜かれたかのように叫ぶ。

長きに渡り、麻帆良学園の学園長にして関東魔法教会の理事長を勤めてきた学園長も、魔法世界と呼ばれる世界で“英雄”と祭り上げられるタカミチもこの光景には度肝を抜かれた。

あの光は、何十年かに一度光り輝く麻帆良の中心にある世界樹の発

光をも裕に超えているのだから。

「皆、落ち着けい!!」

あの場所は麻帆良の端にある大橋の所から放たれておる、各自は己の判断でその場所に向かうのじゃ!!」

頷く魔法先生や生徒達。

しかし、あれ程のものを見て簡単に落ち着ける筈も無い。
事実、命を出した学園長さえ、何が何だか解らないのだから

「タカミチ君、君も向かってくれるかの？」

わしも他の皆を落ち着けたら直ぐに向かうであろう・・・頼んだぞい」

「は、はい・・・学園長」

そう言うのとタカミチもその場所へと向かった・・・。

さらに・・・もう一人、その場所に向かう者が居た。

「えっ・・・な、何あれ!？」

今日は確かアスナさんの話じゃあ停電だった筈じゃあ・・・。

(大きな魔力を感じる・・・ボクの他にも魔法を使える人が居るのかな?)

・・・解らないけど、父さんを見つける為の手がかりになるかもしれない)」

そう考えた件の子供先生こと、ネギ・スプリングフィールドは最初に此処に来た時に布を巻いてあった長物・・・魔法の杖を出すとそれに乗って光の放たれる方向へと向かった。

子供先生がこの学園に来たのは魔法修行の為だが、他に目的がある。
・それは幼き日に自分を助けて去っていった英雄である父親を探
す事だ。

ネギにとっては父親を見つける事が所謂“全て”であり、父親を見
つける為に只管努力を重ね、多くの魔法を覚えて魔法学校を主席で
卒業するという天才にまでなった。

しかし・・・基本や書物の知識、風評などを重視する為か魔法使い
と言うものに幻想を抱いている。

まあ年齢を考えればそれは仕方無い事だが、調べもせずに行動し、
早とちりが多いというのはある意味では致命的だ。

そして極限までの甘さは、最悪な結果しか生まないと言う事に気付
いていない。

故に知らない・・・強大な魔力を感じるのはあの眩い光の柱ではな
く、己の行方不明になった父親の事を知っており、しかも最初は血
を狙われていた少女が放っている物だと。

・・・遂に、英雄を目指す者と記憶を失った者の邂逅は迫る。

その出会いは一体、何を生むのか？

今はその答えを知る者など、誰も居なかった

side out

第四話：真夜中の決闘・前編（後書き）

はい、第四話終了です。

サイの力の内の一つである魂獣解放のお披露目です。

今回、サイは己が純粹な人間ではない事と魂獣解放を使えるようになりました。

ですが、覚醒したからといってエヴァとの戦いは易々終わりません。まあ・・・一応、彼女も原作では最強クラスでしたしね^^

では、次回の後編をどうぞお楽しみに。

第五話：真夜中の決闘・後編（前書き）

これにて今回で付く決着。

果たして勝つはサイか、それともエヴァンジェリンか？

第五話：真夜中の決闘・後編

放たれた目が眩む程の光。

その光に思わず目を閉じてしまったエヴァンジェリンと茶々丸。

圧倒的な光量は急に目を閉じた所で収まる筈も無い・・・だが、そうする事しか出来なかった。

己が焦がれ、一度は生きようとした暖かいもの。しかしそれは、薄汚れて闇に堕ちた己には最も遠いもの。

あの光を見続けたら再び、適わぬ幻想^{ユメ}を抱いてしまう。

「くっ・・・茶々丸、状況はどうなっている!？」

その問いに茶々丸は首を横に振る事しか出来ない。

目のセンサーは光の膨大さによって一種の麻痺状態となってしまうのだ。

センサーが使えなければ、茶々丸として状況の確認など不可能だろう。

「ちいつ・・・厄介な。」

奴め、一体何をしたというのだ・・・!？」

取り敢えず光が収まるまでは何も出来ないだろう。

忌々しげに、そしてどこか辛そうにエヴァンジェリンは呟く

己の戦っている男は、慕い愛した人物のナギに似過ぎているのだ。

どんな時でも諦めず、どんな時でも不敵で。

強い敵が現れば現れる程燃え、道理など無視して貫く・・・何処までも馬鹿で何処までも真っ直ぐな漢。

容姿や口調は似ても似つかない、しかしその眼差しは余りにも似てい過ぎた。

その事實はエヴァンジェリンにとってどれ程辛い事か。想いを告げられなかった男の死んだという知らせを聞き、どれ程までに嘆き悲しんだ事か。

永遠に適う事の無くなった男との約束が、どれ程エヴァンジェリンを絶望させて苛んだ事か……。もう二度と会う事の無い男に似た眼差し的人物が現れた事が、どれ程彼女を憤らせた事か。その苦悩を解る者など何処にも居まい……。勿論、彼女の最も信頼する従者であつてもだ。

だからこそエヴァンジェリンはサイが現れた時、ナギと似ているなどと思つた事を許せなかつた。だが本当は……。去り行くナギに何も伝えられなかつた己に対して怒りを覚えていたのかもしれない。

目を瞑つたまま光が収まるのを待つエヴァンジェリン。いつしか己の目を眩ませる程の光は収まっており、彼女はゆっくりと目を開けた。

今まで硬く閉じていた所為で視界がぼやける。しかし、それが視線の先に居たサイに焦点が合うと……。そこには驚くべき光景が広がっていた。その光景とは

「な……。き、貴様、その姿は」

そこに居たのは、一人の青年。しかしその面影や珍しい銀髪を見れば誰だかは一目瞭然だ。

「悪かったな、待たせちまってよ」

その身は細くも逞しく、着物のようなジャケットからはみ出している二の腕には歴戦の猛者を思わせる傷が刻まれていた。

年恰好としては大体20代前半程だろうか？ その手には小剣のような姿ではなく、王の剣を思わせる姿で刀身に九の穴の開いた七魂剣を握っている。

いや、その魔剣を思わせる雰囲気から裏切りの騎士の剣の方が説明に合っているかも知れない。

「この姿になるのは彼かれは何時ぶりだろうな、何だか随分懐かしいような感じがするぜ」

だが、エヴァンジェリンが驚いているのはそれだけが理由ではない。その驚きはサイの頭部にある銀髪と同じ色の獣の耳と・・・臀部から出ている“九本の尾”だ。

九本の尾・・・それは魔法に関係する者だろうが一般人だろうが知らない者の方が少ない。

その力の強さ故に恐れられ、日本だけでなく世界に逸話を残す“伝説上の神獣”にして“災厄の魔獣”。

世界の破壊者にして秩序の守護者・・・享楽の美獣にして最強の妖怪。

その名は 『ハク白メン面コン金ゴウ剛キウ九ウ尾』。

「き、貴様・・・人間ではなかったのか!？」

青年の姿となったサイに対してそう言うエヴァンジェリン。
その言葉に対して彼はゆっくりと首を横に振ると答えた。

「いいや、人間さ……。」

まあ“半分だけ人間”ってのがお前等の言う所の人間じゃないって
んなら、お前の言う通りだけだよ」

そう、サイは純粋な人間ではないが純粋な魂獣スピリットでもない。

つまりは人間と魂獣の間に生まれたハーフなのだ。

しかし純粋な魂獣でないに関わらずこの強さは一体、何なのだろうか？

「何……貴様、人間ヒトと妖アヤカシの合いの子だと言うのか！？」

馬鹿な、有り得ん……貴様のその姿は完全に……。」

まだ何かを聞き出そうとするエヴァンジェリン。

だが、サイは刀を仕舞いゆっくりと徒手空拳で構えを取ると……
彼女と茶々丸の方を見て言い放った。

今までのように、いや今まで以上に獰猛な獣のような目をしながら
だ。

「さあ、お喋りは此処までだ。

とととと続きを始めようぜ ド派手な喧嘩の続きをな……！」

Side 学園側

「馬鹿な……何だ、あれは……？」

その眩きを口ずさんだのは、学園長の命により麻帆良を一瞬昼かと勘違いさせる程の光の柱の昇った場所を調べに来た、裏魔法に關係の深い一人の生徒。

麻帆良中学校の制服を着るその上から身の丈程もある長い布袋に入った何かを背負っている・・・恐らく長さから刀か何かだろう。明らかにサイの姿を見て動揺し、強く握る手の平には冷たい汗を掻いていた。

「・・・少なくとも、魔法関連の人物かな？」

まあどちらかと言えば・・・魔法を使うのではなく、私やお前よりの人物のように見えるがな」

もう一人呟くのは褐色の肌の長身の人物。

頭からすっぽりとマントのようなものを被っているが、声色的に女性のような性のような。

しかも良く見れば、マントの中に隠された手には黒く光る長物の銃・・・恐らくスナイパーライフルだろう銃が握られている。

台詞は何処と無く冷静さが感じられる・・・しかし、彼女の握っている銃らしきもののグリップは強く握り締めていた所為か汗で濡れていた。

二人の名は先の刀のような物を背負っているのが桜咲刹那さくらさきせつな、もう一人のマントの銃らしき物を持っているのが龍宮真名たつみやまなと言う。

この二人は麻帆良の魔法生徒と呼ばれる裏の方に精通している人物達の中でもそれなりに実力や実績を持っている・・・だが、彼女達二人の目に映った知らない人物サイは少なくとも自分よりも実力が上だと言うのは理解出来た。

尚、余談だが真名はどう見ても大学生にしか見えない容姿や外見をしているが、実はエヴァンジェリンや茶々丸のクラスメイト

でもある。

「・・・そんな、あれは・・・」

いつの間に来たのだろうか？

刹那や真名と同じようにエヴァンジェリン達の居る方向を見ていたシャークテイが明らかに動揺したような声色の声を上げる。

いつも彼女は冷静な態度で居る事が多い筈なのに・・・これは明らかにおかしい。

「いいえ・・・でも面影がある。」

まさかあれは、あの人は・・・サイさん・・・？」

彼女から漏れる声は動揺によって震えている事は誰が聞いても明らかだ。

シャークテイの見せる初めての姿に魔法生徒はおるか、彼女の性格を知っている魔法先生達も驚く。

・・・そんな中口火を切ったのは、普段通りの表情でサイの方を見ながら内心驚いているタカミチだった。

「サイさん・・・？」

シスターシャークテイ、あそこでエヴァと戦っている彼を知っているんですか？」

そこには全員ではないが多くの魔法関係の者達が集まっており、シャークテイに注目する。

しかしシャークテイも明確な事は何一つ解らない
解るとすればそれはほんの些細な事だ。

「彼と出合ったのはほんの少し前・・・記憶喪失らしくて身分を証

明出来るものではありません。

今、教会と一緒に住んでいます、結局記憶が戻っていないのでそれ以外は何も……。

ですが、少しの間ですが一緒に住んでいて彼が何かに危害を加えるような人物でない事は理解しています……。」

「なっ……貴女はそんな訳の解らない人を学園に招き入れたんですか!？」

刹那が声を荒げてシャークティに言い放つ。

まあそれは当然の事、彼女はこの学園に命に代えても護りたいと思う人物が居るのだから。

ひよっとしたらあの人物は、自分の誰よりも守りたいと願っている人を傷つける刺客かも知れないのだ。

シャークティのいい加減さに憤っている刹那。

そんな彼女を宥めたのは、サイの事を静かに見つめていた学園長だった。

「これこれ刹那君、お主の事情はわしが一番良く理解しておる。

じゃが、今は落ち着きなさい……確かにあの青年の事は良く解らぬ故、シスターシャークティに事情は説明してもらうが、あの青年からは魔力は一切感じぬ。

先程の光やあの身のこなしの良さは気がかりじゃが、今すぐに危惧する程の事はあるまい」

……その言葉に違和感を感じる。

サイの姿はどう見ても有名な殺生石を生み出した大妖怪の“九尾の狐”にしか見えない。

なのに学園長はその事に一切触れていないのだ。

その理由が実は、サイのもう一つの能力に関係している事を誰一人として気付く者は居ない……。

さらに別の場所では

「あれは……ボクのクラスの出席番号26番のエヴァンジェリンさん？」

まさか、エヴァンジェリンさんも魔法使いだっただの!? それに……あの人は見た事無いけど……」

丁度、多くの魔法先生や生徒達が別の場所に集まっていた為にネギ先生が此処に来ている事を知る者など誰一人もいない……。

｝side out｝

その頃、シャークテイ達に見られている事など気付かぬまま、二人のバトルは激化していた。

いや……実際は気付いていないのではなく、そっちに気を向ける事が出来ない状況だったのだ。

「チイツ、サギタ・マキカ魔法の射手 セリエス・グラキエース連弾・氷の17矢!!!」

放たれる氷の矢、それがまるでミサイルのようにサイを追従していく。

先程大浴場内では驚いたサイだったが……今度は違う。

「オラオラオラオラアアアアアア！！！！！」

まるでマシンガンのような連続パンチが向かって来た氷の17の矢を砕く。

良く見ればサイは素手ではなく、黄金色に輝く籠手の様な物を拳に装着していた。

「おいおい、カキ氷喰うにやまだ早いぜがきんちよ」

余裕綽々にそうジョークを飛ばすサイ。

その態度が気に入らないのか、青筋を立てたエヴァンジェリンは続けて次の魔法を放つ。

「おのれ、調子に乗りおつて！！」

リック・ラク ラ・ラック ライラック・・・

ウンデトリーギンタオズ反リトウズ
闇の精霊28柱！！

喰らえ、魔法の射手 サキタ・マキカ 連弾・闇の29矢！！

(やれ、茶々丸！！！！)「

先程の氷の矢より多い黒い弾丸のような矢がサイに向かって放たれる。

・・・と、そのタイミングでサイを挟むようにして茶々丸も回り込み、有線式ロケットパンチをサイに放つ。

既にアイコンタクトにより、攻撃のタイミングを茶々丸は読んでいたのだ。

「チツ、流石は歴戦の猛者って訳かよ！！」

間一髪の所で茶々丸のロケットパンチを受け流すと、流れるような歩法で魔法の矢を避ける。

丁度サイの居た所に黒き矢が突き刺さり、大橋に小さく断面が綺麗

な穴が開いた・・・こんなものが当たっていれば確実に重症、当たり所が悪ければ致命傷だ。

「ふう、危ねえ危ねえ。」

串焼きは好きだが、自分が串焼きにされちゃたまんねえぜ」

服に付いた埃を払いながら呟くサイ。

どうやらこのジョークを言いながら戦うのはサイの癖らしい。

しかしその姿を見るエヴァンジェリンには苛立ちがどんどん募っていく。

「貴様・・・何処まで私をおちよくれば気が済む!？」

気に入らん、貴様を見ていると実に気に入らん!! その態度も、その目つきも、その雰囲気も全てが気に入らん!!」

そんな憤りを募らせていくエヴァンジェリン。

サイはどこか、その態度が自分への憤りだとは思えなくなっていた。

「・・・オイがきんちよ、一つ聞かせる」

「何だ!?! 私は貴様などに語る事など何一つもないわ!!」

吐き棄てるエヴァンジェリンを無視して言葉を続けるサイ。

「お前、一体さつきから誰に向けて怒ってるんだ?」

「フン、知れた事・・・貴様のその余裕綽々の態度が気に入らん!!
そもそも貴様以外に、一体誰に対して私が憤るといふのだ!?!」

怒声・・・その言霊一つ一つに殺気を纏わせながらエヴァンジェリ

ンは言葉を返す。

しかし、サイはそれが自分にではなく・・・ぶつける事の出来ない怒りを発散しているだけの様に見えた。

「一つ言っとくぜ・・・。」

ぶつけれねえ手前自身への怒りを、他人を利用して発散すんじゃないよ。

ぶつけられる方が迷惑だ、クソガキ」

ブチッ

その言葉にエヴァンジェリンの中で何かが切れた。

瞳に浮かぶ憎悪は今迄の比ではなく、放たれる殺気も肌がピリピリする程だ。

おそらく此処に心臓の弱い者が居たら、真っ先に気絶か最悪心臓停止するだろう。

「キサマに・・・キサマに・・・貴様に一体何が解る!？」

貴様に解るか!? 闇の中で、絶望の中で、苦悩の中で、恐怖の中でしか生きる事の出来ん者の気持ちか!？」

光と言う暖かい所を望みながら、闇という世界でしか生きられん私の嘆きが貴様などに解るのか!？」

エヴァンジェリンは生まれ付き吸血鬼だった訳ではない。

前にも説明した通り“真祖”とは、失われた秘伝によって吸血鬼と化した人間の事。

しかしそれは“自ら進んで吸血鬼と化した者”と“己の意思とは関係なく吸血鬼とされた者”の二通りに分かれる・・・エヴァンジェリンの場合は後者だ。

「そんな堕ちた人生の中、漸く見つけた初めての光は・・・やつはこの学園に私を閉じ込めて、私の前から姿を消した！！
光に生きてみるだと？ 生きれる筈があるまい！？ 私にはこの学園は眩し過ぎる・・・私は闇の中でしか生きられないんだ！！
そんな時に、やつと似ている貴様が私の前に現れた・・・何故私の前に現れた！？ 何故、私を苦しめる！？
これ以上、私に下らん幻想を抱かせるなあ！！」

嗚咽を交え、そう言い放つエヴァンジェリン。

誰よりも光に焦がれながら、誰よりも闇の底で足掻き続けている悲しき少女。

だが・・・そんな少女にサイは静かに返した。

「知るか、そんな事」

「なにっ!?!」

サイの言葉に再び強烈な殺気を放つエヴァンジェリン。
しかしサイは今までとは違い表情も変えず淡々と言葉を返す。

「甘えるんじゃないやねえよ、クソガキ。

手前は彼是理由あたいれを並べてたが、結局は『光の当たる場所』ってのに出るのが怖えだけじゃねえか。

それを勝手に自分が不幸だ、自分が辛いだなんて言い訳してんじやねえよ・・・悲劇のヒロインの心算つもりか、ああ!?!」

表情は変えずに少々怒気を込めるサイ。

何故だか解らない・・・何故だか解らないが、この吸血鬼の少女を見ていると、幼かった頃の己自身と重なって見えるのだ。

「笑わせんなよ手前……」

俺は手前の言ってる奴がどんな奴かは知らねえし、興味もねえ！
だがな、少なくともこれだけははっきりしてる事がある。そ
いつは手前をそう言う風に腐らせる為に此処に置いてったんじゃね
えよ！！

手前に少しでも、今迄の苦しみから少しでも前へ進めるようにと願
いを込めたんだ！！」

「な……なななな……」

言葉にならない呟きを漏らすエヴァンジェリン。

更にサイは言葉が続ける……それはどこか、聞き方によっては己
自身に言っているようにも聞える。

「やり直せねえだ？ ふざけんな！！」

やり直そうと思えば人は誰だってやり直せんだよ、本人の意思でな
！！

さつき手前は『光に生きたかった』つつたよな、それが嘘偽りねえ
手前の本心だろうが！！

だったら下らねえ事を吐く前に素直になりやがれ！！」

「う、五月蠅い……五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い、五月蠅
い！！！！」

貴様に、貴様のような小僧に、闇に生きる者の気持ちなど永遠に解
らんわああ！！

何も知りもせずに、勝手な奇麗事を抜かすなあ！！！！」

エヴァンジェリンの身体から膨大な魔力が溢れ出す。

もう、己の魔力を封印する結果が発動するまで時間も無いのだろう。
まるでサイを……いや、幻想を打ち消すかのように彼女は魔法の

詠唱を唱えた。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック!!
ウエミアント・スピリトクラキアレス・オブスクーランテース
来たれ氷静・闇の精!!
コム・スクロライオチビット・テンペタター及ス
闇を従え吹雪け常夜の氷雪!!」

その手に集まる魔力が作り出すは闇より出でし絶望の吹雪。
まるでエヴァンジェリンの心を映し出すかの如く、冷たく悲しい悲
哀の氷風

「消える!!」

私の前から・・・消え失せろおおおお!!!!!!!!
ニライス・テンベスターズ・オブスクランズ
闇の吹雪!!!!!!!!!!!!!!!!

放たれた闇の吹雪はまるで巨大な槍のようにサイに迫る。
掛け値なしに全力で放ったエヴァンジェリンの黒氷の牙は、その顎アギト
をサイに突き立てんと周囲を凍らせながら向かって来た。

しかし サイは逃げもせず、真っ向から闇の吹雪を迎え撃つ!!

「知るかあああ!!!!」

手前は俺じゃねえ、俺だって手前じゃねえ 解る訳ねえだろ!

!!

だがなあ、何度でも言つてやらあ!!!! 甘えてんじゃねえよ、こ
のクソガキがあああああ!!!!!!

光り輝くサイの籠手。

誇り高く、偉大で、誰よりも夢や信念を持って生きる事の意味を教
えてくれた父が己に託した神具。アーティファクト

サイが違えた道を進んでしまった時、本当に大切な事を思い出させ
てくれた“誇り”。

誰よりも真つ直ぐに生きる事を誓った、サイの託された“想い”。

真なる能力ちからを覚醒させたその時、刹那を超える速度を得る。

黄金に輝くその籠手の名は りくどうけん 六道拳・アスラ。

そこから放たれるのは・・・神をも滅す、神速の拳撃！！

「阿修羅真拳あしゅらしんけん・アフラマズダああああああ！！！！！！！！」

二人の攻撃が互いに交差する。

その二つが生み出した力は今までと比ではない またしても麻帆良に目が眩む程の光、そして爆発音が響き渡った・・・。

光が止み、訪れる静寂。

全力の力をぶつけたサイは、覚醒が完全でなかった事により魂獣解スベリッツ・バ放ラストが解け、少年の姿に戻ると大橋の上に大の字で倒れ込んだ。

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」

肩で息をし、全身中にまた多くの傷を受けたサイ

だが勿論、エヴァンジェリンも無傷ではない・・・力と力、斥力と斥力のぶつかり合いにより纏っていた衣装は服の意味を成さず、身体中にサイと同じく痛々しい傷を受けている。

だが、まだ空を飛んでいると言う事は微かに力は残っていると言う事だろう。

「く・・・まだだ・・・まだ・・・私は・・・此処で・・・」

ボロボロの体に鞭を打ってサイに向かって魔法を放とうとするエヴァンジェリン。

だが、その時だった。今まで二人の戦いを黙って見ていた茶々丸が突然慌てたように叫ぶ。

「いけない・・・マスター、戻って！！！！」

予定よりも7分27秒も停電の復旧が早い！！！！！！」

茶々丸の声と同時に大橋の明かりが点く。

明かりが点いたと言う事はつまり、停電の時間は終わったと言う事だ。

それはつまり・・・エヴァンジェリンの魔力が封じられると言う事を意味している。

エヴァンジェリンは確かにこの麻帆良どころか魔法界全体を見回してもトップクラスの方に入る魔法使いだ。

しかし、それは魔力が復活している時だけの事・・・魔力がなくなれば普通の子供と同じなのである。

「な・・・に・・・！！？」

ええ・・・い・・・いい加減な、仕事を・・・！！

・・・！？ きゃん！！！！」

まるで落雷にあったかのようにエヴァンジェリンが光り輝く。

そのまま煙を出しながら真っ逆さまに湖へと落ちていった。

実は彼女、泳ぐ事が出来ない。

まあそもそも大橋の上から落ちれば、高さにコンクリートに叩き付けられると同じになる。

外見通りの少女がその衝撃を受ければ、死は免れない……。

落ち続けるエヴァンジェリン、その感覚はまるでスローモーションのように感じていた。

走馬灯のように今まで生きてきた多くの記憶が脳裏を過ぎるだが、何故か心は今までとは違い落ち着いていた。

「……死ぬのか、私は」

死を予感し、落ちれば落ちる程に心は落ち着いていく。

気付けば、先程まで頑なに否定していたサイの言葉さえ脳裏で反芻していた。

「……確かに奴の言う通りかもしれない。」

私は……本当は怖かったのかも知れん……光に生きようとして再び裏切られる事を。

本当は……変わると言う事に臆病になっていたのかも知れんな……
・ククク、我ながら実に滑稽だ」

水面はもう目と鼻の先だ……叩き付けられれば無事では済むまい。しかし、もう既にエヴァンジェリンはどうでも良かった。

やっとこれで……楽になれるだろう。

「……そう言えば、ナギと初めて出会ったのもこのような状況だったか。」

私を助けてアイツは、得意げにこんな事を言ったな……確か……

」

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ……！！

何かが削れるような音が鳴り響く　そして……。

パシッ

「危ねえなあ、がきんちよ」

「（そうだ・・・それが奴の最初の・・・。
んっ？ そう言えば何故、湖面に叩きつけられない？ それに先程の音は・・・）」

目を閉じていたエヴァンジェリンは恐る恐る目を開ける。
その目に映った光景は、大橋の足に七魂剣を突き刺しながらもう片手で自分の手を握っている少年の姿だった・・・。
恐らく先にエヴァンジェリンの手を掴み、その後、剣を大橋の足に突き刺してスピードを殺したのだ。

「・・・余計な事を、何故助けた？」

忌々しげに言うエヴァンジェリン。

それに対してサイは、笑いながらただ一言だけ返した。

「・・・誰かを助けるのに理由が要るか？」

その答えはナギとは違う。

だが、その言葉には表裏はまったくと言って良い程に無い。
在るがままに生き、己の選ぶ道に後悔せず、在るがままに死んでいく・・・まるで自由な風のようなたとエヴァンジェリンは少年をしっかりと見て思う。

更にその後の言葉が彼女に深く響き渡った・・・。

「俺はお前の気持ち解るなんて軽々しい事は言わねえ。
・・・だが少なくとも理解は出来る心算だ」

「・・・それは一体、どういう意味だ？」

その問いに答えは無かった

「なあ・・・一つ聞かせろ」

「あん、何だ？」

大橋の足を上まで登る途中、裸になってしまった為にサイの上着を借りて背負われているエヴァンジェリンが尋ねる。

「私は・・・生きて良いのか、光に・・・？」

多くの命を奪い、バケモノと成り果てたこの私も・・・変わるのか？」

サイはその言葉にさも当然のように返す。

「当たり前だろ、馬鹿が。」

それにお前は化物じゃねえよ、感情を高ぶらせて流れる涙は他人を想う心を持つ人間の特権で証明だ。

もしも涙が流せるならそいつはもう化物じゃねえよ・・・だから、今は気が済むまで泣いとけ」

頬が熱い・・・今までに感じた事の無い熱さだ。

気が付けばエヴァンジェリンの双眼からは一筋の涙が流れ落ちてい

た。

「えっ……。」

ク、ククク……もう、当の昔に枯れ果てたと思っていたのだがな。
……少しだけ、少しだけで良い……貴様の背を貸せ」

「勝手にしろ、俺は何も聞いてねえ」

双の眼からとめどなく流れ落ちる涙。

人間の証明である熱い涙を、エヴァンジェリンはサイが登り終わる
まで流し続けた

第五話：真夜中の決闘・後編（後書き）

更新完了です。

遂に今回でエヴァンジェリンとの戦いが終わりました。

サイの姿が学園長達に普通に見えたのには理由がありますが、此処ではまだ伏せておきます。

エヴァの苦悩、絶望、憎悪・・・。

元々の生まれが人間ならば当然の事だと思えますね。

自分は文才が無いので場面場面が良いのか悪いのか解りませんがいかがだったでしょうか

では、次回もどうぞお楽しみに^^

第六話：光の在処（ありか）（前書き）

光の意味を解らずに足掻いた少女。

光の意味を知り、確固たる生き方を見つけた少年。

相反するも似たような生き方をして来た二人の先はこれからどうなるのか？

第六話：光の在処（ありか）

「ちったあ気は済んだか？」

「・・・ああ、みつともない所を見せたな」

大橋の上までエヴァンジェリンを背負って登りきったサイ。そして心の許す限り、今迄の分の涙を流し終わったエヴァンジェリン。

彼女の心は、今迄の殺し合いをしている時とは違って変わり、何処と無く清々しさのようなものも感じていた。

・・・まあ、その表情が軟らかくなった様に見える所を考えれば、スッキリしたのだろう。

「そっか、んじゃあもう大丈夫だな。

おゝい茶々丸、投げるぞ〜〜しっかり受け取れ〜〜」

「はっ？ ちょ、お前、何する心算だ!？」

「了解しました、サイさん」

何をするのか解らないらしいエヴァンジェリンは、胸倉をいきなり掴まれて慌てる。

一方、茶々丸はサイが何をしようとしているのか理解出来たのか慌てずにサイの居る方を向いていた。

そして次の瞬間・・・サイが思いっきりエヴァンジェリンをぶん投げた。

「ぎゃあああああああああああ!?!?!?!?!」

そのままキャッチボールのように茶々丸の手にすっぽりと入るエヴァンジェリン。

いきなりのサイの行動にエヴァンジェリンは涙ぐんで怒鳴った。

「ば、馬鹿者がああああ!!!」

貴様どう言つ心算だ!? 落としたらどうする心算だこの大馬鹿が

ああああ!!!」

だが、そんな言葉にサイは悪戯小僧のような笑顔を浮かべて返す。

「んじやな、また楽しく喧嘩しようぜ!!!」

次は身代わりとか何とかじゃなくて、心行くまで楽しくな~~~~

~~~~」

そう・・・サイにとっては殺し合いなどではない。

気に入った奴と心行くまで本音で語り合える喧嘩・・・彼にとってはこの死闘も喧嘩に過ぎなかった。

喧嘩が終われば後はもう憎み合う事も無い・・・どこまでも変わっている少年だ。

その走り去っていく後姿を見ながら、エヴァンジェリンは小さく誰に聞かせるでもなく呟く。

「ふっ・・・本当に風のような奴だ。

光明司サイ、こんな私でもやり直す事は出来るのだな・・・お前はそう教えてくれたな?

ならば私も・・・少しだけ前を向いてみようと思う」

小さな呟きだったが、高性能なガイノイドである茶々丸の耳には届いていた。

それを知ってか、それとも知らずか・・・最後の方はエヴァンジェ

リンは心の中で呟く。

「(ナギ・・・お前は私に光をくれ、そしてその光を奪った。お前を愛していた事は嘘偽りの無い事実だったからこそ、お前が死んだと聞かされた時から私は後ろを向いたままで立ち止まっていた。だが、奴の・・・サイのお陰で、私はもう一度吹っ切って前に進みだす事が出来そうだ・・・。だから此処で私は、過去の己と決別して生きようと思う・・・私は前へ向かって進みだそう)」

清々しく、吹っ切れた表情のエヴァンジェリン。

その主の表情を茶々丸は何処と無く不思議そうに・・・そして何処と無く嬉しそうに見つめていた。

さて、一方サイはと言うと。

実は本来、外に出てはいけなかったのだが・・・シャークティとの約束を違えてしまった事に内心深く溜息をついていた。

「(はあ・・・またシャークティ達との約束を破っちまった。

多分停電も終わってるし、帰って来てるんだろっな・・・また心配かけちまったぜ・・・)」

誰よりも自由を愛し、誰よりも思うがままに生きる事が己の生き方であるサイ。

しかし、同時に世話になった人への義理を欠くと言う事が好きではなかった。

特にシャークティやら美空やらココネやは過去の記憶が無い自分にとっては家族のような存在だ。

そんな彼女に再び心配をかけてしまった事が、サイにとっては重く  
押し掛かっていたのである。

そして彼の予感は的中した。

何と教会の入り口の前にシャークテイが立っていたのだから……。

「……シャークテイ」

「お帰りなさい、サイさん」

その表情は怒っている訳でも、悲しんでいる訳でもない。

何処と無く、困惑しているようにも見えなくも無い。

そんな複雑そうな表情にサイが疑問を持っていると、ふとシャーク  
テイの後ろに他の誰かが立っていると言う事に気が付いた。

「……ん？ 誰だアンタら？」

一人は眼鏡を掛け、無精髭で煙草を吸っている人物……タカミチ・

T・高畑。

そしてもう一人は、明らかに人間の骨格をしていない人物……。

「てか、アンタ何？」

もしかして宇宙人が新種のエイリアンか何かか？」

「……わしは人類じゃ」

そう、麻帆良のぬらりひょんこと近衛近右衛門学園長先生であった。  
学園長の言葉にサイは教会に引き取られて今迄の中で一番驚いて叫  
び声を上げる。

「嘘だ、出鱈目だ！！」



アンタのようなそんな口の中にもう一つ頭があるような外見のU生物M  
Aが人間の訳無いだろうが!!」

「……タカミチ君、シスターシャクティ。  
わし……泣いても良いかのう?」

床にのの字を書きながらいじけ始める宇宙人……。もとい、学園長。  
このままでは埒が明かれないと思ったのか、早速シャークティが本題  
を切り出した。

「サイさん……。此方がこの学園の責任者である学園長で、そして  
此方の方がこの学園の教員の一人の高畑先生です。」

そしてサイさん、今まで黙っていて申し訳ありません……。我々は  
魔法使いです」

「……えっ? 何だ、シャークティもあのがきんちよと同じで魔  
法使いだったのか?」

サイは冷静に言い返してはいるが、内心は驚いていた。

まさかあんな不思議な力を持つ者が自分の近く、しかも家族のよう  
に思っている人がそうだと夢にも思わなかったのだから。

その問いにゆっくりとシャークティは頷き、言葉を続ける。

「はい……。それにココネと美空もまた、魔法使いです。」

御免なさい、魔法使いの存在と言うものは公にする事は例え家族同  
然の人にも出来ません。

それを知ってしまったら本来は記憶を消さなければならぬのです。  
……」

底で一度言葉を切ると一息吐く……。そうして再び続きを語りだし

た。

「この学園にいる魔法使いや、魔法使いの争いは全て此方で把握しています。」

「……ですからエヴァンジェリンと貴方の戦いも、一部始終見ていました」

「そっか……あれ、見られてたのか。」

どっかから視線を感じると思ってたけどさ　　あゝ恥ずかし」

ばつが悪かったのだろうか、そんな事を呟くサイ。

いや、その態度は実際は……己の思い出してしまった事を伝える方法を模索しているかのようにも見える。

そんな彼の心境が解ったのだろうか、シャークティは優しく言葉をかける。

「サイさんの事は短い間ですが一緒に暮らして信頼出来る人だと私は思っています。」

貴方がたえ誰であれ、何であれ、私は貴方の事を信じます……だから、教えて貰えませんか？

何故魔法使いでない貴方が魔法を知っているのかや、貴方が思い出した事を……」

どう説明していいのか迷うサイ。

確かに完全ではないが、サイは身の上の生まれやこの世界の人間ではない事は思い出した。

しかし実に突拍子の無い事であり、更に全ての記憶が戻った訳ではないのだ。

だが、そんな風に迷うサイに煙草を吸い終わったタカミチが語りかける。

「僕にも聞かせて貰えないかな？」

先程の戦いやエヴァとの言葉は全て見たし、聞かせて貰ったよ。それで君は口は悪いが、真っ直ぐな人物だと言う事も理解出来た

君が不審者だなんて思っていない」

更に学園長も髭を撫でながらサイに言葉をかけた。

「わしもタカミチ君と同意見じゃ。

それに君は、わし達を知る由も無かったエヴァの心の壁に正面からぶつかって見事に破壊してしもうた。

エヴァがあれ程悩み苦しんでいた事にわし達は気付かなんだ・・・友人である彼女を救ってくれた事に感謝しておる。

・・・故にどのような話であれ、わしは君の話信じよう」

そんな三人の言葉にサイは小さく息を吐く。

「解った、良いぜ。

ただし、俺はまだ完全に記憶が戻った訳じゃねえから思い出した事だけしか話せねえ。

それに今更記憶を消すとか、頭ん中を覗くとかは止めてくれ。

・・・それでも良いなら教えてやるよ」

揃って頷く三人・・・そうして教会の中で話を聞く事となる。

だがそこに思いもしない人物が居る事を4人は気付いていなかった。それは裸状態になってしまった為にサイから上着を借りていたエヴァンジェリンとその従者の茶々丸だ。

教会に上着を返しに来ただけだったが学園長達の姿を見つけ、気付かれ難い所で様子を見ていた。

「さて・・・取り敢えず思い出せたのは俺自身の事だけだし、俺の事を語る事にするぜ。」

まず最初に断つとくけど、俺は人間じゃねえよ」

礼拝堂に入って開口一番の言葉はその言葉だった。

「フオ？ 人間ではない・・・じゃと？」

おぬしは何処からどう見ても人間にしか見えぬが・・・？」

「まあ、正確に言えば“半分人間”だけだな。」

俺は“魂獣”<sup>スピリッツ</sup>って呼ばれる存在と、人間との間に生まれたハーフなんだ。

魂獣ってのは多分、現世で伝わってる“精霊”とか“妖怪”とかつてのと同じ様な存在の事だよ。

まあただし、魂そのものの存在みたいなものだから力の強さなんかはそれ以上だろうけど」

説明を受けても意味が解らない。

それはそうだろう、精霊やら妖怪やらを超える存在など本来殆ど存在しないのだから。

しかし三人の疑問を他所に、サイは淡々と続けていく。

「魂獣つてのにはそれぞれ人間の種族と同じで大体10の種族に分かれてる。」

俺はその中でも力の強い事と数が少ないと言う事で“超希少種族”  
って呼ばれてた『白面九尾一族』の長の子さ」

その時、一瞬耳を疑うようなフレーズが出てきた。

確認の為にタカミチがもう一度サイに尋ねる。

「あ、え」と。

悪いんだけどもう一度教えてくれないかい？ えっと・・・何一族  
って言ったかな？」

「いやだから『白面九尾一族』だってば。

・・・何その表情、俺なんかそんな面される事言ったか？」

聞き返したフレーズに皆驚く。

当然だ、サイはあまり知らないかもしれないが『白面九尾』とは知  
らぬ者の方が少ない伝説の大妖怪だ。

まさかそんな大妖怪の名を冠する一族の長の子だとは思って居な  
ったのだろう。

そんな三人の心境はお構い無しに更に話を続ける。

「まあ良いや・・・んで、元々俺は魂獣界にいた筈なんだがどう言  
う訳か地上界に落ちちまってるね。

その時の衝撃で記憶を失っちまったんだと思うが・・・それ以外は  
良く解んねえ」

実にざっくりとした説明だ。

だが実際にサイが思い出せたのは己が魂獣と人間のハーフであると  
言う事。

そして種族の数と一族の名が『白面九尾一族』だと言う事と、種族  
特有の能力だけであるのだから仕方が無いのだが。

「フムム・・・2、3の質問は構わんかね？」

「良いぜじいさん、解る限りの事ならな」

快く返すサイに学園長は礼を言いながら質問を飛ばす。

「まず一つ・・・魂獣とは一体何じゃ？」

先程ざつくりと精霊や妖怪などと同じようなものと言っておったが、そのような存在はわしも長く生きておるが聞いた事が無い」

「うーん、簡単に説明すれば神具アーティファクトの核である魂石クリスタルに宿る精霊かな。

基本的に火の玉とか不定形な形してる奴とか多いけど、レベルが高くなる程に個性的な外見になるんだ。

それと魂獣には抑制状態セーフモードと解放状態バーストモードってのがあある。

抑制状態ってのは本来の力を抑制された仮の姿、解放状態ってのが力を完全に解放した真の姿の事さ。

ああ、ちなみに俺のこの状態は抑制状態で、さっきの戦ってる時が解放状態だ・・・でも俺の場合は人間の血も半分流れてるから抑制状態でもそれなりに戦えるがよ」

聞き覚えのある名称を聞いた学園長は続いで質問を飛ばす。

「二つ目じゃが、神具とは何じゃね？」

わし等魔法使いにも同名のアイテムは存在するが・・・」

「ああ、そりや実際に見せた方が早いかな。

出でよ・・・七魂剣・スサノオ！！」

掛け声とともにサイの手に七魂剣が握られる。

それを学園長に手渡すと、その力の濃度の高さや強さに驚いていた・・・。

「これが神具。

じいさんが言ってるのがどう言うのか知らねえけど、俺らは所謂“肉体の一部”って言っても過言じゃねえよ。

魂獣職人が自分の魂石を削って、そこに使う奴の魂石をはめ込んで使用する代物だ」

「これは・・・何と言う強大な力を感じる物じゃ。

成る程、神具の名は伊達ではないと言う事じゃな・・・済まぬのう、返すぞい」

学園長から七魂剣を返して貰い、空間に戻す。

そこから更に学園長の質問が来た。

「では最後に・・・魂獣界とは？」

「俺達の住んでる世界さ。

人間の住む地上界とは異なる次元に存在する、地上の物理法則つてのが一切通用しない不可思議な事象が数多く存在する世界。

住人は全部で7つ・・・いや、新種族二つと古代種族が見つかったから全部で10か、その十の属性に大別されてる事から別名『十天（十の天下）』なんて呼ばれてる。

大分小競り合いなんかが多かったけど、風景だの何だのは良かったと思うぜ　記憶が完全じゃねえから良く解んねえけど」

「ふむ・・・成る程のう。

信憑性は少し微妙じゃが、先程の神具のような存在は此方には存在せん。

うむ、良かろう・・・お主の言葉を信じよう」

学園長の一言に難しい表情で聞いていたシャークティとタカミチも苦笑して頷く。

そこから直ぐに、学園長が真面目な表情でサイに尋ねる。

「さて、ところでじゃがのサイ君。

聞いておきたいのじゃが、お主これからどうする心算じゃ？」

「へっ？ どうするって何が？」

聞き返すサイに学園長はゆっくりと呟いた。

「お主は記憶も戻らんし、元の世界に戻る方法も無いのじゃろう？  
未だにこの世界にいるのじゃから、これからどうする心算じゃね？」

そこでサイは腕を組んで考える。

考えても見れば教会に住んで記憶を取り戻すという事以外になんら  
目的は無い。

「別に特に考えてねえなあ……。

このままシャークテイの教会の手伝いでもしながら記憶を取り戻せ  
ば良いと思ってたし、別に目的もねえし。

まあ良いんじゃないの、風の吹くまま気の向くまままでさ」

「お主、見た目と違って大分爺臭いのう。

フム……ではものは相談なのじゃが、わしに良い考えがあるのじ  
ゃが聞いてくれんかね？」

……実に嫌な予感がする。

特にシャークテイやタカミチはこの学園長の性格を知っている。

そこそこに実力があり、どこかに所属していないと言えば恰好のタ  
ーゲットだった。



「お主、見た目には小学生か中学一年生位にしか見えん。そこでわしが学園長を勤める麻帆良学園の中等部に編入するというのはどうじゃね？」

記憶の戻らない現時点では多くの知識やら何やらを得る格好の場所じゃと思っのじゃが……」

シャークティとタカミチが想像した嫌な予感は的中した。

一方、サイはその申し出にどうやら多少興味が惹かれたらしい……。

「ふ〜ん、学校ねえ……。」

良いぜ、その麻帆良学園の中等部だったか？ どうせやる事もないし、じいさんがそう勧めるならその提案に乗ってやるよ」

シャークティやタカミチが止めようとするのを気にせず即答するサイ。

本当に何も考えない小僧である。

「フオッフオッフオッフオッフオ……そうかそうか、では早速……。」

『ああ、でも条件があるぜ、じいさん』……フオッフ？ 条件とな……？」

サイの即答に上機嫌で準備をしようとする学園長。

だが……そんな学園長にサイが出した条件は結構なものであった。

「ああ、まず最初にこれだけ言っとく。

俺は束縛されるのが嫌いだね、例えばアンタの勤める学校つてのに行つても、命令されても俺は何もやらねえぜ。

元々、誰かの下に付いて命令されるなんてのは大っ嫌いだからよ……

・好きにやらせてもらうつてのが条件の一つだ」

更に続けて彼は“魔法使い”の存在の根底を覆すような事を言う。

「それに俺は正義の味方じゃねえ。

生きたい様に生きる自由が俺の性分だ、助けたいと思った奴にはルールだつて無視する。

それでも良いってんなら好きにしるよ」

「むむむ……。

し、しかしその条件はお主が損をする可能性だつて在るのじゃぞ？  
それでもお主は良いのか……？」

正直迷いながらそう言う学園長。

……実際の所、学園長がサイを中等部に入れようとしている事には理由がある。

実は己の大切な孫娘が居るクラスには良くも悪くも個性派な生徒達が揃っている……そして件の子供くだん先生が担当するクラスもそこなのだ。

そういつた状況で彼のような人物が居れば、嫌な言い方だが“利用する”事は出来る。

口の悪さに似合わず面倒見が良さそうな少年故だ。

だが……。

「はっ……関係ないね。

それに俺はそんな勝手な事を言ってるんだ、それによって生じるリスクから逃げる心算なんてねえよ」

そう、サイはそう言う人物なのだ。

自由に生きると言う事の良い部分も悪い部分も良く知っている。そして・・・そう言った言い訳をしない生き方をするからこそ、エヴァのように凍りついた心を持っていた人物にも言葉が響いたのだから。

サイのそんな部分を改めて理解した学園長は、深く頷いて言う。

「・・・良いじゃろう。」

成る程の、お主のその何処までも真つ直ぐな瞳の意味が良く解ったわい。

ほかに何か条件はあるかの？」

「ああ、そんなじゃあ寝泊りは教会（こゝ）でさせてくれ。

まあ、シャークティが迷惑だつてんならの話だけだよ

「

サイの言葉に今まで黙っていたシャークティは小さく首を横に振る。

「迷惑だなんて思いません。」

短い間でしたがサイさんは私にとって家族のような風に感じています。

学園長がお許しになるなら、サイさんは此処から通わせてあげてくださいませんか？」

「ふむ、良いじゃろ。」

元々寮の方は部屋が一つも空いていない故、何処に住んで貰うか迷っていた所じゃ。

「・・・その代わりに、わしからも一つだけ頼みたい事があるのじゃが」

サイは学園長の方を向く。

学園長の眼差しは、何処までも真面目なものだ・・・。

「・・・頼みによるな」

「何、君の考え方を否定するようなものではない。

ただ、君の編入するクラスの中にわしの大事な孫娘が居る・・・その子を影ながら護ってやって欲しい。

勿論、君の出来る範囲で良いからのう・・・」

頭を下げる学園長。

サイはそれを見ながら一言だけ返した。

男が頭を下げるという事がどういう事が解っていたが故に。

「・・・良いぜ、出来る範囲で良いならな」

そしてその言葉を最後に学園長とタカミチは教会を出て行く。

こうしてバトルや暴露話などで彩られた長かった一日の幕は静かに下りたのであった

「やくれやれ、昨日は良く寝たな。

色々な事があつた分、爆睡出来たぜ・・・一応、大手を振ってこれからは外に出れるしよ」

首を鳴らしながら教会の前で伸びをしているサイ。

今日からはある程度自由に外に出る事が出来る　自由への抑圧

を好まないサイにとってはこんなに嬉しい事はない。

今までの教会での生活に文句があつた訳でもないが、やはり彼は風自由と言つ存在の体現者なのだ。

・・・そんな時、ふと後ろから知っている二つの気配を感じた。

「よう、がきんちよに茶々丸。  
こんな朝から何だ、喧嘩の再戦要求か？」

それは茶々丸と、妙にスッキリしたような表情のエヴァンジェリン  
だった。

「違うわ、馬鹿たれが」

「おはようございます、サイさん」

そう言うと茶々丸はサイに手に持っていた物を渡す。  
それは昨晚、エヴァンジェリンが一誌纏わぬ姿となってしまった故  
に貸したサイの上着だった。

「お、何だ態々<sup>わいわい</sup>届けてくれたのか？  
んな事しなくても、こっちから取りに行ったのよ……まあ礼は  
言っとくぜ、サンキューな」

そのまま上着を纏うサイ。  
良く見てみれば昨日の死闘の際に付いた傷などは一切合切消えてい  
た。

「……別にエヴァンジェリンや茶々丸が縫った訳ではない、次の日  
には新品同様に戻っていたのだ。

「済まんな、本来は昨日返す心算だったのだが……。  
学園長のジジイやらタカミチやらが深刻そうな表情で居たので入っ  
て行けなかった。

そこで悪いと思ったのだが聞かせて貰ったよ、貴様の生まれやら魂  
獣やら神具やらという話を」

それについてサイは何も言わない。

まあ別に聞かれた所で、目の前に居る人物は魔法使いなのだから問題など無いのだが。

・・・少々の沈黙の後、エヴァンジェリンが口を開く。

「私は最初、勘違いをしていた。

何も解らん小僧が勝手な事を言っているだけだと・・・だが貴様は、その生まれ故に同じように苦しんだのだな？」

サイは何も答えない。

実は他にも記憶を取り戻した事はあった・・・しかしそれは、あの場で語れるような“良い話”ではない。

それを隠して話していた筈なのだが、エヴァンジェリンは気付いたという事だろう。

更に彼女は言葉を続ける。

「昨日、貴様に言われた事を少し考えてみた。

そして気付いたよ、私は確かに貴様の言う通り逃げていただけだ。裏切られる事を恐れ、失う事を恐れ・・・全ての存在を否定する事で、自分を悲劇のヒロインのように演じていただけだ。

奴が・・・ナギがこの場所に私を置いていったのは、そんな事の為ではないだろうに」

黙って聞いているサイ。

そんな彼を真つ直ぐ見ながらエヴァンジェリンは一息吐いてから言葉が続けた。

「光に生きてみる

私は最初、その言葉の意味を“陽の当たる一般人達が居る世界”の事だと思っていた。

だからこそ血に塗れ、多くの命を奪い、薄汚れた私には生きる事の出来ない世界だと・・・。  
だが本当の意味は違う・・・ナギは私にやり直せると伝えたかったのだな」

そう小さく呟くように、噛み締める様に言うエヴァンジェリン。  
己の生き方を垣間見、そして何処までも真っ直ぐな少年の言葉を聞いてやっと解ったのだ。

光に生きるというのは光の差す場所だけではなく、己自身が変わる事輝く事なのだ。

「前を向いて生きる、光は前からやって来る」

「何？」

今まで黙っていたサイが口を開く。

その言葉はサイが忘れていた、今尚尊敬する父親が教えてくれた言葉。

「昔、記憶を失う前に面影も思い出せない父上に教えてもらった言葉だ。

目と言うのが前に何故付いているのか・・・それは前からやって来る光を見て、前へ前へと進む為だったな。

後悔して後ろを向いたって構わない、ただど前に進む事だけは決して止めるなとも言われた。

だから誰だって諦めなけりゃ、何時だってどんな事だってやり直す事が出来るって事さ。

腐って足を止めるか、それとも泥だらけになっても先に進むか・・・  
それで人が変われるか変われないかは決まってくる」

ぶれる事のない生き方。

少なくともサイは人間と人外の合いの子・・・どちらにもつけず、どちらからも否定された人生を生きた。数少ない理解者である親友は居たが、己の生まれを呪った事もある。しかしそこから完全に曲がってしまったわなかつたのは、父のそんな言葉があつたからだろう。

「・・・強いな、貴様は」

しみじみとエヴァンジェリンはそう呟いた。

そして何かを決意したような目になると、彼女は続きを語る。

「ならばサイ・・・わ、私の行く末を貴様が見届ける」

「・・・あん？ どう言う意味だそりゃ？」

思えば名で呼ばれたのは初めての事だろう。

エヴァンジェリンはほんの少しだけ頬を紅く染めてサイに言った。

己の考えた答えを、素直になつた事があまりない為恥ずかしがりながらだ。

「き、貴様の言葉で私は・・・前に進む事を決心した。

だ、だが私はお前のように強くも無いし、進み続けていればまた後ろを振り返ってしまうだろう。

だからこそ私を表の世界に引っ張り出した貴様が責任を持って・・・わ、私の進む先を見届けると言っているのだ！！」

照れ隠しの心算かサイの首元を掴んで激しく振りながら怒鳴る。

その言葉の意図を理解したか、それともしていないかは解らないが、サイは笑ってから納得した。



「良いぜ、がきんちよ。  
お前の行くべき先は俺が見届けてやる・・・宜しく頼むぜ、これからな」

握った拳をエヴァンジェリンの方に向けるサイ。  
意図が理解出来たのか、エヴァンジェリンも拳を握ってサイの拳とくっ付ける。

「がきんちよではない、これからは名で呼べ。」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・・・前にも名乗ったがそれが私の名だ」

「・・・一つ聞かせろ。」

アタナシア・キティってどういう意味だ？」

本来はあまり呼ばれたくない名である彼女のミドルネーム。  
だが、不思議とこの少年には呼ばれても不快ではない。

「アタナシアは不死でキティは子猫と言う意味だが・・・それがどうかしたか？」

アタナシア・キティ  
不死の子猫・・・何と皮肉なミドルネームだろうか。

そんな言葉を聞いてサイは笑いながら頷く。

そして

「じゃあ“キティ”で良いか？」

エヴァンジェリ何とかなんつうのは呼び辛えし、その外見なら“子猫”の方が合ってるだろ？」

その呼ばれ方は昔、ある人物が彼女を悪ふざけで呼んでいた呼び方しかし・・・生き方を変え、闇から陽の指す場所に踏み出そうとする彼女にとって、生き方を変えるに相応しい名のようにも感じた。

「（ククク・・・もし奴が居れば、更に私をおちよくっただろうな・・・）

良いだろう、そう貴様が呼びたいと言うのなら好きにしろだが、そう呼ぶのを許すのは貴様だけだぞ？」

過去の思い出にあるナギともう一人の、まるで喧嘩友達のような人物であった男の面影を一瞬思い出す。

「じゃあ、宜しくな“キティ”」

その名を呼んだサイの首に手を回して抱き付くエヴァンジェリン。突然の事に驚いているサイを他所に、彼女は心の中で“過去への決別”を宣言した。

「（ナギ・・・ありがとう。）

お前の事は忘れない　だがもう、お前の面影を追って立ち止まるのはこれで最後とする。

私は先へと進む・・・サイと共に・・・」

時が止まり、人の温もりを忘れ、絶望の中で生きる事しか出来なかった少女。

一度は光を見つけるもその光は儚く消え、その心を頑なに凍らせていた真祖の姫。

しかしこの日、少女は“光”の本当の意味を知り・・・前へと歩き

出す事を誓ったのであった。

尚、彼女がサウザンドマスターが生きていると知るのもう少し後  
の話である

そしてもう一つ……。

「おいちよつと待て……それ本当かキティ!?」

「ああ、と言うかそんな事に一々嘘を吐く理由が何処にある?」

九尾の少年が向かう先。

その先にあるものが彼の想像だにできなかった場所だという事を、  
彼は今知ったのであった……。

「クツ……あんのクソジジイがあ!!」

何で俺が“女しか居ない学校のクラス”に編入しなきゃなんねえん  
だよ!!

責任者、出てこおおおおおおい!!!!!!

サイの虚しい叫び声が、雲一つない晴天の空へと響いていた。

## 第六話：光の在処（ありか）（後書き）

これにて遂に、VSエヴァンジェリンのストーリーは終わりました。新たな未来を見つけ、そうして歩んでいこうとする彼女の道行きに幸多からん事を祈りたいですね。

さて・・・何だか伸ばしに伸ばしてるサイの記憶喪失。

ぶっっちゃけますと彼、記憶が完全に戻るのは物語の中盤後半ごろです。

このまま記憶喪失キャラで行きますのでおかしな部分もあるかもしれませんがお許しを^^

## 第七話・騒がしき日々の始まり（前書き）

ストーリーは新たなる展開をみせる。

ここから始まるのがサイの真の騒がしき日常の始まりである。

## 第七話：騒がしき日々始まり

「往生せいや、このクソジジイがああああああ！！！！！！」

「ふおおおおおおお！！？」

此処は麻帆良学園の学園長室。

扉が開いた瞬間、学園長の顔に飛び蹴りを叩き込んだ人物が居た。まあ説明する必要は無いだろうが、それは勿論サイである。

「手前、このクソジジイ！！ 一体どういう事だよ、ああ！！？」

「な、なななな、何じゃお主はいきなり！？

一応わし、学園長だよ！？ その学園長に登校初日から飛び蹴りつて、そりゃあんまりじゃろうが！？」

ぶっ倒れた学園長の首元を持って思いつきり振るサイ。

一方学園長はサイの飛び蹴りが思いつきりクリーンヒットした筈なのに傷一つ無い。

流星は関東の魔法使い達を取り纏める『関東魔法教会』の理事長にして『麻帆良学園』の学園長なだけの事はある。

・・・何故こんなにサイがぶち切れているのかは前話の最後で叫んでいた通りだ。

「五月蠅え、何が学園長だオラア！？

何が悲しゆうて女しか通つてねえ学校に俺が編入しなきゃなんねえんだよ！？

さては手前・・・最初からそこに叩き込む心算だったな！？」

「お、お主がすっかりと聞かんのが悪いんじゃないやろつが！  
そもそもわしは最初から、男児が通う学校だなどと言ってはおらん  
わい！！」

それを自分で勝手に勘違いしたのじゃから、怨むならわしよりも自  
分自身を怨むのが筋じゃ！！

人の話を聞かんと勝手に決めてしまった自業自得じゃ、自業自得！  
！」

どんどんテンションが上がりエスカレートしていく二人。

「何だこのくたばりぞこないの老い耄れがあああ！！」

老い先短い命の炎とその数少ない髪の毛を今すぐ此処で消してやん  
ぞコラアアアア！？」

「フオオオオオ！？ こ、腰がああああ！！！！？」

止せ、やめい！？ か、髪の毛は、髪の毛だけは勘弁しとくれええ  
ええええ！！！！？

みぎゃああああああああ！！！！！！？」

サイに馬乗りになれ、数少ない髪の毛やら眉毛やらを引っ張られて  
悲痛な叫び声をあげる学園長。

このままでは風前の灯であった数少ない髪も、全てが抜け落ちてし  
まうであるつ……。

そんな学園長に救いの手を差し伸べた人物が居た

「……何をやっているんだサイ？

ジジイの殺されるかのような声が外まで響いているぞ？

ああ、いや、あれはニワトリが首を切られる前の叫び声か？」

いつの間にか学園町室にはエヴァンジェリンとその後ろに茶々丸。

さらにサイは見た事の無い、スーツを着た眼鏡の少年がおろおろしながら慌てていた。

「が、ががが、学園長先生~~~~~!?!」

こ、こここ、こらあああ!?! だ、誰ですかあなた!? 学園長先生を離してください~~~~~!」

「あんっ!? つて、何だキティと茶々丸か。

後・・・誰だテメエ? 何でこんな所にガキが居るんだよ」

確実に人を殺せるような目付きで声をかけてきた人物を睨むサイ。だがそこに居たのが自分の知り合いであると解った瞬間、その目付きは普通に戻る。

・・・自分の外見は棚に上げてエヴァンジェリンと一緒に居た眼鏡の少年を餓鬼扱いしていたが。

「が、ガキつて、貴方もボクと同じか少し年上ぐらいじゃないですか!」

“ガキ”と言われた事が気に入らなかったのか怒って反論する眼鏡の少年。

それを後ろで見ていたエヴァンジェリンは、腹を抱えて笑っていた。

「何だよキティ、何がおかしいんだよ?」

「ククク・・・いや、女子校に編入されると解っただけでその状態なのだからなあ。

此処に居るのが“お前に入るクラスの、教育実習とは言え先生”だと知ったらどのような態度を取るかと思うと、な」



「……「クラスの先生？」

今一瞬、意識が遠くなるような事を言われたような気がするが……。

「ま……本気で？」

その質問に救いがあるように視線を茶々丸の方へと向けるサイ。だが……そんな思い虚しく、茶々丸は静かに首を横に振る。

「はい、肯定します。」

2・Aの三学期……つまり三月までの間、教育実習生として英語を教えてくださいださる事になっている。『ネギ・スプリングフィールド先生』です。

正確に言えば一昨日（サイとエヴァが本気でやりあった日）の昼から赴任したばかりですが」

茶々丸の言葉に肩を震わせるサイ。

エヴァンジェリンはそんな彼の様子を見ながら楽しそうにしている。そして……サイは二度目の爆発を起こした。

「こんのクソジジイがああああ！！！！」

女ばつかりのクラスに編入するだけじゃ飽き足らず、教える奴がガキだとおおお！？

筆る……テメエの後生大事にしてるその数少ねえ髪の毛、一本残らず筆り取ってやらあああ！！！！！！」

「ほ、ほぎゃああああああああ！！！！？

や、止めい、止めとくれえええええ！！！！？ 筆れる、根元から筆れてしまっ！！！！？

こ、こりゃ、エヴァ！！ そんな所で爆笑しとらんと止めてくれえ

えええ！！？ 後生じゃからああああ！！！！」

後ろで更に腹を抱えて笑っているエヴァ。

無表情のまま傍観している（と言っても、時たまシャッターを押すような音がする）茶々丸。

サイを止めようとしてオロオロしているネギ先生に、絶望的な叫び声を上げて髪を聳られそうになっている学園長、そして『本職の人』も顔負けな目付きのサイ。

まさに学園長室はカオス空間と成り果てていた。

そしてこの日

後に麻帆良に通う生徒達や先生達に『学園長室襲撃事件』の序章と冠される事件は、HR開始の鐘によって取り敢えずの収束を見たのであった。

勿論、この事件によって学園長の数少ない髪の毛が更に少なくなっただけでもない。

「ちっ・・・あんのクソジジイ。

つるっばげにしてやっても飽き足らねえぜ・・・まったくよお」

戦利品である白髪学園長の命の束をゴミ箱に叩き付けながらブツブツ文句を言うサイ。

横にはまだ思い出して笑っているエヴァンジェリンと相も変わらず無表情の茶々丸、後ろには先程の乱闘騒ぎにびくびくしているネギが付いてくる。

「まあまあ、そう言うなサイ。

あんだだけやれば少しはジジイも懲りるだろう・・・それにしてもあ

のジジイの悲痛な表情、思い出しても笑えるな。久しぶりに思いつきり笑わせてもらったぞ」

「チツ、人事だと思いやがって。

・・・んで、さつきから何で後ろ歩いてるんだお前？ 曲がりなりにも教師って奴なんだろ？

だったらお前が率先して案内するモンじゃねえのか？」

ビクツと肩を震わせるネギ。

どうやら先程の事が余程恐ろしかったのだろう・・・それともほかに理由でもあるのだろうか？

思えば先程からしきりに何かを聞いたそうな表情をしていたが・・・。

「す、すみません・・・。

も、もう直ぐクラスですから・・・ア、アハハ、ボクも一昨日から此処に着たので・・・」

そんな言葉に慌てて先を歩き出すネギ。

だがその足取りはどうもおぼつかない・・・やはり、先ほどの恐怖が関係しているのだろうか？

それは結局の所、ネギ本人にしか解らない事だろう。

「こ、此処が教室です・・・え、え〜っ」と

「サイだ・・・光明司サイ。

さつき学園長をボコった後に散々名乗ったじゃねえか」

「あっ・・・ごめんなさい!!」

じゃ、じゃあサイさん、ボクが呼んだら入って来てください……。するとエヴァンジェリン達は反対側のドアへと向かう。

「ん？ 何だキティに茶々丸？ お前等こっちから入らねえのかよ？」

「私の席は一番後ろのドア側だからな。茶々丸も似たような場所だ、だから別にそっちから入る必要などない」

そう言うと手で挨拶のような事をして中に入っていく。茶々丸も一度会釈をすると、エヴァンジェリンに続いて入っていった……。

「じゃ、じゃあボク、先に入りますね」

ネギもそうサイに伝えると入り口を開けようとした。しかし……。その中途半端に開いている扉に、サイはある事に気付く。

「……ああ、そう言う事か。」

何だか知らんが学校ってのは変な歓迎の仕方をするんだな」

小さく呟くとサイはネギの胸に腕を掛けて下からせる。

「ひゃ、ひゃあ！？ な、何ですかサイさん！？」

そのまま何も言わぬままサイは半開きになってる扉を横に蹴り開けた！！

「……………えっ!?」「……………」

クラスの中から上がる疑問のような驚愕のような声。

それに合わせて扉の上に挟まれていた黒板消しが下に落ちこちる。だが足元には縄が張られている…。その縄は上に繋がっており、そこには水の入ったバケツ、吸盤の付いた矢などがセットされていた。

サイの足はその縄に引っかかり、上からバケツが落ちてきてずぶ濡れになる…。箬だった。

「おゝい、その窓を開けといた方が良いぞ」

しかしサイは暢気にそんな事を呟く。

言葉の意図が良く解らなかった為、誰も動こうとしない……。

「茶々丸、開けてやれ」

「はい、マスター」

いや違う、この二人にはサイの意図は解っていた。

茶々丸は急いで窓際に向かうと、サイの目線の先にある窓を開いた。

その瞬間!!

『ガコオオオオオン!!』

何か硬いものをぶつけた様な音がしたと思ったら、茶々丸の開けた窓から外のグラウンドに向かって何かが音を立てて飛び出し、落ちた。

「もう一丁!!」

サイの声と共に何か空を切るような音が響く。良く見ればそれは何と、向かって来ていた何本もの吸盤の矢をサイが空中回し蹴りで茶々丸の開けた窓から蹴りだしていたのだ。・・・と言う事は、自ずと先程の硬い何かをぶつけた音もどういう事かは理解出来ただろう。

着地しながらエヴァンジェリンと茶々丸の方に言葉を飛ばす。

「ナイス、キティに茶々丸!!」

会釈と手の動きだけで返す二人。

あまりの一瞬の事に、いつもは騒がしい筈のこのクラスが静かになった・・・。

「やれやれ・・・実に面倒な歓迎の仕方だな。

俺は学校なんてモンに通った事ねえけど、こつ言うモンかね？」

そう言いながら着物のような上着の埃を払う。

更に首や腕を回した後、思い出したかのようにサイは言い放った。

「ああ、忘れてた。

よう teme へら、極めて遺憾だが今日からこのクラスに編入する事になった光明司サイだ。

長いか短いかは知らねえが、まあ暫くの間宜しく頼むぜ」

静寂に包まれる 2 - A。

このクラスはいつもバカ騒ぎが好きな為、このような静寂は極めて珍しい。

今の状況で鳩が豆鉄砲喰らった様な表情をしていないのは、エヴァンジェリンと茶々丸位だろう。

・・・と、静寂を破るように誰かが小さく声を上げた。

「……か……」  
「……あん？」

いぶかしむ様に返答を返すサイ。

しかしその言い出しが導火線に火を点けたのか、一斉にクラスの者達が声を上げた!!!

『カッ』カッ、カッ『カッ』カッ『カッ』カッ『カッ』カッ  
（か、カワイイ）

「……五月つ蠅えなあ」

怒号の如き声。

多くの者達が先程の呆然とした態度など忘れ、サイに対して眼を輝かせて見てくる。

……てか、本当にサイはストレートな事しか言えない人物だ。

まあしかし、実際のサイの性格は別としても外見はそれなりに整っている。

しかも銀髪に着物のような服の上着からはみ出ている腕は、実に良く鍛えているのが解る程に引き締まっていた。

黙っていればこの少年はもてるであろうが……。

「ハイハイハイハイ、質問!! しつも~~~~ん!!」

そんな声が周りからは聞えてくる。

内心『面倒臭えなあ……』と思っていたサイだが、学校と言う所

はこう言う場所なのだろうと納得した。

それに2〜3程度の質問ならば問題ないとも思っていたのだろう。

最初は見ると子供っぽくも元気そうな少女が尋ねる。

「何歳なの〜〜〜!?!」

「・・・14だ。」

「・・・確か、その位だったような気がするが」

首をかしげながら答えるサイ。

続いている質問は、そばかすの少女。

「何処から来たの〜〜〜!?!」

「想像に任せる。」

「まさか魂獣界スピリッツ界とも言えねえしな・・・」

まあ、言った所で信じてなど貰えないだろうし、シャークティに迷惑が懸かる。

そんな事を考えていると、次の質問が飛ぶ・・・どうやら次は、眼鏡で黒髪の人物のようだ。

「ねえ、どうして男子なのに女子校にいるの?」

「あるホモサピエンス人類には決して見えないポケジイに騙されて勝手に入れられただけだ。」

・・・文句があるなら、あの霊長類と妖怪を足して2で割ったような面のジジイに言ってくれ」



本当に言葉をオブラートに包まない人物である。

その言葉を聞いて、後ろに居たエヴァンジェリンはまた腹を抱えて笑っていた。

すると次に質問を飛ばしたのは、マイクをサイに向ける“報道部”  
と言う腕章を付けた人物だ。

「はいはいはい、この新聞部の朝倉がバンバン質問しちゃうよ〜  
〜!!!」

じゃあまず、出身地は何処？」

「・・・だから想像に任せると言った筈だが」

「ではその髪の毛は地毛ですか？」

「・・・悪いか？」

「ではでは次は・・・」

そんなこんなで朝倉と言う人物は何個も何個もサイに質問をぶつける。

いい加減イライラして来たサイだが、一応律儀に答えていた。

そして次で遂に10個目の質問を言う。

「では重要な質問なのですが、彼女はいますか？ もし居ないのであれば、どのような人物がタイプですか？ズバリ教えて下さいよ  
〜〜〜」

何故かその質問をした時、一斉に辺りが静かになる。

笑っていて興味を持って居なさそうだったエヴァンジェリンも、その近くで佇んでいた茶々丸も何故か後ろの方で身を乗り出して言葉

を聞こうと待っていた。

その質問の意図を良く考えた後、サイは意地が悪そうな表情を一瞬浮かべると朝倉に向かって言う。

「最初の質問はノーコメントだ。

次の質問は・・・嫌いな人物がどう言うタイプかだったら教えてやるぜ」

「おお、それはそれは!？」

マイクを向けて目を輝かせる朝倉。

だが　次にサイが言ったのは、思いもよらない事だった。

「俺の嫌いなタイプは・・・余計な事を根掘り葉掘り聞いてくるような奴。」

特に人の人権を無視して勝手に土足で人の中に踏み込んで来るような下種が俺が一番大っ嫌いだ。

・・・これで質問の答えになったか？」

その言葉と共に朝倉のみに向かって放たれる鋭い殺気。

殺気を辺り関係なく撒き散らすのは素人にも簡単に出来る・・・だが一人にのみ送るといふのは、余程な実力者でないと無理な事

「あ・・・ああ、ご、ゴメンゴメン。」

ちよ、ちよ〜っと、私調子に乗り過ぎてたかな・・・あは、あはははははは・・・」

それは実に珍しい光景だ。

本来、この朝倉と言う少女は中学生にしては大人顔負けの記者としての腕前を持つ。

しかし、時にやり過ぎたり、TPOを弁えなかったり、しつこ過ぎたりする事から別名『麻帆良のパラツチ』などと言う名誉なんだか不名誉なんだか解らない渾名を持っている。まさに言い換えるならすっぽんのように喰らい付いたら離さない人物の筈なのだが・・・そんな事を知っている者達にとって、朝倉が簡単に引き下がったのが珍しいと感じた訳だ。

まあ、何名かは簡単に引き下がった理由に気が付いていたが。

「ククク・・・奴と会ってから数日だが、本当に退屈はせんな」

「・・・マスター？」

一人は言うまでもなくエヴァンジェリンだ。

まあ彼女の場合は生きてきた状況を垣間見れば当然の結果なのだが・・・。

「・・・（今のは殺気！？ やはりあの男、危険だ・・・）」

二人目は前にサイとエヴァンジェリンの死闘（サイ曰く喧嘩）を見ていた侍のような少女である刹那。

彼女にとって、自分が命を賭しても護りたい者が居るのだから殺気に反応するのは当然といえれば当然だが。

「ほう・・・（あの時、冷や汗を掻いたのは偶然ではない様だな）」

三人目は同じく二人の死闘を見ていた凄腕のスナイパーである真名。刹那とは違い、どうやら純粹にサイに興味が湧いたようだ。

さらに、気付いているのか居ないのかサイに興味を持った者もちらほら・・・。

「(ムムム・・・あの身のこなし、かなり出来るアル)」

一発で中国人じゃないかと解るこの少女の名は『古<sup>ク</sup>菲<sup>フエイ</sup>』。

小柄な外見だが麻帆良で開催される“ウルティマホラ”と呼ばれる格闘家No.1を決める大会で何度も優勝している生粋のバトルマニアである。

・・・その性格はサイの戦友の一人と実に合いそうである。

「(ほほう、外見とは違って中々面白そうな御仁でござるな)」

このどう聞いても外人が日本人を勘違いして、アニメか何かで日本語を勉強してしまったかのような昔の侍のような語り口の少女の名は『長瀬<sup>ながせ</sup>楓<sup>かえで</sup>』。

まあその外見は真名と同じくどう見ても中学生には見えないが・・・。

「(ウム？ あの少年・・・フッフ、暫く様子を見てみるネ)」

先に紹介した古菲と同じようなアニメのキャラクターのような中国人を絶対に勘違いしてる喋り方をするこの人物の名は『超<sup>チャオ</sup>鈴音<sup>リンシエン</sup>』  
と言っ。

何故か不思議とそのサイを見る眼には、何か他に思惑があるようにも見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

最後に無表情のままサイを見つめる少女が一人。

感情が一切切表に出ていないので何を考えているのかは解らない。  
この少女の名は『ザジ・レイニーデー』・・・この変わり者の揃う

2-Aの中でも、とりわけ変わり者の一人である。

更に此処からはサイの顔を見て驚いた奴等が何人か。

「つて、サイくん！？ 何で此処に居んのよ!？」

「うん？ ああ、何だ美空か。」

妖怪ジジイに騙されてこのクラスに入る事になっただけだ」

勿論筆頭は美空である。

何故彼女がサイの事を知っているのか知らない者達はしきりに美空に質問を飛ばす。

そして此処でサイが麻帆良にある教会に居候している事が知らされたのだ。

残り後2人、サイの顔を見て驚いた者も居たのだが

「あ、あつうつう・・・そ、それじゃあ、じゅ、授業を・・・。

『キーンコーンカーンコーン』・・・あ・・・終わっちゃった・・・

一生懸命授業をしようとしたネギ。

しかし無常にも授業終了の鐘が鳴り、この一時間はサイへの質問だけで終わってしまったのだった。

勿論、授業が終わったという事で質問をしようとする者達が・・・。

「ね〜ね〜、サイくん!！」

しかしサイは呼ぶ声などなんのその。

「・・・さて、腹減ったな。」

シャークティが持たせてくれた弁当もあるし、どっかで食うか」

「おいサイ、ならば屋上に行くぞ。」

あそこなら邪魔もなく、静かに食べるからな・・・茶々丸、茶を頼むぞ」

「はい、マスター。サイさんもお茶で宜しいですか？」

「あつ、俺はコーヒの微糖を買って来てるから要らねえ」

そんな会話をしながらさつさとクラスから出て行くのであった・・・。

場面は屋上へと移る。

弁当を食べ終わったサイは、コーヒを飲みながら一息吐いていた。

「どうだサイ、お前のお眼鏡に適うような輩は居たか？」

こちらも食事が終わって茶々丸の淹れてくれた茶を飲んでいるエヴァンジェリン。

一口飲み終わった後、不意にそう口を開いた。

「・・・名前が良く解んねえが何人か興味深そうな視線を向けて来た奴が居た。」

その中の一人は殺気まで向けて来てたが、俺にや殺気向けられる理由がねえけどなあ・・・」

その言葉にエヴァンジェリンは大よその見当がつく。  
サイの言う殺気を向けて来た人物とは、愚直なまでに己を棄ててあ  
る人物を守るうとしてしている少女だ。  
他に感じた興味深そうな視線と言うのも、大体がエヴァンジェリン  
が想像しているのと同じだろう。

「参考までに一応聞くが誰だ？  
名前は解らんでも良い、席の場所さえ覚えていれば私が名を覚えて  
いるからな」

「まずは殺気送ってたのが前から二番目のドア側から二人目（刹那）  
。興味深そうな眼で見てたのが確か前から二番目の窓側から二列目（  
楓）に、前から四番目の窓側の最初（真名）。  
後は前から三番目の窓側から三人目（超）に、前から四番目のドア  
側から二番目（古）と・・・ああ、確か前から五番目の窓側の最初  
（ザジ）も居たっけな。  
それと変わった視線を送ってる奴も居たな・・・確か前から四列目  
の窓側から三番目（明日菜）とその隣（木乃香）だ」

淡々と、それで居てスラスラと席順を言うサイ。

しかし特徴を覚える方が楽だと言うのに、良く席の場所などほんの  
少いで覚えられたものだ。

実はサイ、記憶力は良い方なのである・・・ただ、自分の興味のある  
事などにしかその記憶力は発揮しないが。

（つまり名前などは“覚えられない”のではなく、ただ単に“覚え  
ない”だけなのだ）

「成る程なあ・・・恐らくお前に殺気を送っていたのは出席番号1

5番の桜崎刹那だ。

あれでも一応、ジジイの孫のお守ホディガードをしているんだ・・・まあ、殺気を向けた位許してやれ。

一応、その孫娘の親友だという事も昔ジジイから聞いた事もある」

「ああ？ あれでボディガードの心算か？

俺にやあ私情と護衛の板挟みでどっちつかずになってる優柔不断な小娘にしか見えねえが。

それに思慮も視野も狭そうだ、その内につまらねえポカやらかすぞありゃ」

サイの言い様に笑うエヴァンジェリン。

何時の事だろうか、こんなにも自分が笑うようになったのは・・・そんな風にも考えていた。

しかしこの少年の齒に布に着せぬ言い振りは間違っていないだろう。

「ククク・・・まあそう言うな。

さて次だが、興味深い視線を送っていた輩で最初に言った二人は恐らく出席番号18番の龍宮真名と20番の長瀬楓だろう。

その後の三人は出席番号12番の古菲に19番の超鈴音、それと31番のザジ・レイニーデイだ。

ザジ・レイニーデイは別として、残りの連中は武道四天王だか何だかと呼ばれてる実力者でな　まあその内、お前の好きな喧嘩を

吹っかけて来るだろうよ」

「へえ・・・そりゃ良いな。

俺としちゃあ、何時でも何処でも良いから楽しめる事を期待するぜ」

サイも結構なバトルマニアである。

いや・・・彼の場合は元々小競り合いの多かった魂獣界という世界



で産まれて生きていたのだ。  
強い者と戦うのを好むのは当然の事だろう・・・そして戦うという事の意味も危うさも彼は誰よりも良く知っている。  
知っているからこそ、彼は口が悪くも誰かを護れるのだから。

「最後の二人は恐らく出席番号8番の神楽坂明日菜と13番の近衛木乃香だな。

ああ、信じられんかも知れんが一応言っておくと、近衛木乃香がジジイの孫娘だ」

「・・・本当か？」

やれやれ・・・この世界に来て何度も驚いたが、耄碌ジジイの孫娘には一番驚いたな・・・。

てか、どっかから攫かどわかして来て星の技術で洗脳して孫娘だっと思わせ  
てるだけじゃねえの？」

その言葉に更にエヴァンジェリンが笑い転げる。

学園町室で自分の命髪の毛を抜かれて落ち込んでいる学園長が大きなクシヤミをしたのは言うまでもない。

だが・・・何故かは解らないが、もう一人の方の『神楽坂明日菜』には名も知らない筈なのに見覚えがあった。

「・・・あの女、どっかで見た事があるような気がするが。

しかもあんなに大きくなかったような・・・』どうした、サイ？」  
・・・いや、何でもねえ。

（昔どこかで会った事があるのか？ 俺の戻らねえ記憶と関係があるのか？ まあ・・・考えても答えが出ねえなら、無理に思い出す事もねえか）

そう考え事をしながらある程度の情報を聞き終わると、何時の間にか辺りは夕焼け模様に近付いていた……。サイは巨大な柱時計に眼をやって呟く。

「ありや、もう4時かよ。」

「何だか時間が経つのが早えなあ……。さて、と」

足のばねだけで立ち上がり、ズボンの埃を払うサイ。

ある程度の事は理解出来たのでそろそろ帰る心算か、それとも何処かに寄り道していく心算だろう。

「んじゃそろそろ俺は行くわ。」

また明日な、キティに茶々丸……。あつそうだ茶々丸、近い内に可愛い子ちゃん達の飯買って行くからな」

「ふむ、ではまたな……。っと、そうだ。おい、茶々丸」

別れの挨拶の際にふとあの騒がしいクラスの連中に言われた事を思い出したエヴァンジェリン。

サイの血によつて『登校の呪い』は解けたので一々学校に通う必要など無いのだが……。サイが通う事を学園長から聞かされてから、悪くはないと思ひ始めていた。

尚、サイの言う『可愛い子ちゃん』と言うのは、茶々丸が餌をあげている野良猫達の事である。

「はい、畏まりましたマスター。」

サイさん、実は先程聞いた事なのですがクラスで貴方の歓迎会をするそうです。

ですので5時位になったら、2-Aの教室にお越し頂いても宜しいでしょうか？」

するとサイは背を向けたまま手を振りながら言う。

「はいよ、了解。　　そんじゃあ、またな二人とも」

そしてそのまま、麻帆良学園の屋上から下に向かって飛び降りる。普通の人間なら確実に自殺と同じだが、サイにとってはこの程度の事など造作もない事なのだ。サイは近くに生えている木に掴まると器用に滑り降り、そのままどこかへと去って行った……。

さて、再び場面は変わり

屋上から飛び降りてからぶらぶらとそこら辺をうろついていたサイ。するとその眼に、件の子供くだん先生が佇んで溜息を吐いている姿が見えた。

「よう、がきんちよ。

こんな所で何やってんだ、しかもジジ臭く溜息なんぞ吐いて」

「うわあ！？　　って……あ、えっと、サイさん」

いきなり掛けられた声に驚いて飛び上がるネギ。

しかしそこに居たのがサイだと知ると、朝の警戒する態度がまるで嘘のように話しかけてきた。

本来なら興味も持たないだろうが、何故かサイはこの少年をそのまま放って置けない。

……その眼差しが、幼き日に唯一の親友と言っても過言ではなかった少年に似ていたからだ。

「んだよ、そんなに驚く事もねえだろう？  
それにがきんちよが深刻そうな面して溜息なんざ吐いてんじゃねえよ。」

知らねえのか、溜息って奴を吐く度に幸せって奴は逃げてくんだけ？」

そのまま何も言わずに横に勝手に座り込むサイ。

「ほれ、何があつたか知らねえし興味もねえが言ってみろ。」

その歳で悩み溜め込んでたらあつという間に耄碌ジジイみたいにハゲあがつちまうぞ。

人に話す事でスッキリする事だつてあらあな」

昔・・・サイがそれこそ自分の出生に悩む事もなくなった頃に誓つた約束。

それは例え自分に出来る事は微々たる事でも、悩んでいる者がいたら支えになつてやろうと。

それが忌み嫌われていた頃の自分にいつも一緒に居てくれた親友『メルト』と交わした約束だった。

彼の態度に何かを感じたのか、ネギは語り始めた。

「ボク・・・日本に修行の為に来ました。」

だけど、何をやっても失敗ばかりですし、頼りないし・・・本当にこのまま日本で修行しても良いのかなって思ひまして・・・」

まあ本来なら小学生位の年齢の人物に先生をやれなどと度台無理な話なのだ。

この少年、ネギ・スプリングフィールドが日本に学校の先生としてきた理由は・・・まさに言った通り『修行の為』だ。

実は魔法使いとは普通の世界で言う所の“義務教育課程”を七年間魔法学校で過ごした後に卒業式の日に魔法使いの卵として修行する場を用意される。

それはその人物によって様々であり、占い師だの何だのと言った仕事をしながら己の実力と共に心も鍛えていくのだ。

しかし・・・流石に修行とは言え、数えで10歳の酸満9歳いも甘いも苦いも知らないような小僧に『人を育てる』などと言う教員が務まる筈もない。

だが生真面目なネギ先生は、その事で頭を悩ませているのだ・・・。

「一つ聞かせる」

サイのその一言にネギはサイの方を向く・・・するとその目は、実に真剣な10歳の少年に向けるような目ではない。

ネギはその目におびえるが、サイはお構いなく質問を飛ばした。

「お前は先生の仕事が嫌なのか？」

「えっ・・・い、いえ・・・嫌いじゃないです・・・」

か細い声だがそう返すネギ。

するとサイは、いつものふてぶてしそうな目付きに戻ると続きを語る。

「だったら何に迷う事があんだよ？」

「・・・えっ？」

予想外の言葉にネギはもう一度聞き返す。

サイはそんなネギに対してしっかりと目を見て言い始めた。

「え、じゃねえよ。」

自分が今やつてる事が嫌いじゃねえなら何に迷う必要があんだ。人生つてのはなあ、台本通りに行くような簡単なモンじゃねえんだよ。

それこそ何時だつて自問自答だの後悔だのの連続だ、その中から色んな選択を選んで傷ついたり苦しんだりして一歩一歩前に進んで行くんだろつが。

何年、何十年でもその事を繰り返して、その中で自分なりの答えつてモンを見つけてくんだよ・・・それを高々ちつと壁にぶち当たったからつて甘えるんじゃねえよ。

そんな半端な覚悟で教師を続けるんだつたら、最初から辞めちまえ」

その言葉は幼いネギにとつては辛辣な言葉だろう。

だが、ネギは文句も言わずにサイの言葉を聞いている。その言葉に当て嵌まつているが故にだ。

「修行つつのが何の事かは知らねえ。

でもな、自分が少しでも今のこの教師つて仕事が遣り甲斐があるとか楽しいとかつて思うなら弱音吐いてる暇があつたら努力しろ

自分の事を変えようつて努力もしない内から御託抜かすんじゃねえよ」

高々10歳の子供にこれは言い過ぎではないだろうか。

だがサイは口調とは裏腹に、途中からネギを子ども扱いするような事は言っていない。

子ども扱いしないからこそ厳しい事を言っているのだろつ・・・自分が憎まれ者になつたとしても、進むべき先を示してやっているのだ。

そして・・・その事は全部ではないにせよ、ネギの心のどこかに深く響いていた。

「・・・そう、ですね。  
ボク、間違っていました。まだ始まったばかりなのに、それで上手く行くなんで虫が良過ぎますもんね。  
ありがとうございます、サイさん・・・ボク、これから努力して少しでも良くなれるように頑張ります!!」

元気にそう言うネギ。  
先程の悩んでいた姿がまるで嘘のようだ・・・サイの言葉にはやはり、何か人を惹き付けるものがあるのだろう。  
思えばいつものチンピラのような口の悪い態度も、彼が作っているものなのかもしれない。

「おうよ、その意気だがきんちよ」

その時、ふと時計を見るサイ。  
茶々丸に言われた約束の時間まで後10分程の時刻となっていた。

「ありや、意外に話し込んでしまったか。  
さうで、キティや茶々丸の手前、遅れるのも拙いからなあ・・・」

伸びをしたあと、歩き出そうとするサイ。しかし、その目線にある光景が映った。

それは見るからにお約束が起こりそうな、大量の本を手に抱えた少女が急な階段を降りようとしている姿だ。

「ありや確か・・・前から二列目のドア側から三番目に居たガキだな」

「あれは27番の宮崎のどかさん・・・たくさん本を持っていて危

ないなあ」

あまり体力の無い人物なのだろう。

フラフラ、ヨロヨロとしながら階段を降りている……と、まさにその時！！

「あっ……」

階段を一步降りた際に足を滑らせるのどかと言う少女。

この状況では次がどうなるかなど、想像する必要もあるまい。

「きゃあああああああ！！！！」

そのまま階段の高い場所から落ちるのどか。

このまま下に落ちれば、大怪我は免れまい　　急いでネギは一緒に持っていた長い杖を出して……。

「バカ野郎、間に合わん！！」

いや、違う

思いつきり地を蹴ったサイが超スピードでのどかの落ちてくる場所へと回り込んだ。

その踏み込みの強さは、今まで二人が座っていた噴水の下小さな階段に足跡を残して陥没させる程。

どれだけの力で踏み込んだか容易に解るといふものだ……。

「ちっ……痛ってえなあ。

気をつける、このウスノ口女……痛っ、足が折れるかと思っただぜ」

「だ、大丈夫ですかあああ、サイさん！！！！」



杖を片手に急いでサイの近くに走ってくるネギ。思いつきりな踏み込みの所為で足を挫いたらしいが、サイは不敵に笑いながら言う。

「問題ねえよ」

しかし、あれ程の超ダッシュをすれば身体のどこかに支障は出ただらう。

直ぐにネギは掌をサイに向けると、呟き始めた。

「サイさん、ちょっと待って下さい。」

ボク、苦手ですけど今治癒魔法をかけますから・・・ラス・テルマ・スキル マギステル・・・」

「おい、ちょ・・・ま・・・!!」

サイは一応、シャークティやら学園長やらから魔法使いと言う存在が秘匿されていると言う事を聞いていた。

だがネギはそんな事などお構いなく治癒魔法を人前で使ったのだ。サイが治癒魔法によつて光り輝く・・・。

「ふう、これで良しつと・・・大丈夫でしたか、サイさ・・・むぎゆ!？」

治癒を終わらせて一息吐いたネギはサイの安否を確認しようとする。だがその瞬間、サイに両方の頬を摘まれて引つ張られた。

「おいコラ小僧、今のは“魔法”って奴だろ？」

駄目だろうが、魔法は人前じゃ使っちゃ拙いんだろ・・・良く考えて行動しろ馬鹿野郎!!」

「ひ、ひたひ、ひたひ!!　ら、らひひよふふれふよはひはん!!  
ら、られもみてなはった……。」

(訳: い、痛い、痛い!!　だ、大丈夫ですよサイさん!!　誰も  
見てなかった……)」

頬を引つ張られながら反論するネギ。

どうやらネギはサイが魔法使いに関連する方の人物だと思っている  
ようだ。

しかし……運の悪い事に、ある人物のこの状況を見られてしまっ  
ていた……。

「あ……あなた……?」

そ、それに転入生も……あなた達今……何を……?」

そこに居たのは

2-Aの、サイにとっては何故か見覚えのある、ネギにとっては今  
居候している場所に住んでいる少女。

神楽坂　明日菜その人であった

## 第七話：騒がしき日々の始まり（後書き）

新話の投稿完了しました。

一応この作品は“ハーレムコメディ”と銘打ってますので、こつ  
言った展開になります^^

ですが・・・ハーレムといっても厳密には違う感じになりそうです  
けどね。

では、次回をどうぞお楽しみに^^

## 第八話：己の本分（前書き）

初めて麻帆良学園の中等部の生徒になった日。

魔法の存在は一般人の中学生の少女にはばれてしまう……。

さて……いかにしてこの難局を乗り切るのか？

## 第八話：己の本分

「・・・おいおい、今日は何だ？　もしかして厄日か、オイ」

そうサイが言いたくなるのも無理はない。

宇宙人ジジイに女ばかりのクラスに入れられ、余計な事を彼あれこれ是詮索され、偶にまともな事をやれば足を痛めて・・・最後には自分には関係ないのに思慮の浅い小僧によって何も知らない奴に情報がばれる。

「あ、あうあうあうあう・・・」

実際正体のばれた子供先生はアシカかオットセイの鳴き声のようなものを口から延々と呟き続けている。

余程、正体がばれたくなかったのだろう・・・ならば、人前で考えもせずに行動しなければ良いと思うのだが。

まあ、高々10歳の少年にサイのように自分の行動が自分に対してどのようなリスクを被るうとも迷わずに行動するなどと言う事が出来る訳があるまい。

・・・そもそもサイの場合は別にばれた所で『関係ねえ』で終わらせるだろうが。

「う・・・あ、あれ・・・私・・・」

と、そこでサイに助けられて気絶していた少女、のどかが目を覚ます。

どつやら落ちたときのショックで混乱しているようだが・・・。

「気をつける、ウスノ口女。」

「つつか、一人で運べねえなら誰かに頼め……自殺志願や自傷癖がねえならな」

「あ……あなたは……転入生の……」

「のどかは続きを何か言おうとしたが、その前に明日菜がネギと彼の杖を掴んで林の方へと走り去る。

こちらに向けていた目線の意味は『アンタも来なさい!!』と言った感じだろう。

サイは一つ、溜息を吐くとのどかに顔を向ける。

「オイ、もう大丈夫か？」

「え……は、はい……大丈夫です」

するとサイはのどかから手を離れた。

更にそのまま散らばっている本を集めると、自分の服の袖を千切って紐状に紙縫こよつてから本を包むように縛る。

「ほれ、これで持って行き易いだよ。」

「何処に持ってくんだけ知らねえが、とつとと持ってけ」

「え……で、でも……服が……」

「要はサイは自分の上着の袖で本を束ねてやったのだ。」

「……意外にコイツ、悪ぶってるがお気遣いの紳士なのだろう。」

「のどかは袖が破れてしまった事を言うが、サイは背を向けて手を振りながら答える。」

「ああ？ 問題ねえよ……こんなモン、帰って縫えば良いだけの

事だ。

ホレ、良いからさっさと行けよ。今度は鈍臭くこけるんじゃないぞ、それと先に言っとくが礼なんざ必要ねえ 別に礼される程の事なんざしてねえしな」

そう言い終わるとサイはのどかを其処に置いてネギと明日菜の向かった林の方に歩き出した……。

「あああ、アンタやっぱり超能力者だったのね~~~~~!!!!!!」

林の中では明日菜が大声を出して怒鳴っている。

彼女が此処まで怒っている事にはあるナイル川よりも深い理由がある。

実は彼女、サイとエヴァンジェリンが夜の決闘<sup>デュエル</sup>の準備をしている頃。丁度、麻帆良の朝の登校ラッシュの時にネギと初めて会っている。しかもその際、面と向かっていきなり『貴方失恋の相が出てますよ』などと言う失礼千万な事を言われたのだ。

思えば明日菜の厄日はその邂逅から始まったと言っても過言ではない。

自分が恋している担任の先生は変えられる、公衆の面前で脱がされる、その姿を恋している先生に見られるだの散々だ。

極めつけは、住む場所がないからと学園長によって強引に寮の自分の部屋にネギを住まさせられた。

……これを子供嫌いの彼女にとっては厄日と言わずになんと言う？

そんなこんなで何とかネギを追い出そうと考えていた明日菜。しかし、ネギは所謂優等生タイプの人物なので追い出す為の理由がない。

だが・・・2日間の教師としての行動の中でおかしな事が一度あった。

それは最初の日。

サイの場合は先に読んでいた為に引つかからなかったが、ネギはトラップに気付かず2-Aの洗礼を受ける。

その際に、一番最初の黒板消しが落ちてくるトラップでネギはほぼ反射的に無意識に魔法を使ってしまい、黒板消しが落ちてくるのを空中で止めてしまったのだ。

その行動を怪しいと思った明日菜は何気なくネギを見張り続け・・・今日、遂に決定的な場面を見てしまったのである。

・・・まあ、まさか転入生もそうだとは思わなかったようだが。

「さあ白状なさい、超能力者なのね!!?」

誤魔化したってダメよ!! 目撃したわよ、現行犯よ!!」

「あうう~~~~!! ぼ、ボクは魔法使いで・・・」

「どっちだって同じよ~~~~!!!!」

・・・実に近所迷惑である。まあ近くに住んでいる者も居ないのだが。

そして更にエスカレーターしていく明日菜に涙目で慌てるネギ。

「あつ・・・と言う事は二日前の朝!!」

あれもやっぱりアンタの仕業ね、このエロガキが!! よくも、よ



おおくううもおお〜〜！！！！」

「う、ゴメンなさい！！」

他の人には内緒にして下さい、バレるとボク大変な事に〜〜！！」

「んなの知らないわよ！！」

確かにネギにとっては自分が魔法使いだとバレれば大変な事となる。実は魔法使い達は前にもどこかで書いたかも知れないが一般人には秘密にしなければならぬ。

その理由は詳しい事は解らないが、なんらか魔法使い達にとっては不利益な事となるのだろう。

ちなみに魔法使いだというのが一般人にバレると酷い時には「オコジヨ」にされる。

英雄ナギ・スプリングフィールドの子であり、父と同じく立派な魔法使ル・マキいを目指しているネギにとって、今回汚点がついてしまえば強制送還されて失敗の烙印を押されてしまう事となる。

・・・それだけはなんとしても、そして己の目的の為に也此処で帰らされる訳には行かない。

「うつつ、仕方ないですね・・・。

秘密を知られたからには記憶を消させて頂きます！！

あ、ちよつとパーになるかもしれませんけど許してくださいね」

ネギが小さな声で呪文を唱えると途端に彼の気配が変わる。

「え、ちよ、ちよつと待って!？」

ぎゃ〜〜！！ ちよつと待って、パーって何いいいい!？」

ネギの持つ杖が光りだした所を見ると、もう準備は万端と言う事だろう。

一方、記憶を消されるとちょっとパーになるかもなどと言われた明日菜にとってはたまったものではない。  
急いで逃げようとしても、余りの事に足が動かない。

そして、ネギが杖を明日菜へと向けた！！

「消え……」「止めんか、バカたれ」……ふぎゆ！？

魔法が放たれる瞬間、ネギの頭の上に拳骨が落とされた。

勿論落したのは口調で誰だかは自ずと理解出来るだろうが、一応説明すると後から来たサイがネギの頭に拳骨を落としていたのだ。

「ふぎゆ……な、何するんですかサイさん！！！」

「何するんですかじゃねえよ、バカ。

「テメエこそ何してんだアホガキ。ちょっとパーになるかもって何だ、ちよつとパーになるかもって。」

半端なモンや半端な事してなんかあったらどう責任取る心算だ、このオタンコナス」

「ふ、ふぎゆうううう……痛い、痛いですってサイさ……ん！！！」

両の手の拳骨でこめかみ辺りをぐりぐりされて泣くネギ。

更にサイは呆気にと取られていた明日菜に向かっても言葉を飛ばす。

「テメエもテメエだ、バカ女。」

この思慮の浅いガキに何をされたか知らねえし、俺にとっちゃどうでも良い事だ。

だがなあ・・・下らねえ事で一々ピーチクパーチク騒いでんじゃねえよ、聞かされる方が迷惑だっつうんだよ」

「な、なななな、何がバカ女よ!? 私にはちゃんと名前が・・・

」

サイの物言いに憤りをあらわにする明日菜。

しかし・・・サイは極めて冷静に、まるで明日菜の怒りを納めるかのように淡々と返した。

「バカにバカと言って何が間違ってる?

。 テメエもこの思慮の浅いアホ小僧と同じで何にも考えてねえな・・・

良いか、良く聞け。 さっきの言い振りはこの坊主の弱みを握って何かしようとしてたみてえだけだな、実際にはテメエが“見た”っただけで、他に何の証拠もねえ。

そんな状況で騒いだ所で冗談か頭がおかしくなったかって位にしか思われねえぞ?

まあ、写真でも取ってたってんなら話は別だけどよ」

「・・・あっ」

前に脱がされたり、失恋の相が出ているなどと無礼な事を言われていた為に頭にきていた明日菜。

だが、冷静になって考えてみれば・・・目の前で見たものでもない、証拠もないような事を誰が信じてくれると言っのたろうか。

確かにそんな事を言った所で誇大妄想だの何だのと言われてしまうのが関の山だ。

「それを証拠もねえ、見たただけだったのを嬉々として喜んでガキを追い込んだ拳句、ガキに逆切れされて記憶を消されそうになる・・・そんな何も考えてねえ奴をバカって言葉以外で形容出来るってんなら俺が教えて欲しいくらいだぜ。」

何か反論があるかよ、バカ女？」

「うっ・・・ああ、もう！！」

ないわよ、確かに私は何にも考えてなかったバカですよ！！ でも、元はそのガキが・・・」

更に何かを言おうとする明日菜だったが・・・。  
サイの目を見た瞬間、言葉を止めてまじまじとその顔を見入る。  
一方の見られている方のサイは居心地が悪そうだが、何も言わずに自分をじろじろ見てくる明日菜に言葉を飛ばした。

「・・・何だ、俺の面に何か付いてるか」

そう言われるとはっとして正気に戻る明日菜。  
心なしかその顔は紅くなっているようにも見えるが・・・その意図は解らない。

「う、ううん・・・な、何でもないわよ！！」

てかあれ・・・ああ！？ そうだ、今からアンタ達の歓迎会をやるから買出しに来たの忘れてた！！

ちよ、ちよっと、今は時間何時よ！？」

そう言われたサイはシャークテイ達が麻帆良に住む事になった記念にくれた時計を出す。

「・・・5時20分48秒だな。  
確かキティや茶々丸に聞いた話では、5時から歓迎会だったような  
気がするが？」

「げっ、20分も過ぎてるじゃないの!? 拙いわね・・・あなた  
達、走るわよ!!!」

そう言うといきなり走り出す明日菜。

サイがその後ろ姿を見てみると、あっという間に見えなくなる。

そんな彼女を見ながらサイは誰に聞かれるでなく自然に小さな声で  
漏らした・・・。

「全く・・・騒がしい女だな。

“昔の小さい頃の方がどれだけ静かだった事か”解らんな・・・。

ん？ 昔・・・だと？ 何を言っているんだ、俺は・・・？」

不意に出た一言に首をかしげるサイ。

完全には戻っていない記憶の隅から彼女に会った事があるかどうか  
を考えるが・・・思い出せない。

「ふにゆううう、サイさくん!!! いい加減に離してください  
いいい!!!」

「何やってんのよアンタ達!!! 早く来なさいよおおおお!!!」

ふと、そんな言葉で我に返る。

良く考えてみれば明日菜との会話の始まりから今に至るまで、ネギ  
を解放してやって居ない。

気付いたサイはネギを放してやった。



「おや・・・良いのか？ 小娘共にちやほやされなくても」

そうサイの横から声をかけて来るのは同じく端のサイの隣の席に座っていたエヴァンジェリン。

さらにコップには誰かがサイの飲んでいたアイスコーヒーを注いでくれている・・・茶々丸だ。

基本的にエヴァンジェリンも騒がしいのはあまり好きではない、茶々丸の場合はエヴァに付き合っている。

派手に騒いでいる連中とは違い、此方の雰囲気はまるで“大人の世界”のようだ。

「五月蠅えのは嫌いだ。」

それにガキはガキと一緒に騒いでる方が丁度良いさ・・・俺にはどうも合わねえ」

スピリッツ・バースト

魂獣解放をしてから解った事。

それは自分が純粋な人間でも魂獣でもないと言う事と 自分は少なくとも、外見通りの年齢ではないと言う事だ。

そんな外見と精神年齢の違いがサイをこうやって少女達や子供先生の輪に入らない理由なのだろう。

同じような理由を持つエヴァンジェリンにもそれは何となく察していた。

だからこそ彼女も喧騒から離れ、サシでサイと飲んでいるのだ・・・まあトマトジュースを、だが。

そんな離れた所に居る三人に近付く者が何人が居た。

「あの・・・」

「それにしてもキティ、中学校とはこう言うものか？ 確か学校と

は多くの事を学ぶ場所だろうか？  
それにしちゃあ随分と普通の一般人の堅気に見えねえ奴等が此処には多すぎるぞ」

小さいか細い声で話しかけるその人物。  
だがサイはまさか自分に話しかけに態々来る者が居るとも思わず、エヴァンジェリンと話をしていた。

「その・・・」

「まあ、言いたい事は解る。この学校が・・・いや、このクラスが特別なだけだ」

またか細く声をかけるが気付かない。

本人達は無視している訳ではない 余りにも存在感が薄いから気付かないのだ。

「すみません・・・」

「・・・このクラスには私やマスター以外にも“それなり”の方が多いのです」

またまたか細く声をかけるが聞いていない。

本当に存在感の薄い少女のようだ・・・まあサイ達が話に夢中になつてると、周りが騒がしい事も関係なくは無いのだが・・・。  
そんな少女に救いの手が差し伸べられた

「やあサイ君にエヴァに茶々丸君。 良いのかいサイ君？ こんな所で主賓が油を売ってて？」

「あん？ 何だヒゲメガネか・・・良いんだよ、俺ああ言うのは向かねえし」



「何だ態々貴様も来たのか？ 貴様はその坊やの相手でもしてれば良いだろうが」

「お疲れ様です、高畑先生」

何気に悪口スレスレの呼び方をするサイ、別にどうでも良いかのようなエヴァンジェリン、社交辞令に返すだけの茶々丸・・・この三人は誰が相手でも態度は変わらないようである。

しかし、タカミチが前から来たお陰でサイは目の前でか細い声で話しかけていた人物に気が付く。

「ん？ 何だ、さっきのウスノ口女じゃねえか。 なんか俺に用か？」

「はい・・・やっと気付いて貰えました。

あの その・・・サイ、さん・・・でしたよね？ あの

・・・さっきはその

危ない所を助けていただいて、その・・・あ、ありがとう、  
ございました・・・」

男性と喋るのに慣れていないのだろう。

大分小さな声でドモリながら喋るのは、先程サイが危ない所を助けたのどかだった。

「だから言つたら、礼なんか要らねえよ。

俺はただ勝手にやっただけ・・・礼を言われる程の事もしてねえ」

相も変わらずに素っ気無いサイ。

まあ彼にとって、あの程度の事は“助けた内にも入らない”のだ。

これは謙遜でも何でもなく、本人が“その程度の事は普通だ”と思  
って居るのだろう。

「それでも・・・わ、私は・・・助けられましたから  
・・・」

あの、私　　み、宮崎、のどか・・・って、い、言います・・・  
今度からは、な、なま　　名前、で・・・」

「ああ、はいよ宮崎な。　　そんじゃあ、宜しくな宮崎」

呼び方は名字だったがそれでも嬉しかったのだろう。  
のどかはちょこんと頭を下げて輪の方へと戻っていった

「しかし・・・君のその性格は昔からなのかい？」

サイ、エヴァ、茶々丸の三人とネギ達の方を見ながら呟くタカミチ。

「さあな、何しろ昔の記憶がねえんだ・・・昔の事なんざ解らねえ  
よ」

「ああ、そうだったね　　変な事聞いて済まない」

詫びるタカミチにサイは『気にすんな』とでも言うかの様に首を横  
に振る。  
其処から2〜3話をした後、タカミチはネギの方へと向かっていっ  
た。

すると今度のはのどかとは違う別の人物が近付いてきた。

「ああ、やっぱりや

さっき見た時、どっかで見た事ある人やと思うたんやけど」

気さくに話しかけてくるその少女をサイは見た事がない。  
まあ実際は見た事はあるのだが、ほんの少しの間だった為と殆どの  
記憶がなかった為に忘れていた。

「あ？ 今度は誰かと思えば妖怪ジジイの孫娘だっけか？  
えっと名前は確か・・・『きのこ』だっけ？」

「うーん、惜しいえ。」

名前は近衛木乃香このえこのかや、宜しゅうな」

名前間違えられたのに怒りもせず笑いながら名乗る。

全く以って、この朗らかで優しげな少女がUMAジジイの血縁とは  
どうしても思えない。未確認生物

何処でどうDNAが変質すれば、あのような老人からこのような可  
憐な少女が孫として生まれると言うのか。

「・・・全く以って生命の不思議と言う奴だな」

不思議とそんな言葉が口から漏れていた。

・・・本っ当に無礼千万な少年である。（まあ中身は何歳だかは知  
らないが）

「それにな、ウチ、ちょっと前にもサイくんに出ったんで？  
ほら、あの前の前の満月の夜の日に桜通りで会ったやんか」

「・・・前の前の満月の夜？」

（ああ、確かキティと茶々丸と最初にやり合った日か・・・そう言  
えば、こんな娘に出った気がするな）

おお、そう言えば会ったよう・・・良く覚えてねえけど」

おぼろげな記憶を辿り、そう言えばこのかのような少女に会った事を思い出すサイ。

まああの時は勝手も解ってなかったし、助けを求められたから何も考えもせずに飛び込んで少々痛い目を見たが。

そんなサイに会った事を思い出してくれたのが嬉しかったのかこのかは更に微笑みながら言葉を続けた。

「あの日、アスナ無事だったからウチとの約束護ってくれたんやろ？あの時言えなかったから今言わせて貰うえ、本当にありがとうな」

「別に必要ねえよ、礼なんぞ。

俺はただ、自分に出来る最低限の事をして結果的に助けた奴に傷一つなかったってだけの話だ。

「……って、あれ？アスナって……あの娘、お前の知り合いだったのか？」

「……何の話だ、サイ？」

そこでサイは覚えてる限りの説明をエヴァにする。

最初に会った日に友人を助けてと頼まれた事、それが明日菜だったと言う事など伏せるべき部分は伏せてだ。

それで納得したらしいエヴァは、茶々丸から新たなトマトジュースを注いでもらって美味そうに飲んでいた。

「サイくん、これからクラスメイトやな、仲良うしてや、約束やで」

「はいよ、解った。じゃあ宜しくな近衛」

だが、何故かそう呼ぶと不満そうな表情をするのか。

「なんや他人行儀やな。」

サイくん、ウチは名前で呼んでるんやから、サイくんもウチの事名前前で呼んでええよ。」

「いや、しかしな近え……この・か・やろ、サイくん」……  
・解ったよ、このかで良いんだな？」

名で呼ばれると嬉しそうにするのか。

そこで明日菜やもう一人の『委員長』とか呼ばれていた少女が乱闘を始めた為、このかは二人を止めに向かった。

「……ふう、ヤレヤレ。」

本当に個性的な連中が揃ってる場所だな、此处はよ。」

「まあ、お前もその内の一人だがな、サイ」

賑やかに、騒がしく……まるでお祭り騒ぎのようなこのクラス。

サイはこれからの先に一抹の不安を抱きながら、それでも退屈しないで済みそうだななどと考えてアイスコーヒーを再び呷る。

そんな彼に鋭い視線を向ける人物がいる事に気付きながら、今だけはこのバカ騒ぎに身を委ねて。

## 第八話：己の本分（後書き）

投稿完了です。

暫くは短い、バトルも少ない物語が多くなりますがご了承を。

日常の風景やら、バトル以外の部分も書きたいと思っていましたので^^^

では、次回をお楽しみに^^

## 第九話：人と怪物の境界線（前書き）

オリジナルストーリーを此処で一つ。

文章の才能が無い所はどうか、広い心でお許しを。

## 第九話：人と怪物の境界線

「……で？ 今日は何の用だ、ミュータントジジイ」

「何故か会う度にお主のわしに対する評価が落ちとる気がするんじやが」

サイが中等部に編入した次の日の朝。

本来ならば休みの日の為に教会でのシャークティの手伝いが終わったら爆睡している時間。

麻帆良学園の学園長に呼び出されたサイは、目付きだけで人が殺せる程に機嫌が悪かった。

「……ちなみに彼は麻帆良の搜索と昼寝（もしくは二度寝）を趣味としているので、どれだけ機嫌が悪いかなと言わずとも理解出来るだろう。」

「人が朝の手伝いを終わらせて寝てたのに、その安眠の時間を邪魔されて評価を落とさない奴が居ると思うか？」

「……んな余計な事はどうでも良い、だから何の用事だジジイ？」

「休みの日に何もせんと寝るて……お主、本当に枯れとるのう。」

ああああ、冗談じゃよ冗談。　そう龍族でも裸足で逃げ出しそんな殺気の目を向けて欲しいんじゃないが。

わし一応これでも80、90は超えてるでな、心臓に悪くていかわい」

そんな事を飄々とした態度で言う学園長。

サイに言ったらブチ切れるかもしれないが、意外に学園長とサイは似たもの同士かもしれない。



彼は基本、その年齢の為か表だって動く事は少ないが・・・その結果は良かれ悪かれ自らが全て責任を負うと言うスタンスでいる。

「実はのう・・・最近、この麻帆良におかしな怪物達が頻繁に現れておるのじゃよ。」

多分、シスターシャークティに聞いたかも知れんが、此処でおさらいとして改めてもう一度この麻帆良の事を説明しよう・・・良いかね?」

今迄の態度はナリを潜め、黙って頷くサイ。

彼も冗談を言っても良い時と悪い時の区別はついている。

そんな心境を察している学園長もサイの目を見ると語り始めた・・・。

「え、この麻帆良はかつて魔法使いによって設立され、世界最大級の世界樹を中心に町並みや学校が創られておる。」

わしやシスターシャークティにタカミチくんなど魔法先生や魔法生徒といった多くの魔法使いが教師や生徒として在籍しており、この学園で修行や治安維持といった事に従事しておる・・・此処までは理解しておるかの?」

頷くサイを見て学園長は説明を続ける。

「うむ・・・では次に移ろう。」

この学園都市は元々、古代文献やら魔道書やらオーバーテクノロジーやらがわんさか在ったの。

それを狙う者達が秘密裏に学園都市を護るようにして張ってある境界を抜けて進入し、悪さをしようとするのじゃ。

それを見つけ、同じく秘密裏に処理するのがわし達“魔法使い”の仕事じゃ・・・」

一度言葉を切る学園長。

湯飲みの茶を飲んでから、最近になって起こっている事を説明し始める。

「本来、進入するのは魔法使いの使い魔や式神といった者が多いのじゃが

実は最近、結界を通り抜ける事なく現れる者達が増え始めたのじゃ・  
・何処から現れるかも、目的も不明でう。

しかも倒しても倒しても数は一向に減らんのじゃよ・・まあ、何か目的がある訳では無い様なのじゃが」

其処まで言い終わると目つきが鋭くなる学園長。

サイの目の前にその正体不明の者達の姿を撮った写真を置く。

「そこでわしは一つの仮定を立てた。

お主は確か、魂獣<sup>スピリッツ</sup>なる存在であったのう？ そのお主が何らかの理由でこちらに来た際にお主の世界の者達も此方に侵入してしまったのではないか、とな。

まあ勿論、お主が侵入させているのではないと言う事もわしは理解しておる心算じゃ・・出会ってそんなに長くはないが、エヴァのお主に対する態度やお主の目を見れば虚偽かどうかは理解出来るわ  
い」

其処まで話を聞いた後、サイは学園長が言おうとしている事を理解した。

そして何故、サイのみを学園長室に呼んだのかもだ。

「成る程・・・要はそいつ等の始末を俺に任せたいって事か？」

そう・・・サイの言う通り、学園長は彼にその正体不明の者達の排除を頼みたかったのだ。

理由は二つあり、まず一つは何処から進入してくるか解らない者達をサイなら認識出来ると思ったから。

そしてもう一つの理由は・・・事情を知らない者達とその者達とサイを関連させて勝手に暴走するのを抑える為だ。

学園長がサイの言葉に静かに頷くと、サイは静かに答えを返した。

「まあ・・・良いぜ。

元々正体隠して住まして貰ってんのに何もしねえってのは性に合わねえ。

それに・・・そいつ等と戦ってりゃ、戻らねえ記憶を取り戻す切欠になるかも知れねえしよ。

ただ先に言つとくぜ、俺は勝手にやらせてもらう　命令は受けねえと言う事だけは忘れんな」

「フオッフオッフオッフオッフオ・・・解っておるよ」

学園長の答えを聞いたサイは目の前に出された写真を手に取る。

そして一度標的を確認すると、上着の内ポケットにしまってから学園長室を出て行った・・・。

その写真は三枚ありそれぞれに違う者が撮られている。

一枚目はハーピーのような怪物、二枚目はオークのような怪物、そして三枚目は魚に手足が生えたような怪物が写っていた・・・。

「チツ・・・しかし案外魔法使いなんてのも大した事ねえな」

その日の内に三匹の怪物を始末し終えたサイ。  
本来驚くべき事なのだが、これはサイにとってはまさに“赤子の手を捻る”様なものだ。  
記憶はないとは言え、戦い方や対処法などは脳裏の何処かに刻まれている。

元々、学園の魔法使い達が苦労した怪物達はサイにとっては勝手知ったる存在だ。

彼らは此処の力が弱い為、増殖したり擬態する事で獲物を取ろうとする・・・つまり虫やら軟体生物などとなんら変わらない。

増殖すると言うならば、増殖するもの丸ごと消し去ってしまうればそれで事足りるのだ。

惜しむらくは結界の中の麻帆良は、あまり巨大な力が使えないというのが魔法使い達にとっての欠点だろう。

「しかし・・・昼間の騒がしさがまるで嘘みてえだな」

夜の帳に包まれている麻帆良は美しい夜景が漆黒に包まれる世界を彩る。

そう言ったものに興味のないサイも、正直に美しいと感じられる光景には違いない。

空にも満点の星が煌き、輝き・・・まるで宝石のようだ。

しかし・・・少しの間、ぼーっと町の夜景を見ていたサイは、不意に不機嫌そうな表情になる。

サイが見ていても美しいと感じるこの光景、それを眺めている後ろから不躰な殺気が向けられていた。

その方向を見るまでもなく、不機嫌そうに彼は躰のなっていない闖入者に向かって言葉を飛ばす。

「オイ、テメエ・・・さつきから不快だ。  
何の用事かは大体理解出来るが、用事があるんだつたらとつと面  
を見せる」

光に彩られる夜景とは相反する漆黒の闇に包まれる林。

その中からサイに殺気を送っていた人物が出て来た・・・それは長  
刀を携えて口を真一文字に閉じる少女。

そう・・・さくらさきせつな桜崎刹那であった。

「テメエは確か・・・」

刹那の名を思い出そうとするサイだが、その前に彼女が口を開いた。

「光明司サイ・・・だったな。

貴様がこの学園に、いや麻帆良に来た動機は一体なんだ」

真正面から殺気をぶつけてくる刹那。

余程腕に自信があるのだろうか？ いや・・・それとも他に策でも  
あるのか？

そんな物言いをする刹那に、サイは再び背を向けると言う。

「あん？ テメエに語る理由が何処にある？

知りたきゃクソジジイにでも聞けよ、孫娘の知り合いなんだからそ  
の位出来るだろうが」

言い終わるや否や、後ろで小さく音がする。

どうやらその音は刹那が背負っていた長刀を抜いた音のようだ・・・

ゆっくりと切っ先をサイに向けると、再び口を開く。

「貴様には不審な点が多過ぎる。事と次第によつては貴様を今此処で斬る・・・お嬢様を護る為に！」

そう、刹那はサイを斬りに来たのだ。

あの日、エヴァンジェリンとの戦いを見た際に刹那はサイの事をかなりの達人だと見抜いた。

彼女の目的は木乃香の護衛であり、彼女に仇なそうとする者を放つてはおけないのである。

そんな刹那を見て溜息を吐くサイ。

エヴァンジェリンとの共に昼飯を食べていた時に感じた事が、まさか見事に当たるとは彼も思つて居なかつたのだ。

「オイ、テメエ・・・要はお嬢様つて事はこのかの為に俺を殺すつて事か？」

「!!!? 貴様!!! お嬢様の名を軽々しく口に出すな!!!」

自分の敬愛し、最も大事な親友の名を得体の知れない人物が呼ぶ事に怒気を顕にする刹那。

だが逆にサイは冷静に・・・見ようによつては“冷酷”な目で刹那を見つめている。

その理由は、その刹那の態度にあった。

「チツ・・・何だ、骨のある奴かと思つたら中途半端な女だな」

「何っ!?!」

武器も抜かず、刀の切っ先を向けられたままのサイ。

しかし、その態度は全く変わらず・・・寧ろ、刹那の事を見てがっ

かりしているように見えた。

「テメエはこのかの護衛だろ？」

その癖に中途半端に私情を優先させるようなガキに俺が斬れるのか？  
だったら斬りたけりゃ好きに斬れよ、俺は別に武器も抜かねえし抵抗もしねえからよ」

サイは刹那の方を見ようともしない。

背を向けたまま無防備に立っているだけだ・・・その事に刹那は困惑する。

「な、何だと貴様!？」

私が無抵抗の者を斬る事が出来ないとも思っているのか!？」

ふん、ならば生憎だが私はお嬢様の為なら、この手を汚す事など厭わんぞ・・・!!」

何故だろうか？

心なしか刹那の聲がほんの一瞬だけ震えたような気がする。

しかしジリジリとすり足でサイの近くに向かっている所を見れば、  
そんな震えるなどと言う事が・・・。

「フン、生意気な事抜かすんじゃないやねえよガキ。

“人も斬った事もねえお座敷剣術”で、俺を斬れるならさっさと斬ってみると言ってるんだ」

「・・・!!？」

その言葉に一瞬顔が青くなる刹那。

そんな青くなってる刹那に対して、サイは興味も持たずに言葉を続ける。

「テメエの構えは“人を斬って来た奴”のモンじゃねえ。大方斬った所でなんも感じねえような連中を斬って来た奴・・・要は実戦向けじゃねえ事位、その足運びで理解出来る。だから言ってるんだ、斬りたきゃ斬ってみるとな」

不意にサイに向けた切っ先が震え始める刹那。

・・・確かに彼女は結界内に侵入してきた式神やら使い魔やらを斬った事はある。

しかしそれらは言うなれば仮初の存在であり、斬った所で良心の呵責すらも湧かないような存在だった。

だが、彼女の目の前に居るのは間違いなく命を持つ存在。

そんな存在を斬り捨てる覚悟など、今の彼女にはまだ出来る筈がない。

本来ならば殺気をぶつけ、刀を構えるだけで逃げてしまう者の方が多と言う事実も、彼女を強く見せていた理由の一つだ。

「テメエみてえなガキに解る訳がねえ」

いつの間にかサイが刹那の方を振り返っていた。

その表情は憤りと悲しみのようなものを浮かべているように見える。得も知れぬその威圧感のようなものに、刹那はほんの少しだけ後ろに下がった・・・。

「人を斬るってのはなあ・・・何よりも重い事だ。

自分の勝手で今まで何年、何十年と生きてきた存在の明日を奪うと言う事なんだからな。

そんな重みを、テメエ如きの・・・『護衛』と『情』の板挟みで中途半端な態度とってやがる小娘如きが解る訳がねえだろうが。



「・・・俺を舐めんのと、覚悟って奴を甘く見てんのも大概にしゃがれ」

ほんの少しの殺気を含ませ、ただ一步步近づくサイ。

それにまるで釣られる様に小刻みに震えながら下がる刹那。

先程まで感じていた感情は、その逆の感情に変わり始めていたのだ。

「あ・・・ああ・・・あ・・・」

それは恐怖と言う名の人の感情。

見てしまった、そして気付いてしまった・・・サイの目が、その気配が、その語り口が、サイが自分とは違い、人の命を奪った事があるという事に。

「チツ・・・下らねえ。」

人斬る覚悟も、自分が殺される覚悟もねえようなガキが粹がるんじやねえよ。

俺に殺気飛ばすなら、もうちつとテメエ自身見つめ直してから来いや」

視線を外し、背を向けると途端に刹那の全身の力が抜ける。

まるで糸の切れた人形のようにその場所に座り込むと・・・全身から冷たい汗が噴出していた。

そんな刹那を横目で見ながら、サイは学園長に秘密裏に頼まれた『もう一つの頼み』を思い出して刹那に語りかける。

「オイ、小娘・・・テメエに一つ、聞きてえ事がある。

何でテメエ、一々このかの奴を避けるような事をしてやがる?」

「き、貴様には・・・貴様には関係のない話だ」

今でも先程、本当の殺気と言うものを向けられていた所為だろう。少々震えながらだが、それでも強い口調で刹那は言葉を返した。

「まあそりゃそうだ、俺には関係ねえ事だな。

だがな、露骨に離れるような事すれば、その方が逆にアイツに辛い思いを……」

「貴様に何が解る!？」

サイが言葉を続けようとしたその時、今まで怯えていた時とは違う怒気を含んだ言葉が放たれる。

その事に少し驚いたサイが黙ると、刹那はまくし立てるように続けた。

「何も知らないような奴が訳知り顔で偉そうに説教の心算か!？」

貴様に私の何が解ると言うんだ!？ 孤独や差別……そんな好奇心や嫌悪の視線の中で生きた事が貴様にあるのか!？

私のような『人外』の苦しみが、貴様のようないい加減な男に解つてなるものか!！」

其処まで語って表情を変える刹那。

つい勢いで言ってしまった……己の『隠し通さなければならぬ秘密』を。

だが今更隠す事も出来まい……。

「……そうか、お前人外なのか。

外見はどう見ても人間にしか見えねえが……そうかよ」

そう言葉を繰り返すサイ。

次に言われる言葉を刹那はサイを睨みながら待っていた。

『バケモノ』だの、『半端者』だの・・・幼い頃に言われ続けてきた罵詈雑言の数は数知れない。

ただ今まで隠し続けて来た、大切な友人である少女にだけは知られたくは無かったが・・・。

しかし、サイの次の言葉は意外なものであった。

それは

「悪かったな、つまらん事を言つて。

確かにテメエの気持ちなんざ、他人の俺が解る筈もねえわ・・・それを訳知り面で余計な事言つちまった」

なんとそれは謝罪だった。

いきなりの言葉に面食らう刹那・・・更にサイは続けた。

「だがな、先に言つとく。

テメエがどんな人生を生きて、どんだけ他人に拒絶されて、どれだけ孤独で今まで来たかは知らねえよ。

しかしだ・・・無くしちまったモンはもう戻らないぞ」

その言葉はどこか寂しげにも悲しげにも聞える。

そんな今迄の雰囲気とは違う雰囲気となったサイは更に静かに呟く。

「それとな・・・テメエみたいなのは護る為に命を平気で粗末にするタイプだ。

それはテメエ自身は自己満足の中で死ぬるから幸せだろうが、生き残った奴に深い傷を残すだけだ。

今の生き方を貫くのもテメエの勝手だが、少なくともこのかに対して今のまま行けば確実に一生忘れられねえ痛みを残す事だけはしつ

かり覚えておけ」

まるで己にそう言っているかのように

どこか悲しげな表情に見えたサイは、その言葉だけ言い終わると背を向けて帰って行った。

最後に残された刹那は、サイの残した言葉に対して一人呟く。

「何故だ・・・何故、あんなに悲しげな目を・・・。

違う、あんな男の言葉など忘れる・・・私はただ、お嬢様を護ればそれで・・・それで・・・」

後の言葉が口から出てこない。

自分は今のままで充分、親友であるこのかを命がけで護ればそれで良いと言い聞かせるように呟く刹那。

しかし、忘れようとすればする程に心の深くまでサイの言葉とあの眼差しが刻み込まれている。

それでも忘れようとし、帰ろうとしたその時

「何をこんな所で悩んでいる、桜崎刹那」

後ろから声をかけてきたのは刹那にとっては予想外の人物であった

「エヴァンジェリン・・・さん？」

後ろを向いた時、そこには宙に浮いているエヴァンジェリンの姿があった。

格好は制服ではなく黒のワンピース・・・いや、そんな事よりも彼

女が話しかけてくるなど珍しい事だ。

「何を惚けた顔をしている？」

偶に夜の散歩に出れば、珍しいものを見れたと思って此処へ来ただけだ・・・別に他意はない。

しかし、いつでも周囲に気を配っている貴様にしては悩みを抱えて私の存在に気付かないなどは実に落ち度だな」

ゆっくりと地に降り立つエヴァンジェリン。

刹那はそんなエヴァンジェリンを見て、どこか今までと違うような感じを覚えた。

今迄の彼女であれば殆どの者に自分から話しかけるような事はしない・・・ただ、興味もなく他人と距離を取っていた筈だ。

吸血鬼という、人から嫌悪され排斥される存在としてエヴァンジェリンが生きてきた事を刹那は学園長やらタカミチから聞かされ・・・どこか彼女の気持ちが解る、そんな風に刹那は思っていた。

だが・・・今のエヴァンジェリンは今までとは違う。

何が違うかと聞かれれば説明に困るが・・・今までのような他人を拒絶するような雰囲気が減ったようにも感じる。

「ふむ、成る程な・・・貴様のその感情の高ぶり、奴の所為か」

ふと、刹那を見ていたエヴァンジェリンがそんな事を言う。

だが刹那は感情の高ぶりや、淡い期待のようなものを考えてしまった自分を律するように鋭い口調で返した。

「違います、“あんな男”は関係ありません!!」

しかし・・・その答えにエヴァンジェリンは意地悪そうな笑みを浮

かべて口を開いた。

「男・・・？ 私は別に性別など言っていない筈だがなあ・・・クク」

『しまった』と言うような表情をして顔を紅くする刹那。

そんな刹那をエヴァンジェリンは一度鼻で笑うと、夜景の方を見ながら呟きだした。

「まあ確かにな、貴様の気持ちは解らんでもない。

アイツは口が悪くてバカで喧嘩っ早くて、それで居て何処となく無駄に自信満々で『悪』と言う言葉の方が良く合いそうな人物だ。

全く以って、何故あんな小僧をジジイは2-Aに編入させたのか理解に苦しむ」

刹那もエヴァンジェリンの言葉に頷く。

後で聞けば学園長以外でサイを麻帆良に置く事を了承したのはシャークテイとタカミチ位。

他の魔法先生や生徒達は正体の解らないサイの事を疑い、中には追いつせといった者も居たらしい。

まあ実際の所、麻帆良で学園長に次ぐ実力者であり表向きはNGO団体、その実は魔法使い達の団体の『悠久の風』で名を轟かせているタカミチと、学園でも指折りの実力者であり神に仕えるシスターシャークテイのお墨付きでは下手に反対も出来なかったのだが。

しかし正体も解らない者をあえて学園に居させようなど、学園長の孫娘である木乃香を命がけて護衛している刹那にとって、全く理解出来ない事だ。

正直、口は悪いが学園長が呆けたのではないかとまで思った程である。

だが・・・エヴァンジェリンは言葉を続ける。

「しかし、奴の言葉は薄っぺらい物ではない。

あれは詳しくは知らんが少なくとも体面を飾って言っている事ではない事位、直に聞いた私が良く解る。

そもそも虚飾をするならばあえて何故あんな辛辣な言い方をする必要がある？

寧ろ優しく、嫌われん様に取り繕うと思うがな」

確かにそれはそうである・・・。

体面を気にするようなら八方美人に誰からも好かれるような態度を取るだろう。

しかしサイの場合は辛辣に、無礼に　　まるで敢えて嫌われようとしているかのようにも見えた。

「私は奴の事は良く解らん。

しかしあれは無礼で己の事のみを考えているのではない、寧ろ誰かの為に優しく在れる人物だ。

それも甘やかすのではなく、自分が憎まれ役になろうとも相手の為になるようにな。

ほんの少しだけ奴と戦って奴の生き方を見て・・・私は真っ直ぐでぶれないサイの生き方を見習おうと思ったさ。

それに・・・いや、此処から先は言う必要などないな」

言おうとした言葉をそのまま飲み込むエヴァンジェリン。

そう、その言葉は刹那が知る必要など無い・・・己自身の心の奥底に存在していればそれで良いのだ。

それに、それこそ負ける心算も無いがライバルが増えられても面倒なのだから。

「・・・話はそれで終わりですか、でしたら失礼します。  
明日は一週間の始まりですし、遅刻や居眠りする訳には行きません  
ので」

刹那は頭を下げ、まるで拒絶するように後ろを向くと歩き出す。  
例えどんな生き方をしようとして、例えあの人物がどういった人物  
であろうと彼女には関係ない。

否・・・そもそも、己と同じだと思っていたエヴァンジェリンがそ  
こまであの男を賞賛している事にも憤りを感じていたのだ。

所詮、自分達はバケモノに過ぎない・・・そんな苦しみを知らない  
人間に、彼あれこれは言われたくも無かった。

・・・その考えが間違いだったと気付くのは、次のエヴァンジェリ  
ンの言葉によつてだったが。

「ああ・・・そうだ、ついでに一つ教えておいてやろう」

『まだ何かあるのか？』・・・そんな風にイライラしながら足を止  
める刹那。

そこでエヴァンジェリンから聞かされたのは、刹那自身が耳を疑う  
話だった

「こちらに来る時に少し大きな声だった所為で聞いた話だが・・・  
貴様はサイに『私の何が解る！？』とか言つて怒鳴っていたな？  
だが少なくとも、サイには貴様の気持ち痛い程理解出来ているぞ・  
・・・あそこで反論はしなかったがな」

「・・・！？ な、何を・・・」

あんな男に、あんな男に私の苦悩が解る訳が・・・」



言葉を続けようとした刹那に被せるようにしてエヴァンジェリンは静かに呟く。

「奴は・・・サイは少なくとも貴様以上に人と妖あやかしの関係が壁を隔てられた世界で、人と妖との間に生まれた合ハーフの子だ。

ジジイに語っているのを横から又聞きしただけだから全ての事は解らんが　しかし、少なくとも“あの姿”を見た事のある私には嘘だとは到底思えんがな」

その瞬間、刹那は言葉を失った。

訳知り面で説教のような事を言っていたのではない・・・サイもまた、己と同じように苦悩の中で生きていたのだと言う事に。

しかしあの男は己の出生には一つも触れず、ただ刹那に謝罪した・・・言い訳やら余計な弁解もせず。

「そんな・・・じゃ、じゃあ・・・じゃあ何故!？」

疑問を飛ばすが誰も答えてくれる者など居ない。

言うべき事を言い終わったエヴァンジェリンは、さっさと帰ってしまったのだろう。

サイの言葉、エヴァンジェリンの説明。

そしてサイの出生の秘密を予想だにもしなかった形で知ってしまった刹那。

誰も居なくなつた道を帰ろうとするも、その胸中にはエヴァンジェリンの言った言葉が深く突き刺さっていたのであった。

## 第九話：人と怪物の境界線（後書き）

サイは口が悪く、冷たいように見えがちです。

ですが、その心の奥底には『誰よりも優しくとも不器用な漢』といった本当の素顔を隠して生きています。

何故このような性格なのかはまたいずれの話で書かせていただきます^^

では次もどうぞよろしく^^

**キャラクター設定（用語解説あり・ネタバレ注意）**

**用語の解らない方はまず**

現時点のキャラクター設定です。

色々追加されたらまた書きますので。

キャラクター設定（用語解説あり・ネタバレ注意）

用語の解らない方はまず生

【本作品主人公キャラクター設定】

名前：光明司 齊こうみやうじ さい

真名：白面九尾はくめんきゅうび

魂鎧装した際の真名：白面武王はくめんぶおう

敵からの呼ばれ名、仇名：白面鬼神はくめんきしん

身長/体重：143cm / 35kg 147cm / 40kg 15

4cm / 47kg（通常時）

191cm / 82kg（魂獣解放時）

血液型：不明（調べた事がない）

年齢：外見年齢14歳 外見年齢16～8歳（実際年齢は700歳以上）

アイカラー：片目赤、片目黒のオッドアイ

（何らかの力により両目とも黒に見えるが、魂獣解放や魂鎧装の際には片目が赤く光る）

ヘアカラー：銀髪（通常時は短髪で魂獣解放時は長髪）

身分：麻帆良学園 中等部 2 - A 出席番号32番（02JHA031）  
麻帆良学園 中等部 3 - A 出席番号32番（03JHA031）  
兼麻帆良広域警備員

趣味：喧嘩、昼寝、二度寝、麻帆良搜索

特技：全長270mの世界樹の天辺から飛び降りても傷一つ負わない身体能力、アーケードの格闘ゲームでの挑戦者千人斬り

好きなもの：自由、シャークティや美空にココネの手料理、油揚げ、ハンバーガー、コーヒー（微糖or無糖）、エヴァ&茶々丸合作の弁当

苦手なもの：人から感謝される事、人から褒められる事（どちらも照れ臭い為）

大切なもの：己の信念、誇り、父の形見である神具、かつての戦友達の遺した魂石

嫌いなもの：束縛、抑制、命令、道理の通らない事、あれこれ詮索される事

得意スポーツ：身体動かす事なら大体なんでも

得意科目：基本、座学（座って勉強する事）は苦手

性格：喧嘩好きで口が悪いが真つ直ぐに生きる性格で冷静に見えるが内で燃える静かな熱血漢だが、それは本人が無意識に作っている物 本当の性格は威厳に満ちながらも優しい性格で何処か償えない罪を背負う咎人のような人物（思い出した過去に関係しているのだろうか、真相は不明）

身体能力：能力は現在で判明しているのが以下の通り

・前記した通り、世界樹の天辺である樹高270mから飛び降りて

も傷一つ負わない程の身体能力

・握力は750kgと驚異的な怪力を持ち電信柱を握り潰せる（尚、一般男性の平均的な数値は50kg程で、物を握れる動物の中で最も力を持つているマウンテンゴリラの平均が450kg）500kgであるので驚異的だというのが良く解る）

・近距離（1m）2m程）で放たれた弾丸の弾道を見切り避けれる  
動体視力

・傷の再生力&自然治癒力（実質、不老不死であるエヴァが驚く程に自然治癒力が高い 更に普通ならば完全に死ぬような出血などをしたとしても一種の“冬眠状態”のようになって傷を回復出来る）  
アビリティキャンセラー  
・能力無効化と呼ばれる、全ての能力やら事象やらを完全に無効化する能力（この力は『魔法無効化』と呼ばれるモノよりも強力だが、普段状態では本来の10分の1に満たない）

アビリティファクト  
神具：七魂剣スサノオ、六道拳アスラ、双魔銃ニユクス、融合神具である神皇轟騎・白帝王

スピリッツバースト ソニックスイープ デュアルアビリティ アビリティキャンセラー ソウルアツプ  
能力：魂獣解放、高速化能力、神具多重能力、能力無効化、魂鎧化、  
バーストアツプ アイムバースト スピリッツフェノメノン  
覚醒鎧装、魂武装解放、魂獣変生、戦友の神具の召還兼使用 e t c .

戦闘流派：火群流剣術、光明司流古武術、光明司流古武術・刹、白面九尾派導術（初歩）

尚、神具を装備しない通常時は光明司流古武術の蹴りのみを主体に戦い、己が本気でやり合えると思った相手には腕を使う

（ちなみに光明司流古武術は元を質すと暗殺拳であり、サイの身体的能力と相俟って普通の輩相手では殺してしまう可能性がある為に普段は腕は防御or神具使用の時にしか使わない・・・それが光明司流古武術・刹である

尚、どちらかを別に使う事も多いが、サイの本格的な戦闘スタイル

は火群流剣術と光明司流古武術の二つを組み合わせ、打撃・投技・剣術を入り交えて戦う独特な我流)

必殺技：それぞれのスタイルによる技は以下の通り

【七魂剣】不動剣・アカラナータ、不動神剣・八幡大菩薩、不動神皇剣(種類は色々在るので割愛)

【六道拳】阿修羅連拳・光流霸撃、阿修羅真拳・アフラマズダ、阿修羅真獄拳(上記に同じく割愛)

【双魔銃】両刃斧形態時：獣霸剛双撃

【素手・暗殺拳】禁百八式・黄泉路凶蛟竜、光明司流古武術 三神義 天照

【融合秘奥義】光明司流 三神義 天照・零式“天叢雲” e t c .

<sup>パートナー</sup>  
戦友：神楽坂明日菜 (白虎族の魂石の欠片を魂と融合)、茶々丸 (詳細は不明)

(ただし、サイとしては魂が復元するまでの便宜上であるので、傷が完全に治れば契約解除をする心算である)

交友関係(ネギま世界)：シャークティ&美空&ココネ(家族のように思っている)

エヴァンジェリン&茶々丸(シャークティ達と同じく、家族のように思う)、ネギ(弟(実際は妹)のように感じている)

明日菜(エヴァとは違った形の喧嘩友達)、ザジ(同じような存在であるので気が合う)

交友関係(神羅世界)：ムジナ、ルーグ、ダレス、カヌキ、ロツク、ミツキ、アガート、メルト、デヒテラ(以上は魂石契約締結者)、ポルト、ユーナ、ギギ、キリク(以上は契約未締結ながら戦友であった者達)

（尚、上記は後に起こった戦いで命を散らし、全員が鬼籍に入っている）

モエギ、アサギ、ライヤ、ハリマ、ヒビキ、ネネコ（以上は魂獣大帝選抜トーナメント）第二次魂獣界大戦の際に交友を育んだ者達  
ちなみにモエギはムジナの妹、アサギはタダカツの娘にしてモエギの護衛、ライヤ以下三人は選抜トーナメントの役員（一応記憶の途切れはあれど記憶通りならば存命）

口癖：『関係ねえよ』『面倒臭え』『知るか』などといった口の悪い言葉

ただしサイにとっては挨拶代わりであり、本心から他人を拒絶する為に言っている訳ではない

しかし自ら嫌われ者になるような言い方をする故に、意図は余り己に係わり合いにならない為の配慮だろう

尊敬する人物：両親、祖父母、家族が鬼籍に入った後に戦い方を教授してくれた恩師達

前魂獣大帝ゼノン、天空審判ザイン、聖異大將軍イエヤス、武神將軍 大蛇タダカツ、幻朧鬼忍 魔陀羅ハンゾウ

家族構成：父・魁、母・イツナ（魂獣）、祖父・凱、祖母・沙々羅（魂獣）

既に全員鬼籍に入っている（記憶はないながらおぼろげにそれだけは覚えてる）

好きな言葉：『前を向いて歩け、光は前からやってくる』（自らの父に教えられた言葉）

信念：『泥塗れにならなければ見えない決して汚してはならないものを護る為に自分は意地を貫き通す』



コンプレックス  
複合感情：己の悪人面（怖がられる事が多いので）

好みの女性のタイプ：良く解らねえが、好きになった奴がそうだろうと思う（本人談）

補足：現在、記憶喪失は徐々に回復している

しかし、何故記憶を失ったのかや身体中の傷の理由などと言う部分は全く思い出せない

・・・が、本人は別に記憶が戻ろうとも戻らなくともどうでも良いように考えている部分も見え隠れしているようだ

## 【神具の外観】

『七魂剣スサノオ』

普段は小剣タガのような姿をしている

サイが魂獣解放する事により、十の孔が開いた長い刀身の片手半剣バスタードソードのように変化

更に本来の姿は刃渡りの広い大剣状クレイモア、もしくは柄に虹色に光る宝珠を付けた片手剣ブロードソードのようになる。（尚、剣の変化の元ネタはOVA『

マシンカイザーSKL』のマジンカイザーSKLの主武器の一つ“牙斬刀”）

サイの基本的に使う武器であり、普段は法術のようなもので空間から召還するか予め持ち歩く

全長：（通常時）一尺三寸（刀身）＋八寸（柄の長さ）（大体

柄まで合わせて69.3cm

（魂鎧装時）二尺五寸（刀身）＋七寸（柄の長さ）（大体柄まで合わせて102.6cm

(魂獣解放時) 四尺六寸(刀身) + 一尺(柄の長さ) (大体柄まで合わせて184.8cm)

刀身には全部で10の孔が空いており、その孔に契約した魂獣の魂石を嵌め込む事で自身を強化可能

主に魂鎧装を強化する為に使用する事が多いが、何らかの事情により法力が枯渇した際に応急処置のような形で魂石に込められているサイの戦友達の法力を自分ものとして使用する事も出来る

七魂剣に魂石を装着する度にサイの封印されている“大帝”としての力や“九尾”としての力を解放し、それにより魂獣の種族ごとの固有能力や戦友達の必殺技まで使用可能(ただし、現在は記憶などが不完全の状態の為か精々1〜2個同時装着出来れば上等な方である)

魂獣解放のように法力を全解放して使うものではないが、それなりに法力の消費をする為か基本的にサイは多用はしない

(尚、七魂剣と言う名前は誤記ではない)

サイが覚醒鎧装をえるようになった“次期魂獣大帝決定トーナメント”や“第二次魂獣界大戦”の頃はまだ種族は七種族しかなかった為に“七魂剣”と言う名になっている 実際、残りの三種族が出て来たのは第二次魂獣界大戦(魂獣大帝決定後くらい)であり、それまでルীগとデヒテラは“麒麟族”と言う事になっていた・・・まあ、新たな種族が見つかり、十種族になった事が結果的に“聖魔大戦”と言う世界(聖)の命運を掛けた争いに発展してしまっただから皮肉と言えば皮肉だが)

『六道拳アスラ』

サイの父親である人物の形見の神具

金色で手の甲の部分に宝珠のようなものが組み込まれている、指先以外全てを覆うタイプの籠手

神具の中ではサイ自身の能力と相俟って規格外の力を誇る

能力は判明しているのは以下

その1：高速化能力・・・対象の速度を高速化する

その2：多重神具使用・・・本来は一人一つしか使用不可な神具を複数装備可能

その3：複製神具召還・・・六道拳に記憶されている神具の複製を召還、使用、譲渡出来る

（ただしあくまでも模倣に過ぎない為、神具の形をしているだけの通常の武器とほぼ同じ）

）ちなみに複製召還可能の模倣神具は以下

炎凰剣ヒノカグツチ（剣）、雷塵刀タケミカツチ（刀）、銀戦斧アマツマラ（斧）、水嶺槍ワダツミ（槍）、轟縛鎖マリシテン（鎖）、魔導書オモイカネ（書）、太陽閃アマテラス（長剣）、花蝶扇コノハサクヤ（扇）、氷澁刃ヒルコ（短刀）、妖響琴アメノウズメ（楽器）、剛烈砕カンギテン（大剣）、磁力銃ツクヨミ（銃）、黄泉鎌イザナミ（鎌）、龍后傘ナンダリユオウ（傘）、虎咆帯コクウボサツ（帯と棍、二つで一つ）、亀甲盾スミノエ（盾）、霸天鎚タチカラノオ（鎚）、閻櫛クシナダ（櫛）、双極玉コンゴウニオウ（宝玉）

以上、上記の19種類

更に上記以外の能力で、光明司流古武術の極みとも言えるサイの己で編み出した奥義を使用する際に必要

（阿修羅真獄拳は己の内にある闘気を極限まで高め、サイジョン幻影を纏う程に練気して放つ技法

その為か素手よりも六道拳を装備していた方が気が練り易いちなみに出て来る幻影は、サイのかつての恩師達）

### 【双魔銃ニユクス】

サイの持つ、他人の借り物でも模造品でもない三つの神具の最後の一つ（残りの二つは七魂剣と六道拳）

グリップの下部に鋭利な刃、銃身に鋭い鉄杭が装着されている白と黒の対になっている拳銃（ちなみにニユクスという名は二丁を併せて冠されている名であり一丁ずつ名前はある 黒い銃：ヒユプノス

白い銃：タナトス）

別名“アンチアビリティ・アーティファクト対能力者用神具”と呼ばれ、能力者にとっては天敵とも言える唯一無二の神具でもある

能力は以下の通り

その一：能力無効化弾・・・サイの能力である能力無効化を銃弾として放つ アビリティキャンセラー

その二：可変能力・・・銃弾が切れた際に手斧として使用したり、二つを併せて大斧として使用可能

その三：銃弾精製・・・サイが契約した魂石をクリスタル組み合わせる事により、火炎弾や重力弾などといった属性銃弾を放つ事も可能

### 【神皇轟騎・白帝王】

サイ自身を支援する、幾多の神具の中で唯一の可変型であり獣型の神具

模倣ではない戦友達や恩師の神具（黒刀羅刹丸、煌神槍ブリューナク、飛炎弓アムルセス、銀麗槍アリアンフロッド、海鉞刀ダゴン、不敗剣クラウソラス、聖杖ヤツフサ、金剛球ベルセルク、百華鞭アールーナ、甲鎌刀キュベレ、雷電槍クルワツハ、獣王戦斧ベヘモツト、吸血剣ドラキュラ、審判仮面ヴァルナ、光明王錫ミトラス）に自らの二つの神具（六道拳アスラ、双魔銃ニユクス）を融合させる事で現界させる事が可能

普段はバイクの形をしているがサイの魂獣解放に呼応して天馬の形態へと変化し、現時点では封じられている魂獣大帝の力を使う際の起爆剤フイスターのような効果を持っている

神性はそんな所そこの存在では太刀打ち出来ないほどに高く、単独でも烏合の衆程度では相手にもならない強さも併せ持つ

また、限定的にだが戦友達の神具を召還して使用しても白帝王召還中のみは法力を一切消費しないという能力も存在している

欠点は普段の状態（バイク形態）ではあくまでも乗り物としてしか使用が出来ない事

【使用出来る戦友の神具（原品）】

黒刀羅刹丸【小刀】（ムジナ）、煌神槍ブリユーナク【騎乗矛】（ルーグ）、飛炎弓アムルゼス【弓】（ロック）、銀麗槍アリアンフロッド【薙刀】（デヒテラ）、海鉞刀ダゴン【斬馬槍】（ミツキ）、不敗剣クラウソラス【光線剣】（アガート）、聖杖ヤツフサ【杖】（メルト）、金剛球ベルセルク【鎖鉄球】（ダレス）、百華鞭アルルーナ【鞭】（カヌキ）、甲鎌刀キュベレ【刃鉄甲】（ユーナ）、雷電槍クルワツハ【長槍】（ポルト）、獣王戦斧ベヘモット【手斧】（ギギ）、吸血剣ドラキュラ【細剣】（キリク）、審判仮面ヴァルナ【仮面】（ザイン）、光明王錫ミトラス【戦鎚】（ゼノン） e t c . . .

）模倣神具とは違い、サイの神具と同クラスに等しい力を持つ  
しかしそれ相応に法力の消費量が多く、模倣神具のように多用出来ないのが欠点

【使用する導術】

サイは元々、導術の腕前はからつきしの為か基礎的な『武器に属性を宿す術』しか使えない。

（ただし魂石を装備して五行の力を操る事が出来るようになれば、法力と剣術と体術を駆使した所謂“魔法剣士”のようになれるが・  
・現時点では多くて2つの魂石を装備する事しか出来ない）

### 【使用する戦闘技能】

#### 『火群流剣術』

古き時代より歴史の裏舞台で人知れず研鑽を磨かれてきた超実戦型の剣術流派

所謂武器を選ばず多対一に重点を置いた流派で、普通の剣術では到底想像出来ないような戦い方も可能

元々の名は『火群流戦闘術』と呼ばれ、今は既に亡きサイの父親が使っていた

剣技や技が神剣や名刀、神話上の武具などの名から取られている事が多い

（火群流剣術秘奥義・不動神皇剣の種類）

その一・・・不動神皇剣・鳳翼天昇（朱雀属のロツクの魂石の力を借りた技）

#### 『光明司流古武術』

サイと彼の父親と祖父が使う無手の流派

古来は暗殺拳として恐れられていた流派を源流としている

サイは素手の際はこの流派で戦うが、元々父親に教わっていたのは基本的な部分のみ

所謂“禁じ手”と呼ばれる方の技術はサイが血の滲むような努力と

古来から光明司家に伝わる古文書に記されていた物を独学で覚えた為か、実に禍々しい戦闘流派へと変質を遂げている（暗殺拳だった頃の面影がかなり強く、サイの父や祖父が使っていたものよりも危険なスタイルに変貌している）

上記の理由と自身の類まれな握力からサイは“相手を殺してしまう”可能性がある為、本気で認めた相手や強い者にしか腕は使わず、蹴りのみでもつぱら腕は防御に使う事が多い（ちなみに蹴りだけでも十分に強い）

流派の業の名前は神獣や魔獣から取られている事が多い

（尚、裏の流派でありサイが自ら独学で覚えた光明司流古武術・刹にはサイ自身の秘密に関係した力によって変質を遂げている）

（光明司流古武術秘奥義・阿修羅真獄拳の種類）

その一・・・阿修羅真獄拳 第六天魔王・魔破羅琉輝（サイの恩師で六道拳に宿る鬼神）

『流水蓮歩』

相手の動きに対して独自の呼吸法によりタイミングを合わせて攻撃する歩法

その動きが流れる水のように流暢で、舞うかのような動きにより攻撃が読まれ難いという特徴を持つ

所謂“円の動き”と言うものに重きを置き、回避・防御からの反撃に特化した“受けのスタイル”

『烈火瞬歩』

自らの肉体を利用し、爆発的な踏み込みから一気に距離を縮めて攻撃する歩法

動きが燃え盛る火の如く荒々しく、一瞬の動きにより相手に反撃の機会を与える事が少ないのが利点

所謂此方は“線の動き”に重きを置き、瞬発力と爆発力を備え攻撃

に特化した“攻めのスタイル”

『無型の型』

サイ自身の特長とも言えるべき流派の型

一応サイは『火群流剣術』と言う剣術スタイルと『光明司流古武術』  
と言う拳法スタイルを持つ

しかしそれはあくまでも己が強くなる為に師事し、得たものだが・  
・実際のスタイルは自らが見、そして味わった流派を自らのものとして使える事である

『次元刃』

サイの言うなれば最も最強にして最大の力を持つ技能

魂獣大帝となつた際にある技術を元に編み出した究極の一撃とも言える斬撃

ただし記憶と力の封印されている現在では不完全な技であり、結果を切り裂く程度しか力は無い（一応、普通の太刀のような切れ味もあるが、態々法力を消費して使う程でもない）

元ネタは『真（チエンジ！）ゲッターロボ 世界最後の日』の真ゲッター1の“ファイナルゲッタートマホーク”

注）ただし上記全ての技術はサイの身体状態・精神状態に左右される為に性能は上下する

（良い子の為のアホでも解る『神羅万象・七天の覇者』講座）

？魂獣とは？

魂獣とは魂獣界に生息する精霊の総称

個々がそれぞれ恐るべき超能力を持ち、魂石と呼ばれる宝石を生まれながらにして持っているのが特徴



クリスタル  
？魂石とは？

魂獣の魔力の源であり、同時に彼らの魂の結晶

魂石が消滅すれば持ち主である魂獣の絶命も免れないが、逆に言えば魂石さえ無事なら肉体に致命傷を受けても死なない（ただし一部例外あり）

ファクター  
？因使とは？

契約締結と呼ばれる一種の契約術によって魂獣の超能力を自らの力として操る者の事

ただし、魂獣と契約締結をしただけでその能力を100%再現出来る訳ではない

使用出来る超能力は因使自身の実力・潜在能力・魂獣との信頼関係などに左右され、効力、効果範囲、持続時間、使用回数も因使のレベルによって激しく増減される

逆に言えばその全てが著しく高ければ魂獣の力を魂獣以上に発揮する事も可能

尚、因使になれるのは現状では人類のみだけであり、基本的に魂獣が因使に成る事は不可能

また人類ならば誰でも因使に成れる訳ではなく、類稀なる資質と才能に強い信念が必要となる

アーティファクト  
？神具とは？

魂獣が己の能力をより発揮する為のサポートアイテム

言い方を変えるならその存在は魂獣の肉体の一部と言っても過言ではない

神具職人と呼ばれる限られた者達によって創られ、使用者の魂石を装備する事によって真価を発揮する

尚、普通は一人一つしか装備出来ないが、例外で複数装備する能力を併せ持つ者も存在（ただし、その数は片手で数えられる程度の数）

？魂獣の種族・属性

魂獣は7つの種族の種族属性に大きく分けて大別されている（厳密には後3つの種族がプラスされる）  
それぞれの特徴は以下の通りに大別

青龍族（属性因子：木、雷、風、毒）

基本四属性の一つで植物や天候を操る能力を有し、毒や麻痺など神経系攻撃や回復術を得意とする

魂石の色は青、司る鉱石はサファイア

白虎族（属性因子：金、鋼、石）

基本四属性の一つで金属や岩石を操る能力を有し、肉体強化や物質変換を得意とする

魂石の色は白、司る鉱石はダイヤモンド

朱雀族（属性因子：火）

基本四属性の一つで火炎や熱気を操る能力を有し、高熱による放射系攻撃を得意とする

魂石の色は赤、司る鉱石はルビー

玄武族（属性因子：水、氷）

基本四属性の一つで液体や冷気を操る能力を有し、防御術や援護術に回復術を得意とする

魂石の色は緑、司る鉱石はエメラルド

麒麟族（属性因子：土、光）

希少種の上位属性で星の力や光に重力などを操る力を有し、属性の範疇を超えた力を持つ者が多い

魂石の色は黄、司る鉱石はトパーズ

白面九尾族（属性因子：無）

超希少属性で無に連なる混沌の力を操る能力を有し、上位者となる  
と他者の力や事象を無効化出来る

魂石の色は紫、司る鉱石はアメジスト

隠神刑部族（属性因子：闇）

かつて全盛を誇りながらも現在は衰退した希少種属性（理由は後に）  
全てを飲み込む闇の力を有し、他者の力を我が物として使用出来る  
能力を持つ

魂石の色は黒、司る鉱石はオニキス

神獣族（属性因子：事象）

先代魂獣大帝であるゼノンの力を受領して生まれた新種族  
世界に存在する事象を意のままに操る力を有し、他の種族よりも一  
歩抜きん出ている

魂石の色は輝、司る鉱石はアダマントイト

天聖族（属性因子：聖、光）

かつて世界に存在した天界世界から枝分かれして生まれた新種族  
神聖なる神の力や麒麟族を上回る光を操る力を有し、慈悲や慈愛の  
深い争いを好まない者達でもある

魂石の色は藍、司る鉱石はラピスラズリ

皇魔族（属性因子：死、呪、闇）

かつて世界に存在した神魔界・大魔界の血筋や力を受け継ぐ最古参  
種族

まさにその力そのものが“闇”や“死”や“呪”と言ったそのもの  
であり、最も強力な力を有す

魂石の色は無色、司る鉱石は水晶石  
クリスタルクォーツ

尚、例外として虹色に輝く魂石が存在するらしいが詳細は不明（何百、何千万年の間に存在した例は1、2件の為）

？魂獣大戦とは？

数千年前に魂獣界で起こった大戦争

『隠神刑部』の属性を持つ仙狸の一族が引き起こしたとされ、これに残りの六種族が対抗した

最終的には当時の大帝であったゼノンが力により戦いを収めたが、この戦争によって多くの魂獣達が地上に投げ出され戻って来れなくなり、隠神刑部族の戦争に関わりの合った者達の殆どは処刑されている

（この事柄が原因で隠神刑部族は希少種となった）

また当時、ゼノンやサイの母イヅナはこの戦争で八面六臂の奮闘により英雄と呼ばれるが、憎悪の念もかなり多かった

更にその後には『第二次魂獣界大戦』や『聖魔戦争』と呼ばれる戦争も起こるが、それについてはまだ此处では秘密としよう

？魂獣ハーフとは？

人間と魂獣の血を引く者を指し、両者の血を引くのであればハーフでなくても便宜上こう呼ばれる

極めて出生事例が少なく、更に当時は人間に魂獣達は虐げられ道具のようにしか思われていなかったと言う事柄により、魂獣界では禁忌の象徴として忌み嫌われた存在である為か生態の詳細は不明

しかしその能力は魂獣と人間の特性を併せ持ち、魂獣の超能力を持ちながら因使として他の魂獣を役出れるという恐るべき能力を併せ持った存在である事が後に知られる

しかし同時に両者の弱点も受け継いでいる為かその肉体は魂獣に比べても明らかに脆弱

ほぼ永遠の時を生きる魂獣と違って人間同様に肉体の劣化や寿命も存在している事、更に一方の力の強大さにより身体・魂の均等が保

たれず人間より明らかに短命な者が殆ど

通常は成人する前に死別してしまう事が殆どな為、此方も片手で数える程度しかいない（と言うか若干2名のみ）

（ちなみにサイは“ある事情”により、戦闘に適する一定年齢までゆっくりと成長し、そこからは年を取れない為か半魂獣でありながら魂獣以上の生命力を誇る）

？魂獣解放と魂鎧装の違い

どちらも魂獣にとって切り札のような能力だが細かい部分に違いがある

魂獣解放は魂獣が保持する法力を解放し、完全体となって戦う技法であり究極の奥義とも言える

魂鎧装は魂獣自体の持つ魂石に秘められた法力を鎧として変化させて身に纏う技法である

二つの大きな違いは言うなれば使用者へ掛かる負担

・魂獣解放は究極の切り札と銘打つだけの事はあり、使う事によって使用者に圧倒的な戦闘力を与えるが・・・その代わり、保持している法力を全解放してしまう為か法力が完全に回復するまで使用するのとは不可能

・逆に魂鎧装は魂石に予め保持されている法力を鎧と代える為か使用後は再び法力が魂石に戻る

その為か連続して使用するのとは可能だが、魂獣解放ほどの強力な力は使用出来ない。

・・・と、この様にそれぞれに長所と短所が存在しているのである

## 第十話：彼の誇り、少年の願い（前書き）

さて、構成滅茶苦茶で辻褃あわせ作品も遂に10話です。

このような駄作を楽しみにしてください。皆さん、ありがとうございます。^^

では第十話・・・始まります

## 第十話：彼の誇り、少年の願い

サイと刹那の邂逅の夜から一夜明けて翌日。

眠い目を擦りながら玄関の下駄箱から上履きを出していたサイの後ろから声をかける者が居た。

「何だ、随分眠そうだなサイ」

「おはようございます、サイさん」

それは勿論、エヴァンジェリンと茶々丸である。

まあ、と言うかこの二人以外でサイに挨拶をする者は、例え毎日がお祭り騒ぎの2-Aでも少ないのだ。

最初の転入して来た日の乱暴そうな印象が彼に声をかけるのを躊躇わせているのかも知れない。

「おう、キティに茶々丸、おはようさん。

・・・ふああああ、ちつと昨日は遅くまで起きて居過ぎたか」

実は昨日、サイは標的の始末を終わらした後に麻帆良で散策をしていた。

現れた怪物達はサイの記憶の奥底から思い出したもので、全て魂獣界に“存在していた”怪物達なのだ。

『存在していた』と言うのには理由がある。実は出て来た怪物達は遙か昔の古い時代に“絶滅”した筈の者達ばかりであり、少なくともサイの居たであろう時代には存在しなかった筈である。

そんな魔物が一体、何処からこの麻帆良に現れているのか気になったのだ。

しかし・・・時間ギリギリ、まさに太陽が登り始めるギリギリまで

搜索したが現れている場所は解らなかった。

その為サイは、結局の所1時間程度仮眠を取っただけなのである。

・・・そりゃ眠いのは当然だ、寧ろ起きたのが不思議な位でもある。

「まあ良い、私達は先に行く。

・・・つてコラ、そんな所で立って寝るな。せめて教室まで来てから寝る馬鹿者」

「サイさん、眠いようでしたら私が教室までお連れしましょうか？」

立ったまま寝ているサイを起こす二人。

「・・・ああ？ ああ・・・大丈夫、大丈夫。

茶々丸も心配要らねえよ、直ぐに、クラスに・・・ZZZ・・・」

いや、ダメだ。完全にこの少年、立ったまま寝ている。

その様子を見たエヴァは溜息を一つ吐くと茶々丸の方を向いて言う。

「やれやれ・・・茶々丸、クラスまで背負って行ってやれ」

「はい、畏まりましたマスター。ではサイさん、少々失礼致します・・・」

茶々丸は軽々とサイを背負う。

エヴァはそれを確認してから先に鼻歌を歌いながら歩き出した。

・・・本当にこのような姿など、かつてのエヴァでは見られなかった光景だ。



そしてもう一つ

先程までサイの後姿を監視していた視線があった。

いや、どちらかと言うと監視と言うよりも・・・興味か、それとも何か物言いたげな視線だろう。

「・・・あつ・・・」

小さくそう呟いた視線の主。

影に隠れて居る為、誰かは理解し難いがどうやらサイドテールの少女のようだ。

結局、何の為にサイを見ていたのかは解らないが、その少女もHR開始の時間5分前程になってクラスの方へと向かっていった。

・・・その背に見覚えのある大きな竹刀袋を背負って。

「オオ、やっと来たアルな」

クラスの前まで来たエヴァと茶々丸に、茶々丸の背で爆睡しているサイ。

そんな三人に声をかけてきたのは本来なら珍しい・・・いや、彼女のお眼鏡に適えば珍しくもないか。

まあ、このクラスないしこの麻帆良ではそこそこの名を知れている人物だった。

「むっ？ 何だ、拳法バカ娘ではないか。

何か用か・・・まあ、その様子では用があるのはコイツだろうが」

エヴァが指差すと拳法バカ娘こと、古菲が人懐っこい笑顔で頷く。

どうやら彼女が用事があるのは茶々丸の背中でグッスリ爆睡中のサ

イだったようだ。

「そうアルよ、エヴァにゃん

あゝ、でも何だか完全におねむみたいアルねえ・・・おゝい、サイ  
」

昨日自己紹介されたばっかなのに馴れ馴れしく呼び捨てで呼ぶ古。

しかし呼んでは見たが、完全に寝入っているサイはピクリともせず  
に寝息だけ掻いている。

「・・・誰がエヴァにゃんだ、誰が。

そんなどこぞのユルい外見のマスコットキャラのような呼び方で私  
を呼ぶな、バカイエロー。

それに貴様の用事は大体理解出来る・・・が、今は寝かせておいて  
やれ」

このバカイエローと言う言葉の意味は後々に説明しよう。

エヴァの言葉に続くように茶々丸は教室に入ると、サイを起こさな  
いように優しく椅子に座らせた。

そのままサイは机に突っ伏すと、いびきを掻き始める・・・。

「古菲さん、マスターの仰る通りです。

何やらサイさんは明け方まで寝ていなかったそうですので、起きる  
のは昼過ぎではないでしょうか？

其処まではゆっくりと寝かせておいて差し上げてください」

まあ、二人の人物にそうまで言われてしまつては古も無理やり起こ  
す訳には行かないだろう。

少々残念そうな表情をしたが一瞬でいつもの明るい表情に戻る・・・

と、そのタイミングでHR開始の呼び鈴がなった。

尚、ちなみにサイはこの後……。

エヴァや茶々丸の想像通り午前中の授業など完全に無視して爆睡し続けた。

その際にネギに授業中に刺されたりもしたが、完全に眠っているサイはピクリとも動かなかったのは説明するまでもない事だろう。

「ああ、良く寝た!!」

そんな一言を言いながら起きるサイ。

席の横にいたエヴァは、呆れたような表情で彼を見ながら呟く。

気が付けば窓から見える空の太陽は沈み始める時間となっていた……。

「お前は全く……まさか、放課後まで寝ているとは思わなかったぞ」

「……正確には放課後ではなく、6時間目のレクレーションの時間前の休み時間ですマスター」

律儀に訂正する茶々丸の言う通り、時間はもう既に6時限目のレクレーションの前。

つまりコイツ、学校にほぼ寝に来ただけである。

「しょうがねえだろ、眠いんだからよ。」

「……ん？ そう言や、他の連中は何処行っただんだ？」

エヴァの説明によると、レクレーションの時間の為か屋上でバレーをやりに行く為に出たらしい。

昨日一日居て、座ってやる勉強と言うものに飽き飽きしていたサイにとつて、その内容は魅力的だったのだろう。  
立ち上がり伸びをすると二人に呟く。

「要は椅子に座ってお勉強じゃねえんだろ？」

なら良いや、ちったあ退屈しのぎになるだろうしよ・・・行くかね」

「全く本当に、お前は何の為に学校に来てるんだかな。

まあ良い、行くぞ茶々丸・・・ああサイ。先に言っておくが私はやらんからな、面倒臭い」

エヴァの言葉にサイと茶々丸は頷くと屋上の方へと向かった。

そこで面倒な少女達の姦しい争いが始まっているとも知らずに、実に暢気に

「・・・で、何だこの状況は」

「私が知るか、私が・・・」

見れば取っ組み合いの喧嘩をしている女子がちらほら。

その筆頭は明日菜と委員長こと『雪広あやか』の2-A、もう1グループは外見的に大分大人に見える。

・・・この少女達は麻帆良学園の敷地内に存在する女子高、聖ウルスラ女子高等学校の者達だ。

「何だアンタ、やっと起きたの？」

明日菜がサイに気付き声をかける。

喧嘩をしていた為か、少々機嫌が悪そうにだが……。

「五月蠅えな、別にテメエに迷惑なんぞかけてねえだろうが。てか、今起きたばっかで良く解らねえんだが……何がどうなってこんな状況になったんだ？」

「ああ、それはね……」

そこで明日菜から説明がされる。

簡単に説明すれば実はこの状況のそもそもの始まりは、昼休みの時間に中等部と高等部の小競り合いから始まっていた。

2-Aのクラスの少女達がバレーをやっていた際に高等部の者達が割り込み、そこで罵り合いが始まり、一度はタカミチによって止められたが……高等部の者達がわざと屋上をダブルブッキングして再燃したと言った所だ。

……その原因の一つは、生徒数の割にコート数が少ないのも悪いといえは悪いが。

「……くっだらねえ。つつか馬っ鹿じゃねえの？」

「な、ななな、何ですって!？」

喧嘩の理由やら何やらを聞いた時、正直サイにはそんな言葉しか出て来ない。

その言葉に高等部の女子達や、同じクラスメイトである中等部の生徒達から怒声やら不満の声やらが上がる。

しかしサイは興味を持たず、寧ろ淡々と言葉を続けた。

「そもそもガキじゃねえんだから、ちつと言われた程度の事で一々

目くじら立てんじゃねえよ。

大人気ねえつたらありやしねえ・・・それに此処以外に場所なんざあるだろうが、そう言うガキみてえな所が抜けねえからこういう騒がしい事になつてんだよ、自覚しろアホ共」

「な・・・ななな・・・っ!!!」

サイの完全に喧嘩を売るような言い方に怒りで紅くなる高等部の生徒達。

それは当然、例えば自分達よりも遙かに大人・・・この学校で言えば包容力があり、頼り甲斐の在るタカミチなどに言われるならそれ相応に我慢も出来るだろう。

だがこれを言つたのは明らかに自分より年下にしか見えない小僧なのだ。

「それにテメエらもテメエらだ。

自分達より年上挑発して騒いでんじゃねえよ・・・そんな態度だからガキ扱いされんだ、それをちつたあ自覚しろ」

「・・・は、はい」

辛辣な言葉は中等部の騒いでいた者達にも言い放たれる。

一応言っている事は正論な為、ばつが悪そうに騒いでいた者達も静かになった。

喧嘩両成敗・・・本当に下らない事で、自分達が悪くないなどと思つて騒いでいる連中に向かつてサイは同じように諫めた。

彼にとっては同クラスだろうが何だろうが関係などない、道理が通らない事には道理を通す人物なのだから。

「・・・そうだ！　こうしたらどうでしょう？」

両クラスでスポーツで勝負して決着を付けるというのは？」

ふと、今まで黙っていたネギが声を上げる。

「うを！？ って、あれ？ 居たのかお前」

存在感が実に薄かったのか居た事に気付かなかったサイは驚く。

そんな彼や中等部、高等部の者達に対してネギはこの状況を打破する方法を彼なりに考えた。

そして・・・スポーツと言う爽やかなもので汗を流せば、一緒に蟠わだかまりも解けると考えたのだ。

しかし、その程度で蟠りが解けるのであればもっと前に解けると思うが。

「・・・面白いじゃないの。」

良いわよ、ただ年齢とか体格とかの差があるからハンデをあげる。種目はドッジボールでどう？ こっちは全部で11人で、そっちは倍の22人で掛かって来て良いわよ。

ただし、アンタ達が負けたら・・・ネギ先生を教生として譲ってもらうのと、其処のさつき私達を散々虚仮にしたガキに土下座して謝って貰うわ。 良いわね？」

否応無しに条件を付けられてしまった2-A。

サイの土下座などどうでも良いが、ネギを取られるのは適わない・・・だが、勝てば良いだけだと考えると条件を飲むのであった。(まあ、若干何名かはどうでも良くないようだが・・・)

その瞬間、高等部の女生徒達の口元に笑みが浮かんでいたのに誰も気付かない。

いや・・・サイとエヴァンジェリンだけは気付いていた。

「良いのか？ 良ければ私も手伝うぞ」

「ハツ・・・必要ねえよ」

そんな言葉をエヴァと交えてからサイはコートの中に向かう。

22人のメンバーの中にサイも選ばれてしまい、出る事になってしまった。

ちなみに彼、勿論ルールなど知っている筈もないが・・・それについては5分程、ある人物から教わっている。

「あ、あの・・・さ、さささ、サイさん・・・」

「ルールは、お分かりに・・・な、なりましたか・・・？」

それはサイに階段から落下した時に助けられたのどこである。

彼女は実はいつも体育のルールブック集を持ち歩いており、それを使ってサイにルールを教えたのだ。

まあまさか、ドッジボールのルールを知らない中学生が居ると思わなかったようだ・・・。

「要はあれだろ？」

ボールを避けて、ボールをキャッチして、相手にぶつけりゃ良いだけだよな？

心配要らねえ、ガキでも直ぐに覚えれるぜ」

・・・お前はそれがガキでも覚えれるルールを知らなかったがな。

しかしサイの生まれを考えれば、当然といえば当然のような気がするが。



「が、頑張りましょうねサイさん!!」

既に体育着に着替えていたネギがサイにそう言うと、サイはネギの頭に手を置いて返す。

「まあ、気楽に行こうや。

ガチガチじゃどんなに自分が強かろうとも負けちまう」

殆ど同じ位の身長の子がネギの頭を撫でて勇気付けている光景は実にシユールだ。

しかし当のネギとすればこの行為のお陰で緊張が解けていた……。

『それでは……試合開始!!』

審判の声とともに笛の合図が鳴り響き、勝負は開始した。

「行くわよ小スズメ達!! 必殺……!!」

掛け声と共に思いつき振りかぶるリーダー格の栄子。

その姿にびびった2・Aの生徒達はもみくちゃとなり、逃げ場を失ってしまった。

「……それっ」

軽く放られるボールが背を向けた者達の頭に連続してぶつかる。

「ほら、もう一丁」

更にもう一度放たれたボールは先程以上の数の生徒達に当たり……  
一気に七人がアウトとなってしまった。

「何だ、人数多い方が不利なんじゃねえか」

サイの一言はごもつともだ。

そりゃ考えてみれば同じ広さの陣地のなのだから、必然的に人数が多い方が身動きが取れなくなる。

寧ろ人数が多いよりも少ない方が有利なのだ・・・それに気付いた明日菜とあやかの声が耳に響く。

「このおバカ!!」

2対11と言うのはあまりハンデになってないじゃありませんの!?

その位の事はお気づきなさい!!」

「いいんちよだつてその条件飲んだでしょ~~~~~!!」

そんな声を聞いて頭を抱えるネギ。

一方、サイは呆れたような表情で見ている・・・そして知らない内にハンデの人数差など殆ど無くなっていた。

「ふっふっふ・・・私達に勝てる訳無いのよ。

何故なら私達は 関東大会優勝チーム、麻帆良ドッジ部『黒百合』だからよ!!」

おもむろに制服を脱ぎ、投げ捨てる栄子達。

関東大会優勝という言葉に一瞬驚く明日菜達だったが・・・。

「ってか・・・高校にもなつてドッジ部って・・・?」

「小学生ぐらいまでの遊びとちゃうの?」

「そもそも関東大会って、あいつ等しか出てなかったんじゃないの

「？」

明日菜を筆頭に顔をつき合わせてそんな事を言い始めた。

彼女たちはドツジ部の事を知らなかったようだし、元々子供のお遊びの様にしか感じていないのだろう。

ただネギは純粹に凄いと拍手をし……。

「う、うるさい……余計なお世話よ!!」

つて、何よアンタ!? アンタも私たちを馬鹿にしてんの!？」

栄子の言葉は、拍手しているネギの横で無愛想に立っているサイに向けられた。

……極めて珍しい事にサイは明日菜達の輪に入らず、貶す事もない。

彼の口から出たのは全く逆の言葉だった。

「馬鹿にする？ 何でそんな事する必要があんだ？」

テメエ等は理由やら何やらは別として、この“どっじぼー”つてのに誇り持つてんだろ？」

だったら良いじゃねえか、逆に馬鹿にする奴の方が薄っぺらな誇りもねえような連中だろうぜ」

その一言が後ろで笑っていた明日菜達の耳にも届く。

サイは口が悪い人物だが、誇りや信念と言うものを例えどのような形でも持っている者を馬鹿になどしない。

まあ……実際にこの言葉を聞いても、栄子達にとっては弱者の喚きにしか聞えないが。

「子猿の癖に生意気な!!」

「ビビ! しい! トライアングルアタックよ!!」

「「解った、栄子!!」」

どごその“黒い”のジェット ストリー アタ クのよ  
うな技名を出す外野が動く。  
そして見事なパス回しで意気込んで前に出てきたあやかの中を捕  
らえる。

「いいんちよー、全然ダメやんか!!」

涙目になって突っ込むは和泉亜子。

「クツ・・・パスの軌道が読めせんわ・・・。  
トライアングルアタック、一体どのような陣形ですの・・・?」

「だから三角形トライアングルやん」

的確に突っ込みを入れるは木乃香      まあ確かに彼女の言う通り  
三角形の陣形なのだが・・・。  
その攻撃方法によって更に数が減らされて行き・・・遂にその人数  
差は11対10。  
つまりは一人の人数差となってしまうていた。

「さらに行くわよ、太陽拳!!」

更に栄子は止まらず、太陽を背にして高く飛ぶと・・・バレーのア  
タックの要領で光に目が眩んだ明日菜にボールを思いっきり叩き付  
ける。

「いたっ!!!??」

更に跳ね返ったボールが相手側の陣地に浮かぶ。  
それを狙い、栄子は飛び上がると倒れて背を向けている明日菜に向  
かってもう一発叩きつけようとした。

「あ、アスナさん、危ない！！！！！」

「きゃ……！？」

ネギの叫び声に明日菜はボールが飛んできた事に気付くが、時既に  
遅い。咄嗟に目を瞑る明日菜  
そのまま明日菜はボールを……。

『バシイイイイン！！』

音は響けども痛みは何時まで経っても来ない事に明日菜は目を開け  
た。

其処には……。

「……えっ……？」

其処には誰かの背中があった。

小さく、頼りにならない……更には自分に喧嘩を売るような口調  
でいつも話しかける人物の背が。

「やれやれ、危ねえな……。

さっき教わったルールじゃ、倒れてる奴に再度ボールをぶつけるの  
は反則って書いてあったが？」

そう……其処に、明日菜の前に居たのはサイだ。

悔しげな表情をしている栄子を尻目に、サイは明日菜の方を向くと

手を差し出す。

「ホレ、とっとと立てよ」

その姿をぼうつと見ている明日菜。

目に映るサイの姿が、知らない筈の誰かと重なる・・・何故か、かつて同じような言葉を掛けられたような気がする。

しかも、自分が今よりも幼い頃に

「おい、聞いてんのか？」

さっさと立てよ・・・そんな所で惚けてんじゃねえ」

「・・・はっ!? ん、礼なんか言わないわよ!」

何か、何かを思い出しそうになった少女。

だがその記憶は正気に戻った事により、記憶の奥底へと消えていった・・・。

「す、凄いですサイさん!!」

あんなに早いボールを、片手で止めちゃうなんて!!」

目を輝かせながらそう言うネギの頭を再び撫でると・・・彼は後ろを振り返る。

そこに居たのはボールが地面に落ちなかった事により明日菜がアウトにならず、安堵の表情を浮かべている他のメンバーが居た。

だがそれは消極的に前になかった為、当てられなかったに過ぎない・・・。

そんな少女たちにサイは

「おい、テメエ等・・・悔しくねえのか？」

「……………えっ?」「……………」

サイの言葉に少女達は彼を見る。

其処に居たのは・・・エヴァや刹那は見た事がある、いつもとは違う真面目な表情のサイだ。

「えっ、じゃねえよ。悔しくねえのかって聞いてんだ。

全部が全部アホ女任せで・・・他人任せでテメエ等に一体何が得れる?

勝つか負けるか　そんな事は解らねえが、勝ったとしても負けたとしてもテメエ等は胸張って居られんのか?

逃げ回って後ろ向いてたって状況は良くなかならねえんだよバカが」

言い方は悪く、傷口に塩を塗るような辛辣な口調。

しかし何故だろうか?　どうしてこんなにも心に響くのだろうか?　後ろの方で諦めていた少女達の目付きが少々変わる・・・それを解ったかのようにサイは言葉を続けた。

「やるなら前向いてでやれ、負ける前から諦めて言い訳考えるんじゃないやねえ。

それでも言い訳言いてえなら・・・全力出し切って、全てやれる事をやりきって結果が出てから言え」

サイは明日菜にボールを渡すとそのまま背を向けて外野に出て行く。もう、言つべき事は全部言ったという事だろう・・・。

「あら、逃げるのかしら?　このまま行けば負けてアンタ私達に土下座よ?」

今まで黙っていた栄子が笑いながらそうサイに言葉を飛ばす。  
しかし・・・サイは背を向けたまま言葉を返した。

「『残心』って言葉の意味、知ってるか？」

「へっ・・・？」

言葉の意味を知らないのか、首を捻る栄子。

そんな彼女にサイは、背を向けたまま再び言葉を続ける。

「心配すんな、そいつらが負けたら土下座だろうが腹踊りだろうが  
何でもしてやるよ。」

まあ・・・やる気になった連中相手じゃ、残心した所で勝てねえよ」

其処まで言った後、サイは『ああ、それにな・・・』と続ける。

「それにな・・・テメエ等は自分から自分達の誇りを汚した。」

そんな連中じゃ、真っ直ぐ前向いて取り組む奴等になんぞ勝てる訳  
ねえ」

コートを出終わると床に寝転ぶサイ。

寝転んだ状態で見ると、己のクラスのメンバー達の目は今までとは違  
う。

その眼差しに満足したサイは、己の後の身の振りをクラスの者達に  
任せて目を瞑るのだった・・・。

その後、サイの言葉やらネギの言葉やらによってやる気を取り戻し  
たネギ達のチーム。



まるで覚醒したかのようなその強さは年齢差も体格差ももろともせ  
ずに爆発し、文字通り怒涛の展開で劇的に幕を下ろした。  
結果は敗北ではなく勝利・・・ある意味では、誰かに頼ろうとする  
者達をサイが叱咤して信じた事がこの結果を生み出したと言っても  
過言ではないだろう。

「んあ？ 終わったか・・・？」

とぼけた様な言葉を吐きながら目を覚ますサイ。

その目には10対3と言う結果と、勝利に喜ぶネギ達の姿があった。  
結果に満足し、喜んでいる者達にまた不快を与える心算も無い為・  
・サイは一人、帰ろうとしていた。  
・・・・まさにその時、突然座り込んで呆然としていた栄子がボール  
を片手に立ち上がる。

「・・・まだよ、まだロスタイムよ!!」

喜びに浸っているネギ達は気付かない。  
後ろから明日菜に向かって剛速球のボールが放たれ・・・。

「・・・いい加減にしろや、クソ女共」

其処に居たのは寝転んでいた筈のサイだ。

右手でボールを鷲？みにしているその姿は、何処から誰がどう見て  
も頭に來ているのは明白である。

「1度や2度はまだ我慢してやる。

だがなあ・・・流石に『仏の顔も3度』って言葉位、知ってるだろ  
うなああああ!!!!!!」

“ミシッ、ミシッ!!”と言う聞き慣れない音が何処からとも無く鳴り響く。

良く見てみれば音のしている場所は理解出来た  
なんとサイが片手で驚?みになっているボールが音源だった。

まるでソフトボールの軟球を握り締めるかのように、バレーボールがサイの指の形に潰れていく。

・・・バレーボールは硬球の筈だが。

バレーボールが栄子達の横に投げつけられる。

・・・“メキヤー!!”と言う音が鳴り響き、栄子達はボールの投げられた場所を恐る恐る見た。

すると目に映ったのは  
壁にめり込んでいるバレーボールの無残な姿だ・・・。

「ひ、ひいつ!?!」

「失せろ・・・。

さもないと次は・・・お前等自身が其処の壁とボールと同じ道を辿るぞ。

解つたら四の五の言わず帰りやがれ!!!」

「ひ、ひいいいい!! ぐ、ごめんなさああああああい!!  
!」

サイの最後の怒声に慌てて走って出て行く高等部の生徒達。

見ると後ろにいたクラスの者達も呆然とした表情をしてサイを見ている。

『やれやれ・・・やり過ぎたか』などとサイが思っていると・・・。

「ちよ・・・何今の!?! 凄いじゃんか、サイくん!!」

「何の魔球アルか、サイ!?」

「もつと早く出しなよ~~~~~!!!」

2 - Aのクラスメイト達は恐れる所かサイに興味心身で質問を飛ばしてくる。

「・・・オイオイ、こいつ等の常識大丈夫か。

俺はもしかして、とんでもない所に入っちゃまったんじゃないだろうなあ・・・」

そんな事を考えていると・・・。

「さっ、サイさん!!」

け、けけけ、喧嘩は駄目ですよおおお!!?　そ、それに魔法がばれちゃいますううう!!」

「ちよつと、アンタ!？」

幾らなんでもやり過ぎよやり過ぎ!!　あんなモノ、見せてどうすんのよ!？」

明日菜とネギが後ろからサイにだけ聞える大きさの声で言う。

・・・まだこの二人はサイが魔法使いだと勘違いしているのだ。

「いや・・・済まん」

反省してるんだかしてないんだか解らない態度でそう返すサイ。そんな彼に次に続くのは再び怒号かと思っただが・・・。

「まあ、良いわよ。　今回はアンタに二度も助けられたしね。

あの、その・・・あ、ありがとう・・・」

明日菜は笑顔を見せ、最後の方はか細い声で礼をする。  
一方、ネギの方はと言うと 何故かもしもじして、頬を紅く染めながら言う。

「あの・・・サイさん。」

ボク、一つだけ・・・サイさんをお願いがあるんですけど・・・」

「ああ？ 何だ？」

するとネギは言い辛そうに答える。

「ボク、ボク・・・さっきサイさんに緊張してた時に頭撫でてもらって、凄く嬉しかった。」

緊張して、失敗しなかったって思ってたボクに、サイさんは・・・勇気付けてくれた。

サイさんが・・・サイさんがボクのおにいちゃんだったら、どんなに良かったかなって思っちゃって」

其処まで言うとなぎはサイをしつかりと見る。

そして、望みを言う

「だからサイさん、迷惑かもしれないけど・・・。」

これから“お兄ちゃん”って呼ばして下さい・・・お願いします！  
！」

サイは何も言わない。

その態度が拒絶だと思ったネギは、小さく頭を下げると呟く。

「・・・そ、そうですよね。」

「ごめんなさい、知らない子にお兄ちゃんなんて呼ばれても迷惑ですよね。」

「あ、あはは・・・わ、忘れて下さい」

「そう言うと教室に戻ろうとするネギ。」

彼の小さな背中に、サイは小さく笑いながら言葉を返す。

「・・・公私はしつかりと分けるよ“ネギ”」

「えっ・・・？　　そ、それじゃあ・・・？」

「照れ臭そうにサイは頭を掻く。」

「そして後ろを向くと・・・小さく答えた。」

「好きにすりゃあ良い・・・まっ、俺なんぞを兄貴のように思うならんざ奇特も良い所だけだな」

「言い終わるとそのまま去っていくサイ。」

「そんな彼の背に向かって、ネギは笑顔で言った・・・。」

「うん、ありがとうお兄ちゃん！！」

「空はもう夕暮れ・・・。」

「。 。 。 。 。  
紅く染まる空に、ネギの嬉しそうな声が響いた春の一日であった・・・。」

尚、余談だが。

サイの事を怖がりながらも、凄まじい投球技術を見せた事に感銘した麻帆良ドッジボール部。  
そんな彼女たちがサイをスカウトをしに来たのは語る必要は無いだろう。

（勿論、今回の場合はサイは怒っても居ないので丁重に断ったそう  
だ）

第十話・彼の誇り、少年の願い（後書き）

更新完了、投稿完了です。

いやはや・・・今回は今まで以上に辻褄が合っていなかったような・・・。

いつもの事ですが、読んで頂いている方、ありがとうございます。

さて・・・これでとりあえず第一巻の分は終わりですかね。

次回からは第二巻の分や、サイの記憶の復活なども描いていきますので楽しみに

第十一話：期末テスト大作戦・前編（前書き）

さて、ついに二巻・・・と言うか、2・A二学期のメと言える期末テストです^^

此処が終わり、もう暫く経ったらついに修学旅行　バトルが熱くなりそうですね^^



## 第十一話：期末テスト大作戦・前編

高等部の女生徒達とのドッジボールの試合。

そしてサイがネギにプライベートで『お兄ちゃん』と呼ばれるようになってから早三日。

寒さも少しずつ和らいできた麻帆良は今、学生衆にとっての苦行の時期を迎えていた。

その苦行の名は・・・期末試験。

何時もどおり屋上で食事をするサイ&エヴァンジェリン&茶々丸。世間話をしながらの食事は不思議と今の雰囲気が変わり、寧ろピリピリしている最近の現状に及んだ。

「なあ、キティ。最近の雰囲気は何なんだ？

やけに空気が重いと言うか、何と言うか・・・まるで戦場みてえだぞ？」

「・・・まあ、強いて言うなら間違つては居まい。

学生衆にとつてはある意味、戦場と同じだ。いや・・・言い方を変えるなら戦場以上かも知れんな」

サイとの邂逅から大分性格が丸くなったエヴァ。

茶々丸特製のサンドイッチを食べて茶を飲みながらしみじみとそう言った。

・・・流石は十五年も中学生をやっているだけの事はある。

「サイさんも宜しければどうぞ、お食べ下さい」

そう言つて茶々丸がサンドイッチの入ったバスケットをサイの方へ

と向ける。

中に入っているサンドイッチの量は、少なくともエヴァや茶々丸二人では食べ切れない程の量だ。

まあ、厳密に言えば茶々丸は食べた所で栄養やらエネルギーにはならないので食べる振りだけなのだが。

「ククク・・・食ってやれ、サイ。

そのサンドイッチは茶々丸がいつもより早起きして、何故かいつもより間違えて多く作ってしまったものだ。

棄てるのも勿体無いしな・・・なあ、茶々丸？」

「あの・・・もしお口に合わないのでしたら、無理には・・・」

それを聞いたサイは首を横に振るとバスケットの中に手をつ込んで幾つかのサンドイッチを出して食べ始める・・・考えや理由はどうあれ、人の好意は無にしないのがサイの良い所だろう。

「おお、美味えな。

やはり茶々丸は料理が上手だよな、良い嫁さんになれるぞ・・・ああこっちの卵の殻が入ってるのは急いでたか何かか？『ゴンツ！！』・・・痛つてえな、何すんだよキティ？」

「フン、何でもないわ馬鹿者が」

「い、いえ・・・それ程でもありませんサイさん。

（小声）サイさん・・・今回のサンドイッチはマスターも手伝ってくれました。

特にたまごサンドはマスターが自分一人で作ると張り切って居られましたので

「

てな事を語りながら時間は過ぎていく。

「ああ？ 何だ、コレキティが作ったのかよ。  
だったら先に言え、お前料理苦手なんだろ？ それでも作ってくれ  
たんだから、感謝して食うさ」

「……！！ あ、当たり前だ馬鹿者！！  
この私が、貴様に直々に料理の腕を振るってやったのだ、感謝して  
食えー！！」

「……何この可愛い生き物。  
どうやらサイとの出会いは確実にエヴァやら茶々丸やらを変えてい  
るようだ……。」

「でも本当に絡繰さんって料理お上手ですね！！ あ、お兄ちゃん、  
もう一個唐揚げ頂戴！！」

「ホント、ホント 木乃香も料理上手いけど、茶々丸さんも凄  
いわね」

「嫌やわ、明日菜、 褒めたって何も出えへんよ。 ああ、  
サイくんもウチのお弁当、食べてや」

「あ、あのあのあの……さ、サイさん……よ、良ければ私の作  
ったのも……。」

「のどか、そんな小さな声じゃ聞こえないです」  
「ほらほら、頑張んなさいよアンタ」

「オオ、ネギ坊主の言う唐揚げも美味しいアルよ サイ、自分で  
作ったアルか？」

「ぬう、この出汁巻き卵もヤバ美味でござる」

「ああ、それ作ったのシスターシャークティだよ。 まあ私と私の

妹分も少しは手伝ってるけどね」

・・・何時の間に湧いて出たのだろうか？

知らない内にサイ&エヴァ&茶々丸の周りには人だかりが出来ていた。

「・・・オイ、いつの間に湧いて出た貴様ら」

「てか、この拳法バカ&忍者バカ！！ 何を人の弁当のモン勝手に食ってんだオラア！？

美空、居たならこのバカ二人止めるよ！ そして泣き出すなネギ、お前の事じゃねえよこのバカ！！

そして木乃香、何だその食わないと許さないみたいなプレッシャー！？ 食うよ、俺そんなプレッシャー掛けれなくても食うから！！」

いつの間にもやら賑やかになったものである。

元々サイもエヴァも自分から人の輪を外れていくくらいがある。

心のどこかで人との絆を紡ぐのを苦手としているような感じもするのだ。

だが・・・2-Aと言うこのクラスの者達は、そんな事などお構いなしなのである。

・・・それはある意味では、最も難しい事なのだが。

そんな騒ぎの中、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴る。

良くも悪くも2-Aらしい光景のまま、教室へと戻るサイ達であった。

尚、そんな騒がしい者達の輪に入ろうとしようとするも、己の責務を優先した人物が一人。

そして珍しくサイの事に興味を持った長身の人物が一人いた事は誰

も気付かなかった。

午後 5時限めの授業が終わり、学園長室に呼び出されたネギ。呼び出された理由は教育実習生として此処に赴任する期日が迫り、4月から正式な教員として採用出来るかをテストする為の課題を渡す為だ。

「（あわわわ・・・今頃に課題が出るなんて聞いてないよ～～！？）  
コレをクリアしないと正式な先生にも、立派な魔法使いにもなれなくなっちゃう～～！？」

課題の内容とは一体何か？

ドラゴンを倒すのか、それとも一定以上の魔法の習得か？ まあ何にしても生易しい課題ではない事は容易に想像が付く。

ネギは恐る恐る手紙を開く。 其処に書いてあった言葉は

『ねぎ君へ

次の期末試験で二-Aが最下位脱出出来たら正式な先生にしてあげる  
それとサイ君はねぎ君が正式な先生になれたら正式な二-Aの生徒にしてあげる』

「ああ？ 何見てんだネギ？」

丁度その後ろからサイに声を掛けられる。

どうやら手に缶コーヒーを持っている所を見ると、休憩時間の間に買いにでも行っていたのだろう。

「あっ、お兄ちゃん

実はね、ボクが正式に先生になる為の課題が出たんだ。でも、2 - Aを期末試験の最下位から脱出させるだけっていつ何とかなりそんな課題だからさ  
よ~~~~し、頑張るぞ~~~~!!」

やる気を出したネギはそのまま元気良く教室の方へと向かう。

一方残されたサイはと言うと・・・。

「期末試験で最下位脱出・・・？」

何だか良く解んねえが、激烈に嫌な予感がすんのは俺の気の所為か・・・？」

この先に待つ事への一抹の不安を抱いていた。

・・・そしてこのサイの勘の良さは、後に当たってしまうのだから始末に置けないのであった。

サイの悪い予感は見事に的中した。

この学校はテスト終了後、平均点によるクラスの順位を発表する。

実は2 - A、成績がトップクラスの者が3人も居るのだが・・・基本的に鳴かず飛ばずの成績の者が実に多い。

更に此処には『バカレンジャー』と呼ばれる全体の成績の足を引く張る連中が五人も居る。

つまり、学年トップが存在していても足を引く張る連中が多い事から最下位になってしまうのだ。

更にエスカレーター方式で上に上がれると言う事から、赤点だろうが何だろうが気にしない脳天気な連中が多いのである。

何せ期末試験まであと三日と期日が迫っているにも拘らず、英単語野球拳なるお遊びで騒いでいるのだから、このクラスの脳天

気さは説明する必要など全く以って無いだろう。  
それにもう一つ、大きな問題がある・・・それは

「そもそも面倒臭えんだよ。  
何で座って勉強なんてモンして、それを一々披露する必要があるってんだ」

そう・・・実はサイ、小テストを今まで何度もやったが、解答を一度も書かずに出す為に何時も0点なのだ。

まさに2・Aの最下位脱出はある意味、ドラゴンを倒すやら規定数の魔法を覚えるやらより遥かに難しいのである。

一方、課題の内容が何とかなると思っていたネギも皆のあまりの脳天気さに頭を抱えていた。

「(どどど、どうしよう、このままじゃ・・・)」

ハッ、そうだ思い出した!!! 3日間だけでも頭の良くなる『禁断の魔法』があつたんだ!!!

・・・副作用で一ヶ月ほどパーになるけど、仕方ない!!!」

「オイコラ小僧、何を物騒な事を口走ってやがる」

「こら~~~~~、やめやめ~~~~~!!! 何さらつと怖い事言ってるのよアンタはああ!!!」

ネギの頭に落とされる鉄拳&突き。

後ろを向くと其処にはサイと明日菜が立っていた。

ちなみに明日菜は英単語野球拳で負けまくっていたので制服が肌蹴ているが・・・。

「あ・・・お兄ちゃんにアスナさん」

「何バカやってんのよ、ちょっとこっちに来なさい！！ サイ、ア  
ンタも一緒に来て！！」

そのまま人気の無い廊下まで引つ張られていくネギ。

サイものんびりと二人の後を追う・・・尚、明日菜はドッジボール  
以降からサイの事を名で呼ぶようになっていた。

「アンタねえ、いい加減に魔法に頼るの止めなさいよ！！」

そもそも魔法なんてものが誰かにバレたら即帰国なんでしょ！？」

「で・・・でも・・・」

このまま期末試験が最下位ピジだったらボク先生になれないですし、立  
派な魔法使いにも・・・」

それに、ボクがコレを失敗したら連帯責任でお兄ちゃんも2-Aを  
退学クビになっちゃうんです・・・」

そう、この試験の結果は己の問題だけではない。

それが成せなければ、いつも自分を勇気付けてくれている兄のよう  
な存在の人物も責任を取らされてしまう。

・・・だが、その言葉に対してサイは返す。

「生意気言うんじゃないよ小僧。

それにテメエ、そんな汚い手使って課題に合格して満足か？

前にも言った筈だ、努力するだけ努力してそれでも出来なけりゃそ  
こで言い訳するのは構わねえ。

だが努力もしねえで、中途半端な気持ちで教師やってる奴が担任な  
んてのは教えられる奴等にとったら迷惑以外の何物でもねえよ」



サイの言葉にネギはハツとする。

そうだ、確かにいい加減な気持ちで事に取り掛かるなどと言うのは迷惑でしかない。

己の事ばかり考えていたネギはその後学校から出ると、己にある魔法をかける。

「うん、そうだ・・・安易に魔法で成績を上げようなんて卑怯だ。よし、期末テストまでの間は魔法を封印して一教師として生身で生徒にぶつかろう!!」

ラス・テル マ・スキル マギステル・・・制約の黒い三本の糸よ、我に三日間の制約を（トリア フィーラ ニグラ プロミッシューワ ミヒ リーミタチオーネム ペル トレースディエース）」

魔法を唱えるとネギの右の手首に黒い刺青タトゥーのようなものが入る。

これによりネギは三日間だけは魔法が使えない唯の10歳児へとなってしまうのだ。

「よし、これでボクは三日間は唯の人だ。 正々堂々教師として、ギリギリまで頑張るぞ!!」

さあこうしちゃいられない、明日の授業のカリキュラムを組まなきゃ!!!

見ててね、お兄ちゃん!! ボク、頑張るから!!」

そう元気に天に向かって叫ぶと、ネギはそのまま準備の為に走っていった・・・。

一方、その夜

女子寮の大浴場で何気ない世間話をしながら湯に浸かっていた明日

菜らバカレンジャー。

ちなみに説明しておくとかバカレッドが明日菜、バカブルーが長瀬楓、バカイエローが古菲、バカブラックがのどかの親友である綾瀬夕映、バカピンクが委員長こと雪広あやかの親友である佐々木まき絵である。

・・・尚、此処にサイもバカホワイトとしてエントリーされているのを本人は知らない。

そんな彼女たちに木乃香が深刻そうな表情で語る。

その内容は

「『『『『えええええ！？ 期末試験が最下位のクラスは解散』』』』」

『！？』』』』」

何でも木乃香の話によれば、万年ビリの2・Aに対し妖怪ぬらりひよんジジイ……。

もとい、学園長が酷くご立腹であり、次の期末試験の結果発表でまた最下位を取ったら小学生からやり直させるなどと言つ無茶振りをしているらしい。

・・・事実では無いにせよ、その事を信じたバカレンジャー達は酷く慌てる。

その時、バカブラックこと夕映が抹茶コーラなる不思議なジュースを飲みながら言った。

「こうなったらアレを探すしかないかもです。

皆さん『図書館島』は知っていますよね？ 我が『図書館島探検部』の活動の場ですが……。

実はその図書館島の深部に読めば頭が良くなるという「魔法の本」があるらしいのです」

「ま、魔法の本!?」「」  
「綾瀬殿、抹茶コーラって美味いでござるか?」

四名（一名は全く違う事を考えていたが）は夕映の半信半疑な言葉に聞き返す。

勿論、明日菜などは全く信じていなかったが・・・良く考えればネギやらサイやらのような魔法使いが居るのだから魔法の本があってもおかしくは無い。

ちなみに彼女はまだサイの事を魔法使いだと勘違いしていたが。

「うん、行こう!!」 『図書館島深部』へ!!」

明日菜は目を輝かせながらそう言った

数時間後・・・。

麻帆良学園図書館島の裏手にある秘密の入り口には『バカレンジャーズ+2』にシエルパとして木乃香を加えたメンバーが揃っていた。若干一名、物凄く機嫌が悪そうに明日菜を見ていたが・・・。

「・・・で、何で俺までその図書館島だか何だかって場所まで連れて来られなきゃならねんだ?」

縄でぐるぐる巻きにされているのはサイ。

実は努力しろと言った手前、自分も努力せねばいけないと感じたので帰りにエヴァ&茶々丸に期末テストに出そうな部分の参考書を貸して貰い、試行錯誤していた。



しかし魔法を封印してしまっているネギにとって、身体能力が歳相応の子供となってしまうている。

いつもの人間離れした運動能力は魔法の力によって得ているものだった。

「う、うわあああ!!!」

床が抜け、落ちそうになるネギ。

それを助けようとした明日菜だったが、それより先に誰かがネギの襟首を掴む。

・・・それは勿論、サイであった。

「チツ・・・気をつけるネギ。」

こんな所でクタバった所で何も良い事はねえぞアホが」

「あ、ありがとう・・・お兄ちゃん」

片手で本棚の上に戻すサイ。

その後はサイが手を引き、ネギを誘導してやる　　そこでふと、ネギが小刻みに震えている姿が映った。

良く見てみればパジャマで連れて来られたのだ、例え春が近くなつて来たとは言っても夜は寒いだろう。

「やれやれ、しゃあねえな。ほれ、これでも着てる」

サイはいつも着ている着物のような上着をネギに投げ渡す。

「えっ・・・でも、それじゃお兄ちゃん寒いでしょ・・・?」

「心配要らねえよ、風邪引いたら引いただ。  
・・・悪いのは理由も告げずにこんな所に連れて来やがったあのア  
ホ女の所為だしな」

「ああ、もう！　悪かったわよ！！　そんなにいつまでも・・・  
！？」

明日菜がサイの方を向いて何かを言おうとした時、言葉が止まる。  
その様子に疑問を持ったほかの者達もサイの方を見て・・・絶句し  
た。

「あ、アンタ・・・何、それ・・・？」

「ああ？　見りゃ解るだろ、古傷だよ古傷。　それ以外に何に見え  
るんだ？」

絶句するのも当然　もし気の弱い者、例えばのどこでも居たと  
したら確実に気を失うだろう。

何時もはどんな時でもサイが着物のような上着を羽織っている事の  
理由が解った。

それは・・・二の腕やら首の付近やら胸にかけて尋常では無い程に  
刻み込まれた傷。

しかも一つや二つではない　殆ど傷が無い所を探す方が難しい  
程に無数の傷がサイには在ったのだ。

上着を借りたネギさえ、あまりの酷さに言葉を失い涙目になる。

「古傷じゃないわよ！！」

あ、アンタ・・・アンタ一体、何があつたらこんなに傷が残るっ  
てのよ！？」

その疑問も当然だ。

普通の人間がこんなに傷を受けるような事が在る訳が無い。

そもそもこんなに傷を負えば、傷の深い浅いは別として痛みで発狂するだろう。

しかしサイは、傷を触りながら呟く。

「いや、記憶がねえから良く解らねえよ。

だが少なくともこれだけは覚えてる・・・これは“大切なモン”を護る為に負った傷だってな。

そうだな・・・俺が誇りを貫き通した“勲章”って所だろうよ」

そう言うサイの表情はどこか誇らしげだ。

身長など夕映とさほど変わらず、どう見ても中学生かそれ以下にしか見えないサイ。

だが・・・明日菜達が見た彼は少なくとも、遥かに大人びて見えた。

「つつかオイ。俺の事なんざどうでも良いから先に進もうや。

早くしねえと、一昨日と同じで寝る事が出来なくなっちゃうからよ」

彼の一言に正気に戻ったバカレンジャー達。

気を取り直すと先を急ぐのであった。若干のサイへの心境の變化を残しつつ・・・。

その後、第178閲覧室で食事休憩を取った後、人外魔境と化した様相の図書館島内部を進んでいく。

地下湖に絶壁の如き本棚に身長半分も無い程のエリアを進み、遂に一向は魔法の本が安置されている場所へと辿り着いた。

其処の様相はまさにTVゲームのラスボスの間の如く、神々しくも禍々しく見える・・・。

「ああ、あの本!? アレは伝説の魔道書の『メルキセデクの書』ですよ!?!?」  
信じられない!! ボクも見るのは初めてです!! 何故、こんなアジアの島国に!?!」

「何だ、エノクの書じゃないのか。  
キティの奴が面白い本だから読んでみろって言ってたが・・・」

驚くネギと興味の無いサイ。

「言うかお前、何で知識無い筈なのに『エノクの書』なんて知ってるんだ?」

ちなみにエノクの書とは某『そんな装備で大丈夫か?』『大丈夫だ、問題ない』の掛け合いで有名なPSSのゲームソフトの元になった書の事である。

大方、エヴァンジェリンの入れ知恵だろう。

ネギのその言葉にサイと木乃香にネギ以外の者達が静止も構わず一斉に走り出す。

・・・その先の行く末は勿論、言うまでも無く最後のトラップである。

「い、痛ったたた・・・え、何これ?」

コレって・・・ツ、ツイスターゲーム・・・?」

誰がそんな事を呟いたか・・・。

その場所には英単語TWISTER Ver10.5などと描かれている。

と・・・次の瞬間、メルキセデクの書の傍らにいた二体の石像が突然動き出した!!



「フオフオフオフオ・・・この本が欲しくは・・・「オラアアアアアアアアア！！！！！！！」・・・フオオオオオオ！？ い、いきなり何をするんじゃない？」「」

迷わずに蹴りをゴーレムに叩き込むサイ。

その一撃でゴーレムの内の一体は頭を破壊されて倒れ付す。

「な、ななななな、何やってるんですかお兄ちゃん~~~~~！？」

「いや・・・済まん。」

ある未確認生物ジジイの笑い方を思い出してつい体が勝手に・・・

「ちよ、わし倒しちゃったら魔道書やらんよ！？」

しかもこっから出れなくなっちゃうよ、それでも良いのかのう！？」

何だか見方によってはゴーレムが命乞いしているようにも見える。

だがゴーレムの台詞にサイは一回睨むと、溜息を吐きながら下がった。

「（ボソツ）・・・命拾いしたな、デカブツ」

そんな不吉な一言を残して

その後、気を取り直した石像によって問題を出されるバカレンジャー達。

『D難しIFFICULT』やら『C切るUT』やら『B野球ASEBALL』やら・・・明らかに問題に作為を感じるツイスターゲームをしながら

ら、ついには最後の問題まで彼女たちは辿り着く!!  
・・・ちなみにサイは『くっだらねえ』の一言と共に参加しなかつたのは言う必要は無いだらう。

そしてついに最終問題がゴーレムから出される。

「最後の問題じゃ・・・『DISH』の日本語訳は？」

「あ、解った『おさら』ね!!」「」「『おさら』OK!!」「

しかし、物事と言うのは必ず上手く行く訳ではない。

懸命に『お』と『さ』に足を伸ばした明日菜とまき絵であったが・・・最後の一文で間違えた。

「『お』!」「さ』!」「ら』!」「・・・おさる?」「

最後の一文は悲しいかな、明日菜とまき絵がとちった事により不正解となった。

「フオフオフオフオ・・・はずれじゃな」

ゴーレムの一言と共に足場はハンマーで破壊され、全員真つ逆さまに落ちて行く。

「『アスナのおさる~~~~~!!!!!!!!!!」「

「いやああああ!!!!!!!!!!」

「ハア・・・何で俺がこんな目に・・・」

高速スピードで落ちて行くバカレンジャーとネギと木乃香。

そのまま落ちて怪我でもすれば、それこそ本末転倒となるだらう・・・。

「やれやれ・・・仕方ねえなあ」

そう一言だけ呟くと、サイは精神集中する。

このような落下中に精神集中出来るなど、彼が修羅場を越えて来ていると言つ事が良く解るだろう。

「・・・六道拳アスラ、召還!!」

手に纏われる黄金の籠手。

さらに、精神を集中するとサイは己の力を解放した!!

「スピリッツ・バースト  
魂獣解放オオオオオオ!!!!」

その瞬間、辺りを覆いつくす大量の光が放たれた。

光源が何処だか解らずに目が眩み、自然と目を瞑ってしまふ

すると、何かに引つ張られたような感覚が全員に感じられたのだ。

そして落下スピードが静かに遅くなると、明日菜の体がゆっくりと砂浜のような場所に横たえられた。

「な、何・・・今の光は・・・なんだったの・・・?」

何故か意識が朦朧とする。

だがそれは当然の事 図書館島の中では時間の流れは解らない

が、外はもう完全に真夜中となっていたのだから。

・・・ゆっくりと瞼が下りていく。

その朦朧とする意識の中、明日菜達は最後に人の姿を見た。  
それは説明した所で信じてくれる者もいる筈も無いだろうが・・・  
確かに彼女達はその目で見たのだ。

長い銀の髪をなびかせ、耳と何本もの尾を持った青年。

その背には黄金色の阿修羅を髣髴させる六本の腕が生えており・・・  
ゆっくりと優しく少女達を砂浜に寝かせていた。

間違いない、先程落下時にスピードが落ちたのは彼のお陰だろう。

「あ、貴方は・・・誰・・・？」

誰と無くそんな一言が口から出る。

しかしその青年はそこで何も言う事も無く、全員の無事を確認する  
と背を向けて去って行く。

明日菜は去って行く後姿に必死で手を伸ばした・・・が、そこで意  
識は消えたのであった

最後にその青年が誰かに似ているという事だけ脳裏に刻み込んで・・・。

第十一話：期末テスト大作戦・前編（後書き）

前後編ですので余計な事は書きません^^

最後の彼ですが、神羅万象ZFを知っている方にはニヤリとする姿です^^

では、そろそろ次回へと続きます。

また次の話を楽しみにしてください^^

第十二話：期末テスト大作戦・後編（前書き）

あはは・・・大分やっちゃった感のある新話投稿です。

まあでも、一応二次創作ですからこんなもアリですよ・・・？

どンドン暴走する私の作品、どうぞ愉しんでお読み下さい^^

## 第十二話：期末テスト大作戦・後編

side ????

暗く、何処までも暗く……。

何処までも冷たい世界でわたしは生まれ、日の光を自由に見る事も許されず生きてきた。

それをわたしは普通だと思っていたし、皆もまた当然だと思っていただろう。

唯、牢獄のような世界で生き続け、利用され、死ぬまで自由など許されない。

だがわたしに生まれた価値がそれしか無いのならば、それで良いと思った。

誰に知られる事も無く、人の心に残る事無く、わたしと言う存在は消えていくのだと……。

しかし……ある日、わたしはある人に助け出された。

その人はわたしに自由をくれた、己の足で進む事を教えてくれた。

その人はわたしに『愛』と言う感情を教え、暖かく眩い光をくれた。

そしてからっぽなわたしに誇りを、夢を、信じる事を教え……わたしに失う事の悲しみを教えた。

わたしがわたしである事の大切さを教えて・・・わたしの前から逝ってしまった・・・。

貴方がもう一度、わたしの前に来てくれるなら・・・わたしはもう、何も要らない。

だから神よ・・・存在するのなら教えてください。

なぜわたしからあの人を奪ってしまったのですか・・・。

side out

夢、現・・・人は必ず夢を見る。

夢の中で人は蝶となり、大空を己が羽で舞い続ける。

だが、果たしてそれは夢なのか、それとも現なのか

己が夢の中で蝶となったか、それとも蝶が人となる夢を見ているのか？

「う、うーん・・・あれ、ここ・・・どこ？」

「やっと起きたか・・・全く、いつまでもグースカ寝てんじゃねえよアホが」

明日菜が目を覚ますと、目の前にはサイが胡坐あぐらで座っている。

周囲はまるでどこぞの地底世界のように木々が生え、その間から光が降り注ぐ。



滝や小川のように清らかな水が流れ落ち、いたる所に本が入った棚が置いてあった

「って、此処はどこなのよ~~~~~!?」

「俺が知るか、そのちみつ子が説明したそんな表情してるから知ってんだろ」

「・・・誰がちみつ子ですか、誰が。」

そもそも貴方もさほど身長に違いは無いではありませんか。

コホンッ、此処は恐らく幻の『地底図書室』と呼ばれる場所でしょう」

ちみつ子扱いされた夕映はサイの悪態に律儀に返すとこの場所の説明を始める。

彼女の話によると、地底でありながら暖かい光に満ち、数々の貴重品に溢れた本好きにはまさに楽園という幻の図書館らしい。

・・・ただし、この図書館を見て生きて帰った者は一人も居ないらしいが。

まあとにかく、脱出困難だと言う事は理解出来ただろう・・・。

「え、ちょ、ど・・・どうするアルか!？」

それでは明後日の期末テストまでに帰れないアルよ!！」

「それどころか、私達このままじゃおうちかえれないんじゃない?」

あの石像みたいのもまた出るかもだし!！」

「あ、あつうつ・・・。

み、皆さん、落ち着いてくださいいいいい!！」

状況を理解してパニックになるバカレンジャー＆ネギ。  
その姿を見て、サイは溜息を一つ吐くと面倒臭そうに呟く。

「あゝ、パイパイ五月蠅いな。」

こう言う状況になっちまったんだ、今更慌てた所で何も変わらねえだろうが。」

これに懲りたら次からは眉唾事には手を出さねえ事と、安易な樂はしねえ方が身の為だって事は覚えとけバカ共」

そうするとサイはネギの耳元で呟く。

「おいネギ、こんな状況でテメエまで慌ててどうすんだ。」

テメエはまがりなりにも担任だろ、だったら此処に居る奴等を勇氣付けてやれや」

サイの言葉にハツとしたネギ。

そうだ、このような状況こそ引率である自分が落ち込んでいて何になるのか。」

ネギはサイに小さな声で『ありがとう、お兄ちゃん』と伝えると未だ慌てているバカレンジャー達に声をかけた。

「み、皆さん元気を出してください！！」

お兄ちゃ・・・い、いえ、サイさんが言う通り慌てても状況は変わりません！！

それに根拠は無いですけどどきっと直ぐに帰れますよ！！ 諦めないで期末に向けて勉強しておきましょう！！」

ネギの楽観的な言葉は皆を元氣付けたようだ。

今まで困った表情をしていたバカレンジャー達の表情にも笑顔が出る。

・・・幸いな事に教科書やテキストには困らないようだ。この用意の良さにどこか意図を感じるが。  
と・・・そこでサイは何処かに勝手に行くこととしていた。

「あ、ちよつとアンタ、何処行くのよ？」

「五月蠅えな、テメエ等にや関係ねえだろうが。」

ああ、そうだ・・・便所だ便所、それに俺はキティ（エヴァの事）と茶々丸から借りたアンチヨコ帳があるから勝手にやらせてもらう。元々、此処に来なけりゃテメエ一人で覚えてた所だしな・・・そもそも、群れるのは好きじゃねえ」

そう勝手な事を言うときさつさと何処かに行ってしまうサイ。

そんな彼の態度に、明日菜とまき絵と夕映は口々に文句を言い始めた。

「な、何よアイツは！？ 普通こう言う時は皆で協力するものじゃないの！？」

「そ〜だよ！！ 折角ネギ君が皆を勇気付けてくれたのに！！ 格好付けてるだけじゃん！！」

「・・・団体行動を乱す人物とは必ず居ますが、彼の場合は特にダメですね」

だが、そんな三人に対して楓、古、木乃香は文句を一つも言わない。寧ろ木乃香など、どこか心配そうな表情でサイの向かった方を見ている・・・いくら木乃香が天然でポヤツとしているにしても、これ程に心配そうな表情をするだろうか。

「ふむ、少し行つて来るでござるよ、皆の衆」

そう言うと楓はサイの向かった方向へと向かう。

「あんな奴放つて置きなさいよ」などと明日菜が言うが、それに対して古が呟く。

「アスナ、ダメアルね。」

ワタシ、知っているアル・・・明日菜達よりもかなり前に気が付いてたから。

サイは・・・アスナ達が目を覚ますずっと前から少しも寝ないで危なくないか見張つてたアル」

「えっ・・・古ちゃん、それどう言う事!？」

明日菜の問いかけに今度は木乃香が答える。

・・・彼女は天然だがとても優しい、そして“人の嘘”を見抜く事も少なくはない。

彼女もまた、古やら楓よりは起きるのは遅かったが、サイが休む事無く動いていた事を知っている。

「アスナ、サイくんは食料探しとか、出口探す為に休まなかつたんやえ。」

その証拠にほら、向こうにキッチンとか食材がある事を見つけといてくれたんや。

サイくん、口は悪いけど・・・気を失つてたウチらの事を心配してくれたんやと思う」

そう・・・サイは実は下に落ちてから一睡もしていない。

この場所に危険がないか、脱出口はないか、食糧などはあるかという事を彼女達が気絶している間に調べていてくれたのだ。

「アスナさん・・・おに、いやサイさんは確かにいつも口が悪いです。冗談言ったりもしますし。でも、冗談抜きで言う時は何時でもボクらを発破掛けたり、道理が通らない事をした時にしか言ってます。あれは本気でボク達を心配してるんだと思います」

ネギにもそう言われ、文句を言っていた三人は静かになる。

思えば確かに、サイは口が悪く冗談交じりに言っているが・・・時より年齢不相応な表情になって辛辣な事を言う時は、いつも誰かの為になる事だけだ。

それに彼は余計な事は言わず、事を実行している 賞賛やら見返りやらなど求める事もなく。

『ガサガサツ』・・・。

そんな草木を掻き分けるような音がする方を向くと、楓が戻って来ていた。

「長瀬さ・・・し、静かにしてあげてくださいよ。サイ殿は向こうで絶賛居眠り中のご様子から・・・うん」

どうやらサイは皆が起きた事によりやっと安心出来たようだ。

皆から見えない裏の方へと向かい、何十時間ぶりにゆっくりと休めたのだろう。

それを聞いた先程サイに文句を言っていた三人は、心の中でサイに謝っていた

一方その頃、地上では。

「何ですって!? 2-Aが最下位を脱出しないとネギ先生と光明司さんがクビに!？」

どうしてそのような大切な事を言わなかったんですの、桜子さん!」

同じクラスの出席番号17番の椎名桜子しゅうなな くらげから覗いて見てしまったネギの課題の内容を語られた委員長ことあやかは大声を上げる。

「あぶぶっ!? だ、だって先生に口止めされてたし、サイくんにも『余計な事は言つな』って言われてたし!！」

その言葉に委員長は手を離す。

このままでは熱烈LOVEのネギと、何処となく“昔の自分”と同じような目をしていた為か気を掛けていたサイがクビとなってしまう。

外見に似合わず友人やら気を掛けた人物、つまり友達想いなあやかは皆に発破を掛ける。

「とにかく皆さん、テストまでしっかり勉強して最下位脱出ですよ。」

その辺の普段真面目にやっていない方々も、良いですわね!？」

だがその時、のどか&友人の早乙女ハルナ（通称：パル）によってバカレンジャー+が行方不明になったという凶報が齎された。

「みんな、大変だよ!!!!」

ネギ先生とサイちゃんとバカレンジャーが行方不明に!！」

「「「「「「「「「「「「えっ（やっぱりダメかも・・・）」「「「「「」

大騒ぎになる2-A。

しかし相も変わらず、エヴァンジェリンは落ち着いていた。

「やれやれ・・・あのバカは本当に面倒事に巻き込まれるのが好きだな」

「・・・サイさんや皆さんは大丈夫でしょうか、マスター」

心配そうに安否の知れない者達を思い、呟く茶々丸。

まあ・・・正確に言えば、その中でもある人物に対して無意識に一番心配していたが。

「まあ、心配要らんだろう。」

あそこはジジイがいつも目を光らせている場所だ・・・大方今回の事もジジイの思惑か何かだろう。

それに茶々丸、お前は忘れている。奴は私の心の壁を悉くぶち破り、全力の私をぶっ飛ばした男だぞ？

この程度の状況など『関係ないね』などと言いながらいつものアホ面を見せるさ。

私の認めた男なのだ、心配はない・・・問題はそれより、作り過ぎた弁当をどうするか、だ」

エヴァの目線の先には、明らかに二人で食べるには多すぎる量の弁当箱が見える。

・・・それを見ながら自然とエヴァは笑い、茶々丸は表情には出さなかったが嬉しげだった。

翌日、日曜日となり試験まであと一日と迫ったその頃。

他のバカレンジャー達がネギと共に勉強に勤しみ続ける間、サイは爆睡し続けた。

・・・後々に解った事だが、魂獣解放は今のサイにとっては心身ともかなりの疲労を与えるらしい。

更に疲弊した状態を回復する為に一種の短い『冬眠状態』に陥るらしく、その状態の時はどんなに起こそうとしても起きないのだ。

「・・・ん？ ファアアア、良く寝た」

起きた時にサイの耳に響く少女達がはしゃぐ声。

丸一日以上寝ていて鈍った体を動かしながらサイの足は自然と声のする方向へと向く。

「あん？ 何やってんだテメエ等？」

・・・その声が響き、其処に居る者達の姿がサイの目に入った瞬間。一瞬で少女達の時が止まった・・・。

「「「き・・・ききききき・・・」」」

「んだよ、木なんぞ周りに腐る程あるだろうが」

サイは興味も無くそう返す。

・・・本来、今の状況は普通の男子なら落ち着ける訳など無い筈なのだが。

何故なら、サイの目に入ったのは・・・裸のまき絵&古&楓だったのだから。

まあどうやら、楓は強いてあまり気にしては居ないように見えるのだが？（表情が表に出ていないだけか？）



「「「きゃあああああつ~~~~~~~~!!!!!!」」」

「五月蠅えなあ・・・ああ、何だ湯浴みの最中かよ。

悪かった、悪かった、こちらら今起きたばっかでボーっとしてたモンですよ。

まあ、犬に噛まれたとでも思っただけで諦めてくれ」

・・・慌てて水の中に体を沈める三人。

それは当然だ、原作の場合は男とは言え10歳（満9歳）の少年に見られただけなのだから冗談で済む。

しかしサイは外見はネギと同じ位でもれっきとした同級生だ、恥ずかしさの度合が違う。

顔を真っ赤にしてサイの顔を見ている三人に罪はあるまい。

「・・・見た、でござるな？（ボソツ）」

「ああ？　なんか言っただか、細目女？」

良く見れば、細目に少々涙を滲ませている様に見える楓。

プルプルと小刻みに、まるで子犬のように震えながらサイの方を見て返す。

「乙女の柔肌を家族以外の男おのに見られるなど・・・。

ええいつ、サイ殿！！　かくなる上は責任を取ってもらっただけでござるよ！！！！！！」

「・・・は？　何物騒な事言っただけでメエは？」

・・・どうやら楓、昔の忍びのような喋りかたしているだけあり考え方が古風のようなようだ。

まっ、責任などと言われても当の加害者であるサイには全く理解出来ないのだが。

すると・・・ややこしい事にもう一人暴走する小娘が居た

「サ~~~~~イ~~~~~!!」

ワタシの裸見るなんて、良い度胸アルね~~~~!? 未来の婿殿にか見せる心算無かったアルよ!!」

「・・・いや、だから不可抗力だと言ってるだろが。

そもそも見られたくなけりゃ、俺が寝ている付近で湯浴みなんぞしなきゃ良いだろ?」

そんな言葉で婦女子の心が収まる訳など無い。

特に、この二人のように古風なタイプの者達になど通じる訳などあるまい。

・・・微妙に虎の尾を踏んでしまったような気がするが。

「許さんアル!! こうなったら責任としてワタシの婿になれアルよ、サイ!!」

「いや、だから何でそうなる?」

サイにとってはどうでも良い事。

そもそも良く考えてみれば、少し前(二日前?)にサイ自身も半裸を見られているのだが。

まあ、男と女では見られるという事の度合は違っただろ?。

「ちよ、ちよっと待つでござるよ、古!!」

拙者が責任を取ってもらっでござるぞ!? お主は下がっておれ!

「!

「何言ってるアルか楓!!」  
そもそもサイを最初に目をつけたのはワタシアル!! 楓こそ引っ  
込んでるアルよ!!」

仕舞いにや言い争いを始めるバカブルーとバカイエロー。

尚、古の『目を付けていた』と言うのは最初は本気で楽しめそうな  
相手と言う意味で目を付けたただけだ。

しかしそれはどうやら、楓も同じく『別の感情も孕んでいた』よう  
だ・・・ぶつちゃけ二人は気付いていないが、最初のクラスでの洗  
礼の時の華麗な姿に『一目会ったその日から、恋の花咲く事も在る』  
状態なのである。

「はぁ・・・バカに付き合っても面倒臭え。」

おい、バカピンク。 此処から出たら詫びに何か奢ってやるからそ  
れで許せ。

あそこのバカ二人にも気付いたらそう伝えておいてくれや・・・は  
あ、本当に疲れるぜ」

「んも、しょうがないな。」

じゃあ、此処から出たらスイーツ奢ってねサイくん

・・・あとさ、まき絵だよ私の名前は。 バカピンクは止してね」

『スイーツって何だ?』

などと言う初步的な疑問を浮かべながらサイは後ろを向くと手を振  
りながら去って行った。

ちなみにその間、バカブルー&バカイエローは言い争っていて気付  
かなかつたとさ・・・

「はぁ・・・冗談じゃねえよ全く」

命からがら（でもないか？）乙女コトメの修羅場を乗り越えてきたサイ。だが・・・悲しいかな修羅場というのは意外と続くものである。

「つて・・・アンタ、こんな所で何やってんのよ!？」

いきなり後ろから声を掛けられるサイ。

そこで止せば良いのに、学習していないのか気にもせず後ろを向いた。

・・・その瞬間、サイは顔に思いっきり水を叩き付けられたのだ。

「ああ？ 誰だ・・・ブハツ!？」

「見るなあああ、このバカアアアア!!!」

・・・水の所為ですつ転ぶと、その原因が誰なのか理解出来た。

其処にはバスタオルを体に巻いた明日菜が仁王立ちのように立っていたのだから。

「オイオイ・・・厄日って奴は続くのかよ。

てか、俺は何か悪霊にでも取り付かれてるんじゃないやねえだろうな・・・」

「うつさい、このバカ!!!」

起こしてもいつまでも起きないし、起きたと思ったら人の事覗くし・・・喧嘩売ってんのアンタは!？」

そもそも二日も眠り続けてるんじゃないわよ!!!」

「知るかアホが。それに人が何してようがテメエにや関係ねえだ

る？

ピーチクパーチクヒヨコみてえに騒いでんじゃねえよ、耳障りでしょうがねえ」

怒気を放つ明日菜と冷静に文句を返すサイ。

だが・・・そこでふと、明日菜が小さな声で何かを呟く。

「・・・・・・・・つたわよ」

小さな声だった為聞えなかったのか、サイは「ああ？」と聞き返す。・・・うむ、この男、確実に誰に対しても喧嘩を売れる人物だろうと思われる。

大方文句でも言ったのだらうと聞き返すが、返って来た言葉は意外なものだった・・・。

「悪かったわよ・・・。

アンタ、アタシ達が目を覚ますまでずっと危なくないか見張ってたんでしょ？

そんなアンタに二日前、何も知らないで文句言ってたから」

彼女は自分が間違っていたと思えば謝れる人物なのである。

「・・・・・・・・はっ、何の事だか知らねえよ。

それに謝られる必要なんてこれっぽっちもねえ・・・俺はテメエで勝手に搜索してただけだ。

自分で好きな事やってんだ、感謝も謝罪も俺には必要ねえ」

相も変わらず悪ぶるサイ。

そんな天邪鬼な彼に明日菜は溜息を吐きながら・・・と、次の瞬間。

「きやあああああああ！！！！！！！！！！」

「大変やアスナ~~~~！！ あつ、サイくんも居たねんな！！ 大変やねん！！」

響き渡る悲鳴に走り込んで来る木乃香。

彼女の表情を見れば、緊急事態だというのは直ぐに解る。

呼ばれて一緒に向かうと其処には・・・二日前に此処に落とされる事になった原因のゴーレムが、まき絵を手で握っていたのだ。

更にサイをムカつかせた口調でゴーレムは言う。

「フオフオフオ、此処からは出られんぞ・・・もう観念するのじゃ！！」

迷宮を歩いて帰ると三日はかかるの・・・「オイ、デカブツ」・・・

・フオ？ 何じゃ小童こわっは？」

三日もかかってしまえば試験は受けられない。

絶望的な言葉に皆がうなだれる・・・しかし台詞を言おうとした所をサイに邪魔されるゴーレム。

そこでサイが語ったのは、皆の絶望を払拭する言葉だった。

「出口ならもう既に見つけてるぞ。

まあ・・・それを言う前に俺が寝ちまったから説明してなかったがな。

オイテメエ等、さつさとその先の滝の裏まで全速力で走れ！！」

「~~~~~~~~えっ？」「~~~~」

そんな惚けた表情で聞き返すバカレンジャー達。

サイはゴーレムが自分の言った言葉に驚いている間にまき絵を掴んでいる方の腕を蹴り上げて助け出し、楓に投げ渡してから怒鳴って

言い返す。

「えっ？　じゃねえ！！　さっさと走れこのアホ共！！」

怒鳴り声にビクッとした明日菜達は言われた通り滝に向かって走り出す。

しかもちゃっかりとしていると言うか何と言うか、ゴーレムと共に落ちてきた魔道書『メルキセデクの書』をいつの間にか手にしながら。

「フオ、フオオオオ！？　ま、待つんじゃない！！」

此処から始まるはゴーレムと人間（一人、半人間）の追いかけっこ。滝の裏側にあつた非常口と書いてあつたドアには問題が付いていたが、何故か簡単に解けてしまう。

そのまま螺旋階段を進むと所々に数学やら歴史やら現文やらの問題があつたが、バカレンジャーの名を払拭するかのようにならずらと問題が解けていく。

しかし・・・何事も油断とは命取りだ。

偶々螺旋階段に生えていた木の根っこのようなものに足を取られ、夕映がこけてしまった。

「こ、こんな所に木の根が・・・あ、足を挫きました。

み、皆さん先に行ってください・・・ネギ先生、この本があれば最下位脱出が・・・」

夕映は自分が足手纏いにならないように魔道書を託そうとする。  
しかし・・・。

「チツ、鈍臭え女だな・・・ほれ、ちつと掴まってる!!」

「わ、わわっ!? あ、あの・・・」

サイが倒れた夕映をお姫様抱っこすると走り出す。

身長は殆ど変わらないので、どう考えても重い筈なのだが・・・サイは顔色一つ変えない。

・・・其処まで体が鍛えられていると言う事だ。

「あ、ありがとう、です・・・サイさん・・・」

「口開くんじゃねえ、舌嚙んでも知らねえぞ!!」

恥ずかしいのか顔を紅くしながら礼を言う夕映を抱いて全速力で階段を登るサイ。

尚、そんなサイを後ろから（全速力故に先頭に居る）羨ましそうに見ている視線が二つあった。

勿論それは、サイに裸を見られて責任云々などと言っていた楓と古だ。

「こら〜サイ!! イチャイチャするなアル〜!!」

「サイ殿〜!! 拙者と言う者がいなから!! は、破廉恥で

ござるううう!!」

「・・・何なのですかアレは?」

「・・・俺に聞くな」

そんなこんなで数々の問題を解き、螺旋階段の終わりまで登り切った一行。

まだ地上は遥かに上のようだが、其処には地上への直通の高速エレ



ベーターがあった。

「み、みんな、早く乗って乗って〜〜〜!!!」

「フオオオオ!? ま、待て、魔道書を返すのじゃあああ!!!」

横の壁を破壊しながら迫るゴーレム。

急いでエレベーターに乗り込む一行、しかし現実とは“楽”が許される程甘くはない。

『ブブブブブブブブブブ!!! 重量OVERデス』

「「「い、いやあああああ!!!」」」

悲しいかな、重量過多により無常にもエレベーターは動かない。

どうやらほんのちよつとのオーバーの為、服を脱いで軽くする明日菜たち。

・・・てか、お前等。少しは恥らい持てよ。

しかしパンティ一丁になるまで服を脱ぐも、ブザーは鳴りつぱなしだ。

そんなバカな行為をしている間に遂にはゴーレムに追いつかれ、逃げ場を無くしてしまった・・・。

「フオオオオオ、追い詰めたぞ〜〜〜!!! さあ、覚悟するのじやあああ!!!」

「キヤアアアアアアアア!!!」

まさに絶体絶命 最早もう終わりかと思った、次の瞬間。

咄嗟にエレベーターから降りる人物が居た それはなんと、まだ魔法が封印されたまんまのネギだ。

「ボクが降ります!!」

皆さんは先に行って明日の期末を受けてください!!」

その姿は実に凛々しい。

ネギは解っているのだ。 例え魔法が使えなくても、傷だらけになっても、護るべき『誇り』があると。

其処に居たのは頼りない子供先生ではない・・・一人の戦士の目をした人物だ。

「動く石像めっ!!」 ボクが相手だ!!」

「フオフオフオ、良い度胸じゃ・・・くらえ~~~~い!!」

ゴーレムの腕がネギに迫る。

今の状態は10歳の子供と全く変わらないネギにとって、こんな一撃を喰らえば下手すれば致命傷だ。

だが、ネギは逃げずに明日菜達を逃がす為に一步も退かない!!

その時だった。

誰かが優しくネギの頭に手を置いたのだ・・・。

「中々良い啖呵だったぜ。

お前、根性あるじゃねえかネギ・・・全く、一瞬出る機会を失った  
まった」

「・・・えっ・・・?」

ネギの横にはサイが笑いながら立っている。

そしてそのまま、襟首を掴むと・・・エレベーターの中にネギを投げ込んだ!!

「あ、あう！？ お、お兄ちゃん何を！？」

明日菜にキヤッチされるネギ。

エレベーターの外には、いつもの不機嫌面からは想像出来ない誇らしげな笑顔のサイが居た。

「だがな、ガキが格好付けるなんざ十年早えよ。

・・・お前が教師になれるかどうか瀬戸際の期末試験だろ、だったらお前が居なきや意味ねえだろうが。

ほら行け、しつかりやって来い・・・ああ、後ついでにこれ貰っとくぞ」

一瞬の動きでサイはエレベーター内に在った『メルキセデクの書』を持ち出す。

その際に外に投げ出された明日菜達の制服を投げ込みながら。

「「「あつ・・・そ、それは！！」「」」

声を上げるバカレンジャー達に対し、サイはこれまた珍しい悪戯好きっぽい笑い顔を見せる。

「こんなモンで頭良くなったら誰も苦勞しねえよ、バカ共。

つまらねえ小細工しねえで、さっきのネギ見習って裸一貫でやってみろ。

・・・大丈夫だ、本気でやった努力つてのは嘘なんぞ付かねえ」

そのまま外のエレベーターのボタンに蹴りを叩き込む。

『重量オーバー』と言う紅い文字が出ていたコンソールは『OK』に変わり、ドアが閉まっていく。

最後に閉まる瞬間、サイは背を向けたまま軽く手を振った

「・・・さてジジイ、これで良かったんだろ？ ホレ」

ゴーレムに『メルキセデクの書』を投げ渡すサイ。

飛んで来た世界で希少、最高の魔法書を起用に大きな掌で受け取る  
ゴーレム。

「フオフオフオ・・・何時から気付いつとったんじゃ？」

「そうだな、あの『地底図書室』とか言う所に落とされてから少し  
後だ。

辺り調べてみりやご丁寧に全教科のテキストだの、大量の食材の置  
かれたキッチンだの、トイレだのなんてモンが目立つように用意さ  
れてたからな・・・一回の偶然は“唯の偶然”だが、二回以上も偶  
然が続くつてのは、それは“必然”だろ？」

答えを聞いてゴーレム、いや学園長は感心した。

彼は学園長の大切な孫娘の木乃香や、本当の孫のように可愛がる生  
徒達の事を護るだけでなく・・・見回りしている間にそれだけ情  
報を得て、それを思慮し結果を導いたのだから。

初めてシスターシャークテイに紹介された時から只者ではないと思  
っていたが、予想を遥かに上回っているようだ。

・・・まあただし、女生徒の裸を見ても何も気にならないなどと一  
般常識に欠ける所も在るようだ。

「フオッフオッフオ・・・意外とお主も教師でもやれば良いかも知  
れんな」

「・・・勘弁してくれ、俺あ人様に物事教えられる様な奇特な人間じ

やねえよ」

そこでサイは遙か上に見える空を見つめた。

どうやら此処からでもあと30〜50程の階層が在るようだが

「どうするかね、ワシが上まで連れて行ってやるのかの？」

エレベーターは一方通行じゃから、戻って来るまでに大分時間が掛かってしまうしのう。

じゃが済まんが、下手せんでも試験には間に合わんぞい？」

エレベーターから先には道がない。

此処から先に行くのであればそれこそ、魔法でも使わない限りは無理だろう。

だが・・・その学園長の申し出に首を横に振るサイ。

見ればその表情は不敵に笑っていた。

「はっ、関係ねえよ。

それにあれだけの事言った手前、試験受けられなくて0点でしたじやお話にもならねえしな。

だが・・・ちつと遅れるかもしれないからジジイ、テメエの部屋（学園長室）で試験受けさせて貰うぜ？

まあ文句はねえよな？ 元々、こんな大掛かりな事に俺を巻き込みやがったんだからよ？」

「いや、そりゃ別に構わぬが・・・。

お主、此処から一体どうやって上に戻る心算じゃね？」

するとサイは何を思ったか、掴む所も何も無い真っ平らな壁に向かって跳躍する。

驚く学園長を尻目に、彼は思いっきりその真っ平らな壁に蹴りを打

ち込んだー！！

「オラアアアア！！！！！！」

その一撃に陥没する壁。

更に逆の足で思いつきり壁を蹴ると其処も陥没してめり込んだ読者の皆さんは解った人も解ってない人も居ると思うので一応説明しておこう。

要はサイ、真つ平らな壁に蹴りを入れて陥没させて足場を作り、それを利用して上に登っているのだ。

だがこんな非常識な方法、直ぐに疲れて……。

「オラオラオラオラオラオラオラオラアアアアアア！！！！！！」

ああ、考えてみればサイの存在自体非常識であった。

目にも留まらぬ速さで蹴りを放ち、しかも絶妙に壁の孔を崩さないように力加減をしながら登っていく。

これには今まで長きに渡って魔法使いとして、そして関東魔法教会の理事長としてやってきた学園長も開いた口が塞がらなくなっていた……本っ当に非常識な小僧である。

「……お主、本当に人間か？」

こんな学園長の一言が漏れたのも、仕方ないと言えば仕方ない事なのだろう……。

こうして図書館島の冒険・第一幕の幕は下りる。

図書館島から帰ったバカレンジャー＋ネギ&木乃香は残ってしまっ

たサイの事を心配しつつも残り5時間で出来る事をやり、期末試験に遅刻したものの期末試験を受け終わる。尚、時間の量が原作と違うのは、サイの爆睡が原因だという事は言うまでもない。

その後、採点の際に学園長のミスにより混乱もしたが……。結果、皆の努力の成果により2 - Aは見事学年トップの成績を勝ち取る。

それによつてネギの教師としての採用が決まり、物凄い疲労感を出しながらもサイが戻つて来た事によつてめでたく期末テスト大作戦は大団円を迎えたのであった。

ちなみに余談だが、この期末テストにおけるサイの点数は全教科100点満点であった。

これは別に学園長が何かをしたのでも、サイが天才と言う訳ではない。他にれっきとした理由がある。

実はサイ、勉強は死ぬほど嫌いであり苦手だが、ある取柄が在る。それは莫大なまでの記憶力だ、しかも分厚い国語辞典を高々1日程度で記憶してしまう程に。

その記憶力の良さに気付いたエヴァが、アンチヨコ帳と銘打つて茶々丸や自分が十五年も中学生をやつて来たのを利用して大体出そうな場所を調べ、公式やら英文やら説明やらを書いておいたのである。・・・しかも、念の為にテスト用紙の問題の出る順序も確認した上で、だ。

それによりサイは英語の問題は英単語、国語の問題は文章、数学の問題は公式と、記憶にあるものを片っ端から書いていっただけである。

・・・つまり、問題の内容は理解出来て居なかったが、覚えていたものが全てテストの答えだった為に全問正解して全教科満点だったという事だ。

そしてもう一つ、これも余談ではあるが・・・。

「待つアルよ、サイ〜〜〜〜!!!」  
ワタシの婿殿になる以上、ワタシより強くなければダメアル!!  
だから本気でワタシと戦うアルね〜〜〜〜!!!」

「むっ!!! 違うでござる古!!!」  
サイ殿は拙者の旦那様になるでござるよ・・・と言っ訳で、里の者達を納得させるには拙者より強くあらねばならぬ!!!  
さあ、サイ殿、拙者と本気で戦って拙者に勝つでござるよ、ニンニン

「サイ、貴様・・・私と言うものがありながらあああ!!!」

「・・・不潔です、サイさん」

「何勝手な事言っただテメエ等は!?!」  
それに待て、何だ木乃香!?! 何その後ろから出てるブラックな気配!?! 怖いっば、オイ!?!」

「うふふふ・・・ダメやえ、サイくん。  
それにウチ、別にぞくんぜん怒ってなんてあらへんよ〜(怒)」

「お、お嬢様・・・サイさん・・・」



「・・・やれやれ」

「あ、あわわわわわ、さ・・・サイさん・・・」

「放っておくですよ、のどか・・・全く、バカばかりです」

「ら、ラブ臭が！！ 私のセンサーが振り切れる程のラブ臭があああ！！！！」

「わ、私は止めとこつと・・・」

(・・・この状況をシスターとココネに知られたら・・・ブルブル、寒気がするっすよ)「」

「あんのバカ！！ 少しでも格好良いなんて思った私の純情を返しなさいよおお！！」

「ア、アスナさん落ち着いてください！！ に、逃げてええお兄ちやあああん！！」

・・・その日から昼の穏やかな昼食はがらりと変わる。

当の本人には基本的に色恋沙汰には全く興味がなく、その意志は無くも周りの者達が暴走していく。

どうやら此処から、サイの己自身が予想だにもしなかった女性関係の受難は始まるようだ。

勿論、それぞれが想いに気付いている気付いていないに関係なくである。

普通の男ならば大喜びだろうが・・・。

「冗談じゃねえ！！」

チツ・・・こうなつたら、戦略的撤退だ！！ アバヨ、アホ共！！」

そのまま屋上を飛び降りて逃げ出すサイと追いかける少女達。

此処から彼と彼女達の関係がどうなっていくのか、それは解らない。

だが・・・一つだけ、解る事がある。

少なくともサイにとっては実に不本意だが、退屈しないで済みそう  
だという事だ。

そしてもう一つ、彼女達は知らない事がある。

それは彼がどのような人生を生き、そして今のような人格を形成さ  
れたかと言う事だ。

それを知ったその時

果たして、淡い（大分物騒なものも居るが）初めての想いを抱いた彼  
女達がどのような答えを出すか。

答えを知る者など何処にも存在しない・・・。

第十二話：期末テスト大作戦・後編（後書き）

・・・思えば原作も大分無理していたような気がしますねえ。

10歳（満9歳）の少年に試練に修行に恋愛って・・・ぶっ飛ばない方がおかしい様な気が・・・。

まあ、それが赤松イズムなんですけどね^^

後編終わって唐突に暴走しまくりの婦女子が多すぎます！！

ですがそれもこの作品の『ハーレムコメディ』と言う部分にかかる事なので、どうか大らかに許してください

原作どおりのカップリングが好きな方は悪い事は言いません、このような作品からは回れ右してダッシュで後ろを振り向かずに逃げちゃって下さいな

多分此処から更に暴走は混沌カオスへとランクアップしそうです^^

では、次回をどうぞ楽しみに^^

製作者のZEROからお伝えいたしました

第十三話：心の仮面（前書き）

本当にオリジナルストーリーは苦手です^^  
今回は多分にストーリーリーが滅茶苦茶っぽいですがご容赦を。

### 第十三話：心の仮面

苦行の期末テストから何日か後……。

3学期の終業式の丁度その日、朝から賑やかな何時もの麻帆良の朝の風景。

だが……いつもと違う部分が幾つかあった。

「うーん、良い天気　終了式日和だなー、ねえお兄ちゃん」

「ああ？　つたく、終業式だか何だか知らねえが……。

何で態々、わたくし半日だけ学校なんぞに行かなけりゃならねえんだ、全くよお」

期末テストを乗り越えた事により新年度の4月から3・Aの担任となる事が決まって嬉しいネギ。

そして、此処の所色々な事情により騒ぎの中心人物となっており、機嫌の悪いサイ。

まさにこの二人、完全に正反対と言える態度だ。

「朝から何機嫌悪そうな顔してんのよ、アンタ？」

「あつ、おはよーサイくん

嫌やわ、そんなお顔ばっかしてると直ぐに釣り目の狐さんみたいになっただけで？」

そんな仏頂面のサイに話しかける明日菜と木乃香。

まあ……彼が機嫌が悪そうにしている理由を彼女達は知っているので、それ以上言う事は無かったが。

サイの機嫌の悪い理由、それは……。

「居たぞ、こつちだ!!!」「逃がすな、困め!!!」「絶対に倒すぞ、良いな!!!」「おおっ!!!」

サイを囲む目付きの悪いこの連中は誰なのだろうか？

どうやらヤンキーのような輩から、道着姿の連中まで様々で・・・中には目が血走っている奴まで居る。

その連中を見た瞬間・・・サイは溜息を吐きながら呟く。

「全くテメエらは毎朝毎朝五月蠅えな・・・。」

俺なんぞに関わって無駄な時間使う暇があったら、その情熱をボランティアか何かにでも使え。

少なくともその方が俺も毎日静かになって清々する」

だがその言葉を聞くや否や、攻撃を仕掛けるガラの悪い連中。

全員で囲み、全方向からの攻撃ではサイに避ける場所など無い筈だが・・・。

「コッコッコッコッ やったか!?!」「LLLLL」

「やったか、じゃねえよバカ共が・・・」

その声のする方向をガラの悪い男達が見る。

何と其処には 一人の男の頭の上で片手逆立ちしているサイの姿があった。

しかも見た所、傷どころか塵や埃に汚れすら一つも付いていない・・・。

「で、どうすんだ？

此処から続きをやりてえってんなら構わねえぜ・・・変わりにアス

ファルトの上にキスする事になるけどな」

頭から飛び降り、華麗に着地するサイ。

次の瞬間、静かに男達を睨み付けると・・・冷や汗のようなものを額や顔中から流しだす。

「……………く、クソ……………撤収だ！！ 覚えていろ！！」「……………」

「……………もう二度と来るんじゃないやねえよ、バカが」

男達の吐いた棄て台詞に律儀に返す。

実は此処の所……………毎朝、毎夕彼が登校したり気ままに麻帆良搜索をしようとするとは何時も絡まれていた。

口が悪い事は本人も自覚しているし、これまでも描かれなかっただけで何度か喧嘩を売られる事もあったのだが……………。

最近のサイに対する襲撃は度を越している 原因も解らずに絡まれていてば、サイでなくとも機嫌が悪くなるのは当然だろう。

まあ……………その『原因』は本人の知らぬ場所にあった。

「オオ、？<sup>ニハオ</sup>早サイ」 それにネギ坊主にアスナにこのかも……………！！」

「あつ、お早うございます古菲さん」

「おはよ、古ちゃん！！」

「おはよ〜 今日も元気やな〜」

「ゲツ……………用事思い出したんでな、悪いが先に行くぞ」

普通に挨拶する者達と違い、早々と先に行こうとするサイ。

そんなサイの後ろから、腹に掴まって古菲は甘えるように呟く。

「サ〜イ〜、何でワタシが来るとつれないアルね〜？ サイとワタシの仲じゃないアルか〜」

「五月蠅え、くっ付くな・・・ってか、何時からどんな仲になったんだテメエと俺が!?!」

ずりずりとサイの腹に掴まったまんま引きずられる古。

しかし、サイの腹から手を離す事など無く、更に甘えたような言葉を言う・・・。

「そりゃあ、サイはワタシの婿殿アルから　それとサイとは本気で戦いたいアルし」

「知るか、拳法バカ!!!」

それに人を勝手に婿扱いするんじゃないやねえ、そう言うモンは両者の合意の上で・・・」

サイと古のそのイチャつき（大きな誤解だが）を見て、殺気を纏った視線を向ける者達がちらほら。

実はこれがサイが最近やけに絡まれる理由の一つである。

古は前に説明したが、麻帆良学園で秋に開かれる格闘技大会『ウルティマホラ』の二年連続のチャンピオンである。

その為か麻帆良の格闘技系の部活動者から憧れられ慕われ・・・寧ろ、崇拜に近い意識すら持たれているのだ。

そんな彼女が最近、ある一人の人物にご執心であるが故　彼女を慕う者達にとってサイは『狙われるべき標的』となってしまうているのである・・・。

「ね〜ね〜、ちょっと位良いアルか〜。　お願いだから戦って欲しいアルよ〜、ね〜え〜」

「止めるつつうに、そんな猫撫で声出した所でやらねえつつってん



だろうか」

まっ、こんな風に可愛い態度をサイにのみ取っているというのも原因だ。

要はもてない男共の嫉妬の対象になってると言っても過言ではないだろう

さらに、この状況で面倒な事が・・・。

「ほう・・・サイ、貴様良い度胸だな・・・。

私の前でこの朝っぱらからベタバタバタと・・・本当に良い度胸だなあ・・・？」

「・・・サイさん、朝から不潔です」

「こら古、抜け駆けは許さんでござる！！

それにサイ殿にぞ、そのように抱きついて・・・破廉恥でござるぞ！！！」

其処に現れたのは青筋を立てたエヴァンジェリンに何時も以上に無表情な茶々丸、そして慌てている楓。

朝っぱらのこの状況から少なくとも可愛らしい人物達からこんな風に嫉妬されるのを見れば、誰でも男なら嫉妬の炎を燃やすだろう。

もし、嫉妬だけで人が殺せるのならサイは今頃とつくに地獄行きだ。

更に、この三人以外にもサイに対して嫉妬の念を向ける人物が居た。

それはかつてサイに初めて会った時に、彼の優しさに触れた少女・・・このかである。

「サイくん、早く行かな遅刻するえ」

「ちよつと待て！？」 何で笑いながら強烈な殺気のような物を送っ

てくる!？」

見た目と表情は慈愛に満ちた聖母、しかしその実・・・怒りを表す青筋を立てているのか。

彼女の嫉妬の念(?)は、まるで殺気のように鋭かった・・・。

しかし・・・これも三日も続けば日常の風景とも言えるだろう。

サイにとっては極めて不本意だが、2-Aの生徒達にとって、これはもう既に勝手知ったる光景だ。

中には状況を見ても気にせず茶化す者も居た  
それが2-Aクオリティと言った所か？

だが・・・そんな朝の騒がしい日常を溜息を吐きながら、関わりにならない様になっている者も居た。

「・・・ヤレヤレ、朝から賑やかな連中だな。

つたく、そもそも何なんだ全く。何で10歳の教育実習生だの、女子校に男が転入してくるだの非常識な事ばかり続くんだったつうの・・・」

このサイのような皮肉を呟いている少女の名は『長谷川千雨』はせがわちゆめ。

非常識が揃いまくっている2-Aの中では、唯一と言って良い程の地味さと常識を持つ人物である。

その突っ込み属性の強さは、さしずめどこぞの漫画の“ダメメガネ”並に鋭い。

「そもそも何で10歳のガキが教師なんだ!!」

それに一年の頃から思っていたけど・・・異様に留学生は多いわ、何やらどう見ても中学生に見えない奴等は居るわ、口ボは居るわ・・・

。

極め付けは女子校に男子生徒かよ!? ムキイ、私の普通の学園生活  
を返せってんだよおおお!!」

・・・コイツも奴等に負けず劣らず騒がしいが。

更にこの後、終業式の際にネギが4月から3-Aの担任をする事を知った千雨の騒ぎっぷりは尋常ではなかったそうだ。

「ったくよ、冗談じゃない!!」

何なんだよ、何で私の周りにはこんなに非常識な連中ばっかなんだ、  
ああ!？」

学生寮まで急いで戻り、乱暴にドアを閉めた千雨にとってはもう限界だった。

予想のつかない事象を誰よりも嫌う彼女にとって、己の部屋内のみが唯一の心を許せる場所である。

・・・実は2-Aでは今『学年トップおめでとうパーティー』なるものが開催されていたが、元より変人の集団に馴染めない彼女は吐き出せない鬱憤を溜めに溜めまくっていたのだ。

「違うだろ!? 普通の学生生活はこうじゃないだろ!？」

パソコンのキーボードを乱暴にバンバンと叩く千雨。

実は彼女、性格的に皮肉屋で対人恐怖症の気があり、視力が両方1.2もあるというのにメガネを掛けている・・・勿論、伊達眼鏡だが、彼女が伊達眼鏡を掛け続けているのは、それが無いと人前に出られない為なのだ。

そして彼女にはもう一つ、秘密がある・・・それは、彼女の『対人

恐怖症』と言う事と眼鏡越しで無ければ人と話せないという事にも関係していた。

「ハアハア・・・この理不尽さを社会に、いや大衆に訴えてやる！！愛されるとはどういう事か、あのガキ（ネギ）に教えてやるわよ」

一頻り叫んだ後、彼女は鏡に向かう。

彼女が生きてきた人生の中で唯一、眼鏡と言う一枚の壁を隔ててしか人を見れない彼女が素顔になれる瞬間。

それが彼女の趣味であり、同時に秘密でもあった・・・。

「よしっ！！ オツケー！！」

今日も『ちづ』は綺麗だぴよ~~~~ん」

今迄の地味さとは違って変わり、所謂『ブリッ子』と呼ばれるのが一番似合う姿となった千雨。

そう、これが彼女の趣味兼秘密・・・実は彼女、自作でホームページを作り、インターネット界を牛耳るスーパーハッカーにしてNo.1のネットアイドルと言う裏の顔を持っていた。

・・・この姿の方が生き生きしている所を見ると、こっちの方が本来の性格ではないかと思えてくる。

「おハロー みんな元気」

今日はと~~~~っても嫌なことがあったんだよ~~~~ん（><）i

うちのクラスの担任が変態で、ちづに色目をつかってくるんだよう

目にも留まらぬ速さでキーボードを叩く千雨。

その書き込まれた言葉に対し、モニターには憤りだの同情だのとい

う言葉が書き込まれていた。

「……てかお前、嘘書くなよ。（いや、あながち嘘でもない……か？）」

「え〜〜〜〜？ そんな事ないよ〜〜〜」

でもありがと〜、みんな（＜＞）／今日はお礼にニューコスチ  
ュームお披露目するよ」

返ってきた言葉にニヤニヤしながら独り言を呟く。

そしてデジカメで自分を撮影し始めた。

本当にコイツ、いつもより今の方が生き生きしているように見える  
な……。

「よしっ、撮影完了！！ 次はフォトショップ（PCの画像編集用  
アプリの一種）でお肌を修正開始！！」

そしてFTP（インターネット上でファイルを転送する為のプロト  
コル）で写真をアップロード！！

ほら見なさい男ども！！ 私のびぼーを！！」

涙を流しながら喜ぶ千雨、まさに至福の時という奴だろう。

ネットアイドルランキングでもぶっちぎりの一位となり、大喜びし  
続けていた。

……その為、彼女には後ろのドアがノックされて声はするので居  
るのかと思われてドアを開けられていたのには気付いていない。

「私は女王なのよ！！」

いずれはNET界の？1カリスマとなって、全ての男達が私の前に  
跪くのよ〜〜〜！！」

「……いや、違えだろ。」

そもそもテメエ、そんな作りモンで讚えられて満足か？」

「当然！！ 表の世界では目立たず騒がず危険を冒さず。

リスクの少ない裏の世界でトップを取る！！ それが私のスタンス。  
・・・つて、え？」

つい返事をしてしまったがおかしい。

確かボイスチャットやら何やらといったものは自分の性格上用意してない筈だが・・・。

ふと、何故か後ろから感じた為か千雨はゆつくりと後ろを向き・  
・そこで固まってしまった。

其処に居たのは勿論、台詞の口の悪さで大体誰かは解るだろう。

「・・・一応、ノックはしたんだが。

声は聞えるが出て来ねえから勝手に開けさせて貰ったが・・・いや  
悪い、まさかそんな趣味があるとは知らなかった・・・んじゃ、ア  
バヨ」

そのまま静かにゆつくりとドアを閉めると回れ右するサイ。

しかしそのまま帰る事は出来ず、部屋から『ギャ~~~~~!!』  
と言う悲鳴と共に千雨が飛び出し、サイの腕を掴んで部屋に引きず  
り込んだ。

・・・何時も運動神経が鈍い彼女にしては実にすばやい動きである。

「み、みみみ、見たな！？ そ、そして聞いたな！？

て、ててて、てかテメエ、何で私の部屋に来てんだこの野郎！！！  
！？」

「ああ？ 元々こんな所来る心算も無かったさ。

だがネギのバカが『どうしても皆でパーティがしたい』とか言いや

がったからな・・・来なかった奴を手分けして誘いに来たってだけの事だ。

・・・まったく面倒臭え、俺も呼ぶの面倒だから『コスプレ』だったか？それが忙しくて来れないとでもネギには伝えておくわ」

サイの投げやりな言葉に慌てる千雨。

もしこの秘密をばらされてしまえば、学校中の生徒に後ろ指指されて笑われる事は確定。

更に、極めて不名誉な『変人集団』入りしてしまう事となる・・・それだけは何としても避けねばなるまい。

「くっ・・・ダメだ、消すしかない。

最早コイツを殺るしか　　な、何か凶器・・・いや、鈍器が・・・

」

などと言う物騒な事まで考え始め、鈍器を探す千雨。

まあ、知らないにしても無謀な事を考えるものだ・・・目の前の男は少なくとも、至近距離で銃撃たれても生きてそんな人物なのが・・・。

だが・・・ふとサイは溜息吐くと、今まさに後ろで大きなニンジンの置物を振り上げていた千雨に言う。

「ああああ、心配すんな冗談だよバカが。

別にテメエの趣味なんぞに興味はねえし、何やってようが知ったことちやねえよ。

ネギの奴には風邪引いて体調崩したとでも言っておいてやる」

「・・・へっ？」

バカそうな表情で止まる千雨。

サイは千雨の横をすり抜けると、ドアの方へと向かう。

・・・と、そこで一度立ち止まると再び千雨の方を向いて言葉を紡いだ。

「ネギの奴だつたら此処で強引にでも誘うだろうがな。元々俺も面倒だから行く気もねえし、嫌がつてるモン強引に連れてつたつて碌な事にやならねえよ。」

それに俺あ教師じゃねえし、テメエの親でもねえ・・・一々プライバシーに干渉する気も、興味本位で調べる気もねえしな。これでも一応、口は堅い方だから漏洩については心配要らねえよ」

そう言い終わると扉を開けて出ようとした・・・。だが、そこで再び立ち止まると思い出したかのようにサイは千雨に呟いた。

「ああ、そうだ。」

こりゃ親切心と言うかお節介と言うか解らねえが・・・一つ言わせて貰うぜ。

外面飾り立てても中身がねえんじゃ、今は良いかも知れねえがいずれ檻ホロ褌が出るぞ。

まあ偽りだらけで居ると、結局は今の自分が本当かそれとも偽ってる方が本当かも解らなくなるだろうしよ。

あ、余計なお世話か・・・それに『勘違い』してる女にこんな事言つた所で理解出来る訳ねえな」

一頻り言い終わるとそのまま部屋を出ようとするサイ。

「・・・オイ、ちつと待て。」

何が『勘違い』だ？ 誰が中身がねえだと・・・言ってみるテメー！！」



そこでサイが出て行くのを止めたのは千雨の怒声だ。  
サイはその怒声に迷惑そうに振り返ると、千雨の方をしっかりと見て答えた。

「ああ？ 全部説明して貰わなきゃ解らねえか？

テメエは外面ばっか飾り立ててるだけで中身がねえマネキンかなんかと同じなんだよ。

それにさっき聞いたが愛されるだ？ 何寝惚けた事を言っただけか？ テメエは愛されてんじゃねえよ・・・テメエの外面に“騙されてる”だけだろうが、その位の事気付けバカが」

「な・・・な、な・・・ん・・・だ・・・とおおお！！！！！！」

途端に怒りで顔が真っ赤になる千雨。

いつもの彼女としては実に予想外だが、彼女はサイに殴りかかる。気に入らなかつた・・・訳知り顔でズケズケと物言いをし、自分を全部否定されたようで。

それを避ける事も無く顔に喰らうサイ。

勿論、運動神経の悪い千雨の八工の止まりそうな拳など目を瞑っていても簡単に避けられるが、彼は敢えて避けないで拳を深々と受けたのだ。

サイの思惑とは一体何なのか・・・？

「・・・何だ、何でも無関心かと思えば度胸の据わってる所もあるじゃねえか」

全く痛そうにもせずにはくサイ。

当然だ、この程度の一撃が彼に通用する筈も無い・・・千雨もその事は理解しているだろう。

それなのに尚も殴りかかって来たと言う事は、それだけ今のやつている事・・・常人には理解し難い事だが、彼女にとっては大事な事なのだ。

「はあ、はあ、はあ・・・テメーのような非常識野郎には解らねえよ！！」

悪いかよ、偽って！？ 悪いかよ、勘違いで！？ 私は私の、今のこの状況に満足してるんだ！！ それを勝手な事言うんじゃないやねえよ！！

それになあ、誰だって人から嫌われてえなんて思う奴はいねえんだよ！！ 例えそれが現実じゃなかったって、嘔吐してたってな！！ テメーだってそうだろうが！！！！」

首元を掴んで怒鳴る千雨。

しかし、彼女にもどこかで解っている・・・結局、自分を偽ってまですネットアイドルだのと言うもう一人の自分を作っている理由は、対人恐怖症で何も出来ない、子供の頃から誰とも打ち解けられない、素顔で居る事恐れて一枚壁を隔てなければ人とも触れ合えない・・・そんな自分を誰よりも嫌っているのだから。誰よりも素の自分を嫌っているからこそ、大人気のネットアイドルなどと言う幻想を作り出しているのだ。

それに千雨の言う通り、人は誰かどうか他人の視線を気にして自分を偽って生きているものだ。

規模が大きいであれ、小さいであれ、自分を偽らない者などはこの世に数える程しか居ないだろう。

だからこそ人は『虚像』と言う名のもう一人の自分を創り出して、自己防衛しようとする。

しかし

今、千雨が胸倉を掴んでいる男は・・・少なくとも、誰よりも自分の生き方を偽らない。

勿論、それは記憶を失っているからと言う可能性もあるが、それでもぶれずに生きるのがサイである。

「ふん・・・関係ねえよ、俺は別に人に好かれようなんて思っ  
てねえ。」

嘘を吐いてテメエの生き方曲げてまで他人の好かれるんだったら、  
テメエ自身に正直に生きて他人に嫌われた方が何倍もマシだぜ」

そう、誰だって彼のように強い訳じゃない。

でもそれでも、自分の選んだ道に言い訳をせずに生きる事は出来な  
い訳じゃないのだ。

「もう一度言っとくぜ。」

別に俺はテメエがどうだろうが何だろうが興味ねえ。

だがな、何事も試さねえ癖に背中向けて逃げてる奴なんぞそこの  
マネキンと同じだ。

外面だけ飾り立てても、その内に檻褻が出る・・・そんなモンは『  
愛されてる』なんて言わねえんだよ。

愛されるんじゃないやねえ、自分が変わりたいと思うなら自分から愛する  
ようになれや。

笑っていたと思うなら、まず自分が笑いやがれ」

サイの目を見ていた千雨は静かに手を離す。

「・・・チツ、何なんだよテメーは？」

挑発して、お節介な事言いやがって・・・本当に訳解んねえよ・・・

「

だが・・・どこか心の奥底はスツキリしたようにも感じる。

今までは理不尽な事が起きて爆発する度にインターネットと言うモニター越しの世界で鬱憤を晴らしてきた。

しかし、結局自分を偽り続けているという事を無意識に感じていた為・・・本当の意味で憂さを晴らせたと言う事はなかったのだが。

だが、今はどうだ。

サイに挑発されて爆発したが、その気分は最初よりも清々しくも感じられる程。

つまりサイに挑発されて本音をぶちまけた事により、今までよりも心が落ち着いたのだ。

「・・・オイ、まさかテメー。この為に私を挑発してきやがったのか？」

「ああ？んな訳ねえだろうが、全部本当の事を言ったただけだ。

別にそれ以上の思惑がある訳でも、それ以下の言葉がある訳でもねえよ」

サイの考え方はどうあれ、本気で爆発した事によって気がスツキリしたのは事実。

複雑な心境のまま千雨が居ると、サイは興味なさそうに服の汚れを払うと歩き出した。

言いたい事は言い終わったという事なのだろう。

と・・・そこでふと、千雨がサイに言葉をかける。

その言葉は、彼女なりに一歩進むという事を暗示した言葉なのだろう。

「おい、テメー・・・テメーのお節介には一応、感謝しておいてや

る。

それとな・・・わ、悪かったな殴っちまって。大丈夫か？」

「フン、蚊の止まる程度の拳なんぞ屁でもねえよ」

相変わらずの言い振りで部屋から出て行くサイ。

だが・・・それがどこか、声色が変わった様にも聞えた・・・。

この日からの千雨はどこが変わった。

勿論、今までのようにネットアイドル兼スーパーハッカーと言うスタンスは変わらないようだが。

しかし画像の加工などはしなくなったそうだ。

そして積極的に2・Aの連中に関わる訳ではないが、今までよりは少しは歩み寄る。

更にサイにのみだが、今までのような敬語ではなくフランクに話しかけるようにはなった。

この小さな変化を気付く者は多くはないが・・・。

何時しかこの二人皮肉屋同士ということ、喧嘩友達のような関係となっていくのであった・・・。

第十三話：心の仮面（後書き）

はい、完了です。

思えば書いていて気付いたのですが、サイと千雨って似てますよね。似させた心算は無いのですが、悪ぶってる口の悪い人物と言つと自然とああなつてしまいます^^

では次回を楽しみにどうぞ^^

第十四話：強さの意味、強さの意義（前書き）

この辺からちよつとバトルが入り始めます^^  
修行不足で下手かもしれませんがお許し下さい^^

## 第十四話：強さの意味、強さの意義

終業式を終わらせた翌日から、サイの規則的な日々が始まる。

基本、今までは学校に通っていたと言いつ事から殆ど出来なかったが・  
・春休み一日目の朝、教会の手伝いが終わった後から。

朝、教会の手伝いが終了した後・・・。

真つ先にサイが向かう先は、エヴァンジェリンと茶々丸が住むログハウス。

此処に来て真つ先に彼は、喧嘩友達であり親友の関係となったエヴァと手合わせをする。

(まあ、エヴァの方はそれ以上の感情も持つようだが・・・)

「ふんっ!!」

掛け声の一言と共に構えを取るサイ。

外見はネギより少し大きい程度だが・・・放たれる烈気は歴戦の兵つわものであるエヴァすら笑みを隠せない。

もし人生と言うもので充実した時があるかと聞かれれば、彼女は真つ先に『今が一番充実している』と迷わず答えるだろう。

「ククク・・・行くぞ、サイ!!」

「・・・お相手させていただきます、サイさん」

「ケケケ・・・楽シイネエ。　コノ殺気、御主人ガ気ニ入ッタダケアルゼ!!」

サイに対し、エヴァ達は三人で戦いを挑む。

エヴァと茶々丸、そしてもう一人はエヴァがかつてまだ麻帆良に居なかつた頃から共に戦い続けた人形で、従者でもあるチャチャゼロ



だ。

ちなみにこれはハンディキャップと言う訳ではなく、魔法使いとの戦いを想定してサイがエヴァに無理言って頼んだ布陣である。

「・・・こつちも殺す気でやらせて貰う。手加減は無しで頼むぜ、キティ」

物騒な事を言うサイに対してエヴァもニヤリと笑いながら答える。

「ああ、心配するな。貴様相手では私達も本気でやらねばヤバイからな。

クツクツク・・・全く、唯情性に生きていた少し前ではこんなに楽しむ事も出来なかつたな」

その言葉を最後に空間に静寂が訪れる。

しかしその一瞬の静寂の後、サイとエヴァ達は地を蹴って一気に間合いを詰めた！！

『ガアアアアン！！』

空間内にサイの拳と魔力を纏ったエヴァンジェリンの拳がぶつかり合っただけで鉄同士をぶつける様な音が鳴り響く。

それが戦闘開始の合図だ。

「ケケケケ！！」「・・・」

力と力のぶつかり合いの斥力で距離が離れたサイとエヴァ。

体勢を立て直す時間も与えないように拳を振りかぶった茶々丸と大銃エレットを両手に持つチャチャゼロが一気に距離を詰める。

その動きは確実に、相手を殺しに行く者の動きだ。

「お覚悟を！！」

振り下ろされる茶々丸の拳  
しかし、サイは吹き飛びながら空中で体勢を立て直すと茶々丸の拳  
を蹴り上げる。

「あつ・・・！！」「気ヲ抜クナ妹！！」

腕を蹴り上げられた事によりフラツと体勢を崩す茶々丸。

チャチャゼロは注意を促すがその一瞬の隙をサイが見逃す筈も無い・  
・茶々丸の崩れた体勢を利用してそのまま真空投げのように投げ  
捨てた！！

さらに向かつて来るチャチャゼロの精確無比な心臓へのマチェット  
による一撃を皮一枚で避けると、伸びきった腕を掴んで頭から大地  
に叩き付けたのだ・・・。

「ヤレヤレ・・・本当二面白エ」

下の砂にめり込んでしまい、身動きが取れなくなってしまったチャ  
チャゼロは呟く。

こんなに充実しているのは本当にどれ程ぶりだろうかと考えながら。

「大丈夫ですか、姉さん？」

投げによって一瞬スタンしてしまった茶々丸。

しかし方向感覚が戻った事により、頭から埋まってしまった姉・チ  
ヤチャゼロを引っこ抜く。

傷一つ二人に付いていない所を見ると、それなりに考えて投げたり  
叩き付けているようだ。

「アア、済マネエナ妹ヨ・・・連携が簡単二読マレルトハナ・・・」

「はい、信じられません。流石はサイさんと言う事でしょうか？」

二人が話をしている間にもサイとエヴァの二回目のぶつかり合いが  
始まっていた。

拳撃、脚撃を交差させ、避け、時にはぶつけ合い二人の戦闘……いや見方によつては死闘は続く。  
一合、二合、三合……それらの攻撃は確実にそして躊躇い無く急所を狙い続けていた。

……そしてついにこの実戦形式修行にも幕が下りる。

「これで締めだ！ リク・ラク ラ・ラック ライラック……！！  
ケフデトス・アストラフサトー デ・テムトー デイオス・テュコス  
来たれ虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧！！！」

エヴァから放たれるは雷光の斧。

しかし……サイは六道拳アスラを纏った拳で、雷光に突進する！！

「舐めんな、オラア！！」

白面九尾に仕えし水妖の魔獣よ、その牙を以つて我が敵を喰らい尽くせ！！

光明司流古武術 禁百八式 黄泉路凶蛟竜！！」

拳は雷光を貫き、真つ直ぐにエヴァに向かって迫る。

その両の手の形はまるで爬虫類の顎……更に闘気を放つ姿はさしずめ“蛟”を象つていると言つ所か？

二つの手の平はエヴァを喰らうかのように閉じられ……当たる瞬間で止まっていた……。

「やれやれ、今回も引き分けかよ……全くやるねえキティ」

冷や汗を額から流しながら言うサイ。確かに大蛇の牙はエヴァの頭を捕らえ、噛み砕けた。

しかし……彼の首元にはエヴァの鋭い爪の生えた手刀が突き付けられていたのだ。

サイと同じように冷や汗のような物を流してエヴァは言う。

「まあ、これでも一応は裏世界では名が知られているんな。  
ククク・・・そう言う貴様もやるな、もう少しで頭を噛み砕かれていた所だ」

笑っている・・・常識的に考えればおかしな光景だ。

先程までは本気で殺し合うかのように殺気をぶつけ、戦っていた二人の空気が一気に穏やかな物になったのだから。

すこしずつただけでも大怪我は免れないし、下手すればどちらかが命を落とす程だった

だが、彼らにとってはこれが“普通の修行”と言う奴なのだ。

この二人の修行とはそんなじょそこの稽古などと言う『優しい世界』とは違う。

極限まで神経をすり減らし、極限まで命を懸けてギリギリまで自分を追い込み、そして強くなる。

誰かが言った“千の稽古よりも一回の実戦”と言う言葉を誰よりも体現している二人であった。

・・・余程の信頼が無くは出来るものではあるまい。

「マスター、サイさん、お疲れ様でした。

食事の用意が来ています・・・姉さんにはワインの準備が」

いつの間に出ていたのだろうか。

普段の動き易い格好からメイド服に着替えた茶々丸がサイとエヴァ、そして満足そうに二人の戦いを見ていたチャチャゼロを呼ぶ。

「オウ、いつも悪いなキティに茶々丸」

「何、構わん・・・心の底から楽しませて貰っているのと、代価の貴様の血へのせめてもの礼だ」

「ご無理はなさらず、この中でお休みになって下さい・・・時間はまだありますので」

二人の言葉に頷くサイ。

そしてその横にはチョコチョコと可愛いらしく歩いてきたチャチャゼロが居た。

サイの足に掴まるとその体をよじ登り、頭の上まで行くとしっかりと掴まる。

「ケケケ・・・ヤハリ居心地が良いナ。

ドウダ、サイ。今カラジヤマダ外二八出レネエシヨ、オレト一杯ヤラネエカ？」

「アルコール無しで良いなら付き合っぜ。

酒はどうもな、俺の身体には合わねえし・・・飲んだら飲んだで酔えねえしよ」

チャチャゼロとサイはまだ出会って2、3日と言った所。

しかし此処まで打ち解けているのは、ひとえにサイの強さやらエヴァによる賜物だろう。

特にチャチャゼロはサイの頭の上が気に入ったのか、戦いが終わると登っている事が多い・・・エヴァも一々従者がする事に文句を言う程、心も狭くはないだろう。

この後サイは軽い軽食感覚で食事を食べ、腹ごなしに再び修行（と言う名の死闘）すると言う事を計十回以上も続けていた。

恐るべきはサイの体力と戦闘力に勤勉さ、それに付いて行けるエヴァ達と言った所だろう。

エヴァ達との修行と言う名を借りた実戦形式のバトルを終え、サイはログハウスの外に出る。

時は少なくとも一日はログハウスの中に居たと感じているが、エヴァ達の所を訪れてから一時間しか経っていない。

それにはある理由があった……。

実は今までサイ達が居た場所。

それは昔、エヴァ自身が創った『別荘』と呼ばれる別空間である。

ちなみにこの空間は一日居たとしても外では一時間しか経過しないという優れものであり、サイはエヴァにこの場所に招かれてさっきの半殺し合いのような修行をし始めたのだ。

……ちなみに此処、最初は色々な意味でサイを狙う者達が増えた事によりエヴァが他の人物達より一緒に居ようとして用意した物。

それがエヴァやチャチャゼロ曰く、狂う程に楽しい修行の場となるとは思っても見なかっただろう。

ついでに茶々丸も無表情のままだが喜んだのは言うまでも無い……。

次にサイが向かうのは日課である麻帆良の搜索だ。

これを大体、休み中の昼から夕方にかけて続ける  
者達を追い払うのも合わせて。 勿論、愚か

(と言っても、サイから喧嘩を売る事は無い……この少年、喧嘩は好きだが自分が戦士と認めた相手としか戦わないのである。 故に毎朝絡まれても脅かして帰らせてしまうのだ)

「……ヤレヤレ、面倒臭え。」

あゝ、全くどうすりゃあの金魚の糞共が居なくなるかねえ、本当によ」

そんな事を言いながら麻帆良を宛を決めずにぶらぶらするサイ。すると彼の目に明らかに奇妙な光景が映った・・・人、それも屈強な男達が空を舞っているのである。

「何だありゃ？ 最近は何が空も飛ぶのか？」

暢気にそんな事を言いながら好奇心からサイは『人の飛んだらしい場所』に集まる野次馬を掻き分けて中心を覗き込んだ。

そこに居たのは、出来れば休みの日まで会いたくは無い人物であった。

「ハア、しかし全くサイに相手にされないアルネ。

それに何アルか、このサイの事を考えると胸が締め付けられる感覚は。

どうすれば良いアルか？ やはり此処は住んでいる所に押しかけるべきアルか・・・？

でも、サイの住んでるのは寮じゃなくて教会アルし・・・ああああ、こつ言つた感情は初めてアルから良く解らないアルよおおお！！」

そこに居たのは古菲であつた。

何だかくねくねしたり、いきなり頭を抱えたり、顔面を真っ赤にして恥らつたり・・・。

少なくとも彼女を知る者からは想像出来ない程に彼女は『乙女』となつていた。

まあ最初はある意味では一目惚れの気はあつたとは言え、裸を見られた事とサイの半裸を見た際にかんりの実力者だと彼女は気付き、本気で挑みたいと思つていただけ・・・騒ぎ好きだつたと言つのも関係しているだろう。

しかしそれはいつしか、何度もサイを追いかけている内に彼女が感じた事の無い感情へと変わっていた。  
学校が休みとなり、会えなくなつてからその想いに気付いたのだらう。

勿論、その間に挑んでくる者達を自然と蹴散らしながらだ。

「・・・オイオイ、強えな。」

周りの連中は雑魚だが、あれを上空のままぶっ飛ばしてやがる。  
チツ、んだよ・・・そんだけ強えなら、先に言えつてんだよ。」

それは見た者全てが引く凶悪な笑み・・・。

サイにとって強い者と戦えると言う事はこれ以上無い喜びでもある。  
古はサイの事を婿にしようなどと言つて何時も絡まれて迷惑だったが、今この時だけは違つ

自然とサイの足は、古菲の居る場所に向かつていた・・・。

「オイ、拳法バカ」

「えっ・・・サイ？ な、何のようアルか？」

いきなり声を掛けられ動揺する古。

それはそうだ、今までは殆ど彼女が暴走して飛びつく事が多かったが・・・サイ自身が話をしてきた事など一度も無い。

「テメエ、強えんだな。」

だったら初めから求婚なんて方法使わねえで殴りかかって来いよ・・・  
その方が楽しめるからな」

「え・・・ええっ!？」

あ、相手・・・相手をしてくれるアルか!? 本当に!?! う、嘘  
じゃないアルよね!？」



まさにその表情は寝耳に水と言った所か。  
自分から望んでも相手をしてもらえなかったのに、その实力を見た後は応じてくれた……。  
つまりはサイ自身が彼女の動きやら戦いを見て、彼女を『戦士』と認めた結果だ。

「俺は冗談は嫌いだ」

そう言うつと腕を回してからゆっくりと構えるサイ。

その構えは瞬時に攻撃と防御を切り替えて戦えるような、自然としながらも隙の無い構え。

今まで本当に戦いたかった相手が自分を見てくれた事に古は喜ぶ。

「ありがとうアルよ、サイ！！」

なら……。ワタシも最初から全力で行くアル！！」

途端に古の目付きと雰囲気が変わる。

目はまるで獲物を狙う肉食獣のように、気配はいつものおちゃらけている雰囲気から極限まで研ぎ澄まされていた。

構えは中国拳法、それも柔系と呼ばれる独特の軟らかい構えだ

更にその姿を見た周りの野次馬達の様子が変わる。

今まで何度も古の戦いを見てきた事はあるのだが、これ程までに集中しているのを見るのは初めてだ。

古に好かれていと言う嫉妬からサイに勝負を挑んでいた者達は、何故サイが古に好かれたのかを今此処で初めて理解したのである。

それは……。彼女が文字通り『全力で戦える相手』であり、それに彼女が気付いていたからだ。

「行くアル！！」

力強い踏み込みから一気に間合いを詰め、その勢いを利用して拳を叩き込む。

これは八極拳の高速歩法の内の一つである『活歩』と呼ばれるものだ。

「・・・まだ遅えな」

向かって来た拳・・・いや、腕の部分にサイは蹴りを叩き込んで上に逸らす。

しかも丁寧に手首の部分を狙う事によって少々の間、腕に痺れを発生させるようにしながら。

「クツ、まだアルよ!!」

痺れてしまった腕とは反対側の腕で身を翻しながら裏拳を放つ。

止まる事無く流れるような動きだった為、誰もがサイの頬に叩き込まれると思っていた・・・。

しかし　その攻撃は空を切ったのだ。

他にもない、サイがボクシングの高等技術である技法『スウェーバツク』のような方法で避けたのである。

確実にヒットするだろうと思っていた者達からすれば、目を疑うような流れるような動きで。

「マジアルか・・・まさか避けれるとは思わなかったアルよ～～」

「フン、当然だ。この程度で終わったら偉そうな事を言う資格など無い」

そう言いながら古は拳、サイは蹴りを交えてから距離を離す。

一般の者やら格闘技系の部活動者達には見えなかったが・・・一瞬で今、三合の攻撃のぶつかり合いがあった。

・・・まさにこの二人、達人同士と言う事か。

「（強い・・・強いアル。」

やはりワタシの直感に狂いは無かったアルね・・・）」

思えば自分が全力を出して戦える相手など市井の者達にはいない。全力についてこれるのはクラスでは刹那やら真名やら楓やらが居たが・・・これ程までに『勝ち目が無い』と思える相手など一人もいなかった。

古の体が小刻みに震える・・・だがそれは恐怖からではない、強者との戦いに武者震いをしているのだ。

しかし、古には一つだけ不満があった。それは・・・。

「サイ・・・さつきから何で拳を使わないアルか？」

そう・・・サイは先程から足のみで戦い、防御のみにしか腕を使わず、拳を一切使っていない。

その事に対し、まるで手加減されているように感じていたのだ・・・いや、勿論蹴りだけでも互角以上なのだが。

・・・そう言えばサイ、図書館島の時も足のみで拳は一切使っていなかった。

使っていたのはエヴァとの戦いの時位だろうか？

「・・・別に手を抜いてる訳じゃねえよ、心配すんな」

実は彼が腕を使わない理由はある。

しかし、それは言うなれば自分の為ではなく・・・相手の為だ。

それに無意識のうちに彼は『刎頸の契り（ ）』とでも言うべき位の相手か、相応の実力を持った者にしか腕は使わないのである。

・・・この事もまた、彼の失われた記憶に係しているのだろう。

（互いの為ならば頸を刎ねられる事も厭わない深い友情の契りの事。

だが・・・その答えに古は不満そうだ。

彼女にとっては強き者と戦う事こそが望み、人からの賞賛も賛辞も必要ない。

たとえ『敗北した』としても、全力でやったのならば構わないのだ。

しかし、全力を出してもらえない事。

それは彼女にとってやっとな望む相手と戦えたのに関わらず、彼女の誇りを侮辱する事なのだ。

・・・だが、無知や無謀さと言うのは時に己の命を脅かす事にもなるのだが。

「サイ・・・ワタシと戦ってくれたのは嬉しいアル。

でも、手を抜かれたまま戦われても・・・それはワタシへの侮辱アルネ。

そんな事をされたら・・・ワタシ、一生サイを許さないアルよ」

真つ直ぐにサイの目を見ながらそう言う古。

他人の誇りを汚す事・・・それは誇りや信念を持つてぶれずに真つ直ぐに生きてきたサイには耐え難い屈辱だと言う事も理解していた。  
・・・一頻り大きな溜息を吐くと、サイは古を見据えて言葉を返す。

「悪かった、誇りを汚すなんてのは俺の嫌いな事だ。

腕を使ってやるよ・・・だが、さっきも言った通り別に俺は手を抜いてる訳じゃねえ」

次の瞬間

古は急に全身中の血の気が覚めるような感覚を感じ、体に震えが起こった。

『一体何故？』……そんな疑問の答えは直ぐに出る。

明らかにサイの気配が変わっている。

今までが喧嘩だったとすれば……今度の気配は完全に“殺意”だろっ。

その姿、その目を見た瞬間、まるで蛇に睨まれた蛙のようになってしまっ古……周りのギャラリィなど、殺気を向けられている訳では無いのにまるで心臓を握られているかのように青褪めていく。

「俺が腕を使わねえ理由は一つだ……」

解き放たれた凶悪な殺意は古を弛緩させ動けなくさせる。

甘かった……そもそも、強い者と戦えるなどと言う歓喜は一瞬にして去り、全身中を恐怖と言う彼女が感じるであろう初めての感情が満たしていく。

歓喜は恐怖に、興味は戦慄に……身体の震えも最早、武者震いではなくなってしまうていた。

「それはな……」

サイの一言一言がまるで刃のように突き刺さる感覚を感じる。

全身は総毛立ち、戦いの中で初めて感じる感情に震えるも目はその男から離せない。

ゆっくりと歩を進めるサイを止めようと動こうとするが……足は恐怖から一步も動かない。

そして距離がほぼ零になった瞬間……無造作にサイの腕が空を薙ぐ。

咄嗟に目を瞑ってしまった古、耳を劈くほどの音がする。  
しかし痛みは一切来ない　　疑問に思っただけ目を開けると、サイの  
攻撃は外れていた。  
いや違う、外れていたのではなく・・・外してくれたのだ。

「殺しちまうからだ」

無慈悲で無感情な一言

その掌は古の近くにあつた電灯の柱を無残に削り取っている。  
まるで獣が獲物の肉を喰らい千切るが如く、普通の人間・・・いや、  
達人であつたとしても其処まで達するのは数える程度だろう。  
そう、サイが腕を使わない理由は至極簡単な事・・・相手を簡単に  
殺してしまうからだ。

「さて・・・これで良いだろ？」

その言葉が呟かれると同時にサイから放たれていた殺意が消える。  
緊張の糸が解けたのだろう・・・古はそのままヨロヨロし、ペタン  
と尻から座り込んでしまった。  
俗に言う『腰が抜けた』と言う奴だ。

「ホレ、手え貸してやるから立てや。　　言つたら？　　別に手を抜い  
てる訳じゃあねえってな」

恐る恐る手を伸ばす古。

サイの今の気配はいつもと同じ、口は悪いがどこか風のような雰囲気  
を出している。

手に掴まって立ち上がると・・・まだ足元はおぼつかないが、何故  
か彼女は笑い出した。

「アハ・・・アハハハ・・・アハハハハハ！！」  
見守っていたギャラリィ達は古がおかしくなったのかとも思った。  
だが違う・・・これ程に、これ程までに圧倒的な実力の差があれば、  
最早笑うしかあるまい。

一頻り笑い終わった後・・・古は実に清々しい笑顔でこう言った。

「サイ、ありがとう。」

この勝負、完膚なきまでにワタシの完敗アルヨ」

騒いでいたギャラリィ達が居なくなつた後。

まだ完全に腰が抜けたのが治っていない古はサイに背負われて寮の  
方へと向かっていた。

「つたく・・・面倒臭えな。」

とつとと抜けた腰ぐれえ気合で治せ、アホカンフー娘」

「・・・てか、ワタシが腰抜けたのサイが原因アルよ。」

それだつたら最後まで責任見るのが筋つて奴アル・・・間違つてる  
アルか？」

・・・まあ確かに腰抜けたのはサイが原因だ。

弁解しようも無い正論であり、サイ自身も文句を言いながらも面倒  
見は悪くないので歩き続けていた。

ふと、そこで古が呟く・・・。

「サイ・・・サイはどうして、そんなに強くなれたアルか？」

その言葉に解答は返って来ない。  
当然だろう、おぼろげに記憶は戻るも肝心な事などは殆ど思い出せていないのだ。

彼が記憶喪失だと言う事を知っているのも、シャークティやココネや美空にエヴァ達を抜かせば数える程しか居ない。

答えを返したくても返せない・・・そんなもどかしさの様なものもあつた。

「・・・さあな。

だが少なくとも、何かを成したくて俺は強くなつた・・・そんなだけの事だ」

成すべき事の為に強くなつた・・・あながち間違つては居ないだろう。

しかし一体、何を成す為に『見ていた者達から恐れられる程』強くなつたのだろうか？

その理由は一切合切解らない・・・。

難しい事、頭を使う事は苦手な古だが、感情の機微のような物は解る。

それ以上は敢えて聞く事もせず、サイの背中に寄りかかったままだつた・・・。

其処から無言で歩く事数分・・・女子寮が見えてきた。

「やれやれ・・・そもそも町が広過ぎんだよ、ボケが。だがこれでやっと荷物運びから解放されるぜ」

「本当に失礼アルね」。ワタシは荷物ほど重く無いアル！！



でも此処までありがとうアルよ　腰が抜けたの治ったし、それに自分がまだまだ修行不足だつて解ったアルから」

清々しい笑顔は色々な事があり、そして色々な事を知った証拠だろう。

サイの背中から元気に飛び降りる古。

「さて・・・ちなみに一つ、忘れてたアルが。

ワタシに勝つたと言う事は、正式に婿として考えて良いと言う事アルよね？」

「・・・勘弁してくれや。

それに俺は未だ道行きの途中、色恋沙汰に現抜かしてられる程暇じゃねえよ」

元よりそうでなくても彼は誰かを愛する事などないだろう。

記憶無き彼にとって、その存在の意味を知らない者にとっては重荷にしかならない人生を生きているだろう事は全身の怪我だの何だのを見れば明白だ。

・・・そして覚悟なくば、彼と共に行く事も出来ない事も。

「ウーン、残念アルねえ。

でも、ワタシは諦めないアルよ！！　これから努力して絶対にサイを振り向かせて見せるアル！！

その時まで首を洗って待っているアル！！　・・・ぎゃ〜、恥ずかしいアルよおおお！！」

いや、意外にこんな脳天気な少女こそがサイと共に行けるのかも知れない。

それだけ言い終わると古は恥ずかしかつたのか顔を真っ赤にして察

の部屋へとダッシュで戻っていく。

・・・彼女の後姿を見ながら、サイは『・・・ヤレヤレ』などと吹き、肩を竦めながらまた何処かへと歩き出したのであった。

そんなサイのバトルを見張っていた人物が何人が存在が居た事を彼は未だ知らない。

そしてその事が、後の彼の進む先で更に女難の相を齎す事も。

尚、この後サイは麻帆良の搜索にほぼ一日を費やす。

あれ程今まで絡んできた者達も、サイの圧倒的（ある意味では狂氣的？）な強さを目の当たりにして恐れるようになり、サイ自身は絡まれる事は少なくなって万々歳である。

・・・まあ、その代わりに次の日から古のスキンシップが強くなっただが。

まさに休めてるのか休めていないのか解らないサイの休日的一幕。しかし・・・意外にも『・・・悪くは無いな』等とも密かに考えているサイであった。

#### 第十四話：強さの意味、強さの意義（後書き）

投稿完了です。

サイの二つある基本スタイルの一つ、光明司流古武術とは父親（であろう人物）の使っていた流派です。

まあ・・・ある事情により実に禍々しく変質しちゃってますけどね。

基本、サイは素手で戦う際は蹴りを主としています。

腕を使って戦うのは本気で殺し合える実力者で無いと出しません。

何せ、簡単に殺しちゃいますから。

剣術の流派の方もその内本格的に出てきます。そこで色々と補足

しようと思えますので^^

ではまた次回、楽しみにお待ちしております^^

第十五話：戦乙女達の恋愛事情（前書き）

いやいや、暴走此処に極まれりってトコですか？  
本当にオリジナルストーリーを描くのは苦手ですわ……。

## 第十五話：戦乙女達の恋愛事情

人の出会いとは様々だ。

良き出会いをする者、最悪な出会いを経験する者、人はそれぞれがそれぞれの状況で出会いを経験する。

そしてそれと共に、その出会った者が良くも悪くも己の後の人生に影響を及ぼす事もある。

サイとエヴァンジェリンの出会い是最悪であったが・・・それでも現状を考えれば良い出会いであり、共に人生に良い影響を与えたと見えよう。

そして出会いとは、時に人に色々な感情を植え付ける。

興味、恐怖、畏怖、畏敬、危険視など色々な感情はあれど・・・その中で一番性質タチが悪いのが愛情、つまり一目惚れという奴だろう。嫉妬やら羨望やら虚栄やら劣等感やら・・・人間にとって醜い負の感情とは殆どが恋愛感情と言う奴から生まれて来るのだから。

・・・そして、今回スポットが当たるのは。

そう、今回スポットが当たるのはまさにそんな恋愛感情を抱いてしまった者達

前回の話でサイと古の仲睦まじい（と、勘違いしている）姿を見てしまった乙女達の物語の序章である。

此処で先に言っておこう。

恋に恋する乙女は無敵であり、実に恐ろしいものであると言つ事を決して忘れないで欲しい。

・・・では此処より、物語の始まりの幕は上がる。

まずは一人目 長瀬楓の場合。

彼女の場合、サイへの第一印象は『面白そう』であったと言う。

己と同じ寮のルームメイトである鳴滝姉妹（姉・風香、妹・史伽）による悪戯のトラップを蹴りのみで蹴り払った少年・・・その姿を見た時、正直すぐに彼女はサイが実力者だと理解出来た。

彼女は拳法バカで戦闘狂バトルマニアの古とは違い、取り立てて強い者と戦う事を好んでいる訳では無い 勿論、嫌いと言う訳では無いが自分の周りに本気で戦ってみたいと思うものが居なかった。

しかし・・・あの日。

バカレンジャーとネギ、木乃香、サイと共に図書館島に行ったその日に見たもの。

全身中に致死に近い古傷を負ったサイを見た瞬間、彼女は『同年代にこれ程まで己を鍛え抜いた者が居たのか』とまで驚いた。

それと共に興味を抱き、生来冗談好きな楓は古と共に『裸を見られた責任を取れ』てな言い方でサイに関わりを持つようになったのだ・・・思えば最初は、初めて自分から戦いたいと思った相手だったのだろう。

だが、その感情は彼女が気付かないだけで・・・所謂『一目惚れ』だった。

元々『甲賀中忍』である彼女にとって、その感情は今までで初めて感じる物・・・勘違いも無理は無い。

そんな自分の感情に気付く筈も無く、また一目惚れ等という言葉など己には一生関係ないと思っていた彼女は自分自身の中でどんどん大きくなっていくサイへの感情に戸惑いながらも修行の日々を送っていた。

されどその日 サイと親友・古の戦いを見た日、彼女はサイの圧倒的な強さを知る。

さらに、古を背負って何処かに歩いていく姿を見、心に去来する切なさのような物に気付いてしまった。

そんな自分を不甲斐ないと思い、修行に前よりも没頭する楓。

しかし次の日、世間的には日曜の朝。

陽の昇り始めた山中での修行中、彼女は森の中で自分以外の気配を感じる。

「・・・む？ 一体誰でござろうか？」

疑問に思っても当然、普通に考えればこのような時間に人が居る事はあるまい。

好奇心に駆られた彼女は気配のした方に向かい、そこで思いがけない人物の姿を見た。

「あれは・・・サイ殿？」

其処にはサイが大木の下で静かに座禅を組んでいた。

両の目はしっかりと閉じられ、呼吸している事を表すように体が静かに動く以外は一切音も無い。

見れば鳥などが肩に止まっている。まるで石の様に身動きは殆どしない。

まさに凄まじいほどの集中力であった・・・そんな彼を遠くで見ながら小一時間の時が流れる。

「・・・さつきから何か用か、テメエ？」

「えっ!？」

不意にそんな言葉を掛けられ、サイを見ているのに集中していた楓は驚く。

彼女は若いとは言え甲賀忍者の最高位の中忍、隠行や気配を隠すのは誰よりも得意である。

そんな彼女の気配を察し、あまつさえ肩に止まった小鳥が飛び立つ事も無く言葉を飛ばすなど普通では不可能だろう・・・まっ、前も書いた通りコイツは普通ではないが。

その為、彼女にとってサイの言葉は文字通り不意打ちであった。

「あつ・・・し、しまった・・・!!」

咄嗟に声を掛けられた楓は驚いて後ろに下がってしまう。

彼女がサイを見ていた場所・・・それは木の上、それも細い今にも折れそうな枝の上だ。

神経を集中していたからこそ、そのような細い枝の上に立っていたのだ。驚きによって動揺した彼女はまさに『猿も木から落ちる』と言う言葉そのままに足を踏み外して落ちた。

普段の彼女ならば簡単に着地しただろう。

しかし・・・連日の気付かない内にサイに心奪われていた事やら他の要素が相俟って楓は落下していく。

このまま大地に叩き付けられれば、恐らく大怪我を負うだろうなどと冷静に考えながら。

だが次の瞬間、不意に彼女の落下が止まったのだ。

「気をつける、バカが」

楓の細い目に映ったサイは、手を彼女の方に向けている。

その行為の意味が解らない楓は、落下が止まった理由を調べようと自分の体を見た。



すると・・・サイが自分の方に向かって手を向けていた意味が直ぐに理解出来たのだ・・・。

それは　　落ちそうになっていた自分の肌を完全に避け、服の部分に小剣が刺さっていた。

つまりサイは、落下した場所に間に合わない和理解して楓の衣服目掛けて自分の持っていた小剣を投げたと言う事だ。

・・・しかも、肌などに一切傷を付ける事も無く、淡々と。

サイと楓の場所は大分離れている。

しかもサイは座禅を組み、楓は落下していたと言う事を考えれば・・・肌を傷を付けないと言う事は、まさに針の穴を通す程の正確さが必要であったと言う事だ。

本当にとんでもない集中力やら度胸やらを持ち合わせている少年である。

「おゝい、大丈夫か？」

起こった一瞬の事に呆然としている楓。

声を掛けられた瞬間、目の前にサイが居る事に気付いた。

硬直していた楓はそこで意識を取り戻し、触れ合う程に近くに家族以外の男が居る事に驚いく。

「え、はっ・・・だ、だだだだ、大丈夫でござるよ!？」

「・・・だったらメエ自身で足のつく場所なんだ。

とつと立ち上がって服直すなり何なりしろや。　そう言う気があるなら止めねえが?」

「・・・へっ?」

そう言われて自分の体を見る楓。

彼女は日曜の朝、修行の為に甲賀忍軍の修行着を纏っていた。

だが・・・落下した際に、サイが止める為に小剣を肌を逸らして投げていた為、本来は束ねられていた筈の修行着の帯が外れ、そのお陰で木に吊るされていたのだ。

・・・と言う事は、今楓の服装はどうなっているか理解出来るだろう。

「・・・あ・・・あああ・・・」

「先に一応言っておくが。

今回も前回と同じで不可抗力だ　　てか、危険迫ってる時に一々裸になるように投げる程俺は助平じゃねえよ。

・・・まっ、今回も前回も野良犬にでも噛まれたと思って諦める」

フルフルと震える楓。

どうやら相当に頭に来ているのだろう・・・サイは木に刺さった小<sup>スサ</sup>剣<sup>ノオ</sup>を抜くと腰のホルダーに戻した。

「・・・でござる・・・」

不意に楓が小さく呟いた。

サイは楓が何かを言ったのを聞えなかったのか振り向く。

するとそこで見たのは・・・目から涙を流している楓の姿であった。

「あんまりでござる～～～！！

一度ならず二度までも男子に素肌を晒すなど～～～！！

もう拙者、完全にお嫁には行けないでござるよ～～～！！　責任

を取るでござるよおおお！！

う、うわああああああん！！！！」

いつも口が悪くクールなサイも、流石に女の涙を見たら心に響くだろう。

何処その政治家が言ったが、涙とは実に強力な女の武器であるから。

「・・・おい、嘘泣きすんじゃないよ。

こう見えても感情の機微には鋭いんでな、その涙が嘘か本当か位は理解出来るが？」

あっ・・・通用しないのが此処に居た。

まあ、元々白面九尾は人の感情を読んだりするのは得意であるし、感情を惑わす術も数多く得意としている。例えば、惚れ薬などというものを使わずとも自分を好きにさせるなどと言う事も出来る。（ただし、それは術でも上位の方に入る為か初歩しか覚えていないサイには不可能）

しかし、感情の機微に鋭い割には、自分への好意には殆ど気付かないがな、サイは。

「ありゃ、バレてたでござるか。拙者もまだまだ修行が足りないでござるよ・・・」

すると今まで泣いていた楓が直ぐにけろっとして笑顔を見せている。考えても見れば、彼女は忍なのだから忍術だけでなくそう言った部分も修行させられているだろう。

どうやら簡単に読まれるとは思っても見なかったようだが。

「まあどうせ何か俺に頼みたかったんだろ？」

泣いた振りして同情を引くってのは大体が腹に一物あるからだ・・・違つか？」

更に鋭いサイの指摘に、笑顔を浮かべながら楓は頷く。

「其処まで気付いているなら丁度良いでござる。」

実は拙者・・・ある事に白黒付ける為に、サイ殿と手合わせを所望致す次第でござるよ。

・・・流石に乙女の柔肌を二回も見ていてござるから、断りは致しかねますまい？」

内容は半分脅しだが、その真摯な楓の眼差しを見たサイ。

こう言った目をする者に、面倒だからなどという理由で断るのは失礼だと言う事は良く解っている。

何より、自分も重んじる『誇り』がそのような事をする事を望まないのだ。

「良いぜ、ただし一回な？」

俺もこれからやる事があるから、時間を取られてばっか居られねえんでよ」

「かたじけない・・・では、いざ勝負でござるー!!」

・・・この後の戦いの結果は語る必要などあるまい。

少なくとも、『修行』と『殺し合い実戦』の差など言わずとも解るものだ。

簡単に補足しておけば、楓はサイに腕を使わせるまでも無く完膚なきまでにボロ負けした。

しかし・・・それにより、楓は己の内にあつた本当の想いをハッキリさせたのだ。

サイが帰った後、楓は空を見ながら呟く。

「うむむ、拙者がこのような想いを男子に抱くとは・・・しかし悪くは無いでござるな。」

サイ殿、拙者はまだまだ修行不足・・・されど何れ、この刃は貴殿と共に・・・。

ふふふ・・・覚悟するでござるよ、旦那様」

地に伏し、何処までも澄み渡る晴天の空を見つめながら楓は顔を赤くしながら小さく呟いた。

続いて二人目　　龍宮真名の場合。

彼女は基本的に色恋沙汰には興味が無いように見える。

何しろ、某凄腕のスナイパー並に仕事に対してストイックな人物だ・・・依頼を受け、報酬さえ貰えればどのような仕事でも請け負い、その仕事の為には己の感情すらも冷徹に切り捨てられる。まさに完全なプロフェッショナルと言えるだろう。

そんな彼女がサイに興味を持ったのは、まさに彼とエヴァが死闘を繰り広げている場面だった。

戦っているその姿、その威圧感・・・今まで多くの者達と対峙してきた彼女にとって、それは自身が震える程に衝撃的なものであったのだろう。

その後、学園長による紹介と共に時々一緒に学園に出没する魔物達や侵入者の排除をしていた。

サイ自身は自分の事を語る事も無く、馴れ合う事も無く、淡々と仕事を遂行していく。

真名もまた、積極的に係わり合いを持たず、時々侵入者の排除を手伝ってもらっていただけだ。

しかし・・・共に戦っていく中で、真名は気付いた事がある。多分、普通の生き方をしている者には一切解らないほんの些細な事だ。

それは・・・時々サイが『昔の自分』と同じような目をして遠くを見ている姿

何処と無く空っぽで、虚ろで、痛々しく見える・・・何かを背負い、生き続けて悲しいまでに磨り減ってしまった者の目をしていた。

同属同情と言う奴だろうか？

真名もまた、サイと同じように苦しみ、空っぽになってしまった時があった。

そんな事を解っている彼女は、いつしか共に組むようになって仕事上のパートナーとして信頼するようになっていったのだ。

苦しみを背負って生きる者に薄っぺらな者など居ないと、彼女は仕事を続けて来ていて良く知っていたからこそ、だ。

そしてある日・・・唐突に彼女はサイに頼みをした。

「ああ？ 俺と戦いたいだ？」

「ああ・・・理由は聞かないで貰えると助かる」

その言葉に一度黙り込むサイ。

基本的にサイは独りが好きな為か真名とは時々頼まれて組む位だが、冗談で勝負を挑むような人物で無い事は理解していた。

「・・・場所と時間は？」

「今日の夜10時、世界樹前公園の近くの森林の中で」

サイはそれ以上詮索せずに戦う場所を聞く。

元々彼は他人の事情を彼は詮索するような事はしない　それに、真名の目を見ればそれで充分だ。

そう、戦士の目となつている彼女の願いを断るなど無粋な事だ・・・戦士に対しては戦士の返礼をする、それがサイと言う少年の・・・いや漢の『信念』である。

その日の夜・・・世界樹前公園近くの森林の中。

片手に七魂剣スサノオを携えて静かに目を瞑っているサイに、その近くの木の上には見届け人の様な形でエヴァが来ていた。

「・・・お前も暇な奴だな」

「何、最近酒の肴になる事が無い。

しかしサイ、お前とあの龍宮真名の戦いなら良い娯楽になるだろう？  
・・・心配せんでも、お前の誇りを汚すような事はせんさ」

そんな風に談笑する二人。

しかし、不意にサイは鬱蒼と生い茂った草むらに向かって声を飛ばした。

「おい、龍宮・・・いつまでここでかくれんぼしてる心算だ？

そんな所で俺を奇襲しようとしても無駄だ、元々気付かれてたら奇襲の意味はねえぞ」

「・・・フフフ、やはり無理か。

流石だねサイ・・・それにあれ程派手にやりあったのに、エヴァン

ジェリンと仲が良いとは知らなかったね」

真名の言い様にエヴァは小さく一つ鼻で笑った。

仲が良いと言うより、サイと彼女の関係は性別関係無しの親友であり・・・特にエヴァはサイに家族のような、それ以上のような愛情も持っていたのだからその反応なのだろう。

本当に良い意味でエヴァも短期間で変わったものだ。

「俺達は喋り合いする為に来たんじゃないやねえと思うがな？」

サイのその一言に真名も笑う。

そう・・・その目は一瞬で獰猛な獣のようにギラギラしている様にも見えた。

表情だけはいつもどおり冷静なのだが・・・。

「そうだね・・・じゃあお喋りは此処ら辺で止めて、そろそろ始めようか!!」

『ダンダンダンダンッ!!』

真名の言葉と共に放たれる白光と鼻を突く硝煙に耳を劈く音。

サイは見ていた、彼女が服の上から羽織ったフードコートの中から二丁の拳銃が抜かれて引き金が引かれる所を・・・サイの超越した動体視力が無ければ、避けられずに終わっていただろう。

「この至近距離で私の銃弾を避ける、か・・・流石だね」

「ハッ、普通の奴なら銃を抜いた瞬間も見えねえだろうがな」

そのまま真名の足元を蹴り払うサイ。

しかし攻撃は銃のグリップによってガードされており、弾かれ合っ



た二人は距離を離す。

其処から二人の死闘が始まった……！！

アサルトライフルをコートの中から出すと連続して撃つ真名。

銃弾の軌道を見切れるサイにとつて、これを避けるのは簡単な事・

・だが敢えて彼は七魂剣で銃弾を弾き返す。

何故、そのような事をするのか？ 避けた方が良いと言うのに……その理由は見ていたエヴァが気付いていた。

「フツ、成る程な。

銃弾を敢えて避けやすい部分に向かって放つのは『避けさせる為』の布石と言う事か。

避けさせた上で危険の無いだろう場所に誘導し、他の弾丸の跳弾を利用してサイに傷を負わせる心算だったのだな？ 中々に賢しい小娘だ……だが、それを読んで銃弾を弾くサイもまた賢しいが」

そう、サイは銃弾の軌道が自分を狙っていない事に気付いていた。其処から『跳弾』と言う技術を利用してサイに弾を当てようとしていた等と言う事は理解出来なかったが……彼の第六感が避けては危険だと感じさせたのだ。

「全く……随分と用心深いな、君は」

「当然だ、寧ろ臆病者って奴の方が長生きは出来る」

その言葉が終わるや否や始まる銃弾の応酬。

サイは全ての銃弾を弾き、払いのけながら相手の動きが変わるのを待っていた。

必然的に訪れる事となる、その時を……。

白光と銃声、刃で弾く音が収まった時　　不意に真名の攻撃が収まった。

あれ程に撃ち続けたのだ、弾切れになって当然・・・そう、サイはこの状況を狙っていたのである。

「テメエの負けだ、龍宮。  
銃弾が切れた状態では近接戦しか無いだろうが・・・近接ではテメエは俺には勝てねえよ」

「フフ・・・どうかな？  
案外私は君以上に実力の持ち主かもしれないぞ？」

それは強がりか、それとも他に策があるのか？  
そののどちらなのかは想像し難いが、少なくとも降参をする者の態度ではない事だけは解る。  
実は彼女には最後の切り札が在ったのだが、それを使うには距離が離れたままでは使えない。  
最後の切り札を悟らせないように、彼女は言葉巧みにサイをおびき寄せる。

「（今だっ！！！！）」

サイの目の前に放られたもの。  
それは属にスタングレネードと呼ばれる、炸裂と共に目を眩ませる大量の光と音を放つ投擲武器であった。  
いくら達人であろうと、光の所為で目が眩んでしまえば何も出来ないのだと考えたのだろう。

「・・・やったか？」

音と光が収まった後、ゆつくりと目を開く真名。

幾らなんでも、不意をついたこの攻撃を避けられないだろうと彼女は思っていた。

だが 目の前にサイの姿はなかった。

「ば、バカな！？ 一体何処・・・」

「・・・悪いな、これでチエツクメイトって奴だ」

サイの言葉が聞えた瞬間、首筋には彼の愛剣の七魂剣が突き付けられていた。

素直に両手を挙げる真名・・・勝負の軍配はサイに上がったのだ。

「・・・つつか、何だありゃ？」

まだ目がチカチカしてやがるぜ・・・」

その言葉を聞いて意味が解った。

サイはスタングレネードを避けなかったのだ・・・投擲され、爆発した瞬間にサイの目はそれが危険では無いと判断したのだ。

ちなみにサイはどのような実戦も想定している為か目が見えない、耳が聞えない状態でも戦えるように訓練はしてあった。

「まさか・・・スタングレネードを耐えて戦えるとはね。」

真のプロフェッショナルとは、まさに君の事を言うようだ・・・もう既に手は無いし、私の完敗だサイ」

「まあ、当然だ。」

自分の状況が最悪な状態でも戦わなきゃならねえ時は必ず来る。

そんな状況で俺は『目が見えなかったから勝てなかった』だなんて言い訳はしたくねえんでね」

言い終わるとサイは背を向けて歩き出す。

そこでふと立ち止まると、座り込んでいる真名に向かって言葉を飛ばした。

「その面は自分の出したかった答えが出たって面だな。

まあそれが何なのか興味ねえし・・・キティ程じゃねえが、まあまあ楽しめたぜ。

これに懲りねえでこれからもどんどん掛かって来いや・・・んじゃあな」

背を向けたまま手を振りながら帰路に着くサイとエヴァ。

そんな後姿を見ながら真名は黙っていた・・・いや、何処と無く悠々と去って行くサイの後姿を嬉しそうに見ていたのだ。

ボロ負けして悔しい筈なのに、自然と笑みがこぼれる・・・寧ろ完膚なきまでに負けた事が清々しかった。

手加減せずに戦って、その結果敗北したのであればその中で次に繋がられる事も在るのだから。

「全く・・・自分の心と向き合う心算だったが。

此処まで負けても清々しいとは思わなかった・・・そうか、自分の心に素直になる事が一番良いのだな。

・・・失った事は何よりも辛かった。それでも立ち止まっていては何も変わらない、か」

彼女もまた、かつて大切な何かを失ったのだろう。

しかし彼女は・・・今日、新たに道を進む事を選んだ。

忘れるのではなく、思い出として心に刻み込んで。

もう一人の人物については、いまだに己の心の葛藤と戦っていた。  
その少女にスポットが当てられるのも、そう遠くは無い筈だ……

しかし、かくも乙女とは難しい存在である。

そんな存在だからこそ……己の行く末おもいに気付けた時、誰よりも強く在れるのだろう。

少女達の道行きに幸多からん事を切に願おう。

……まあ、超鈍感狐小僧は気が付かないだろうが（笑）

## 第十五話：戦乙女達の恋愛事情（後書き）

さてさて、投稿完了です^^

本当にオリジナルストーリー描くのって苦手ですよ。

次からは一応、本編筋に戻ります（まあ・・・またオリジナルな部分もありますけどね）。

あ・・・そういえばエヴァVSネギん所どうしよう・・・。

では、次回をお楽しみに！

## 第十六話：記憶なき破壊者（前書き）

一応、今回は原作ストーリーです。

まあ・・・後半からはちょっと違いますけどね^^

## 第十六話：記憶なき破壊者

『一目会ったその日から、恋の花咲く事もある』  
昔やっていたテレビ番組で司会者が言っていた口上だが、中々どうして当て嵌まる物が多い。

所謂、人の恋愛感情と言う物はそれ即ちが『勘違い』やら『つり橋効果』やらというモノから始まっているものだが・・・そんな中でいつしか勘違いなどは相手の良い部分を見つけて『愛』へと発展していく。

恋愛の始まりとは様々である。

出会いから始まり、その工程、結ばれると言う時に至るまで全員が全員同じと言う物は一人も居ない。

自らが自分自身で相手を見つける事もあれば、偶然居合わせただけと言う事もあり、更には他の誰かから紹介されると言う事もありえる。

今回はそんな恋愛模様と言う物を此処に語ろう。

全ての始まりは、ネギに届いた一通のエアメールからであった・・・。

「あつ・・・これお姉ちゃんからだ」

その日の朝、明日菜からネギに渡された一通のエアメール。  
それは日本より遙か遠い、イギリスのウェールズにある『魔法学校』  
に勤める彼の姉のような存在のネカネからの手紙であった。



『久しぶりネギ、元気にしてる？』  
ネカネの姿が映像として現れ、その一言から始まった手紙。  
それをネギは嬉しそうに、明日菜は興味津々に見ていた。

『ちゃんと先生になれたのね、おめでとう』

でも、これからが本番なんだから気を抜かずに頑張つてね』  
映像に写るネカネの表情は、まるで自分の事のように嬉しそうに微笑んでいた。

自分が家族として慕う姉の言葉に、ネギは少々照れ臭そうに笑っている……どの世界であれ、褒められて喜ばない者などあまり居ないだろう。

『それと……ふふっ。』

ちよつと気が早いけど、あなたのパートナーは見つかったかしら？  
魔法使いとパートナーは惹かれあうものだから……もう、あなたの身近に居るかもしれないわね』

パートナー？ その言葉の意味は一体何なのだろうか？

言葉通りに取るのなら『恋人』と言う事だろうが、魔法使いを引き合いに出していると言う事は違うのだろうか？

『うふふ、修行の期間中に素敵なパートナーが見つかる事を祈ってるわ』

それじゃあもう少し話したい事もあるけど、そろそろ終わりみたいだからまた手紙を送るわね。

ネギ、身体に気をつけて。それじゃあまた、次の手紙で』

その言葉を最後に手紙の映像は消えた。

ネギはまるでビデオを巻き戻すように、手紙についていた巻き戻しボタンのような物を押してから小さく呟く。

「パートナーかぁ……」。

やだな、お姉ちゃん。　ボクにはまだ早いよ。」

そんな呟きに明日菜が疑問を持ち、ネギの首に腕を掛けて尋ねる。

「ちよつと、ネギ何よパートナーって？」

もしかして恋人の事？　がきんちよの癖に生意気ねえ〜〜」

しかしその問い掛けにネギは首を横に振る。

そしてそこで、己の本分である『魔法使い』と、その『パートナー』という物の関係について語りだした……。

同時刻。

いつものように教会での手伝いを終わらせた後、サイはエヴァンジェリンの所でいつもの『コロシアイ実戦訓練』を終わって食事をご馳走になっていた。

その時に丁度、ネギ達と同じくパートナーと言うものの話をしていたのだ。

「ミニステル・マキ魔法使いの従者？　何だそりゃ？」

口の中に茶々丸特製の唐揚げを放り込みながら聞くサイ。

別に誰も取る者も居ないと言うのに、じゃんじゃん食べ物を口一杯に放り込んで咀嚼している。

最初の頃は引いていたエヴァも茶々丸も、何日か経つと次第にサイのこの食べ方に見慣れてきていた。

その頭の上でワインをラツパ飲みしているチャチャゼロの姿があったのは、意外とシユールだが。

「コラ、良く噛んで味わってから食べ馬鹿者。」

うむ・・・そうだな、魔法使いが修行期間を終えて社会に出る際にそれをサポートする相棒の事だ。

特に『立派な魔法使い』を目指す際にはパートナーの一人や二人も居んと格好が付かん。

・・・まあ、少なくともお前には必要無いだろうがな」

「ああ、何で？ あっ茶々丸、メシおかわり」

ちなみにサイはこれでおかわり10杯目。

エヴァの所の食費が逼迫しないか実に心配である・・・少なくともエンゲル係数は上がっているだろうが。

「はい、少々お待ち下さい」

「・・・まだ食うのか、お前は。 やれやれ・・・まあ良いがな」

「ケケケ・・・本当二面白エナ」

・・・するとエヴァは何故サイにパートナーが必要ないのかを説明し始める。

実は正直、エヴァはサイを従者にしたいと考えても居たが、彼のある身体特徴に気付いた為か止めていた。

「元々、魔法使いの従者と言うのが必要とされるにはある理由がある。

元来『魔法使い』と言うのは魔法を使うのに多かれ少なかれ『詠唱』と言うものが必要だ。

そしてその呪文詠唱中は全くの無防備となってしまう、攻撃をされてしまえば呪文は完成せん。

その際に魔法使いの呪文詠唱を守護するのがパートナー・・・つまり、魔法使いの従者の役目と言う事だ。

此処までは理解出来たか？」

頷くサイを見てエヴァは言葉を続ける。

「しかし基本的にお前の場合は近接戦を主にしているし、魔法が使えんからな。」

所謂、前衛をメインとしているお前の場合は従者を作る意味が無いのに併せて・・・私の知るあるバカに良く似ている。故に例え魔法を使えたとしても圧倒的な戦闘能力のお陰で従者など必要あるまい。

更にもう一つ、最大の理由がある・・・それは、お前自身の持つ能力が原因だ」

「俺の持つ力？」

サイは首をかしげながら呟く。  
完全に記憶が戻っていない事もあり、自分の能力などと言われても良く解らないのが現状だ。

だがエヴァの場合は、何度か彼と殺し合いじみた修行方法をしていた事により彼の能力の片鱗を理解していた。

・・・それは本来、そう簡単に普通の者が持てる力ではなかったが。

「うむ・・・本来、魔法世界と呼ばれる裏の世界の方でも珍しいのだがな。」

お前は所謂魔法クキャンセル いや、魔力に連なる力を無効化する力「魔法マジック無効化」を持っている。

しかもお前の場合は本来無効化出来ない魔力さえも無効化してしまう故、従来知れ渡っている魔法無効化を越える極めて異質な力だ。その力の関係で従者契約を結ぼうとしても、キャンセルされてしまっただろう」

魔法無効化

その力は魔法を知る者の中でもA〜Sクラスのレアスキルである。エヴァはサイとの最初の邂逅の際に魔力によって障壁を張っている筈の自分に何故簡単に攻撃を出来たのかを疑問に思っていた。そしてサイが自分の共に修行をする際、幾つかの魔法を彼に黙って使った事がある・・・その結果、その全ての魔法が効果なしという状況を見て彼女は確信したのだ。サイが『魔法無効化』と言う能力を持っていると・・・。

実際、エヴァの見識は正解である。

白面九尾の一族は無に連なる混沌の力を操り、それも最上位に当たる者達は他者の力やら起こった事象やらを完全に無効化出来る能力を持っているのだ。

その能力の名は アビリティキャンセル 『能力無効化』

事象、他者からの力を完全に無効化してしまうという能力を考えれば、ネギま世界の『魔法無効化』よりも上位の力と言えよう。

「ふ〜ん、成る程ね。」

まあ、俺は従者なんてモン要らねえし別にどうでも良いわ。

しかし・・・能力無効化ねえ。 そう言えば俺らの一族、そんな能力持ってたような気がすつけど」

「ふつ、まあそうだろうな・・・。」

それに今や嘆かわしい事に『魔法使いの従者』なんてのは、恋人探しの口実のようになってしまっている」

そう・・・エヴァの言う通り。

魔法世界にも戦争と言う物は昔あり、その頃の者達はその意味を知っているが・・・。

ネギ達位の世代となると、従者なんてのは恋人探しの名目程度か仕

事上のパートナー程度にしか考えられていないのだ。

・・・そこでふと、サイは顎に手を当てて考える。

「・・・あれ？」

何か俺、昔戦友パートナーって居たような気がするけど・・・。

しかも何人が居たような気が・・・俺の気の所為か？」

「な、ななななな、何いいいいい!？」

誰だ、どういう女だ、何処にいたのだサイ!？ 隠すと為にならんぞ!!

さあ吐け、とつと吐いて楽になれえええ!!!」

サイにパートナーが居たと言う発言に珍しく動揺するエヴァ。

両の手はサイの上着の首元を掴み、締め上げている・・・大分彼女は暴走しているようだ・・・。

更にその横ではオロオロとしながら茶々丸が主人であるエヴァを止めるべきか、それとも話の続きを聞くか迷っていた。

・・・ちなみに別にサイは恋人とは言っていない。

あくまでも彼の場合の言い方は 戦友としてのパートナーと言  
う奴だ。

「ををを、何すんだキティ？」

うっん、戦友パートナーねえ・・・どんな奴が居たっけか？

確か・・・ダメだ、思い出せねえや」

喉元までは出掛かっていたのだが、激しくエヴァに振られた事により思い出せなくなってしまふ。

・・・結局、彼女は自分の手で自分の知りたかった情報をサイに忘

れさせてしまつのであつた。

さて、場面は再びネギ達の方へと戻る。

パートナーという物の説明をエヴァとは違い簡易に説明するネギ。

「へ〜、パートナーねえ。

それってやっぱり女の子？ てゆうか異性なの？」

「はい、そうですね。

やっぱり男の魔法使いだと綺麗な女の人、女の魔法使いだと格好良い男の人が良いですよね。

で、今だと大体はそのパートナーと結婚しちゃう人が多いですけど・・・」

その言葉の返しに明日菜は『要は恋人のようなものね』などと納得する。

・・・あまりこの話の中では語られていなかったが、彼女は所謂“オジコン（オジサンコンプレックス）”と言う奴で、自分より一回り位年上であるタカミチに恋をしていた。

まあ、そんな事は今はどうでも良いのだが、片隅にでも覚えておいてくれれば良い。

・・・とその時。

不意に二人しか居ないと思つていたのに後ろからのんびりとした声が掛けられた。

「へ〜、ネギ君実は恋人探しに日本に来たん？」

じゃあ、ウチのクラスの子だけでも30人やからよりどりみど

りやね

・・・あ、のどかと古ちゃん、と長瀬さんとエヴァンジェリンさんは違うかな？

(ボソツ) まあ、他にも怪しい子は何人が居るみたいやけど・・・」

「いえ、だから違う・・・。

つて、わあああああ！？ こ、ここの、このかさ！？ い、いつから其処に！？」

後ろに居たのは木乃香だった。

魔法の事を聞かれてしまったと思ったのかネギは慌てている。

それは当然の態度だ、ネギは魔法使いの見習いの為・・・もし魔法が一般人にバレようものなら仮免許剥奪に強制帰国の上、オコジヨにされてしまうのだから。

それともう一つ、バレてはいけない事があるのだが　それはまだ秘密である。

・・・しかしもう既に一般人の明日菜に魔法はバレてるが。

「ん？　途中からやけど。　何の手紙なん、それ？」

「何でもないです、何でもないんですよ！！」

急いで手紙を仕舞うネギ。

そこで木乃香は冗談で、しかも大声である事を叫ぶ。

「みんな〜！！　ネギくん、恋人探しに日本に来たらしいえ〜！！

！！」

「ぎゃ〜〜！！？」

ち、違いますうう！！　本当に先生やる為に来たんですよおおお



お！！！！！」

実際にネギが麻帆良に來たのは本当に修行の為だ。此処で変な噂が流れ、失敗者の烙印を押されるのも変に騒がれるのもネギは望まないだろう。

それにそんな事になれば、魔法よりも頑なに隠してきたもう一つの秘密がバレてしまう可能性が高くなるからだ。

・・・故郷の祖父代わりであったメルディアナ魔法学園の校長から、幼い頃から言い聞かされていた。

「スマンスマン、冗談やネギくん

あ、アスナ。 おじいちゃんがまた呼んどるから行ってくるわ」

「・・・え、またあの話？」

明日菜の問い掛けに困ったような表情で「せやく」と肯定する木乃香。

実は彼女、祖父の未確認生物ジジイこと学園長の半ば趣味とも言えるある事に何時も付き合わされていたのだ

それが何の話か解らないネギ・・・しかし、取り合えず木乃香に魔法の事がバレなかったので胸を撫で下ろしていた

だが・・・二人は気付いていない。

部屋の開いたドアの影に鳴滝姉妹がきんちよ二人が居て、木乃香の言葉を聞いていた事を。

そして二人は知る由も無い。

その“バカガキ二人”の所為で、まるで灯油の染み込んだ布に火が点くかのように十五分で寮内を駆け巡った事を。

・・・しかもその内容は『ネギが小国の王子で正体を隠してる』だの『結婚相手は舞踏会で探す』だのと現実を明らかにひん曲げられて伝えられたのは言うまでも無い。

これによりネギが暴走した2-Aの生徒達と追いかけてこをする事になるが・・・。

此处では全く以って重要ではないので省略させて貰うとしよう。

「あ~~~~、つたくキティの野郎・・・」

先の『パートナーが居た』と言う発言により、暴走(?)したエヴァが怒りながらもくっついて離してくれないという厄介な状況からやっと解放されたサイ。

空を見上げれば燦々と輝く太陽はもう既に沈み始める軌道に入っていた・・・つまりはもう、昼をかなり過ぎていると言う事だ。

今日は町の方を散策に行く心算だったのだが・・・。

「おっちゃん、『はんばーがー』一個くれ」

「おう毎度、待ってるよ坊主」

最近になって美空に奢って貰い知ったハンバーガーなる食べ物。

サイはこれが大のお気に入りであり、教会でシスターシャークテイの手伝いやら侵入者の排除で学園長から貰えるポーナスやらで良く買いに来て食べていた。(尚、ポーナスは大卒の初任給位は貰っているが彼には殆ど金を使う趣味は無い為か殆ど手付かずでシャークテイに預けている)

・・・ちなみに季節限定のメニュー「コシフリゾート」以外は既に完食してるのと言うまでも無い。

「ほれ、坊主。 何時もご贖罪にしてくれてるから今回はポテトはサービスだ」

「おお、あんがとよおっちゃん」

手作りのハンバーガーとポテトを受け取ると食いながら歩き出す。尚、サイはどうやらマ ドナ ドやらロッ リアやらモ バー ーやらでは決して買わず、必ず手作りで作ってくれる移動屋台の店でしか買わない・・・変な所に拘こたわりを持つ少年だ。

「しっかし・・・さっきのキティの態度は何だったのかねえ？

しかも茶々丸もチャチャゼロも止めてくれりゃ良いのに・・・立ち止まったり爆笑してただけだよ。

それに、何だか大事な事を思い出せそうな気がしたんだが・・・あゝ、ダメだ思い出せん」

そんな事を呟きながらもぐもぐとポテトとハンバーガーを直ぐに食べ終わる。

食後の一服でな具合に自動販売機で缶コーヒー『ジ ー ジアの微糖』を買つと、壁に寄りかかって飲み始めた。

・・・実に平和で穏やかな時間が流れる。

その時、ふとコーヒーを飲んでいたサイの目線に此方に走ってくる少女の姿が捉えられた。

走って来る人物は、腰まで届く長い黒髪で着物姿の大和撫子と言った感じだ。

どうやら大分走ってきていたのか、ハアハアと肩で息をしているようにも見えた。

「・・・チツ、まゝた厄介事かよ」

口では文句を言いながらも自由気ままでお節介焼きな性分のサイ。こちらに向かつて来る少女に見えるように手招きした後、自動販売機の後ろを指差す。

・・・どうやらそこに隠れるという意味だろう、着物姿の黒髪の少女は急いでその後ろに隠れた。

「「「お嬢様~~~~~!! 何処ですか~~~~~!?!?」「」」

野太い声やら低い声のサングラスに黒服の明らかに堅気ではなさそうな屈強な男達が走り去っていく。

どうやら自動販売機の裏に隠れた少女には気付かなかったらしい。

「・・・おい、もう大丈夫だぞ」

サイのぶっきらぼうな言葉に呼吸を整える少女。

・・・その少女は誰かに似ているような気がしたが、そんな事はサイにはどうでも良い。

別に彼は気が向いたから助けた等と言っただけなのだから。

「ふー、助かったわ。 おおきにな、サイくん」

「・・・誰だ？ つうか何で俺の名前知ってる？」

サイの言葉にずっこける少女。

「『誰だ』なんてイケズやわ。」

サイくん、同じクラスのウチの事、忘れたらアカンやんか~~~~~!!  
「」

・・・その喋り方、ほんわかした雰囲気。  
いつもとは全く違う服装やら髪型をしていたので解らなかったが、顔を良く見てサイは理解した。

「ああ、何だ木乃香か。

・・・何だその格好？ 普段着にしちゃあ随分と動き辛そうな格好だが？

ついでに何だ、さっきの明らかにカタギにゃ見えねえ連中？ お前の知り合いか？」

そう、逃げて来た少女は木乃香であった。

木乃香に気付いたサイが矢継ぎ早に質問をぶつけると、彼女はいつもどおりのんびりとした口調で返す。

「さっきの人達はおじいちゃんの下の人や。

この格好はおじいちゃんがお見合いが趣味でな、お見合い用の写真を撮る為にこんな格好してるんよ。

ウチまだ中2やのにフィアンセとか言っつて無理矢理進められたから、逃げ出して来たんやわ」

「・・・あの妖怪ジジイ。

いつかヤバイだろうと思っつたが、遂に痴呆かアルツハイマーにでも罹ったか。

つたく、下らねえ事やってる暇があったらもつと別の事に心血注げつてんだ」

・・・身も蓋も無い言い方である。

最早此処まで悪口を叩けば、怒りやら呆れやらを通り越して賞賛に値する程だ。

だが、元より自由に生きているサイにとってはどんなに学園長が偉

かろうが何だろうが、孫の人生の伴侶を勝手に決定するというのは  
気に食わないようである。

人生とは自分で選択するからこそ意味がある。

そんな考え方をしているサイにとつて、幾ら親心のようなものであ  
つたとしても余計なお世話と言う奴だ。

「んで、これからお前どうすんだ？

逃げ回った所でどくせ、またさっきのバカ共が探しに戻ってくるぞ？

・・・一思いにあの痴呆ジジイに『見合いなんて嫌だ』つて言えば  
それで大丈夫じゃねえか」

確かにサイの言う事にも一理ある。

だが・・・厄介な趣味を持つていえるとは言え、木乃香にとつては心  
優しく、身近に居る唯一の肉親だ。

しかも祖父に何度かお見合いをしたくないと言う事を仄めかした事  
はあるが、結局は聞いて貰えていない。

「はあ・・・サイくん。

そんなに簡単なモノやないんよ・・・だからウチ、困ってんねんで」

だが、そんな木乃香にサイは普通に返す。

まさに何を迷っているのかと言わんばかりにだ。

「何が難しいんだ、簡単だろ？

そもそもお前がどうしたいか、どうするかを伝えれば良いだけじゃ  
ねえか。

あの妖怪ぬらりひょんジジイでも、本気で孫が嫌がってると思えば  
止めるだろつよ。

それかまあ、適当な理由考えて断るかだな」

「・・・？ 適当な理由って？」  
聞き返した木乃香にサイはある事を言う。  
それが後に、己にしっぺ返しのような形で返ってくる事も知らずに・・・。  
それは・・・。

「まあ『好きな男が出来た』とか、何だとか理由付ければ良いだろうなものは適当にだ、適当に・・・さて、んじゃ俺は麻帆良散策の続きに行くんでな。」

まっ、頑張れや・・・アバヨ」

そう一言言い残すと去って行った・・・。

そしてその後、不意に木乃香が何かを考える素振りを見せたり、急に顔を紅くしたりとしていた。

最後には顔を紅くしながら微笑み、学園の方に向かって行ったようだが

次の日の朝

珍しくサイは学園長に呼び出された為、学園長室に来ていた。  
しかも何故か、エヴァが先に来ており・・・他の者が居たら間違いなく引く程の殺気を纏った目付きで笑みを浮かべながら。

「何だよジジイ、俺に話って？」

つつか・・・なんだこの空気の重さ？ 何かあったのか？」

エヴァの放つ強烈な殺気に学園長さえも引いている。

これ程の殺気なら上位・・・いや、最上位種のドラゴンであったと

しても尻尾巻いて逃げ出すだろう。  
事実、脳天気なサイに比べて学園長がどれ程此処から逃げ出したい  
と思っている事が……。

「じ、実はのサイ君……。

昨日、このかがわしの所にやって来て『好きな人が出来たからもう  
見合いはしない』と言ったのじゃよ」

「へえ、そうかよ……つうか、俺にや関係ねえだろ。

何で一々、テメエの孫娘が好きな男が出来たからって呼び出されな  
きゃなんねえんだ？

まあ良いや、昨日も何だかテメエの下らねえ趣味に付き合わされて  
迷惑だみてえな事を言ってたし……好きな男が居たってんならそ  
れで良いじゃねえか。

まっ、取り合えず木乃香にやあ『おめでとう』とでも伝えておいて  
くれや」

全くマイペースな少年である。

まあ彼にとつて誰と誰が愛し合おうが無かるうがそんな事はどうで  
も良いのだ。

だが……学園長はその態度に溜息を吐き、エヴァは更に殺気を強  
くする。

「何だよ、その可哀想な人を見るような目は？」

学園長の視線にサイがそう言い放つと

学園長は深く大きく溜息を吐いて切り出した……エヴァが機嫌の  
悪い理由を。

「ハア……良いかの、サイ君。



このかが好きだと言ったのは・・・他でもない、君の事じゃぞ?」

「・・・はあ? 何だジジイ、本格的にボケたのか?」

サイは学園長がボケたのでは無いかと本気で心配して言う。

しかし学園長はゆっくりと首を横に振って疲れているかのように返す。

「・・・わしゃ、まだボケとらんわい。

昨日このかは此処に来て『ウチはサイ君と言う好きな人が居るから、もう見合いはしない』と言ったんじゃないよ。

お主、いつの間にかとそんなに仲良うなっておったんじゃない?」

学園長の言葉にサイは顎に手を当てて考える。

可能性があるとするれば一つ・・・昨日、木乃香との別れ際に言った言葉だろう。

しかし、確かに適当に理由を付けて断れば良いとは言ったが・・・まさか自分をダシに使われるとは思って居なかった。

そんな風に思考を巡らせていると・・・不意に誰かに首元を掴まれて振り回される。

「サ~~~~~イ~~~~~!!」

貴様ああ、私と言う者が居ながらああああ・・・どういう事だああああ!!?」

首を掴んでいたのはイイ笑顔をした金髪の悪魔だった。

本来、登校地獄の呪いはサイの血によって解けたが、本来の魔力を封印している方は完全に解除されていない筈。

なのに付近のテーブルやら窓やらがエヴァから漏れた魔力の所為でミシミシと音を立てている・・・。

更にテーブルの上にあつたカップが粉々に粉碎する……まさにこの中に居る者は、並の人間では正気を保っているのが難しい程だろう。

「あゝいやキティ、誤解だ誤解。

未確認生物

昨日其処のUMAジジイのアホらしい趣味から逃げて来た木乃香を匿つてな。

そんな時に『見合いですんのが嫌なら好きな男が出来た』とでも言つて断れつて俺が言つたんだ。

多分、その言葉を鵜呑みにしただけだろうよ」

その言葉にピタツと動きを止めるエヴァ。

どうやらサイの目を見て、真偽の程を確かめているようだ。

……まあ、良く考えて見れば『男として何かが欠けているのではないか』と疑いたくなる程に淡白で無愛想な彼がそんな事に一々嘘を吐く理由などあるまい。

特に男子の身の上でありながら女子校に編入し、しかもエヴァが知る限り2-Aの中で特に“癖のある”人物達から好意を寄せられてアプローチ（物騒なものもあり）を受けているにも拘らず、色恋沙汰には興味が無いと言うスタンスを貫いているサイにそんな器用な事が出来る筈もないだろう。

「……フン。良からう、信じてやる。

ジジイ、私はもう行くぞ……邪魔をしたな」

サイの首元から手を離し、さつさと部屋を出て行くエヴァ。

心なしかその足取りはスキップを踏んでいるようにも見えたが……それは本人でなければ解らない。

そんな彼女の後姿を見送りながらサイは『……やれやれ』と呟くと立ち上がって服の埃を払う。

「全く・・・木乃香の奴。  
何で一々、俺の名前なんぞ出すんだかな？ もっと他にも身近な奴  
が居るだろうが」

ブツブツと文句を言う。

ちなみに同年代の男子ならばいざ知らず、サイ自身は余り女性に興  
味は無かった。

かといって同性愛と言う訳でもない・・・寧ろ『色恋沙汰』と言う  
そのものに興味を持っていないのだ。

だから彼には“何故人を愛するのか？”と言う意味さえも解らない。

「フム・・・そうか、このかがのう。」

確かにわしは勝手にあの子の将来を決めさせようとしたただけか  
も知れんな。

うむ、よし。 わしとてあの子の幸せの方が大事じゃわい・・・こ  
れから見合いをさせるのは程ほどにしようかの、フオツフオツフオ  
ツフオツフオ」

そんな彼の言葉で木乃香の思惑が解つたらしい学園長。

・・・しかし、木乃香は信じられずとも孫娘だ。 彼女の心内は完  
全ではないにせよ理解している。

そして彼女が“断る為のダシとして目の前の少年を使う”とも思え  
ない。

目の前の少年はそれに気付いていないようだが・・・。

「どつじゃね、サイ君？」

君がこのかで見合いをするというのは？」

この一言も学園長なりに孫娘を応援する心算か、もしくは冗談で言

ったのだろう。

案の定、サイの答えは予想した通りの物だった・・・後に続いた言葉は予想外だったのだが。

「・・・遠慮する。」

それに、俺のような奴に大切な孫娘をくっ付けようとするな。

俺は所詮、人とは相容れない『バケモノ』だ」

「・・・フオ？ バケモノ？

わしから見たらどう見ても唯の人間じゃが？

お主、理由は解らぬが・・・余り自分自身を卑下するでない・・・  
「ククク・・・」・・・何か可笑しな事をわし言ったかね？」

すると・・・その言葉を聞いたサイが笑い始める。

「フフフ・・・アハハハ・・・」

その笑いはどこか自嘲的で

「アハハハ・・・アゝハツハツハツハ！！！！！！」

そして・・・何処となく悲しげに晒っていた。

学園長が声をかけようとした次の瞬間、いきなり笑いを消し飛ばすかのような巨大な音が響く。

『ゴシヤアアアアン！！』

音の音源は直ぐに解った　サイの居た入り口の横の壁が、獣の爪牙によって付けられたような痕が刻まれていたのだ。

・・・それをやった者は、言うまでも無かるう。

「……この何処が普通の人間だ？」

その表情から彼の本当の考えは理解出来ない……。

「言った筈だ……“我”は『バケモノ』だ、とな……」

だが……その姿は少なくとも

「それに“我”は……誰よりも愛される資格の無い人間だ。

そうだろう？ 殺す事しか出来ぬ“我”が、誰を愛せる？ 誰を護れる……？」

再び『全てを失う』だけだ……」

まるで……啼いているように見えた

## 第十六話：記憶なき破壊者（後書き）

投稿完了いたしました。

いやいや・・・なんか知らん内にエヴァが実に可愛い生物に  
本当に最初の頃に比べると変わりましたねえ。

そして今回また出た『裏サイ』

多くの事を知っていそうでありながら結局記憶は戻りませんからねえ。

此処からどういう道を進むのが楽しみにしててくださいな^^

第十七話：終わりとつづきの安息（前書き）

今回もバトって見ました^^

誰だか解り難いキャラクターとかも出てきますが、そこら辺は神羅万象の公式で名前で調べてみてください^^

## 第十七話：終わりと言つ名の安息

その日、サイは実に不機嫌であった。

口調と目付きの悪い彼を外見で一発で不機嫌だと解る者は少ないだろうが……。

「済まんのう、このような時間に呼び出して」

今の時間は昼の12時。

本来ならば麻帆良の搜索を終え、エヴァンジェリンの所か教会で昼飯を食べている時間なのだ。

いつもならば余り気にしないが……今日は朝からシャークティが仕事により留守だった為、空腹の状態故に気が立っていた。

「……おい、クソジジイ。」

何の用事か知らねえが、碌な用事じゃなかったらその本体が入ってる頭力手割って犬の餌にすつぞ?」

「だから済まんと言っておるじゃろうが。」

まさかお主が朝から何も食っておらんとは知らなんだんじゃよ……。

話が終わったらお主の食べたい好きな物を腹一杯食わせてやるからの、もう少し辛抱せい」

明らかに殺意の籠った目付きを向けられ、宥める様に学園長はそう言った。

そこに、学園長室の入り口を開けて誰かが入ってきた……その人物はサイも良く知る人物である。



「おい、ジジイ何の用だ？

こう見えても登校地獄の呪いが解けてから私は暇では無い。

用件があるなら簡潔に、早急に、理解しやすいようにとっとと言え」

其処の入って来たのはエヴァである。

珍しく茶々丸を連れていない・・・彼女もサイと同じく学園長に呼び出されたのだ。

・・・無礼千万な態度もそっくりだったが。

「フオツフオツフオツフオ・・・エヴァも来た様じゃな。

では、二人に来て貰った理由を語ろうかのう・・・実はの・・・」

学園長の用件とは他でも無い、ネギの事であった。

何でも、ネギがこの学園に来た理由は魔法の修行の為であり・・・取り合えず、三学期の期末テストを乗り越えた事により教師として雇う事は決まったそうだ。

・・・まあ、そこら辺の事は少し前の話に乗っているのだが。

「さて・・・実は此処からが本題じゃ。

お主達、正直この学園に来てからのネギくんへの魔法先生方の評価を知っておるか？」

問いにサイもエヴァも遠慮する事無く返す。

元々、ネギを斜に構えた所から見ていたエヴァも、兄のように思われているサイもネギを見ていた際の評価は同じであったが。

「どくせ、魔法世界の英雄とか言われてる『ナギ』何たらってのの息子としか見られてねえんだろ？」

「フム・・・サイの言う通りだろう、ジジイ？」

あの坊やはナギが有名過ぎる所為で、坊や自身を見てくれる者など殆ど居まい。

この学園では私やサイ以外なら精々貴様位だ・・・違うか？」

考えても見れば魔法世界の英雄の一人息子だ、周囲の視線も自ずと定まって来るだろう。

恐らくネギ・スプリングフィールドと言う名を聞いたら、魔法関係者は10人中10人がこう言うだろう・・・『ああ、サウザンドマスターの子供か』と・・・。

それはネギの事を知らない人物なら仕方ないのかもしれない。

そういった人物達にとつたら、それしか情報を知らないのだから。

だが・・・悲しい事に魔法生徒やら魔法先生やらの大半は勿論の事、『ネギくんは親友だ』などと言っているタカミチさえもそう言った目で見ている節がある。

更に困った事に、ネギはそう思われる事を誇らしく思っているような節があるのだ。

何かに執着する、唯一つの事にしか目を向けられない。

それは冷たい言い方をすれば、自分の信じている物が崩れ去った時に立ち直れなくなる可能性が高いのだ。

愚直に信じるだけでは救われないものが沢山あり過ぎるのである。

「うむ、その通りじゃ。

ネギくんはナギの息子じゃが、ナギを想像以上に英雄視し過ぎていてるくらいがある。

そのままでは必ずいつか、取り返しのつかない事になるような可能性があるので、じゃよ・・・。

そこで、じゃ。客観的に、それで居てしっかりとネギくんの事を見れるお主達二人にネギくんが歪んだ方向に進まぬように見守って

欲しいのじゃ。

・・・エヴァ、お主がナギに恨みを持っておるのは良く知っておる。しかしそれでも頼めんかのう？」

つまり学園長はネギの事を『英雄の息子』ではなく『一人の少年』として見られる二人にネギの成長を見守って欲しいと頼んでいるのだ。

そのような考え、15年も前に自由を奪われて麻帆良に縛られてしまったエヴァが許す筈も無いだろう。

だが・・・エヴァは小さく笑いながら言った。

「別に構わんし、今更怨んだ所で私の十五年が帰って来る訳でもない。

見守って欲しければ見守ってやろう・・・だが、私があ坊やと関わるのを嫌う者など数え切れん程にいるだろう？」

その連中へはどう言い訳する心算だ？」

更にサイも学園長に言葉を返した。

前回、最後に言った発言はおぼろげにしか覚えていなかったが。

・・・考えても見れば、自分のような得体の知れない人物に他の者達が崇めている様な少年を託すと言うのも可笑しな話だろう。

「面倒臭えけど、別に俺も構わねえぜ。

ただ・・・俺のような得体の知れねえ奴がネギの奴の近くに居たら、アイツを崇めてる連中は良い顔しねえだろ？」

その辺の所も大丈夫なのかよ、ジジイ？」

だが二人の言葉に学園長は眉で隠れた奥の目を鋭くしてから答える。いつもいつも、ボケた事を言っている学園長とは雰囲気が違うようだ

「大丈夫じゃよ二人とも、わしやタカミチ君が上手く皆には説明しておくからのう」

飄々とした好々爺だが、学園長はこれでも長い事人の表裏を見て来ている。

そんな所そこの若造達に言い負けるような事は無いし、説得する事についても問題はない。

何しろ、裏の世界では『英雄』として崇められているタカミチもいるのだから。

タカミチこと、タカミチ・T・高畑。

実は彼はかつて魔法世界で英雄と呼ばれたナギの率いる『アラルブラ紅き翼』の一員であった。

『赤き翼』とは、表向きはNGO団体として国連にも参加している魔法使いの団体に所属している一行である・・・魔法世界で起きた戦争で活躍し、世界を救った事で魔法界全土で絶大な人気を誇る。ある意味ではたった七人で世界と喧嘩した者達なのだ

しかし、実は知られていない事もある。

厳密に言えば『赤き翼』には“ある理由”により表には伝えられて居ないが、もう一人協力者のような人物が居た。

しかし・・・現在ではその人物の情報は一切合切残されていないのだ。

それはさておき  
閑話休題・・・。

学園長の申し出に『なら別に構わん』と一言だけ言い終わると、それ以上に用件が無さそうなので足早に出て行くエヴァ。

学園長がどう思っているのかは別としても、他の者達にとっては彼

女は『悪の魔法使い』に過ぎないのだ。  
余り余計に学園長室に居れば、良い感情を持たれる事もない。

更にサイもさつさと出て行こうとした。

彼の場合は常々に誰に命令される事も嫌い、自由に生きて、勝手気ままにやっているのに良い感情を持っていない者達が多かったのだ。シャークティは彼のその裏に隠れている優しさを共に暮らしているので知っているが、他の者に説明した所で解って貰えるものでもない・・・まあ、本人も別に自分を解って貰う気もないようだが。そんなこんなで魔法関係者達に余り良い感情を持たれて居ないサイも、あまり此処に長居したく無いのだ。

「ああサイくん、君にはもう一つ頼みたい事があるのじゃが良いかのう？」

不意に背を向けたサイに後ろからそんな言葉が掛けられる。

そこで一度立ち止まると、サイは不機嫌そうな表情で学園長の方を向く。

すると学園長はサイに頼みたかったもう一つの事を説明し始めるのであった

「ヤレヤレ・・・あんのクソジジイ。

何で俺が、封印の確認なんぞに日々行かなきゃならねんだよ・・・

「

ブツブツ文句を言いながら魔法により人払いをされた場所に向かうサイ。

学園長からの頼みとは所謂『裏の仕事』・・・それは麻帆良郊外に

ある森の調査だった。

何でもこの場所には、かつて麻帆良に100年近く前に現れた正体不明の怪物が封印されているらしい。

その封が最近になって少々弱まって来ているという事を知った学園長は、最近良く麻帆良を散策して場所などを知っているサイに調査を依頼したのだ・・・。

まあ、一人では無かったのだが。

「・・・オイ、テメエら。

さつきから無言で居られると怖えんだよ、何か話せよ」

「・・・」

「・・・」

サイの後ろに付いて来ているのは二人の少女。

一人は背に長太刀を背負い、少し前からサイからすれば『無視されている』と感じている少女・・・桜崎刹那。

もう一人はクラスの中でも浮いた存在で、極端に口数の少ない褐色の肌の少女・・・ザジ・レイニー・デイだった。

どうやら彼女も魔法生徒と言う奴のようだが・・・誰かと今まで共に戦う事など無かった筈・・・。

二人ともサイに声を掛けられても殆ど喋る事をしない・・・まあ、ザジは別として刹那は口を聞かない、いや聞けない理由があるのだが。

「ハア・・・もう良いわ。

しかし、封印の場所って確かジジイに聞いた話じゃこの辺だよな？ それらしいモン、一切ねえんだが？ やはりあのジジイ、ボケが始まりやがったか・・・」

だが、其処まで言つてサイは気付く。  
彼の見ていた先にある、無数の破片のような物・・・一目だけでは理解し難いが、少なくともそれに刻まれているのは封印の祝詞ではないか？

疑問に思つてその破片を拾おうとした次の瞬間　　文字通りサイが会つてから一度も話さない極端な無口少女が初めて口を開く。

「・・・来る」

「・・・えっ？　来るつて、何が・・・」

だんまりだった刹那が口を開き、ザジに問う。

しかし・・・その答えが出る前に、サイは二人の襟首を掴むと今居た場所から後方に飛び去つた！！  
いきなりの事に刹那が声を上げる。

「きゃあ！？　な、何をするんですか貴方は！？」

「悪いな、問答してる暇が無かつたんでな。

と言うか、別に其処に置き去りでも良かったが・・・串焼きにされるのは趣味じゃねえだろ？」

「・・・へっ？」

呆けた様な言葉を口から漏らす刹那。

サイは何も言わずに顎でしゃくつて今まで自分たちが居た部分を示す。

すると其処には　　鋭利に伸びた、見るからに凶暴そうな刃が突き立てられていたのだ。

いや違う、突き立てられていたのではない・・・大地からまるで植物のように隆起していた。

「な・・・何・・・？」

明らかにおかしいその隆起した禍々しい刃の横から腕が現れる。

それと共に放たれる殺気は、明らかにまともな人間の物では決して無い・・・。

現れ出でたその“何か”は、全身中に包帯のような物を巻き・・・  
澱んだ様な目付きで虚空を虚ろに見つめていた。

「・・・皇魔族」

「あん？ テメエ・・・何で“皇魔族”の事を知ってる？」

ザジが呟いたその一言をサイは聞き逃さない。

そう、本来は普通の人間が知る筈の無いフレーズを、彼女は口ずさ  
んだのだ。

本来、皇魔族とは・・・サイの生きていた世界に存在した血塗られ  
た一族の一つなのだから。

「・・・同じ。 貴方と・・・私」

「ああ、そう言う事か。 道理で最初に会った時に懐かしく感じた  
訳だ。

しかしその気配はどう考えても“皇魔族”だよな？ って事はテメ  
エは皇魔族と人間の合ハッいの子って訳か。

しかも人間の血の方が濃い訳だな、それで納得出来たぜ」

「・・・何の話ですか、お二人とも？」

刹那が目の前の化物に向かって刀を構えながら聞いてくる。







・そして疲弊させていった。

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・」

くっ、何故だ・・・何故倒しても倒しても敵が減らないんだ!」

斬っても斬っても終わらない。

永劫に、永遠に、まさに己が力尽きるまで終わる事など無い。

血に塗れ、腐肉に塗れ・・・それでも屍達は迫ってくる。

彼女は木乃香を護る為ならば自分の命など惜しまない。

全ては木乃香の為、自分が化物であると理解している彼女にはそれ以外の事など必要なかった。

それが自分に出来る全てだと彼女は感じていたのだから・・・。

「うつ?!? は、離せ!!!」

いつしか振るっていた太刀は斬り続けた事で刃こぼれし、斬れなくなっていた。

それにより屍達に捕まってしまった彼女は死を覚悟する。

だが 次の瞬間

「いつまで幻影見せられてんだ、テメエは!?

さっさと起きろ、このクソ女!!! こんな所でクタバるのが望みか、

ああ!?!」

その声が響いた瞬間、刹那は自分に襲い掛かっていた屍達が居ないのに気付いた。

しかも太刀も刃毀れせず、それどころか返り血一つ浴びていない・  
。。

「はっ!? えっ……今のは?」

「やっと幻影ユメからお目覚めかよ。

全く、何を簡単に騙されてんだテメエは……。それで木乃香の護衛  
を気取ってる心算か、ああ?」

そう、先程までの大量の屍が現れた光景は全て幻影だったのだ。

目の前に居るのは全身中を包帯のような物で巻いた人物のみ……。  
そう言えば先程、あの男の姿を見た後に屍達は現れたものではなかつ  
たか?

それに気付いた刹那の頭に、誰かの拳骨が落とされた……。

「きゃ!? な、何をするんですか!?!」

「何をするんですかじゃねえよ、テメエこそ何やってんだバカが。  
何に焦ってるんだか知らねえが、焦燥は視野を狭めるだけだって教  
わってねえのか?」

「うっ……」

サイの言葉に黙り込んでしまう刹那。

彼女は幻影からサイが助けしてくれた事を知っている為か余り文句は  
言えなかった。

と、その時……今まで黙っていたザジが口を開く。

「……狙い、定めた」

見れば包帯だらけの封印されてたであろう人物がゆっくりとこちら

に向かって歩き始めていた。  
ザジはどうやら『敵が狙いをこっちに定めた』と言いたかったのだ  
ろう。

そんな姿を見て、サイは何処となく嬉しそうに笑った……。

「面白え……皇魔族の連中なら少しは楽しめそうだな。

おい、ザジつつったか？ それと木乃香の護衛……手え出すんじ  
やねえぞ……。

ありゃあ俺の獲物だからなあ！！」

放たれるは鬨気、いやもしくは覇気か？

久方ぶりに楽しめそうな相手を前にサイの目付きは驚くほどに光っ  
ている。

前を歩き出す彼の腕にはもう既に神具アーティファクトの六道拳が装備され、その腰  
には七魂剣が携えられていた。

獰猛にして不敵、だがどこか玩具を与えられた子供のような笑顔。

もし此処にエヴァが居たとしたら間違いなくこの戦いを楽しみにし  
ただろう。

こうなってしまったサイは、誰にも止められないのだ。

「なっ……そんな事を言ってる場合じゃ……」

止めようとした刹那だが、後ろからザジに肩を叩かれる。

振り向いたその先でザジは、ゆっくりと無言のままに首を横に振っ  
た……邪魔をしてはいけないと言う事だろう。

「あんがとよ」

唯一言だけサイは背を向けたまま呟く。

見れば向こうの包帯だらけの人物もサイに向かって歩き出していた。

そして・・・二人の攻撃が届く程の距離になった、次の瞬間

『ガキイイイイイイン！！！！』

サイの拳と包帯の人物の拳がぶつかり合う。

二人は直ぐに距離を取ると、その音を皮切りに戦闘を開始したのだ  
った・・・。

「ハハハ！！　ハハハハ！！　アゝハッハッハッハ！！！！」

晒う・・・何処までも楽しそうに。

『・・・グウウウウウ』

それに合わせ、包帯の人物も呻き声を上げる。

サイの放った蹴りは包帯の人物の腕が、包帯の人物の放った拳はサイ自身の足が払う。

二人は明らかに互角、しかし死人である包帯の人物の方が痛みを感じないと言う事では一歩上だ。

「へっ、やるなテメエ。

そうだ、この感覚だ　キテイの奴と殺り合った時以降、退屈な連中の相手ばかりで感じられなかったこの凄まじい殺意だ・・・。この感覚を感じてなけりゃ、戦いなんぞつまらねえだけだ！！！」

言葉と共に天を駆ける一筋の閃光。

いや、その光はまるで光の束・・・まさに光の洪水ように天を切り裂き包帯の人物の体に叩き込まれる。

この光の正体は                    サイの拳撃だ！！

「オラオラオラオラア！！！！！！」

これはサイの特技の一つ。

対象の速度を高速化させる事の出来る能力を持つ『六道拳アスラ』  
を使った業だ。

その拳撃の速度が速過ぎるが故に、攻撃が光の洪水にしか見えない  
という妙技。

まさに光明（暗闇を照らす明るい光）を司ると言つ名に相応しいも  
のだろう。

その技の名は“光流覇撃”。

『グ・グガアアアアアアアアア！？』

目にも留まらぬ速さで叩き込まれる攻撃に流石に包帯の人物も辛く  
なつたか？

全身中に攻撃を叩き込まれ、痛みを感じない筈の体が一步一步後ろ  
に下がり始めた。

しかしそれは・・・拳撃の余りの連打数によつて後ろに下がってい  
るだけだ。

勿論、攻撃を叩き込んでいるサイ自身がそれを良く気付いていた。

「・・・つ、強い・・・」

サイと包帯の人物、この二人の死闘を見ていた刹那の口からは自然  
とそんな言葉が漏れていた。

明らかにレベルが違う・・・例えば彼女が本気になつたとしても、サ

イには傷一つ付けられれば上出来だろう。

いや、己の師匠のような人物である神鳴流でも最強の剣士の葛葉刀子にも匹敵するか、もしくはそれ以上だとも肌で感じていた。

「……………大丈夫？」

ザジが黙り込んで冷や汗をかき始めた刹那に向かって声をかける。だが……刹那の耳にはそれは届いていない、ただ目の前で行われている死闘に魅入られてしまっていた。

それ程までに圧倒的で、かつ華麗なサイの拳撃……武を会得している者が魅了されない訳があるまい。

……すると、サイを見つめる二人の前である変化があった。

「ふん、道理でぶん殴っても効果がねえ訳だ」

刹那には殴っているようにしか見えなかったが、実はサイは光流覇撃を放つても効果が無い事を知り、途中から包帯の人物の肉体を引き千切るうとしていた。

だが……それも効果がなく、どうしようかと考えていると無意識の内に包帯を引き千切っていたのだ。

其処から出て来たのはある意味では予想だにしていなかったもの……。

其処には

『グウウウウ……ミ、ミル……ナ……』

明らかに生物のそれとは違う



まるで元々あつた肉体に強引に他の生物の皮膚やパーツなどを組み込んだ人造人間のようフランケンシュタインな鬼の姿をした人物が居た。

「成る程ねえ．．．要はテメエ、作られた皇魔か。

玄武族の鱗と怪力に白虎族の爪と尾、青龍族の角と魔力に朱雀族の翼とスピードって所だろ？

何だ、歴史書に載る皇魔族の遙か昔の『皇魔王・ベリアール』を模した心算かよ？」

皇魔王ベリアール。

遙か昔、まだ世界が聖龍族・獣牙族・飛天族・鎧羅族と呼ばれる四部族で争っていた時代に現れた人物。

角、尾、翼、甲殻と地上の4部族の特徴を全て併せ持ち、後に大魔界と呼ばれる世界を統一した最強にして最大の魔王。

地上の者達とは敵対しながらも卑劣な手を忌み嫌い、堂々と戦いを挑んだ偉大なる漢．．．。

サイは完全には覚えていないが、現在の魂獣界でも他の八種族を超える力を持っていた者達であり．．．その中でも皇魔王の血筋を受け継ぐ男の強さは尋常ではなかった。

そんな人物を模そうという気持ちは解らなくも無いが

少なくとも目の前の赤鬼のような人物は好き好んでこの様な姿になったのでは無いのだろう。

『．．．グ．．．グググ．．．』

オ．．．オノレ．．．ユルアヌ．．．ユルサヌゾ．．．メビウス！

！！

ワレヲ．．．ワレヲ．．．コノヨウナ．．．スガタニ．．．シオツ

テ．．．』

「・・・メビウス？」

ああ、そう言えば人でありながら魔導を極めて神をも凌駕する力を持った存在が居たって歴史書で読んだ事があったな。

・・・じゃあテメエをそんな姿にしたのは『魔導神メビウス』って訳か。

そりゃまたご愁傷様だな、魔導神メビウスは遙か昔に調和神バランスールによって悪意を浄化されて人生やり直したらしいが？」

魔導神メビウス

人間でありながら魔導を極め、不老長寿の肉体を得て世界を掌握せんとした存在。

その力は極限まで極められた事により神をも超越したと言われ、それと共に羅震獄と呼ばれる世界を生み出したとも言われている。

しかし歴史書に載る程の昔、超煌神と呼ばれる若き神によって倒され・・・悪意を浄化されて再び人間として人生をやり直して天寿を全うした存在だ。

・・・それを考えればこの赤鬼は、メビウスが人生をやり直す前に改造されたのだ。

そして何の因果かサイと同じように世界を越え、この麻帆良に召還され・・・その向けるべき力を向ける相手も存在せずに破壊の限りを尽くし、最後には憎しみが消えぬまま封印されたのだろう。

『ユルサヌ・・・メビウス・・・ユルサヌ・・・!!』

ワレヲ・・・ワレヲ・・・コノヨウナ・・・スガタニ・・・シタコト・・・コウカイサセテヤル・・・!!』

虚ろな表情のまま、何処を見る事も無く憎しみに囚われ呟き続ける赤鬼。

考えれば哀れなものだ・・・憎しみを向ける相手が居ない事も、己

が元々居た世界でない事もこの人物は気付いていない。  
ただ、目先の復讐心と言う物のみが存在しているだけの屍に過ぎないのだろう。

「・・・哀れだなテメエ。

復讐をする相手も存在せず、己の宿願も遂げられず、こんな場所で其処まで朽ちてたなんてよ。

俺にやテメエの事は理解出来ねえけど・・・少なくともちったあ名の知れた皇魔族だったんだろ？

そんな奴がこんな所で生かされ続けてるなんて、屈辱以上の何モンでもねえよな」

サイは己の生き方、そして誇りを大事にする漢。

その彼からすれば、かつては武人であつたらうに復讐心のみに関われ続けて生きる滑稽な道化を見るのは気に入らなかつた。

・・・いや違う、気に入らないのではなく辛かつた。

死ぬという事が格好良いなどとは言わない、しかし・・・死ぬべき時に死ねないというのは何よりも辛い事だ。

・・・かつての自分もまた、“死ぬべき時に死ねなかつた”のだから。

「・・・終わらせてやるよ。

テメエの憎しみも、死ねねえ苦しみも・・・行くべき所に逝かせてやる。

それが俺に出来るテメエへのせめてものプレゼントだ」

その瞬間

サイの纏う黄金の籠手、六道拳から光が迸る。

その光はかつて、サイがエヴァンジェリンと戦った時に放たれたも

のとは違う。

「なっ……こ、これは!?!」

「………眩しい」

放たれる圧倒的な力

この力もまた、エヴァ達との殺し合いじみた修行の中で思い出した彼の能力の一つ。

厳密に言えば、彼の持つ六道拳アスラの持つ能力の一つだ……。

放たれた光はサイの両の手に、まるで形を創るように集まっていく。サイの技法の中で最も戦いに適し、もっとも異形で、そして最も己の実力そのものが影響する技法。それは……。

「六道司る神の名を冠す魂よ……。

我が前にその姿を記憶したる幾十の魂の欠片を顕現せよ

」

光が収まり、その手に握られるのは二振りの刃。

炎を思わせる片手剣に雷を思わせる日本刀　いや、それだけではない。

サイの周りには幾つもの武器がまるで見えない糸に吊るされているかのように浮かんでいる。

しかもそれはまるで、サイを護るかのように浮かんでいるのだ……。

「……待たせたな」

そしてサイもまた、姿が大人へと変わっていた。

更に今までと違う所が一つだけある　それは、サイの片目が真

紅の色に変化して光り輝いていたのだ。

「さあ・・・やろうぜ、時代外れの世界で喘ぐ赤鬼よあ!!  
せめて悔いが無いように今俺の持つ全力でやってやる、しっかり堪能して全部に悔いなく逝けや!!」

『・・・オオオ・・・オオオオオオオオオオオ!!!!!!!!』

此処に九尾の魔人と紅き鬼の決着が付く。

周囲に響き渡るほどの咆哮を上げると、二人は地を蹴ったのであった・・・。

## 第十七話：終わりと言う名の安息（後書き）

投稿完了です。

しつつかし・・・バトルが途中で終わると、気になる方も多いでしょうね。

今回解らないキャラクターも何人か出てきたと思いますので改めて説明を補足させていただきます。

【皇魔王ベリアール】（初登場作品：神羅万象 第一章 第二弾）  
皇魔族と呼ばれる、我々現実世界で言う所の【悪魔（もしくは魔族）】の將軍の一人。

神魔界という世界の生まれで後の時代に『魔界三巨頭（ ）』と呼ばれる三人の筆頭として頭角を現し、大魔界と言う別次元の世界を統治する大魔王エルシ・ヴァに見出され、同人物の養女アルフィーネと婚約・・・その後色々な事件を乗り越え結婚し実質的に神魔界と大魔界の統治者となる。

### （ ） 魔界三巨頭

魔元帥ベリアールを筆頭に紅一点の魔將軍アスタロットと劍神とも呼ばれる魔將軍アリオクの三人。

・・・尚、決して聖 土星 の冥 三巨頭（ラダ ン イス、ミース、ア アコ ）とは関係ない。

ちなみに後の時代（神羅万象 王我羅旋の章 第二弾）に彼の子供が二人登場。

本妻であるアルフィーネとの間の子が兄のベルゼビュート、側室（まあ、正確に本妻と側室の違いがあるかは不明だが）であるアスタロットとの間の子が妹のアスモディエスである。

名前の元ネタはアルフィーネ以外は全員魔王、もしくはソロモン七十二柱の悪魔達

ベリアル<sup>II</sup>ベリアル、アスタロット<sup>II</sup>アスタロット<sup>II</sup>アシュタロス、アリオク<sup>II</sup>アリオク<sup>II</sup>アリオシユ、ベルゼビュート<sup>II</sup>ベルゼブ<sup>II</sup>バアル・ゼブル、アスモディエス<sup>II</sup>アスモデウス<sup>II</sup>アスモダイ

【魔導神メビウス】（初登場作品：神羅万象 第二章 第四弾のS Pカード）

魔導を極め、不老不死の肉体を得て世界制服を目論んだ人間。

某北欧神話題材ゲームの変態ロリコン魔導士と同じ様なものである。ある時代（神羅万象 第三章 第一弾）まで世界の裏で暗躍し【異世界への扉】なるものを作り出し、コア・キューブと呼ばれるものによって自らを魔人へと改造した。

その後、命を落としたと思われていたが実は封印されていただけであり、それから何百年か後の時代（神羅万象 神獄の章 第一弾）において自らが羅震獄と呼ばれる世界と羅震鬼と呼ばれる者達を創造し、彼らの神となる。

更にその後【超煌神】と呼ばれる若き神によって倒される事となるが、最後には長き年月が彼を変え、その若き神に羅震獄と自らの子と言っても過言ではない羅震鬼達を託して静かに逝った・・・。それを哀れみ、そして彼が変わった事を理解した調和神によりメビウスは記憶の全てを浄化され、子供に転生されて新たな人生を歩み、天寿を全うする。

元ネタはメビウスの輪

不滅や永劫回帰、不老不死の元となった古代ギリシャのウロボロスの象徴

【調和神バランシール】（初登場作品：神羅万象 第三章 第四弾）  
魂獣界、皇魔界、人間界と共にもう一つ存在する天界を統治する全知全能の超聖神で、母性と父性を備えた偉大な神でもある。

元々天界は『創造神統治領域』と『破壊神統治領域』というのに分かれ、それぞれが創造神クリエールと破壊神デストールと言う二人により統治されていた。

しかしメビウスがコア・キューブというものを奪った事により一挙人間界と天界は戦争状態にまでなってしまうこととなる。その際に人間達に味方したのがクリエールら創造神派である。

色々な戦いが終わり、決着が付いた後に破壊神と創造神が融合して新たに生まれたのが調和神バランシール。

ちなみに外見は女性だが、厳密に言えば性別は雌雄同体（つまり、男でもあり女でもある）

元ネタは多分、英語のバランス（均等）からだろうと思われる  
クリエールは英語のクリエイト（創造）、デストールは英語のデストラクション（破壊）からだろう

尚、これとは関係ありませんがサイの使った技法。

これは所謂 Type Moon の作品 “ Fate / stay night ” のエミヤが使う『無限の剣製』アンリミテッドブレイドワークスとは違います。

寧ろそれよりも金髪ギル様の使う『王の財宝』ゲイトオブパピロンの方が似ているでしょうか。

元ネタは一応、ファイナルファンタジーヴェルサス??の主人公ノクティス・ルシス・チェラム（通称ノクト）の武器を自由に操る能力です。



ではこの辺で失礼しますね。

もしも他に解らない事があったらどんどん質問してください

## 第十八話：千の狂刃（前書き）

今回でバトルは終わりです。

またもやストーリーに沿うようになりますので^^

## 第十八話：千の狂刃

「行くぜ、オラアアアア！！！！」

耳を劈く様な掛け声と共に赤い外見の鬼のような人物に斬り掛かるサイ。

彼に追従するようにして周囲に翼を模る様に浮く幾多の武器

『グウ・・・グオオオオオオツ！！！！』

それに併せ、今まで地に刺していた禍々しき大剣を手に取ると駆ける赤鬼。

その咆哮の意味は憎悪か、それとも歓喜か

『ガシイイイイン！！』

ぶつかる赤鬼の大剣とサイの両の手に携えられし刃。

それと共に、二人の殺陣演舞が始まった。

大雑把だが、敵を大地ごと薙ぎ払うかのような赤鬼の一撃。

斬撃が掠った場所は抉れ、大剣を振る度に放たれる旋風は木を薙ぎ倒す

確実に一撃当たれば致命傷だというのは説明する必要も無い・・・  
実にとんでもない一撃だ。

「はっ、やるねえ。」

そうだよな、そうじゃなけりゃ折角コイツ等を解放した意味がなくなっちまう、ぜー！！」

一方、サイの方は身軽に一撃を避けるとそのまま有り得ない角度で赤鬼を切り裂く。

そのスタイルは剣術もヘツタクレも無い、明らかに我流だと解る戦い方だが・・・的確に敵の急所を狙っている。

所謂これはお座敷剣術ではない、明らかに実戦の中で会得した手合の戦い方だ・・・。

『グ・・・グググ!?』

赤鬼がサイを追いかけて攻撃を仕掛ける。

しかし、その斬撃は空を切るばかりで本人には一太刀も浴びせられない。

だがそれは当然の事　大人Verの姿になっているとは言え、サイは六道拳の能力の一つである『高速化』によってスピードのギアが上がっている。

それに併せ、赤鬼が使っているのは鎧ごと相手を斬る・・・つまり力任せに広範囲を薙ぎ払う為に使われる事の多い大剣を使っているのだ、止まっている相手ならまだしも高速で動き回る相手に対して攻撃を当てるなど熟練者でも難しいだろう。

さらに赤鬼を混乱させている事があった。

それは、サイの攻撃一つ一つが明らかにおかしいと思える位に“重い”のだ。

普通、拳にも剣にも言える事だが

安定した踏み込みやら体重移動やらと言う物が出来てこそ高い効果を期待出来る。

【無拍子】と呼ばれる初動動作をしない拳法の究極系の技術も、重心をしつかりと大地に根を張るようにしているからこそ出来る事だ。

空中に跳んで斬撃や拳撃を放つというのは見栄えは良いかも知れないが・・・重心などが不安定となる為、バランスを崩したり悪ければ相手に反撃の機会を与えてしまう。

まあ、翼でもあつて空を飛んでいられるのなら別だが・・・。

しかしサイは先程から地上で戦うのではなく、空中で有り得ない方向から攻撃を仕掛け続けていた。

彼は魂獣スピリッツとは言え、空中戦を得意としている朱雀族ではなく白面九尾族だ。

空を飛ぶ事など出来る筈も無い　しかし、その放たれる斬撃は明らかに空中戦を得意としている者の戦い方である。

『・・・オ・・・ノレ・・・チヨコ・・・マカ・・・ト!!』

そんな戦い方に憤りを感じたのか、赤鬼は背のまるで悪魔のような翼を開いて空中に浮かぶ。

空を飛べば翼を持たないサイでは攻撃は出来ないと思つたのだろうが・・・その考えは甘い。

赤鬼は考えるべきだつたのだ、どうやってサイが彼に『有り得ない角度から重い攻撃を叩き込んでいた』のかを。

「・・・甘えよ、バカが!!」

『・・・ナ・・・二!?!』

天に翼で舞つた筈、相手は空など飛べない筈。

なのにその声は赤鬼の遙か上から、雷が降るかのように鳴り響く。

更にそれに続いて上から振り下ろされる一閃・・・咄嗟に大剣で防御しなければ、赤鬼の頭はまるでスイカのように真つ二つになつて居ただろう。

「グオツ!? バ・・・バカナ・・・何故空も飛べない・・・筈ノ・・・存在ガ・・・」

重い衝撃と共に大地に思いつきり叩き付けられる赤鬼。

防御した際に彼が使っていた大剣は真つ二つに折れている・・・まさか大剣を剣か刀で叩き折るなど、どれだけの力なのだろうか？  
だが・・・良く見てみれば空中のサイが両腕に持っていたのは蒼い日本刀と紅い片手剣では無い。

今度は右手に銀の長斧、左手に碧の槍を携えていたのだ。

そこで赤鬼は気付いた。

何故空も飛べない筈のサイが、空中戦を得意とするような戦い方が出来たのかを。

『・・・マ・・・サカ・・・？』

周囲に浮いている武器、使い分けながら有り得ない角度で攻撃出来る。

それだけの情報で辿り着く答えなど、多くはあるまい。

本来、普通の身体能力では絶対に不可能な技法だ。

『貴・・・様・・・』

空中二・・・浮力ベタ、貴様・・・ノ・・・武器ヲ・・・足場ニシテ・・・攻撃シテイタノカ・・・』

そう、赤鬼の口走った通りだ。

サイは召還した幾多の武器を空中に浮かべ、それを足場として重い攻撃を放っていた。

更に相手がガードする事を見越し、斬る為の刀や払う為の剣ではな

く……断ち切る為の斧や打ち貫く為の槍に使うものを変えていた  
のである。

「当然だ、その位の事出来ねえのにデカイ口なんざ叩かねえよ」

サイは刀や剣を使えるのではない。

刀や剣“も”使う事が出来る……要は彼は、召還した幾多の武器  
全てを扱えるという事だ。

しかもそれを文字通り手足の如く操り、移動手段やら攻撃手段にも  
使える。

まさに言うなれば彼は……『全ての武器を操れる猛者』と言う事  
だ。

『……チイ……ナラバ……出シ惜シミ……ハ、出来ン……  
！！』

感謝シロ、猛者ヨ……本来ナラバ……メビウスニ……見セテ  
……ヤル筈ノ……カダ！！

ソシテ……無礼ヲ……詫ビヨウ。 我ガ名ハ……『テストロ  
ス』……誇リ高キ……皇魔族ガ戦鬼ナリ！！

強キ者ヨ……貴様ノ……名ヲ……名乗レ！！』

テストロス……それが赤鬼の名。

今までのように澱み、憎悪しか見せていなかったその目はいつの間  
にか獯猛だが濁りが取れていた。

強き者、その存在であった事が……テストロスの憎悪のみしかな  
かった心にかつての戦士としての魂に火を点けたのだ。

戦士には戦士の礼儀を

例え遙か昔に死に、その身を憎悪のみでしか残す事の出来なかった  
哀れな生きる屍であつても。

サイは誇りを思い出し、戦士の信念を再び灯した漢に対しては決して無礼はしない。

「我が名は光明司サイ!!」

古の武人よ!! この魂とこの名に誓い、貴殿に誇り高き終焉を!! この刃、我が力、我が魂・・・全てを以って貴殿を倒さん!!」

サイの口上にテストロスは笑う。

そして呪法のようなものが体に浮かび上がり光る・・・光が止み、其処から出て来たその姿は今迄の身の丈を裕に超える姿となっていた。

全てが真紅・・・翼も甲殻も尾も角も。

筋骨粒々な外見と圧倒的な威圧感・・・そして今までなかった腹にある巨大な鬼のような顔。

その姿は、知る者が見れば即座に何なのかを答えられただろう。

かつて遙か昔、京都が平安京などと呼ばれていた時代。

魔窟『大江山』に巢食い、片腕の鬼『茨城童子』と共に日ノ本を掌握せんとした鬼王。

日本三大悪妖怪として、玉藻前こと『白面金毛九尾ノ狐』に恨みにより大天狗と化した『崇徳天皇』と共に恐れられ、封ぜられた筈の鬼神・・・。

その名は 『朱天童子』。

テストロスは朱天童子本人では無いにせよ、それとほぼ同じ程の妖気を併せ持っていた。



「さて・・・これが本当の本番って訳か。  
そんじゃ始めるか・・・悪いなメルト、お前に貰った札を使わせて  
貰うぜ」

サイは懐から一枚の御札の様な物を出す。

そしてそれを空中に投げると、呪文のような物を呟いたのだ。

アナハチ 畔放  
ミソウメ 溝埋  
ヒハナチ 樋放  
シキマキ 頻播  
クシザシ 串刺  
イキハギ 生剥  
サカハギ 逆剥  
クソト 屎戸

コトナノツミト 許多乃罪登  
ノットリワケテ 法里別卦手  
イキハガタチ 生虐断  
シニハガタチ 死虐断

シラヒトコクミトハ 白人胡久美登波  
クニツツミ 国津罪

オノガハオカセルツミ 己我母犯世流罪  
オノガコオカスツミ 己我子犯須罪  
ハハトコオカセルツミ 母登子犯世流罪  
コトハオカセルツミ 子登母犯世流罪

ケモノオカセルツミ 畜犯世流罪  
ハフムシノウザワイ 昆布虫乃災  
タカツノカミノウザワイ 高津神乃災  
タカツトリノウザワイ 高津鳥乃災  
ケモノタホシ マジモノ 畜仆司 蟲物  
セシツミ 世司罪

クサケサノツミハ 種種乃罪事波  
アマツツミ 天津罪  
クニツツミ 国津罪  
コトナフノツミイテム 許許太久乃罪出出牟  
コクイテハ 此句出出芭

カクサスライ 此久佐須良比  
ウシナイテ 失比氏  
ツミトイフツミハ 罪登云布罪波  
アラジ 在良自

それは祝詞だ・・・しかも神道の罪の概念である『天つ罪、国つ罪』  
である。

本来、難しい事など一切覚えられない筈のサイが詰まる事も無く読  
み切るとは・・・一体何なのか？

すると・・・天に浮いた札が輝き、サイと変生したテスタロスを包

むように結界を張る。

それも一回ではなく二重、三重・・・最終的には五重もの多重結界を張ったのだ。

普通、結界を多重に張るなどは有力な結界士でも難しいと言つのに・・・。

巨大な、それこそ見上げるような姿となったテストロスを見て、サイは小さく嬉しそうに笑う。

そして再び、戦いの続きを始めるのであった

「馬鹿な・・・なんと言う妖気だ!？」

それにこの禍々しき力はまさか・・・朱天童子か!？」

そんな、あれは当の昔に封印された大妖怪の筈じゃなかったのか!？」

サイとテストロスの戦闘を呆然と見ていた刹那。

しかし、五重の結界を張つても外にあふれ出してくる妖気は彼女を正気に戻すには充分過ぎる程だろう。

伝説の大妖怪、朱天童子・・・その存在の恐ろしさはかつて関西で呪術、剣術を習っていた彼女は良く知っていた。

・・・いや、正確に言えば『彼女の生まれ』が、自然とその大妖怪を恐れていた、とでも言うべきか。

「くつ・・・あんな者をこの麻帆良に放たさせる訳には行かない。

お嬢様の・・・お嬢様の為にも、此処は私の命を賭けてでも止めなければ・・・!!」

神鳴流奥義

雷鳴剣!!!!!!」

刹那はザジの静止を振り切り、彼女の習得している神鳴流の奥義の一つを放つ。  
だが・・・五重に張られた結界はびくともせず、虚しく雷光は消えただけだ。

「クツ・・・ならば!!」

神鳴流奥義　　極大雷鳴け・・・「何をやっている未熟者」・・・  
なっ!?!」

雷鳴剣が効果が無いと察した刹那は直ぐにその上の技を放とうとした。  
しかし・・・何者かに後ろから刃を掴まれて不発に終わる。其処に居たのは、本来なら『満月の夜』にしか魔法を使えない筈の真祖の吸血鬼だ。

「え、エヴァンジェリンさん!？」

そんな・・・貴女は満月の夜にしか魔法が使えない筈では・・・!」

「フン、何時の話だ？」

残念ながら今の私はもう、満月の夜でなくとも魔法は使えるぞ。  
まあ・・・制約によって中級程度の魔法まで位しか使えんのが難点だがな」

そう言うとエヴァは刃から手を離す。

魔力によって張られていた魔法障壁はエヴァの手に傷一つも付けていない。

魔力は完全に解放されていないにせよ、凄まじい防御力である。

「それよりも桜崎刹那・・・」

貴様のような未熟者ではサイとあの男の戦いになど介入出来ん、怪我をせん内に止めておけ」

「なっ！？ そんな事やってみなければ・・・」

エヴァの辛辣な一言に刹那は力チンと来て言葉を返す。

この人物、冷静のように見えるが小さな部分で脆い所があり、直ぐに感情を表に出してしまうくらいがある。

しかしエヴァの言葉は間違っていない、特に“未熟者”と言う部分については。

「やらんでも解るさ。」

貴様の剣は『命無き存在を払う』物だ、私やサイのように『命を奪う為の術』では無い事位一目瞭然だ。

まあ、昨今の武道者にしては実力を持って居るが・・・それでも貴様は所詮“武道者”に過ぎん。

道場剣術だけで生き残れるほど、サイの相手は弱くは無い事位貴様自身がしっかりと気付いているだろう？

それにな・・・貴様のように『自分自身を偽って半端な覚悟しか持たない輩』が一丁前の口を叩くな」

刹那はエヴァの最後の言葉を聞いて表情が変わる。

肩が震え、持っている野太刀がガクガクと揺れ始めていた

そう、前にもエヴァは刹那に会った時に言葉を濁していたが・・・彼女の正体を知っている。

当然だ、エヴァは刹那の事を知る学園長とは時々囲碁やら将棋やらを差し合う仲だ。

そんな彼女が刹那の“秘密”を知らぬ筈が在るまい。

「心配するな、貴様の大事な『お嬢様』に余計な事を言う心

算など毛頭も無い。

もとより誰にでも隠すべき事など1つや2つは必ず存在するものだ・  
・それを暴露するような下種な趣味など私は持ち合わせておらん  
さ。

それにサイが此処に居たとしても同じ事を言っただろう」

そう言い終わるとエヴァはもう言う事は無いとでも言わんばかりに  
結界の方に目を向ける。

何故かその横にはいつも無口なザジが何を語る事も無く結界の方を  
向いていた。

「桜崎刹那」

ふと・・・後ろにいた刹那に声が掛けられる。

「この戦いの終わりを良く己の目で確かめる。

そして・・・サイがどのような人物か、貴様自身がしっかりと理解  
すると良い。

さすれば自ずと己がどうすべきか見えてくるだろうからな・・・こ  
の小娘のように」

「・・・小娘じゃない・・・ザジ」

ザジの一言はそのまま流される。

刹那は結界の方に目を向けると・・・其処では再び死闘が始まっ  
ていた

駆ける。

サイの手から投げられた幾多の武具は、まるで命を宿すかのよう



咆哮と共に連続して叩き込まれるテスタロスの拳。

その一発一発はまさにその大きさから流星雨のようなものだろう・  
・。

大地に拳が当たると、地を抉り、砕き、隆起させ、地割れを起こし・  
・。見る見る内に地面は見る影も無く荒野のようになって居た。

「ったく、滅茶苦茶やんじゃねえよこのバカが!!」

だが・  
・。サイは避けている。

ギリギリの部分を己自身で見極め、向かって来た腕や足に先程まで  
テスタロスの近くで浮いていた武器を突き刺すと、其処から体を維  
持している法力が漏れ出しているのだ。

深々と突き刺さった刃は、テスタロスがどんなに大きく手を振ろう  
とも抜けなかった・  
・。

『グオオオオオオ!?』

巨大なテスタロスの身体がサイの攻撃によって体勢を崩す。

まさに言うなれば象に挑む蟻の如き所業・  
・。だが、己も傷つきな  
がらもコツコツと与えていた攻撃は確実にテスタロスの法力を奪い  
取っていたのだ・  
・。

膝から地に崩れ落ちるテスタロスの巨躯。

長い時間、スピリッツバースト魂獣解放状態を維持出来ないサイにとっても、次が最後  
の攻撃となるだろう。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ・  
・。強かったぜアンタ。

どうやら俺も、アンタも戦いの終わりが近いみてえだしな・  
・。こ  
れで決着付けるぜ!!」





だ。

誰もがこの光景を見て、サイが終わりだと思った  
奇跡が起こる。

次の瞬間、

いや、偶然に起こった奇跡ではない。

体格差、象と蟻程に違う体躯の差を恐れる事無く、多くの傷をテストロスに刻み込んでいたサイが起こした『必然の奇跡』だろう。  
全身中・・・特に腕や足に傷を刻み込まれていたテストロスは限界を超えた為に拳が崩れたのだ。

「これで・・・仕舞いだあああああああ！！！！！！！！！！」

意思を持つように空中にばら撒かれる武器、武器、武器。

それらを超高速で天を駆けると柄を掴み、一刀一刀叩き込んでいくサイ。

「超！！」

紅き炎の片手剣で切り裂く。

「究！！」

禍々しい鎌で尻ぐ。

「念！！」

雷を纏いし青き日本刀にて払う。

「動！！」

風を切り裂く程の矢が突き立てられ

「阿！！」

巨大な銀の斧が肉を断つ。

「修!!!」

碧の槍が穿てば……。

「羅!!!」

太陽のように輝く長剣が敵を裂く。

「神!!!」

さらに短剣がテストロスを貫くと……。

「獄!!!」

大きな槌が骨を砕く。

そして遂に、最後の一撃が放たれた!!!!!!

「斬

!!!!!!」

テストロスの真上から巨大な大剣を手に、高速スピードで落下していくサイ。

最後のその一撃はテストロスの頭蓋を砕き、刃は頭の頭頂部から顎まで一気に貫いたのだ!!!

『ザクッ!!! ザクッ!!! ザクッ!!! ザクッ!!! ザクッ!!! ザクッ!!!』

空中に浮いていた数々の武具はそのまま見えない糸が切れたかのようになり大地に深々と突き刺さると煙のように消える。

役目を果たし終わったという事だろう。最後に華麗にサイは大地に着地すると、空中から降って来た大剣をキャッチして言った。

「名付けて

超究念動阿修羅神獄斬!!!!!!」

……どうやらサイにはネーミングセンスは無いらしい。

しかしてその攻撃全てがテストロスに直撃し、テストロスの命は風前の灯となったのだ。

サイの身体は限界を超え、魂獣解放が解除されていつもの少年状態に戻る。

『ミ……ゴト……』。

コノ……決闘……貴様ノ……勝ち……ダ……。  
誇ルガ……良イ……光ノ戦士……トテ……我ヲ……一人  
デハ……倒セナカタ……』

身体がどんどん灰化していく。

全てが灰と化したその時、テストロスは完全な消滅を迎える。

魔導神メビウスによつて翻弄された運命　　しかし、最後には満足して逝ける事を彼は誇らしく思っていた。

『感謝……スルゾ……光明司サイ……』。

コレ程マデニ……充実シタ……終焉ハ……初メテダ……。  
憎悪モ……何モカモ……貴様ノ……オカゲデ……晴レタノ  
ダカラナ』

もう既に胸から下は灰となり、崩れてしまっている。

残った頭も灰となり始め……パラパラと粉が降り始めた。

いよいよ最後の時と言う事だろう、そんなテストロスにサイは静かに呟く。

「忘れねえよ、アンタの事は。」

例え誰が忘れても、例え誰が蔑んでも……俺はアンタと言う『強き漢』を決して忘れねえ。

だから安心して逝け、それでゆつくりと休めよ　　アンタの眠り

を邪魔する奴はもう居ねえからな」

果たしてその声は、散り逝くテスタロスの耳に届いていたのか？  
だが・・・少なくとも崩れ落ちる最後の瞬間、テスタロスは笑って  
いた様に見えた。

「・・・Rest in peace（安らかに眠れ）」

崩れ落ち、降り積もった灰を一陣の風が吹き飛ばす。

周囲に張られていた五重結界は解除され、鬼の最後を見届けたサイ  
はゆっくりと目を瞑ると 地に倒れ付した。

「・・・全く、この大馬鹿者が。」

毎回毎回どれだけ無茶をすれば気が済むのだ？」

結界が解除された瞬間に既に動いていたエヴァ。

倒れているサイに向かって回復魔法をかけ続ける 彼女は不得

意とは言え一応回復魔法も覚えていた。

しかし・・・何度も何度も魔法をかけても、傷は塞がらず精々血が  
止まる程度だ。

「やれやれ・・・こんな時は実にサイの能力を怨みたくなるな。

仕方が無い、茶々丸を呼んで別荘にでも放り込んでおくか あ

そこならば外よりも魔素が濃いから傷の治りも早いだろう」

すると、エヴァの肩に手を置く者が居た。

それは何を隠そう、黙ったままのザジだ・・・。

交互にサイと自分を指差す。 どうやら『私が運ぶ』とでも言いた  
いのだろうか？

「・・・フン、まあ良い。  
だったら貴様が運べ、ザジ・レイニーデイ。  
それにどうやら貴様は根本はサイと似て居るようだからな・・・サ  
イに比べると力は小さいようだが。  
もし良いなら貴様も休んで行け・・・それで“少しはマシになる”  
だろう」

静かに頷くザジ。

サイを背負うが・・・どうやら予想外の重さによるけてしまう。  
すると、誰かがザジを支えた　まあ、この場所に居るのはサイ  
を抜かせば三人しか居ないのだから自ずと誰だかは理解出来るが。  
勿論、其処に居たのは

「何だ、桜崎刹那。

先程までサイの事を恐れたような目をしていた貴様が、助けるとは  
な。

貴様にとっては『大事なお嬢様』以外はどうでも良かったのではな  
いのか？」

そう、ザジを支えていたのは刹那だった。

最初は疑問を浮かべたような顔をしたが、直ぐに真面目な顔になる。

「・・・目の前で傷ついている人や困っている人が居れば助ける。  
もしお嬢様が此処に居れば同じ事をしたでしょうから　ただ、  
それだけです」

いや、彼女には口に出さないが他にも思いはあった。

しかし・・・その思いの意味はまだ彼女は気付いていない。

気付いても目を背けていると言った方が正しいか？

「フン・・・好きにしろ」

その答えに対してつまらなさそうに呟くエヴァ。

真面目一辺倒な答えを聞いた所で彼女には興味も湧かず、更にサイがかなりボロボロだという事も相俟ってこんな所でぐずぐずしても居られまい。

「エヴァンジェリンさん・・・一つ聞かせてください」

エヴァの住むログハウスへと足早に向かう途中、刹那がエヴァに話しかける。

何も言わなかったが、エヴァの耳には聞えていただろうから刹那は言葉を続けた。

「何故・・・何故サイさんはこんなに無茶をするんですか。明らかにこんな状態では、生きている方が不思議な位です故、此処まで命を賭けてまで無茶をなさるんでしょう？」

何

「・・・さあな、知らん」

エヴァは唯一言だけ返した・・・。

サイの状態は先程、回復魔法をかけた際に理解している。

腕の骨は利き腕の右腕が粉碎骨折、左腕は陥没骨折・・・巨大な鉄拳を盾一つで防御した結果だ。

更に無茶な動きをした所為で靭帯が伸び、筋肉やら筋は断裂して内出血を起こし、肌が紫色の斑点を出している。

しかも全身中に刻まれていた古傷から血を噴出し、全身から出血を伴っていた。

血だけは何とか止めたが、明らかに重体だと言う事は火を見るよりも明らかである。

「知らんって……。  
エヴァンジェリンさんは私達よりもサイさんの事を知っているのでは無いのですか？」

「まあ、少なくとも貴様らより先にサイとは会っているが……。  
コヤツは所謂『記憶喪失』と言う奴らしくてな、名前だの何だのや  
少しずつ戦闘技術のようなものは思い出しているが……重要な事  
は何一つ思い出せていないらしい。  
まあ本人も取り立てて記憶を急いで取り戻したい訳でもないらしい  
からな、風の向くまま気の向くままに少しづつ思い出せればそれで  
良いらしいぞ」

……呆れた事だ。

それと共に過去の記憶がないと言う事を刹那は初めて知った。  
そんな彼女にエヴァは笑いながら返す。

「……コイツは掛け値なしの大馬鹿者さ。  
記憶を失っているというのに、自分が信じたものを愚直なまでに真  
つ直ぐ只管貫き続ける真性の馬鹿だ。

自分が傷付こうが何だろうが関係ない、自分の信じた事を疑わない  
底抜けの大馬鹿だろう。

だからこそ、コイツの言葉や行動は人を惹き付けるんだ……“か  
つて”私が愛した馬鹿を超えている程にな」

そこで一呼吸置くエヴァ。

彼女の目には既に自らが住処のログハウスが見えている……。  
その外で無表情ながら心配そうにしている従者も見えていた。

「……さて、話は此処までだ。」

取り合えず“コレ”の事は、傷が治って目が覚めたら改めて本人にでも聞け。

茶々丸、“別荘”を解放しておけ、直ぐにサイを寝かせておく!!”

「はい、マスター」

これにてサイの今回の戦いは幕を閉じる。

この後、サイは別荘の中で約五日間（定刻の時間で言えば一時間が一日なので約五時間）も仮死状態のまままで起きる事無く眠り続けたそうだ。

・・・完全に獣が本能で傷を治す為の冬眠をしているのであった。

「フオフオフオ・・・一時はどうなる事やと思ったが。

しかし、凄まじいものじゃのう・・・あれがサイ君の本気と言う事か・・・」

いや・・・多分、あれでも本気ではないだろう。

まるで映画のように壁に映される光景を見ながら学園長はそう思った。

此処は学園長室            部屋の中にはこの学校に居る魔法先生達が集まっている。

このような状況となり、学園長の使い魔を利用してサイの戦いを見物していた事には理由が在った。

突然学園に現れた不振人物。

その人物はエヴァンジェリンを倒し、圧倒的な存在感のようなものを他の者達に植え付けた。



そんな人物を学園で生徒として、しかも件の英雄の子「ネギ・スプリングフィールド」が教師を務めるクラスに編入させるなどと言う暴挙は否が応にも魔法先生達の不信感を高めていたのだ。

しかし、口が悪いが真つ直ぐな彼を何度も見てきた学園長。

そんな学園長が一計を案じ、サイに一つの仕事を請け負わす事となりと力量を見せる事にしたのだ。

まあ、念の為にエヴァがいつでも動けるように手を回しておき・・・見張り役として刹那と、サイと同じような雰囲気を感じたザジを向かわせてはいたのだが。

「確かに強いですね学園長・・・」

しかもまさか、あれ程までに強力な結界まで張れるなんて思いもありませんでした」

感嘆の吐息を零すはタカミチ。

正直な話、先程の様な実力を持っているという事は・・・少なくとも自分と互角かそれ以上だろう。

「ああ、そうだな・・・」

しかもあの戦い方、少なくとも指の数じゃ数えられん程の修羅場を潜り抜けている。

どうだ刀子、お前の目から見た感じは？ 勝てると思うか？」

見た目は何処かのマフィアにしか見えない教師、神多羅木が横に居る女性に話しかける。

「正直、あれは桁外れです。

少なくとも少し見たただけでしたが、二刀流ではまず勝てません。

さらに刀一本に想定したとしても・・・私が勝つという姿が想像出

来ませんよ」

横にいた女性、葛葉刀子は驚愕を張り合わせた口調で淡々と語る。この人物は言うなれば刹那の師匠であり、神鳴流の中でも最強クラスの人物だ・・・そんな人物をして、そこまで言わせるとは他の者も思わなかっただろう。

「さて・・・彼を学園に迎えているのに反対の者はおるかね？」

学園長の一言に誰もが反対の意など唱えない。

いや違う、唱えられないのだ・・・例え不振人物だとしても、あれほどまでに強力な鬼を調伏した実力を垣間見れば。

しかも、自らを犠牲にする事も厭わずに・・・結果、サイ以外誰一人も怪我すら負わされていない事も反対出来ない理由だった。

しかし・・・その中でたった一人だけ、反対の意を現す者がいた。

「学園長、私は納得出来ません！！」

その人物は褐色の肌の見るからに頑固そうな人物。

そして他の誰よりも『正義』というものに頑なな教師、ガンドルフイーニ先生だった。

「実力は認めましょう、誰一人として傷つけさせなかった度量もですが・・・ですがそれでも、私は彼がこの学園に居るのは納得出来ないのです！！」

頑なにそう言うガンドルフイーニ。

その理由が解らない・・・いや、ある意味此処に居る者達は殆どが理解しているが。

。 学園長は頑ななガンドルフィーニに『何故じゃね?』と聞いた……

「気付きませんか、学園長!?

彼は……あの少年の戦い方は、『サウザンドアームズ』と同じような戦い方なのです!!

もし彼がサウザンドアームズの血族ならば……サウザンドマスタ  
ーの息子であるネギ君に何をしてくるか解らないではないですか!  
?」

その言葉を聞いた殆どの魔法先生達が恐れたように肩を震わせる。

『サウザンドアームズ』……その名は、実はある意味ではネギの  
父親であるナギ・スプリングフィールドよりも“有名”だ。

「高畑先生も気付いていた筈です!!

そもそも誰よりも貴方が反対するべきではなかったのですか!?

あんな……あんな“裏切り者”で立派な魔法使いの面汚しの男と  
同じ戦い方をする人物なんて……」

「ガンドルフィーニ君、少し落ち着きなさい」

まだ何かを言おうとしたガンドルフィーニに、眉の下に隠れている  
目で睨む学園長。

その視線によつて、少しだけガンドルフィーニは落ちついたらしい。

「も、申し訳ありません学園長。

そう、ですね……余計な事を言い過ぎました。

しかしお解かり頂きたいです　もし、サウザンドアームズの血  
を引く者ならば……また世界に轟く大犯罪者になるかもしれない  
のですよ?」

「・・・サイ君がそうだとまだ決まった訳では無いのじゃろう？  
ならば早とちりでつまらぬ事を言う物ではないぞ、ガンドルフィー  
二君。」

他の皆も、知らぬのに憶測で物を考えるでない・・・ではこの辺で  
お開きとしようかのう」

学園長の言葉に出て行く魔法先生達。

最後までガンドルフィー二はサイをこの麻帆良に残す事に反対だっ  
たようだが・・・。

「すみません、学園長」

「フォツフォツフォ・・・先生方の言う事も解る。」

しかし・・・全てを風評で決めるといふのは好かぬので。

それに　かの人物の人柄なら、君の方が良く知っているのじゃ  
ろうタカミチ君？」

その言葉に静かに頭を下げるとタカミチも去って行く。

何とも言えない沈黙が流れる中　一人学園長は遠い空をただ  
眺め、何も言わなかった。

サウザンドアームズ

その名は先程も言った通り、ある意味ではサウザンドマスターより  
も知る者が多い。

伝説にして最強　かの『紅き翼』の実力者を相手に一歩も引か  
なかつた猛者。

紅き翼に陰ながら協力し、たった一人で多くの敵を屠った武の魔人。そして・・・今では何時からか『裏切り者』と罵られ、世界を震撼させる犯罪を犯した重犯罪者。

彼と戦い、犠牲となった魔法騎士の数は述べ数万を軽く凌駕する。

メガロセンブリアから恐怖され、元老院の憎悪の象徴とされた最狂最悪の魔王・・・。

その手に携えるは幾重の刃。

大量の人の血を纏い、血河の中に佇む姿を人は畏怖し・・・こう呼んだ。

“千の血を纏う剣鬼”。

または・・・“千の悪夢”と。

## 第十八話：千の狂刃（後書き）

投稿完了です。

此処であえて余計な講釈やら説明は入れません。

そもそも、サウザンドマスターの時代の人間だとすれば年齢がおかしいですからね。

では次をどうぞお楽しみに^^

第十九話：大切な事は直ぐ近くにある（前書き）

此処の所、週一の更新となりまして失礼をば。

ですが、何しろ神羅の方が情報が少ないので・・・気長にお待ちを。

## 第十九話：大切な事は直ぐ近くにある

「やれやれ、痛えな・・・。」

まああんだだけポロポロだったんだ、5日間も寝てた程度じゃ完全に治る訳がねえか」

「・・・いや、少なくとも貴様の自然治癒力は可笑しいぞ。何で粉砕骨折していた筈の腕がたかが5日間で殆ど完治して動くようになる？」

「それだけではなく」

全身中の筋肉が断裂していたと言うのに普通に痛みを感じるだけで歩ける事も凄いかと思われます。

一体どのような再生力があれば、そこまで回復が早くなるのでしょうか？」

サイの回復力に啞然としているエヴァンジェリンと茶々丸。

今まで何度か彼が重傷を負っていて、何日間か起きずに爆睡する事によって回復するのは見てきた。

だが・・・明らかにこの回復力は“異常”以外の何ものでもない。

例えばサイがエヴァのように真祖の吸血姫だったら話は別だ。

真祖とは今は無き魔法によって人から人外へと化生した存在であり、銃やら剣やらでは殺す事が出来ない程の再生能力を持っている。

しかしそれは“人間を辞めた代償”であり、人間と人外やその合いの子にそのような力がある筈もないのだ。

「ああ、そう言えば言っスベリッてなかったか？

俺は人間と魂獣スベリッのハーフだが、魂獣の血の方が濃いんだ。



代々、白面九尾一族は歴史の舞台に何度も姿を現しているように法力の保有量が尋常じゃねえんでね・・・特に俺は法術がからつきし駄目な代わりに、その法力が身体中に伝達させられてる。

だからもし重傷を負ったとしても身体に流れてる法力が普通の人間を裕に超える程のスピードで回復出来んだ　　まあ、代わりに傷を治すのに使われた法力の回復の為に動物と同じように短時間だけで【冬眠状態】にならなきゃならねえって欠点はあるが・・・」

サイの場合は言うなれば某忍者漫画の主人公、九尾の人柱力と同じだ。

法力のよって圧倒的なまでの回復力を持ち、全身中の皮膚が焼き爛れようが骨が折れようが回復が早い。

しかしその代わり件くだんの九尾の少年とは違い、身体の法力の殆どを【傷の治療】の為に使われている為、法術関係には一切合切の才能が無かったという事である。

・・・まあ、勉強嫌いだっただと言う事も否めないが。

「・・・全く以って規格外だな貴様は。

まあ良いさ、私の認めた男があ程度の事で死ぬとも思っていないかつたしな」

ふんぞり返りながら偉そうにそう言うエヴァ。

・・・しかしその横にいたチャチャゼロがワインを呷りながら呟く。

「ケケケ、何言ッテヤガンダ御主人？」

サイノ野郎が全身中ボロボロデ此処ニブツ倒レテタ時、目ガ覚メネエカラツテ涙グンデタ・・・「わ、わあああ！？　チャチャゼロ貴様あああ！？」・・・アゝララ、コリヤヤツベエナ」

急に顔を真っ赤にしたエヴァに追い掛け回されるチャチャゼロ。

軽い魔法を連発されているようだが、流石は【不死の魔法使い】マガ・ノスフェラストウの最初の従者と言うだけあり、走り回りながら魔法を避けている。

「サイさん、此方にどうぞ。」

折角傷が治ったというのに流れ弾で再び怪我をしてはいけません」

手際よく魔法の飛んで来ない場所へとサイを誘導する茶々丸。

ちなみに彼女もサイの余りの状態に当初は大分心配をしていたが・  
・センサーが瀕死状態を越えたと表示され小康状態となった事をいち早く知れた為に胸を撫で下ろした。

彼女にはまだ心の奥底にある感情に気付いては居ないが、それでもサイはエヴァ以外の家族のようにも感じて居たのだ。

「おう、悪いな・・・てか、アレ止めなくて良いのか？」

「問題ありません、マスターと姉さんはいつもの事ですから。」

ではサイさん、目覚めのコーヒーでもお淹れ致しますので少々お待ち下さい」

そう言うと一礼してコーヒーを淹れに向かう茶々丸。

そんな彼女と追いかけてこをしている真祖の吸血姫と奇怪人形を見ながら『・・・やれやれ』と一言だけ呟くサイであった。

尚、蛇足だが・・・。

この後疲れるまで走ったエヴァと魔力が切れる寸前まで逃げまくったチャチャゼ口。

折角サイは目覚めたと言うのに、今度はその二人がぶつ倒れてしまう　お陰でコーヒを淹れて来た茶々丸がサイとの一時を独り占めして満喫したのは言うまでもないだろう。

その日の昼。

ぶつ倒れたエヴァをゆっくり寝かせる為にログハウスを後にしたサイは、本来ならいつもエヴァの別荘で行っている修行を外の人気の少ない森の中とする事とした。

まあ、と言っても別荘内とは違って無茶な事は出来ないので精神統一兼思い出した技術の見直しだけだが。

「・・・来い、六道拳アスラ」

サイの一言と共に両腕に纏われる籠手。

手を握り締めしながら感覚を確認するようにした後、徐おもむきに突きを放つ。

踏み込んだ震脚（拳法の歩法で所謂“踏み込み”）は地に大きな足跡を残し、叩き込まれた拳の一撃は大樹に拳の跡を残し・・・多くの木の葉を降らせた。

「・・・七魂剣スサノオ」

次の呟きと共にサイの手に握られる小剣。

軽く空を一閃すると、降って来た木の葉が真つ二つに切り裂かれる・・・。

「やれやれ、斬れたのは眼に見えた所の葉だけか。

昔は降って来た葉を全て切り裂ける筈だったが・・・まだまだ完璧って訳じゃねえな。

まあ、キティとバトってればこっちの方は問題ないか」

回転させながら七魂剣を腰のホルダーに仕舞う。

七魂剣はサイの専用として作り出された代物の為、現界させていても問題ないのだ。

・・・いざとなれば簡単に消せるし。

「次は・・・そうだな。

来い　　炎鳳剣ヒノカグツチ、雷塵刀タケミカツチ」

言葉と共に両手に握られる一振りの剣と刀。

これは所謂模倣品のような物・・・いや、言い方を変えれば“本物に極めて近い模倣品”か？

六道拳はかつて、サイの父親であった男が使っていた神具アーティファクト・・・その中に記録された多くの猛者との戦いの記憶が、サイの持つて生まれた法力と多重神具デュアルアビリティ使用能力によって現実化していると言った所だ。実際の神具とは魂獣を召還する力を持たない事だけの違いしかない。・・・まあ、それが大きいとも言えるが。

「ふう、やはり大分法力を奪われるな。

こりゃ纏めて召還するのは切り札として使用するのが無難か。

どうやら召還したのを“別のに変化”させるのは問題ねえようだが・・・これも要修行って所だ」

消える二本の神具。

後はサイ自身が実戦で覚えた剣術・歩法の確認と言った所だろう。

サイの覚えている『火群流剣術』は、所謂精神修行の為の剣術とは訳が違う　　確実に、的確に、急所を狙って相手を屠る為の“殺人剣”と言う奴だ。

更にサイの戦い方は所謂、実戦の中で極限まで鍛えられたモノ。

光明司流古武術と火群流剣術と言う流派は覚えていれど、それだけではない。

彼の本来の真髄はその目で見、その身で味わった全ての型を己の型として吸収し、更なる強さを手に入れ進化する  
まさに言うなれば『自由奔放な“無型の型”』・・・それこそが彼の戦い方だ。

「・・・シッ!」

独特の呼吸音が静かな森林にこだます。

まるで降り注ぐ木の葉の動きに合わせる様に流れ、舞い踊るかのような足取りを取るサイ。

これはサイが得意とする、まるで緩やかに流れる河の流れのような歩法・・・名付けて『流水蓮歩』。

「まあちつたあマシかな。

さて・・・じゃあもう一つの方は、と・・・」

急に大樹から距離を取ると立ち止まる。

すると次の瞬間、サイの姿が一瞬で消えると　大樹の前で拳を止めていた。

これはサイが得意とするもう一つの、まるで荒れ狂う河のように一瞬の踏み込みで相手との距離を詰めて貫く歩法・・・名付けて『烈火瞬歩』。

円の動きと線の動き。

二つとも剣術と言う存在の中では必要となってくる技法だ。

だが、本人としては不完全な物らしくサイは何度と無く二つの歩法の訓練を行っていた・・・。

「やれやれ、まだまだだな。

戦い方はキティやら茶々丸やらチャチャゼロと戦ってたお陰で収穫

もあつたが

歩法の方は大分錆付いていやがる・・・“記憶を失う前”は、もつと早く鋭く動けたと思うんだがなあ。

まっ完全じゃねえし、何度も戦つたりしながら勘を取り戻すしかねえな」

一通りの訓練（と言う名の苦行？）を終わらせたサイは流れていた汗を拭きながらしみじみと呟く。

上着は脱いでいるが、傷自体が大量にあるのを驚く者など一人も居ない。

・・・思えばこの身体の傷も、戦場やサイなりの訓練の中でついたものだ。

無理矢理に身体を痛めつけ、超回復と呼ばれる筋肉の回復動作を利用して戦闘に適した肉体へと変えた。

昨今の無駄に筋肉を付けている筋肉達磨達とは訳が違う　完全なまでの“実戦向け”の肉体である。

しかし無茶をしまくった体のヘイフリック数（細胞分裂の回数）は間違いなく減り、彼の寿命を縮めている事だろうが・・・彼は別に気になどしない。

・・・其処までして強くなりたかつたと言う理由が彼にはあつた。

傷だらけの全身だが、背には傷は一つもない。

それは即ち、彼が背を向けて逃げる事の無かつたと言う証だろう。

傷だらけになり、無茶をし続けながら現在に至るサイは・・・一体どれ程の苦悩を背負い、どのような事を考えて自らを鍛え抜いて来たのか？

・・・記憶無き彼に答えられる答えなど無いだろう。

「・・・んで、何か参考になつたか、えっと・・・ああ、そうだ刹

「那だったな？」

そこでサイは背を向けたまま声を上げる。先程から声を飛ばした方向より視線を感じていた彼は、其処にいた人物を苦行とも呼べる修行の最中に確認していた。

その人物は・・・刹那だ。

どうやらあの様子からすれば、偶然此処に来たようだが。

「・・・はっ!？」

あ、こ、ここのここの、こんにちは・・・」

しばし呆けたようにサイの事を見ていたらしい刹那。

どうやら休みの日故に修行の為にこの人気のない場所に来たのだろう。

そこで彼女は明らかに自分を超える程の技法を持ちながらも慢心せず修行を続けるサイを見つけ、その姿に釘付けになっていたのだ。・・・彼女は我に返ると慌てて頭を下げた。

「んだテメエ？ そんな畏まんなよ。」

つつか、最初に会った時に斬りかかって来た勢いはどうした？」

「あ、あれは・・・その・・・わ、悪かったと思っています。」

お嬢様の事となると見境が付かなくなってしまう。 本当に申し訳ありませんでした!!」

初めて面と向かって謝る刹那。

その姿を見たサイは別に興味も無さそうに返す。

「別にもう良いよ、謝られる必要もねえ・・・俺もテメエに余計な

事言わせちまったしな。

それに俺に斬りかかろうとした理由は木乃香を護りたかったからだろ？ だったら俺がそれに一々頭に来てたって仕方がねえよ。

寧ろもし俺の立場だったとしても、ぽつと出の正体不明の奴なんざ居たら怪しむだろうしな。

・・・まあ、流石に問答無用で斬りかかる様な事はしねえが」

真顔で平気にグサグサツと胸に刺さる余計な一言を言うサイ。まあ、もうこれはこの人物の癖のようなものであり、悪意がある訳では無いのだが。

「んで、何？ 最近は覗き魔にでも鞍替えしたのか？ さつきから俺の事覗いてたろ？」

「あ、あう・・・すみません。じ、実は自分の修行に來たのですが・・・先客でサイさんがいるのが見えました、それで・・・」

真面目に謝るように頭を下げる刹那。

。 どうやらこの少女は真面目な人物らしく冗談は通じないらしい・・・

「冗談だ、そんなに謝るんじゃねえよ」

サイのそんな一言にからかわれたと知ってむくれる刹那。

しかし・・・その表情は迫力が無く、所謂少女特有の怒っている表情の為か全然怖くはない。

「ハハ、そうむくれんな。今から稽古でもすんだろ？」

んじゃ俺は邪魔しねえように帰<sup>けえ</sup>るから、無理しねえ程度にやれや。



・・・その歳で女ボディビルダーみてえにやなりたくねえだろうし、無駄に俺みてえに傷ばっかつてのも嫌だろうよ」

そう言い終わると六道拳を戻し、ポケットに手を入れて大股で歩き出す。

すると、その背に向かって刹那が声をかけた。

「あ、あの・・・サイさん、少しだけ宜しいですか？」

「ああ？ んだよ？」

刹那の呼びかけに足を止めて振り返るサイ。

彼女が其処から語ったのはサイが想像していなかった言葉だった。

「あの、その・・・宜しければ、私に稽古を付けて頂けませんか？」

「はあ？ 正気かテメエ？」

何かの冗談だと思って言葉を返すサイ。

しかし、その目は真剣そのものでありふざけている様子は無い。

「あ、あの・・・い、いけませんか？」

不安そうに眉を顰める刹那。

「いけませんか、つつつか・・・。

テメエは確か、神鳴流とか言う流派を修めてるんだろ？」

「え、ええ・・・良くご存知で。 未だ修行中の身の上ですが・・・

」

刹那の事については襲撃をかけられる日の前にエヴァから聞かされていた。

桜崎刹那・・・西の関西呪術協会にかつて所属していた神鳴流と呼ばれる流派の剣士であり、そして木乃香の親友でもあった少女。  
・・・更に意図的に知る心算も無かったが、サイと同じく人間と人外のハーフ。

質問の意図が解らない刹那は頭に疑問符を浮かべながら答える。  
その答えに対してサイは肩を竦めながら言葉を返す。

「んじゃ止めとけ。

俺のは“流派”なんて小綺麗なモンじゃねえ・・・どうやって相手を倒すかってだけの所業すべだ。

言わば流派つてな名前は在ってもほぼ我流の、戦場で戦いながら覚えた効果的な『殺人術』さ」

そう、前にも書いたがサイのスタイルは実戦の中で得た“敵の効果的な倒し方”。

その為正規の剣術を修める者に教えられる事など一切合切無いのだ。言い方を変えるならば刹那が“剣士”ならば、さしずめサイの場合には“戦闘家”だろう。

そのような旨を刹那には伝えたのだが・・・。

「それでも構いません。

サイさんが私よりも強いと言つのは明白ですし、戦って頂けるだけで私にとって十二分過ぎる成果となります。

・・・だから、どうか宜しくお願いします」

真摯な目で真剣に頭を下げる刹那。

その目を見れば思い付きではなく、前々からしっかりと考えた結論

だと言うのは鈍感なサイにも理解出来る。

・・・それに彼は、自分のする行動に確りとした明確な信念を持つ者を無下に断る気も無い。

「ああああ、解った解った。」

だが先に言つとくぜ、俺は元々人に物教えれる程器用じゃねえ。

それに実戦形式でしか教えられねえから大怪我する可能性もあるが文句言うなよ?」

「は、はい、構いません! あ、ありがとございます!」

顔を綻ばせる刹那。

背に背負った竹刀袋から野太刀を抜くと構える。

サイは六道拳を召還し、同じような刀である雷塵刀を召還すると間合いを離して同じように構えた。

「いきます、サイさん!!」

「オラ、とつとと来いや」

その言葉が終わるや否や

燦々と輝く昼の空に剣戟の音が響き渡った・・・。

「・・・うう、一太刀も当てる事が出来ませんでした」

そこそこ実力を持っていた刹那をついつい調子に乗ってコテンパンに伸ばしてしまったサイ。

勿論、刹那は修行中の身の上だ・・・しかし、流石に此処まで手も

足も出ないとショックを受けてしまつたろう。

背中には所謂漫画などで落ち込んだ際に描かれる縦線効果があつた。

「まあ当然だな。」

そんな所そこ等のガキに比べればそれなりの実力はあるが、実戦経験が薄い分まだまだ青いぜ。

だが筋は悪くねえんじゃねえの？ 当てられそうになつた場面が何度か在つたしな」

「・・・うつ、ほ、本当ですか？」

涙ぐみながらサイを上目遣いで見上げる刹那。

意図してやっている訳ではないだろうが、このような仕草に心奪われない男は少ないだろう。

・・・まあ、言うまでもなく超鈍感で女心のおの字も解らない様なサイに理解は出来なかつたが。

「まあその分、剣撃が読み易過ぎだ。」

剣士の美学だか何だか知らねえが、そう言った戦い方は変則的な戦い方する相手にゃ不向きだろうよ。

道場剣術じゃ変則戦闘なんぞ必要ねえだろうが、実戦じゃテメエ・・・簡単に死ぬぞ」

「ぐっ・・・やっぱり私、駄目なんですネ・・・」

褒めて落とすはサイの特技。

しかしそれはサイなりの優しさであり、口は悪いが相手の苦手な部分を身を以つて教えてやつてるに過ぎない。

・・・これを素直に受け取るか、それとも突っぱねるかは本人次第だろう。

「さて・・・腹減ったな。」

そろそろ飯でも食うかね

テメエも一緒に食うか？」

「・・・うつ、私は駄目な子・・・このままではお嬢様は・・・」

いじけながらの字を書いている刹那。

背中の縦線効果は前よりもさらに濃く、しかもどんよりした雰囲気まで醸し出している。

だが、そんな事など全く気にせずその頭に拳骨を落とすサイ・・・。

「人の話を聞け、刹那。」

飯にするから食うかと聞いているんだ、無視しねえでYesかNoか位とつとと答える。

「トロい事してつと、殴るぞ?」

・・・まさに暴虐無尽。

実に傲岸不遜だの何だのと言う言葉が良く似合うサイである。

「も、もう既に殴ってるじゃないですかああ!??」

「んなモン、殴ってる内に入らん。で、食うのか食わんのかはつきりしろ」

「あ、えつと・・・(グウウウウ)・・・い、頂きます」

最初は断ろうとした刹那だが、空気を読まずに鳴ってしまった音に頬を赤らめながら答える。

それを聞いたサイは近くに置いてあった袋の中から大量の何かを出す、刹那の方に歩いてきた。

その手に抱かれていたのは・・・大量のハンバーガー（種類色々）だった。

「・・・って、え？」

あ、あの・・・サイさん？ 何ですかこの大量のハンバーガーは？」

「何って、俺の昼飯だが？」

まあ大量にあるから遠慮すんな、特にテリヤキバーガーは美味いぞ」

此処で刹那は初めて、サイの食生活の偏食さを知った。

そう、コイツは自分で食事をする時はハンバーガーしか食わないのである。

（普段は教会に居るし、昼御飯の弁当はシャークテイやらエヴァ＆茶々丸やらが作ってくれたのを食っているのだが）

「あの・・・もしかして、これしか食べないんですか？」

「当然だろ、当然」

サイは『何を当然の事を聞くんか？』と言うような表情で刹那を見ながらそう答える。

この答えで理解出来た・・・少なくともサイは“食育”とか“食生活”と言う事だけに関しては大分ダメ人間だと言う事を。

「・・・サイさん。」

明日から私がお昼を作ってきます、良いですね？」

「ああ？ 何だ、さっきも言ったとおり俺のはテメエの修行になんぞ訳にたたねえぞ。」

それに飯に關してもどうせ明日もハンバーガー買って来るから・・・

『・・・良・い・で・す・ね?』・・・まあ、テメエが面倒じゃねえなら好きにしるや」

放たれた強烈な殺気のようなものにそう返事を返すサイ。

・・・意外に刹那は面倒見が良いと言っ事だろうか? もしくはダメ人間を放つて置けないのだろうか?

どちらにせよ、ハンバーガーだけ食っていそうなサイにとっては健康面ではありがたい事だろう。

(まっ、精神面と言うか本音の方は大好物のハンバーガーだけ食って居たいだろうが)

そんなこんなで昼飯の時間は終わり、再び実戦稽古に戻る二人であった。

そして時は夕方まで流れる。

「で、ずばり今の気分はどうだ刹那?」

「・・・最悪です」

サイの足元で慄然とした刹那の声が響く。

其処には大の字で寝転がっている刹那が密かに頬を服らませている姿が見えた。

「結局夕方まで本気でやったのに、一本も取れませんでした・・・」

「まあ、こちとら喧嘩しか能がねえんでよ。

そんな簡単にやられているようじゃ俺の存在理由が薄くなっちまう・・・それに手加減なんざされたくねえだろ?」

「うっ……それはそうですね……」

確かにサイの言う通りだ。

稽古と銘打っているのだから加減などされては意味がない。だがそれでも刹那はサイから納得行く一本が奪えていないのが不満らしく、こうしてむくれているのである。

「さて、今回はこれで充分だろ。

次から修行に付き合うも付き合わねえも勝手だ、好きにすりゃあ良い。

俺は用事がない時はキティの所か此処に居るからよ……あっ、ちなみにキティってのはエヴァンジェリンの事だ。

だけど俺以外、キティって呼ぶとぶっ潰すらしいから言っなよ」

「あ……はい、わ、わかりました……」

サイさん、きよ、今日はありがとうございました」

ヨロヨロと立ち上がると頭を下げる刹那。

しかしサイの（一応、刹那のレベルに合わせてだが）修行によって体力は限界に近付いていたようだ。

そのままフラフラッとすると、前のめりに倒れそうになる。

「おい、大丈夫かテメエ？

ああ、まあ……考えても見たら、ちっとハード過ぎたかねえ？  
しょうがねえな、ほね……」

「え、ええええ……ええっ!？」

刹那が困惑してるのを気にせず背に背負うサイ。

後ろで刹那は紅くなっているが、それを前を見ているサイは気付く



筈も無かるつ。

「あ、ああああ、あの、その……。  
お、降ろしてください！！ わ、わわわわわ、私自分で歩けますか  
ら！！！」

「何抜かしてやがる、さつき倒れそうだったじゃねえか。  
つつか無駄に動くんじゃないやねえよ、疲れてんだから黙って背負われて  
るこの馬鹿が」

その言葉に動きを止める刹那。

サイは動きが止まったのを理解すると、無言で歩き出した。

……コイツもこういう部分は口が悪いが面倒見が良いのである。

「あ、あの……重くありませんか？」

「ん〜？ 気にすんな、思った程じゃねえよ」

……デリカシーと言う言葉の欠片も無い男だ。

こう言う時は嘘でも『重くない』と言えば済む話なのに。

しかしそんな超失礼な言葉に刹那は答えを返さない……怒ったの  
かと思いい表情を垣間見ればそうではなく、どちらかと言うと何かを  
聞いたそうな表情をしていた。

「……あの、サイさん」

「ん？ 何だ？」

ぶつきら棒にそう返すサイ。

彼のこう言った誰にも媚びない部分は今に始まった訳ではないが。

そんなサイに刹那は初めて会い、勢いで襲い掛かり正体がバレ、そ

してサイも自分と同じだったと言う事を聞いて今までバツが悪くて聞けなかった事を今此処で聞いた。

「・・・サイさんも『私と同じ』生まれなんですよね？」

「あ？ 何だ、キテイにでも聞いたのか？」

ああ、まあな・・・俺は魂獣つつう存在と人間のハーフだ。

魂獣つてのが何なのかは妖怪ジジイからきいてんだろ、それがどうかしたか？」

サイは気にする事もなくあっけらかんと言葉を返す。

彼は自分の生まれを気にしていないのか、それともその本心を隠しているだけなのか。

「・・・すみません、聞き辛い事をお聞きしますが。

やはり、その魂獣と言う種族や人間から卑下されたり排斥されたりしたのですか・・・？」

・・・刹那はかつて父親の一族からも母親の一族からも否定されて生きて来た。

そんな彼女だからこそ、口は悪かれど底抜けに前を向いて真っ直ぐに生きているサイの過去が気になったのだ。

まあ、記憶喪失だと言う事は聞いていたが・・・。

「まあな、当然あつたさ。

完全には思い出せねえが・・・少なくとも俺の生まれた世界は何よりも種族同士の小競り合いが多かつたからな。

・・・特に『人間なんてのは魂獣を道具のようにしか扱わねえ連中だ』なんつって嫌われてたからよ、当然半分その血が混じってる俺に対しての差別なんざ尋常じゃなかつたぜ」

重々しい事を興味も無さそうに語るサイ。

「・・・本来ならば彼は自分の事をペラペラと語るのは嫌いであり、更に殆ど語る事も無い。」

しかしこうやって語っているのは刹那が同族だと思っただからだろうか？

いや違う・・・何の因果でこの世界に来たのかは理解出来ないが、彼は多くの者達に助けられてきた。

そんな事実がサイを変えたのかもしれない。

「えっ・・・じゃあ、どうして・・・？」

どうしてそんなに歪まずに居られたのか。

刹那は自分の秘密を命を賭けて護りたい親友、このかに知られてしまった時に存在を否定されるのではないかと思っっている節がある。だからこそ、人の道を外れた化物だからこそ親友と道を別ち、影から見守っていく道を選んだのだから。

しかしサイの答えは意外なものであった・・・。

「・・・親友<sup>ダチ</sup>が、居てくれたからな」

「ダチ・・・？ 友達ですか？」

意外な答えだ。

サイはそんなに友人を作るのは得意そうには見えない。

いや、寧ろ自分から友人など作らないだろう・・・自分の生まれの事なども相俟って。

「・・・最初は子犬みてえに引っ付いてくるだけのウゼエ餓鬼だと思ってた。」

その頃の俺は自分の殻に閉じこもって、馬鹿にしたり卑下する奴を見つける度にボロボロになるまで叩きのめしてた　　いつだって独りで強くなつてバカにした連中を見返してやるなんて思ってた。ムシヤクシヤしてた時に丁度良い獲物を見つけな、そいつ等をぶっ飛ばしたらそいつ等に苛められてたのが最初のアイツとの出会いかな。

その後はなし崩しに懐かれちまってな、何処へ行くにもアイツは俺の後ろ追っ駆けて付いて回ってきた。

余りにもウザかったからな、ソイツにある日言った事があんだ・・・『俺のような半端者と居れば、テメエはまた苛められるぞ』ってな・・・そしたらそいつ、なんつったと思う？」

サイの答えを待つように無言で居る刹那。

そんな彼女の配慮を理解したのか、サイは少しだけ微笑みながら答えた。

「『ボクは別に気にしないよ、だってサイ君は友達だもん』だとさ。

全く・・・あんな能天気な答えを聞いたのは初めてだった。いや、違うな・・・俺は自分の生まれを言い訳にして人に歩み寄ろうとしないだけだったって事にそこで気が付いたんだ。

まあアイツが・・・メルトが居なけりゃ、そう言う大事な事にも気付かなかっただろうよ」

メルトという名前を出した時、懐かしそうな表情を一瞬だけサイはした。

その表情が何を表していたのかは知らぬ刹那が理解出来る訳もないのだが。

そんな何とも言えない表情をしながら、サイは背負っている刹那に向かつて小さく呟いた。

「刹那・・・親友は大事にしる。

大切なモンは無くしちまってから気が付いても、もう遅え。

このかの事を今でも大切な親友だって思ってるなら拒絶するんじゃねえよ・・・それにアイツの事は会ってまだそんなに時は経たねえが、テメエを拒絶なんてしねえよ」

・・・その言葉はどこか聞きようによつては悲しげに聞える。

そして刹那も頭ではわかっている　木乃香は誰彼を差別するよ  
うな人物では無い事位は。

しかし頭では解つていても、己が今まで生きて来た差別と偏見と言  
う記憶は簡単には消える筈もなかった。

それだけ彼女の心に刻まれた傷とは根深い物なのだから・・・。

「・・・でも・・・でも、もし拒絶されてしまったら・・・私は・・・」

そうもじもじしながらブツブツと否定的な事を言う。

それにイライラしていたサイは立ち止まると、ウジウジしている刹那に言い放った。

「あゝもう、ウジウジすんじゃねえよ!!」

“でも”も“へちま”も何もねえ!!!　テメエは木乃香の親友だろ  
うが!?

だったらそんな風に迷つてねえで木乃香を信じろ、この馬鹿が!!」

するとサイは自分の胸を親指で指差して続ける。

いつもの口の悪い皮肉屋な性格とは違い、何処までも熱い熱血漢の  
ように。

いや・・・もしくはこの姿こそが、サイの本当の姿なのかもしれな

い。

「此処に抱かれてる本当の想いつてのが真実だろうが!!  
此処にあるのが嘘偽りのねえテメエの本心だろ!? だったらウジ  
ウジする前にテメエの心に従いやがれ!!」

サイは・・・誰よりも他人の幸せを願う。

己の幸せなど棄てたように生き、憎まれ、蔑まれ、嫌われようとも  
唯苦しみ悲しむ者に厳しくも優しく支えの手を伸ばす。

かつて誰かが言った・・・。

『本当の悲しみを知っている者は、誰かを悲しみから救いたがって  
いる』と。

そしてまたかつて誰かが言った

『悲しみを受けてそれを力にする者も居れば、その同じ悲しみを受  
けてそこで挫ける者も居る。』

その違いとは何か？ それは心の強さである』と・・・。

彼の記憶は未だ戻らず、彼の過去に何があつたのかは解らない。

だが・・・少なくとも彼は、悲しみというものを見、そして背負っ  
てきたのだろう。

だからこそ、彼の言葉は周りを拒絶して生きている者達の心に響く  
のだ。

「・・・幸せはテメエの手で掴め、そして掴んだらずっと手放すな。  
踏み出せなきや何も変わらねえ。だが唯一歩、前に踏み出す勇気  
があればもう怖いモンなんぞねえ。」

それでもし、テメエが誰も信じられねえなら・・・俺が信じてやる、  
俺が味方をしてやる。

だから、近くにある大切なモンから逃げるんじゃないよ」

後ろで唯聞いていた刹那の頬に暖かい何かが流れ落ちる。

それは勿論彼女は自分で何なのかは理解していた　そして、本当に自分が望んでいた事にも気付いた。

「うっ・・・うっっ・・・」

本当に彼女が望んだ物、そして何故彼女はサイを最初は嫌っていたのか。

彼女は本当は心の奥底で望んでいたのだ　ずっと誰かに言っただけ欲しかった、味方になって貰いたかったのだ・・・。

「うあ・・・うああ・・・」

孤独は人を強くしない、寧ろ弱くする。

嫌い、拒否し、関わらなかつたのは・・・あの日に聞いたサイの出生、そんな苦しみを背負いながらも少しも曲がる事無く真っ直ぐ生き続けている彼の姿が眩しいが故に目を背けていたのだろう。

「うあああああん!!!」

その日、彼女はかつて大切な人を失い全てを憎んでいたエヴァと同じように大声で泣いた。

泣く事自体が久しぶりであり、泣く等と言つのは己の弱い部分をさらけ出すだけだと彼女は思っていた。

だが・・・今は違う、片意地を張って只管に強さだけ求めようとした今までとは違う。

人は弱くて良い。

弱いからこそ、誰かと共に居る事が出来る。

弱いからこそ、誰かを護る為に何処までも強くなれる。

泣く事を彼女は最早恥だとは思わない。

己の弱さを知り、大切な事が何なのか気付いた彼女は少なくとも、  
今までよりも強い。

この日刹那は押し留めていた感情をすべて流す。

「気が済むまで泣け。

泣き止むまで背位、幾らでも貸してやるからよ」

そして彼女が泣くその間、サイは言葉を掛ける事もせずただ静かに気が済むまで背を貸してやっていたのであった……。



第十九話：大切な事は直ぐ近くにある（後書き）

更新完了です。

誰かから必要とされない、排斥されるってのは実に辛い事です。

ですが、そんな人物も一人でも良いから信じてくれる人が居れば変われると思いますね。

自分は文才が無いので何を言い表したいのか解り辛いかと思います。ですが・・・それでも私なりに努力して皆さんにお伝えして行こうと思いますので、どうぞお楽しみに。

**第二十話：撃つ覚悟、撃たれる覚悟（前書き）**

今回は一応、三巻のストーリーです。

ですが既にエヴァちゃんがこれといってネギに興味を持っていないのでこの様な形となりました。

辻褄が合っていない部分も多々あると思いますがお許しを。

## 第二十話：撃つ覚悟、撃たれる覚悟

その日、サイは実に不機嫌であった。

別に昼寝を邪魔されたとか、妖怪ジジイに何かされたとか、昼飯を横取りされたとかそういう事ではない。

寧ろ朝から昼にかけては表に出す事は無いが実に機嫌が良かった。昨日から共に修行する事となった刹那は、サイの不器用なりの説得により自ら木乃香に歩み寄る努力をし始めたらしい。

偶々朝、木乃香を町で見た時に声をかけようと必死に努力していた刹那を見た・・・手を伸ばしたり引つ込めたりしている所を垣間見ると、まだ完全の雪解けには早い彼女なりの葛藤が見える。

出来れば絆を取り戻してくれれば良いのだが・・・。

更に珍しく朝から勝負を挑んでくる馬鹿共にも会わない。

のんびりと、それで居て楽しく麻帆良を搜索するのが好きなサイにとってはそれは実に喜ばしい事。

しかも（サイは知らないが）、恋に恋する戦闘狂共にも会わなかったのは彼にとつて気ままに散歩出来る一日になると言う事だ。

当然機嫌が良くなるだろう。

しかも他にも良い事があった。

なんといつももお得意様としてハンバーガーを買っている為か、ハンバーガーを只で一つおまけしてもらえた。

更に更に自動販売機で缶コーヒーを買えば、当たりでもう一本と・・・  
・実に怖くなる程にツイて居たのである。

しかしまあ。

大体こんなにつきがある時は、どこか別の所で取り返されるのが人

生だ。

その日の昼、機嫌良く学園長の呼び出しを受けたサイは実にその機嫌を最悪とする事態に巻き込まれるのであった。

「ふう、やれやれ・・・。

ジジイによれば、確か此処に向かっているんだよなその侵入者ってのは」

「うむ、そうらしい。

ふわ~~~~あ、しかし昼はやはり眠いな」

ブラブラとしながら周囲を見渡しているサイ。

その横で眠そうな表情で一緒に歩いているエヴァンジェリン。

今回は茶々丸は留守番だ、そもそも彼女の索敵能力を使うまでも無い　大分、サイとエヴァの二人で行く事を渋っていたようだが。

「しかし、お前そんな面倒な事無視すると思ったが。　意外にも面倒見が良いんだな、キティ」

「意外には余計だ、意外には。

まあ・・・そもそも登校地獄の呪いは解けたとは言え、一応此処麻帆良に住んで居るからな。

面倒でも恩義位は返した方が良かったらう（・・・まあ、昔ならそんな事を考える事も無かつたらうが）」

そう一言だけ言うと恥ずかしかったのか照れ臭いのか顔を紅くしてズンズン先に進むエヴァ。

どうやら確実にサイとの出会いがエヴァ自身の考え方を変え始めて

いるようだ……。

そんなエヴァを見ながら『ヤレヤレ』と一言呟くと後を追うサイ。

「……んで、俺らが探してる侵入者ってのは何なんだ？」

ジジイからはとりあえず『悪さをするようなら捕まえてくれ』って言われてるが」

「先にしっかり話を聞いておけ馬鹿者が。」

話によればウエールズのおコジヨ収容所（刑務所）（ ）から脱走したらしい。

罪状は確か……ああそうだ、下着泥棒二千枚だったかな？」

「……何じゃそりゃ」

呆れたようにそう一言呟く。

侵入者が来るからどんな相手かと思ったが、まさか下着ドロとは。強い相手と戦えると思っていたサイのテンションは急にがた落ちとなった……。

（ちなみに此処で説明しているおコジヨ収容所とは。

少し前に一般人に魔法を知られてしまった魔法使いは最悪の場合におコジヨにされると説明したのを覚えているだろうか。

そう言った所謂“失敗者”達を反省、もしくは矯正する為の施設である。

……まあ、簡単に言えば魔法使い達の刑務所だ。

さて、それはさておき。

探す侵入者が下着泥棒だと言う事を知って途端に落胆するサイ。

しかし、学園長からの依頼は依頼なので頭を切り替えて（ある意味、細かい事は無視して）その侵入者を探す為に神経を研ぎ澄ます。

……サイの感覚神経は（一応、魂獣<sup>スピリッツ</sup>とは言え）獣人の血が混じっ

ている為鋭いのだ。

勿論、記憶がなくなる前に比べれば精度は落ちるのだが。

「怪しい気配は付近にはねえな」

サイはそう言うと目を開く。

だが・・・エヴァはそこで気付いた、麻帆良学園都市に張り巡らされている結界を何かが通り抜けたのを。

「む、何かが結界を越えたか。

恐らくはコイツがジジイの言っていた侵入者だろう、方角は・・・女子寮の大浴場か。

よし、行くぞサイ」

「・・・お、おう。

つうか、女子寮の方って・・・此処から大分離れてるぞ。キティ、そんな所まで索敵出来るのかよ？」

そんなサイの言葉を当然の如く頷くエヴァ。

彼女にとって見れば結界の張られているこの麻帆良の最端から侵入されたとしても気付けるだろう。

流石はかつて懸賞金600万の賞金首であり、最強クラスの魔法使いと言っただけある。

「そんな事よりとっとと行くぞ。

逃げられても面倒だし、その所為でジジイにまた余計な事を頼まれるのも癪だ」

サイはその言葉に頷く。

そして二人は女子寮の方に向かって走り出した

・・・尚、この後。

実はこの会話の裏で女子寮の大浴場で下着ドロが発生し、旧2 Aの生徒達が更衣室で着替えられなくなっている所にサイ達が侵入してしまい、黄色い悲鳴を浴びせられた。

また運が悪い事に其処には刹那、古、楓、真名に明日菜と木乃香とのどかに夕映やらザジやら美空やらと言ったサイとそれなりに交友（もしくは恋愛感情）を持っている者達が勢ぞろいしていたのだ。

その為に崩拳はぶち込まれる（古）、何処から出したのか苦無は投げられ（楓）斬られそうになり（刹那）銃撃されそうになるわ（真名）、飛び蹴りは喰らわされ（明日菜）、トンカチでぶん殴られ（木乃香）、真つ赤になってぶっ倒れられ（のどか）、でかい辞書で思いつきりぶん殴られた（夕映）と散々であった。

更にはエヴァにはこれでもかとぶん殴られ、後々説明を聞いた茶々丸からは白い目で見られと、まさに昼までの幸福感は一瞬にして消失したのだ。

・・・しかも面倒な事に刹那が毎朝サイと修行（手合わせ）をしていると知った残りの武道四天王（古、楓、真名）に交替で毎日手合わせを頼まれるなどまさに散々である。

そしてその日、サイは誓った。

『この状況を作り出した下着ドロのクソオコジヨを絶対にブツ殺すと・・・』

ちなみにサイが更衣室に入ってきた際に何かがあったのかと心配していたのはザジと美空だけであったとさ。

・・・その日の夜。

エヴァと別れた後に紆余曲折し、本気で全力で侵入者であるオコジヨの居る場所を感知したサイ。

クソオコジヨの居たのは現在ネギが間借させて貰っている明日菜&木乃香の部屋だった……。

(ちなみにこの時、木乃香が爆睡してたのは言うまでも無い)

「さて……弁解はあるかクソオコジヨ？」

あるなら先に言っておけ、口が聞けなくなる前にな……」

怖い、本気で怖い。

口調はいつもどおり乱暴なだけだが、目が笑っていない。

多分本気でブチ切れている者とは、このような目つきをするのだからと思われる。

感情が見えないからこそ余計に怖い

『ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ許して下さいゴメンナサイゴメンナサイ……』

サイの足元で青くなり冷や汗を掻いているのは自称・オコジヨ。

外見は可愛らしいが、二千枚の下着を盗んだエロ親父のような存在であり……サイをブチキレさせた人物(?)だ。

ちなみに此処は麻帆良学園女子寮裏庭、時刻は既に太陽が西の地平線に沈みかけている時間。

「あ、あのですねお兄ちゃん……こ、これには事情が……」

「……お前は黙っている、ネギ。」

おい、クソオコジヨ　黙ってないで弁解なり何なりしたらどうだ？



そうすればそうだな・・・楽に死なせてやるぞ？」

「・・・てか、殺すの前提なのね。

それよりアンタ、子供を誑かせて一体何をやるうとしたのよ？  
ほらこれ、ネギのお姉さんからの手紙・・・下着泥棒二千枚って、  
アンタ要は悪い事して逃げて来ただけでしょ？」

サイの言葉にネギの表情が一気に引き攣る。

さらに明日菜の言葉でサイの足元にいたオコジヨは更に全身を青く  
させるかの如く、真っ青になっていた。

・・・意外とこの二人、気が合うのかもしれない。

更にサイがブチ切れている理由・・・。

それは所謂、このオコジヨの所為で女子寮の大浴場に入ってしまった  
無茶苦茶にぶん殴られただけと言う訳ではない。

その理由は離れた場所に寝かされている一人の少女・・・宮崎のど  
かの存在がある事に関係している。

「オイ貴様・・・百歩譲って下着ドロという罪は情状酌量の余地を  
与えてやるう。」

だがなあ、何も知らんし何も関係のねえのどか（呼べと呼ばれた人  
物には名で呼ぶ）をこんなモンで操って強引に“仮契約”とやらを  
しようとするってなあ teme・・・どういう見だ？」

その手に持っているのはまるで一口チョコのような物体。

しかしこれがそんな物でない事は一目見て禍々しさを感じた為、良  
く解る。

サイがその手に持つこのチョコレートのような物は何を隠そう、魔  
法世界の裏に伝わる『惚れ薬』であった。

『い、いえその・・・こ、これには深い事情が・・・』

何らかの弁解をしようとするオコジヨ。

だが元より人の感情を操ったり、弱みに付け込むような事を最も嫌うサイにとって、今回の事は度し難い程に許せない事であった。

「テメエ・・・」

何の理由があるか知らねえが、何も解らねえような一般人巻き込もうとしてんじゃねえよ」

その目に映るのは強烈な殺気。

事情はどうあれ、裏の事（魔法世界の事情）を知らない唯の一般人を巻き込むと言う事。

それはつまり、何も知らない者の命を握っていると言う事と同じだ。

「それにテメエもだ、ネギ」

「えっ・・・？」

いきなり言葉を振られた事により面食らうネギ。

サイの目はネギが今まで見た事がないような冷たく、それでいて見かたによつては悲しげな目をしていた。

「テメエが餓鬼なのはしょうがねえ。

まだ数えで10歳なんてのは、本来なら初等部にも通つてる年齢だからな。

だがな、少しは考えて行動しろ　何でもハイハイと人の話鵜呑みにしてるだけでその事がどんな結果を生むのかを考えねえで行動し続けてりゃあ、テメエは必ず後悔する事になるぞ。

・・・そんな事実には直面してからじゃもう遅えんだよ」

最後の言葉はまるで、自分に言い聞かせるようにも聞えた。一方、兄のように慕っているサイからそのような辛辣な事を言われたネギは眼に見えて落ち込んでしまっている。

「チツ・・・胸クソ悪い。」

まあどうでも良いわ。オイネギ、このクソオコジヨの処遇はテメエが責任以って決める。

ジジイの所に突き出すも、テメエが雇うも勝手にしろ。ただし・・・このクソオコジヨのやった事の責任だけはテメエが自分で取れ、解ったな？」

吐き棄てるように言い終わるとオコジヨを踏んでいた足の力を弱める。

その隙にネギの足元に逃げるオコジヨ・・・それを一瞥したサイは、答えも聞かずにそのまま去って行くのだった。

尚、この後に相変わらず覗き見をしていた学園長に将棋を指しながら聞いた話だが。

あのオコジヨの名は『アルベール・カモミール』、ネギがまだウエールズの魔法学校にいる頃に罠にかかっている所を助けた事が縁でそれから何度か親交を深めていった自称・由緒正しきオコジヨ妖精の漢。

今回の脱走騒動はあくまでも無実の罪であり、下着を盗んでいたのは病弱な妹の為であったそうだ。更に強引な手でネギを仮契約させて隠れ蓑とし、脱走の罪で連れ戻されない様にしようとしていたらしい。

『・・・その何処が漢だ』とサイは突っ込みを入れていた・・・。

更にその後、ネギ自身のたつての希望によりカモミール（以後、カ

モ)は正式にネギのペットとなった。

・・・まあペットに対して時給五千円を払うとか言っていたらしいが、果たしてそれは本当にペットなのだろうかと言う甚だ疑問が湧いてくるのだが。

しかしある意味では脛に傷を持つような、世の中の仕組みのような物を知っている者が近くにいた方が『純粹過ぎるネギ』には良いのかも知れない

しかしこの後。

そのカモの言葉によってある事を引き起こしてしまう事をネギは知らない。

そしてそれによって、一人の人物の未来を変えてしまうという事も・・・。

カモの学園都市侵入から明けて次の日。

既に学校が始まっている事もあり、3 - Aと上の学年となった元2

- Aの生徒たち。

ネギも正式に採用され、サイもあまり興味は無いが正式に麻帆良学園の生徒となった。

その日は一日何も起こらず、平和であると思っていたその矢先・・・ある事が起こってしまう。

始まりはカモが自身の良くやる『まほネット』という魔法世界に繋ぐ為のインターネットのような物でネギのクラスに居たエヴァが懸賞金600万の賞金首だと知った事による。

実はエヴァは今とは別として、かつてはネギの父親であるナギを追い回していたという事によりネギに危害が及ぶのではと考えたカモは先手必勝というような考えの下に彼女の従者である茶々丸を狙おう

としたのだ。

「……しかもご丁寧にネギと共に居る事の多い明日菜を仮契約させて。

（実際の所は中途半端な契約の仕方なのだが……）

この後に二人＋一匹は茶々丸の良い所をみることになるが、それはかつてサイが助けた時と同じなので割愛しよう。

紆余曲折あり、いつも通り茶々丸がネコに餌をあげ終わった後……唐突にそれは起こった。

「……何か私に御用でしょうかネギ先生、それに神楽坂明日菜さん」

急に声をかけられて驚く二人。

だが呼ばれたからにはいつまでも隠れてなど居れまい……ゆっくりと物陰からネギと明日菜が現れた。

「……茶々丸さん」

小さく呟くネギ　　本当の所はネギは迷っている。

彼女は自分の受けもつクラスの生徒であり、しかも率先して人の為になる行動をしていた人物だ。

だから本当ならば戦いたいなどとは思わない……しかし、ネギには放っておく事も出来ない。

ネギが目指すのは『立派な魔法使い』マキステル・マキ。

魔法世界で英雄と呼ばれている父親のようになりたいと思うネギにとって、悪の魔法使いと言う存在を力モから聞かされた時は許せなかった。

世の為人の為に働くのが魔法使いの義務……そんな風に“洗脳”されていたのだから。

しかし正義などと言うのは所詮、偶像に過ぎない。

正義の反対が悪、悪の反対が正義などと言う考え方は本質と言う物を何も解っていない。

正義の反対はまた別の正義であり、悪の反対はまた別の悪である

更に人の数ほど考え方がるように、正義と言うものも人の考え方で全く変わって来るものだ。

自分の考えをすべて相手に押し付けるといふその行為そのものが言うなれば悪だろう。

だが悲しいかな、立派な魔法使いなどと言う物を目指す者達は大体が理想と言うものばかり追い求め現実から目を背けている。

そう言う風に幼き頃から教わっているのだから仕方が無いのかもしれないが・・・。

とにかく、そんな事によりネギは父の背中を追い求めすぎるが故に・・・今はまだ大切な事に気付けて居なかった。

「茶々丸さん・・・申し訳ありません」

有無も言わずに構えるネギ。

目には迷いがあるけど、此処までなってしまうたからにはもう引き返せない。

「ネギ先生・・・そうですか。」

解りました、お相手させていただきます」

ネギのその姿を見て茶々丸も何かに気付いたのだ。

いや、多分・・・ネギがしようとしていることに気付いたのだろう。カモに唆されたとは言え、父親を狙っていた悪の魔法使いが居ると

なれば10歳の子供のネギでは抑える事が出来ないという事も。

エヴァも茶々丸も今更ネギを襲撃する理由などない。

彼女の主は本気・本音でのサイとのぶつかり合いによって過去を吹っ切って先を進む事を選んだ。

そして茶々丸もまた、そんな主の変化を喜び・・・己自身の心の変化に戸惑っている節がある。

しかし、そんな事を説明した所でネギは納得しないだろう。

だから・・・彼女は選んだ。

かつて主を過去と言う名の呪縛から解き放ってくれた“彼”と同じように。

なんらかに囚われてしまい、前しか見えていないネギを救うと。

故に本来は戦う事を嫌う優しき少女は、合えて理由を問う事もせず  
にネギの前に立ちはだかったのだ。

「行きます!!!」

シス・メア・バルネル・デケム・セクンダミスストラ・ネギイ  
契約執行十秒間!!! ネギの従者『神楽坂明日菜』!!!

その瞬間、明日菜は不思議な感覚を身体に感じる。

まるで身体に電流が走ったかのような感覚に密かに呻き声のような喘ぎ声のようなものが口から呟かれた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル!!!」

光の精霊十一柱、集い来たりて・・・」

魔法の詠唱を唱え始めるネギ。

それを耳で捉えた茶々丸は魔法の詠唱の阻止をしようとするが・・・いきなり間合いに入り込んで来た明日菜によって邪魔されてしまう。

「……早いですね、ですが甘いです。  
マスターや姉さん、それに……“サイ様”はその程度の速度では  
ありませんから」

向かって来た二発目の攻撃を読み、絡み取って足を払う。

これは彼女の主であるエヴァがかつて気まぐれで覚えた合気柔術の  
技法。

……更に此处から首を下げた相手の首筋に向かって肘打ちを打ち  
下ろすサイの古武術の基本技法“首断”くびだちも見て覚えていたが、流石  
に今使うべきではないだろう。

この技は言うなれば、さながら断頭台の罪人に斧を振り下ろすよう  
な“殺人技”なのだから。

自然とサイの事を様付けで呼んでいる事に首を捻りながら、直ぐに  
ネギの方を振り向く。

すると既にネギの周囲には光の玉が展開していた……もう準備は  
出来てしまったのだろう。

『兄貴、相手はロボだ!!』

手加減しちゃいけない、此处は一発派手な呪文でドバーツと!!』

「う、ううっ……!!」

サギタ・マギカ  
魔法の射手 セリエス・ルーキス  
連弾・光の11矢!!!」

放たれる光の矢は一斉に茶々丸に襲い掛かる。

追尾するタイプの光の矢にいつもエヴァやサイと修行をしている茶  
々丸も流石に避けるのは無理だと理解した。

「追尾型魔法至近弾多数……避け切れません。

申し訳ありませんマスター、修行の成果を発揮する事は適いません



でした……。もし私が動かなくなったら、猫達の餌をお願い致します」

回避行動を止め、立ち止まる茶々丸。

「……サイ様、申し訳御座いません。

また共に猫達に餌をあげに行こうと約束したのに……。どうやら適わぬようです。

どうか、私が動かなくなったら後もマスターと共に……」

そんな悲しげな咳きが口から漏れる。

慌てて魔法を止めようとするネギだが時既に遅い、魔法弾を止めようとするが放たれた銃弾のようなものが止まる筈も無かった……。明日菜も止めようとするが間に合う筈も無い、魔法弾はそのまま茶々丸の身体に喰らい付こうとした。

だが

「火群流……天羽切！！」

アマノハバキリ

まるで茶々丸を包み込むように放たれる斬撃痕。

その斬撃は向かって来た光の矢を削り取り、一発残す事無く消し去った……。

余りの事に三人は言葉をなくす　そこに居たのは勿論、七魂剣を手に携えたサイであった。

ただしいつもとは違い、知り合いであるネギに対してあくまでも無表情でだ

「さ、サイ様……？」

「アンタ・・・」

「お、お兄ちゃん・・・」

いきなり現れたサイに皆、呆然とした表情をする。

そんな事など気にする事もなく、サイは茶々丸の方を一瞥し、無事なのを確認してからネギ達の方を向いた。

どうやら原因の少年少女は今までに見た事のないサイの態度にビクッと肩を震わせる。

しかし・・・そんな事に頓着する事も無く淡々と彼は口を開いた。

「・・・テメエ、何やってんだ」

問い掛けの言葉は簡潔でありながら、最も憤怒の感情が解り易いものだ。

逆にいつも辛辣な言葉を吐いているサイだが、この様に淡々と口を開かれた方が怖い。

「聞えねえのか・・・何やってんだって聞いてんだクソガキ」

「あ、あの・・・そ、その・・・」

しどろもどろに答えを出せずに言葉に詰まるネギ。

その横にいた明日菜は言い訳をしようとする・・・だが。

「あ、あのねサイ、これには深い訳が・・・」

「黙れ、貴様には聞いていない」

無表情でありながら怒気を含ませた一言に明日菜が青褪める。

無理もない　こんな状態のサイを見たら、百戦錬磨の人物でも

恐怖を覚えるだろう。

庇われた茶々丸さえ見た事もない、本気で怒っているサイの姿だ。

「おいクソガキ、確か俺は言ったよな。

テメエ自身で考えねえで人の話にホイホイ付いて行けば必ず後悔するってよ。

今回の事は大方、貴様の肩の上のクソオコジヨにでも吹き込まれた入れ知恵だろうが……」

サイの怒気に震え上がるネギとカモ。

腹立たしかった……親友のように感じていた茶々丸を襲撃された事も理由の一つだが、その浅はかさがどのような現実を生むのか考えていなかった目の前の小僧が。

「なら貴様は、茶々丸を撃破した後の事を考えたか？

茶々丸が動けなくなつて悲しむ者が居ると考えなかったのか、それが原因でキテイが本気で怒る事も考えていなかったか？

……そもそもキテイ本人に貴様は狙われたりしていたのか？」

ネギの肩の上で縮こまるカモを一瞥する。

その鋭い殺気を纏つた視線に『ひいつ！？』と小さく悲鳴を上げるとカモはネギの後ろに震えながら隠れた。

「自分で深く考える事も無く、流されるまま。

それについて弁解も出来ずに黙り込んでいれば事態が好転するとも思っているのか、その御目おもて出たえ頭は？

それで良く、人を導くなんつう“教師”が勤まるモンだな」

静かに歩き出すサイ。

一歩一歩大地を踏みしめながら怒気を含めた言葉を吐く。

それに気圧されたのか、それとも恐怖で弛緩しているのか、二人は顔を蒼白にして動く事すら出来ない。

そのままサイはネギの前に立つと、恐怖で涙ぐみながら顔を背けているネギの頭を驚？みにして強引に自分の方を向かせた。

「クソガキ、良く覚えとけ。」

誰かを撃つて良いのは自分が撃たれる覚悟がある奴だけだ、誰かを傷つけようとするならそれ相応のモンを背負うって事も覚悟しろ

その覚悟もねえなら人を襲おうなんて考えんな。

それとな　選んだ“理想”<sup>みち</sup>ってモンの結果を受け入れる覚悟がねえなら初めから目指すなんじゃねえよ」

驚？みにしていた手を離す。

するとネギは耐え切れなくなったのか泣きながら走り去ってしまった。

・・・無理もない、兄のように慕っていた人物からそのように言われてショックを受けない者など居ないだろう。

「あつ、ちよつとネギ！！」

ちよつとアンタ、幾らなんでも言い過ぎじゃないのよ！！

ネギはまだ10歳のガキンチョよ！？　それなのにあんな・・・」

其処まで言つて更に何かを言おうとした明日菜。

しかし、その言葉は喉元まで出掛かっては止まってしまった・・・サイの顔を見た瞬間に。

サイの表情はどこか、泣きそうな表情をしていたのだ・・・。

「・・・10歳の餓鬼だから何だ。」

餓鬼だろうが何だろうがアイツのやった事は褒められた事じゃねえ。しかもテメエ自身で考えて出した結論ならまだ多少は許されるが、

他人の言葉を鵜呑みにして流されただけだろ。

現実を知らねえ餓鬼に優しく言った所で理解出来る訳ねえだろうが」

泣きそうだった表情は一瞬で消え、直ぐにいつもの毒舌が戻る。

彼のその表情、さらに言い返す事の出来ない言葉に明日菜は溜息を吐くとネギの走り去って行った方向へと向かう。

「・・・大事ねえか、茶々丸」

「あつ、はい大丈夫です。」

それよりもサイさま・・・いえサイさん、少々失礼致します」

そう言うとなを思ったのか茶々丸がサイの腕を取る。

良く見てみればその掌は余りにも思いつ切り拳を握っていた所為で爪が食い込み、血が流れていた。

サイは握力が強過ぎるが故、本気で拳を握ると自身を傷つけてしま  
うのだ。

「別に手当てなんぞ必要ねえよ。」

どうせ放っておいても直に俺自身の法力で塞がっちまうんだからな」

「申し訳ありませんが、その言葉には肯定しかねます。」

目の前で傷付いている者が居れば助けるのは当然かと思いますが」

手際良く何処からともなく取り出した包帯を巻く。

直ぐにサイの掌は綺麗な白の包帯で包み込まれた　と、ふと足

元を見ればサイと茶々丸がいつも餌をやっている猫達が擦り寄って  
来ている。

・・・どうやらこの猫達も彼らなりに心配していたのだろう、茶々丸がそつと撫でてやれば嬉しそうに身体や頭を摺り寄せていた。

「・・・さて、俺は行くぞ。  
偶々散歩してたらこんな状況に出くわしたんでな、そろそろ散歩の  
続きにでも戻るぞ。」

まあもうあんな事はねえだろうが、一応気を付けて帰れよ」

本来ならば送ってやった方が良いのだろう。

だが、そんな気分になれないサイは一人になろうと再び何処かへと  
向かって歩き出そうとしていた。

「あつ、はい解りました。」

あの・・・サイさん、今日は本当にありがとうございました」

ぺこりと頭を下げる茶々丸に後ろ手で手を振りながら歩いていくサ  
イ。

一人になった時、不意に彼は小さく呟いた・・・。

「チツ、胸クソ悪イな・・・クソが」

その言葉は果たして誰に向けられたのか。

愚かな行為をしたネギに対してか、それとも己自身に対してか・・・。

しかしその答えを解るものは居らず、サイの小さな呟きは太陽の光  
降り注ぐ空に吸い込まれて消えた。

## 第二十話：撃つ覚悟、撃たれる覚悟（後書き）

投稿完了ですね。

初期の頃のネギって頭でつかちで覚悟もへったくれもないような甘ちゃんでした。

だからこの作品では先にその部分を矯正しようと思いましたがこの様なストーリー展開となったのです。

さて、此処からどうなるかは説明が難しいですねえ……。

原作どおりに進むかもしれませんが、進まないかもしれません。

まあ、要は次を楽しみにお待ち下さい^^

追伸

ついに神羅万象 七天の覇者 第二弾の情報が公開されました  
といっても、通販に画像が載っただけですけどね。

これで曖昧となっていたサイの契約締結者が解りましたよ……。  
想像とは違い、白虎が男で青龍が女でしたけど（汗）

他にも魅力的なキャラが何人か居ますので、設定を少々いじって此方に出そうと思います^^

そいつらが出てくるのはまだ先ですが、気長に待っていてください  
^^

第二十一話：紅き情景、黒き闇（前書き）

今回の話は本編を周到しつつ微妙にひん曲げてます^^  
ついに次回、ネギとエヴァの戦いの開始です・・・本編とは結果は  
変わると思いますが・・・。



## 第二十一話：紅き情景、黒き闇

ネギがカモに唆され、茶々丸を襲った日から明けて翌日

「やれやれ、またジジイの呼び出しかよ。

確かに住まして貰ってる恩義ってモンはあるが・・・いかんせん扱  
いが荒すぎじゃねえのか、全く」

「諦めるサイ、ジジイはそう言う人物だ。

・・・ボケている癖に余計な所にはかり知恵が回るからな。

それに大方、此処の役立たずの魔法教師共では倒せんお前の世界の  
モンスターでも現れたんだろう」

相も変わらず学園長に対しては悪意無く、魔法先生達に対しては悪  
意満載な言葉を意地悪そうに笑いながら呟く二人。

もうこのやり取りもいつもの事なのでさして気になる事もあるまい

学園長はクシャミをしていたらしいが。

だが、そこでふとエヴァンジェリンの表情が変わる。

大体話の内容を理解出来ていたサイもまた表情を真剣なものへと変  
えた。

「サイ、話は変わるが・・・。

昨日の夜に茶々丸聞いたのだが、あの小僧ネギが襲撃を掛けて来たらし  
いが事実か？」

「茶々丸が自分で言ったなら事実もクソもねえだろ。

まあ、若気の至りってな奴だ　アイツは餓鬼だから人の話を鵜  
呑みにばかりしてたら後で後悔するってな忠告はくれてやったんだ

「がな」

「・・・そうか」

そう小さく一言相槌を打つエヴァ。

表面上は落ち着いているように見えるが内心はどうだろうか？

不老不死で15年も麻帆良に縛り付けられていた彼女にとって茶々丸は『従者』という存在以上に『家族』と言っても過言ではない存在だ。

そんな自分にとって大事な存在を傷つけられそうになって何も無かつたように許せる者の方が少ないのが当然の人としての感情である。

ちなみに件の少年は引き籠もってしまい出て来ないらしい。

まあ、ありがたい事に休みの日三連休であった為に学園自体には迷惑は掛かっていないのだが 同室である明日菜にとっては落ち込んだネギを元氣付けようと乱入してくるあやかだのまき絵だのが騒がしいらしく、朝会った際に苦言を呈して来ていた。

「全く、あのバカガキは。」

テメエが引き籠もってりゃ事態が好転するとも思ってたのかよアホが。

最初はちつたあ根性のある奴だと思ってたが、こりゃ俺の目も曇っちまったかな・・・」

どこか悲しげに聞えるサイの声。

サイはネギの真面目で融通は利かないが只管に目的に向かって努力する姿に好感を覚えていた。

記憶は完全ではないので定かでは無いが、どこか前だけ見て進んでいるネギの姿と“かつての自分”が重なって見えていたのだ。

だからこそ進むべき道を陰ながら応援し、そしてほんの少し手を差し伸べていた。

成長の為に厳しくも優しく己が子を見守る厳父の如く……。

「まあ、良く良く考えれば俺が口出しする事でもねえな。

壁だの苦悩だのに直面して、それを乗り越えられるか乗り越えられねえかなんてのは俺がしてやる事じゃねえ。

「テメエがテメエ自身で悩みぬいて、最終的に答え出すモンだろうしよ」

「フン、お前の言う通りだろう。

しかし……私としては家族とも言える茶々丸を傷付けられそうになつた事はいかんともし難い。

故に一度だけ、あの小僧の相手をしてやるとしよう」

ふと、急に黙っていたエヴァがそんな一言を呟く。

彼女としてはナギの事を吹っ切り、スプリングフィールドへの執着も憎悪も捨てた今、ネギと戦う理由など無い。

……しかし今回の襲撃でネギの考え方も少しは矯正しなければならぬ事や自分のどうし難い怒りを発散するには、お互い遺恨なくなるまでやり合った方が良くと言う結論に行き着いたのだ。

そんなエヴァを見つめるサイ……サイに対してエヴァは今までなら決して見せる事も無かつた優しい笑顔を見せて呟く。

「心配するな、殺しもしないし一生残るような障害を刻む心算も無い。

だが、何かに心酔する者や現実を知らぬ者は一度『挫折』と言う奴を経験せねば変われぬさ……。

其処から這い上がれるか、それとも堕ちて行くかは本人次第だろう……クチュン……」

そこで最後に可愛らしいクシャミをするエヴァ。

此処の所問、題は無かったのだが・・・どうも最近は花粉が酷いらしく、また花粉症をぶり返していた。まあ・・・それだけでは無いのだが。

「・・・オイオイ、大丈夫かキティ？」

此処ん所、随分花粉が酷いからな　しかもお前、顔真っ赤じゃねえか。

ちとお前、額触らせてみる・・・って、おい！　何だこの熱は！？」  
触った瞬間に理解した。

最初からやけに顔が赤かったり、何処と無く足取りがふらふらしてるなど思ったが・・・凄まじい熱だ。

だがおかしい、もう既にエヴァ自身の魔力を押さえ込んでいた封印は解除された筈だが？

「・・・そうか、お前には言っていなかったな。

私は元々人間から不死と変えられた、だが・・・元々、その術式が不完全のものであったらしい。

だから私は不死でありながら病を患ってしまうという面倒な身体をしているのだ・・・人に知られれば面倒だから教えないようにしていたのだがな」

いや・・・違う。

例えばそれを彼女を狙う者に知られれば、それを見逃してなどくれないだろう。

己を護る為に、彼女は大分無茶をしまくってきたのだ・・・。

「・・・馬鹿野郎。

テメエ、何で俺に言わねえんだ！！」

サイは直ぐにエヴァを背負うと来た道に戻る。

このままでは学園長に呼ばれた時間には遅れてしまっただろうが・・・それよりも先にはやるべき事がある。

冷たく人に自ら嫌われようとするサイだが、その本質はお人好しだ。自分の親友とも言える人物が無茶をして今にも倒れそう、しかも真祖の吸血鬼でありながら病に罹るなどと聞けば当然だろう。

全速力で駆け抜けるサイ。

その間、熱の所為かサイの背に身体を預けるエヴァ。

サイの頭からは彼女が不老不死だと言う事は抜け落ちていた唯、『友を失いたく無い』と言う思いのみで、その目にエヴァの住むログハウスが見えるまでスピードを落とす事無く・・・。

ログハウスの中に入ったサイは急いで茶々丸に事情を説明する。どうやら茶々丸もエヴァが隠していた事実は知らなかったらしく、慌てて寝室の準備をし始めた。

「サイさん、マスターを寝かせていただけますか？ 私は急いで常備の薬や着替えの用意を致しますので。」

あと向こうの冷蔵庫に氷があります、それと額を冷やす為の水の準備をお願いします」

「おう、氷と水だな！！」

・・・実にバタバタと慌てた時間が過ぎる。

その後の二人の大慌ての看病により苦悶の表情を浮かべていたエヴァは落ち着き、すやすやと安らかな寝息を立て始めていた。

その時、不意に空気を読まずにサイのポケットで大音量の音楽が鳴る。

騒がしくも熱くなるその着メロは、サイが前に見て大分気に入った某超電磁砲なアニメのメインテーマである『LEVELE5 - Judgment - J u d g e l i g h t - 』。

意外に冷めているように見えて神曲をセレクトするものだ、と言いかサイが携帯電話を持っているのにも驚きだが……。

尚、メールの方の着メロは某熱血超絶天元突破なアニメのメインテーマ『空色デイズ』と『涙の種 笑顔の花』である。

それはさておき  
閑話休題

大音量の着メロがかかってもグツスリ寝ているエヴァに安心すると電話に出るサイ。

そこから聞えてきた声は、出来ればエヴァの看病に疲れているサイは聞きたくない相手だ。

「もしもし、サイ君かのう？」

「……番号確認して電話してんだろぅが、一々確認すんなよ」

そう、其処から聞えてきたのはお気楽極楽な学園長の声だ。

まあ考えても見れば本来約束してる筈の人物達が来なければ連絡するのが当然の事である。

それに気付いたサイはぶつきら棒に彼なりの謝罪をする。

「ああ、悪いなジジイ。

キティが花粉症悪化してな……だがどうせ大した事じゃねえだろ。茶々丸も大病院の方に葉貰いに行っちまって離れられねえんでな、

用件があんならそこで言えよ」

「フオフオフオフオオ・・・成る程、そうじゃったか。道理でいつもと違い、お主達がいつまで経っても来ん訳じゃわい。まあ良い。そこでそのまま聞いとくれ、実はの・・・」

そこで電話越しに学園長の説明が始まる。

話によれば、またもやこの学園に魔法を持たぬ化物モンスターが現れたのだそう  
うだ。

しかも面倒な事に魔法関係の一部の人物がサイやエヴァにばかり頼る事に憤怒して先走った事により取り逃がしたらしい・・・しかもご丁寧に、その化物と戦った者達は疲労か何かによつて学校を休んだそうだ。

「誰だか知らんが馬鹿かそいつ等？」

「手厳しいのう・・・まあ先生方達の事を止められなんだワシにも落ち度はあるからの」

電話の内容で大体の事を理解出来たサイ。

要は簡単に言えば、一部の馬鹿が暴走して獲物ターゲットが逃げたから探し出して始末してくれと言う事だ。

・・・まあ、（学園長本人は当然の事なので気にしないが）麻帆良に住ませて貰っている恩義もあるし、己がこの世界に来た事によつて魂獣界の怪物達が来ていると言う可能性があるならば放つては置けまい。

それに、学園長は自分の孫娘や孫娘と同意な少女達を守りたいと言う思いもあるのだろう。

ある程度それを理解しているサイにとって、全てをひっくり返すめて断る理由は無い。

「解った、任せろジジイ」

簡潔にたった一言だけそう言う。  
だが・・・この言葉は嘘でも偽りでもない事は今までの彼を見て来て居れば良く解る。

そして『任せろ』と言う言葉通り、今まで彼は何度も傷付きながらボロボロになりながらも有言実行を貫いてきた。

不愛想で不器用、クールっぽく見せているがその実は密かに燃える熱血漢。

有言実行、不言実行、己の選んだ道に言い訳も後悔もしない本物の漢・・・それが短い時間だが学園長が彼の戦いや歩みを見て理解した“サイの人柄”だ。

「・・・うむ、宜しく頼む」

それ以上は学園長は何も言わない。

言う必要は無いのだ、学園長は理由はどうあれ“サイ”と言う人物自身を信じているのだから。

それに今、誰よりも彼が身を粉にしているという事を知っていた・・・  
・勿論、サイ自身が言った訳ではない。

話が終わり、電話を切るサイ。

するとそこで急に猛烈な睡魔を覚えた・・・エヴァが落ち着いたのと、日頃の無理が祟ったのだろう。

最近はどのようにして現れているのかは不明だが特に魂獣界からの侵入者が多い  
それを倒せるのも、居場所を感知出来るのもサイ一人だ。

必然的に寝る時間も少なくなり、真夜中の麻帆良で侵入者を探し回っていれば疲れが出るのも当然の事である。



「・・・最近はずっと無茶し過ぎか。  
まあ、もうじき茶々丸の奴も帰って来るだろうし・・・ちっとだけ  
寝かせてもらうかね・・・」

そのままベッドの近くに凭れ掛かって目を瞑る。  
直ぐに穏やかな寝息がサイから立ち始め、彼は久しぶりに熟睡をす  
るのであった・・・。

サイが眠りに着いてから30分ほど後  
彼と茶々丸の看病とゆっくり眠れた事により熱も引き、エヴァはゆ  
っくりと目を開けた。

「うむ・・・此処は？」

完全に覚醒していない思考で周囲を見渡すエヴァ。  
ボーっと周囲を見渡している内にそこが己の住んでいるログハウスの  
中だと気付いたのだろう。  
トロンとしていた目は完全に覚醒し、何故此処に寝かされていたの  
かも思い出した。

「そうか・・・私は確か、熱を出して・・・」

ふと、彼女がベッドの横を見ると其処には座りながら壁に寄りかか  
って寝ている人物の姿。

いつもは事なかれ主義で冷めているが、誰よりもお節介な・・・エ  
ヴァにとって親友にして大切に想う人物が静かな寝息を立てていた。

「フツ・・・こう見ると本当に唯の小僧だな。全く、何故私はこんな小僧をナギのように愛するようになったのか・・・」

彼が寝ていると解っているからこそ出る言葉。

普段のエヴァならば照れ臭いし、ツンツンしている為にこんな事は口が裂けても言わないだろう。

昔、ナギに対して感じていた感情よりもその感情は深く、それで居て優しい。

だがそれは当然だ。

言うなればナギの場合は命を助けて貰った恩人であり、その事がそのまま恋愛感情に繋がっていった。

しかし・・・サイの場合は己と同じく、苦悩や苦痛を背負って只管に前に進み続けて答えを出したタイプの人物であろう。

それを本人から全部聞いた訳ではないが、態度や言葉の重さからエヴァは察していた。

更に身体に深く刻み込まれた多くの古傷・・・それは修行で付いたものだけではない、背に傷が無い所を垣間見れば逃げずに生きて来たという証だ。

「振り返る事も無く、唯真っ直ぐにか。

己の選んだ選択肢に後悔する事無く、自分の選んだ結論から逃げる事無く。

救うと誓った者の為にならば、唯只管にその者を救う為に自ら自身が傷付く事など厭わない。

全く、何処そのアニメの主人公のような奴だ　　どんな生き方を  
して来ればそんな漢になれるのだから」

・・・そこでエヴァは一つ思いついた。

実はサイ本人が気付いていないだけで彼に好意を抱いている者は実に多い。

共に居る事の多い茶々丸（ただし本人は無自覚）に美空（家族愛的な物の方が強いが）、麻帆良武道四天王（古、楓、真名、刹那）を始めとし、助けて貰った木乃香にのどか、更にダークホースのザジと何だかんだで口喧嘩仲間の千雨も怪しいのだ。

そんな茶々丸を除く彼女達よりも心の底でどこか優位に立ちたいと言う感情もあつたのだろう。

サイは自分自身の過去を聞き、そして知っている。

ならば・・・サイの過去や記憶を知っても問題ないのではないかと彼女は悪戯心的なモノも持ちながら考えた。

実際の所、サイは表立って記憶を取り戻したそうでは無いが思い出したくない訳でもないようなのだ。

ならば彼女の持つ、夢見の術を利用すればサイの記憶に辿り着けるのではないかと。

ちなみにエヴァは人の事を彼是詮索するのは嫌いだ。

しかし今回の場合は想い人の事を知る事が出来、更には記憶を取り戻す切欠にもなるかもしれない。

物は言いようだが、要は人助けのなるのだ・・・些細な事など気にせずに居ても良いだろう。

「うむ・・・よし、あくまでもこれは人助けだ。

サイの記憶が戻る事によって、サイにとって救われる事もあるう・・・。

べ、別に他に他意など無い、他意など無いぞ！！」

「マスター、どうかなさいましたか？」

其処にタイミング良く、まるで見計らったかのように茶々丸が帰って来た。

彼女は自らの主が何らかの魔法を唱えている姿を見て問いかける。

「茶々丸が、丁度良い所に帰ってきたな。

今から『夢見の魔法』を使ってサイの記憶の中に入り込む、お前も着いて来い」

「えっ……し、しかし……」

唐突な申し出にいつもなら直ぐに肯定する茶々丸が迷う。

『夢見の魔法』とは言うなれば人の夢に入り込む魔法のように魔法学校では教えられているが、実際は違う。正確には『人の深層心理とすべき記憶の部分に入り込む』と言うのが正しい。

高々一桁の歳の子供たちには教えるのがややこしい為にそう言った部分を省いて教えているのだ。

人の深層……つまり奥深くに隠れている部分に入り込むというのは、要は人の過去を暴くのと同じ。

人の本性、隠したい部分、あった事柄など全てを知ってしまうと言う事なのだ……。

その事を知っている茶々丸が返答に迷うのは当然である。

しかし

「茶々丸……何を勘違いしている。

これは立派な人助けと言う奴だ、サイの過去を暴くのが目的ではない。

記憶をなくし、己の事を解らぬサイを助ける為にやむなく心の中を見るのだ……まあ、その途中で“偶然”他のものを見てしまう可

能性はあるがな」

意地悪そうに笑うエヴァ、後半の言葉の方が実はメインだろう。サイの事を知れば、他の（無意識の者も居るだろうが）彼を狙ってる者達より一歩リード出来る。

そんな打算がエヴァにはあり、茶々丸もノイズのようなものを感じながらエヴァの言葉に否定出来なかった。

茶々丸の否定しない様子を見たエヴァは詠唱の続きを唱える。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック

ニユンファ・ソムニー・レーギーナ・メイヴ ・ポルターム・アペリエア茶・セト・メー・アリキャット  
夢の妖精、女王メイヴよ。扉を開けて夢へと誘え・・・」

詠唱を唱え終わり、目を瞑る二人。

アビリティキャンセラー  
本来ならばサイの能力無効化によって魔法は効果が無い。

しかし今のように疲労により深く眠りに就いている時のみは、唯一といって良い程に魔法が通用する。

これでサイの事を少しでも知れる・・・二人には多かれ少なかれそんなワクワク感があった。

だが、これが。

このサイの過去を知る事が何よりも辛く、好奇心で知るべきでなかった事を後悔する事となるが。

〈Side 記憶〉

暗い 何処までも暗い闇。

聞えるのは悲鳴、怨嗟の念、銃声や斬撃音。

鼻を突くのは腐臭、死臭、鉄のような血の臭い。

目に映るのは折り重なる獣人達の亡骸、犠牲者の血河……。この様子を見れば“地獄”とはまさにこのような場所の事を言うのだろう。

そんな血河の中で青年はゆっくりと前に進んでいた。

向かって来る敵を斬り、穿ち、その命を絶つ……。たった一人でその銀髪の青年は戦い続ける。

戦友は居ない、己を進ませる為に文字通り命を賭けて道を切り開いてくれたのだ。

誓いを果たすまでは死ねない……。否、死ぬ訳には行かない。

己が進む意味を、魂を賭けて戦い続ける意味を青年は誰よりも知っているのだから。

先に待つのは絶望でも、歩みは決して止める事は無い。

己が魂『七魂剣』が砕けようとも、父の誇り『六道拳』が砕けても、この腕が砕け、足が無くなるうとも這ってでも喉元に喰らい付く。

それがかつて現実から逃げた己を救ってくれた戦友達や大切だった人達に報いる唯一の方法なのだから。

決して諦めない……。かつて父が、母が教えてくれた。

『己を信じ、誇りを貫く事が出来る者こそが無限大の強さを得れるのだと。』

迷いは無い、涙ももう既に枯れ果てた。

彼の心の奥底にあるのは唯一つの誇り高き思い。『全てを終わらせ、皆が笑って暮らせる世界を作る』と言う途方も無い“幻想”。

だが夢を持つ事・・・その大切さを父は教えてくれた。  
目に映るのは巨大な人影　その姿を垣間見ると、青年は笑って  
戦場に響く鬨の声を上げた。

「我が名はサイ!!」

白面九尾大帝サイなり!!　これが決着の時だ、いざ尋常に勝負!  
「!!!!!!!!!!!!!!」

その言葉を最後に光景は暗転する。  
広がるのは無窮にして深淵、深く暗い闇が再び辺りを立ち込めた

Side out

目を開いたその時、エヴァの目からは涙が流れていた。  
それと共に己の軽率さを呪う、サイの記憶はそんなに軽はずみに見  
て良い様なものではなかったのだ。

「サイ、お前は・・・どうしてお前はそこまでして、笑っていら  
れる？」

世界全てを敵に回し、多くの苦しみや悲しみを背負ってまで  
何故、其処まで誰かを救おうとする？

何故お前は、人の幸せばかりで己の幸せを願わない・・・」

知ってしまった現実には少なくとも己よりも遥かに重い。

だがそんな中でも不平も不満も一つも言わずに己の命を賭して戦う姿・・・それはまさに『英雄』と言う奴だ。

言葉だけではない。

その言葉と共に貫いてきた生き方という物が、記憶を無くしている筈の彼の今を生み出しているのだ。

だからこそ彼は誰よりも救いを求める者を放っておけない、底抜けのお人良しなのであろう。

その時　　不意に後ろから声がした。

「あの・・・すみません、ノックはしたんですが・・・」

其処に居たのは引き籠もっている筈のネギだ。

突然の訪問に意図が解らないエヴァであったが・・・目から零れていた涙を払うとネギの方を見る。

「・・・何の用だ、ネギ・スプリングフィールド。

私は貴様に用事など無い、大体貴様は何も考えずに私の家族とも言える茶々丸を良く考えもせず襲って引き籠もっているのではなかったのか」

何処と無く棘のあるような言い方にしゅんとするネギ。

だが、意を決したように一度目を閉じると・・・エヴァの後ろにいた茶々丸に向かって頭を下げた。

「茶々丸さん、すみませんでした！！

あの後ボク・・・お兄ちゃんに言われた事を思い返して見て、先生失格だと思いました。

今までボク、魔法学校を主席で卒業して何でも出来るって好い気に



なっていたんです……」

後悔するかのように、それで居てしつかりと茶々丸やエヴァの方を見ながらそう言う。

その目にはどうやら迷いのようなものは無い……。

「その所為で自分で考える事もせずに、流されて……。

結果、茶々丸さんを傷付けそうになって 他に逃げる為の道ばつかり考えて言い訳してました。

馬鹿ですよ、そんな事した所で現実から逃避してるだけで何も変わらないというのに……」

小さく震えているネギ。

己のしてしまおうとした現実を改めて考え、怖くなったのだろう。

しかし、その目は決してエヴァと茶々丸からはずそうとしない。

「だからボク、決めました。

これからは流されるんじゃないくて、ボク自身がしつかりと考えて答えを出すって。

で、考えた結果、まず最初に迷惑をかけた茶々丸さんとお兄ちゃんに謝りたくって……」

「……そうか」

唯一言だけエヴァは呟く。

見ればネギの目の下には深い隈が刻み込まれている……。

恐らく、引き籠もっている等と言っている時に自分一人で眠ることも無く良く考え、考え抜いた結果と言う奴だ。

「……ネギ先生、解りました。

元より私は怒ってなど居ません、謝罪していただいただけでもう結構です」

その言葉を聞き、改めてもう一度頭を下げる。

サイにも謝る心算だったようだが、爆睡しているのに合わせてエヴァが『寝かしておいてやれ』と言う為に謝罪は後日と言う事になった。

そしてそのまま背を向けて帰ろうとするが……。

「おい待て、ネギ・スプリングフィールド」

不意にネギをエヴァが引き止めた。

『何だろっ？』と思い、エヴァの方を向くネギに彼女はある事を言う。

「一つ、貴様と私の蟠わだかまりを解消する方法がある。

貴様はそれなりに実力があるのだろう？ ならば……私と魔法で戦え」

驚いた表情になるネギを無視して時と場所を簡潔に伝えて追いつ返すエヴァ。

確かに本気で殴りあった方が遺恨も何も吹っ飛ぶだろう……。

「……ん、ああ寝ちまつたか」

と、そこでまたもやタイミングを計ったかのようにサイが目覚めます。

そんなサイにこれからの事とネギとの決闘の事、そして不注意で過去の事を少しだけ知ってしまったと言う事を説明して謝罪した。

……本当は茶々丸もエヴァも全部知っていたのだが、それを伝え

るには辛過ぎると言う事で黙っている事にしたのだ。  
その時に彼女が知った事の内容とは

「・・・メルト、ロック、ミツキにアガート。

それにダレスにカヌキ、デヒテラにキリク、ボルトにユーナにギギ、  
それに・・・ルীগにムジナ、か」

「ああ、お前の戦友達の名だ。

済まん、記憶を覗いておいてその位しか解らなかった」

そんなエヴァの言葉に首を横に振るサイ。

彼にとつては急いで記憶を取り戻そうとしている訳では無いが・・・  
友の名を思い出せただけでも充分だ。

「いや・・・ありがとな、キティ。

確かに俺には親友であるそいつ等が居てくれた、顔は思い出せねえ  
けどよ・・・」

そんな風に小さく呟くサイ。

エヴァと茶々丸は罪悪感を抱きながらもネギとの決闘の為の準備を  
始めたのであった・・・。

## 第二十一話：紅き情景、黒き闇（後書き）

投稿完了です。

いや、しかし・・・。

最近久しぶりに劇場版グレンラガンの紅蓮編と螺巖編見ましたが・  
・熱いつすな。

真夏の暑さもフツ飛ばしそうな熱さに久しぶりに燃えました^^

ちなみにこの作品は兄貴さんと言う方が書いているネギまとグレンラガンのクロスを許可を貰ってオマーージュしている部分が多いです。ですが基本、主人公の性格は違ってますね。

シモンは言うなら『底抜けに熱い、天元突破な熱血馬鹿』です。  
しかしサイは『見た目や言動は冷めているが、その実は静かに燃える熱血漢』です。

本来はサイ君、こつ言った性格じゃないんですけどね・・・。

そしてほんの少しだけ明かされたサイの過去。

これを本格的に書くと多分、5〜6話以上使ってしまうと思いますので今はまだ書きません。

ですが後々に書きますので楽しみに^^

では失礼します^^

P.S.

途中に出てきたサイの携帯電話の着メロ。

『LEVEL 5 - Judgeliight』・・・【とある科学の超電磁砲】のテーマソング  
『空色デイズ』・・・【天元突破グレンラガン】のテーマソング  
『涙の種、笑顔の花』・・・【劇場版：天元突破グレンラガン・螺旋編】のテーマソング

多分決定したサイと契約締結する方々。

紅蓮弓聖ロック（朱雀）  
翠緑深王ミツキ（玄武）  
黄玉輝星アガート（麒麟）  
金剛豹牙ダレス（白虎） 第二弾  
薫風蒼樹カヌキ（青龍） 第二弾  
白澤導士メルト（九尾） 第三弾  
黒刀斬姫ムジナ（隠神） 第四弾

あくまでも予想ですので間違っているかもしれませんがお許しを。

第二十二話・信じてくれる者が居るのなら（前書き）

今回は短い間に二話目の投稿です。

どうか、おかしな内容かもしれませんが楽しんでください。

## 第二十二話：信じてくれる者が居るのなら

夜　　人々が穏やかな眠りに入るその時間。

麻帆良の端にある大橋・・・かつてエヴァがサイと対峙したこの場所  
所で再びエヴァはある人物と向き合っていた。

「遅かったな、坊や。」

茶々丸の話によれば中途半端だが仮契約したパートナーパクテイオーがいると聞  
いていたが。

確か神楽坂明日菜だったか？　連れて来なくて良かったのか」

エヴァが対峙するは件の子供先生くだん、ネギ・スプリングフィールド。

その表情は困惑の色が見える　無理も無い、意味も解らずに決  
闘をする事となってしまったのだから。

「エヴァンジェリンさん、どうしてですか!？」

ボクがエヴァンジェリンさんと戦わなければならない理由なんてこ  
れっぽっちも無いですよ!!

それにボクは貴女の先生です、先生が生徒に手を出すなんて許され  
ないじゃないですか!!」

しかし・・・ネギのその言葉にエヴァは笑う。

『真面目で頭が固過ぎると言つのも実に面倒なものだ・・・親父を  
見習え』等と考えながら。

「喧しいわ、小僧!!」

貴様と私が戦う理由は大小併せても色々とある、その中で一番大き  
いのは“家族”とも言える茶々丸を傷つけようとした事だ!!

言った筈だな・・・蟠わだかまりを無くしたいなら、全力で私と戦えと!!」

怒っているフリをするエヴァ。

正確に言えばもう既に彼女はネギに対する蟠りなど持っていない。だが・・・かつて己が慕い、求めた男の血筋を引く人物がどれだけ強いのか確かめてみたかった。

かつてならその血を飲み干し、自由を得ようとしていたと言つのに・・・本当に彼女は良い意味で変わった。

「で、でも・・・ボクはエヴァンジェリンさんの先生ですし・・・」

生徒を危険な目に合わせると言つ事をしたくないネギ。

しかし、そんなネギをやる気を出させる言葉をエヴァは知っていた。・・・ネギの『唯一点しか見ていない事実』を考えれば自ずと直ぐにその答えは出たのだが。

「ならば・・・私に勝てれば貴様の知りたい父親の話をしてやる。

貴様は『立派な魔法使い』や『千の呪文の男』などと呼ばれた父親マギステル、マギ、サウザンドマスターの事を何も知らんのだろう？」

その言葉を聞いた瞬間、ネギの表情が変わる。

ネギは誰よりもサウザンドマスターと呼ばれた父親の事を知りたかった。

そう、そして父親のような偉大な魔法使いになる事こそが望み。

「本当ですか、エヴァンジェリンさん・・・」

本当に貴女に勝てば、ボクに父さんの事を教えてくれるんですか？」

「・・・フン、二言は無い。

まああくまでも“勝てたら”の話だがな・・・ほう、どうやら少しはやる気になったか」



エヴァには解る、ネギの雰囲気が変わった事が。

何かに妄信するというのは褒められた事では無いが、ネギにとっては父親の事を知りたいと言うのが原動力となっている。

真剣な表情となって魔法の杖を構えるネギ　　だが、ふとそこでエヴァはネギの前に手を出して呟く。

「小僧、少し待て。」

もう少ししたらこの決闘の立会人が到着するからな」

「立会人・・・？」

立会人とは一体誰の事だろうか？　想像の付かないネギは首を傾ける。

・・・すると其処に、小さくそれで居て堂々とした足音が聞えて来たのだ。

その音に気付いたネギは後ろを向く。

其処に居たのは　　己が兄のように慕う、無愛想な銀髪の漢が居た。

「お、お兄ちゃん!？」

「来たか、待ちかねたぞサイ」

二人の言葉が重なる。

それを小さく笑うとサイはゆっくりと二人の間に入った。

「今日の俺はお前の兄貴分じゃねえし、キティの親友でもねえ。

お前とキティの決闘に立ち会う立会人さ・・・どう言う結果が出ようとも最後まで見届けてやる。」

二人とも、悔いが残らねえように全力でやれや」

それだけ言い終わると、欄干に腕を組んで寄りかかるサイ。予期せぬ人物が立会人となったが、エヴァもネギももう既に戦う為の準備は終わっていた。

サイは何処からとも無くコインを出すと、指で弾いて空中に飛ばす。虚空をコインは舞い、そのまま重力に引かれるままに大地に向かって落下する。

そして　　コインが大地に落ちたその瞬間。

エヴァとネギの決闘は開始したのであった……。

「リック・ラク　ラ・ラック　ライラック  
喰らえ、魔法の射手　連弾・氷の17矢!!!」  
サキタ・マギカ　セリエス・グラキエース

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル  
風の精霊17人、集い来たりて……。  
魔法の射手　連弾・雷の17矢!!!」  
セフテンデギム・スエイサヤモリス・コエウンテース　セリエス・フルグラリス　サキタ・マギカ

激突し合う二人の魔法の矢。

氷と雷、相克した二つの属性は互いを反発し合い消滅させた。

魔力だけで言うのなら、この二人は互角と言えよう　　勿論“  
魔力”と言っただけならばの話だが。

「雷も使えるとは中々勤勉だな……。  
だが遅いぞ小僧、もっと詠唱の時間を早くしろ!!  
そして数に頼ろうとして魔力の込め方がまだまだ甘い!!!」

響くエヴァの怒号。

彼女はネギの方に掌を向けると、詠唱をさつきを裕に越える早口で唱える。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック  
ウンデトリギンタオズ区クイセオス  
闇の精霊29柱  
」

「あ、あうっ!?! は、早すぎですよ!」

咄嗟に魔法が飛んでくると思い、魔法障壁を張るネギ。

だが衝撃は来ない・・・恐る恐る目を開けると、其処には掌に魔法を維持したままネギを見下ろすエヴァが居た。

「どうした、一々待ってやっているのだ。

貴様もさっさと詠唱を唱えて贖って見せる  
さもなければ、貴様  
はナギの事は一切知る事は出来んぞ」

掌に魔法を維持し続けると言うのは簡単に出来る事ではない。

放つ魔法と同じ量の魔力を掌に纏い、放たれようとする斥力と留まろうとする引力を絶妙のバランスで抑え続けなければならぬのだから。

ちなみにエヴァはその気になればこれを利用してディレイニスベル遅延呪文以上に魔法の発動を遅れさせる事も可能だ。

・・・流石は世界最強クラスの魔法使いと言う奴だろう。

「・・・は、はい!!」

ラス・テル マ・スキル マギステル  
ウンデトリギンタルネギ区トウス  
光の精霊29柱  
サキタ・マギカ  
魔法の射手 連弾・光の29矢!!」  
セリエス・ルキス

そのまま詠唱絵を唱えると魔法の矢を放つ。

言うなれば不意打ちをしたようなものだが・・・エヴァは笑いながら向かって来る魔法を、そしてネギを見ている。

応用を知らないが頭の良い人物だ、今の態度でどういふ事をエヴァが言いたいのか理解出来たのだろう。

まあ・・・父親の事を知りたいと言う一心で後先考えていないと悪い考え方も出来るが。

「そうだ、それで良い！」

卑怯だの卑劣だの・・・それは力を持たずに戦う弱者の戯言だ！

本気で相手を倒したいと思うのなら先見の目を養い、そして躊躇するな!!!

教科書通りの戦い方など、所詮は戦い方を知らぬ甘ちゃんの戦い方に過ぎんわ!!!

セリエス・オグスケーリー  
魔法の射手 連弾・闇の29矢!!!」

エヴァの手から放たれた魔法の矢は目の前に迫ったネギの魔法の矢を簡単に相殺する。

彼女は手を抜いている訳ではない 目の前の人物をしつかりと見て、戦い方のような物を叩き込んでいる。

・・・そんなエヴァを見ながら立会人のサイは小さく溜息をつく。

「ハッ、ヤレヤレ・・・」

全くキティの奴、ネギの事を試したいなら初めからこんな回りくどい手を使わねえで別の方法を使えば良いのによ」

サイはエヴァが何故、ネギと戦うなどと言う事をしたのか理解していた。

一つの理由はサイと同じ、戦う事でしか解らない事があるからこそ戦うという道を選んだのだ。

もう一つはネギが彼の父親であるサウザンドマスターの血を引いている事を確かめたかったのだろう。

でなければ、彼女の性格を考えれば決闘などと言う事などすまい。エヴァは基本的に女・子供に手を出すような事はしないし・・・適当に魔法を放って終わりにする筈だ。

だから言うなればこの決闘は、エヴァがネギの事を知る為にやっている事なのである。

・・・と、そこに。

「サイさん、お疲れ様です」

茶々丸の声が聞こえた為に後ろを向く。

其処には茶々丸だけでなく明日菜と、彼女の肩の上にエロオコジヨことカモが居た。

「な・・・何よあれは・・・」

しかし・・・当の明日菜はエヴァとネギの戦いの方に目が向いていた。

爆発、橋を貫通する魔法の矢、傷を負うネギ・・・明日菜でなくても目が離せなくなるのは当然だ。

だが、戦いというものを知らない彼女にとっては目の前で起っている事はいかんともしがたい。

「ちょ・・・ネギ!!!」

サイ、アンタ何やってんのよ!?! どうして止めないの!?!」

「・・・止める? 何でだ?」

慌てている明日菜に対してサイは何処までも冷静に言う。  
さも当然のように言うサイに対して、明日菜は怒りを顕にした。

「何でじゃないわよ!!」

ネギはまだ10歳よ!? そんなアイツに一体何やらせてるのよ!?  
あのまんまやってたら取り返しのつかない事になるじゃない、それ  
なのに何で止めないのよ!!」

「・・・だからそれが何だ、貴様の言いたい事はそれだけか?」

熱くなる明日菜と真反対に淡々と呟くサイ。

いつもと違い過ぎる・・・いつものでしゃばり過ぎず、そっとネギ  
を見守っていたサイと全く。

憤怒とは逆に相手が冷静過ぎると途端に冷めて来る。

特に怖い程に冷静なサイの姿に明日菜の怒りはどこか急激に冷めて  
いく。

怒りが収まった事を理解したサイは再び淡々と呟き始める。

「良く見ておけ、明日菜。 覚悟決めた奴の本当の強さってのをよ。  
それにお前は唯、何も知らずにネギと仮契約とやらを結んだのかも  
知れんがな・・・。  
進もうとしている先は、今のお前の言ったような道理の通るような  
道じゃねえって事だ」

「・・・えっ?」

言っている意味が良く解らない。

聞き返す明日菜に対してサイはエヴァとネギの戦いの方を見ながら  
再び呟いた。

「魔法なんてモンを使う奴がネギのように皆お人好しだと思つか？  
違うね、かつて神なんてモンが人を救う為に齎せた“火”も、今や  
使い方を誤り戦に使われてる。  
火薬もそうだ、かつては炭鉱で崩落を減らす為に生み出された物が・  
・・今や人を殺す為に使われてる。  
・・・人と違う力つてのはまともに使おうとする奴も居れば、誰か  
を傷付ける為にしか使えねえ奴も居るんだ」

黙ってサイの言葉を聞く明日菜、そしてそんな表も裏も知っている  
カモ。

そう、力と言う奴は全員が全員必ず良い方向にばかり使う訳じゃな  
い・・・それを悪用しようとする者も半々だろう。

何故このような事をサイが語っているのか、その理由は・・・。

「・・・お前が進もうとしてるのはまさにそんな世界だ。

唯の一般人がテメエの勝手な考えで進んで良いような世界じゃねえ・

・・平気で人が殺し、殺し合うような場所だ。

そんな世界に覚悟もねえ一般人がホイホイ足を踏み入れるんじゃね  
えよ」

「・・・・・」

明日菜はサイの辛辣な言葉に何も返す事は出来ない。

いや・・・冷静になって痛感してしまった、目の前で起こっている  
魔法使い同士の戦いと言う物を間近で見せられて。

魔法なんてモノは拳銃と同じ。

相手に向けて引き金を引けば、相手に致命傷を与えるような代物。

それは決して優しいモノではない、下手をしなくても簡単に命を奪  
えるものなのだという事を。

「あつ……」

そこで明日菜は気付いた……何故、サイがこんな話を語るのかを。彼は“覚悟”や“誇り”というものを誰よりも重んじる人物である。覚悟も無く、ましてや流されただけで裏の世界と言うものに足を踏み入れる者の真意を問うて居るのだ。

それに簡単に中学生の少女が答えを出せる訳も無い。

そもそも外見的に考え、サイやらエヴァやらがそんな覚悟を持っている事がおかしいのだ。

(まあ、実際年齢は別としてだが……)

「ああ、それにもう一つ言い忘れた事がある」

その言葉に振り向く明日菜。

そこで見たサイは何処と無く寂しげで、何処と無く表情が暗い。

彼から放たれた言葉が、その表情の意味を教えてくれた。

「ネギがまだ10歳某とか言っていたよな。なにがし

俺は今のアイツぐらいより少し上の頃には……もう、人を殺してたぞ。

まあ望んで殺した訳じゃねえけどな……」

その言葉は、明日菜を、カモを凍りつかせた。

茶々丸だけは前回で望む望まないに関わらず過去を知ってしまい、痛々しい表情をしていたが……。

だからこそだろう……。

今から起こる事に茶々丸は気付けなかった。

そして……魂獣界から来たモンスターの気配を感じ取れる筈のサ



イも、その存在が持つ能力によって阻害されて近付いているのを気付けなかったのだ

一方、魔法同士がぶつかり合う戦場。全力で魔法を使い続けていたネギも、完全に封印から解放されていないエヴァにも限界が近付いていた。

「フン・・・互いに限界が近いか。」

ならば、これで終幕としよう！！ 全力で貴様の最強の魔法を叩き込んで来い、小僧！！

リック・ラク ラ・ラック ライラック

ウェニアント・スピリトウタタキアレス・オグスクランテース  
来たれ氷精、闇の精！

！！

この詠唱はサイと最初に戦った際に使った中位の魔法。

これを使うという事は彼女なりに戦いの中でネギの意志を感じ取り、そして認めただろう。

ネギもまた、真っ直ぐにエヴァの方を見ると残る全力を唯一つの魔法に注ぎこむ！！

「解りました、エヴァンジェリンさん！！

これがボクの・・・今のボク自身の全力です！！！！

ラス・テル マ・スキル マギステル

ウェニアント・スピリトウタタキアレス・フルグリエンテース  
来たれ雷精、風の精！

！！

ネギもまた唱えるは全力の、最も強い魔法。

エヴァの使わんとする中位魔法と同種の魔法だ！！

カム・オグスクラティオカピット・テンベヌターリス  
「闇を従え、吹雪け常夜の氷雪！！！！」

「クム・フルゲヲテイオーニフレット・テンベネメネネリーナ雷を纏いて、吹き荒べ南洋の嵐!!!」

二人の視線が重なる。

強力な魔力の本流は二人の両の手から流れ出し、オーラはまるで黒き龍と白き龍を模った。

「来るが良い、小憎オオオオ!!!!!!」

「はい、エヴァンジェリンさん!!!!!!!」

模った黒き龍と白き龍が巨大な暴風となり、手の平の前に集まった

そして最後の詠唱が二人の口から発せられる!!

ニウイス・テンベスターズ・オグスクランス

「闇の吹雪ウウウ!!!」

ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンス

「雷の暴風ウウウ!!!」

放たれた二つの暴風はぶつかり合い、凄まじい斥力を発生させ、周囲の物を吹き飛ばす。

黒き嵐と白き嵐はお互い一步も引く事無く押し合う……。

しかし、徐々に白き嵐が黒き嵐に押され始めた。

「(くっ……凄い力だ……)」

だ、ダメだ……打ち負けちゃう……やっぱりボクは、この程度なの……?」

諦めそうになるネギ。

だが……その背に怒号のような声が響く!!

「諦めるんじゃない、ネギ!!!」

テメエは……もう逃げねえって決めたんだろっが!!!

だったら信じろ！！ テメエ自身を・・・限界なんぞテメエ自身で  
ブチ破りやがれええええ！！！！！！」

その声に諦めかかっていたネギは眼を見開く。

そうだ・・・もう決めたのだ。 決してもう諦めない、決して逃げ  
ないと

「はっ・・・お兄ちゃん！？」

そうだ、諦めない・・・ボクはもう、絶対に諦めないんだああああ  
あ！！！！！！

ウ、ウオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

ネギの天を突くような気合の声。

両の手で、自らに残った魔力全て込め、全力で黒き嵐を押し返す。

格好悪くても良い、無様でも良い・・・持てる力全てを賭けて、全  
力でネギは魔力を解放したのだ！！

押し返された黒き嵐を見ながら、エヴァは嬉しそうに笑う。

「そうだ・・・それで良い。

貴様の父親、サウザンドマスター・ナギはどんな苦境でも笑って乗  
り越えた。

貴様もその血が流れているなら、最後まで諦める事だけはするな！  
」

エヴァもまた、両の手で白き嵐を押し返す。

二つの嵐は互いに強大な力を放ち・・・そして遂には相殺したのだ  
！！

相殺しあった魔法に、完全なまでの全力を出していた為か力尽きて  
倒れる二人。

直ぐにエヴァの方には茶々丸、そしてネギの方にはサイと明日菜が走り寄る。

「マスター!!」

「・・・心配いらん、茶々丸。

少しばかり魔力を使いすぎただけだ

だが、流石は“奴の息子

”だな」

ネギは完全に気を失っている。

強大な魔力のぶつかり合いによって服はボロボロだ・・・しかし、命に別状は無い。

「ネギ・・・しつかり!!」

「呼吸は安定してる、命に別状は無い・・・良く頑張ったな、ネギ」

身体には小さいが傷がかなりある。

小さいとは言え油断すれば其処から悪化してしまう可能性は無いとは言いい切れない。

「まあ、このまま放って置くのは良くないな。

悪いなキティ、お前の治療も直ぐにするべきなんだが・・・」

「フツ、気にするな。

茶々丸にでも治療してもらっから問題ない・・・それよりも、小僧の治療を優先してやってくれ」

その言葉に頷くと今度は明日菜の方を向く。

「明日菜、手伝え。

取り合えず上着を脱がせる・・・別に10歳の餓鬼に欲情もしねえ  
だろ？」

「私を委員長と一緒にすんなああ!!!!  
解ってるわよ、今脱がすからちよっと待ってなさい・・・よいしょ  
つと・・・」

服を脱がしてやりながら明日菜はサイの事を見た。

何だかんだ言いながらも、お兄ちゃんといって慕ってくれるネギの  
事は心配しているのだ。

自然と笑みが零れる・・・実に不器用な『お兄ちゃん』であると・  
・。

と、その時

「・・・なっ!？」

そうか、そう言う事か・・・全く、無茶しやがる奴だな」

珍しくサイが驚いたような声を上げる。

だが、直ぐにいつも通りの口調に戻ると傷の治療をした・・・。

「どうしたのよ、サイ？」

「・・・いや、何でもない。それより治療が終わったから早く服  
着せてやれ」

先程の驚いたような声を若干気にしつつも服を着せてやる明日菜。

これで今回の決闘は終わった・・・ゆっくりとサイは立ち上がると  
座り込んでいる明日菜に手を差し出した。

「・・・ありがとう」

その手に掴まる明日菜。  
そして立ち上がった明日菜に向かって服の埃を払いながら立ち上がったエヴァが言う。

「神楽坂明日菜、小僧が起きたら伝える。

お前の知りたがっていた父親の話、明日にでも話してやるとな。

朝に私の住むログハウスの近くにある喫茶店にでも来いとも伝えておけ」

「ああ、はいはい。

・・・てか、エヴァンジェリンも素直じゃないわね。 教えるなら始めから教えてあげなさいよ」

「・・・喧しい、それに馴れ馴れしく名で呼ぶな」

そんな態度を取りながらも本当はエヴァが優しい人物だと解った明日菜は微笑む。

ネギを背負い、寮の方へと歩き出そうとした・・・そう、すべては終わり、後は帰るだけだと思っていた。

まさにその時！！

『ウウウ・・・見付ケタ。

獲物・・・久シブリノ、獲物ダ・・・クヒヒヒヒヒ！！！！！！』

「・・・えっ？」

明日菜の目に映った不気味な化物。

突然の事に動く事が出来ない・・・度台ネギを背負ったまますばやく逃げるのも不可能だろう。

死神のような骨の姿の化物がゆっくりとその手に持った鎌を振り上

げても、明日菜は動けなかった。

だが　　その鎌は明日菜に振り下ろされる事は無かった。

急に視界が赤く染まると・・・次に見えたのは、小さな背中。  
銀髪の少年が鎌によって斬られ、血を噴出した姿だ。

その瞬間、明日菜の脳裏に見た事も無い光景が映った。  
大量の弓矢や魔法を喰らい、崩れ落ちる見た事も無い青年の姿が

「キ、貴様ハ・・・。

忌々シキ我ラガ怨敵、白面九尾ノ者力!?」

斬られながらも相手の頭蓋を掴むサイ。

白い着物のような服は鮮血に染まり、大きな傷と共に破れていたが・・・そんな事はどうでも良い。

そのまま手に力を加えると、相手の頭蓋を握りつぶした・・・!!

「クツ・・・どういう事だ・・・?

何故、何故気付けなかった　　あれ程近くに居たと言うのに・・・

「

切り裂かれた傷を手で押えながら呟くサイ。

傷はそんなに深くは無い、だがそれよりも問題なのはあれ程近くに魂獣界の怪物が居たと言うのに気付けなかった事だ。

サイはいつも気を抜いているように見えるが何処からでもモンスター

―が来たり、襲撃を掛けられる可能性を考慮して自らの周囲には常に気を配っている。

自らの見える範囲なら、ネズミが一匹入り込んだとしても見落とす事など無い筈だ……。

いや、もしかしたら一つだけ可能性というものは合った。

しかし、確かその魔獣達は消滅した筈だ。多大な犠牲を払い、一人の“語られる事なき英雄”によって。

その時 サイは思考に耽つてしまい気付いていない。

サイの後ろで、鎌のみが宙に浮き……サイを狙っていたのを

「サイ、後ろだ!!!」

「何!? 馬鹿な……まさかコイツ、鎌の方が本体だったのか!」

飛んで来た鎌はもう既にサイが避ける事の出来ない場所にまで飛んで来ていた。

このまま行けば致命傷は免れまい……なんとか避けようとしたその時、急に横から誰かに突き飛ばされたのだ……。

「きゃああああっ!!!」

サイを突き飛ばしたのは明日菜だった。

虚ろな、何処か遠くを見ているような……いつもとは違う目付きで、サイを庇ったのである。

刃は肩を抉り、下手すれば胸に届くほどに深い。まるで散華の如くに赤い血をばら撒いて……。

「テ、テメエエエエ!!!」



更に方向を転換してサイに攻撃を加えようとした鎌を消し飛ばす。急いでサイやエヴァや茶々丸が近付くと・・・明日菜は胸に負った傷で虫の息になっていた。

「馬鹿野郎・・・何やってんだテメエは!？」

俺なんざ庇いやがって・・・自分の身体や命を大事にしろ!!!」

急いでエヴァは倒れた明日菜に応急処置のような形で治療術を掛ける。

しかし・・・元々ネギとの戦いの際にだいぶ魔力を使い果たしていた今のエヴァでは、流れる血を止めるだけで精一杯だ。

・・・ふと、そこで明日菜が何かを呟いている。

「・・・ないで」

「喋るんじゃない!! 黙って体力を温存しろ馬鹿野郎!!!」

サイは怒鳴るが・・・明日菜は虚ろな表情のままに呟き続ける。

「行か・・・ないで・・・」

死なな・・・いで・・・私を・・・また・・・独りぼっちに・・・しないで・・・」

お願い・・・いだけ・・・ら・・・」

言っている事の意味は解らない。

唯このまま放っておけば、確実にこの少女の命は燃え尽きてしまうだろう。

「クソが・・・仕方ねえ!!!」

サイが思い付いた一つの方法。

それはこの絶望的な状況を救える唯一の方法だ・・・だがそれと同時に、何よりも苦しく辛い道行になってしまう可能性がある。しかし、今はもう迷っている暇などこれっぽっちも無いだろう。

「オイ明日菜、良いか・・・生きたいって強く願え！！

絶対に死にたくないって、こんな所で朽ち果てたくないって全力で願え　解ったな！？」

サイの言葉に虚ろだった目に光が灯る。

死にたくない・・・自分にはまだやりたい事がある、だからこそ死ねない。

その目を確認したサイはエヴァが止めようとするのも聞かずに明日菜の傷の上に手を置いた。

『我が内に眠る幾重の魂の欠片よ・・・』

その魂を今こそ我が眼前に現し、消え逝く命の灯火に再び光を！！！！』

その詠唱のようなものを唱え終わった瞬間

サイと明日菜が目が眩むほどに光り輝く・・・その余りの眩さに、エヴァも茶々丸も目を閉じてしまった。

そして光が収まった時・・・エヴァと茶々丸は目を疑った。

なんと今まで生きる事すらも絶望的に見えた胸に刻まれた明日菜の傷が跡形も無くなっていったのだ。

信じられない、あれ程の傷を跡形も無く完治させる事などは生半可所か上位の治療師でも不可能に近い筈である。

それを跡形も無く治してしまったサイのこの力は一体・・・？

「う、これは・・・？  
サイ、一体今の力は何なのだ・・・」

しかし・・・それに相反してサイの表情は悔しげで、悲しげで。  
本来ならばこの技法は決してやりたくなかった　誰よりもこの  
技法をやった先にある“現実”と言つのをサイは知っていたからこ  
そ・・・。

「・・・今は明日菜とネギを休ませてやってくれ。  
ゴッフ・・・明日、明日ネギがお前に話を聞きに来る時に全てを語  
るからよ」

口から血を吐き棄てると、傷を押えて歩き出すサイ。  
流れていた血はいつしか少なくなり、傷はサイ自身の身体に流れる  
法力によって再生する。

傷が無くなり、押える必要も無い筈なのにサイは唯傷のあつた所を  
手で押えながら歩き続けた。

この傷の治りの早さもまた、彼が自分自身で言つ“化物”の証だろ  
う。

夕日に向かつて歩いていくその後姿は、何処かいつもと違い遠く小  
さく見えた

## 第二十二話：信じてくれる者が居るのなら（後書き）

投稿完了です。

今回の話で一応、エヴァとネギの確執は終わりです。

・・・と言つても、エヴァは別にネギを憎んでる訳じゃなかったですけどね

何か途中のサイの台詞とかが大分グレンラガンみたいになってきてしまいました。

しょうがないじゃないですか、あれはマジで熱血ロボットアニメの中ではトップクラスの熱さですしね^^

・・・まあ、このクソ暑い時期に見ると自滅しそうになりますけどね。

さて・・・これで後1〜2話も書いたらついに一つ目の山場の修学旅行編です。

此処からはグレンラガン見たりした事により、結構熱い展開が多くなってくるかもです^^

皆様、どうぞお楽しみに^^

P.S.

今更ながらですが、感想を書いて頂いた方にこの場を借りてお礼申し上げます。

私の作品は二番煎じの駄作ですが、温かいご感想に胸の詰まる思いであります。

そしてお気に入り登録していただいた皆様。

ならびにこの作品を読んで下さっている全ての方々へ、感謝の念を。

このようなつじつまの合わない、自分の自己満足で書いている作品ですが・・・皆様がお読み頂いているという事が作者にとっての励みとなります。

まだまだ終わらせる心算はありませんが、最後まで皆様に楽しんで頂けるよう邁進致しますので応援宜しくお願い致しますm(・・)m

追伸？

さて・・・こちらは申し訳ございませんが皆様への作者からの質問です。

絶対に答えて頂く必要は御座いませんで無視して頂いても結構です。

もしお答え頂ける方がいらっしゃいましたら、お手数ですが感想の方にでもお書きください。

では初めてですが問います。

7/18発売の『神羅万象 七天の覇者 第二弾』にてサイと契約締結する者は大体決定しました。

そこで皆様に質問です、一応今の所はサイの契約相手&ライバル何人かを出す心算はありますが・・・他にも何人か出したほうが宜しいでしょうか？

A・出した方がいい(4~5人)

B・構うこたあねえ、どんどん出しまくれ!!(後々にさらにアンケートを)

C・まあ、その位で十分だろ(契約相手&ライバル2~3人以外は出さない)

ではお答え頂ける方がいらっしゃいましたら宜しくお願い致します。

by作者より。

第二十三話・少女の覚悟、幼き魔法使いの秘密（前書き）

ついに今回、隠されて来たネギ君の秘密が公開です。

・・・まあ、といっても気付いている人も多そうですがね。

## 第二十三話：少女の覚悟、幼き魔法使いの秘密

ネギとエヴァによる決闘より日は明け、次の日の朝  
サイはエヴァと茶々丸と共に、彼女が気に入って良く足繁く通って  
いるカフェテリアでお茶をしていた。

別に暇だったからとか朝食後のティーブレイクという訳ではない、  
三人は此処に来る筈の人物を待っていたのだ。

「ふむ、来たか」

買ったアイスコーヒーを一口飲むと呟くエヴァ。

その横には待っていた人物の姿を確認して頭を下げる茶々丸と、静  
かにブラックコーヒーを口に運ぶサイ。

彼ら三人の目線の先に居たのは・・・昨日エヴァと互角に渡り合っ  
たネギと、明らかに助からないような傷を負った筈なのにピンピン  
している明日菜だった。

「お、おはようございますエヴァンジェリンさんに茶々丸さん、そ  
れにお兄ちゃん」

「おはよう、三人とも」

ネギは昨日、伝言のような形で父親の事を教えてくれると言われた  
為か緊張気味だ。

その逆に明日菜はいつも通りに馴れ馴れしそうに、それで居ながら  
何処となくサイを意識するかのようになっている。

・・・見ればおかしな事に、明日菜の右手には包帯のようなものが  
巻かれていた。

怪我でもしたのだろうか？ いや・・・だが何処となくだが、サイ  
を意識する様に見てから自分の右腕に視線を向ける。

この包帯は何か、そして一体何があったのか？ その答えが出る前にエヴァが突っ立っているネギと明日菜に言葉を飛ばす。

「・・・いつまでそんな所でボーっと突っ立ってる心算だ。とりあえず座れ、話はそれからだ」

「あつ、はい、判りました」

ネギはその言葉に素直に従い、明日菜もまたゆっくりと座る。そしていざ、ネギが己が父親の話を聞こうとした時に明日菜とサイが同時に口を開いた。

「あのさ、サイ・・・ちょっと聞きたい事が・・・」「・・・明日菜、お前に伝えねばならん事がある」

タイミング良く言葉が重なった事により黙る二人。

どうやら二人とも、言いたい事を先に言わせる心算なのだろうが・・・結局どっちもが譲り合う為か肝心の話が始まらない。

・・・そんな態度を見ていたエヴァはため息を一つ吐くと、二人に向かつて言葉を吐いた。

「おい、貴様ら・・・いつまでお見合いして話のきっかけを譲り合ってる心算だ？」

話したい事があるのならとつとと話せ、こつちの話が一切合切進まないではないか」

その言葉に意を決したように明日菜が口を開く。

右手に巻かれた包帯を解きながらだ・・・。

「ねえサイ、聞かせて欲しい事があるの。」

昨日確か、私って何でか判らないけど・・・変な鎌が飛んで来た時



にアンタを庇って凄い痛みを感じて意識を失ったわよね？  
なのに次の日起きてみたら傷が一つも残ってなかったんだけど・・・  
もしかしてアンタが助けてくれたの？

それに・・・これ何だか判る？ 朝から石鹸で洗っても一切消えな  
いから取り合えず包帯で巻いて隠して来たんだけど・・・」

そう言っただけで包帯が解けた右手の甲をサイやエヴァ達に見える様に見  
せる。

そこにはまるでタトゥーのように何かを象った紋章のようなものが  
刻み込まれていたのだ。

紋章は何処となく、虎の顔を象っているようにも見えた・・・。

「・・・済まん、明日菜」

次の瞬間、サイは信じられない事をした。

何と・・・明日菜に向かって深々と膝を付き、土下座したのだ。

朝の早い時間とはいえ、生徒や一般人も疎らに居る・・・何があつ  
たのかと興味深く普通なら見るだろう。

まあ、先にエヴァが認識出来なくなる魔法を使っていたが・・・。

「ちよ、ちよつとアンタ、何やってんのよ!？」

あ、頭上げなさいよ・・・一体何なのよ一体!？」

突然の事に驚く明日菜、そして何の事だか判らないが慌てているネ  
ギに土下座の姿に何かを感じて邪魔せず声をかけないエヴァと茶々  
丸。

だが・・・彼のやった事は土下座して謝罪するだけでは済まされな  
い事だと言つのをサイ自身が良く解っている。

なぜならあのタトゥーのようなものは・・・“人を止めてしまった  
存在の刻印”なのだから。

「その刻印は・・・重症を負ったお前を助ける為に俺が刻み込んだものだ。」

スピリッツ・フェノメノン  
魂獣変生と呼ばれる、本来なら禁忌とされている技法・・・。  
アーティファクト  
命の灯火が消えんとする存在に、神具に封じられた魂の欠片を仮初の命として変質させるもの

サイの説明を補足するならこういう事だ。

つまり重症を負った存在に神具に眠る魂を宿られた事によって一命を取り留めさせた。

しかし、その代わりに神具の魂を人間に安定させる為に・・・その人間そのものの身体を半魂獣として変化させたという事。

その説明の答えはつまり

今の明日菜はもう人間ではない、どちらかと言えばサイ寄りの半魂獣と変わってしまったという事だ。

勿論、仮初の魂が明日菜自身の欠けた命を復元出来れば元には戻れるが・・・それが一体どれ程かかるかも解らない。

説明の補足をサイから聞かされた瞬間、明日菜の表情が凍り付いた。

「・・・弁解はしない、それしか方法が無かった。」

お前が気が済むように好きにしろ、どんな事でもその罰を甘んじて受けよう。

此処で死ぬというのなら、腹を搔っ捌いても構わない・・・それで許される等とは思っても居ないが」

そう・・・サイはこの日、覚悟を決めて来た。

例え命を落としかかっていたとしても、人間として未来を持っていた者を巻き込んでしまった事を。

一応いつかは人間に戻れるとしても、半分でも魂獣の魂が入り込み

変質すれば人間から化物として排斥される可能性は高いのだから。

だが、明日菜はサイに対して何もしない。

いや・・・寧ろ土下座してるサイに近づき、座り込むと小さく呟いた。

「・・・もう良いわよ、頭を上げなさいって」

「いや・・・だが・・・」

サイは困惑していた、明日菜のその態度に。

しかしそんな困惑など気にする事も無く明日菜は笑う。

「だからもう良いって言ってるでしょ？ あんまりしつっこいとアンタ、本気でぶん殴るわよ？」

理由や方法はどうかあれアンタは私を助けてくれたんでしょ？が、それを感謝しても何処に憎む必要があるの？

それにアンタのさっきの説明聞いたら、取り合えずいずれは元に戻るんでしょ？ だったら良いわよ」

いや、勿論これは彼女のやせ我慢だ。

良く見てみれば彼女の手は小刻みに震えている 当然怖いに決まっただけよ。

だが、彼女は知っている。己が不幸や運命を嘆いた所で現実は好転しないと・・・己自身が己自身で変えようと願わない限りはずっと不幸のままだとある人から教わった。

・・・その人物の顔すら今は思い出せないが。

「だからほら、この話はおしまい！！」

それに要はネギとしてた仮契約バックテイクつてのがアンタに変わったただけよ。ほら、だから早く立ちなさいってば」

「・・・済まない」

ただ小さく一言だけサイはそう呟く。

そして彼は明日菜を改めて『強い女だな』と認識してからカフェの席へと戻ったのであった・・・。

「・・・成る程な、重症の傷を治す代償にその身体自体を変質させているのか。」

道理で朝から神楽坂明日菜の気配が今までと違うと思った　し　かしサイ、問題は他には無いのか？」

「少なくとも身体能力は明らかに人間のそれを上回る。」

更に魂獣は法力が無ければ行動する事は出来ねえし　今は制御の方法を知らねえだろうから教えなきゃならねえ。

取り合えずしばらく法力の制御方法さえ何とか叩き込めば、後は普通に生活出来る筈だ」

サイが淡々と答えた後、エヴァは頷いてからネギの方を向く。

今まで語られた内容に驚愕し、言葉も無かったようだが・・・サイの話が終わったと解ったのだろう。

エヴァに質問を投げかけた。

「それでエヴァンジェリンさん・・・あの、父さんの事を教えて頂いて宜しいですか？」

「うむ、良からう・・・ついでに一タフルネームで呼ぶも面倒だろう、エヴァで良い。」

元々貴様の父親のナギ・スプリングフィールドは『サウンドマス

ター』と呼ばれ、間違いなく世界で一、二を争うような実力と人気を併せ持っていた文字通り“魔法世界最強の英雄”だ。

まあ、実際の所はどこまでもガキのような奴だった。しかもアホだったな、魔法など5、6個程度しか覚えていなかったし、アンチヨコが無ければ詠唱は唱えられないし・・・ああ、そう言えば魔法学校中退とも言っていたかな？」

「え、っ・・・そ、それ本当ですか？」

今まで抱いていた“英雄である父親像”と全く違う事に聞き帰すネギ。

しかしエヴァはゆっくりと頷き、続けて語りだした。

「まっ、魔力だけは桁違いにあつたぞ。

何せサイが来るまでの約10年以上、私はナギの落とし穴作戦によって捕まっていたいい加減な封印掛けられたからな。

お陰で10年もの間、中学生を経験するというしたくも無いような事をさせられた」

そこで重い口調に変えると小さく呟く。

・・・思えば、彼女は例え情を深めても学園から出る事が出来ないというジレンマの中で孤独に壁を作って生きて来たのだろう。

外見はネギと同じ年頃だが、その雰囲気はサイと同じく年不相応な表情を滲ませていた。

「・・・十年前に奴は死んだ。

いつか私の呪いも解いてくれる約束だったが、まあくたばったのなら仕方あるまい。

幸いにもサイのお陰でその呪いは解除されたのだが、全く以つて、勝手に死ぬなどバカな奴め・・・」

その表情は時々サイが見せるのと同じく悲しげな目をしていた。だが・・・そんなしんみりした雰囲気<sup>マギ</sup>をネギの一言が変える。

「でもエヴァンジェ・・・「エヴァで良いと言った筈だが？」・・・は、はいエヴァさん。」

でもボク、父さんと サウザンドマスターと会った事があるんです、しかも6年前に・・・」

その言葉を聞いた瞬間、エヴァの表情が変わった。

驚愕の表情をいつもの自信満々の表情に貼り付け、声を荒げて言い返す。

「・・・何だと？ 今話を聞いていなかったのか！？」

奴は確かに十年前に死んだ！！ お前は奴の死に様を知りたかったのではないのか？」

「違います！ 大人はみんなボクが生まれる前に父さんは死んだって言うんですけど。」

6年前の雪の夜、ボクは確かにあの人に会ったんです・・・その時に貰ったのがこの杖で

だからきつと父さんは生きてます、ボクは父さんを探し出す為に父さんと同じ“立派な魔法使い”<sup>マギステル・マギ</sup>になりたいんですよ」

ネギのその目は確信の光が宿っている。

どうやらネギの勘違いではない 何処に居るかは解らないが、少なくともナギは生きているのだから。

「そうか・・・奴が生きているか。」

そうか、そうだな あの男が簡単に死ぬ筈が無い、そんな事を

なぜ私は忘れていた？」

静かに、それで居て嬉しそうにエヴァは呟く。

気持ちは解らなくも無い・・・横で聞いていたサイもそう考えていた。

無くなった筈の人物が生きていた。

そのような奇跡が本当になれば言葉では言い表せない程に嬉しい事だろう。

少なくともサイもそうだ・・・記憶なき己であっても、もし例えば己の家族が“生きていたとしたら”これ程に嬉しい事はない。

・・・最も、彼の脳裏には強く“それは決してない”とも刻み込まれていたが。

「ふむ・・・そう言えば坊や。

奴を探すといつても手掛かりに心当たりはあるのか？ 大方、その杖位しか手掛かりは無いのではないか？」

ネギからサウザンドマスターが生きていると聞かされたカフェからの帰り道。

唐突にサイの横を歩いていたエヴァがそうネギに対して問いかけた。その問いに対してネギはバツが悪そうに呟く。

「はい、その通りです・・・」

「フン、だろうと思ったよ。

ならば京都にでも行ってみると良い どこかに一時期、奴が住んでいた家がある筈だ。

奴が死んでいないというのならそこに何か手掛かりがあるかも知れんしな」

サイはエヴァの『京都』と言う言葉に首を捻る。

当然だ、サイは麻帆良に来てから一步も学園都市の外に出た事は無い。

そんな彼が京都などと言う場所を知る訳も無いのだ。

「サイさん、京都とは日本で有名な古都の一つです。

日本文化やお寺、神社、仏閣などに秀で、数々の文化遺産が存在する美しい町並みを擁しても居ますよ。

麻帆良も美しい風景は多いですが、京都はそれ以上でしょう」

「ほお、此処以上に良い風景があんのか。

そりゃ一度見てみてえな、俺は麻帆良に来てから一步も外に出た事はねえし・・・」

見た事の無い古都・京都へと思いを馳せるサイ。

一方、父親の手掛かりが京都にあるのではないかと言われたネギは嬉しいやら何やらで慌てていた。

「き、京都!? あの有名な!?

・・・ええつと、日本のどこら辺でしたっけ!? 困ったな・・・  
休みも旅費もないし・・・」

だが、そんなネギを見ながら明日菜は微笑んで呟く。

「へー、京都か。

ちよつと良かったじゃん、ネギ。 ねえ、茶々丸さん?」



頷く茶々丸　そしてサイに『サイさんの願いは直ぐに叶うと思いますよ』と意味深な言葉を呟く。  
その言葉の意味を解らないサイとネギは首を捻るばかりである。

話を終わらせたサイ達はそこで別れる。

用事があるという明日菜には『明日、世界樹広場の近くにある森林にバイト終わらせたら来い』と伝えた。

更にエヴァは家に帰ってもう一眠り、茶々丸は猫たちの餌やりと口グハウスの庭のガーデニングをするらしい。

・・・という事で必然的にサイは、ネギと行動を共にする事となったのであった。

＼Side　エヴァ＼

「フン、あの馬鹿が生きていた、か・・・」

まあ当然だろうな、ククク・・・アハハハハハ！！！」

自宅に帰ったエヴァは実に終始ご機嫌であった。

先ほども書いたが、死んだと思っていた者が生きていたのだから当然と言えば当然だろう。

「へエ・・・随分機嫌良イジャネエカ御主人。」

マア、今更アノ非常識野郎ガ生キテモ、全クト言ツテ良イ位ニ不思議ジャネエケドヨ」

帰って来た後に茶々丸からエヴァが機嫌が良い理由を聞いていたチヤチャゼロはそう呟く。

そんな機嫌が良いエヴァに対して、珍しく複雑そうな表情で茶々丸が尋ねた。

「マスター……あの、その……。  
マスターにとってサウザンドマスターは大切な人だったと存じてお  
ります。」

ですが……マスターは過去と決別してサイさんと共に生きていく  
のをお選びになられたのでは……？」

その質問にエヴァは直ぐに返す。

「ん？ 勿論、過去と決別してサイと共に進むさ。」

考えても見る茶々丸、確かに一方的だったにしても10年間もの間、  
人の事を忘れてたような輩を選ぶと思うか？」

エヴァの言葉に迷いも虚偽も一切ない。

そう、彼女はもう既に選んでいるのだ……それに、彼の過去を垣  
間見てしまった時に答えは既に決まっていた。

己から孤独に生きる道を選び、憎まれようとも誰かの為になるよう  
に事を運ぶ、何処までも優しく何処までも不器用な馬鹿。

そんな苦しみを背負い生き続けている漢を、同じように運命の悪戯  
によって人生が変わってしまったエヴァが放つては置けない。

そして過去を見た際、彼女は気付いた。

確かにサイは昨今稀に見る事無いような良い男だ、それこそ彼に惹  
かれる理由が解る程に。

だが……彼を愛するという事は彼にとって“重荷”にしかならな  
いと言う事も。

だからこそエヴァは、性別を超えた親友のような関係を取り……  
共に居る事を選んだのだ。

「まあ再び奴と会った時に驚かせてやるのが私の今の目標だ。」

己が光り輝けといった奴がどれだけ魅力的になったか、そして10年前に私を選ばなかった事を後悔させてやる。そしてもう、今更私に惚れても遅いという事もな」

明日へ、未来へ……。

止めていた時計の針を動かし、前を向いて進むと誓ったエヴァはもう昔の様な暗い表情は見えない。

その事が茶々丸にとっては嬉しくもあり、己の“心”の選んだ事に気付いて居ない為に悲しさも感じていた。

その後、エヴァは寝直すのではなく茶々丸を連れて買い物へと出かけた。

何だかんだ言いながらも、来週からこの住み慣れてしまった麻帆良から出られるのが嬉しいのだろう。

……来週から始まる、修学旅行が。

Side out

Side 明日菜

「はぁ……さつきはああ言ったけど……」

サイ達と別れた明日菜はトボトボと歩きながら溜息を吐く。

先ほどは気にするなと自分で言った事だが、気にならない方がおかしいだろう。

思えばほんの少しの間に色々あった。

自分の憧れの先生は担任から副担任になり、代わりに赴任して来た

のは子供の先生。

更に女子校なのに何故かチンピラのような口調の男子生徒は編入され、しかも出会った最初の日にそのチンピラ生徒と子供先生が“魔法使い”などという存在だと言う事を知ってしまった。

その日から始まった賑やかでとんでもない事が続く日々。

だがそんな中で口は悪くも優しいサイと直向に頑張ろうとするネギを見て、最初は追い出そうとしていた明日菜も変わっていく。

そしてある日、ネギの元に現れた一匹の変態小動物により明日菜は裏世界へと足を踏み入れた。

まあ、実際の所は嫌だったのだが・・・変態小動物に『中三にもなつて初キツスも済ましてないのか』などと挑発されて自棄になり、ネギの『一回だけで良いから手伝ってください』と言う言葉に押されて渋々仮契約をしたに過ぎないが。

・・・しかも本来は唇にしなければならぬ所をおでこにキツスタた為に中途半端な契約となってしまうた。

結局流されただけで裏の世界、つまり命の遣り取りをするような世界に入り込んでしまった。

それについて覚悟の意味をエヴァとネギとの決闘の際にサイから考えさせられる。

・・・そして無意識に彼を庇って、今度は否応なしに裏の世界から足を洗えなくなってしまったのだ。

「・・・でも、何であの時に私、サイを庇ったんだらう？」

明日菜は聖人君主ではないしヒーローでもない。

それどころか少しだけ足腰が強く、バイトして学費を払っている唯の苦学生に過ぎないのだ。

命の危険があれば真っ先に逃げる、それが普通なのだから。

しかしあの時

サイに鎌の刃が当たりそうになった瞬間、彼女は自らの事など垣間見ずにその刃の前に身を晒した。

意思で考えた訳ではなく、唯本能的に……。

「あゝ、もう！！ 私は元から頭使つの苦手なのよね！！

もう難しい事考えたって答えが出ないんだからヤメヤメ！！

……それにずっとこのまんまじゃないってサイも言ってたし、私には私に出来そうな事をするだけよ」

……彼女は強い。

己が例えは何か巻き込まれば、腐って自分の不幸を嘆く者の方が多い。

だが、それを嘆かずに居れる者など少ないだろう。

しかしそれは……彼女が今まで生きてきた中で見つめて来た“あの背中”のお陰だ。

明日菜は事情は説明出来ないが、実は小学校以前の記憶が何故か抜け落ちている。

その失われた記憶の中に、どのような苦境でも下を向かず上を向いて命の限り信念を貫いた一人の漢がいたのだから。

記憶は失われようと、その漢の生き様は無意識に脳裏に刻み込まれているのだから

Side out

一方、その頃。

気ままに麻帆良の散歩をしようと思ったサイは、途中までネギと共に歩いてきた。

「うーん、しかし来週に何かがあるのかな？」

それに父さんが住んでいた所か、父さんを見つける為の手がかりになれば良いけど・・・」

一人で大きな声で独り言を言っているネギ。

その横を無言で、時よりネギの表情をチラッと見ながら歩き続けるサイ。

・・・この様な態度はサイにしては実に珍しい。

そんな雰囲気気付いたんだろう。

ネギはサイの方を向くと首を捻りながら尋ねる。

「お兄ちゃん、さっきからどうしたの？」

何だかいつもと違って変だよ・・・何かあったの？」

「・・・いや、別に何でもねえ」

サイの態度がいつもと違うのは昨日からだ。

しかし、サイの態度がおかしい事の理由が解らないネギはしきりに首を捻るばかり。

エヴァと戦った事を怒っているのか？

いや、それは違うだろう・・・少なくともサイは昨日、戦っていた際に激を自分に向かって飛ばしてくれた。

更に昨日の決闘は自分からではなくエヴァから挑んで来たものだ、怒る理由など無いだろう。

一般人の明日菜を巻き込んだ事か？

それも違うだろう、確かにサイは戦いに関係の無い者を巻き込む事を何よりも嫌う人物だ。

しかし、それをいつまでもネチネチと言い続けるような性格でない事は何度も見て来て知っている。

意外にクールに見えて内はさっぱりして、更に熱い漢なのだから。

理由を考えても考えても結論には行き着かない。

意を決したネギはサイに対して『何故、いつもと態度が違うのか？』と問う。

・・・そこでもさか、前回の戦いの際に彼が知ってしまったネギの秘密を語られるとは思っていなかったようだ。

「・・・ネギ」

「ん？ 何、お兄ちゃん？」

神妙な面持ちでネギに言葉を飛ばすサイ。

ネギは聞き返すと、次に語られた言葉に言葉を失った

「・・・なんでお前、男のフリしてんだ？」

次の日の朝

刹那と対峙して実戦形式で稽古を付けてやっているサイ。

しかしその脳裏には、昨日のネギの慌てていた姿が思い出されていた・・・。

Side 昨日

「お、おおお、お兄ちゃん!?  
だ、だだだだ、誰に、誰にそれ、き、聞いたの!？」

「いや、誰に聞いた訳じゃねえし・・・元々どっかおかしいなとは思っていた。

実際に気付いたのは昨日、エヴァとの決闘が終わった際にお前が大分傷負ってたから治療してやろうと思って服脱がした時だ。

・・・ああ、ちなみに脱がしたのは明日菜だから心配すんな」

そう、サイがネギが『男』ではなく『女の子』だと気付いたのは昨日の事だ。

それまでもネギの歩き方やら雰囲気やら匂いやらと言ったもので男ではないように感じていたサイ。

それが昨日、手当ての為に明日菜に頼んでネギの服を脱がしてもらった際に・・・本来、男性ならばあるべきものが無かった。

更にもう一つ、サイが気付いている事があった。

それはどのような状況でも、戦いの中でも・・・無意識にだろっが、ネギは己の顔に傷が付かない様にしていたのだ。

言うなれば顔を守ると言うのは女性の生物学上の無意識の行動である。

(ちなみに17〜8歳位になると、顔と腹を無意識に庇うようになっていくらしい)

その言葉を聞いた瞬間、ネギは泣きながらサイに言う。

「お、お兄ちゃんお願い!!」

お願いだから・・・お願いだからボクが“女の子”だったのは誰にも言わないで!!



ボク・・・ボク・・・それを知られちゃったら・・・」

「・・・馬鹿かお前は。

安心しろ、始めから人の隠してえような事を他人に言い触らす心算なんぞサラサラねえよ。

まつ、何だか知らねえし興味もねえが・・・それ相応に事情って奴があんだろ？

だが成る程ねえ、道理で木乃香があんな事言ってた訳だ」

実は少し前だが、木乃香が『ネギ君っていつも一人でお風呂入ってるみたいやけど、寂しゆうないんかな？』などとぼやいていた事がある。

また他の人物もぼやいていた事だが、ネギと一緒に風呂に入ろうとしたら信じられないような力で抵抗されたいらしい。

「だが一つだけ忠告つつうかお節介を言っとくぜ。

女の身の上で男のフリして生きるってのは随分キツイ事だろうな・・・。

だからこそ、ちったあテメエ自身の身体を労われよ　俺にゃあ

事情が理解出来ねえからそれ以上の事は言えねえけどよ。

我武者羅に進むのも嫌いじゃねえが、テメエみてえなガキの内は誰かに頼るのも悪い事じゃねえ」

それだけ言つと他には敢えて問う事も聞く事もせず背を向けて手を振って散歩に向かうサイ。

「・・・おにいちゃん、ありがとう・・・」

不意にそんな言葉が後ろから聞こえた。

Side out

「・・・いさ・・・サイさん!!」

「ん？ ああ、何だ刹那か。どうかしたのか？」

「どうやら考え事をしていたらしい。

そんな上の空の状態でも一撃も攻撃が当たらないのは流石はサイと  
言うべきか？」

「どうしたかじゃありませんよ!!」

「何だか急に黙り込んだと思ったら上の空になって・・・その状態でも  
も攻撃が当てられない私の身にも成って下さい!!」

剥れている刹那・・・。

「そりゃあ、朝一から稽古をつけて貰っているのに上の空では流石に  
拗ねるのが当然だ。

特に最近、武道四天王と呼ばれる他の三人（古、楓、真名）が度々  
朝の稽古に乱入して来ていてピリピリしていた所もある。

・・・彼女はまだ、サイに恋している事には気付いて居ないのだから。

「ああ、悪かった。

「んじゃ、こっからまた真面目に・・・」

しかし、その言葉がサイの口から全て語られる事はなかった。

彼の目線の先に現れた一人の赤髪でオッドアイの少女の姿を見つけ  
て

「おはよう、サイ。

「アンタに言われた通り・・・来たわよ」

雰囲気、目を、表情を見て解った。

明日菜は力の制御の為だけに来た訳では無い事が。そんな明日菜に向かって、サイは静かに呟く。

「・・・そうか、決めたんだな。

でも良いのか？ お前の選んだ道は前にも言った通り『優しい道』じゃねえぞ。

下手すれば途中で死ぬかも知れねえ、そうじゃなくても一生残るような深い傷を負うかも知れねえ。

本当に・・・それでも良いんだな？」

サイの問いに明日菜は確りと頷く。

「覚悟とかなんかかってのはまだ良く解んない。

でも、私はその答えを選んだんだから・・・私に出来る事をするだけ、それだけの事よ」

明日菜の答えを聞き、深く頷くサイ。

その言葉はかつて、己の呪われた宿命をぶち破り生きた・・・サイの大切だった人物の一人が言っていた言葉と同じだ。

そしてこの日から、サイによる明日菜の仮初の魂獣の力を使いこなす為の訓練が始まった。

時は春の風が過ぎ去り、夏の熱き風が吹き出し始めた季節。

色々な事が起こり、色々な事情を知り、それでも前へと突っ走っていく。

そしてこれが、次なるサイの戦いが始まる一週間前の出来事であった。

## 第二十三話：少女の覚悟、幼き魔法使いの秘密（後書き）

投稿完了です。

始めからネギ君のTSは考トランスセクシャルえていました。

その為に彼、と書きたい所を名前を書いたり、一人称を僕 ボクなどに変えていました。

何故、ネギ君は性別を偽って生きなければならないのか。

そこら辺の話はまだまだ先、の魔法世界編で明かされますので・・・取り合えず今は“ネギ君は女の子だった”という事実だけ覚えて置いて頂ければ結構です。

まあ、今回もつじつまが合わない部分が多かったかもしれませんがご勘弁を。

それではこの辺で、次回も宜しくです^^

## 第二十四話：孤独の苦悩

「・・・えっと、お主本気かの？」

「ああ、大マジだ。

ジジイ、その間は私の力を今以上に制御させてやるから感謝しろ」

学園長室に珍しく人影が多い・・・。

サイがネギの秘密を知り、エヴァがサウザンドマスターが生きている事を知り、明日菜がある種の覚悟を決めた次の日の学園長室の光景。

本来はネギが呼び出されただけだったが、偶々そこにエヴァとサイと茶々丸が鉢合わせしていたのだ。

「しかし・・・お主が自らの力を封印させてまで京都に行きたがるとはもう。

どう言う風の吹き回しじゃね？　そもそも10年以上も中学生をやっておるから、こつ言った行事には興味が無いのではなかったかのう？」

本来、10年以上も中学生を無理矢理やらされていたエヴァにとって興味の無い話だと学園長は思っていた　　そんな彼女が「別に力封印して良いから修学旅行に行かせる」などと言えば流石に面食らうだろう。

そう・・・来週から京都に行けると茶々丸や明日菜が言っていた理由とは、麻帆良学園中等部が来週から行く修学旅行の事を指していたのだ。

「やかましいわ、ジジイ。

そもそもこの私が、マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使いにして闇の福音と呼ばれたこの私が直々に『行事中は力を封印して良い』と言ってやっているのだ。それで問題はあるまい、寧ろそれ以外に問題など何処にある？ 実際に私の顔を知る者など殆ど居ないしな」

確かにそうだ、エヴァは昔は基本的に幻術を使って別人のような姿をしている事が多かった。

その為、現在の彼女を『闇の福音』だと知っているのは学園長から教えてもらった麻帆良の魔法先生達かナギ達『紅き翼』のメンバーにそれに関係していた一部の本国の上層部位のものだろう。更にサイとの出会いによって口は悪いが優しくなり、魔法を行事中は封印しても良いと言っただから問題はないと思われる。

エヴァの言葉に学園長はほんの少しだけ小さく微笑むと大きく頷いた。

「まっ、良いじゃろ。」

どこの誰かのお陰で全てを拒絶していた頃とは全然変わったようじゃしな、楽しんで来ると良い。

その間は此処の結界はわしが更に強化しておくから侵入者の方も心配せんで良いぞい」

その言葉を聞いたエヴァは『当然だ』と胸を張る。

壁際に居たサイと茶々丸は話が終わったようなのでエヴァと共に帰ろうとした。

・・・と、その時。

「ああ、サイ君。」

悪いがのう、お主とネギ君にはもう少し話があるのじゃよ・・・良  
いかの、エヴァ？」

学園長の言葉……そこにネギとサイが呼ばれている理由。その事に心当たりがあるらしいエヴァは『フン、早く返せよ』と言だけ言つと茶々丸と共に学園長室から出て行った。

「おい、ジジイ……用件は何だ？」

俺はこれからその『修学旅行』とやらの準備の為にキティ達に付き合わなきゃならねんだ。

長つたらしい茶飲み話だつたら御免被るぜ」

相も変わらず無礼な物言いである。

まあ、もうとつくにそれに慣れてしまっている学園長としては気にせず微笑んでいたが。

だが、そこで急に真面目な顔になると話し始めた。

「うむ、実はのう……修学旅行の京都行きの場合、先方が難色を示しておるんじやよ。

じゃから京都が駄目だった場合、必然的に修学旅行の行き先は八王子に……」

「え、えええええ！？」

じゃ、じゃあ修学旅行の京都行きは中止ですかあああ！？」

そ、そんな……きよ、きよと……きよと……」

学園長の台詞を遮ると見るからに落ち込んでしまうネギ。

バックにはどんよりとした縦線効果を背負い、大丈夫だろうつかと言いたくなる程の落ち込み様である。

と、サイが手で学園長の言葉を制するとネギの近くまで歩いていって頭の上にチョップを落とした。

「・・・鬱陶しいんだよこの馬鹿。  
つつかテメエ、早とちりしねえでジジイの言葉を最後まで聞け。  
あんまりアホな事ばっかやってつとぶん殴るぞ?」

とつくに攻撃しておいて酷い言い草である。

「痛っ!?! も、もう殴ってるじゃんかお兄ちゃん~~~~!!」  
「心配すんな、これはチョップだ」

完全にじゃれ合う兄弟である・・・いや、兄妹か?  
そんな二人に、特に勘違いしているネギに学園長は説明をする為に  
声をかける。

「コレコレ、喧嘩は止めなさい。  
それにネギ君、まだ京都市行きが中止となった訳ではないぞ。  
唯、先ほど説明した通りに先方がかなり嫌がっておつてのう・・・」

「先方? 京都の市役所とかですか?」

先方と言う言葉の意味が解らず、取り合えず市役所などと言ったもの  
が難色を示していると思つたネギ。

しかし学園長は首を横に振ると、この麻帆良と京都にある“ある関係”  
の説明を始めた。  
・・・ちなみにサイが興味無さそうに欠伸をしていたのは言うまでも  
無い。

「いや、うーむ・・・何と説明すれば良いやら。  
難色を示してきた先方と言うのは『関西呪術協会』と言つてのう。  
実はわし、此処(麻帆良学園)の学園長と『関東魔法協会』の理事



も兼任しておるのじゃが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてな。

今年は一人、魔法先生が居ると言ったら修学旅行での京都入りに難色を示してきおったんじゃよ」

手短に説明すると、日本は東西で魔法と呪術と言う二つに分かれている。

東は学園長が理事を務める『関東魔法協会』と呼ばれる一般的な魔法使いが属す組織。

そして西は『関西呪術協会』と呼ばれる呪術師や陰陽師に式神使いなどと大別される者達が属す組織が存在する。

この二つは昔から考え方が違う事により対立していた。

まあ正確に言えば関西呪術協会が一方的に関東魔法協会を毛嫌いしているとも言えなくもないが……。

学園長も、そして関西呪術協会の長もそのような関係を改善したいと努力しているようだが効果は成されていないのだ。

「え？　そ、それじゃあ……ボクの所為って事ですか！？」

京都行きが自分の所為で駄目になったのではないかと思い落ち込むネギ。

しかし学園長はゆっくりと首を横に振ると続きを話し始めた。

「フオッフオッフオ、まあ聞きなさい。

わしとしてはもう喧嘩は止めて西と仲良くしたいんじゃ。

その為にネギ君は特使として西に行つて、この親書を西の長に渡して貰いたい」

そう言うと学園長は封書を取り出して机の上に置く。

更にネギに・・・いや、此処からは寧ろサイに伝えるように説明を続けた。

「道中で西の妨害があるかも知れんが、向こうにもこちらの『魔法の秘匿』と同じような制約があるから生徒達や一般人に迷惑や危害及ぶような事は“基本的には”せんじやろうが　　ネギ君には中々大変な仕事になるじやろ・・・どうじやな、やるかね？」

ネギは一度サイの方を見る。

頭の良いネギだ、此処にサイが居ると言う事は多分自分をサポートさせる為にサイにも情報を聞かせたのだらうと言う事は解った。受けるか受けないかはネギの気持ち次第となるだらうが

「やりてえならやりやあ良い。

一応、面倒だがフォローぐらいはしてやるからよ」

サイのその言葉を聞いて一度目を閉じて考えるネギ。

自問自答の末、彼女・・・いや彼は親書を手に取ると答えを出した。

「解りました、この任務お引き受けいたします。

任せてください、学園長先生」

その目は何処と無くサイの目に似て、真っ直ぐで何処と無く輝いて見える。

そんな初々しいネギの姿をまるで孫を見るかのような目で見ていた学園長は一つ言い忘れた事を思い出した。

「おお、そうそう。

ネギ君、京都と言えば孫娘の木乃香の生家があるのじやが  
実はわしは良いのじやが、アレの親の方針で・・・魔法の事はな

るべくバレない様に頼むぞい。

・・・まあ、サイ君の場合は言うまでも無いようじゃがの「

「は、はい、わかりました」「・・・フン、当然だ」

ネギはそう言うと大切そうにスーツのポケットに親書をしまつ。

サイの場合は元々裏に関係ない者を巻き込むのを嫌うのか一言呟いただけだった。

二人の返事を聞いた後、学園長は言う。

「うむ、では修学旅行は予定通り行つ事としよう。

頼むぞネギ君、そしてサイ君・・・」

学園長の言葉に頭を下げるネギ。

いざ学園長室からサイと共に出て行くことになると、サイが口を開いた。

「ネギ、悪いが先に帰つてろ。

俺はちとジジイに聞きてえ事があるんでな」

その言葉にネギは『うん、解つたよお兄ちゃん』と一言返すと部屋から出て行った・・・。

「フオ？ 聞きたい事とは何じゃね？」

学園長はネギが去り、一人だけ部屋に残つたサイに問い掛ける。

ある程度サイが聞きたい事は想像が付いていた・・・寧ろ、一見馬鹿に見せているが察しの良いサイなら先ほどの言い方で解るだろう。

「・・・とぼけんなジジイ。」

さつき言つてたよな・・・“基本的には”その関西呪術協会って奴らが生徒や一般人には危害加えねえって。じゃあ“基本的じゃない奴ら”ってのは一体何だ？」

学園長はサイの問い掛けに一度口を閉じた。

少しの逡巡の後、いつもの惚けた口調とは違う重い口調で語りだした・・・。

「サイ君、これは君を見込んで話す事じゃ。

実は、木乃香は先ほども言った通りに両親の意向で魔法の事は一切切知らされておらん。

じゃがあの子には皮肉にも強大な魔力が宿っておるんじゃ、それも日本で最大級の魔力がな・・・」

思えばサイはおかしいと思っていた。

麻帆良に侵入しようとする者達・・・それは人であれ、化物であれだが・・・その多くは木乃香を狙っていた。

しかもその連中は随分と手誰であり、エヴァや茶々丸や刹那や真名などと共に戦つても梃子摺つた事が何度か合ったのである。

・・・たかが『関東魔法協会の理事の孫娘』を攫う程度に、それ程の実力者を使う理由などあるまい。

学園長の言葉でサイは大体の事を察した。

本人は気付かずとも持ち合わせている強大な力に対して人間が取る行動とは二つだ。

それは即ち 『畏怖』か『利用』のどちらかである。

「それに、元々ネギ君には言わなんだが・・・。

関西呪術協会の長と言つのは実はわしの娘婿、つまりは木乃香の父親が勤めておるのじゃ。

その媚殿が木乃香が魔法や呪術と言った裏の世界を知って欲しくないという意向でこの麻帆良学園に行かせたのじゃが・・・その行為を快く思っていない輩もある」

「成る程な、つまりはこういう事か。」

この修学旅行を利用して木乃香を攫い、日本最大級の内包する魔力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうとしている馬鹿が居る、と・・・  
。チツ・・・何処にでもクソ野郎ってのは居るもんだな、反吐が出るぜ」

吐き捨てるように言うサイ。

大方利用され、利用され続けた拳句・・・最後には用済みとして処分される。

そんな勝手な事を、下種の類は平気でするだろう 気付けばサ  
イの覇気で学園長室の机が揺れていた。

「・・・で、俺に何をやれつつうんだジジイ？」

大体内容は解る。

いや寧ろ・・・彼は自分にはそれしか出来ないと思っっている。

そんな彼に対して学園長は一瞬だけ悲しげな表情をするが 真  
面目な表情のまま言い放った。

「木乃香を利用してしようとする輩にとって、関東・関西が互いに手を取り合うのは不利じゃ。」

よって確実に今回の修学旅行ではネギ君が持つ親書が西の長に届く事を阻止したいじゃろうし、それと同時に木乃香を手に入れようと強行手段に打って出てくる。

その事を利用して、彼奴らを一網打尽にして欲しい・・・方法は問

わんよ」

その言葉を聞いた瞬間、サイの目付きが獰猛な獣のように鋭くなった。

そして学園長に最後に一つだけ問いをぶつける。

「Dead or Alive（生死は問わない）・・・で、良いんだよね？」

また一瞬の逡巡の後

学園長は静かに頷いた。

「フン、通りで話が長い訳だ。

しかしジジイがお前にそんな依頼を頼むとはな、孫娘を利用されようとしているのが随分頭に来たようだ。

坊やには親書を頼んだのは・・・せめてもの優しさか？」

学園長室で話を終わらせたサイはその足でエヴァの所に向かう。

何せ、この後で美空の買物やら教会の買出しやらにも付き合わねばならないのだから当然だ。

その道行きの途中にエヴァから遅くなった理由を聞かれ、止められても居なかつたので内容を話した。

「・・・アイツにや、いざと言う時の事は出来ねえだろ。

それに刹那達に重荷を背負わせる訳にも行かねえ・・・真名のあの雰囲気なら“戦場”に行った事あるだろうがな。

だが・・・んな“汚れ仕事”を、中学生やらガキやらにやらせる訳には行かねえよ。

だから必然と俺の所に回って来ただけだろ」

重い事を軽く言うサイ。

・・・学園長も実際は悩んでいないように見えるが、サイにそんな事を頼んだ事は苦悩の結果だ。

だが、上に立つ者とはそのような苦悩を乗り越えて選択を迫られなければならないのが現実である。

事実、学園長はサイのした事により“起こる全ての事に責任を取る”という考えで居る。

「フフフ・・・だが、ジジイのそう言った部分に私は共感が持てる。やれ正義の為だの何だの言っているつまらん偽善者共と違い、大切な者達の為になら喜んで鬼になれるような人物だからな」

頷くサイ・・・まあ、学園長は普段はお茶目でいらん事をする人物だ。

それでもそう言った結論を出さねばならない時はしつかりと出し、その上で起こるリスクなどは全て自分が甘んじて受け入れるというのが彼のスタンス。

・・・どちらかと言うと学園長もサイのようなタイプの人間なのだ。

「・・・ん？」「何だ、どうしたサイ？」

ちょうどその時、サイは変わった光景・・・というか変わった人物を見つけた。

それはサイの目線に入った二十メートルほど先に見えるコンビニエンスストア　そのコンビニに向かって気ままに歩みを進めるサイ。

別にコンビニになんぞに用事はない。

気になっているのはコンビニの目の前に所在無さ気にポーっとして

いる人物が気になったのだ。

白くて長い髪、古風なセーラー服。

青白い肌の色で外見年齢だけなら多分、明日菜やら木乃香やらと同じ位だろう。

尚、彼女達と違う所が一つだけある。それはその少女が“足が無い”のに地面の数センチ上をフヨフヨと浮かんでいる事だ。

・・・間違いない、彼女は幽霊だろう。

本来ならそんな存在が見えるだけで人は恐れて逃げるか除霊しようとするか。まあ、少なくとも良い感情など持ちほしくない。

しかし、サイにとっては幽霊なんてモノは日常茶飯事だ

・・・そもそも、十種族の一つの皇魔族などと言うのは所謂人が恐れる存在みたいな者達なのだから。

だからサイの問いかけも当然の事だった・・・。

「よう、こんな所で何やってんだ？」

「ひ、ひゃわお！？」

真正面から声をかけられた幽霊の少女は驚き大声を上げる。

まあ・・・と言っても普通の霊感のない人間には一切聞こえない声だが。

「五月蠅いな・・・つつか、真正面から話し掛けてんだから気付けよ」

その声に驚きながらもスタンスを変えないサイ。

すると、狼狽しながらだが少女が話し掛けて来た



『あ、え、ええええつと・・・あの、そのお・・・わ、私、ですか・・・？』

「ああ？ テメエ以外に誰が居んだよ、此処に？」

その言葉に青白い肌の少女の瞳が潤む。

『わ、私が・・・私が、視えるんですか・・・？』

「視えなきゃ始めから話しかけてねえよ」

その言葉に薄倅の佳人とも言える少女の声が震える。

『わ、私の・・・私の声が、聞こえるんですか・・・？』

「聞こえなきゃ受け答えなんぞしてねえな」

その少女の瞳から一筋の涙が流れ落ちる

『わ・・・わた、私の・・・私の、こと・・・わかるんです、ね・・・？』

「残念ながら視えるし聞こえるし、おまけに触れられるぜ」

いつも通り無愛想な狐の少年は少女の頭を撫でるように優しく手を置いた。

その表情にはいつもとはどこか違い、小さいが優しげな微笑みのようなものも浮かんでいる。

そこから伝わってくるのは確かな感覚・・・はるか昔に失った、久しく感じる事無かった人の温もり。

・・・それが少女の限界となった。

『ひぐつ・・・うう、ぐすつ・・・うう・・・うわあああああん

！.....！』

幽霊の少女は泣いた　　何十年もの孤独の中で忘れてしまったものを思い出すかのように。

瞳からは大粒の涙が零れ落ち、顔を覆う白い小さな手の平の間からは嗚咽が漏れる。

半透明のか細い身体を震わせて泣く少女が泣き止むまで、サイは何も言わずに頭を優しく撫でてやっていた。

どの世界でもそうだ

霊とは良くも悪くもその者に定められた運命が終わった後に訪れる“死”と言う存在によって生まれ堕ちた存在。

しかし死者である霊にも心はある、だからこそ自分が死んだと言う現実を知り、現状と言うものを悲観して絶望する。

親しかった者、愛していた者、気付いて貰いたい者の隣に居ても孤独なのだ・・・生者には死者を見る事が出来ないが故に。

本当は生きる存在誰よりも孤独で寂しく、だからこそ誰かに気付いてもらいたいのである。

サイの種族、白面九尾はそういった霊達の存在を誰よりも知っている。

そして孤独の苦しみも、気付いて貰えない悲しみも・・・誰よりも痛い程に理解していた。

故に彼は手を差し伸べたのだ、孤独に存在し続ける少女の為に。

「ちったあ落ち着いたか？」

『はい、ありがとうございます・・・私嬉しくって・・・』

エヴァと茶々丸の待っている場所に幽霊の少女『相坂さよ』を連れて戻ったサイはそう呟く。  
ちなみにエヴァはさよが視えていたらしく、サイが連れて戻って来た所で『・・・良かったな』と一言だけ言葉を送った。  
尚、茶々丸にはさよは視えないようだが・・・センサーには感知出来るらしく、頭を下げていた。

聞いた話によればやそは今から約60年前にこの麻帆良で命を落としたそうだ。

しかも死んだ時の事は一切覚えておらず、以来ずっとこの麻帆良で幽霊をやっているらしい。

尚、幽霊の割に幽霊が怖く、最近になってコンビニに行くまではずっと夜の教室で震えていたそうだ。

教室に居ればもっと早くサイに見つけて貰えただろうが・・・生憎少し前まで体調が悪く、コンビニから動けなかった事も合って顔を見合わせる事も無かったのだ。(まあ原因はサイだが)

『それにしても、エヴァンジェリンさんにも私が視えてたなんて驚きです』

「まあ、私は体質上の関係で霊感が強いからな」

そんな会話を見ながらサイは考える、3-Aとは実に変わり者の多いクラスだと。

吸血鬼やロボットを筆頭に、侍やガンマン、拳法馬鹿と忍者・・・更に日本最強クラスの魔力の持ち主にどう見ても中学生に見えない人物もちらほら。

極めつけは教師が10歳のガキで、幽霊の少女がクラスメイトである。こんなクラス、世界中探した所でこの麻帆良にしかないだろう。

ついでに言うなれば更に女子校の筈なのに男が転入して来ると、考

えるだけで混沌だ。<sup>カオス</sup>

まあ、大方学園長が個性的な連中だけ揃えたと言った所だろうが・  
・。

・・・と、そこでエヴァがさよに言う。

「元々3・Aは、ジジイが何かしらの素質を持った者達を集めたクラスだ。」

その内にクラスの連中もお前の事を認識出来るようになるかも知れんな  
まあ、そうなるそうなるで問題も出て来るだろうが、  
な・・・」

『ほえっ？ 問題ですか・・・一体何が・・・？』

さよは首を捻る。

実際の所、その部分はサイも不安に思っていた部分だ。

3・Aと言うクラスは連帯感もあり、賑やかでお祭り好きなクラスだが例えば一人が悪ノリしたりすると忽ち暴走してしまう可能性があるので・・・。

下手に中途半端にさよが生徒達に見え、そこから悪い方に暴走して除霊するなどと言いついたら目も当てられない。

そうさせない為には、さよが幽霊で居る事をどうにかしなければならぬまい。

しかし考えても決定的な方法は思い付かない。

・・・その時、今まで黙っていた茶々丸が口を開く。

「サイさん、マスター。」

あの、差し出がましいかもしれませんが私に一つ浮かんだ事がある

のですが・・・」

その言葉にサイとエヴァは黙って続きを促す。

「一つの方法としてですが、私のように代替ボディを利用するのは如何でしょうか？」

私は超鈴音とハカセの手で造られたボディに、マスターの魔力で擬似的魂を生み出し、それを定着させる事によって生まれたと聞きましたが」

確かに、その方法を使えば他の者にも認識して貰う事は可能となる。だがそれにはクリアしなければならぬ問題がいくつか存在した

尚、ちなみにハカセとは言うなれば茶々丸の生みの親とも言える、麻帆良学園中等部3 - Aの出席番号24番。

・・・自称“科学に魂を売り渡したマッドサイエンティスト”こと『葉加瀬<sup>はかせ</sup>聡美<sup>あけみ</sup>』の事である。

「フム、茶々丸よ・・・目の付け所は良いな。

だが、それをするには問題が大きいものであるなら2つある」

エヴァは茶々丸とサイに聞こえるように説明を始めた。

魔法とは万能のようであり、実は意外と制約の掛かるものが多いのだ

「一つは魂・・・この場合は相坂さよだな。

相坂さよの魂を物質に宿す事が簡単に見えるが実に難しい。

代替ボディを用意するなら超鈴音なりハカセなりに頼むでも、私が昔取った杵柄で造るのも良いだろう。

しかし・・・存在している魂魄を強引にそう言ったものに融合させる方法は、下手をすれば魂魄そのものが消滅してしまう可能性が

なり高いのだ」

言うなれば無から魔法を利用して原動力にするのは出来なくはない。しかし・・・存在する魂（この場合は死んでから何十年も年月が経ち、一種の精霊の様になっている状態を言う）を物質に宿すというのは魔力によって悪霊化してしまったり、消滅してしまふ可能性が実に高い。

・・・せめて幽霊本人自身が簡単に取り憑けるような、位牌のようなものなどでもあれば出来るのだが。

するとそこでサイが小さく口を開く。

「・・・それについては方法がある。

俺達“魂獣”には、魂魄を結晶化する“結晶変化”クリスタライズという技術があるんでな。

それを使えばこの幽霊嬢ちゃんの魂魄に負担や暴圧をかけずに結晶石化させれる筈だ、それをキティン所にある人形なりにでも突っ込めば普通に動けると思うぜ。

まあクリスタライズは本来、戦争なんかで志半ばで逝った戦友の魂を自分の魂石クリスタルに融合させたりする際に使う技法だから危険も無いだろうしよ」

確かにその方法を使えば一つ目の方は問題ない。

サイの説明を聞いたエヴァは頷くと、もう一つの方の問題をさよの方を向いてから口に出した。

いや、寧ろこちらの方が難しい問題かもしれない。

「もう一つの問題とはな、相坂さよ　お前自身の問題だ」

『わ、私自身の・・・問題、ですか・・・？』

言葉の意味が解らずに鸚鵡返しで言葉を返すさよ。  
エヴァは小さく頷くと言葉の続きを語りだした。

「先ほどの口振りを聞いていれば、お前はどうかやら理由も解らぬ内に死んでいたと言う事だ。

本来、志半ばで天寿をまつとう出来ずに命を落とした者とは、自らが成したかった事を成せなかったと言う事で墮ちて悪霊イヴイルスピリッツと化す者が断然多い。

まあ、多分お前の場合は何故死んだのかやいつ死んだか、どのような理由で死んだかがあやふやな為に悪霊にはならなかったのだろう」

そこで一度言葉を切るエヴァ。

少しの逡巡の後、再び彼女は口を開いた

「しかし、仮に身体を得た時に何の脈絡もなくかつての記憶が戻る可能性がある。

その所為で今の『相坂さよ』と言う人格とかつての『相坂さよ』と言う人格が混在し、60年前の記憶と今の記憶と言う二つの記憶が存在している事によって均一が取れなくなるかも知れん。

今の『相坂さよ』の人格になるか、昔の『相坂さよ』の人格になるか・・・あるいは二つが消滅し、別の人格が生まれてしまう可能性が無いとも言い切れん。

他にも精神分裂症や・・・最悪、精神が崩壊して廃人化する可能性だって存在している」

そこで再び言葉を切ると、エヴァは静かにさよに伝えた。

「今の可能性を聞いて、それでもお前が人と触れ合いたいと言う意思が強いなら私は止めん。

サイと私で責任持って何とかしよう・・・それによって起こってしまった結末も、甘んじて受け入れよう。  
今日一日、私の言葉を良く考えて結論を出せ。 霊のままであれ、姿を取り戻すであれそれは自由だ。  
選んだ答えに後悔しないように確りと考え、答えが決まったらこの先の麻帆良の外れにあるログハウスに來い」

『はっ・・・はい!!』

解りました、確りと考えて結論が出たら行かせて頂きます!!』

さよのその言葉を聞き終わるとサイとエヴァ、それに茶々丸はさよに別れを告げながら踵を返す。

この日から約5日間、さよは一人でエヴァの言葉やサイの言葉を良く考えて自分なりに答えを出した。

そして、修学旅行の当日の朝

「あゝあゝあゝ あああああ・・・眠いな全くよ」

「そりゃそうだよサイ君。

シスターに聞いた話じゃ、今日の朝方まで一睡もしてないんでしょ？  
全く、そんなに京都行くのが楽しみだったって訳？」

朝っぱらから電車のホームで不景気面で欠伸をしているサイ。  
美空が朝に教会にサイを迎えに來た際、シスターシャークティからサイが昨日から一睡も出來て居なかつたと聞かされた彼女は、小さく困ったように微笑む本来なら麻帆良の魔法先生達でも見た事の無いような師匠のような姉のような女性の表情を初めて見た。



どうやらサイとの出会いや家族のように共に過ごす生活が、少しずつ良い意味でシャークティを変えているのだろう。

「んんん．．．？ ああ、まあそんな所だ」

いつも通り相手が誰であれ無愛想に言葉を返すサイ。

最初の出会いの頃からエヴァ達やシャークティ&ココネに次いでサイを見て来た美空にとってはもう珍しくも無い。

面倒臭がりで無愛想．．．だがその実は、人知れず優しさを見せる人物だと知っている故。

だからこそサイと同じように無愛想でダウンナーな己の妹分も、厳しくも優しい姉貴分も家族のように彼を想う様になっているのだから。

「皆さん、おはようございま〜〜〜〜〜〜〜〜す！！」

丁度そんな浮かれたような嬉しそうな子供の声が響く。

勿論声の主は3-Aの担任である子供先生こと、ネギ・スプリングフィールド君だ。

元々京都のような寺や仏閣巡りが好きで、しかも京都に行けば父親の事を少しでも知る事が出来るかもしれないと言う思いがネギを年相応にはしゃがせていた。

まあ何せ一日前はまるで小学生の初めての遠足の如く興奮して寝れていなかったのだから。

「．．．つたく、五月蠅えガキだな。

アイツ、テメエが教師だったの確実に忘れてやがるな．．．」

「まあまあ、良いじゃんか。

ネギ君も年齢考えればはしゃいでて当然の年頃なんだからさ」

『そうですねよ、サイさん。』

可愛らしいじゃないですか、それにサイさんだって楽しみにしてたんでしょ？」

知らない誰かの声が響き、美空は疑問に思っただけを見渡した。

しかし近くにはサイと自分以外の誰も居ない……ふと横を見ると、サイが背負っていたゴルフバッグのような物の中に手を入れて、『何かを押し込んでいる』様な姿が映る。

「ん？ 何やってんのサイ君？」

「いや、何でもねえ……それより班毎に分かれるんだろ？」

だったらさっさと先に班に分かれておいた方が良くぞ、あのトンじまってるネギじゃ不安だからな。

生活指導の先生になんぞ苦言を言われたくねえだろ？」

サイの言葉に笑いながら『あはは、そうだね』と言いながら自分の班の方へと向かっていく美空。

彼女が遠くに行き、近くに誰も居ない事を確認したサイは、バッグの中に突っ込んでいた手を離す。

……そこから出て来たのは、可愛らしい服を着た一匹のウサギの人形だった。

『もう、何するんですかあサイさん！！』

「……何するんですかじゃねえよこのアホ。

テメエ、人形が喋ってる所見られたらどうするんだ馬鹿野郎？

修学旅行に連れてってやる代わりに誰かが居る時は黙ってるって俺やキティと約束しただろが。

それをテメエ、何を冒頭からいきなり破ってんだオイ？」

ウサギの人形はお冠といった感じでサイに言うが……。ちなみにこのウサギの人形、正体は言うまでも無いだろうが『さよ』である。

約五日間、考えに考え抜いた結果。

さよはサイとエヴァに『人と触れ合える生き方』という答えを出した。

それによりサイがさよの魂を結晶化させ、エヴァが己の持てる技術を利用して人形のボディを作るという事にしたのだ。

……唯、修学旅行に明日から行ってしまつという事でさよの代替ボディを造るのは修学旅行後ということに。

その際……サイと同じく麻帆良から一步も出た事の無いさよが修学旅行に行きたがる。

なので『人が居る時は黙っている』という約束の元、サイがエヴァ宅の彼女お手製の人形の中から何となく合いそうなウサギの人形を貰って、その中に結晶化したさよの魂を組み込んだのだ。

よって此処に居るウサギの人形は言うなれば“さよ本人”と言っても間違いいではない。

『だつて、退屈なんですよ。』

折角、サイさんやエヴァンジェリンさん以外にも見て貰えるような状態になつたつてのにいゝ』

「……だつたらもうちつと我慢しろ。

人が居ねえ時なら喋るなどは言わねえから、普段の人の目がある時は黙つてろつづの。

全くよ……こちらら徹夜明けで眠いんだ、これ以上余計な事で……  
「ッ!？」

まだもう一言、一言文句を言おうとしたサイ。  
だが急に目の前・・・視界が歪む様にぼやけたのだ……。

『ほえっ？ どうしたんですかサイさん？』

しきりに目を擦るサイを疑問に思ったのだろう。

さよは気になって声を掛けるが　サイはいつも通りの表情に戻ると咳く。

「いや、何でもねえ。

まあ俺もこの修学旅行つてのを楽しみにしてたからな、興奮と昨日一睡も出来なかったのが効いてるんだろ　身体もダリいしよ。  
あの新幹線つてのに乗ったら一眠りするから、キリの良い所でそれとなく起こしてくれ」

『あつ、はい、解りました』

そう言うとフラフラしながら3-Aの生徒達が集まっている場所に向かう。

『珍しく興奮の所為で疲労が溜まったのか？』・・・そんな事を思いながら、寝れば直るだろうと考え。

だが、これは疲労ではない。

実はサイの“ある事情”が、この状態を引き起こしていた。  
それにサイが気付くのはまだ先だという事をサイ所かエヴァすらも気付いていない。

サイの不調、木乃香を狙う関西呪術協会の者達。

数々の思惑の裏で暗躍し、己が望みを果たさんとする者達が居る。

この修学旅行という一大イベントの中で、サイはその脅威に立ち向かい・・・そして新たな力を得る事となるのだが、それを知る者はまだ居ない。

空は雲一つ無い晴天

しかし、その行く末は未だどうなるのかさえ解らないのであった・・・。

## 第二十四話：孤独の苦悩（後書き）

さて、投稿完了です。

今回の話の次からがついに『修学旅行編』となりますね。

何だか不安な門出ですが・・・これは私の作戦ですのでお気にせず  
に^^

さて、真つ先に出会いを書いたさよ。

彼女は幽霊であり、誰からも見えない孤独を背負っているという部分  
分を強調させて頂きました。

実は私、投稿図書と言う所でもBLEACHとネギまのクロス作品  
を書いていたのですが・・・実はパソコンがオシャカになってしま  
った事によりプロットから全てがパアになってしまったんです。

だからこちらの作品にあちらの作品のネタを入れる事もあるでしょ  
うがご了承ください。

では、また次回をお待ちください  
作者より。

P.S.

今回のウサギの人形入りのさよちゃんがどんな感じか解らない方は、  
ジャンプ（現在はジャンプスクエア）で連載中の漫画『D・G r a  
y - m a n 』に登場したノア側（千年伯爵側）のキャラクターであ  
る『ロード』の人形形態を想像して下さい。

（それでも解らない方は『BLEACH』の改造魂魄のコンをご想  
像ください。

それでもお分かりになれない方は、お手数ですが上記作品を確認く  
ださい）

## 第二十五話：衝撃の事実

「それでは皆さん、15年度の修学旅行が始まりました。  
この四泊五日の旅行で楽しい思い出を一杯作ってくださいね」

□□□□□□□□は

い □□□□□□□□

賑やかな少女達の返答と共に始まった修学旅行。

ネギが修学旅行中の注意事項などを説明しているその時、サイとエヴァはもう既に退屈なのか居眠りを始めていた。(ついでにウサギ人形版のさよはちゃっかりバッグから覗いていた)

まあ、サイの場合は退屈ではなく身体がやけにダルい事から寝ているだけだが……。

ちなみに本来なら修学旅行の時に居ないサイ、エヴァ、茶々丸は6班に組み込まれる事となった。

これは学園長が『いざと言う時に制限が無く動けるように』と言う意向により、裏を知っている刹那とサイと同じような存在であるザジの居る班に入れたのである。

尚……この班分けにサイに恋心を抱いている連中が文句を言ったのは言うまでも無い。

「麻帆良学園の修学旅行は班ごとの自由時間も多く取ってあり楽しい旅になると思いますが……。

その分、怪我や迷子や他の人に迷惑をかけたらしらないよう一人一人が気を付けなければいけません。

特に怪我には気を付け……あぶっ!？」

そこにタイミング良く後ろから来てネギを轆く売り子のカート。

微笑ましく笑う少女達・・・頭の良い子の筈だが、何処と無く締められない子供先生であった。

ネギの注意事項の注意事項の説明が終わり、各々が新幹線の中で目的地に到着するまで自由となった。

3-Aの生徒達は賑やかであるが故、読書をしたりカードゲームで遊んだりと様々な事をしている。

尚、サイとエヴァはそれらに興味を持たず睡眠中なのは言うまでも無い。

・・・いや、正確に言えば爆睡しては居ない。

修学旅行へと行くまで、到着後、そして帰るまで二人は表面上は気を抜いているように見せても内面は決して気を抜く事は無いだろう。事実、サイの場合は疲れたような表情をしていながらもバッグの中に入れてある七魂剣の柄を握っており・・・エヴァは秘密裏に茶々丸に周囲の警戒をさせていたのだ。

決して心休まる事の無い“戦場”と言う世界を生きて来た二人。

サイとエヴァにとっては世界は違えど、穏やかな時など少しも感じる事が出来なかった。

勿論、追われる事の無くなった今であってもそれは決して変わる事は無い。

「・・・ちよっと、アンタ大丈夫なの？」

顔色が滅茶苦茶悪いわよ、もしかして乗り物酔いでもしたのサイ？」

そんな寝ようとしながらも寝られないらしいサイに声を掛ける後ろの席の明日菜。

彼女は口は悪いし直ぐに手が出るようなタイプの性格だが、意外に



面倒見も良い性格をしている。

朝から気分の悪そうな表情をして目を瞑っているサイが気になったのだろう。

「何でもねえよ。

・・・大方、麻帆良から外に出た事ねえから興奮して寝れなかったのが原因だろ。

その内眠れるから、そうすれば気分も良くなって来るさ」

サイはそう言うが実際は逆だ。

新幹線に乗って約一時間以上経つというのに、気分は良くなる所か逆にどんどん悪くなっている。

寝ようと目を閉じてても一睡も出来ず、身体のダルさがどんどん強くなっているのだ。

内心、一体何があったのかと疑問に思う程に・・・。

そしてこう言う状況とは悪い状況が続けば続くもの。

頑張って寝ようとサイが目を瞑り、美空やらココネやらシャーケテイから教わった『羊を数える』事をした次の瞬間

『きゃ、きゃああああああ!! か、カエルうう  
ううう!!!!!!』

・・・と、少女達の悲鳴のようなものが響いた。

「チツ・・・クソが。何なんだかね、全くよあ!!」

目を見開いて周りを見た瞬間、サイは啞然とした。

何故か3-Aの生徒達の居る車両に大量のカエルが発生していたのだから・・・。

「てか、オイ・・・何だこのカ工・・・『きゃあああつ!?!? さ、サイどのおおおお!!』・・・ルはつて、グオツ!?!?」

サイがカエルが大量発生している事に啞然としたその時。

器用にサイの首に抱きつく一人の長身の人物が居た　　まあ、口調を聞けば解るだろうが楓である。

身を縮こませて手足をサイの取り立てて大きくも無い身体に絡ませてカエルから逃れる為の無理した姿は色々は無茶している事を覗かせる。

ちなみに楓は忍者の癖にカエルが苦手なのだ・・・楓を抱きつかせたまま倒れないサイも凄いと云えば凄いのだが・・・。

「オイ、離れる忍者馬鹿!!」

つつか無茶させんじゃねえ!!　く、首が折れるつつうんだよこの馬鹿が!?!?!」

そう言いながらも強引に片手で現れたカエルを近くに居た古の持つエチケツト袋に投げ込む。

・・・とんでもない離れ業だが、サイならばこの程度は当然の事だろう。

例え調子が悪いにしてもだ

「あ

っ、鳥が

っ!?!?」

カエル騒動が収まって直ぐにネギの悲鳴のような声とサイの横を飛び去っていく燕のような鳥。

どうやら命を持たない『式神』と呼ばれる存在のようだが・・・口に封書のような物を啜えていた所を見ると、どうやらあれは学園長がネギに託した親書だろう。

「あんの馬鹿、何やってんだ!!」

だが奪われたにしても、式神を使う術者の手に渡る前に取り返せば良いだけの事。

サイ自身は抱き付いている楓が居たが、その程度なら問題ないと思  
い式神を追おうとした……。

だが、抱きつかれてる事によって身体が重くて動かない。

「なっ!? チツ、おい忍者馬鹿、早く放せこの野郎が!!!」

「カ、カエル、カエルは……カエルは嫌でござるよおおお!!  
!」

カエルに怯える楓が確りとしがみ付いているが故に追う事が出来な  
いのだ。

しかしこれはサイにしてみればおかしな事……サイは例え茶々丸  
が全力で抱きついていたとしても今の式神に追いつけない様な軟な  
鍛え方はしていない筈。

なのに今、楓にしがみ付かれた状態で重くて動けないとは一体どう  
いう事か……?

そんな事を考えていた所に真名が近寄るとサイに耳打ちする。

「（心配ないよサイ、先ほど刹那がネギ先生のフォローに回ったか  
らね）

……で、それは良いにしてもだ　　貴様は何時までサイに抱き  
付いている心算だ楓!？」

真名が何時までもしがみ付いて怯えている、ある種の『役得』状態  
の楓に怒鳴る。

それに併せて他の所からも声が上がった……。

「そうアルヨ、楓!!」

さっさと離れるアル!! 寧ろワタシもサイに抱き付きたい位アルのにいい!!!!」

「あ、ああああ、あの、その . . . え、えっと、あの

. . . .」

「何をやってるですか、全く . . . .」

「 . . . . . 離れて」

「てか、どうでも良いからさっさと退け阿呆共がああああ!!!!」

何気に天然タラシなサイ。

この様な熾烈な攻防はネギが親書を（刹那のお陰で）取り戻してくるまで続いた。（尚、上から古、のどか、夕映、ザジの順。 最後

のはサイがぶち切れた台詞）

ちなみにネギが戻ってきた際、何気に何処からとも無く某侍少女の殺気のような念が飛んで来たのは言うまでもない。

さらにもう一つ

「ちよつとサイ、何やってんのよアンタ!？」

ほら皆もさっさと席に戻りなさいよ、他のお客さんに迷惑でしょうがああああ!!!!」

「そ、そうですよ皆さん!!」

さっきも注意事項で言ったじゃないですか、他の人に迷惑かけちゃいけません!!!!!!」

何故か機嫌の悪い明日菜とネギであった。

ちなみにサイの大騒ぎの真つ最中、エヴァどこか首を傾げる様な事をし、茶々丸は時々シャッターのような小さな音を立てながら際の方を見つめていたようだ。

・・・さらにこれはついでだが。

「ら、ラブ臭があちこちから!? 一体誰が誰に対しての!?!? くっ、この私とあるう者が・・・ラブ臭の出ている場所がばらばら過ぎて特定出来ないとは、不覚!?!」

周囲から放たれるラブ臭なるものの所為で暴走している娘が一匹居たのであった・・・。

「サイ、お前何かあったのか?」

騒ぎが収まった後、席に戻って来たサイにエヴァがそう声を掛ける。彼女の疑問は当然だ、本来ならサイは先ほどのような揉みくちやの状態になっても脱出して真つ先に親書を取り戻してネギ辺りに苦言を呈していた筈。

だが・・・今彼女が見ているサイは、いつものサイとはまるで別人のように見えた。

「・・・いや、何もねえよ。

だがおかしいんだ、この新幹線つてのが目的地に向かって進む度に、何だか身体が重く感じてな。

こんな事、今まで一度も無かったのに・・・」

「・・・待つてくださいマスター、サイさん。  
マスター、先ほどからサイさんの身体に異常が無いか調べさせて頂  
いて居ますが・・・この状態は何と言うか、明らかに不自然です」

サイの言葉を遮るかのように語る茶々丸。

彼女のその一言にエヴァは茶々丸の方を向いた。

「どういう事だ、茶々丸？ 私やサイに解りやすいように説明しろ」

実はエヴァ、朝からサイの不調に疑問を抱き調べていたのだが・・・

サイは元々『アヒリテイキャンセラー能力無効化』を持つている為か魔法で調べる事は叶わ  
ず、仕方なく機械による能力計測が可能な茶々丸の様子を見張るよ  
うに言っていた。

そんなこんなで新幹線に乗ってから今まで茶々丸はサイのデータを  
計測し続けていたのである。

その茶々丸が『不自然』などと言うという事は一体・・・？

「ハイ・・・実はこの旅行が始まった時から常時、サイさんの能力  
データを計測していたのです。」

ですが麻帆良から離れれば離れる程にその身体能力や魔力のような  
力・・・サイさんの言う所の『法力』の数値が低下し続けて居るよ  
うです。

「・・・このような症例は今まで見た事ありません」

そこでエヴァはある事に気付く。

かつてサイに話を聞いた際に『俺は記憶が無くて世界樹つつう馬鹿  
デカイ樹の近くの森に倒れていた』と。

そしてその事と茶々丸のデータにサイの衰弱を見て、ある一つの仮  
定を立てた。

「・・・おい、サイ。  
確かお前は今まで一度も麻帆良から出た事が無かったと言っていたな・・・？」

「ああ？ ああ、そうだが？ それがどうかしたのか？」  
さも当然の如く返すサイにエヴァは『成る程な・・・』と一言だけ  
呟きながら何度か頷く。  
すると一度の逡巡の後、意を決したかのようにエヴァが信じられない説明をし始めた。

この現在のサイの状態が一体どういう事なのかを。

「・・・サイ、これは仮定に過ぎん。

仮定に過ぎんが、多分これがお前の体調の悪さの理由だろうと私は  
思う・・・心して聞け」

真面目な表情で呟くエヴァにサイも真面目な表情に変わると続きを  
促す。

「お前は確か世界樹の近くの森に倒れていたと言っていたな？ し  
かも記憶を無くした状態で。

そしてお前の生まれた世界は言うなればこの世界ではなく、多次元  
世界・・・平行世界とでも言うべきか？ この世界であって、別の  
世界で生きていたとも言っていた。  
という事は多分、お前は方法は解らないが・・・世界樹を媒介にし  
てこの世界に“召喚された”とでも言うべきだろう」

そこで一度言葉を切るエヴァ。

彼女が思っている通りならば・・・これ以降、サイにはいつもの様  
に戦わせる訳には行かない。

意を決したかのように続きを語りだした。

「故に、世界樹と言う存在がお前をこの世界に召喚した媒介ならば麻帆良から離れば離れる程、お前の体調が悪化していく事にも納得が行く。

つまり本来ではこの世界に存在しない異質な力である法力は、麻帆良の世界樹の魔力をお前自身の身体で変換していたという事だ。

まあ、簡単に言えば今のお前は　　普通の人間と左程変わらない状態と言う事になる」

「な……ん、だと……？」

確かにこのエヴァの言葉は仮説に過ぎない。

しかし、これ程に筋の通った『仮説』は言うなれば『事実』と同義だろう。

己に起こった事の深刻さか、それとも他の事にショックを受けているのかは知らないが……愕然とした表情になるサイ。

そんなサイにエヴァは静かに続けた……。

「サイ……お前、今回の事から手を引け」

「ああ！？　　どういう意味だキティ！？」

怒りを露にしながら自分を見るサイにエヴァは何処までも冷静に語る。

「法力が無く、力さえも制御されてしまっているお前では“役立たず”だ。

そんな中途半端な状態で戦いに介入されても迷惑でしかない……だから今回はお前は手を出すな」



・・・確かにそうだ。  
冷たい言い方かもしれないが、今回は“遊び”ではない。  
何処から、誰が、どんな手を使ってくるかも解らないような状況下  
で、ほぼ人間と変わらないサイが居ても危険なだけ。

さらにもう一つ、サイは今までの戦い方を垣間見れば解る事だが。  
彼は驚く程に自分の命や自分の身を軽んじているような戦い方ばかり  
している。

エヴァと戦った時、朱天童子の力を持つ魂獣・テスタロスと戦った  
時、エヴァとネギの一騎討ちの終わり際に乱入して来た化物から明  
日菜を護った時も然り・・・まるで贖罪ではなく断罪を望む咎人の  
ようにボロボロになり、その度に一種の冬眠状態になって法力で強  
引に傷を治すと言う事を続けていた。

だがそれは、法力という存在が在ったからこそだ。

現在ののように身体に少々残る程度の法力で魂獣解放スピリッツバーストなどすれば、忽  
ち法力が枯渇してしまう。

そうすればどうなるかも解らない、そんな状態でエヴァはサイに戦  
わせたくなど無いのだ。

・・・もう二度と、失わないと決めたが故に。

そんな裏に隠されている想いに気付いたのか気付かないかは解らな  
い。

しかし・・・エヴァに向かってサイは小さく呟いた。

「キティ、済まねえ・・・」

呟きを終わると静かに自分の座席で目を閉じるサイ      その言葉  
の意味は一体どちらの意味なのか？

いや、どちらの意味なのかはエヴァンジェリンが良く解っている・  
・短い間だが、サイの性格は少なくともそんなじよそこらの小娘達よ  
りも痛い程に理解出来ていた。

そう、彼の過去を知ってしまったその時から……。

「……チツ、大馬鹿者が……」

答えなど聞く必要は無い、最初から解っていた。

例え身体がボロボロになろうとも、例え人と変わりない状態になっ  
たとしても、サイは決して選んでいる道を曲げないと。

その道の行く末で己が朽ち果てようとも、最後まで笑って信念を曲  
げない頑固な漢だと言う事も。

……そして、何処までも限界を超える漢だと言う事も。

「茶々丸、修学旅行中はサイに気を配ってやってくれ。」

あの馬鹿は誰かが口で言っても、自分の現実を知っても決して曲げ  
る事の出来ない底抜けの馬鹿だからな。

まあ、そんな馬鹿だからこそアレに心を許す者は多いのかも  
知れん……桜咲刹那や古菲に長瀬楓に龍宮真名にザジ・レイニー  
デイか、それ以外にも何人か理解出来るが。

ああ……それに近衛木乃香に私とお前が居たか？」

エヴァの言葉に茶々丸は答えない。

いや、答えられないと言った方が良いか？ 戸惑ったかのように「  
あの、その……」としか言わない茶々丸を見れば。

そんな従者、いや家族の珍しく狼狽したかのような表情を見ながら  
再びエヴァも目を閉じた……。

京都に到着し、映るは見渡すばかりの絶景。

此処は京都の清水寺 本来は神や仏に能やら舞やらを楽しんで貰う為の場所。

だがいつしかどこぞの人物が言った「清水の舞台から飛び降りた心算で・・・」などという言葉が有名となり、言葉どおり江戸時代に234件もの飛び降り事件が記録されたある意味“迷所”だ。

まっ、それでも実際『生存率が85%』と意外に高いのが驚きだが・・・。

それはさておき、この名所中の名所とも言える観光地で3・Aの生徒達は“一部を除き”概ね小学生のようにはしゃいでいた。

「いええええい、京都おおおお!!」

「おお、これが噂の飛び降りるアレ!？」

「誰か飛び降りれっ!!」

「うむ、では拙者が・・・」

「おやめなさいっ!!!!」

「(はあ・・・テンション高えなこいつ等)」

実に賑やかな連中である。

寧ろこの底抜けの明るさがこのクラスの良い所なのかもしれないのだが・・・。

一方、そんな明るさとは打って変わり、静かに景色を見ている連中も数名程いた。

「うむ・・・実に良い。」

この古き良き時代の文化、このいかんとも説明しがたい美しい風景、流石は古都・京都と言った所か」

『ええ、素晴らしいですう!!』

私、60年前から麻帆良から出られなかったから・・・うう、感動で涙出てきちゃいました」

「・・・さよさん、マスターも私も同じです。

私の場合は生まれて2、3年程度しか経ちませんが、マスターは10年以上もの歳月を麻帆良に閉じ込められていましたので・・・」

「ふうん、まあ良い風景じゃねえか。

これがジジイからの任務が無くてゆっくり見られりやもつと良かったがな」

その人物たちの事は説明するまでも無いだろうが

勿論、麻帆良から殆ど外に出た事の無いエヴァ、さよ、茶々丸、サイの事だ。

こいつ等の場合はクラスの連中のように騒ぐよりも、静かに風景を愛でている姿が実に様になった。

・・・流石は外見と年齢が明らかに違う連中である。

「さて、サイ・・・次は向こうに行くぞ」

「ああ？ ああ解った、んじゃ行くとすつかね」

『じゃあサイさん、私またバッグの中に戻ってますね』

「・・・周囲の索敵は私に任せてください」

エヴァに引率されて彼女に付いて行くサイとその後を付いて行く茶々丸、さよはバッグの中に潜り込む。

この状況をエヴァは『恋人同士』と思い、サイは『友人同士』と思っっているだろうが・・・端から見れば良い関係に見えるのは明白という奴だろう。

・・・そんな三人を羨ましそうに見る者がちらほら。

「あゝ、エヴァンジェリンさんずるいえゝ。  
ウチもサイ君と一緒に見学に回りたいのにゝ、イケズやわゝゝ」

「そうアルヨ！！ エヴァにゃんばつかずるいアル！！  
サイはワタシの婿殿になる人アルヨ、この浮気者おおおお！！！」

「むっ……何を寝言を言っ居るでござるか古？

サイ殿は拙者の旦那様になると前にも言った筈、それを忘れるなでござる！！！」

「……それは聞き捨てならんな楓？

そもそも別にサイは貴様達のモノではなかるう？ とうるか私の物だ、諦める」

……水面下には穏やかにだが、確実に火花を散らしている麻帆良  
武道四天王の三人。

微笑んでいる木乃香はどうだか解りにくいが、それでも最初の出会  
いの頃から好意を抱いているのは解る。

更にこの輪に入れなかつた連中も何人か……。

「サイさん……。

(はっ、いかん……今私はお嬢様を護る為に居るんだ、私情など  
捨てねば……だけど……) 「

「あ、あううう ……サイさん ……」

「のどか……頑張るですよ……。

(のどかはサイさんに好意を持つてるのですね……全く引つ込み  
思案ですから。

……でも何故でしょう？ エヴァンジェリンさんとサイさんの姿

を見ていると無性に何か……」

「……な、何でサイとエヴァちゃん見てるとこんなに苛々するのよ!？」

そりゃあサイは私の命助けてくれたし、時々渋かったりするけど……わ、私には高畑先生が!！」

多種多様に色々な事を考えている連中だ。

まあ、その中でも自分の気持ちや意味に気付いていない奴も居るよ  
うだが……。

尚、そんなサイやエヴァに気にもせず声も掛ける奴らも居る。

「おい、サイ」。

私も一緒に行つて良いか？ 勿論、マクダウエルさんと絡繰さんが  
良ければだけだよ」

一人はサイにとって口喧嘩友達とも言える、性別を超えた友情を育  
む少女である千雨だ。

別に取り立てて断る理由も無く、さらに茶々丸のリーダーでも周囲  
に敵が居ないと言つ事が解つていた為かサイは頷いてから答える。

「ケツ……物好きな野郎だな、勝手にしろや」

「へっ、じゃあ勝手にさせてもらつぜ」

そう言つと千雨はサイ・エヴァ・茶々丸(+さよ)のグループに合  
流した。

と言つかお前、班別行動は良いのか？ まあ……ネギ(の本当の  
性別を知らず)に色ボケしている班長と共に行動するのは嫌だつた  
のだろう。

更に、サイの袖をくいくいと引つ張る者が約一名。

「・・・・・・・・・・」  
無表情で無感情、まさに人形のような人物であるザジ。  
だが、その手はサイの制服の上から羽織っている着物のような上着の袖を掴んで引っ張り続けていた。

「んだザジ、向こうの阿呆共に付き合いきれねえでこっちに来たのか？」

「・・・・・・・・・・（フルフル）」

首を横に振っている所を見ると理由は違うのだろう。

それを見たサイはそれ以上はあえて理由も聞かずにザジに向かって呟いた。

「んじゃ、お前も俺らと一緒に見学すつか？」

（小声）・・・ジジイから聞いてると思うが、木乃香やらネギの持つてる手紙やらを狙ってる奴らが居るからな。寧ろ裏の事情を知ってる奴が近くに居る方がこっちも動きやすい」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」

無感情、無表情の彼女にしては実に珍しく、笑顔の様なものを見せ  
て頷く。

それを見た者は多分、実に珍しいものを見れたと驚くだろう。

そしてこの後・・・。

関西勢の嫌がらせとも取れるような事がサイ達の見学中に続く。

例えば

「なつ、お、落とし穴~~~~!!?」  
地主神社の『恋占いの石』に仕掛けられたカエル入りの落とし穴に  
委員長とまき絵が落ちたり。

「なつ!? 滝のお酒がああ!?」

音羽の滝の『縁結びの水』に酒が流されており、その所為で約大  
半の生徒達が酔い潰れてしまったりと散々であった。

この悪戯なのか妨害なのかイマイチ解らない行為にアホらしくなっ  
てため息を吐くサイ達。

・・・ちなみにサイに好意を持つ何人かがこの酒入りの滝の水を飲  
んでいたが、古とのどかはダウンしたが楓・真名は全くと言って良  
いほどピンピンしていたそうだ。

(尚、美空も飲もうとして口に含んだようだが、変な味を感じて直  
ぐに吐き出したらしい)

「・・・アホじゃねえのか、これやった奴ら?」

そんな弱々しいサイの一言は騒動の賑やかさの中でかき消されたそ  
うな・・・。

「ええ!? 変な関西の魔法団体に狙われてる!?!」

夕方、ホテル嵐山に入ったサイら3-Aの修学旅行一行 ちな  
みに酒飲んで爆睡した連中はネギが理由を考え、エヴァと茶々丸と  
サイと明日菜とザジがそれぞれの泊まる部屋に投げ込んでおいた。

「うむ、そうだ。」

まあ正確に言えば狙われているのは坊やの持つジジイの書いた『東



からの親書』だがな」

道中起こった事を不審に思った明日菜がネギを問い詰めると、代わりに近くに居たエヴァが説明をする。

そして今まで起こった不可思議な事が『関西呪術協会』と呼ばれる連中によって引き起こされている事や奴らの狙いがネギの持つ親書であると云う事も説明した。

・・・尚、学園長から昔聞かされた『木乃香の力を狙っている』と云う事は一応秘密にしてある。

「私や茶々丸やサイは坊やがその親書を西に届ける為の補佐を託されたと言っ事だ」

「成る程ねえ・・・エヴァちゃんや茶々丸さんが居るから何となくそんな気がしてたのよね。

やれやれ、また魔法の厄介ごとか・・・」

「ご、ごめんなさい・・・明日菜さん」

ため息を吐く明日菜だが直ぐに元通りになる。

まあ彼女は彼女なりに自分が望まないにせよ戦う為の力を手に入れたてしまった。

故にその力をどう使うべきかを考えれば、今回のような事態の時などだろう。

「良いわよ、そんなに謝らなくても。

それにサイやエヴァちゃんの力を疑ったりする訳じゃないけど・・・何が解らないんでしょ？

だったら頭数を少しでも増やしておいた方が良くないじゃない、違う？」

その優しい言葉に感動して瞳を潤ませるネギ。

一方、短い間とは言えサイに力の使い方を身体に叩き込まれて来た事を知るエヴァも頷く。

・・・この旅では殆ど（約九割）の魔力が封印されているエヴァにとつては味噌つかすでも頭数が居ないよりましなのだ。

何せ、頼みの綱であろうサイは麻帆良から離れてしまった事が原因で殆ど力を発揮出来ないのだから。

と、そこで今まで黙り込んでいた存在感の薄いカモが口を開く。

「あの・・・これはおれっちの勝手な推測なんですけど・・・。

明日菜の姐さん、桜咲刹那って奴が怪しいんだ・・・なんか知りやせんか？」

「えっ、桜咲さん・・・？」

うっん、確か木乃香の幼馴染だって聞いた事はあるけど・・・私も話した事無いし・・・。

それにあの二人、一緒に喋ってる所あまり見た事無いから・・・」

確かどこかでそんな話を聞いた事がある。

それに最近だが、木乃香の後を付け回し、何かを言おうと手を伸ばしながらもその手を引っ込めるといふ姿を何度か目撃した事があった。

それによりカモは刹那が京都・・・つまり関西出身だと断定、そして刹那が関西呪術協会のスパイだと断定してしまうが・・・。

「おい小動物、多分それは無いぞ。

桜咲刹那は貴様らが知る由も無いだろうが殆ど毎朝サイの奴に実戦形式の修行を付けて貰っている身の上だ。

桜咲刹那がスパイだったとしたら、真っ先にサイの奴が気付く筈だ・



・・・しかし悲しいかな、周囲の者達はネギが女の子だとは知らない。

だからこそ『男同士なら問題ないだろう』と考えているのだ。

「え、えつと、えとえとえとえとえと・・・。

ぼ、ボク・・・ボク、先に急いでお風呂に入っちゃいますね、それじゃあ!!!」

そんな風に慌てて走り去るネギ。

そんな少年（少女）の後姿を首を傾げながら見ていたエヴァ達だが・・・取り合えず一旦、夜の自由時間まで解散という事で会議は打ち切られたのであった・・・。

## 第二十五話・衝撃の事実（後書き）

投稿完了です。

この作品はあくまでも『半最強系』です。

なのでどこかで力を抑えなければならぬと思っていまして今回の設定を考え付きました。

言うなれば現在のサイは『身体能力が高いたけの只の人間』と同じです、更に敵もどのような連中が出て来るか解りませんので迂闊に魂獣解放も使えません。

真祖に近い回復力と魂獣解放を封じられた状態で一体どのようにして関西呪術協会と戦うのか・・・それは次回をお楽しみに^^

## 第二十六話：生きた証

「・・・クソツ」

ホテル嵐山を出て外を散歩するサイは小さくそんな言葉を呟く。

エヴァから言われた『戦力外』だと言う警告、そして『役立たず』の烙印。

表立っては気にする素振りも見せていなかったが、その内面は実に複雑だった。

「どうしろってんだよ

俺は、俺は戦う以外の事なんて何も出来ねえ・・・それ以外の事なんて、考えた事もなかった。

そんな俺が戦う事が出来なくて、何の意味があるってんだよ・・・」

『自暴自棄』とでも言うべきか？

今まで戦い続けてこれたのは、言うなれば己の不死に近い再生能力と圧倒的な法力のお陰だった。

・・・少なくともそれだけではないのだが、今の力を失ったにほぼ同じなサイにとっては同義だ。

戦場では戦えない者は足手纏いに過ぎない。

今まで生きてきて、完全に記憶は戻らぬにせよその事実は深く刻み込まれている。

だが・・・頭で解っていても、心と言う奴がその事実を認めただからないのだ。

戦う事しか出来ないと思い込んでいるサイにとっては・・・。

「クソツ！！ 何が魔法だ、何が呪術だ！！」

テメエで何一つも成せねえ俺が、何を解った振りしてたんだ!!」

空に向かって己の不甲斐なさを愚痴るサイ。

しかし・・・その叫ぶかのような愚痴が、新たな厄介事を舞い込ませる事となった・・・。

「・・・魔法？ そのフレーズを知っていると云う事は、君は関係者かい？

しかしおかしいな、君のような人物が居る事は報告に無かった筈だが・・・？」

「・・・!?!? 誰だ!?!」

いきなり声が出た事に驚き、声のした暗闇の方を見るサイ。

そこからはゆつくりと、白髪の見るからに冷たい目付きをしたサイと外見的には同年代の少年が現れた。

一目見れば理解出来る、その冷たい目の人物は只者ではない・・・しかも先ほどの言葉から味方ではないだろうし、所謂“魔法関係者”と言っ奴だろうと思われる。

「何だテメエは・・・何モンだ？」

「やあ初めまして・・・。

まあ僕は今日は見学に来ただけさ、身構えないで貰えると有難いんだが？」

少年はまるで人形のように表情一つ変えずに淡々と呟く。

その姿は言い表すのならまさに“氷の様”と言っても間違いが無い程に冷たい気配を滲ませていた。

「・・・そうか、テメエは魔法使って奴だな？」

それにその口ぶりやさっきの言葉から考えて見れば・・・昼間の騒ぎはテメエ等が原因って訳か？」

「魔法使いかと言う質問については肯定しよう。」

昼間の騒ぎと言う奴は僕が原因ではないが、今の状況を垣間見れば僕達が原因と言う事になるだろうね。

君は魔法使いではないのだろうか？ ならば関わり合いになるのは止す事だ・・・死にたくはないだろ？」

口調も表情も無表情のまま一切変わらない・・・。

だが、少なくとも最後の一言を呟いた瞬間 目の前の少年の雰囲気が一挙に変わった。

今までとは違い、明確な殺意のようなものまで発している。しかし

「そう言われて『ハイ、そうですか』と尻尾巻いて逃げるように見えるか？」

サイの手にはいつの間にか七魂剣スサノオが握られている。

予めバッグの中に召喚しておいたものを呼び寄せたのだろう。その事に法力は使わない。

だが、氷のような少年はその姿を一瞥すると呟く・・・。

「やる気かい？」

その剣の構え方や足取りなんかを見れば素人ではないようだけど・・・。

だけど、その程度の気で戦おうと言うのなら止めておいた方が良く

「五月蠅えな、やってみなきゃ解らねえだろうが!!」

魔法は秘匿しなきゃならねえモンなんだろ、だったら場所変えよう



ぜ・・・」

サイの言葉に一瞬だけ何か考えるような素振りを見せる少年。しかし直ぐに『・・・そんな訳が無いな』と一言だけ呟くと、ある方向を指差す。

「向こうに人払いの為の結界を張った場所がある。

本来ならば別の用途で使う心算だったのだが・・・まあ良いさ」

少年はその言葉が終わると直ぐに歩き出す。

その後をサイもまた続き、二人は少年が用意したとされる結界の中に消えていった・・・。

「そつだ・・・二つ聞きたい事があるんだけど良いかい？」

「あん？ 何だよ・・・」

報告に無かったとされる人物に質問を投げかける少年。

一方のサイは、いきなり質問を投げかけられた事に疑問を持ちながらもそれに応じた。

「君はもしや、親や兄弟に裏の世界に精通した者は居ないかな？

僕はかつて、君と同じような目をした漢と戦った事があるような気がするのですね」

「・・・居ねえな、そもそも俺には肉親なんぞ居ねえ。

当の昔に全員鬼籍に入ってたあ・・・まあ、今は家族の様な連中は居るがな」

その返しに少年は『・・・やはり彼とは関係ないか』と小さく呟く。そしてそのままもう一つの質問の方を尋ねた。

「もう一つの質問は君の名前を聞いておきたい」

「俺の名は光明司 斉だ。」

つうか、人に名を尋ねるなら先にテメエが名乗るのが礼儀じゃねえのか？」

サイの口ぶりに少年はクスリとも笑わず、表情の無いまま呟く。

「僕にはそんな礼儀はどうでも良いし・・・。」

そもそも、此処で再起不能になって表舞台から去る事になる君が知る必要など無い」

言い終わった瞬間に少年の周りの空気が一気に変化した。

まるで氷雨に降られたかのようにサイの全身から鳥肌が立ち、全身の毛がまるで獣のように逆立つ。

少なくとも目の前の少年がエヴァクラスの实力者だとサイは気付いた。

だが、相手が何であれサイは態度は決して変えない。

「粹がるんじゃねえよ三下が

だったらテメエはクタバるまで黙ってる！！ その代わり、俺の名前を忘れるんじゃねえ！！

テメエをぶっ潰す俺の名前をなあ！！！！」

サイもまた、怒気を放ち少年を見据える。

その瞬間、まるで烈火の如く荒々しい闘気がサイ自身から放たれた！！！！

鬪気はまるでそれそのものが意思を持つかのように形を代え、サイの全身を包み二本の尾のようなものまで作り出していたのだ……。

これこそはサイが法力によって生み出された九尾の内の二尾。

サイ自身が本気になった証拠である　だがその他どこるか己自身まで傷つけそうな荒々しい気配は一体何なのか？

その問いに答えられる者など此処には居まい……。

「……それは気でも魔法でもない不思議な力だね。

成る程、どうやら君の正体は不明だが少なくとも一般人ではないようだ……」

少年もまたサイの異質な力に気付いている。

だが大して驚いたような表情もせずに彼も魔力を解放した

「行くぞオラア!!」

白面九尾派導術　三尾・焰刃!!」

掛け声と共に七魂剣の平を撫でると、かつて茶々丸をドロールから助けた時と同じように刃に炎が灯る。

しかしこの炎は前とは違い、より激しく、より荒々しく燃え盛っていた　まるで今のサイを象徴するかのようだった。

「刃に炎を灯す、か……。

その力も魔法とは違うようだね、本当に良く解らないね君は」

そんな台詞など無視し、刃を思いつきり振り下ろすサイ。

しかし　刃は少年に当たる事なく、まるで見えない壁があるように少年の眼前で止まっていた。

「何っ!？」

「ふむ、中々の威力だ。

だけど“その程度”の攻撃では僕の障壁は破れないよ」

呟くや否や、サイの目の前に手を翳す少年。

「……ドリュ・ベトラス石の槍」

「グツ……何だと!？」

危険を察知し、咄嗟に手の平から頭を逸らす。

その瞬間、サイの頭のあった場所に隆起した石の槍のようなものが通り抜けた!!

「本気ムツかよ……なんつうスピードだ」

一瞬でも避けるのが遅ければ確実にサイの脳髓を少年の作り出した石の槍が貫いていただろう。

だが……少年は攻撃を避けたサイに敢えて驚きも何もせずにバツクステップで距離を取った。

「……少しは魔法使い相手の戦闘には慣れてるようだね。

でも、所詮君はそれだけだ　それ以上もそれ以下も無い取るに足らない存在だとでも言った所かな？」

「あんだとテメエ……!!　だつたら今すぐ吠え面かせてやらあ!！」

まるで猪のように炎を纏った七魂剣を手に斬りかかるサイ。

しかし、この様相はいつもの彼とは違い過ぎる・・・エヴァに『麻帆良から離れては力が使えない』と言われた事が余程効いているのだろう。

いや、寧ろ 戦えないという事が彼の心に闇を落としていた。

「猪突猛進」とは、まさに今の君の様な人物の事を言うのだろうね」

いきなり地から隆起してきた槍・・・。

それが動物的な勘によつて急所は避けられるが、サイの足を捉えた。

「チツ・・・馬鹿な、魔法つてのは呪文を唱えなきゃ使えねえんじやねえのか!？」

ああ成る程な、こいつがキティの言つてた“無詠唱魔法”つて奴かよ・・・」

かつてエヴァと修行をしていたある日に教えられた事。

本来、魔法使いは魔法を放つ為に『詠唱』という呪文を唱えなければ魔法を放てないと教えてくれた時があつた。

しかし上位の魔法使いになれば呪文自体を短くする事が出来、更に最上位まで行けば呪文を唱える事無く魔法を放つ“無詠唱魔法”という物が使えると教えられた。

・・・という事は、無詠唱魔法を使えるこの少年は外見は別としても間違いなく上位の方の魔法使いという事だ。

「意外に博識だね、無詠唱魔法の事を知っているなんて。

だが残念だが僕のこれは無詠唱魔法ではない まあ、君に教える・・・(ボソツ)・・・義理も無いがね」

その瞬間、隆起した岩から先ほど少年の手の平から放たれたような

石の槍が発生してサイの脇腹を抉った。

「クソが、舐めたマネしやがって……!! オラアアア!!!!!!  
(何だ? 今一瞬だけだが野郎の言葉の間に聞こえなかった小さな  
声があつたような気がするが……)」

脇腹を槍で掠らせながらも有り得ない攻撃角度から刃を振り下ろす。  
完全に奇襲のような攻撃だった為、本来ならその刃が少年の胸を切  
り裂いている筈だが……。

ガキイイイイン!!

そんな音と共に、少年の手がサイの七魂権の刃を止めていた。

「君の戦い方は猪突猛進に見せながら変則的だ、危うく切り裂かれ  
る所だったよ。」

だが悲しいかな無駄だね……さっきも言った通りその程度の力で  
僕の障壁は破れない。

未知の力だと思つて楽しめると思ったが、どうやら完全に期待外れ  
の様だ」

無表情に、無常に、冷酷に少年は言つた……。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

肩で息をするサイ、先ほどから何合も斬撃を放ち続けているという  
のに相手は息一つ乱れていない。

脇腹や足などからは血が流れ落ち、大地を赤黒く見せていた……。

「そろそろ解つたかな、無駄だという事が。」

僕としては未知の力の程度を見終わつたから君にはもう興味が無い、悪いけどこの喜劇の舞台からは退場して貰うよ」

「ふざけんなよ、テメエ!!  
まだだ、まだ俺の心は折れちゃ居ねえぞ・・・ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

よろよろと立ち上がり、斬りかかろうとするが・・・。  
その前にサイを打ち払うかの如く、一気に間合いを詰めて少年は高速パンチを出した。  
まともに喰らつてまた地に倒れ付すサイ、しかし再び強引に立ち上がろうとする。

「・・・下らないね、僕に当てる事も出来ないと言つのに言葉だけは実に立派な物だ。  
君では無理だよ、僕の障壁を打ち破る力も無い君ではね・・・何故そこまでして僕と戦おうとするんだい？」

ふと少年は疑問に思った。  
何故此処までして、この光明司 斉と名乗った人物は戦うのかと。  
実力の違いが理解出来ないような患者ではない事は理解出来る、ならば何故・・・?  
そんな人形のような存在の彼は初めて他人への疑問を持った

「・・・テメエにや関係ねえよ!!!」

しかし唯その一言で再び立とうとするサイ。  
このしつこい人物が居ては計画の邪魔になる・・・そう思った少年は完全に彼を舞台から下ろす為に初めて詠唱を唱え始めた。

「さて、悪いが僕もいつまでも君に関わっている暇など無いのでね・  
・・これで終わりとさせて貰おう。」

ヴィシユ・タル　リ・シユタル　ヴァンゲイト・バーシリスケ・ガレオメテ　小さき王　八  
・コクト・ポドーン・カホコイン・オンマトイン　ト・フォース　エネーイ・ケイリ・カティアー・ホーイ・カコイ・デル・ドマテ  
つ足の蜥蜴　邪眼の主よ　その光　我が手に宿し　災いなる　眼差  
セラサト  
しで射よ  
カコン・オンマ・ペトロ・セオース

『石化の邪眼』！！』

少年の指先から放たれる禍々しき紫の光がサイを貫く。  
すると・・・見る見るうちにサイの身体が石化し始めたのだ！！

「なっ、クソが・・・」

瞬く間に喉まで石化し、後は耳と目が残るのみ・・・。  
本来のサイなら魔法を『アヒリテイキャンセラ能力無効化』で無効化出来る筈だが、法力の殆どを封印されてしまっている今の状態では無理だ。

「まあ、期待外れとは言えほんの少しは楽しませてくれた礼だ。

一応痛みも無く、苦しみも無く、そのまま舞台から退場出来る筈だよ。

さて、後はチグサがコノエコノ力を攫うのを待つだけ、か・・・」

全てが石化し、意識が消えていく中で最後に聞こえたのはその言葉だった

「此処は・・・何処だ・・・？」

何も無い、何も存在しない、何も見えない光のみの世界。  
そんな世界の中でサイは唯独り、力無く倒れていた



「そうか・・・俺は、死んだのか・・・。  
結局俺は何も出来ないまま、無駄に命を散らしたってか・・・全く滑稽過ぎて涙も出やしねえぜ」

力無く呟く姿はいつものサイからは想像出来ない。

いや、ある意味では彼は『こうなる事』をどこかで望んでいたような気がする。

失われた記憶の奥底で、もしくは無意識に“思い出したくない”と願っている過去が関係して・・・。

「・・・やはり俺には無理だったんだ。

大切なものをその手から全て零しちまった俺が、誰かを護ろうなんて度台無理な話だったって事さ。

そうさ・・・そんな事、当の昔から解ってた筈なんだ・・・」

自暴自棄のように卑下し、遠い目をするサイ。

もう立ち上がる必要は無い　このままゆっくりと目を閉じれば全てが終わる。

そんな風に考えて、彼はゆっくりと目を閉じようとした・・・。

まさに、その時だった。

「オイオイ、もう諦めんのかよお前？

そんなんじゃないの為に俺達はお前の為に身体張ってたんだよオイ？」

目を瞑ろうとしたサイの耳に響いたのはどこか懐かしい声。

懐かしさにゆっくりと目を開くと・・・其処には赤い鎧を纏う、白い翼の生えた青年が立っていた。

「・・・誰だ、お前？」

「誰だつてのは失礼だなお前は、全く。」

まあ、思い出せねえのもしょうがねえかね・・・まあそれは良いや。それよりお前、こんな所で死んじまう心算かよ？」

やけに馴れ馴れしい人物だ・・・。

だが、その人物に会った瞬間、サイは何故か目を放せなくなっていた。

しかも懐かしさのような物がサイの胸に木霊する。

「しょうがねえだろ・・・身体が動かねえんだ。」

もう俺は限界なんだろうよ　放っておいてくれよ・・・」

しかし・・・身体が一切動かない。

実際の所、死んだなどと認めたくなど無い・・・だが身体が言う事を聞かなかった。

「オイオイ・・・何時からお前はそんなにひ弱になつたんだ？」

そんな寝言を言っていたら、お前と一緒に居る俺達はどうすりゃ良いんだよサイ』

「・・・俺と・・・一緒に居る？」

何の事が解らない

だが、その言葉に自然と心引かれたサイは聞き返す。

その瞬間・・・いくつものまばゆい光が迸った。

光に目が眩み、目を瞑るサイ。

光が収まったらしく目を開くと・・・其処には赤い鎧の青年以外の

人影があつた。

『そうですよ、サイさん……私達わたくしはいつだって貴方と一緒に居ます。

それにそんな顔をしないで下さいな、私は前にも言ったように弱い殿方に仕える心算はありませんわよ』

緑の髪の穏やかそうな少女が呟く。

『貴様は私の認めた男だと前にも言った筈だ。

こんな所で立ち止まっている時間があつたら、さっさと目を覚まして前を向いて歩め』

獅子のような鎧を纏った人物も静かに笑いながら呟く。

『そうですよ、サイ。

それに私達だけではありません……あの戦いで散つた多くの者達は貴方と共に居ます。

貴方は独りで多くの事を背負おうとしていますが、共に居る者達がいる事を思い出してください』

青い髪の聡明そうな女性がどこか心配するような表情でサイに諭す。そんな人物たちの表情を見ると、大切な事を思い出せそうなのだが……そのもどかしさにサイは困惑しながら呟く。

「……だから無理だ。

もう俺には立つ力も残っちゃ居ねえよ……このまま大人しく、死

」

言葉を続けようとした時、誰かの言葉が被せられた。

『サイ殿、それは違う。』

貴公はまだ死んでは居ない　それに我等は皆、戦いの中で負けるなどと思つた事は無いではござらんか。

信念の強さこそが、人の・・・そして魂獣の本<sup>スピリッツ</sup>当の強さなのだから・・・

黄金の鎧を纏う銀腕の騎士がそう語つた。そして、そこでサイを誰かの手が掴む

『ほら、早く起きてください』

もう今度は何も奪わせないのですよね？　ならば、この様な所で伏しては駄目ですよ』

天使のような可憐な女性騎士がそう言いながら優しく微笑む。

『さあ、顔を上げてサイ君・・・かつてのあの時のように。』

そして思い出してよ　僕達が慕い、己自身の意思で見つけた君の“道”をさ　』

少年のような少女のような中性的なローブの人物が人懐っこい笑顔を出して何も無い所を指差す。

すると其処には今まで存在しなかつた道のようなものが現れていた・・・。

「道・・・か。」

そつだ、俺は・・・俺はかつて気付いたじゃねえか。

多くの仲間や大切な奴等に見守られて、この“道”を歩いてきた事を

そしてどんなに強くなつても、力を得ても・・・独りじゃ意味が無

いという事を・・・」

今まで力の入らなかつた手足に力が籠る。

ゆっくりと立ち上がるとサイは・・・本当に大事な事を“思い出した”・・・。

「どんなに強くなつたつて・・・お前等が居なきゃ意味が無かつた。そしていつでもお前等は俺と共に居てくれた、何でそんな大事な事を俺は忘れていたんだろうな」

確りと己の足で立ち上がったサイ。

そんな彼の前に七魂剣スサノオと六道拳アスラを持つた手が差し出される。

「・・・見せてみるサイ、我が戦友よ。  
お前が見つけ、一度失い・・・そして再び思い出した、お前の生き様を・・・」

煌天の騎神と呼ばれ、友でありライバルであつた男の差し出した七魂剣と六道拳を受け取る。

六道拳を手に装着し、七魂剣を腰に帯刀すると・・・サイは前を向いた。

もう下を向かないように、後ろを振り向かないように、立ち止まらない為に・・・。

そんなサイの背を、誰かが優しく抱いた・・・。

いや、誰かではない　サイにはもう、それが誰だかは気がついていない。

何よりも大切な、戦友であり・・・そしてサイが心から愛した一人の少女だという事を。

「・・・サイ、忘れないで。  
私達が、貴方の生きた証だよ。見えなくなっても、命を失っても、私達はずっと傍に居る。  
貴方と一緒に多くの物を見て、多くの物を感じてる・・・。  
だから・・・ね？」

一度だけサイは肩を抱いてきた人物の手に触れる。  
ほんの少しの時間が流れた後、洋服と風車の簷を付けた少女がサイから手を放す。  
ゆっくりと立ち上がったサイは、一度だけ後ろを振り返ると言った・・・。

「ありがとう・・・ムジナ。  
ルীগ、メルト、デヒテラ、カヌキ、ロック、ダレス、ミツキ、ア  
ガート・・・。

俺は行くよ、俺の信じた道を貫く為に  
「  
そう言い終わるともう、サイは後ろを振り返らず歩き出す。  
この道の終点、もう一度己の生き様を貫く為に。

そんな彼の後姿を笑って見つめる少女たち。  
その姿はだんだんと薄くなり、いつしかその輪郭もぼやけ・・・宝  
石のような丸い様々な色の石の姿となった。  
そしてその光る石は背中からサイに吸い込まれていく。

光の石が全てサイに吸い込まれたその後  
サイの腰に帯刀する七魂剣の柄に、虹色に光る宝珠のような物が装  
着されていた・・・。

石化したサイを一瞥すると背を向けて歩き出す少年。  
これ以上関わるのは時間の無駄・・・彼はそういう風に思ったのだ  
ろう。

元々、今回は関西呪術協会のある人物に雇われた身の上だ・・・勝  
手な事ばかりしては依頼人クライアントに文句を言われてしまう。  
そう思った・・・次の瞬間。

「・・・!?」

おかしな力を感じ振り向く少年、其処で彼の目に映った物は・・・。  
その目を覆いたくなるまでの強烈な光が、石化した筈のサイから放  
たれている姿だった。

「馬鹿な・・・有り得ない。」

完全に石化している筈だ、動く事すら間々ならない筈だと言つのに  
・・・!?」

だが、少年の目の前で起こっているのは紛れも無い現実だ。

光と共に輝が入っていく石化しているサイ　そしてその光の本  
流が眼を覆うまでになったその時、天をも貫くほどの声が放たれた  
!!

「  
ソウルアツプ  
魂鎧装!!!!!!!!!!」

瞬間、天を切り裂くかのような刃の軌跡が少年を襲う。  
気付いた少年はそれを避けようとするが・・・。

「・・・何？」

僕が・・・避け切れなかつただと・・・?」





「クツ・・・拙い、この攻撃を喰らっては・・・!!」

バックステップで距離を取り魔法を放とうとする少年。

その手から放たれるは先ほどと同じ『石の槍』トリュ・ペトラス　しかし、地から隆起した石の槍はサイの焰剣の一振りでも根元から消滅した!!

「馬鹿な・・・何者なんだい・・・君は」

表情は今までと同じく無感情のまま。

だが間違はなくその雰囲気は今のサイの力に脅威を感じている事は明白だ。

「覚えとけ・・・俺の名は白面大帝サイ!!」

かつて世界を護り明日を俺に託し、散っていった多くの戦友達が居た!!

その戦友達の想いを、俺自身の貫く信念を・・・テメエ如きの魔法なんぞで止められるなどと勝手に思うんじゃないぞ、この三下があああああ!!

サイの構えた刃から放たれる最上級の技。

かつて鬼神と恐れられたサイの祖母が使い、そしてサイに受け継がれた奥義。

その一撃に全力を寄せ、目の前の少年の障壁をぶち破らんと今放たれた!!

「奥義・不動神剣

はちまんだいぼさつ  
八幡大菩薩!!

「なっ!?　馬鹿な・・・僕の障壁が!?!」

驚愕の声と共に巨大な衝撃音、閃光が放たれた……。

辺りは光と土煙に覆われ、どちらの姿も見えない。

しかしこれほどの衝撃が周囲に放たれたのならば、先ほどの少年が  
いかに有力者であつても一溜りもあるまい。

……しかし、その土煙の中から声がした。

「ふう、実に驚いたね……まさかそんな切り札ジョーカーがあるとは思わな  
かつたよ。

それに先ほどの言葉は訂正させてもらおう、その未知な力や君自身  
に僕は少し興味が涌いた」

土煙が起こっている所為で少年の姿は見えない。

しかしその口調は今までと同じく淡々として、先ほどまでと全く変  
わらないようだ。

「今回は此方から引き上げさせて貰おう。

ああ、そうだ。先ほどは君に興味が無かつた為、無礼をしたが其  
処も此処で訂正させてもらつよ。

僕の名はフェイト……『フェイト・アーウェルンクス』、戦士に  
対しての礼儀だ」

そこで一度言葉を切ると、フェイトと名乗った少年は再び口を開く。

「今回の争い事は多分、君には関係の無い事だ。

だがそれでもこの戦いの舞台に残るといふのなら、また会おう……」

その言葉を最後にフェイトの気配は消えた。

それと同時に土煙も収まり、サイは取り合えず今回の戦いが終わった事を実感する。

「・・・ヤレヤレ、全く。」

まさかキティクラスの化物が敵側に付いてるとは思わなかったぜ。今回は不意を付いたお陰で撤退させられたようなモンだ。寧ろ、命を救われたのはこっちだ」

そこでサイは立ち上がると天を仰ぐ。

その目は最初の時のように自分の力を失った不甲斐無さに焦っていた時とは違う。

何処までも真っ直ぐな、いつものサイの眼差しだ。

「・・・上等だ、何度でも来いよ。」

俺はもう、自分の目の前から何も奪わせたりなんぞしねえ・・・それが俺の“信念”だ。

そして・・・散っていったあいつ等への俺の誓いだ」

強敵との出会い、そして思い出した戦友達との約束。

その二つの事態を胸に秘め、新たな能力を得たサイは決意を新たにする。

そして此処より、本格的な京都での戦いが始まったのであった。

## 第二十六話：生きた証（後書き）

投稿完了っす。

さて今回でサイはエヴァとの最初の邂逅に続き、再び大切な事を思い出しました。

それでも完全に記憶が戻っている訳ではないのですが、戦友達の事は思い出せたようです。

そして新たに覚醒した力『魂鎧装』

これは魂獣解放とは違い、サイ自身の中にある法力を鎧化する力なので法力をあまり使う事ありません。

さらに戦友達の魂石をその身に再び宿した事により、多少の無茶は出来る様になりました。

・・・まあ、と言っても麻帆良に居る時よりは不自由ですけどね。

さて、ではこの辺で次回に続きます^^

また会いましょう、さよ～なら～

## 第二十七話：前を向いて歩こう

サイとフェイトなる少年の死闘が繰り広げられていた時と丁度同じ頃。

ホテル嵐山でも関西呪術協会の手による襲撃が掛けられていた・・・何と、直接刺客が侵入して木乃香を誘拐しようとしたのだ。

しかし、最初はスパイだと思われていた刹那への懸念や疑惑も解消され、ネギと刹那にエヴァの援護を受けた明日菜の三人によって見事、木乃香を取り戻していた。

しかし・・・何故かあんなにも頑なに戦うと言っていたサイが来なかった事。

そして刹那に対して木乃香の一言が、彼女を取り乱させて結果的に逃げ出すと言う事態を引き起こす。

以上の二つの事態がエヴァ&茶々丸と刹那の離脱を招き、結果として明日菜とネギが木乃香をホテルまで苦労して運んだのは言うまでも無い。

「ふう・・・私とした事が、取り乱して逃げてしまった・・・。情けないぞ、刹那・・・サイさんと約束して、お嬢様に少しでも歩み寄ると誓った筈なのに・・・」

いきなりの事に取り乱し、逃げ出してしまった刹那。

彼女はサイとの修行の時に聞かされたように、少しでも木乃香に歩み寄ろうと努力をしていた。

しかし悲しいかな、頭では例え己の秘密を語っても木乃香に拒絶されないとは理解出来て居るが・・・心の方が踏ん切りがつかなかったのである。

それにもう一つ

関西呪術協会の刺客の襲撃の少し前から、外に散歩に行ったサイが戻って来ないのだ。

後でエヴァから聞かされ刹那、ネギ、明日菜の三人は驚愕したのだが・・・麻帆良から離れた事により今までのように力が使えず、ほぼ普通の人間と同じような状態になってしまっているのだと言う。口では『心配などする必要はない』などと言っていたエヴァや、表情の解り辛い茶々丸が直ぐにサイを探しに行った事を考えれば

自分と同じように心配している事は理解出来た。

・・・まあ、本来は最初にその事を聞かされた際、明日菜とネギも『一緒に探す』と言ったのだが。

そうなってしまうと木乃香をホテルに連れて行く者が居なくなってしまう為に渋々二人は戻っていったそうだ。

「一体サイさんは何処に・・・？」

周囲を見回しながらそう呟く刹那。

・・・今まで少なくとも十数年程度だが生きてきた中で、彼女がこれ程他人の心配をしたのは二人しか居ない。

一人は勿論、木乃香である事は説明する必要などあるまい。

サイの力の強さを危険視し、刃を向けた時があった。

サイが人外であり・・・己よりも他人に拒絶され、卑下されて生きて来た事を知った。

その所為でサイ自身が他人を拒絶し、孤独に誰にも関わらずに人を傷付け続けていた事を本人の口から知った。

そして・・・自分を信じてくれた友のお陰で本当に大切な事を理解し、変わる事が出来た事も聞かされた・・・。

サイと刹那は似ているのだ。

友という存在のお陰で己が人外である事に苦しまずに生きる事が出来るようになったという事については。

勿論その後は違う……。

一人はハーフだと言う事を己自身で乗り越え、結果的に頂点まで上り詰めた。

もう一人は拒絶される事を恐れ、己の本心を隠し、唯『日陰者』として生きる事を選んだ。

そして一人は多くのものを失い、それでも生きる道を選び

もう一人は大切なものを失わないように、今まで拒絶しようとしていたものに歩み寄ろうと努力をしているのだから……。

話を戻そう。

ホテルの付近をゆっくりと歩きながらサイの事を探していた刹那。だがふと、彼女の目に信じられない光景が映った……。

「なっ……これはまさか、人払いの結界!？」

くっ、奴らめ……まさかこんな所にも木乃香お嬢様を攫う為の準備をしていたとは……。

迂闊だった、よくよく考えてみれば刺客が二人だとは限らないと言うのに……明日からより一層気を引き締めねば」

其処まで呟いた所で疑問が浮かぶ。

此処に人払いの結界があったと言う事は、少なくとも此処にも関西呪術協会の刺客が居たと言う事だろう。

なのに此処には誰も居らず、強引に結界が何らかの力によって破壊

されていただけだ。

その事を疑問に思った刹那は首を捻る・・・その時だった。

「・・・！？ 誰だ！！」

破壊された人払いの結界の中で今、小さな音がした。

さらに結界の中に人の気配のような物がする 正体は何だか解らない刹那は咄嗟に飛び退くと『愛刀・夕凧』の柄に手を添える。

・・・風の音も無い、静かな時が流れる。

奥の方から姿は見えないが、どうやら傷を負っているらしい人物がゆっくりと歩いて来た。

刹那の柄を握る手に力が籠る・・・が、その正体に気付いた瞬間に柄を持っていた手から一気に力が抜けたのだ。

刹那の目に映った人物、それは

全身中に大小さまざまな傷を負い、一番傷が深いと思われる脇腹を押さえながらフラフラと歩くサイの姿だったのだから。

「・・・さ、サイさん！？

どうしたんですか、その傷は一体・・・！？」

刹那のその言葉にゆっくりと声のした方向を見るサイ。

其処に居たのが顔見知りの、ある意味では弟子のようないつも修行を付けてやっている少女だと気付くと小さく笑う。

「・・・よう・・・元気が？」

取り合えず・・・敵の刺客らしい餓鬼は・・・追い払って・・・おいたぞ。

こっちも大分、傷負っちゃった・・・けどな・・・」



そのまま弱弱い足取りで刹那の近くまで歩くサイ。  
そして刹那の真前に立つと、あまりの傷に呆然としている刹那の方にゆっくりと倒れこみながら呟いた

「悪いけど・・・ちつと寝かせて・・・くれや。

色々なモン・・・思い出したり・・・急激に力を・・・覚醒させて・・・疲れてんでよ」

その言葉を最後に寝息を立て始める。

・・・周りの状況を垣間見れば、少なくとも此処で明らかに激しい戦闘があつた事は容易に理解出来た。

そして刹那は此処で激しい激闘が起こり、おそらくその所為でサイが見た目に重傷のように見える傷を負つたのだと言う事も理解したのであつた・・・。

他の生徒に見つからない様にホテルの部屋へとサイを運んだ刹那。しかし一応、男子だと言う事を考慮した学園長が3-Aの女生徒達の部屋とは別に借りたシングルの部屋の中には刹那以外にエヴァと茶々丸が居り、実に狭かつた。

「全く・・・どうしてこう、言われた先から無茶をするんだこの小僧は」

ぶつぶつ文句を言いながら苦手な回復魔法をサイに施すエヴァ。

サイを探し回っていたエヴァと茶々丸は偶然にもホテルの方へとサイを肩に担いで歩いている刹那を見つけた。

その際に襲撃を掛けられた時に他にも刺客が居た事、そしてそれを

撃退する為にサイが無茶した事を聞いたエヴァは大きく溜息を吐いたと言う……。

「マスター……サイさんは大丈夫なのでしょうか？」

エヴァとは違い心配そうに声を掛ける茶々丸。

先ほどサイがこの部屋に戻って来た際に高性能センサーを利用してサイの身体状態をチェックした時は脇腹の深い傷以外は問題無いと言う結論に達した。

しかし……少しずつだが人の心と言う奴をサイのお陰で理解出来るようになり始めた茶々丸にとつて、データ上では問題無くとも心配だと言う思いは消えない……。

そんな茶々丸にエヴァはサイの方を見ながらだが安心させるように言葉を掛ける。

「……心配無いぞ、茶々丸。」

どう言うカラクリなのかは理解し難いが、サイの『超回復力』とも言える傷の再生力が復活している。

脇腹の大きな傷までは完全に再生出来ないようだが、細かい傷の方は自然と治癒されたようだ。

もう少しの間、流血を抑えておけばサイ自身が私の魔力を吸収して傷を塞ぐだろう」

「そ、そうですね……良かった……」

茶々丸が胸を撫で下ろす……だが、実際の所内心のエヴァは不甲斐無さで一杯であった。

かつて『不死の魔法使い』やら『闇の福音』やらと呼ばれ、間違いなく最強クラスの魔法使いとして恐れられていたエヴァ。

だがその実、人を殺す為の術は誰よりも得意としているのだが……

人を救う、人を癒すと言った事についてはからつきし駄目なのである。

精々出来るとすれば、負った傷から流れる血を抑える程度の事。

今まで不死の肉体を望まずに得た事を後悔したり憎んで来たが・・・今日ほど不死の肉体を得て、それに甘んじて治癒の魔法を覚えて来なかった事を不甲斐無く思う事はなかった。

この後、エヴァは約2時間以上もの間をサイの流血を抑える事に注込んだ。

そして無意識ながら痛みと苦しみに歪むサイの表情が落ち着きを取り戻し、穏やかになった後・・・そのままサイの額に手を置いたまま疲れから眠ってしまう。

刹那も同じようにもう大丈夫になったのだと思い安心したのだろう、同じように椅子に腰掛けながら眠る。

・・・最後に残った茶々丸は、二人に備え付けのシーツを掛けるとこの安息の時間を邪魔させないように己が周囲を警戒するのであった。

「う、ん？・・・朝か。

痛っ・・・やれやれ、昨日の傷が完全には塞がっちゃ居ねえようだ  
な」

次の日の朝、サイは朝日の光によって自然と目を開けていた。

身動きをすると感じる身体の痛み　　つらくなくは無いが、取り合えず我慢出来なくも無いのでゆっくりと立ち上がった。

鏡に映せばその部分に負った傷が酷い物だというのが嫌でも解ってしまう・・・。

「良く一日で塞がったモンだ。  
まあ、昨日からキティの魔力って奴を感じてたから・・・多分、ア  
イツが無茶してくれたんだらうけどよ」

そう呟くと綺麗にたたんであった着物のような上着に目を向ける。  
あれ程の死闘があり、全身に受けた傷と共にボロボロであった筈の  
服は傷どころか汚れ一つ無く其処の存在していた。

それはそうだ、この服は言うなればサイ自身の法力が物質化してい  
る“スピリットローブ魂衣”と呼ばれる物である・・・例え破れようとも、サイが生  
きている限りは必ず再生する。

・・・そういう存在だというのを“思い出した”。

「・・・・・・」

無言のままに今度はサイの愛用の神具、七魂剣スサノオに目を向け  
た。

姿は今までと殆ど変わりはない・・・しいて言うなれば七魂剣の柄  
には色の無い透明な宝珠が新たに装着されている事位だ。

しかし、明らかにその雰囲気はサイが今まで使っていた神具とは違  
う巨大な力のような波長を感じる・・・。

だが驚く事は無い。

寧ろこの姿、この力を放つ姿こそが実際の神具の姿なのだから。

サイが今まで使っていた物は寧ろ、今のサイと同じく『セーフモード制御状態』  
のような状態だった。

それが『戦友達の記憶』を取り戻した事により、本来の姿を取り戻  
しただけなのだ。

「・・・ロック」

小さく思い出した友の名を呟くサイ。

悪友のようであり、最初に『魂獣大帝』を決める為の戦いで戦友となつた紅蓮の弓闘士。

すると彼の手の平の上に紅玉ルビーのような宝珠が現れ、七魂剣の柄の宝珠に吸い込まれる。

「……ミツキ、アガート……」

凛々しく、それでいて海のように優しくかつた深海の王女。

誇り高き騎士としてサイを主と見定め、多くの戦いで背を護り戦つた銀腕の天空騎士。

更に呟くと今度は翠玉エメラルドと黄玉トパーズのような宝珠が手の平に現れた。

二つの宝珠は同じように七魂剣の柄の宝珠へと吸い込まれる。

「……ダレス、カヌキ、デヒテラ……」

強さを求め、それでいて武人としての教務も捨てる事無かつた怪力無双の獣帝。

英知を知り、聡明なる頭脳を以つてサイを支えた樹海の才媛。

穏やかで麗しく、共に多くの戦を超えて来た白銀の姫騎士。

ダイヤモンドダイヤモンド サファイアサファイア ラピスラズリラピスラズリ  
金剛石に蒼玉、そして瑠璃のような宝珠が現れては七魂剣へと吸い込まれる。

この行為の意味は解らないが、宝珠が出て来る度にサイは懐かしそうな表情をしていた。

「……メルト」

かつて自分を変えてくれた親友にして、至上の古代導術師。

すると手の平には紫水晶アメジストのような澄んだ色の宝珠が現れて吸い込まれる。

「……ルーグ」

何度と無く時には戦い、時には共に歩んだ黄金の騎士王。

その名を呼べば、サイの手の平には輝磁石アタマンタイトのような宝珠が現れては

七魂剣に吸い込まれた。

・・・そしてもう一人。

サイにとつては何よりも大切だった人物の名が口から呟かれた。

「・・・ムジナ・・・」

サイと同じく魂獣と人間の混血にして、かつて魂獣大戦を起こした  
隠神刑部一族の長の娘。

三刀流と呼ばれる変則の剣術を使い、畏篤忍軍最強と呼ばれ恐れら  
れた稀代最強の黒き風の姫。

その手の平に黒玉オニキスのような宝珠が現れ・・・サイの七魂剣へと吸い  
込まれた。

その全てが吸い込まれたその時

七魂剣の柄に装着されていた透明の宝珠が、虹色に光り輝く。  
まるで主の目覚めを喜ぶかのように・・・。

「・・・俺はもう忘れない、お前達がいてくれたからこそ俺は此処  
に居る。」

まだ全てを思い出せた訳じゃない、解らない事や何故此処にいるの  
かも理解出来ない。

だけでももう大丈夫だ・・・ありがとう、俺は今も生きている・・・」

そう言い残すと、サイは魂衣を羽織る。

まるでマントと着物を合わせたような姿となった魂衣は今まで以上  
にサイに似合っていた。

また、己の意思で魂衣の姿を変える事も出来るようになったサイは、  
昨日の戦いでボロボロとなった学生服を模したような白ランへと外  
見を変えさせる。

そうして部屋を出て、3-Aの者達が待つ大広間へと向かったので

あつた……。

大広間では朝食の時間が終わっていたらしく、女生徒達が本日の奈良見学の予定を話し合っている真つ最中であつた。

其処に白の学ランを纏つたサイが現れると……何名かは怪訝そうな表情で、何名かは驚いたような表情で、そして何名かは大分憂鬱げな表情をして頭を押さえながらサイを出迎える。

「あら、サイさん？」

今日は調子が悪いからホテルで休んでいるとエヴァンジェリンさんから聞きましたけど……？」

怪訝そうな表情をしている人物達を代表して、どう見ても中学生には見えない母性を自然と振りまいている人物……出席番号21番の那波千鶴なはちづるが声を掛ける。

実は彼女、本編には余り書かれて居なかつたがいつも怪我をしたり他人と距離を取ろうとしている（ように千鶴には見えた）サイの事を何かと気に掛けてくれていた優しい人物だ。

ある意味では腕っ節や喧嘩などと言つたものとはまた違つた『強さ』というものを知っている少女であり、サイもお節介を焼かれても悪い気はしないのか自分から話しかける事は無いが話さない訳ではない人物である。

（尚、サイがエヴァや茶々丸に美空などと言つた関わりの多い人物以外と積極的に関わりを持たないのは一般人を裏の世界に関わらせない為の彼なりの配慮）

「ああ、ゆっくり寝てたら調子良くなつてよ。

んで、起きても大丈夫そうだったから起きて来ただけだ……ちな

みに制服が変わってんのは、昨日の制服が寝汗の所為で着れなくなつたから予備を着てるのさ」

「あらあら、なら良かった

皆で一緒に修学旅行に来ているんですものね、サイさんだけ一人でお留守番なんて寂しいわ」

本当に心配していたのかサイの説明を聞いて笑顔を見せる。

最初に会った頃からまるでやんちゃな弟のようにサイの事を感じていた彼女にとって嬉しい事だろう。

・・・まあ、少なくともサイが“思い出した”年齢は外見年齢など夕に超えているが。

怪訝な表情をしていた者達も、千鶴が聞いてくれた事によって納得したようだ。

続いて憂鬱げな表情をしている人物の代表そんな出席番号14番。

のどか&夕映の悪友のような存在であり、ちよつと調子に乗り過ぎる事と変わった趣味が珠に傷な少女の早乙女ハルナ・・・通称パールがサイに米神を押さえながら話しかけた。

「おっはよう・・・イタタタッ。

うつつ・・・朝から頭が痛いよう・・・」

どうやら昨日の音羽の滝にて酒の入った水をがぶ飲みしたのが原因で酔い潰れたのが原因。

早い話が二日酔いの様だ・・・良く見てみれば他にもパールと同じような表情をしている奴等も居た。

全く、急性アルコール中毒やらアルコール依存症にならなかつただけまだマシである。



「フン・・・自業自得だ馬鹿者が」

そんな事には興味も無いらしく、しかもサイに慰めの言葉を期待する方が愚かである。

米神を押さえているパルに対しての一言は、呆れ交じりの失礼な一言であつた。

「むゝ・・・サイ君、冷たいねえ。

それが苦しんでるか弱い同級生に対する態度なの？ もう少し優しくしてくれてもバチは当たらないよ？」

「知るかこの馬鹿、しかも何が弱いだ・・・。

テメエがもしか弱いとすれば、世界中の全ての女がか弱いわこの阿呆が。

それに未成年ガキの分際で酒飲んで二日酔いになんぞなってる奴に優しくする義理なんぞねえよ」

実に無礼千万の、一目目とは打って変わったサイの口調。

まあ、戦う為の方法やら過去の記憶の断片をまた少しでも思い出せたのが彼をいつも通りに戻したのだ。

・・・それが『良い記憶』であれ『悪い記憶』であれだが。

「ぶゝ、サイ君のケチんぼ。

でもそれよそれ、一体誰があんなイタズラしたっての？」

「・・・それこそ知るか。

どっかにテメエのように悪ノリする阿呆でも居たんだろうよ」

流石に『木乃香を狙う関西呪術協会とか言う胡散臭い連中がやりま

した』とも説明出来ないので適当に相槌を打つ。  
結構失礼な事を言われているのだが、元々楽観的で明るい性格とサイの口の悪さを短い間で理解したパルは口では文句を言いつつも気にしない。

「まあ良いけどね・・・アイタタツ・・・。  
あゝ、もう・・・本当に頭イタイよう・・・うん・・・」

その後姿を見たサイは溜息を吐きながら目的の場所へと向かう。

・・・一応、後で奈良の見学に出た時に二日酔いの連中全員の分の『二日酔い用の薬』でも買おうと思いつながら。

前にも言ったが、意外とサイは口は悪いが面倒見は良いのだ。

最後に驚いたような表情のエヴァ達の元に向かう。

最初は驚いていたようだが、サイが身体に殆ど不調を残していないように見えた為に安堵する。

ちなみに此処に居るのはエヴァに茶々丸に彼女に抱かれているさよ（人形）、刹那に明日菜&ネギ、更にザジと美空だ・・・ちなみにさよは周りに人が多い為が一応黙っていた。

尚、サイが寝込んだと聞いてのどか&夕映に古、楓、真名の五人も色々な思惑のようなものを持って興味津津風に見ていたが

「・・・サイ、身体はもう平気なのか？」

エヴァが全員を代表してそう聞く。

見れば心無しか疲れたような表情をしている　まあ、約二時間以上もの間を魔力を制御された状態でサイの流血を抑えていたのだから当然といえば当然の状態だ。

「ああ……どこぞの誰かが無茶してくれたお陰で、な」

その言い方でサイとエヴァは笑う。

この二人には余計な言葉など必要ない……相手の口ぶりで大体だ  
が何を言わんとしているのか理解しているのだから。

「お兄ちゃん……本当に大丈夫なの？」

刹那さんやエヴァさんに聞いたよ？ 凄い怪我をして居たって……  
」

ネギが心配そうに声を掛けてくる。

彼（彼女）はサイの事を厳しくも優しい本当の兄妹のように慕って  
いるのだから当然だ。

「そうよ、私もビックリしたわよ。」

サイが昨日、別の所で戦ってたって今朝に刹那さんから聞いてさ……  
・しかもアンタ、エヴァちゃんから聞いた話じゃ弱くなっちゃって  
るんでしょ？」

昨夜、木乃香を関西呪術協会の刺客に攫われた際。

明日菜はネギやらエヴァやらに任せて散歩から戻って来ようとしな  
いサイに対して憤りを露にしていた。

当然だ、自分は何もせず他に人間に無茶をやらせるなどと言うの  
は彼女としては納得しがたい事なのだから。

しかし今朝刹那からサイが別の場所で戦っていた事、そしてエヴァ  
からある事情でサイは力が制御されてしまった事を聞いてその考え  
を改めて本気で心配した。

何せサイはほぼ人間のようになってしまうた状態で強力な刺客を追  
い返したというのだから。

……その所為で深い傷を負ったと聞いた時、明日菜の心が痛んだ

のは口にしなかったが。

「本当ですよ Сайさん……。  
一人で無茶をしないで下さい……し、心配したんですから（ぼそっ）」

サイが苦しんでいる間、ずっとその姿を見ていた刹那。

今朝、目が覚めた時に表情が穏やかになっていている事を確認して静かに部屋から出たのだが気にはなっていた。

何せ、魔法で治療したとしても後遺症が残るだろうという懸念が出るような深い傷だったのだから。

「ちよ、うわぁ……。

サイ君、こんな傷をシスターやココネが見たら気を失っちゃうよ。

駄目だよ、神父さんも言うじゃんか『汝自身を愛するように汝の隣人を愛せよ』ってさ。

人を助けたいって思っても、自分が無茶して心配掛けちゃ本末転倒だって」

ちやつかりサイの横に行くと、前が全開で開いてインナーはシャツ一枚のシャツを捲って傷を確認する美空。

其処から見えた大きな傷を目で確認した彼女は、サイの無茶を諫めるようにそんな風に呟いた。

「 Сайさん……何かお身体に不都合はありませんか？  
もしあるようでしたら遠慮なく言ってください、私に出来る事ならお手伝いいたしますので」

茶々丸の言葉と共に他の者に解らない様にウサギの人形が小さく何度も頷く。

どうやらこの二人も昨晚苦しんでいたサイを見て心配していたのだらう。

「……………(じゅっ)」

更に茶々丸以上に無表情で無口なザジまでがサイの服の裾を掴んで見つめてくる。

無口で、しかも表情が変わらないので解り辛いが……彼女も彼女なりに自分と同じ存在であるサイを心配しているのだ。

「あゝあゝ、もう解ったつうの！！

つうかテメエらは俺の心配なんぞよりもまずは自分の事を考えてろ、馬鹿共が」

サイはそう言い終わるとさっさとホテルの入り口の方へと向かって行った。

照れ臭いというのもある、しかし関西呪術協会の刺客がいつまた襲って来るか解らない様な状況ではまず己自身の心配と警戒を怠らない事が大事だらう。

……と言ってもエヴァやら刹那やら一部以外は一応は多少“裏”に関わっているとは言え一般人だ、出来れば巻き込みたくないと言うのが本音である。

「……………たく、心配性共が」

ぶつぶつ言いながら入り口へと向かうサイ。

心の中ではサイも彼女達に感謝しているのだが、元々口が悪いので感謝を表すのが苦手なのだ。

その手には朝食の際に残っていた白米を不恰好に丸く握って貰った海苔を巻いただけのおにぎりモドキが握られている。

それを食べながら歩くサイの姿は意外にも似合っているように見えた……。

と、其処に……。

「あゝ、サイくん発見や〜」

声と共に近づいて来る足音。

口調と声で振り向く必要も無く誰だかは理解出来る、今回の護衛対象である木乃香だ。

「……何か用か？」

相も変わらずそっけない口調で言葉を返す。

その事を別に咎める事も無く、優しげな笑顔を浮かべた木乃香が振り返ったサイの前で止まった。

「もう、サイくん〜。

駄目なんか、今日の奈良見学は班別行動やで？ 一人で勝手に行ったらアカンて〜。

それに、そんなに難しい表情してたらアカンえ？ やっぱりニコニコしてな〜」

「……悪イがこれが地顔なモンでな。

それに班別行動だったって、俺ん所の連中は現地集合って事にしてるから問題ねえよ」

今更もう誰に対しても態度を変えないサイ。

しかし、そんな飾る事の無い性格と生き方が意外と思春期の少女達に好意を抱かせているのだから人生とは解らないものだ。

勿論、木乃香も好意を抱いている内の一人である。

・・・と言ってもサイへの感情は恋愛と憧れの間と言った所だろう。

かつてエヴァがまだサイと邂逅する前に『桜通りの吸血鬼』を語り、3・Aの生徒達の血を吸っていた時に偶々出会ったのだが・・・その時に見ず知らずでありながら快く『助けてやる』と言ってくれたその姿は今でも木乃香の脳裏に深く刻み込まれているのだ。

これが“愛”と言う感情なのかはまだ解らない。

それでも、少なくとも彼女がサイを慕っている事は火を見るよりも明らかだ。

・・・だが其処でふと、木乃香はサイに疑問を飛ばす。

「あんなく、サイくん。

実はウチ、昨日変な夢見たんよ。変な人にウチが攫われて、せつちゃん（刹那）やネギ君やアスナに助けられるなんて夢・・・。

でも夢にしたら随分リアルに感じたんや・・・これどう言う事なんかな？

せつちゃんは夢を見ただけって言うんやけど・・・」

どうやら昨日襲われた際に刹那達は『夢だ』とごまかしたようだ。

まあ、元々学園長から聞かされた話では木乃香の両親は魔法の事を娘が知るのを良しとしていないと言っていた。

その為の刹那や明日菜やネギなりの“苦肉の策”と言う奴だろう。

しかし木乃香はおぼろげながら攫われた事を夢と言われた事に疑問を持っていろいろだ。

そんな彼女にサイは慌てる事もなく言葉を返した。

「んな夢はとつと忘れちまえ。  
そもそもホテルの中で攫われたなら寝てる連中が大勢居るんだ、誰かどうか気付くだろ。」

現実的に考えりゃ誰も起こさずにお前だけ攫うなんて無理だ、無理」

そう言い終るとさっさと歩き出すサイ。

彼の言葉を聞いても木乃香はまだ後ろで首を捻っていたが・・・明日菜達が来た為、疑問を忘れるのであった・・・。

新たな力、過去をまた少し取り戻したサイ。

しかし・・・まだ問題は山積みだ、そして再び新たな問題が起こる事を彼は知らない。

しかも、それが3・Aのある生徒によって・・・。



## 第二十七話：前を向いて歩こう（後書き）

更新完了です。

ついに今回にてサイは完全に戦友達の記憶を思い出しました。

まあ、良い部分も悪い部分もありますが。

そして他にも己の年齢や力なども思い出しました。

何故この麻帆良に居るのか、そしてどうやって来たのかはまだまだ後まで語られません・・・。

細かい設定などは設定の部分を常時更新中です。

もし気になるような事や裏設定が知りたいのであれば見てみてください。  
さい。

ではではまた次回、お楽しみに！

## 第二十八話：懲りない奴等

「あゝ、良い天気だねえ」

惚けたようなそんな一言が晴天の空に響く昼、場所は鹿と大仏で有名な『奈良公園』

『魂鎧装』ソウルアツクという力と過去の戦友達との記憶を取り戻したサイは、空を見上げながらそう呟く。

「全く・・・ジジイかお前は」

横からそう厳しい突っ込みを入れるはサイの喧嘩友達であるエヴァ。まあ、本人はどう想っているかは解らないが・・・言うなれば最もサイに近いポジシヨンの少女だろう。

彼女自身も、口には出さないが奈良の雰囲気を入ったのか満足げな表情をしているが。

「ああ？ まあ、ジジイかって聞かれればジジイだろ。

何せ思い出せた記憶で解ったが・・・俺、700年以上生きてるみてえだしな。

外見がガキンチョな理由はまだ良く解んねえけどよ」

・・・前回、かつての戦友達の記憶を思い出した際に彼は他の事もいくつか思い出した。

一つはサイは人間の年齢に換算すれば700歳以上・・・つまり七百年以上は生きている、大妖怪に近い程の九尾だと言う事。

一つは、かつて魂獣大帝スピリッツカイザーと呼ばれる存在となる為に多くの戦いを経験し・・・その結果、己が大帝となった事。

そして・・・戦友達はもう既にサイの家族と同じく亡くなっているが、サイの心の中に共にいると言う事だ。

しかし・・・それ以外は未だに不明のまま。

漠然と『魂獣大帝だった』と言う事は思い出せたが、其処に到るまでの道のりやそれからの事。

更にそもそも何故、サイがこの世界に“少年の姿”で目覚めたのかと言う事など、理解出来ない事は未だ山積みである。

だが

「つつか、テメエもババアじゃねえかよ。

600年も生きてるんだろ、だったら左程俺と変わらねえんじゃないのか？」

「喧しいわ、誰がババアだ誰が！！

私の場合は600年以上前に真祖になってるから身体の成長が止まってるんだ！！

よって私はババアではない、成長しないだけのツルペタ吸血鬼だ！！  
・・・って、誰がツルペタだゴラアアアアアア！？」

だが・・・少なくともサイは気にしないだろう。

喧しく賑やかだが・・・退屈する事の無い今の日常を彼はそこそこ気に入っているのだから。

「逆ギレすんじゃないやねえよロリババア。

年取っていようが居まいが600年も生きてるんだから外見は別としてババアにや変わりねえだろ？」

「だ〜か〜ら〜、ババアと呼ぶなババアと！！

（え〜い全く、こういった部分は本当にナギとそっくりな奴だな・・・  
・人の神経を逆なでする所なんか瓜二つだ！！）

戦友達の想いを胸に、何だかんだで楽しんで生きているサイ。  
しかし勿論、そんなサイとエヴァのじゃれ合いを快く思わない者も  
居るようで……。

「……………(クイクイツ)」

相も変わらず無口で無愛想で無感情なザジがサイの袖を引っ張る。  
その向かおうとしている先には多くの鹿が居た……流石は知られ  
て居ないが動物好きだけある。

どうやら『見学に行こう』とでも言わんとしているのだろうか……  
若干、何処と無く背に籠を背負ってエヴァを見ている。

いや、あれは見ようによっては睨んでいるな。

「……………ほほう、良い度胸だザジ・レイニーデイ」

サイ、行くぞ！ あつちには奈良で有名な大仏殿がある……お  
前は確かそういった物が好きだったよな？」

そう言いながら逆に引っ張るエヴァ。

その背に虎のような幻影ヴィジョンが見えるのは多分、いや間違はなく気の所  
為ではないだろう。

ザジの背に見えた籠とバチバチと今にも火花を散らすかのような勢  
いだ。

エヴァの後ろに居た茶々丸もオロオロと明らかに狼狽していた。

さらに……その姿を見て少し離れた場所で鳳凰のような幻影を出  
している少女が一人。

その少女を団子を持って追いかけながら玄武の様な幻影を見せるお  
とぼけ少女が一人。

ついでに確か好みのタイプはオジサンだった筈の少女がサイのその  
姿を見て不機嫌そうに大股でどこかに向かう。

それらは未だ自分の気持ち理解出来ない少女達であった……

。だが、同じ班内とその友達に多かれ少なかれ好意を寄せられている筈の漢はと言うと

「・・・・・・・・・・？」

「むっ、サイが居ないだ！？ 奴め何処に行った！？」

「・・・・・・・・マスター、先ほどサイさんならザジさんとらみ合っている時にすり抜けて何処かに向かわれましたよ。『両方から引つ張られて裂けたら適わねえ』とか言っていたらっしやいましたけど・・・」

そう、サイはもう既に面倒な状況となる前に脱出していた。その事にエヴァが憤り、ザジが寂しげにし、茶々丸が再びオロオロとしていたのは言うまでも無い。

更にこの後

実はのどかだの古、楓、真名だのがサイと共に奈良見学をしようと画策（のどかの場合パルと夕映がだが・・・）していたが。

自分の好きな大仏などを見れてはしゃいでいたネギの事をすっかり忘れていた事によりネギが迷子になってしまい、探し回った事によって奈良公園の自由時間が終わってしまった事は説明しなくても良い事だろう・・・。

（ちなみに美空は隅で笑顔のままに放たれる殺気の応酬に萎縮して涙目で震えていたそうだ・・・）

そして物語はついに、血を血で洗う修学旅行二日目の一大イベントの少し前の時間へと続く。

「まったくよお・・・ネギの馬鹿はもうちつと周りに目を向けられんモンかね？」

そうブツブツ言いながら廊下を歩くサイ。

夕食の時間は既に終わり、誰も入っていない事を確認してネギに先に風呂に入らせた後に早めに風呂に入り・・・そして今は一日目に侵入者の襲撃があつた事を考慮して散歩がてら周囲の見回りをしていた。

実はサイは学園長からのもう一つの頼みで学生ながら暴走するであろう3-Aの生徒達の静止役も任されている。

本来いつも騒ぐ学生達を見張る役が出てくれた事により、先生達も少しは気が楽になったようだ。

・・・例えそれが（外見のみ）中学生の生徒でも。

「やれやれ・・・まあ、ガキ共が寝るまでまだ時間はあるしな。

取り敢えず屋根にでも登って周囲の確認でもしておくか 刹那  
の言った通り式神使いなら、簡易結界の張つてあるホテルの周りで何か動きがあるだろうし・・・」

まあ、少なくともあの『フェイト』とか言う人物が襲撃をかけて来たら関係ないだろうが。

あれは間違いなく、最強クラスの魔法使いのエヴァに迫るほどの実力者だと手合わせしてサイは理解していたのだから・・・。

「さて、んじゃ登るか。

・・・ん？ アレ、あのパイナップルみてえな髪型の奴は確か・・・

樋を伝つて屋根の上に登ろうとしたその時、ふと視界の端に蠢く不  
振な影を見つけた。

いや不振ではないな・・・赤い髪をパイナップルのように後ろで束  
ねた髪型の人物、サイが知る限りの人物ならそれは一人しか居ない。  
その人物が潜んでいる場所の近くに見えるのは・・・先ほどまでサ  
イヤネギが入っていた温泉の浴場だ。

「・・・何やってんだパイナップル女」

「うわあっ!?! (ガツシャ~~~~ン!?!)」

忍者の隠行の術ばりに足音一つ立てずに陰に居た人物の肩を叩くサ  
イ。

当の人物は人が居るとは気付かなかったのだろう、騒々しい音を立  
てて転がり出て来たのは3-Aの生徒の一人

その手にカメラとメモ帳を携えた新聞記者・・・いや、寧ろゴシツ  
ブネタを掴む事を好むパラッチのような風体の、人呼んで『麻帆  
良のパパラッチ』こと出席番号3番の『朝倉和美』あさくらかすみであった。

「いった~~~~!! もう、脅かさないでよサイ君!! 酷いじ  
ゃんか~~~~!!」

「喧しい、あんな暗がりでおかしな動きをしていたテメエを呪えこ  
の馬鹿が」

サイの質問を無視して頭を押さえて呻く朝倉。

驚いた時にどこかに頭でもぶつけたのだろう・・・それでもカメラ  
だのメモ帳だのを手放さないのは流石と言うべきか?

だがあんな所に取材するような物は無かった筈だが・・・。

「所であんな所で何やってたんだテメエ？ あそこの先って確か浴場しかなかった筈だがよ」

「ああ、いや、ちよつとした“取材”をね・・・」

『取材・・・？』その言葉の意味が理解出来なかったサイは首を捻る。

先にある浴場に取材出来る物などなかった筈なのだが・・・ふと科白の意味をよく考えたサイは、ある結論に辿り着く。

有り得ないと思いつつも今の状況や隠れてこそ何かをしようとしていた事などを考慮し、現状ではそれ以外に理由が思いつかないと悟ったサイは・・・万感の思いを込めて確りと朝倉の肩を掴む。

「そうかテメエ・・・其処まで堕ちたか・・・」

「へっ、えっ？ ちよ、あれっ・・・何か私、すっごい失礼な事言われてるもしかして？」

サイの遠い目付きや肩に籠る力の強さに冷や汗を流すパラッチ娘しかしそれには一切合切り合わず、サイは溜息を吐きながらゆくりと首を横に振る。

「とうとうクラスの奴等の覗きまでやり始めるとは・・・。こうなったら一応、クラスメイトとして俺に出来るのは一つだけだ」

「ちよ、ちよつと！！ 私覗きなんて・・・まあ、確かにしてなくは無いけど・・・。

つて、えっ？ ちよ・・・何それ！？ どっからそんな物出したの！？」

いつの間にかサイの手に現れた短刀（七魂剣の通常状態）を目にした朝倉が顔を引き攣らせた。



「これ以上犯罪と言う間に身を落とさんように俺が直々に引導を渡してやるよ。」

ああ、心配すんな痛いのは一瞬だけだ　あとクラスメイト達にはそれなりに理由は考えておいてやるから、安心して逝けや」

「ちよ、何真顔で物騒な事口走ってんの!？」

え、ちよ・・・ちよちよちよちよ、ちよつと待って、振りかぶらないで、肩離して、命だけは勘弁してええええええ!!!!!!???

『ちよ、旦那、サイの旦那!!　落ち着いて、落ち着いてくださいええええ!!!!!!?』

久しぶりに聞いたその声に七魂剣を構えていた手を下ろすサイ。ふと見てみれば・・・其処には本来ならばネギと一緒に居る、この修学旅行では殆ど出番のなかった小動物工口親父ことアルベール・カモミールが居た。

「ああ?　何でテメエが此処に居るんだ存在自体が害悪なクソオコジヨ」

『ヒドッ!?　おれっちの存在ってなんなんすかそれ!?!』

大分酷い事を言っているがサイにとっては当然だ。

何せこのクソオコジヨはネギにパートナーを作るなどのたまい、今まで裏世界に何も関係ないような連中を引っ張り込もうと何度もした輩である。

元々、やむをえない場合は別としても関係の無い者を巻き込むのを嫌う傾向にあるサイには『害悪』以外の何者でもないのだ。

『あ、えつと・・・おれっちが此処に居る理由は話せば長くなりやすが・・・』

そう呟いた瞬間、カモの白い身体を握る手が一本。

その手の持ち主のサイは怖くなるような“イイ笑顔”をカモに向けると極めて優しい口調で呟く。

「握り潰されて下半身が無くなるのが望みじゃなけりや、早く解り易く簡潔に答える」

『ヒイツ!? ぎよ、ぎよぎよぎよぎよ、御意にございます、サイの旦那ああ!!!』

直立不動の姿勢で器用に敬礼のポーズを取るカモ。

その後カモの説明に耳を傾けるサイと、その間に地面に座り込んで子供のように泣きじゃくる朝倉が居た。

やり過ぎの感も否めないが、それでも少しは良い薬になったのではないだろうか?

まっ、その答えは解らないのだが・・・。

「ふくん、成る程なあ・・・」

極めて軽く、それで居て何処となく怖く感じる表情でサイは静かに呟く。

その感じからはサイが怒っているのか、それとも呆れているのかは理解出来ないが・・・。

【切れて良いですか?】

> Yes .

No .

脳内でおかしな選択肢が現れ、それがYe<sup>はい</sup>sを選択した瞬間

「あんのクソガキはあああああ!!」

何でいつもいつも言ってるのにな不注意で人に見られるような事してんだオラアアアアア!!

そもそも秘匿するモンなんだろうが、それをホイホイ使ってバラす様な真似すんじゃないやねええええええ!!!!!!!!

此処には居ないネギ・スプリングフィールドに向かってサイはやり場のない怒りをぶつけた。

カモから聞いた話を要約するところだ

本日迷子になった事で己の不甲斐無さを嘆いたネギはそれを挽回しようとしてホテルの周りの見回りを“いつも以上に無駄に空回りする程に気合を入れて”行い、その際に轢かれそうになった猫を助け、その光景を朝倉に目撃され、更にカモとの会話を聞かれ、拳句の果てには空を飛ぶ所まで写真に取られたそうだ。

この様なアホさに此処でキレずに一体何処でキレると言うのだろうか?

「おいクソオコジヨ・・・テメエと一緒に居ながら何だその体たらくは、ああ!？」

テメエの価値なんぞ下着ドロか、悪知恵を生かしてネギのフォロー程度しかねえだろうが!？」

その内の一つも確り出来ねえで何が使い魔だゴラア!？」

「だ、だだだだ、旦那落ち着いて!!」

それにおれっちは一応、仮契約バクテイオーつてな契約術も使え・・・グエツ!？」

カモを掴む腕を握り締めるサイ。  
万力のような力が途端にカモの腹にかかり、口から魂のような物が  
出ているがそんな事は知った事ではない。

「サ、サイ君サイ君！」

カモつちが泡吹いてる、泡吹いてるってば！！」

「あん！？ あっ・・・ああ、いけねえ忘れてたわ」

あまりのぶち切れかたにさらつと外道のような台詞を吐くサイ。  
握っていた力を緩めると・・・手の平から地に向かつて真つ逆さま  
に落ちたカモは運悪く石に頭をぶつけてピクピクと痙攣しながら白  
目を剥いていた。

「ん・・・あれ？」

そういえばカモつちを知っているって事は、サイ君ももしかして・・・  
「？」

朝倉が何を聞きたいのか理解出来るサイは溜息を吐きながら頷く。  
正確に言えばサイは『魔法関係者』では無いのだが・・・一々説明  
するのが面倒臭い。  
始めから魔法関係者だと言っておけばこれ以上深い詮索はされない  
だろう、どうせ魔法の事はバレているのだから。

「・・・で？　そう言えばこれからどうする心算だパイナップル頭  
？」

「誰がパイナップル頭よ誰が！！　って・・・へ？　これからどう  
するって？」

首を傾げる朝倉に対してサイは殆ど表情を変える事無く淡々と言う。

「魔法つてのは秘匿義務つて奴があつてよ。  
一般人に露見して知られた場合は、有無も言わずにそいつの記憶を奪う事になつてるんだが？」

目を細めてサイが朝倉を睨むと、彼女の顔面が一気に蒼白していく。更に無言で黙つたまま見ていると・・・ガクガクと朝倉は震えだし始めた。

・・・まあ、これだけ脅しておけば十分だろう。

「好奇心が多いのは結構な事だ。

だがな、余計な好奇心つて奴はテメエの命を縮める事になるって理解しろや。

じゃねえとテメエ 本当に紛争地帯のマスメディアみてえに『消される』ぞ・・・？」

其処まで言い終わるとサイの雰囲気が一気に穏やかな物と変わる。その変化が理解出来ない朝倉は未だに震え、カモは泡吹いてぶつ倒れたままだ。

「まっ、クソオコジヨが一緒に居たつて事はその馬鹿と何かしら取引でもしたんだろ？」

だつたらまあ、でしゃばらねえ程度にやるが良いさ・・・今の言葉を忘れねえでよ」

始めからサイは別に朝倉をどうこうしようとしていた訳ではない。元々彼は魔法使いではないし、そんな面倒臭い風習に縛られる気も更々無い。

最悪伝わってしまった場合は“穏便に”事情を説明して黙っていて貰えば良いだけの事だ 身の危険を感じてまで言い触らそうと

する輩も居ないだろうし。  
そもそも無理やりに記憶を奪うなどという乱暴な手段を取るよりは  
マシだろう。

それに面白半分で裏の世界に首を突っ込む事へ釘を刺す事も出来る。  
本来の所、サイは関係の無い者を巻き込むのを嫌うといったが・・・  
それでも覚悟があるなら裏に来る事を文句は言わない。

覚悟とは『殺す覚悟』と『殺される覚悟』と言う奴だ。

裏の世界に関わると言う事は言うなれば平穩無事のままに居られる  
訳ではない。

誰かに命を狙われる事がサイやエヴァと違い日常茶飯事と言う訳で  
はないだろうが、それでも危険がある事には変わらない。

そんな危険に遭遇した際に、自分が死ぬのも相手を殺すというのも  
覚悟出来ていなければ後悔を背負って野垂れ死ぬだけである。

曰く『誰かを撃つて良いのは、自分が撃たれる覚悟のある奴だけだ』  
と誰かが言っていたように。

「ああ・・・そうだ、一つ言い忘れてた」

サイのその言葉に半泣き状態であった朝倉が肩をビクツとさせて彼  
を見る。

すると彼は悪びれる様子もなく、意地悪そうに笑いながら告げた。

「さっきメエ斬ろうとしたの冗談だから安心しろ。

アホオコジヨが出てきた時点で大体の事は察してたからよ、んじや  
な」

背を向けて手を振りながら去っていくサイ。

何の事か一瞬理解出来なかった朝倉だが、サイの言った言葉の意味

を理解した瞬間・・・天に向かって叫んだ。

「冗談って・・・私冗談で殺されかけたのおおおおおおおお！  
？」

そんな叫びが鳴り響いた後、朝倉は力無く疲れたように頷垂れた。  
そして彼女は何か悪巧みを思いついたように笑うと、ホテルの部屋  
の方へとカモを連れて戻っていった。

・・・此処で止めておけば更に後悔しないで済むと言う事を気付か  
ぬままに。

サイが再び周囲の見回りに戻り、ネギと合流してこめかみを拳でグ  
リグリした後

二人は意外にも共にホテル周辺の見回りの為に仲良く廊下を歩いて  
いた。

「しっかし・・・バラすなどは言わねえが、もうちつと周りに目を  
配れ馬鹿。」

あのパイナップル頭にバレたって事は、情報網を駆使して世界中に  
バラされるぞ？

まあ、エロオコジョが口利きしてくれたから良いものをよ・・・」

「うつつ・・・ごめん、お兄ちゃん。」

でもボク、轢かれそうになった猫を放っておけなかったから・・・」

涙目になるネギの頭を乱暴に撫でるサイ。

最初の頃は同じ位の身長に見えたサイも、記憶を少しずつ取り戻し  
て能力を復活させていく度に大きくなっていく。

本来ならそんな急激な成長に誰もが疑問を持つ筈なのだが・・・認識障害の能力か何かが効果を表しているのか、誰もが疑問に思わない。

現在では最初の頃に比べて10cm以上も身長が伸びていた。

「馬鹿、泣くんじゃねえよ。」

その猫助けたつてのはテメエで選んで、テメエで進んだ道だろ？  
だったらその選択に後悔すんじゃねえ・・・そもそもお前が助けなきゃその猫は死んでたんだ、寧ろ選んだ道をテメエ自身で誇れ」

乱暴な言動だが、それでもネギの行動を褒めている様にも見える。

魔法の秘匿とやらは大事な物であろう・・・だが、そんな物の所為で助けられるものを助けなければサイは間違いなくネギを軽蔑していた。

しかしちよつと泣き虫の父親のような風になる事を望む少女のした行動は間違った事でない事をサイは理解していた。

どんな時でも厳しく、遠回しにしか褒められないのはサイの悪い癖だ。

しかし、そんな不器用な優しさを理解出来ている者達にとってはそれもサイの個性の内だと言うだろう。

実際、ネギもそんなサイの不器用さを何となく理解出来ていたのだから。

だからこそ、髪が乱れるのも気にせず嬉しそうな表情をネギはしているのだ。

「さて・・・んじゃあそろそろお前は寝ろ。」

俺はもうちつとこの辺の見回りしてから部屋に戻るからよ」

「あ、うん解ったよ。」



・・・でも気を付けてねお兄ちゃん、何だかおかしな雰囲気がこのホテル内でさつきからするんだ。

剎那さんが“式神返しの結果”つてのを強化してくれたから、関西呪術協会の刺客じゃないと思うんだけど・・・」

そう言い終るとサイの言いつけ通りに部屋に戻るネギ。

帰り際に少し離れた所でサイに向かって笑いながら手を振っていた。サイもネギの言葉通り、周囲から感じるおかしな殺気のようなものの存在が何なのかは解らなかったが・・・取り敢えず気にせずに見回りの続きを始めるのであった・・・。

さて・・・その周囲で感じるおかしな殺気の正体とは。

それは実は、先程泣き出すほどにサイに脅かされた朝倉がその百分の一でもサイに恐怖を感じさせる為に、そしてカモの場合は私利私欲（+ネギの為）で思いついたある企画が原因であった。

その企画の名は

『くちびる争奪！！ 修学旅行でネギ先生&サイ君とラブラブキッス大作戦』。

そしてこの企画の中で朝倉とカモは知る事となる。

サイという人物を本気で怒らせたらどうなるのかと言う事を・・・しかしそれを知らぬ今の時点では、二人の冥福を祈る事しか出来ないのであった

・・・朝倉、少しは懲りろよ。



## 第二十八話：懲りない奴等（後書き）

投稿完了です^^

さて・・・ついに次回、乙女達が血で血を洗うバトルが始まります  
^^

結果がどうなるかはまだ解りませんが・・・少なくとも、原作のよう  
なうやむやな感じにはならないと思いますよ。

・・・あのお二人には懲りて貰わなければなりませんし

では、次回までさようなら！

## 第二十九話：天罰観面

「さて、見回りもこんなモンで充分かね」  
ネギと別れてからある程度見回れる所は見回り、安全を確認し終わったサイ。

まあ、前回ネギが言っていたようにどうやら刹那が一日目の襲撃の事を考慮して式神返しの結果を強化してくれていたようだ。

その足で自動販売機のコーヒーを買い、飲み始める。

しかし・・・先程から感じていた事だが、何故だか不明だがこのホテル全体の雰囲気が今までとは違うように感じた。

言い表すなら戦場のような殺伐とした空気と説明した方が理解しやすいか？

「しっかし・・・静か過ぎんな。

あの連中のさっきの様子を見れば、逆に怖え位によ・・・」

静かに独り呟くサイ。

ホテルを包む妙な空気に気付いたのはネギと別れる少し前。

音羽の滝の一件で昨日騒げなかった事を取り返すかのように大騒ぎしてドタバタと暴れまわり、その為に生活指導の新田先生を始めとする教師達に当然の如くお叱りを受ける事となった3・Aの生徒達。退出禁止令を出されていたが・・・本来ならその程度で静かになる事などない筈だ。

しかしそれからと言うもの、ホテルは不気味な程に静寂に包まれている。

普段の3・Aの行動原理から考えればこれは明らかに異常事態といつても過言ではない。

「これが本当の『嵐の前の静けさ』って奴か？

うえ・・・冗談じゃねえぜ、やっと静かに寝れそうだったのによ・・・  
まっ、考え過ぎか」

そんな事を言いながらも再び危険がないかどうかを確認に行く。

強さとは己が弱い事を知り、臆病である事を認める事から始まる

そう言う意味ではサイの行動は間違っではない。

しかし・・・此処でサイがもう少しこの静けさの意味を考えていれば良かっただろう。

此処から始まるは乙女達の戦場。

そして、血で血を洗う究極の争奪戦である事を知る者は残念ながら居ない。

・・・喜劇にして悲劇の幕が、今此処に上がるうとしている。

その先に広がる舞台の行く末は果たして希望か、それとも絶望か・・・？

まあ、少なくともどっちだったとしても朝倉とカモの二人には天罰が落ちるだろうが。

『修学旅行特別企画！！ 修学旅行でネギ先生&サイ君とラブラブキッス大作戦~~~~！！』

モニターから響く朝倉の声を開始の合図として始まった女の（ある意味）プライドを賭けた戦い。

ゲーム開始を告げる鬨の声に観戦者達の歓声が上がった・・・。

「キヤー、始まつた〜!!!」  
「中々本格的じゃん」

自室で布団に包まって観戦するのは麻帆良チアリーディング部の三人娘。

このイベントの内容は各班が二名の代表を選び、教師達の監視を掻い潜ってホテルの何処かに居るネギとサイのくちびるをゲットすると言うゲーム。

参加しない観戦者もトトカルチヨにより誰が優勝するかを賭ける事が出来る為、生徒達にとつてはこれ以上にならない娯楽と言える。

更に館内各所に仕掛けられたカメラにより状況が各部屋のモニターにリアルタイムで流れると言う凝り様だ。

・・・しかしこいつ等はこの無駄に凄い情熱を他の事に使えないものだろうか？

ちなみにこのゲームには裏がある。

実はこのゲームの真の目的とは仮契約によるカード大量ゲットを目的としていた。

説明していなかったが仮契約をオコジヨ妖精が一回成功させる事にバクティオより5万オコジヨ\$が儲かる。

で、その事に目を付けた朝倉とカモがネギが一人も仮契約をしていない事を考慮して考えた作戦。

それはネギに好意を持つであろう人物達を唆してキッスをさせ、手っ取り早く仮契約カードを手に入れてしまおうと言う事だったのだ。・・・まあ、一人につき5万で全員成功すれば大儲けとなるのだから欲に目が眩んでも仕方がない。

しかもトトカルチヨをする事により更に食券を稼ぐ事も出来る・・・全く悪知恵が働くものだ。

更に更にもう一つ。

朝倉としては先程冗談であったにせよサイに脅かされて泣かされた事が余程効いていた。

その為この様な作戦を考え、理由はどうあれ同級生にキスされ、それをフルタイムで流されていたなどと言う恥部が発覚すればシヨックを受けるだろうと考えたのだ・・・。

ちなみに参戦したのは各班の以下のメンバー10人だ。

実際は6班の為、12人の筈のだが・・・実質サイの班、第六班が誰一人も興味持つ事無く参戦しなかったのである。

その理由はまあ、今までの中である程度は理解出来るだろうが・・・以下の通りである。

「・・・下らん乱痴気騒ぎに興味は無い」(エヴァ)

「マスターが参加されませんし、元々そのような事を騒いでやる事だとは思えませんので」(茶々丸)

「・・・・・・・・(ギロツ!!)」「(ザジ)

・・・と言った感じであったそうだ。(尚、刹那と明日菜は早寝なのでもう寝ている)

では此処で六班以外の参戦した者達とその心境の紹介をさせてもらう。

【第一班代表 鳴滝風香&史伽姉妹】(標的：サイ)

「あぶぶ、お姉ちゃ~~~~ん、正座嫌です~~~~!!」

「大丈夫だって、僕等がかえで姉から教わってる秘密の術があるだろ?」

「そ、そのかえで姉と当たったらどうするんですかあああ！？ てか、絶対当たるですよおお！！」

自信満々の双子の姉に対し、妹の方はもはや半泣き状態である。大方他の班員やら、姉に無理やり担ぎ出されたのであろう・・・実際に「ご愁傷様と言う奴だ。」

更に彼女等姉妹が狙うのは・・・生憎、その秘密の術を教えてください本人が好意を寄せてる人物なのだから最悪と言えば最悪。

まあ何故サイの事をそんなに好意を寄せるようになったのかは改めてその内書くとしよう。

【第二班代表 古菲&長瀬楓】（標的：サイ）

「んふふふふ〜、サイとキッスアルカ〜」 これで他の人より一步前進出来るアルネ〜」

「ふむふむ、ここいらで一つ既成事実を作っておけば・・・真名への牽制にもなるでござるな」

第二班は『戦闘だけであれば』右に出る者など居まい。

特に超が付く程に鈍感なサイに対しても、今回のアプローチを成功させれば優位になると言う思惑もあったのだろう。

・・・まあ、サイがこう言った騒ぎを嫌いとは知らずに。

そもそも同じようにサイを狙っている筈の真名が出ない時点でこの二人はよく考えるべきだったのだが。

【第三班代表 雪広あやか&長谷川千雨】（標的：あやかがネギで千雨が嫌々ながらその補佐）



「・・・つつかよ、委員長。何で私がこんな事しなきゃならないんだよ・・・」

「つべこべ言わずに援護してください、ネギ先生のくちびるは私が死守します!!」

「(ボソツ)・・・死守した後にアンタが奪うのが見え見えだけだな。

てか、こんな時に止める筈のサイの馬鹿は一体何処に行ったんだ全くよぉ・・・まあ良い、適当に付き合ったらさっさと部屋にでも戻るか、もしくはサイでも助けておくか、アイツにや世話になってるしよ」

やる気のベクトルが全く違う二人。

特に委員長など瞳から炎を出しそうなまでの勢いだ・・・千雨の言った通り、死守しておいて己が奪うのが見え見えだ。

・・・悲しいかな、委員長はネギの本当の性別を知らないのだからその想いが報われる事はないだろうが。

【第四班代表 佐々木まき絵&明石裕奈】(標的：まき絵がネギで裕奈は勝負事で狙ってるだけ)

「よ～～～～し、絶対に勝つよぉお!! その為にも此処はネギ君狙いで!!」

「えへへ～～　ネギ君とキスカ～～、んふふ」

どこか噛ませ犬的な要素満点の二人。

しかもこいつも悲しい事にネギが女の子だと言う事を知らない・・・後の事を考えると哀れと言えば哀れだ。

【第五班代表　　宮崎のどか&綾瀬夕映】（標的：のどかがサイで夕映は親友の援護だと言い張っている）

「ゆ、ゆ、ゆえ〜〜〜」

「全くウチのクラスはアホばかりなのです・・・ですがのどか、これをチャンスと考えましょう」

「えっ・・・チャンスって、何が・・・？」

「今日の昼の奈良見学はネギ先生の事やら何やらがあって結局、サイさんを誘えなかったではありませんか・・・ですので、このゲームを利用して貴女の気持ちをサイさんに伝えてしまおうのです!!」

「えっ、ええええええ!!?　で、でも・・・わ、私・・・そ、それにこれは唯のゲームだし・・・」

今回このゲームに乗り気ではなかったのどか。

考えても見れば彼女とすれば、好きだとも言えていない相手のくちびるを奪うなどと言う事が出来るような人物だとも思えない。

しかし、何故か頑なに『出た方が良い』と必死に言い張る親友の夕映に押し切られる形で出る事となってしまった。

・・・何故其処まで夕映が必死なのかも理解出来ないままに。

「何を言っているのですかのどか!!」

サイさんは口が悪いですし、鈍感ですし、素行が悪いですが優しい方でしょう!?

何度も図書館島に行く時に助けて貰ったりして、私の知る中ではマトモな部類に入る男性です。

そんな人に好意を抱いた貴女が間違っていないと言う事は親友である私が良く解っている心算ですよ。

（ボソツ）・・・そう、それで良いのです、親友の幸せを願っているだけなのです私は」

何故だろうか、最後の言葉はのどかには聞こえなかったが……。アレはまるで己自身に言い聞かせているようにも聞こえたのは気の所為か……？

そんな必死に説得する親友の心遣いありがたいと思ったのだろうか、のどかも少し赤面した後には小さく頷いた。

思いの丈に格差はあれど、皆狙う物は同じ。

勝利の栄光と交差する欲望に発起者の思惑を纏い、少女達は決意を胸に戦いを開始する。

そして午後十一時過ぎ

相と信念と欲望と思惑の入り混じる死亡遊戯が今此処に始まりを告げた。

「……何だか本当に異様な、オイ」

ブツブツ文句を言いながら歩くのは今回の遊戯の獲物の一人、光明司 斉。

そこらかしこから放たれる異様な熱気のようなものに首を傾げながら念入りにもう一度見回りをしている。

すると先程まで見当たらなかった物が見える。

物陰に隠してあるが故に普通の人間ならそう簡単には見つける事は出来ないだろうが、到る所に光る何かがあった。

よくよく目を凝らして見てみれば、それはビデオカメラか何かのレンズのようだ。

「……ヤレヤレ、嫌な予感しかしねえが調べねえ訳にも行かねえ

よな」

3-Aの生徒は変わり者が多いが結束力という物が強いのが美点である。

しかしそれは残念ながらトラブルを起こす時にも適応される為か、教師やら平穩やらを望む者にとっては頭の痛い話だ。

「ネギの奴は一応、いざと言う時の事を考えて俺の部屋で寝るように言っておいたが・・・。  
こりゃアイツには絶対外に出て来ないように言っておいた方が無難だな」

敵が攻めてきた際には直ぐに行動を移せる場所にいた方が良い。  
その事をよく知っているからこそ、念の為にネギを親友・メルトから貰った護符を貼った己の部屋で寝泊りするように言っておいたのがある意味功を相したと言える。  
実際、ネギの位置は護符より発生した結界により見えなくなっており、ネギ狙いの者たちはネギを見つける事が出来なかった。

と、その時。

物思いに耽っていたサイの後ろで殺気のような物が急に膨れあがった。  
そしてかすかに空を切りながら何か自分が自分に向かってくるのを感じ取ったサイは、目を瞑ると神経を集中させる。  
後ろから飛んで来たのは十分なまでの角度と破壊力を持った飛び蹴りだ。

「・・・誰だか知らんが甘え。」

攻撃を叩き込もうと思っただら、その無駄に大きな殺気を抑える事をまず考えるんだな!!」

するとサイは身を翻しながらありえない角度で踵を使って飛び蹴りを払いのけた。

更にその後が続いて来た連続攻撃を器用に蹴りだけで払い除けると、襲撃者の姿を見る。

・・・そしてその瞬間、襲撃者の正体を知って疑問を持ったような表情をした。

「・・・って、何やってんだテメエ？」

「うう・・・やっぱ攻撃は当たらないアルネ。でもそうやって躊躇なく女の子に手を上げられるサイも酷いと思うアルけど？」

「流石はサイ殿、実に見事なお手前・・・」

拙者と古の波状攻撃を簡単に払ってしまわれるとは・・・これは一筋縄では行かぬでござるな」

其処にいたのは両手に枕を持っている浴衣姿の古と楓だ。

呆れたような表情で二人を見ているサイ・・・確かこの時間は新田先生に怒られて退出禁止処分になっていた筈だが。（ちなみにサイは学園長が話を通し、ネギと同じように見回りをする事となっている為に問題無い）

「テメエも何やってんだオイ・・・」

現れた楓に対して溜息を吐きながら呟くサイ。

一方の楓は悪びれた様子も無く、いつものような表表とした笑顔で若干頬を赤く染めながら答えた。

「むっ、唯のゲームでござるよサイ殿。

日本の修学旅行における伝統行事とも言える『枕投げ』でござる」

いや、伝統行事じゃないし枕すら投げずに飛び蹴りと連続攻撃放っ

ただけだろお前等。

しかも此処で古と楓は気を利かせて隠しておけば非常事態にならなかっただろうに、ついそのままこの女のプライドのぶつかり合いにおける勝利条件を言ってしまった。

「ちなみに勝利条件はサイカネギ坊主のくちびるアルヨ

誰でも最初にサイカネギ坊主のくちびるを奪えば優勝、豪華商品つきで、しかもワタシはサイとの関係を一歩進められる特典付きアル」

「・・・ちよつと待て。

今俺かネギの唇が勝利条件とかほざいたな、テメエ？

何処のどいつがそんな馬鹿げた企画を考えやがったか・・・今すぐ俺に教える」

ふと、その瞬間今まで笑っていた古と楓の表情が固まる。

それもそうだ、目の前で今まで面倒そうにしていた己達の想い人の表情が一気に『イイ笑顔』に変わったのだから。

しかも笑ったままだが、明らかに強烈なまでの殺気を放ち・・・周囲の空気が一気に寒くなっていた。

「へっ？ あ、ああああ、あの、あの・・・」

雰囲気の変化について行けずに怯える二人。

今まで生きて来た中で他人に怯える事など殆ど無かった筈の二人が言葉にならない恐怖を感じていた。

そんな二人にサイは笑いながら、再び優しい口調で話しかける。

「聞こえなかったのか・・・首謀者は誰か、と聞いているんだ。

震えてねえでさっさと答える　そうすればテメエ等にはまだ“

慈悲”をくれてやる」

「あ、朝倉（殿）アル（でござる）！！！！」

その強烈な有無を言わせないおどろおどろしい殺気を前に二人は言われもしないのに正座し、口を揃えて元凶の名を語る。

まあ、考えても見れば少なくとも700年以上も生きている金毛白面九尾の殺気を受け流せる人物の方が稀だろう。

精々今まで出て来た人物なら、600年以上の歳月を生きたエヴァが人間としては長生きで色々な物を見て来た学園長位だ。

「やはりか・・・あのパイナップル頭が、全然懲りてねえようだな。上等　　奴は見つけ次第、滅殺確定だ」

物騒な事を口ずさみながら顎に手を当てるサイ。

その後ろではまだ直立不動で正座をしたままの古と楓が居た・・・サイの殺気に萎縮して動けなくなってしまったのだろう。

そこでサイは二人を見ると小さく呟いた。

「まあ、テメエ等二人には言葉通り慈悲をくれてやる。

さっさと自分の寝るべき部屋に戻って、馬鹿げた賭け事を班の奴等に止めさせて寝ろ。」

・・・そして何が聞こえても部屋から一步も出るな、解つたな？」

二人は急いで何度も壊れた玩具の様にガクガクと首を振って頷く。

更に立ち上がり、急に立ち上がった為に痺れる足を引き摺りながら急いで部屋の方へと戻って行く。

・・・あれだけ脅しておけば、もう外に出る事もしないだろう。

そして、少なくとも古と楓の英断により第二班は救われたと言って

も過言ではない。

これより始まる、鬼神の殺戮演舞オシオキから逃げられたのだから

さて、古と楓の二人と別れたサイはホテルの中を朝倉を探して回っていた。

その途中で彼はホテルの周りを取り囲む、刹那が式神返しの為に張った結界とはまた別の魔方陣が張り巡らされているのに気が付く。

「・・・オイオイ。

ちよつと待て、まさかこの魔方陣は・・・」

外に出て確りと目で確認して理解した。

少し前、エヴァと喧嘩友達のようになった頃に魔法という物についての基礎知識を教えて貰った時。

サイは魔法使いが『従者』と言う存在を作ると聞かされ、自分には関係ないが魔法陣などの知識を教え込まれた時があった。

その際に知った“仮契約”という双方が知らなくともお試しのような形で、しかも身勝手な理由で他人を巻き込む魔方陣を見て気分を害したものだ。

それがホテルを囲むように張られているという事の意味、そしてそれを誰がやったのか気が付いた時、サイはこの遊戯の本当の目的に気が付いたのである。

「そうか・・・そう言う事かよ。

あのクソオコジヨもどうやら全くと言って良い程、懲りてねえようだな・・・」

もう良い・・・もう充分だ。



今まで良く長い事、我慢して来たものだ・・・かつてを考えれば自分を称えてやりたい。  
思えばサイも昔に比べれば随分と不条理な事に我慢出来るようになったものである。

「・・・いや、待て。」

冷静になれ、その位の事で一々キレるな・・・ブツブツ・・・」

肩を怒らせ、それでも冷静になろうとブツブツ独り言を言う。

しかし、外の魔方陣を確認した後・・・ホテル内のロビーに入ったサイは、其処で起こっている光景を見て瞬間で石化した。

何せロビーではネギとサイの唇を狙う連中が鉢合わせし、入り乱れて大騒ぎの様相を呈していたのだから。

更に見てみれば、倒れている新田先生の姿もある。

どうやら止めようとして、暴走した生徒達に巻き込まれて気を失ったのだろう。

・・・もはやこの状態では收拾も付きはしない。

「・・・ククク」

知らぬ内にサイは自然と笑っていた・・・。

「ククク、クククククク・・・」

目の前で起こっている、教師をぶっ飛ばしてまで行われる馬鹿馬鹿しい騒ぎ。

裏で糸を引いていると思われるパイナップル頭のパラッチ女と似非妖精クソオコジョへの憤り。

心の中では色々な物が渦巻き、サイは静かに下を向いたままに乾いた笑い声を呟く。

【プツンしますか？】

> Yes .

はい .

是 .

肯定 .

了承 .

脳内に浮かび上がった一方の答えしかない選択肢を選ぶ。

その瞬間 サイから『バツンッ！』と完全に何らかの緒がぶち切れた音が鳴り響いた

「・・・Your will die , Kill all . (皆殺しだ、ぶつ殺す)」

機械音のように感情の無い言葉が口から漏れる。

限界を超え、怒りの頂点を裕に越えた脳は冷静に・・・その逆に肉体は怒気に熱くなった。

さらに目は白目の部分が真っ黒に染まり、一步前に踏み出した瞬間に周囲を凍結させるかのようにとんでもない量の殺気が放たれた

空間を凝固させ、まるで空気だけなら北極に近い程にまで冷え切った事により・・・不穏な気配を感じ取った、狂乱騒ぎを繰り広げていた女子達の動きが一斉に止まる。

そして油を刺していないブリキの玩具のようにゆっくりと首が動き、ぎこちない動きで彼女達が見た光景の先に居た者、それは・・・

。。。  
笑みを浮かべ、その背に不動明王の幻影を背負い、口からは白き煙を吐き

瞳に強烈な殺意を滾らせ、女子達を見つめていた一人の鬼神の姿だった。

「おい、テメエ等・・・いい加減にしろや・・・。  
毎度毎度下らねえ事でギヤアギヤアギヤア騒ぎやがって・・・  
俺になんか恨みでもあんのか・・・？」

口調はいつものサイと同じだが、殺気と怒気がMAXを完全に振り切ってしまったようだ。

一歩踏み出すだけで空間が軋み、それによって今まで乱痴気騒ぎをしていた女子達の顔色が青くなる。

「元凶の朝倉は後として、まずはテメエ等からだよなあ？」

こんな夜遅くに大騒ぎしてるって事は・・・全員、明日の日を拝めなくても良いって事か？」

また一歩サイが歩みを進める。

あまりの恐怖に逃げ出そうとする女子達だが、逃げれば確実に『コロサレル』と解っているのだろう。

本能的に足は止まり、意志に関係なくガクガク震えだす・・・サイの放つ殺気に少女達の表情は青褪めているのを通り越し、死人のように真っ白だ。

「何か言い残す事はあるか？」

あるなら聞くだけは聞いてやる・・・ホレ、言ってみろ・・・」

しかし恐怖によって弛緩している少女達が何かを言える訳もない。当然だ、現在進行形で危機的な状況に陥ってる少女達が言葉を発せる訳もなく、唯涙を浮かべて力無くフルフルと首を横に振るだけだ。そして勿論、少女達の言葉無き訴えが目の前の怒りが頂点に達した

鬼神に届く筈も無い

サイは仮面のように貼り付けた笑顔を見せながら“死刑宣告”を呟いた。

「さあ・・・懺悔と後悔の時間だ。

泣き叫べ劣等共　　今宵、此処に神は存在しない・・・」

「」「」「ひ、ひひひひ、ひぎゃあああああああああ！?!  
?!?!?」「」「」

どごその白髪・隻眼・既知外のバイク乗りのような台詞をサイが吐いた後　　その夜、ホテル嵐山のロビーに哀れな犠牲者達の悲鳴が響き渡ったそうだ。

(尚、運が良かったのか悪かったのか・・・千雨は適当に付き合っただ後に部屋に戻り、のどかと夕映の二人はしずな先生に見つかって部屋に戻されたらしい)

「」「」「」

モニターに映る惨劇に朝倉とカモは絶句し、身体からは冷たい汗が流れる。

二人の目に映る光景は、ロビーにて少女達を瞬く間に葬り去っていく鬼神の姿だ・・・流石に二人も、触れてはいけないものに触れた事に気付いてしまったようだ。

「ど、どどどどど、どうする!?! どうすんのよカモっち!?! サイ君完全にキレちゃってるよ!?!」

『あ・・・ああ、あああ・・・や、やばい、コイツはヤバイ・・・このままじゃオレっち達は・・・』

血の気が完全に引いて白くなった二人が顔を見合わせる。

実際の所、サイは実は口は悪いがそこらの不良のように簡単にキレる様な性格ではない。

しかし初日の頭の悪い妨害工作やら、ネギが魔法使いとバレるやら、折角静かに寝れそうだと思ったのにその時間を邪魔されるやらでサイもフラストレーションが溜まっていた。

それに併せて今回の馬鹿騒ぎだ・・・これを考えた首謀者の馬鹿さに苛々するし、ノリだけで便乗した女子達にも腹が立つ。

・・・それでブチ切れるなど言う方が無理な話だ。

よって現在、サイはこの世界に現れてから初めて心の底から怒り狂っていると言う事である。

こんな怒りは多分、エヴァであつても見た事など無いだろう。

「こつなつたら・・・」

『ああ、こつなつたら取るべき道は一つっきゃ無いぜ!』

悲壮な決意を浮かべて二人は力強く頷きあう。

そう、この状況で取れる道などたった一つしかないだろう・・・それは・・・。

「『逃げるつきやないツ!』」

実に賢明な判断だ　いや、寧ろそれ以外の道など無い。

そうなれば二人の行動は早い・・・トトカルチョ用の食券やら機材やらを大急ぎで纏める。

そのスピードはまさに目を見張る物で、直ぐに撤退準備が終わった二人は実況の本部となっていたトイレから逃げ出そうとしていた。

結局、誰もキスが出来なかつた為に親の総取りとなつたので文句が

出るかとも思われたが・・・各々の部屋でゲームの様子を観戦していた生徒達は、皆揃って『逃げる』と真っ青な顔で呻いている。その時　　不意に誰かにぶつかった。

「・・・何処に行くんだ、テメエ等？」

その聞いた事のある、今の状態では絶対に聞きたくなかった声に二人は凍り付いたように固まる。

トイレのドアを開けた二人を出迎えたのは　　今しがたロビーで惨劇を繰り広げていたサイであった。

「い、いいいいいい・・・!？」

「いつの間に此処に着たか？」

んなもん、ロビーの連中全員をブツ潰す前に聞いて来たに決まっているだろ?」

『ど、どどどどどど・・・!?!?』

「どうして此処に居るのか？」

何言ってるんだテメエは・・・テメエ等を始末する為に決まってるだろ」

呂律の回らない二人の言葉を正確に訳した後、ゆっくりと笑うサイ。そのドス黒い笑いに二人は萎縮し、戦慄し、一步も動けなくなっていた。

『さ、さささ、サイの旦那、許してくれ!!　ちよっとした出来心、そう出来心って奴なんでさあ!!』

「そ、そうだよサイ君!!　私達は悪気があったんじゃない、良かれと思って・・・」

この後にを及んで弁明して逃げようとする二人。  
しかし、本気でブチ切れてるサイがその程度で許す筈も無く、一切  
耳を貸さずに言い放った。

「Shut the Fuck up、(黙れクソ野郎)  
これから一言も口を利くな、息もするな・・・黙ってさっさと地獄  
に堕ちろ。」

その為の道案内位はしてやるからよお!!!!」

その言葉にもはや逃げ場が無いと理解した二人。  
そんな二人をサイは引き摺りながら、どこかの一室へと入って行っ  
た。

そして奥の襖が閉じられた後、中から二人の悲鳴が響き渡る。

「た、助けて!! 許して、許してえええ!!  
ごめんなさい、ごめんなさい、もうしませんからああああ!!!!  
お願いだから、ごめんなさいいいいい!!!!」

「ゆ、許して、許してくだせえサイの旦那!!  
あつ!? い、いやっ!? だ、だめえええ!? 許して、やめて  
ええええ!!!!」

千切れる、千切れちまう、千切れちまうからああああ!!!!!!!!  
最後に一番大きな声で、ホテル中に響くかのような絶叫が轟く。

「『ほ、ほほほほ、ほぎゃああああああああああ!!!!  
!!!!!!!!』」

こうして狂乱の夜は結果、勝者を一人も出さずに幕を下ろす。空き部屋から出て来たサイは極めてイイ笑顔で一仕事を終えたかの如く満足げな表情で部屋に戻っていった。

修学旅行二日目の夜　それは多くの犠牲者のみを出し、実入りなど決して無かったそうだ



## 第二十九話：天罰観面（後書き）

更新完了です。

いやはや・・・他の作品とは違って見入りの無いままに乙女の祭典フォトメノコロシマが終わりましたねえ。

まあ、サイの性格を考えれば当然かと思いますが。

ちなみに今回参戦しなかった連中にも裏設定で理由があります。

エヴァ&茶々丸・・・サイの過去を知っている為

明日菜&刹那&木乃香・・・原作通り早寝なので

真名・・・危険をいち早く察知した

美空・・・出来るだけ正体をバラさない様にシャークティから言われている

ザジ・・・何を考えているか不明

さよ・・・昭和以前生まれなので奥ゆかしいのでキスなどNG

更に出ていながらも何も無かった連中

のどか&夕映・・・本来なら仮契約すべきだが、しずな先生に見つかったと言う事で部屋に戻されたと言う事に（しずな先生、瀬流彦先生は優しいので）

千雨・・・あくまでも性別を超えた友情なので除外（今から変わる可能性はあるが・・・ちなみに途中で戻ったと言うのも専用の設定）

ネギ・・・一応TS性転換状態だが、現在では“まだ”『信頼する兄』と言うような見解（寧ろ、人を好きになると言う事がまだ解らないだ

るっ)

まあ、こんな感じでしょうね。

ほんじゃまた、次回の講釈にてお会いいたしましょう・・・ばいばい！！！！

P.S.

『白髪・隻眼・既知外のバイク乗りの台詞』

PCゲームの【Dies irae - Acta est Fabula】に登場した人物『ウォルフガング・シュライバー』の名言。

ちなみにこの人物、外見は十代前半の美少年だが常識を逸脱して頭の螺子が完全にブツ飛んでいる人格破綻した殺人狂で、敵味方の区別無く殺戮しまくる超危険人物。

別名：凶獣シトウルムウオンナルガント、暴嵐の破壊獣フロースワイトニル、道化の魔神の息子（ ） など

（ ） 全て北欧神話の魔獣“フェンリル”の別名

### 第三十話：迫る戦いの輪廻

「・・・ちょ、ちよつと・・・何よこの状況は？」

「い、いえ・・・私にも良く解りませんが・・・」

開口一番、朝起きてきた明日菜と刹那がロビーを見て呆然としながら呟いた。

ホテルのロビーには死屍累々の屍・・・もとい、3-Aの面々の変わり果て、憔悴しきつた姿がある。

ある者は白目を剥き、ある者は壁に向かってブツブツ何かを言い、そしてまたある者は正座したまま風が吹くだけで吹き飛ばされてしまいそうな程に真っ白に燃え尽きているのだ。

・・・一体何があったのか、昨日早く寝てしまった二人が知る由も無い。

「一体何があったんでしょうか・・・」

「さ、さあ・・・私も昨日は早く寝ちゃったから・・・と、取り敢えず此処に居る誰かに聞いてみる？」

そう言うと明日菜は取り敢えず一番近くで正座させられていた鳴滝姉妹に話しかける。

「ね、ねえ風ちゃんに史ちゃん・・・昨日一体何が・・・」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ・・・」

「モウシマセンモウシマセンモウシマセンモウシマセン・・・」

しかし二人はがたがたと震えながら謝罪の言葉を連呼するだけだ。

うわ言の様に繰り返されるその言葉から、余程恐ろしい目にもあったのだろう。

その状況に埒が明かないと思った明日菜は次にあやかに裕奈にまき絵から事情を聞こうとするが

「え、えつと……まきちゃんにゆーなにいいんちよ……」

「オシオキ怖い……オシオキ怖い……オシオキ怖い……オシオキ怖い……」

「部屋から出ちゃ駄目だつて言われてたのは解つてたよ……でも、だからつて、だからつてあんな……」

「うふ、うふふふ……ほ、本当にオシオキでしたわね……フフフ……」

どうやらこつちも埒が明かない。

仕方が無いので明日菜は最後に真ん中に正座させられていた完全にヤバそうな状態の朝倉に話しかける。

意外に肝の据わっている彼女なら、説明が出来るかと明日菜は踏んだのだろう。

「ちよ、ちよつと朝倉……一体何が……?」

「(ビクツ!?)ご、ごめんなさい!! もうしません、絶対に何もしません!!」

これから心を入れ替えます、決して面白半分で余計な事は致しませんから!!! だから、だからもう許してええええ!!!」

明らかに他の連中よりも憔悴しきり、しかも何かに恐怖しているらしい朝倉。

『麻帆良のパパラッチ』と呼ばれ、スクープの為なら無茶無理無謀など平気でする筈の彼女に一体何が?

「え、えくと・・・」

「い、一体・・・本当に何が・・・？」

困り顔で冷や汗を垂らす明日菜と意味が解らず首を捻る刹那。

二人が立ち尽くしていると、不意に後ろから誰かが声が掛けた・・・。

「よう、おはようさん二人とも。昨日はゆっくと眠れたか？」

後ろから掛けられた声は少年の声。

何だかやけに清々しいのが気になったが、取り敢えず知っている人物の声なので二人は振り向いた。

「あつ、サイ（さん）、おはよ（う）ございます・・・うつ!？」

「

挨拶を返そうとするも、変に語尾が釣りあがる。

振り向いた先に居るのはいつも通りの不機嫌面のサイだ・・・だがいつもと違い、やけに禍々しい気配を感じる。

さらに目の錯覚だろうか？ 何故か白目が真っ赤に染まっている様にも見えた。

「さ、サイ・・・な、何かあったの・・・？」

「ん？ いや、別に何もねえぜ」

口ではそう言うが、信じるというのが無理な話だ。

その表情に張り付いているのは何処となく乾いた笑み・・・能面のよ様な笑みなのだから。

「あつ・・・そ、そうだサイさん。昨日何があったか知っていますか？」

「ああ？ ああ・・・よく知ってるぜ」  
「あ、なら教えて・・・」

昨夜何があつたのかを知っているらしいサイに尋ねる二人。  
だがサイは、乾いた笑顔を二人に向けると・・・静かに、丁寧に呟いた。

「明日菜、刹那・・・」  
世の中にはよ、知らない方が幸せな事つてのはごまんとあるんだぜ？」

その物言いと瞳は『これ以上は詮索するな』と雄弁に語っている。  
あまりの眼光の鋭さと禍々しさに、反射的に明日菜と刹那はコクコクと頷いていたのだ。

サイはそれを見届けると無言で頷き、今度は正座している少女達に向かつて睨みながら口を開く。

「おい、テメエ等・・・これから朝飯の時間だろ、何時まで呆ける心算だ？  
早く行って率先して準備して待ってるよ 遅刻したらどうなるか、解ってるだろうなあ・・・？」

サイの言葉を聞くや否や、正座していた者達は我先にと迅速に行動に移した。

沈み込んでいた面々は跳ね起きると、肉食動物に追われる草食動物よろしく脇目も振らずに大広間へと殺到していく。

・・・いや、ある意味ではあの引き攣った表情は食肉工場に運ばれる前の鶏やら牛やら豚やらのようにも見えたのは気の所為ではないだろう。

そんな光景を呆然と見ていた明日菜と刹那の横でサイは小さく溜息

を吐くと呟いた。

「はぁ、ヤレヤレだぜ……。」

んじゃ俺もネギ起こしてから朝飯に向かうから、お前等も遅れんなよ……。」

何処と無く疲れたようにも見えるサイの後姿を見送る明日菜と刹那。そして二人はお互いに顔を向き合わせ、目を合わせると

「……行こっか、刹那さん」

「……はい、そうしましょう明日菜さん」

二人は脳裏に浮かんだ疑問や先程の出来事などを削除して朝食の席に向かった。

何があつたのかはもう敢えて聞きたいとは思わない　寧ろサイの言った通り、知らない方が幸せな事があると胸の内に深く刻み込んで……。

クラスの中でも特に元気な筈の人物達が落ち込んでいるという異常事態の中で朝食は終わる。

昨日、乱痴気騒ぎの死亡遊戯を観戦していた者達はこの状況の示す部分の意味を理解し、そして誓った。

『絶対にこれからサイ君を怒らせるような事はしない』と……。

一方、運良くゲームに参戦していながら助かった連中は参戦した者たちの異様な状況に背中に冷たい物を感じ

大体の結果を心なしか理解していたエヴァと茶々丸とザジと真名は呆れてるやら同情しているやら良く解らない表情をして哀れな犠牲

者たちを見つめていたという。

さて、朝食が終わった後

昨日の惨劇を知らない明日菜と刹那にネギが怯える朝倉&カモから事情を聞いていた。

「……と言っても最初は怯えたまま頑なに何も言わない一人と一匹であったが、サイが後ろから」……良いからとつとと話せ』とドスの聞いた声で呟くと大急ぎで語りだす。

あらかたの事情を聞き終わった後……明日菜が呆れたような表情で言う。

「……朝倉、そりゃアンタが全面的に悪い」

内容を聞いて幾分か気持ちを持ち直した明日菜。

そして心の奥底で何とも言えないムカツキを少々感じていた事は内緒だ。

「そもそもアンタ等は一体何考えてるのよ？」

サイやらネギやらを勝手に巻き込んで、しかも何も知らない子達をアンタ達の勝手な言い分で巻き込もうとするなんて 今朝アンタ達の姿を見て、少しでも同情した私が馬鹿だったわよ本当に」

「そ、其処まで言う事無いじゃない〜〜!!」

『そ、そうっすよ……おれっちは何度か説明してるように悪気が……「黙りなさい、バカガモ」……バカガモっ!？」

取り繕おうとするカモの言葉を一刀両断にする明日菜。

彼女は口が悪いが責任感が強く、そして無責任な事をする者を大変嫌う。



・・・そう言った部分は本人に言えば怒るかも知れないが、サイに良く似ているようだ。

するとおかんむりな明日菜の後ろで不意に冷たい何かを感じる。

「そうですか、成る程・・・サイさんのくちびるを、勝手に景品に、ですか・・・」

何故、何故にこんなにも寒く感じるのだろうか？

そんな不穏な空気に明日菜は後ろにいるであろう刹那の方に視線を向ける・・・すると彼女は俯きながらなにやら不気味にクスクスと笑っていた。

前髪によって目の部分が隠れているのが余計に異様さを助長させている。

「せ、刹那さん・・・？」

「はい？ 何でしょうか、明日菜さん？」

ゆつくりと顔を上げた刹那はまるで能面のような平べったい笑みを浮かべていた。

・・・その背からどす黒く、それでいて烈火の如く立ち上る煙のような物があるのは気の所為だと思いたい。

「え、ええつと・・・ちよ、ちよつと落ち着いてね、刹那さん？」

「明日菜さん、可笑しな事を仰られますね？ 私はこれ以上ない位に冷静ですよ？ ええ、冷静ですとも」

「ちよ、刀に手をかけながら言われても全然説得力無いから！？」

駄目だつて刹那さん、抑えて抑えて！？」

今にも朝倉に斬りかかりそうになっている刹那を必死で抑える明日

菜。

いくらなんでも刃傷沙汰は拙い、実に拙過ぎる……。

「離して下さい、明日菜さん……」

「駄目だつて！？　こんな所で刀なんか抜いちゃ！！」

「大丈夫ですよ……周りに“は”、被害を出しませんから。それに秘密裏に証拠隠滅すれば……」

「本人にも被害を出しちゃダメえええ！！？　しかも何を真顔で怖い事言ってるのよおおお！！？」

ヤバイ……このまま行けば確実に朝倉&カモはG地獄行o t o h e  
11きだ。

そんな不穏な空気を察したのか、はたまた横にいるネギにそのようなものを見せられないと思ったのか、それとも少女二人にそんな事の片棒を持たせる訳には行かないと考えたのか……今まで殆ど口を開かずに居たサイが刹那の前に歩いていくと、刀の柄を優しく抑えて咳く。

「落ちて着け刹那、このバカ共は俺が“確りと”罰与えといたからも  
う必要ねえよ。」

……つうか、こんなバカ共を斬っても刀が勿体ねえぞ？」

本当に一言多い漢である。

だが、子供をあやす様に頭をポンポンと撫でるようにしてやると取り敢えずは正気に戻ったようだ。

まあ、顔を赤く染めて俯いてしまったが　どうやら一先ずだが危険は去った。

「あ、アリガト……助かったわ、サイ」

安堵の吐息と共に明日菜が礼を言くと、サイは背を向けて手をプラ

ブラと振るジェスチャーを返す。

『まあ、気にすんな』とでも言いたいのだろう……。

取り敢えずサイに確りとオシオキされた事により猛省した朝倉とカモ。

そんな一人と一匹を尻目に、サイと明日菜に刹那とネギは3日目の行動の確認をした。

……ちなみにエヴァ達はまだ来ていない、3日目の完全自由行動の為に用意した普段着をどれを着るか迷っていたのだ。

「さて……確か今日は自由行動だったよな？」

どうする？ 確かネギは親書を関西呪術協会とやらに届けに行くんだっただか？」

「あつ、うん。 そうだよお兄ちゃん。」

今日は一日自由行動だし、木乃香さん狙ってる関西呪術協会の刺客が何処に居るか解らないでしょ？

だから早くこの親書を届けちゃおうかなって思ってた……」

……少しはネギも考えるようになったようだ。

確かに現時点、親書も木乃香も狙われているような状況では先にどちらかを完全に危険が無いようにしてしまうのが優先事項だろう。

それに親書を先に渡してしまえば、刺客達もおいそれと木乃香を狙う事も出来なくなると言う利点もある。

「成る程な……んで、明日菜はどうすんだ？」

刹那は木乃香の護衛だろうから別行動だし、キティ達は今朝会った時に京都見学に行くとか言ってたから多分付いて来ねえだろうしよ」

「私？ ああ、私はネギに付いて行くわよ？  
流石にネギ一人でその“悪い奴等の巣窟”みたいな所に行かせる訳にも行かないしき。」

班の方には適当な理由をつけて誤魔化しておく心算だしね」

明日菜の言葉を聞いて頷くサイ。

この状況を考えれば自分が取るべき行動は一つだろう。

寧ろ任せる事の出来る自分の信頼する戦友とでも言うべき人物が木乃香の護衛に回ってくれるのだ、信頼を無碍にする訳にも行くまい。

「なら俺はネギと明日菜に付いて行く事にする。

刺客にしてみりゃ親書が渡れば動きが取り難くなるからよ、多分罠やら何やらを用意しとく筈だ」

その言葉に少々だけだが残念そうな表情をする刹那。

しかしサイが信頼するエヴァとその従者茶々丸と一緒に来てくれると言う事は正直ありがたかった。

まだ刺客が何人いるか把握しきっていない現状では一人でも自分より強いだろう実力者が必要だろう。

それとは別にサイは胸騒ぎのような物を感じる。

修学旅行一日目の夜に戦った、多分だがエヴァクラスの強敵フェイト・アーウェルックス。

かの少年が介入するだろうと言う事は“自明の理”だろう・・・今度は一方的に負ける訳には行かない。

そんな事を心の中でサイは考えていた

「じゃあサイ、私達準備があるから一度部屋に戻るわ。

ああ朝倉にバカガモ、アンタ等は絶対に付いて来たら駄目よ？ 確りとそこで反省しなさい。」

「・・・破ったらどうなるかはもう解ってるわよねえ？」

「『・・・ハイ、ワカッテオリマス。

モウゼツタイニサカライマセンシ、ヨケイナコトニホイホイトクビ  
ハツツコミマセン・・・』」

明日菜に念を押された朝倉（&カモ）。

片言で正座したまんま震えている所を垣間見れば、どれだけの恐怖  
を味わったのかは容易に想像出来る。

「・・・実際に筆舌し難い程、お茶の間には残酷過ぎて放送出来ない  
ような事をされたとかされなかったとか。

「・・・んじゃ俺は先に行ってるぞ。

用意が済み次第、渡月橋つつう所で落ち合おうぜ      そっからは  
二組に分かれるって事で」

そう言い終わるとサイはさっさと背を向けて歩き出す。

そんなデリカシーの欠片も無いような人物でありながら、護るべき  
約束はしっかりと護る漢の背中を少しだけ苦笑して見つめた後、明  
日菜や刹那やネギは準備の為に部屋へと向かうのであった

京都・桂川に掛かる橋、渡月橋。

春には桜、秋には紅葉の名所として多くの観光客を集める嵐山周辺  
で有名な橋である。

その名の由来は遙か昔、鎌倉時代の天皇・龜山上皇が橋の上空を移  
動していく月を眺めて『くまなき月の渡るに似る』と感想を述べた  
事から命名されたそうだ。

そんな渡月橋の欄干に寄りかかりながら明日菜達が来るのを待つサイ。

服装は白ランではなく、いつもの着物風の上着に着物風のズボンと足袋のような様相のブーツである。

着ているのはサイの意志によって姿を変えられる魂衣スピリットローブなので他の服装にもなれるのだが・・・サイ自身が服装に無頓着なのと、動き易い服装という事でいつも通りの服装となっているのだ。

その横には既に私服に着替え終わったエヴァが同じように欄干に寄りかかり、茶々丸は表情を見せないまま直立不動で立ち、ザジはのんびりと橋から見える光景を無表情で見つめていた。

「チツ、遅えな・・・何時まで待たせるんだかな全くよお」

「女は準備に時間が掛かるものだ、それを文句を言わずに待ってやるのは男の甲斐性と言う奴だぞサイ」

サイにそう諭すのはエヴァ。

実際の所、エヴァも着ていく私服を決めるのに三十分以上も掛かっていたのだから文句も何も言えないのだが。

尚、エヴァの私服は麻帆良で良く着ている事の多い、白のゴスロリ風の洋服だ。

「ああ？ 面倒臭えな。んな服装なんぞ動き易けりや何だって変わらねえだろうが」

「どうでしょうか・・・私には解りかねますが、やはり男性に見られると思えば気にする方が良いのでは？」

『私は良く解らないですう、元々幽霊でしたしい〜』

そう生真面目に考えてから返すのは茶々丸とさよだ。

彼女達は（さよは元人間にせよ）人間ではないので他に比べれば一線引いているように見える。

だが、完全ではないにせよサイを意識し始めてる茶々丸とさよにとつては服装を褒めて貰った方が嬉しいだろう。(と言っても、さよは人形の外見だが・・・)

・・・ちなみに茶々丸はエヴァに選んで貰った同じような黒の洋服を着て、手にさよ(ウサギ人形)を抱いている。

「・・・俺にや良く解んねえや、なあザジ？」

「・・・?」

サイの受け返しに当然に疑問符を浮かべるザジ。

ザジは動き易そうな半袖の洋服にハーフパンツという、サイと同じような動きを重視した服装である。

・・・意外と似合っているが。

まあ元々サイにそのような色気のある話を理解しろというのが無理な話だろう。

超が付く程に鈍感で、女の気持ちの機微とやらを完全に理解出来ず、レディーファーストなどという精神が完全に抜け落ちているのだから。

・・・元々生まれた世界がそんな事を考えるような世界ではなかったのだから当然だ。

「おゝまゝたゞせゝ!!」

「ああ？ なんだよつと来た・・・の・・・か・・・?」

そうこうしている内に明日菜達が来たようだ。

声のした方をサイは不機嫌そうに見るが 見た瞬間、その目を疑った。

何せ其処には、明日菜と刹那以外に本来居る筈の無いのどかに夕映にパルと木乃香・・・つまりは第五班の面々が全員来ていたのだから。

「・・・何でテメエらが此処に居るんだ？」

「チツチツチ・・・サイ君、他に言う事があるんじゃないの？」

パルが笑顔でそう言うのでサイは首を捻る。

そしてしばしの思案の後、期待するような表情の少女達に向かって言葉を飛ばした。

「・・・雨が降らんで良かったな」

「（ズコツ！？）・・・いや違うでしょ！？ アタシ達の姿見て何か言う事無いの！？」

「ああ、そう言えば私服だな。 まあ、完全自由行動の時は私服で良いと言っていたから当然だろう？」

「（ズコズコツ！？）ちよつとサイ君！！ 折角アタシ達が私服で来たんだよ！？ もっとさあ『可愛いね』とか『似合ってるよ』とかって感想は出てこないの！？」

「・・・？ 服なんぞ着れば皆一緒だろう？」

サイの的外れな感想にドリフのコントばりにコケまくるパル。

そもそも先程も書いた通り、サイにそのような華のある感想を求める事自体が間違いなのである。

。 朴念仁と言う言葉が服を着て歩いているような人物なのだから・・・。

「早乙女ハルナ、サイに服装に対しての褒め言葉だの華のある言葉だのを期待しても無駄だ。

コイツは基本的に服など『丈夫で汚れ難くて動き易ければ何でも良い』と言う程度の認識しかないのだからな」



「・・・あつそ、そりやあまた。」

(ボソツ)こりやあのどかも厄介な相手を好きになつたもんだねえ・・・まさに超絶鈍感つて訳だ。

・・・ムムツ、何だかサイ君とネギ君を使って次の作品の創作意欲が湧いてきたああ!!」

微妙に(いや、かなりか?)失礼な物言いのエヴァ。

そしてそれに呆れながらもサイとネギを使つたいかがわしい本人の趣味である次の作品のネタを考え付いたパール。

のどかが目に見えて落ち込んでいるように見える光景を尻目に、サイは明日菜をおいでおいでのジェスチャーで呼ぶと小声で尋ねる。

「・・・おい、何でアイツ等が此処に居んだ?」

「え、え〜つと・・・ゴメン!!! 実は途中でパールにバレちゃつて・

・・・」

「・・・まつ、んな事だろうと思つたぜ・・・ヤレヤレ」

沈痛そうな面持ちで溜息を吐くサイ。

『大方、面白そうだからとか言う理由で来たんだろうな』などと考えながらパール達の方を向いて再び深い溜息を吐いた。

本当に色々な意味で鈍感の上、気苦労やら何やらが重なる不幸な人物である。

(尚、彼女達が来た理由は主にサイと自由行動をしようと思つたのだが、勝手に何処かに行つてしまったので知つていそつな明日菜達に付いて来た為だ)

「も、申し訳ありません・・・サイさん・・・」

「ああああ、もう良いからそんな面すんな。それより今はアイツ等をどう撒くか考えねえと」

今から向かう先はある意味、修羅道だ。

何も知らない一般人を巻き込む訳にはいかない茨の道とも言える。横目で見ればこちらをパルを始めとした図書館探検部の面々が興味深げに見つめているのだ・・・まあ、とは言えども木乃香ものどかも夕映も何処と無く何か言いたげな表情をしているが。

「ねえ・・・お兄ちゃん。

ボク考えたんだけど、どこか騒がしい所に入ってその際に抜け出さない？」

そうすれば皆さんを巻き込む事はないと思うんだけど・・・」

「フム・・・サイ、坊やの言う通りだ。

しかし修学旅行で人が増えているとは言え、この喧騒の少ない嵐山でそのような都合の良い場所など・・・ああ、一つあったな」

ネギの意見を聞き周囲を見回すエヴァ。

確かに嵐山は観光客が多いとは言え、比較的に静寂の中で風景を愛でる方が良い為か賑やかな場所が少ない。

しかし、テンション高くパルが突貫して行った場所を見てエヴァは頷く。

「ねえ皆、ホラホラ！！」

あつちにゲーセンがあるから、記念に京都のプリクラ撮ろうよ」

それにつられてのどかや夕映、刹那と明日菜とネギの手を引っ張って木乃香が撮りに向かう。

勿論サイ達（サイ、エヴァ、茶々丸&さよ、ザジ）は全くと言って良い程に興味が無かったので撮りには行かなかったが。

その後　　ゲーセンに入った少女達は各々がやりたいゲームの方

に散らばっていった。

パルとのどかと夕映は行きの新幹線の中でやっていたカードゲームのアーケード版を、ネギはそれが魔法使いを操るゲームだと知り興味を持って夕映からスターターデッキを借りてプレイする。

・・・途中で乱入して来た少年に惜しくも負けてしまったが、楽しんでいたと言えるだろう。

明日菜、刹那、木乃香はクレインゲームをプレイ。

明日菜と刹那はこういった娯楽は得意ではないのか成果は無かったが、木乃香は何か目付きの悪い犬（狼か？）の人形をGetしてご満悦そうであった。

そして、興味が無さそうだったサイ達はと言うと

『K・O・！！ You Win！！』

『『『『『・・・おおおお』』』』』』

多くのギャラリーが見守る中、某“3D格闘ゲームの癖にビーム撃つ奴やロボットや銃刀法違反無視のキャラクターが出る格闘技大会”を先程からやり続けている人物がいた。

勿論、それは・・・。

「・・・お前は本当に、こう言った対戦ゲームに関しては負け無しだな」

「当然だろ、当然」

何を隠そう、アーケードの対戦格闘ゲームの筐体の前に陣取って対戦相手を瞬殺し続けているのはサイだ。

実は彼、侵入者を排除してきた報酬で最近某ゲーム機を買い、良く

エヴァやら茶々丸やらとやっていた。

その為か格闘ゲームを良くやる様になり、しかも高々1〜2週間程度でプロクラスの腕前にまで成長したのである。

・・・流石はバトルに関しては他に追隨を殆ど許さない天才だ。

「オイオイマジかよ、何なんだあの強さは・・・」

「挑戦者を片っ端から返り討ちにしてるぜ・・・もう10人は裕に超えただろ・・・」

「しかも十連コンボに連携技を絡めて倒しまくってやがる・・・え、エゲツねえな・・・」

「殆どパーフェクト勝ちで反撃すら許してねえよ・・・」

ざわめくギャラリーの台詞などに興味が無いらしくサイはどんどん白星を挙げ続ける。

そして今戦っていた挑戦者をジャガーのマスクを被ったレスラーのワンダフルでメキシカンなコンボで沈めると、のんびりとコンピュータの操作する敵キャラを潰していた。

どうやら挑戦者達は決してサイには勝てない事に気付き、乱入するのを止めたようだ・・・。

「・・・ねえパル？ 私、格ゲーって詳しくないけど・・・こんな簡単に勝てるものなの？」

「いや無理無理、絶対に無理！！ コンピュータ相手ならともかく、対人戦じゃ有り得ないって！！」

「まあ少なくともワンコインで出来る芸当ではない事は確かです」

そんな風にサイのプレイを見て呟く者達もちらほら

だが、それら全員は思う・・・対戦相手のキャラクターを葬り去っているサイの姿はいつもより生き生きしている。

Side ????

サイ達がゲーセン内である意味大暴れをしている丁度その頃。

ゲームセンターの裏の路地裏、人気の無い所で先程ネギとカードゲームで対戦していた少年が誰かと話しをしている。

其処には眼鏡をかけた女性が少年と話をしているようだが……。

「やっぱ名字、スプリングフィールドやて」

「ふん、やはりあのサウザンドマスターの子やったか……それやったら相手にとって不足はないなあ」

……少年が話をしていた眼鏡の女性。

その人物は実は、修学旅行一日目の夜にサイがフェイトなる人物と戦っていた時に木乃香の誘拐を企てた呪符使い 名を「天ヶ崎

千草ちくくさい」と言う。

その後ろに従うのは一昨日にサイと戦った人物「フェイト・アーウエルンクス」に清楚な服装を身に纏いながら何処と無く不穏そうな気配を感じる少女 「月詠つきよみ」と言う名の刹那と同じ神鳴流の剣士がいる。

……更にその後ろには、召喚されたと思われる異形の怪物まで侍らせていた。

「ん？ 一人知らんのがおるようやが……まあ良えわ。

ふふふ……坊や達、一昨日の借りはきっちり返させて貰うえ……

妖艶に笑う千草……。

その後ろで今から狙うべき連中を静かに見つめる いや、その

中の一人を見つめるフェイトは誰にも聞こえないような大きさの声で一人呟いた。

「……光明司斉。

どうやら最後までこの争いの舞台の上に残るようだね」

その言葉を言い終わるとフェイトはゆっくりと振り向く事無く歩き出した。

白面九尾の少年と強力な魔法使いの少年の邂逅は 近い。

Side out

### 第三十話：迫る戦いの輪廻（後書き）

投稿完了です

いやはや、この小説はカモ&朝倉を随分と扱い悪く使う作品になってしまいました。

まあ、別に良いんですけどね・・・ああ言った懲りない連中は確りと懲りて頂かないと。

それに前にも書きましたが、サイは自身の持つ法力が強過ぎるが故に仮契約が出来ません。（オマケに能力無効化アビリティキャンセラーの所為で魔法関係自体が殆ど効果ありません・・・意識が無い時は別ですが）なので必然的にあの変態エロオコジョの役に立つ出番は無訳ですて・・・（・・・）

更に本来は朝倉&ネギが見つける筈のさよも既にサイを見つけ、茶々丸と一緒に行動してる事が多いですから・・・朝倉も必要ないっすね。

とまあ、ファンに嫌われそうですが・・・。  
この作品は“ネギま”であって“ネギま”ではないような物ですの  
で

ではそろそろ次回へと続きます。

これからカモ&朝倉は出番を取り戻せるのか！？　そして役に立つのか！？

・・・まあそれは神のみぞ知ると言う奴でしょう。

P.S.

『某3D格闘ゲーム』

解る方は理解出来るかと思いますが一応此処で説明を。

サイがゲーセンでやってるのは『バーチャファイター』と『ソウルキャリバー』と言う作品と共に人気を三分する3D対戦格闘ゲームの『鉄拳（一応6BR）』。

しかも使用してるのはキングと言う、連携攻撃に追加入力で投げ技に移行したり投げ技で体力の約八割近くを奪える“投げコンボ”の持ち主の覆面プロレスラーです。

ただし攻撃力やら投げのダメージは高いですが、隙の多い技や投げコンボを途中で抜けられてしまうと無防備になり易いと言う“上級者向け”のキャラです。

（何故このキャラにしたのかは作者の鉄拳シリーズの持ちキャラだからです）



### 第三十一話：心と魂より生まれし剣

「・・・ゲツ、何だこの段数は」

ゲンナリしたようなサイの一言が静かな辺りに響く。

サイの見つめる先には大きな鳥居が立ち、明らかに千や二千などと言う数を裕に超えている石段があった。

・・・此処こそが関西呪術協会総本山への入り口であり、明日菜曰く『悪い人達の巣窟』への唯一の進入口だ。

「ちよつと・・・これ全部登るの？」

流石の圧巻と、まるで天にも続くかのように見える石段の数に流石に元気娘の明日菜であつてもやる気無くぼやく。

だが、他に道がある訳ではない　ブツクサ文句を言いながらも明日菜は見える事の無い程の天辺に聳える関西呪術協会を思い、見つめた。

その時　不意に明日菜とネギの目に淡い光を放つ蛍のような物が見える。

その淡い光が小さく爆発するように光を放つと・・・。

『サイさん、明日菜さん、ネギ先生！！　大丈夫ですか！？』

「・・・ん？　わっ！？　な、ななな・・・何よアンタ！？」

其処には小さな人形のような少女が姿を現していた。

良く見れば誰かに似ているような気もするのだが　そのいきなり現れた少女をサイは一瞥すると呟く。

「ああ？　何だ、分身わけみの式神じゃねえか」

『はい、そうですサイさん　サイさんが一緒とは言え、心配でし

たので・・・』

サイのその言葉に同意するようにして小さな少女は礼儀正しく頭を下げながら返す。

・・・記憶が大分戻ったサイは、元々の世界にあった知識も少しずつだが思い出し始めていた。

その中で白面九尾派導術に今の小さい少女のような存在を作り出す術式があった事も蘇って来たのだ。

まあ、向こうの導術の場合は一体ではなく十や二十の数の式神を一気に召喚するのだが。

「わけみのしきがみ・・・サイ、何それ？」

『あ、それは私が説明させて頂きます明日菜さん。』

簡単に説明すれば『連絡用の分身』と言う存在ですね、式神っていう日本古来の符術を使って使用者と同じ姿の存在を作り出す技法です。

取り敢えず私の事は『ちびせつな』とでもお呼び下さい』

“ちびせつな”と名乗った式神に説明が解っているのか解っていないのかは理解出来ないが頷く明日菜。

その後ろにいたネギは、自身の使う魔法の中に光を使って分身を作り出す魔法があるので大体の事は理解出来たのか『はい、宜しくお願ひしますちびせつなさん！』と元気に返していた。

するとちびせつなは鳥居の先を見つめ、上の方を指差しながら三人に聞こえるように言う。

『皆さん、ご注意を・・・。』

この先には確かに関西呪術協会の長が居ると思えますが 東か

らの使者のネギ先生が歓迎されるとは限りません。  
一昨日襲ってきた奴等の動向も解りませんから・・・くれぐれも罠  
や待ち伏せなどに気をつけて下さい』

ちびせつなの言葉にネギも明日菜も気合を入れて真剣な表情をする。  
だが、少々気負い過ぎているようにも何処となく感じるのは気の所  
為だろうか？

・・・そしてこんな時こそ、いつでもマイペースなああの漢の一言が  
役に立つのである。

「オイオイ、んなガチガチになるまで気合入れんじゃねえ。

心配しねえでも関西呪術協会ってのは足生やして逃げる訳じゃねえ  
し、無駄に気合入れたって疲れるだけだぞ。ホレ・・・気楽に行  
こうぜ、気楽によ」

そんな場も考えないサイの言葉は何処から敵が来るかも解らなくて  
緊張していた二人の硬さを取る。

そう、緊張などして硬くなっているには良い結果になる筈のもの  
も悪い結果にしかかなりはしないものだ。

だからこそどんな時でもリラックスし、マイペースに事に挑む心構  
えが大事である。

お互いに見合ってからゆっくりと鳥居の中に足を踏み入れるサイ達。  
そして奥へと向かって一気に走り出すと、後ろを振り向く事も脇目  
を振る事も無く進んで行くのであった

そう・・・この静けさやら場所やら自体が刺客達の罠であると気付  
かぬままに。

「うつつ・・・本当になんて長い石段なのよおお・・・」  
「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・もう三十分は走ってますよおお・・・」

最初は敵の妨害も何も無い為に拍子抜けし、さつさと親書を届けてしまおうと全速力で走っていた明日菜とネギ。

しかし、走れども走れども同じような石段が続くばかりで関西呪術協会のかの字も見えない事から流石に疲れたらしい。

「阿呆が、調子に乗って走るからそう言うザマになる。

そもそもテメエ等二人は修行が足りねえんだよ、修行って奴がな。基礎体力も上げる事無く、段飛ばしで来るからそうなるんだよ

帰ったら明日菜は基礎体力上げからみっちり叩き込んでやるから楽しみに待ってる」

一方、サイなど二人と同じ位のスピードで走りながらも息一つ乱れていない。

まあこの二人と基礎体力という奴が全くと言って良い程に違い過ぎるのだから当然と言えば当然であるが。

しかし・・・そんなサイをして、先ほどから三十分以上も走っているのに目的地に着かないというのはおかしいと疑問に思い始めているた。

「・・・おかしい。

普通あんだだけ石段が長かろうと30分も走ってりゃ着かないにしても何か風景に違いが出る筈だ。

なのにさつきから鳥居が続いている石段の道以外は何も出て来やしねえ」

そこで一つ・・・可能性としてある事を考え付いた。

サイは急いで先を肩で息をしながら歩いている二人に向かって声を飛ばす。

「おい、テメエ等・・・ちつとそこで休んでろ。」

良いか・・・俺が戻って来るまでは絶対に動くんじゃないやねえぞ、解つたな？

行くぞ、ちびせつな」

「えっ？ う、うん・・・」

「解つたよ、何をするか知らないけど気をつけてねお兄ちゃん」

疑問を浮かべつつも言われた通り座り込む二人。

それを後ろ目で少しだけ見つめた後、サイは肩にちびせつなを乗せると全速力で走り出したのだ！！

「行くぞオラアアアアアアア！！！！！！」

『ひゃあっ！？ は、早い・・・早すぎですよサイさん！！ お、

落ちる、落ちちゃいますよおお！？』

出来ればこう言う時ばかり鋭い己の勘が外れて欲しい。

そう祈っていたサイであったが・・・残念ながら戦場いくさばを生きていた者の危険を認識する勘はそう簡単に外れてはくれないようだ。

「・・・えっ！？ な、何で後ろから走って来るのよサイ！？」

「どういう事なの！？ お兄ちゃんはさっき、向こうに走っていった筈なのに・・・！？」

「・・・やっぱりかよ、クソが」

なんと、先に向かって走っていった筈のサイが後ろから走ってきた。忌々しげに舌打ちすると、サイは近くに落ちていた石を拾って横の

竹藪に投げる。

すると、藪の中に投げた筈の石がそのままの勢いで後ろから飛んで来たのだ。

そのまま後ろを振り向く事も無く、召喚した六道拳で石を叩き落としながら溜息を吐くと・・・一部始終をサイと共に見たちびせつなが重々しく口を開く。

『サイさん・・・間違いありません。』

これは無間方処の咒法です。今、私達が居るのは半径500m程の半球状の堂々巡り型結界の内部。つまり・・・『

そこで一度言葉を切るちびせつな。

次に言われる事はもう大体が予想出来ている、出来ているが・・・出来れば聞きたくはなかった。

意を決して口を開くちびせつなの声色に、一段と重い響きが含まれる。

それは

『私達は閉じ込められてしまいました・・・この千本鳥居の中に・・・』

一拳に音が消える。

無音になった千本鳥居の中に風が吹き、周囲の竹藪を揺らした。

まんまと三人は結界の中に閉じ込められてしまったのであった・・・。

「ヤレヤレ・・・こりゃまた面倒だな、オイ。」

それに平和ボケしちまったモンだぜ、まだまだ現役時代の勳は取り

戻せてねえって事かよ」

此処は千本鳥居の結界内に存在している無人の休憩所。本来は長い石段を登ってきた人々の疲れを癒す為に売店の売り子も存在するのだろうが、今は完全に無人の状態となっている。

自動販売機でいつもの無糖コーヒを買って飲み干した後、サイは自分に憤った。

「ひゃ〜、助かったあああ・・・」

そんな言葉を呟きながら休憩所の奥から明日菜が出て来る。

実は彼女、結界の中でトイレに行きたくなつたのだが・・・何せこんな所にトイレなど無いと思い、暴走して闇雲に限界寸前まで走り続けたのだ。

・・・まあ、お陰で休憩所を見つけてサイは落ち着く事は出来たし、明日菜は御不浄（お漏らし）しなくて済んだ。

尚、ネギも落ち着いた所為かトイレに行きたくなつたらしく、先ほど明日菜と交代するようにトイレに向かっている。（勿論、バレない様に女子トイレへ）

「も〜、それにしても何でアイツ等は親書を渡すのを妨害しようとするのよおお！！」

中学生になつて漏らしそうになつた事が原因か、はたまた東西が仲良くしようとするのを邪魔するのが許せないのか　腕を振って癩癩を起こし始めた明日菜に対してサイが冷静に呟く。

「・・・さあな、東西が仲良くなると都合の悪い奴が居るんだろ」

本当の理由は学園長から聞かされているのでサイは知っている。

だが、それを話すとなると秘密裏に頼まれている事も語らねばなら

ない為か余計な事は言わないらしい。  
するとちびせつながらサイの簡潔な物言いを補足するように説明し始めた。

『関東の人達が伝統を忘れて西洋魔術に染まってしまった事が原因の一つらしいです。』

それにサイさんの説明もあながち間違っではないと思います

東と西が争う事で利権を得ている者達も居ると言う噂ですから・・・  
『

全員が全員打算的な事を考えている訳ではないだろうが、関西呪術協会の者達には者達なりの誇りという奴があるのだろう。

伝統や伝承を護る事は悪い事ではないし、間違いではないだろうが・・・それでも手段は選ぶべきであろうが。

結局正しい事をしようが何をしようが“争い”という選択を選んだ時点で碌でもない事には変わらない。

「チツ・・・下らねえ」

『・・・サイさん？』

「いや、何でもねえよ・・・」

そう吐き捨てるサイの言葉は一体誰に対して呟いたものなのか？

しかし、何処となく自分自身に対して呟いたように聞こえたのは気の所為だろうか？

答えを知る者など此処には・・・いや、この世界には居まい。

『それよりも今は此方の戦力分析をした方が良いのでは？』

申し訳ないですが、敵が狙っていると解った以上、お嬢様の側を離れる訳には行きませんので・・・。

まずは何とかしてこの結界から抜け出す方法を

済みませんサ



「イさん、お役に立てず・・・」

申し訳無さそうにするちびせつなにサイは黙って首を横に振る。元々、此処に閉じ込められたのは刹那の所為でも、明日菜の所為でも、ネギの所為でも、誰の所為でもない。

それに仲間達の記憶を取り戻したサイにとって、もう少しこの境界内の様子を見れば“ある技術”を使える。

その技術を利用すれば、此処から脱出する事も可能だろう  
奥の手の一つの為かあまり使いたくないが・・・。

「こつちの心配なんぞしてねえでテメエは木乃香を確り護れ。俺等も俺等なりに何とか此処から脱出するから問題ねえからよ・・・解つたな？」

根拠の無い自信ではない事は刹那も良く解っている。勇気付けられるような一言にちびせつなを通して刹那は『・・・はい』と小さく呟いた。  
・・・若干、嬉しそうに。

「ねえ・・・所でさ」  
そこで不意にエヴァ&茶々丸が腹が減った時の為に持たせたサンドイッチを食べていた明日菜が口を開く。

「サイ、アンタの前に助けられた後にその・・・“法力”ってのの扱い方を習ったけどさ。

あれって要は“魂獣”<sup>スピリット</sup>ての力つてのが普通の生活の時に出て来ないようにする為のモンでしょ？ じゃああれ解放したら私でもアンタみたいに戦えるんじゃないの？

何処から関西呪術協会の刺客ってのが来るか解らないし、頭数は多い方が良くないじゃない？」

一応、普通の人間に比べても半魂獣化した事により力を得た明日菜。この物語では描かれていなかったが、最初の日に木乃香が攫われそうになった時には何と素手で刺客の式神をぶん殴って撃退出来た程だ。

「……どこぞの不幸体質少年の幻想殺しの如く、とんでもない破格な力である。」

ただし、それには明日菜自身のある事情も関係していたが。

「……まあな。」

確かに普段抑えてる筈の魂獣の力を解放すれば、多分 teme なら元々素質がありそうだから戦闘技術を覚えねえでもそこそこ戦えると思うぜ。だが、俺は余りオススメしねえが」

「えっ……な、何でよ？」

サイの含みを持ったような言い方に疑問を持って聞き返す明日菜。

丁度そこに用を足し終わったネギも戻ってきたが……深刻そうな雰囲気<sup>イマジンプレイカー</sup>に首を捻る。

サイはそこで一度黙り目を閉じると、少しの沈黙の後に説明を始めた。

「理由は簡単だ。」

teme の今の状態は簡単に言えば人間の魂と魂獣の魂とで絶妙なバランスを取っていて、シーソーと同じ状態になってる。

本来、瀕死になるような傷を受けたのを俺が強引に俺に宿る魂獣の魂の欠片を利用して治したからな。それ以外の方法も、時間も無かったしよ。

だが本来、死ぬような傷を受けた人間の魂を強引に魂獣の魂で補ってるんだ……現在の状態で魂獣の力なんぞ解放したら、魂の均一が崩れて一生人間に戻れなくなるぞ？」

そう、何故サイが明日菜に法力の制御方法を教えたのか？

その理由は今彼が説明した通り、その力を使い続けると人間では無くなってしまう為だ。

現在の明日菜の状態は欠けてしまった人間の魂を魂獣の魂で補っている状態である・・・その際に魂獣としての力を使い過ぎれば、本来人間の魂よりも密度も強度も強い魂獣の魂が人間の魂を吸収してしまう。

そうなれば最後、嫌でもその人物は二度と人間には戻れなくなってしまうのである。

今まで人間だった人物が人間ではない存在となる事の辛さはサイは理解出来る。

勿論、人というのは優しい存在故に気持ちを理解して人間かどうかなど気にしない者が居なくも無い。

しかしそれは人間全体で見れば悲しいかな2〜3%程度も居れば上出来だ。残りの大多数は恐れるか、蔑むか、排斥するかどれかだ。

人間とは“ある筈のものが無い”という事と“無い筈のものがある”と言う事を恐れる。

それ故に自分と違う者を虐げ・・・『自分と違う』と言う事を大義名分に度の超えた残酷な事も平気でする。

しかし悲しいかな、それが人間の現実と言う奴なのだ

さて、話を戻そう。

サイから力を使う事の危険さを改めて聞いた明日菜。

だが彼女は自分の首を突っ込んでしまった事柄を無責任に他人任せに出来ない損な性格をしている。

それに、自分よりも年下のネギが戦っているのに自分だけが逃げる事など出来なかった。

・・・そんな勝気な性格をサイも理解しているのだろう。もう一度、顎に手を当てるような仕草を取ると・・・少しだけ考えた後に意を決したように語りだした。

「・・・解ったよ、明日菜。

テメエの目を見りゃ覚悟を決めてるのが良く解る・・・男でも女でも覚悟決めてる奴は決して折れねえよな。なら、急激に法力を使わねえでも戦える方法が一つあるから教えてやるよ。

だが先に聞いとくぜ・・・前にも聞いたが後悔はねえな？」

その言葉に明日菜は深く頷く。

そしてニヤツと笑うと、サイに向かって言葉を返した。

「前にも言ったじゃない、私は選んだんだ答えに後悔しないって。それに私は自分で考えてその答えを出したんだから、後は自分に来る事を精一杯するだけよ。

・・・何か文句ある？」

答えを聞いたサイは一度鼻で笑うと呟く。

「フン・・・生意気な事言いやがる。

だが、俺はテメエみてえな自分の意思を貫き通す女は嫌じゃねえよ。

・・・じゃあちつとこっち来い」

サイは明日菜を手招きして近くに來させると、腰に帯刀している七

魂剣を抜いて地に突き刺した。  
するとまるで七魂剣を突き刺した場所から魔方陣のような物が形成され、煌々と光を放ち始めたのだ。

「す、すごい……魔法じゃないけど、凄い力を感じる。  
これは一体何なの、お兄ちゃん……？」

魔法についての知識はそんな所そこの人物には負けないネギ。  
しかし目の前で起こる目が眩む程の光は、かつてカモが一度か二度しか行っていない仮契約の方陣よりも温かく感じる。  
同じようにちびせつな光を見つめていたが……何処と無く寂しそうにも見えた。

「……黙って見てる。」

『我 今此処ニ 魂ヨリ生マレ出デシ 神ノ戦具ヲ 現世ニ現サン』

ソノ身ハ 刃ニシテ盾 ソノ身ハ 空ニシテ鋼……ソノ身ヲ以ツ

テ 神具ノ召喚 相成ラン

顕現セヨ 大帝ガ名ノ元ニ

『』

詠唱のようなものを唱え終わると、魔方陣がまるで生きているかのように明日菜の身体に巻きつく。

だが苦しくは無い 寧ろ、まるで温かい何かに包み込まれているような感覚を感じた。

そして次の瞬間……明日菜の目には信じられない光景が映ったのだ。

「え……ええっ!? な、何これええええ!？」

何とそれは……己の胸から、武器の柄のような物が生えていたの

だから

いきなりの事に見守っていたネギとちびせつなも言葉を失い、明日菜はパニックになる。

しかしサイは慌てずに静かに明日菜に呟いた。

「その柄を確りと握り締めろ、明日菜」

「え、ええっ!? ちょ、ちょっとコレは何なのよサイ!?!」

「良いから確り握れ、そして其処から抜け」

「ぬ、抜けつてアンタ!? 無茶言わないでよおおお!?!」

そりゃそうだ、いきなりそんな事を言われて出来る奴など居まい。

だが、サイの有無も言わせないような目付きに明日菜は恐る恐る自分の胸から生えている柄を両手で確りと握る。

すると何故だろうか・・・その武器の柄らしき物を握った瞬間、今まで感じていた不安やら何やらという感情は何処かに吹き飛んでいた。

「(・・・暖かい、何だろうこの感覚?)

前に一度、ネギに“契約執行”とか言うのをした時のとは違う・・・。

変な気持ち良さじゃなくって、何だか身体の中からポカポカと暖かくなるような感覚さえ感じる・・・)「

そして柄を握っていた両手は、自然とゆっくりと上に動く。

ゆっくりと現れる刀身、其処から放たれるのは白銀の煌き・・・その光が全て消えた後・・・。

明日菜の手には、幅広の刀身を持った大剣の柄が握られていた

その手に得たは神の名を冠す武具。  
魂獣の魂そのものを武器と変えた、魂獣達の誇りの証。

その名は

アーティファクト  
神具。

そう、サイの言う戦う方法とは・・・半魂獣と化した明日菜が、己自身の力で生み出した神具にて戦うと言う方法だったのだ。

「ヤレヤレ・・・何とかなったか。

半魂獣にこの術式を使った事なかったからな、ちと不安だったが・・・」

「・・・つて、えっ？

ちよ、ちよつとアンタ・・・この方法、誰かで試してから使ったんじゃないの・・・？」

そんな小声が聞こえたらしく、己の手に携えられた大剣を見ていた明日菜が途端に不安そうに聞く。

それについてサイはバツが悪げに頬を掻くと言葉を返した。

「いや、何処に試す方法があるんだ？

半魂獣なのはテメエだけだし、そもそもこの術式思い出したのはつい昨日の事だな。

・・・まあ良かったじゃねえか、何も不具合無さそうだしよ」

勿論、そんな一言を明日菜が聞き逃す訳もない。

おかんむりな状態で目に涙を溜めながら彼女はブチ切れた

「良かったじゃないわよおお！！！」

じゃあアンタ、これでもしも失敗してたらどう責任取る心算だったのよおお！？」

「まあ失敗しなかったから別に良いじゃねえか。それに俺は“たら”とか“れば”とか“もし”とか考えんの嫌えだよ」

「知らないわよこのバカ！！  
てか、何でアンタそんなに余裕綽々なのよ！？ 私が怒ってるっての自覚してんの！？」

「ああ？ 何だ怒ってたのかテメエ。  
いつもの調子で喋ってからそんな意識無かったわ・・・あんまり怒り過ぎつと血管切れるぞ？」

「ア・ン・タ・が、怒らせてるんでしょうがああああああ！！  
！！！！！！！！」

出た、久しぶりのサイの物言い。

本当にコイツはちょっと口を利くだけで他人を激怒させる天才である。

・・・マトモな事も言ったりはするのだが。

「・・・まあ、それはさて置いてだ。

明日菜、またとんでもない神具召喚したな “コレ” は白虎族の中でも上位の方に入る力持つてるぞ。

本来、神具ってのは一つにつき一つの属性しか持ってねえ奴が殆どだ・・・なのにコイツは今調べたら白虎の“石”と“鋼”と“金”の三属性全てを持ってやがる。

テメエも大概、規格外な野郎だな・・・普通に召喚出来るような代物じゃねえぞこの神具は」



取り敢えずネギに宥められて落ち着いたらしい明日菜。  
サイの説明を聞いて、自分の手に携えられた大剣が凄いやつだと解つたらしい。

「へえ、そんなに凄いのコレって？」

「何だか良く解らないけど・・・持つてるだけで身体が暖かく感じる・・・」

「・・・そりゃ、それだけこの剣が強い力を持つてるって事だ。

使い方を間違えんなよ、この力の感じは下手して全力でブン回したらそこらの森が禿げ上がっちゃう。

だが、どうやら理由は解らねえが全力で力を解放出来ねえように封印が施されてるみてえだな。

現時点じゃ本来の力の半分も出てねえよ」

ふと、そこで今更何か気付いたかのように手を叩く。

「実際の所、実力の半分も出せていないのはサイも同じなのだが・・・」

「そつだ、忘れてた。

コイツは明日菜、テメエ自身がある意味生み出した様なモンだ・・・  
要は産まれたばっかのガキと一緒にだ。

これから長い付き合いか短い付き合いかは知らねえが、名前でも付けてやれ」

「え、っ・・・そ、そんな事急に言われても・・・」

流石に急に武器に名前をつけるなど不可能だろう。

特に名前も思いつかなかった為、明日菜は今の現状を打破してからゆっくりと名前を考える事に決めたのであった。

「ま、まあ何にせよこれで私も戦えるわね。  
それに一昨日出て来た奴等も全然大した事無かったし、サイも居る  
んだから大丈夫よね？」

もう、何が来ようとドゥンと来いって奴よ!!」

明日菜がそう余裕を見せたその時

周囲の竹藪が風も無いのに揺れ・・・ざわめく葉の音や無数の音に  
混じって、何処からとも無く声が響いた。

「・・・へへへっ、そいつは聞き捨てならんなあ」

その声と共に近づくと大きな音

サイや明日菜やネギが周囲を見渡していると・・・目の前に巨大な  
影が降って来た。

腹の底に響くような重低音と共に現れたのは、堅固な外殻に覆われ  
た一匹の大蜘蛛。

人の足の倍以上ある顎腕のついている頭部に張られた札が、この巨  
大な存在が式神だと明言しているようだ。

更にそれに続くように軽やかに大蜘蛛の頭の上に立ったのは一人の  
ヤンチャ坊主風の少年。

恐らく先ほどの声の主であろう少年は、頭のニット帽を押さえなが  
ら眼下のサイ達を睥睨する。

「そう言うデカイ口叩くんやったら・・・まずこの俺と戦ってもら  
おか？」

瞬間　　サイ達と少年の周りの空気が急に冷たくなる。

此処からは余計な言葉は不要だ、言葉ではなく拳にて語り合うのだから。

そして、サイ達も少年も互いに構えを取ると・・・。

「「「「いくぞ（で）！！！！」「」「」

共に地を蹴ると戦いを開始するのであった

### 第三十一話：心と魂より生まれし剣（後書き）

投稿完了です。

原作とは違い、中途半端な仮契約しかしていなかったのでハマノツルギは召喚出来なかった明日菜。

しかし、サイの術式によって遂にハマノツルギに匹敵するような神具をGetしました。

まだ名前は決まっていますが、これもその内決定しますのであしからず

しかしぶん殴って式神を消せるって。

まんま幻想殺しの力ですな・・・明日菜の場合は『魔法無効化』のお陰ですけど。

それと原作とは違い、ネギが女の子でしかものどかがサイに好意を抱いていますので、必然的に仮契約しなくなってしまったので此処では出てきません。

一応、無間方処の咒法から脱出する方法も考え終わってますのでお気にせず。

ではまた次回の講釈にて。

お楽しみにお待ち頂けると幸いです、ばいばい

## 第三十二話：英雄への一步

「オラアアアア!!!」

「ガキだからって手加減はしないわよおお!!!」

まるでタイミングを計ったかのように、開戦して直ぐに放たれるサイの蹴りと明日菜の拳。

サイの蹴りは大蜘蛛の顔を上に蹴り上げ、明日菜の拳はその浮き上がった顔・・・いや、顎に綺麗にクリティカルヒットして硬そうな大顎を簡単に陥没させた。

「もう一丁!!!」

そう叫ぶと左手で引き摺っていた大剣を振り上げ、大蜘蛛に叩き付ける。

剣術だの流派だのという物もヘツタクレも無い、剣の大きさと重さを利用しただけの素人でも出来る一撃であったが・・・その斬撃は一刀の元に大蜘蛛をお札の姿に戻してしまう。

「フン、やるじゃねえか・・・」

「わ　　明日菜さん、凄いです!!!」

『まさか仮契約バクティオーとか言う事をしていない明日菜さんが、一撃で式神を戻してしまうとは・・・』

明日菜はまだサイや刹那に比べれば戦闘経験など少ない筈。

しかし、その荒々しいが豪快な戦い方で式神を簡単に消してしまったのは三人を感心させる。

更にそれを見ていたニット帽を被った少年も驚いて感心したような表情で口を開く。

「へ〜、やるな姉ちゃん。」

式払いの妙な力を持つ女子中学生がいるから守りの堅いのを借りて来たのに、一発でお札に戻されてしもたわ。

それに其処の兄ちゃんもやるやないか、まさかあんな簡単に式神の下に入り込んで頭を蹴り上げるやなんて思わなんだわ・・・下手すりゃ、踏み潰されるか噛み千切られるやも知れへんのに。

千草姉ちゃんは「知らへん奴」って言うてたけど、充分に楽しめそうやな

まあ、力を何にも感じない所を見ると一般人みたいなのが残念やねんけど・・・」

少年はどうやらサイの事を「腕っ節が強い一般人」と認識したようだ。

当然と言えば当然の事である　前にエヴァと戦った際に彼女が気付けなかったように、サイの力は独特な物で魔力でも気でもない。故に初めて対峙した者は十中八九がサイを一般人だと認識するのが当然の事なのである。

元々サイも、敵と対峙した際は情報をあまり相手に与えないように力を抑えている事が多い。

それに相手は一人である。多勢に無勢ではなく一対一の戦いを望むサイとしては多数で攻めるといのは余程の事情が無い限りは好まない性格なのだ。

・・・それに今回は、明日菜の神具を垣間見たりネギの能力を知りたいという事から危ない時だけ手伝っただけで、それ以外は傍観する心算でもあった。

一方、明日菜やらサイを見ながら（サイに対しては事情が関係するとは言え若干無礼な言い方をしつつ）嬉しそうに笑う少年。

どうやら式神を戻されてしまった事に悔しさは微塵も無いらしく、

逆に玩具を見つけた子供のような見方によつてはあどけない笑いを浮かべて見つめている。

・・・だがその目がネギを見、顎に添えられていた手が彼（彼女）を指差した時、ニット帽の下の少年の目付きは明らかに『嫌悪感』のようなものをもし出しているような光を宿していた。

「やけど、お前はダメやなチビ助。

強いのはその姉ちゃんや、そもそも女に守ってもらつて恥ずかしくないんか？

一般人のその兄ちゃんさえ戦つとつたのに・・・だから西洋魔術師はキライなんや」

「っ!?!? むっ・・・」

ネギを卑下するかのような容赦の無い言葉に僅かに肩が震える。

そもそも何故、敵にそんな事を言われねばならないのか・・・そんな思いと共に言い返そうとするが、台詞は幾らでも頭の中に浮かんでくるのにそれを口から吐き出す事が出来ない。

それを弱いと思つたのか、少年は更に暴言を続ける。

「大方、お前の親父のサウザンなんかつつう奴も護られたてばっかの腰抜けやろ？」

何が英雄や・・・そんなモン、強い奴が護つてくれて自分が高みの見物してりやあ誰だつてなれるわ。

・・・まあ、しゃあないわな。弱弱の西洋魔術師つてのは所詮、御守りがいなければ何も出来へんねんからなあ・・・アハハハハハハ!!!」

何よりも尊敬している父親をこき下ろす侮辱。

それに対して『ふざけるな!!!』とネギは大きな声で叫びたかつた。しかし明日菜やサイの強さを垣間見て、自分の不甲斐無さや魔法の

みで護つて貰わねば戦えない己の無力さも気が付いていたのもまた事実である。

故に彼（彼女）は何も言えず相棒である、身の丈に合わない程に長い杖を握り締めて硬直する。

少年に対する怒りと、自分に対する憤り……二つの怒りがネギを震わせ、それでも言い返せない悔しさから瞳に涙を浮かべる。  
……するとその頭の上にチョップが振り下ろされた。

「ふぎゅ！？ い、痛いよ！！ 何するのお兄ちゃん！？」

ネギの頭の上にチョップを落としたのは勿論サイだ。

そのまま頭を鷲掴みにすると、ゆっくりとネギの視線に合わせて背を低くする。

「何を言われっぱなしで我慢してるんだこのバカ。

『何時でもどんな時でも冷静に居ろ、じゃねえと下らねえ失敗をする事になる』って俺は昔テメエに教えた事があるが……こき下ろされてまで我慢しろなんて教えた覚えはねえぞ」

一瞬、ネギの事をぶん殴ったサイを非難しようとした明日菜。

だが、その口ぶりを聞き始めた時に黙り込む……口調は悪いが、その言葉の端々には何処と無く優しさのような物も見えたのだから。

「大事な誇りモンを馬鹿にされて黙ってんじゃねえよ。

テメエの誇りつてのは、そんなに安っぽいモンだったのか？ そんな安っぽい想いでテメエは強くなるうなんて思ったのか、ああ？ 違つたろ？ だったら何であのガキをぶっ飛ばして言った台詞撤回させようって思わねえ？」



そう言い終わるとサイはネギに背を向ける。  
その背中を見つめる妹分に対して、サイは振り向く事無く言い放つた。

「悔しいなら下を向くな、前を向け。

己の誇りを汚されても、辱められても、貶められても・・・無力を痛感してもまた立ち上がりやあ良い。

テメエがテメエ自身で『負けた』って認めねえ限りはそいつは本当の意味で負けじゃねえんだよ。

その言葉の意味が理解出来るまで時間をくれてやる、どうしてえのかテメエでよく考えろ」

するとサイはゆっくりと少年の方へと向かって歩き出した。

その後姿、その背中・・・何故だか解らないが、明日菜とネギは目を放せない。

まるでその背中を持つ いや、その存在そのものが誇り高く、偉大な英雄であるかのように見えたのだから・・・。

「なんや、兄ちゃんが相手か？

やっぱリネギ・スプリングフィールドは出て来んのかい・・・此処までこき下ろされてんのに。

やっぱし西洋魔術師ってのは揃いも揃って腰抜けばっか・・・り・・・？」

その言葉は最後まで続かない。

何故なら・・・少年を見つめる“今まで感じた事も無い程の殺気”を感じたのだから。

この少年は少なくとも先ほどの自信満々な態度や明日菜の攻撃を簡

単に跳んで避けた所を見ればそれなりに場数は踏んでいるだろう・  
・それも年不相応な数の場数をだ。

しかしネギが落ち着き、己自身でどうするのかを決めるまでの時間を稼ぐ為に出て来た漢。

つまりサイの場合、少なくとも百や二百程度では数え切れない程の修羅場を潜り抜けて来ているのだ。

勿論、現時点は魂鎧装ソウルアツクと言う技術を思い出し、麻帆良にいる時程ではないにせよ戦う事は出来るようになった・・しかしそれでも魔法使いや呪術師、符術師のように大きな力が使える訳ではない。

だがそれでも、そんな所これらの小僧程度に暴言を吐かせ続ける程、サイは優しくは無いのである。

強烈な、言つなれば身を貫く程の殺気に晒された少年。

するとその殺気を送っている人物であるサイが、ゆつくりと口を開いた

「光明司斉だ・・・」

「えっ・・・??」

いきなりの事に不意を突かれたのか聞き返す少年。

だが彼はその事に一切興味を持たず、静かにもう一度口を開く。

「白面九尾一族が長、光明司イツナが子息・・光明司斉だ。

さっさと名乗れ小僧      テメエは喧嘩の作法も知らねえのかよ、

ああ？」

この雰囲気は先ほどまでとは違いすぎる。

どこぞのアルビノの戦闘狂のような台詞を吐くと、慌てたように少年が名乗った。

「お、俺は・・・俺は犬上小太郎！！  
兄ちゃん・・・あ、アンター一体何モンや・・・この場の雰囲気の原因  
はアンタか!？」

サイを睨む犬上小太郎と名乗った少年。  
見れば睨みつけてくる小太郎に対して、サイは殺気こそは凄まじい  
がそれ以外は全くと言って良い程に何も感じない。

「・・・だつたら何だ？  
ホレ、名乗りは終わったんだ　　とつととかかって来い、遊んで  
やるからよ」

『遊んでやる』と言う一言に最初は理解出来なかったが、直ぐに頭  
に血が上る。  
その台詞は寧ろ、小太郎自身が言うべき言葉だ　　そもそも無防  
備にポケットに手を入れて突っ立ってるだけの人物は酷く隙だらけ  
に見えていたのだから。

「・・・!!　舐めんな!!」

そう言い、犬歯を剥き出しに石段を蹴って跳躍するとサイに飛び掛  
る。  
翳した拳をそのまま目の前の人物に叩き込めば終わり・・・少なく  
とも小太郎はそう思っていた。  
しかし

「ポンポン飛び回るんじゃねえよ馬鹿が」

小太郎の目には信じられない光景が映る。

何と目の前の男が、ポケットに手を入れたまま片足を振り上げて小太郎の拳を止めているのだ。  
そのまま拳をなぎ払うと、小太郎のボディーに身を翻して蹴りを叩き込む。

「ぐうつ!?!」

呻き声のようなものを上げて竹藪に叩き付けられる。

軽く蹴ったように見えるが、その一撃は大分重い……しかしそれよりも小太郎が気になった事は他にあつた。

それは……身体に痛みが無いのだ。

確かに竹藪に叩きつけられたが、それで背中を打った以外は身体に不調は無い。

そもそも、蹴られた筈の部分に打撲痕も痛みも一切無いのが気になつた。

「敵の前で簡単に飛ぶのは素人の証拠だ。

空中じゃ方向転換は容易に出来ねえし、出来たとしても相手に隙を見せるだけだぞ小僧」

「くつ……調子乗んなああ!!!」

今度は地を蹴ると高速でサイとの間合いを縮めて拳を叩き込もうとする。

だが、その高速で弾丸のように飛び掛つて来た少年の拳を、サイは再び足の裏で止めていた。

「殴り掛かるなら余計な事言う前に殴つて来い。

それに直線的な攻撃なら幾らテメエが早かろうと何だろうと価値はねえぞ。

フェイントぐらい混ぜて攻撃しろ、じゃ無けりゃ幾らやった所で時

間の無駄だ」

確かに幾ら早かろうとも直線しか攻撃が出来なければ読むのは難しくは無いだろう。

要は拳銃などと同じだ・・・殺傷力は高かろうと、結局は真っ直ぐにしか弾丸が飛ぶ事が無い故に達人であれば避ける事が可能だ。

・・・特にサイは1m程度の至近距離で銃を撃たれても軌道を読んで避ける事が出来る『先見の目』があるのだから。

「くっつ!？」

再び吹き飛ばされて竹藪に突っ込む小太郎。

しかし再び叩きつけられども小太郎は蹴られた痛みなど感じない・・・。

だが二度もやられれば、一応そんな所そこの一般人よりも遥かに場数を踏んでいる少年も気が付いた。

「・・・何でや、何でさつきから攻撃しないんや!？」

そう、サイは先ほどから攻撃をしていない。

吹き飛ばされて竹藪に何度も小太郎は叩き付けられているが・・・要はそれは寸止めた蹴りで押しているだけなのだ。

本来なら力が制御されているとは言え、サイが本気でやれば二度も三度も攻撃を受け続けられる訳が無い。

多分、最初の一発目で意識など簡単に刈り取られているだろう。

「あん？ さつき言ったら、遊んでやるってな。

ガキとのお遊びに全力でやったら、直ぐに終わっちゃうじゃねえか」

その表情は何処までも不敵に、見方によっては凶悪に見える笑みを浮かべる。

言われた台詞が自分がガキ扱いされていると言う事を理解した小太郎は憤りながら攻撃を仕掛けるのであった。

サイと小太郎の戦いを見つめるネギ。

確実に相手をKOする事の出来る実力を持ちながらもそれをしない理由・・・それは言うなれば己の為だろう。

『馬鹿にされたのならそれを相手に撤回させる』

そう、馬鹿にされたままでなど居られない・・・それを撤回しないと言う事は、尊敬する父親を馬鹿にされたまま黙っているという事と同じ。

ひいてはそれは、自分の信じて来たもの全てを否定するのと同じなのだから。

「・・・明日菜さん」

「えっ？ 何よネギ？」

いきなり声を掛けられた明日菜は聞き返す。

振り向いてネギの姿を見たその時、一瞬だが明日菜は目を疑った。其処に居たネギは先ほどまでのように己の無力さに打ちひしがれていた姿とは違い、とても大きく見える。

そしてその面影が一瞬、見た事も無い・・・なのにとっても懐かしい女性と重なって見えたのだ。

「ボクは無力です・・・」

父さんを探す内に必ず戦う力が必要になると思って技術を覚え、それを覚えただけでそれ以上の努力もせず慢心して、結果・・・アイツに何を言われても言い返す事も出来ませんでした」

天才少年などと呼ばれ、英雄の子などと呼ばれ・・・独学で魔法を覚えた事によって心の何処かで慢心していた。

それがこの戦いで顕著に現れ、朝倉に魔法をバラしてしまい、自分では何も解決出来ずに他人の力ばかり借りる。

小太郎が言った事は全てが事実ではないにせよ、反論出来ない事も多かった。

だが・・・それを嘆いて一人で意地を張ろうとして何になる？

己の弱さを認め、そしてその部分を全部ひっくるめて前を向き、そして強くなる。

サイという大きな背を持つ、誇りを重んじる人物に言われ、そして冷静に考えてようやくネギは気付いた。

弱くても良い、誰よりも強くなくても良い・・・だからこそ人は、誰かと共に歩めるのだと。

「だけど・・・此処で自分ひとりで意地を張るのは本当に愚かな証拠です。

一人で勝てないなら誰かと共に戦えば良い・・・負けたってまた立ち上がれば良い。

自分の実力を理解出来ずに、自分の誇りや覚悟を捨ててしまうよりもずっと・・・」

そこでネギは明日菜の方を見た。

その目にもう迷いは無い・・・例え何と言われようとも、己に出来る事を己自身で貫く為に。

「だから明日菜さん・・・ボクと一緒にアイツと戦ってくれませんか？

お兄ちゃんに戦って貰った方が勿論確実です・・・でも、それじゃあ意味が無いんです。

例えどう思われようと、卑怯だと罵られ様とも　　誇りを貶め  
られたままで先に進むなんて出来ません。

自分の力で、自分の意思でアイツに勝って、汚された誇りを取り戻  
さなきゃならないんです！！」

それこそが天才と呼ばれていた少年が選んだ決意。

もう逃げはしないし、後ろも振り向かない・・・その意志が変わら  
ない事は見れば一目瞭然だ。

そんなネギに対し、明日菜も確りと頷く。

「心配しないで手伝うわよ。

そもそも普通、10歳のガキが危険な事をしようとしてるのを放っ  
ておけないでしょ？」

そしてもう一つ・・・はにかむような表情でサイの方を見た後に呟  
く。

ある意味ではこれもまた、明日菜なりの決意という奴だったのだろ  
う。

「それにあたしはね・・・。

後ろ向いたって良い、倒れたって良い・・・そこから逃げないなら  
ガキだろうが、口の悪い奴だろうが、何だろうが、一生懸命自分の  
生き方貫いて頑張ってる奴は嫌いじゃないのよ・・・悪い？」

そう言うのと置いてあった大剣の柄を握る。

ネギもその横で己の誇りであり、大事な父親のくれた杖を握ると明  
日菜と目を合わせてから同時に呟いた。

「それじゃあ、行きましょう（行くこう）！！」「」



小太郎と対峙するサイは足音で誰かが、いやネギ達が近づいて来るのを理解する。

ゆっくりと首を捻って後ろを見れば、己の答えを決めたらしい表情のネギが居る・・・再び小太郎の方を向くと、サイは背を向けたままネギと明日菜の方に言葉を飛ばした。

「・・・その面はさっきの言葉の意味を理解して、答えを決めたみてえだな」

「うん・・・お兄ちゃん。」

アイツとはボクが・・・いや、ボクと明日菜さんが戦う！！ だから此処はボク達に任せて欲しいんだ

「」  
静寂が舞い降りた空間に小川のせせらぎと竹藪が風に揺れる音が響く。

ネギの言葉に一度黙り込んだサイは目を瞑ると、ゆっくりと目を開いて質問を返す。

「良いんだな？ 負けて苦しむ事になるかも知れねえ。」

これは試合じゃねえんだ、殺される可能性だつて無い訳じゃねえぞ・・・俺に戦わせるつて選択肢を選んでも誰も責めはしねえ、それでも文句はねえな？」

しかし続くのは決意に満ちた声だ。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん・・・ボク達が戦う。」

もう決めたんだ、確かにボクは未熟でアイツの言う通り誰かに護つて貰えなきゃ戦えないかも知れない。

お兄ちゃんが戦った方が良かったと思つよ……でも、それじゃあ意味が無いんだ。

自分の誇りを馬鹿にされたら、自分で誇りを取り戻さなきゃダメだと思つから……だから、ボクが戦つよ。

それが、ボクの決めた答えだから……」

静かにネギの決意を聞いたサイは頷くと道を譲るように横に避けた。そこで睨んでくる小太郎を無視すると、ネギと明日菜に向かって言葉飛ばす。

……こう言つた場面の際、余計な長い言葉は不要だろう。

「だったら“終わったら”呼べ。

俺は此処から出る方法を探ってくる ほれ、行くぞちびせつな」

そう言うとか何を言いたげな苦々しい表情の小太郎を無視して背を向けるサイ。

肩の上には心配そうだが、それでもサイの物言いに何かを感じる部分があつたのか何かを理解したような表情のちびせつなが居る。

……と、その背中に小太郎が怒声を浴びせた。

「な、何や兄ちゃん!? アレコレ色んな事を言つてそれで終わるか!?!」

それにこの結界からは俺が知つてる方法使わな出れへんで!! そもそもこんな後ろに隠れてるだけの西洋魔術師のチビと素人の姉ちゃん程度で俺を倒せるとでも思つてるんか!?!」

その物言いは当然の事。

小太郎にとつて見れば手も足も出ずに“手加減”されて居るだけでも頭に来ていたと言つのに、更に自分が散々こき下ろした腰抜けの魔術師が相手になるなどと言つても納得出来る筈もない。

だが、サイは小太郎の言葉に立ち止まると答えを返した。

「テメエじゃ少なくとも“今のネギ”にや勝てねえよ。それに俺はネギを信じている・・・だから言った筈だ、終わったら呼べとな」

無責任のようにも聞こえる言葉。

しかしその言葉は、確りとネギの心の奥に深く響き渡った。

『信じている』・・・短いその一言は、今のネギには何よりも心強い一言だろう。

ネギは考えても見れば10歳の子供だ、人から心配される事はあれど信用された事は少ない。

失敗したとしても、何をしたとしても、人から心配されているだけでは余計に進むべき事を見誤ってしまう。

しかし・・・自分が何とかしなければならぬと思えばそれは大きく成長する。

失敗したとしてもその失敗を次に生かすように己で考えられるようになるし、信用すればその期待に応えようと努力だつてする。

だからこそサイは余計な事は言わずに唯一言ネギに伝えただけなのだ・・・『信じている』と。

「それにな・・・もう一つ、訂正しておくぜ」

サイは背中を向けながら言い加える。

ある意味ではその一言は、閉じ込められて先に進まない状況を打破するには充分であり・・・小太郎を慌てさせる一言であった。

「こんな結界で俺等を封じとこうなんぞ千年早え。

・・・あんまり俺を舐めるんじゃないぞ、クソガキが」

その言葉を最後にサイはもう振り返る事無く歩き去っていくのであった。

自らの手に愛刀である七魂剣スサノオを携えたままで・・・。

## 第三十二話：英雄への一步（後書き）

更新完了です、つじつまの合わない部分はご了承を。

次回にて小太郎との決着はつき、結界から脱出します・・・まあ、書くべき説明はその時に。

それでは次回をお待ちください。

P . S .

【某不幸体質少年、イマジンプレイカー幻想殺し】  
アニメ『インデックスとある魔術の禁書目録』の主人公、上条当麻の事。

ちなみに『幻想殺し』とは右手で触れた異能の力を、例えそれが魔術であれ超能力であれ魔法と科学の融合した物質・存在・事象と言った異能の力が関係している物全てを無力化、自壊、消滅させる事が出来る能力。（ただし、異能の力が関係していない物に対しては一切合財なんの能力も持たないと言う欠点も持つ）

まあ、簡単に言えば『マジックキャンセル魔法無効化』の一点特化型ともいえる能力。

### 【アルビノの戦闘狂】

PCゲーム『Dies irae - Acta est fabula -』の登場人物の一人。

以前に記した『ヴォルフガング・シュライバー』と同じく超危険人物であるヴィルヘルム・エーレンブルグの事。

元凶悪犯罪者上がりの軍人で気性が荒く、殺人狂にして戦闘狂。

更に度を越えた極度の人種差別主義者にして非常に好戦的、正しい意味で『危ない』思考・性格の持ち主。 ついでにある事情で生まれつきの色素欠乏障害者。アルビノ

別名は『ブラッドサック白面外道』、『カズイクル・ベイ串刺し公』など、ドラキュラ吸血鬼をモチーフにして

129°

### 第三十三話・狂気の獣

「明日菜さん、まずは距離を取りましょう!!」  
先ほどの休憩所が在った所が他の場所より広くなっています、其処に!!」

「OK、さっきの所ね!？」

ネギの言葉と共に一気に小太郎から距離を取る二人。  
本来ならば追いつかれるだろうが、先ほどのサイの『こんな場所など抜けようと思えば簡単に抜けれる』と言う言葉に、追うべきかそれとも仕事を優先すべきか迷ったのだろう。  
動き出したサイとネギ&明日菜を横目で忙しなく追いながら小太郎は悩んだ末に答えを出す。

「今は仕事優先や!!」

あの兄ちゃんの前も知らねんし、まずは姉ちゃんに言われた通り親書を持つてる方を潰す!!」

考えても見ればその選択は正しい。

良くも考えてみれば、例え脱出する方法があつたとしてもネギの持つ親書を奪つてしまえば東西の和平は成らない。

さらに奪い返されそうになつたとしても、この結界の中に張られてる強制転移魔方陣を使えば仲間との合流も出来る。

そうすれば例えサイが強かろうとも、多勢に無勢だと思つたのだろう・・・猪突猛進に見えるが、意外と考えているようだ。(まあ、無意識に野生の勘が働いたのかもしれない)

一方、先ほどの休憩所に着いたネギと明日菜。

お互いの手に握られる得物の柄を汗ばむ程に強く握り締める・・・魔法使いの少年（少女）は父の残した杖を、ハイフ・スビリッツ半魂獣となっっている少女は自らの魂より産まれた大剣を手にして。

実戦経験が少なく修行不足な現時点で頼りになるのはネギの考えた拙い戦略のみなのだ。

「・・・！？ この音は！！」

「来るわネギ、気合入れなさいよ！！」

竹藪が何かが向かってくる音に反響して不気味な音を立てる。

あの猛々しく、そして荒々しい少年がこちらに走って向かって来ているのだ・・・走り抜けるその身は風を起こし、竹林をガサガサと揺らしていた。

ふと・・・今まで奥底に仕舞っていた筈の緊張感が、竹林の揺れる音が大きくなる度に溢れそうになる。

その緊張感は四肢を弛緩させ、まるで蛇か何かに巻き付かれたかのように動きを緩慢にさせた・・・『カエルがへびに睨まれるというのはこういう事を言うのか』と自嘲するようにネギは脳裏に思い浮かべた。

無論、向かってくる弾丸の如き荒々しい少年と対峙するに当たって作戦は考えてある。

だが正直な話、先ほども書いた通り実戦経験・修行経験共に違い過ぎる二人にとって実力の差は明白なのだ　考えた作戦が成功する確率など良く見積もっても五分五分、下手をしなくてもそれより低いだろう。

それを鍛錬も何もせず、俄仕込みの策略のみで覆そうというのだ・・・これを無謀と言わずに一体何と表現する？



・・・本来なら先ほどサイが言った通り、慕う兄に任せられた方が無難なのだ。

「（だけど・・・）」

誰にも聞こえないように小さく呟くネギ。

だが、今は例え確率が低かろうとも何だろうとも、何もかもが足りないのだから己の考えた作戦に縋るしかない・・・無茶であろうと無謀であろうと貫き通さなければならぬ意地がある。

それにネギが戦うと願った時にサイは止めなかった。

唯一言『信じている』と言ってくれた・・・そんな彼の期待を裏切る心算はこれっぽっちも無い。

父と同じ場所に立つ為にも、信じてくれた事に報いる為にも逃げる訳にはいかない！！

「（父さん・・・そしてお兄ちゃん、見ててください！！）」

ネギは己の胸に刻まれている誓いを抱き、前を向く。

震え、緊張に弛緩した四肢はもう既に柔らかさを取り戻していた。

そして・・・この戦いを切欠に、ネギは父への羨望と共に、いや寧ろそれよりも強くもう一人の背を追う事を強く誓うのである。

右手に作った剣指を振るとネギは詠唱を唱えた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル

エウオーカーティオ・ウヨルキヨイカナルムア・グラディアアリーア  
風精召喚・剣を執る英雄！！

「コントラ・ブーゲンント」  
・・・迎え撃て！！！！」

顕現し、天を駆けるはネギの姿をした光の尖兵。エインフェリア  
杖を駆り、その手に騎乗槍スピアや片手剣ブロードソードに戦槌ウォーハンマーなどを持った精霊群が流星となつて千本鳥居の上を向けて飛来する。  
それらが狙う収束点に存在するは、鳥居の上を器用に飛び移りながら移動する小太郎であつた。

「へっ・・・やれば出来るやないかチビ助。  
さっき言つた腰抜けつて称号は取り消すで  
俺を楽しませろや  
！！！！」

歡喜の声を上げながら疾走する小太郎は、ネギの魔法を見ても怯みもしない。  
寧ろそれどころか闘気と比例して速度を上げ、全速力で魔法群に突つ込んだ！！

「こんなもん、消し去つたらああ！！」

双腕と右足から繰り出された打撃が三体を砕く。  
更に裏拳によつて一体、懐から出した棒手裏剣のような飛刀によつて前方にいた三体が纏めて砕かれた。  
しかし・・・この程度の事など、既にネギは予測済みだ。

「魔法の射手 サキタ・マギカ 連弾・雷の17矢！！」  
セリエス・フルグラリス

続くようにして放たれたのは雷の矢。  
大気を焦がし、鳥居を削り取る雷光の弾丸が迫る・・・しかし、小太郎は笑いながら躊躇せずその雷の束に突つ込む。

「ははっ、確かに凄い威力や！！  
だがなあ・・・狙いが散漫やで！！  
当たらな幾ら威力があろうと

も意味がないんや!!」

確かに慌てていたのか、雷光の矢はショットガンの散弾のようにバラけて竹林や鳥居に着弾する。

高速移動しながら着弾点を小太郎は見切り、危険の少ない中心部を駆け抜けたのだ・・・まさに驚くべき動体視力と言える。しかし・・・これもまた、ネギの作戦の一つに過ぎなかった。

「(今だ!!)ラス・テル マ・スキル マギステル!!  
ウナーズ・フルゴル ・コンキデンス・ノクテムン・メアー・マヌー・エンスイミークム・エタット  
闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ!!」

詠唱を唱えると、閃光の如き雷がネギの手の平に収束される。

「喰らえ・・・白き雷!!」  
フルグラティオー・アルピカンス

台詞と共に手の平から放たれるは薄暗い千本鳥居をも明るくする閃光。

地からうねるかのように放たれた白光の奔流 さながらそれは、  
雷光の籠とでも言い表した方が正しいだろう。

その雷光が向かってきた小太郎を食い千切るかのように飲み込んだ  
!!

「う、うがああああ!!?」

身を焼き尽くす程の激痛に小太郎から凄まじい絶叫が迸る。

雷の籠の残滓である雷を身に纏いながらそのまま背中から大地へと  
落ちていく

この光景を見た誰もがネギの勝利を確信するだろう・・・実際、共に戦っていた明日菜でさえ終わったと思っただから。

「ちよっと何よ、凄いじゃん!! 勝っちゃったの私達!?!」

さしも魔法が直撃すれば無事ではいられまい。しかし、完全に相手を戦意喪失させるまでは油断は大敵だ・・・寧ろ、その油断が時には敗北に繋がる。・・・それを実戦を経験した事の無い二人に解れと言つのが度台無理な話なのだが。

「中々やるやないかチビ助！！ 今のはまともに喰らったらヤバかったわ！！」

だがなあ、こつちに魔法の防御手段が無いって考えたのと今ので決められんかったんはお前の失敗ミスやな・・・この勝負、俺の勝ちや！！！！」

弾丸のように呐喊して来る黒い影。

其処には服を少々焦がしてはいるが、殆ど無傷な小太郎がいた。片手にはボロボロになった紙切れ・・・恐らく魔法を防御する為の護符だろうと思われるモノが握られている。

どうやらその護符のお陰で多少の余波は受けたようだが、辛うじて直撃は避けられたという事だろう。

「こ、このお・・・来なさい！！ 同じ戦士同士、相手になるわよ！！！！」

大剣を背負うようにして構える明日菜。だが、小太郎はそんな姿を一瞥すると・・・先程よりもスピードのギアを上げ、大剣の一撃を避けながら叫んだ。

「邪魔や姉ちゃん！！」

それに俺は戦士や無いで・・・狗神使いつて言うんや、覚えとき！！お前等、その姉ちゃん押さえとけ！！！！」

叫びと共に今まで小太郎の居た場所に黒い大きな影のようなものが現れた。

その中からまるでゾンビの如く這い出してきたのは漆黒の猛犬の群れ。犬たちは小太郎の言葉に従い、へびのような形に姿を変えて明日菜の腕や足に絡みつく……。。

「な……。何よ、これはあああ!?!?  
つて、ちよ、こ、コラ……。そんな所舐めちやダメえええええ!?!」

絡みつかれ、しかもご丁寧に全身中を舐められる明日菜。

そんな事をしている間に魔法を詠唱しようとしていたネギを小太郎が強襲する!!

「くっ!?!」

小太郎の鉄拳が深々とネギのボディに突き刺さる。

いや、どうやら咄嗟に左腕を腹の間に入れて衝撃を緩和したようだが……。殴られた部分は魔法障壁がある筈なのに真っ赤に腫れ上がっていた。

「へえ、マグレでようガードしたもんや。

だがなあ……。魔法障壁がなくなりゃあ、そのマグレも終わりやで!!!

オラオラオラオラオラアアアアア!!!」

小太郎の鉄拳による連撃がネギを捕らえる。

先ほど小太郎が言った通り、ネギには魔法障壁と呼ばれる魔法の壁のような物が張られている……。まあ、これはネギに限らず魔法使いや気を使いこなす者などは誰でも自然と張っているもののだが。

ちなみに小太郎の身体能力が高いのは全身中に気を廻らせているからである。

この気という奴は厄介な物で、達人などでなくても全身に張り巡らせて強化すれば岩をも簡単に砕き、乗用車が速度40km程度ならばつかられても怪我一つしない堅固さを得る事が可能だ。

その連撃を受けてもネギが平気なのは、先ほど説明した魔法障壁の賜物　しかし、その魔法障壁が連撃によって消えかかっている。もし魔法障壁が消滅し、生身で小太郎の気を込めた攻撃を喰らえば・  
・良くても重症は免れない。

魔法の事を説明してくれる者は存在しないが、少なくとも飛び散る血飛沫を見れば明日菜は理解出来てしまった。

「そ・・・そんな・・・!!」

遠くない未来を幻視した明日菜は助けを求めるように辺りを見回す。だが、近くには頼りになる筈のサイは居ない・・・出口を探しに向かってしまったのだから。

それでも明日菜は聞こえるように大声で叫ぶ!!

「サイ、サイいいいい!!!　お願い、お願いだからネギを助けてええええ!!!」

しかしその言葉空しく、小太郎は最後の一撃をネギに叩き込もうと頭を鷲掴みにした。

凶悪なまでの目付きで笑いながら言葉を吐く。

「馬鹿やなお前、本当に。」

護衛のパートナーが戦闘不能なら西洋魔術師なんてカス以下やで？遠距離攻撃をしのぎ、呪文唱える間をやらんかったら怖くもなんともあらへん　始めからあの兄ちゃんに戦わせとけば良かったん

「や」

そしてゆっくりと拳を振りかぶる小太郎。

その一撃を喰らえば、ネギは確実に命を失うだろう……もう今のネギの脆い魔法障壁ではこの一撃を耐えるのは不可能に近い。

「……全く、本当に腰抜けばかりや。

……から……なんて……は……ねん……」

その言葉は一体誰に向けたものなのか？

真偽の程は定かではないが……小太郎はそのままネギに吼えながら拳を放った！！

「終わりやチビ助！！　クタバレやああああ！！！！」

「ネ、ネギiiiiiiiiiiii！！！！」

悲痛な明日菜の叫び声と共にネギの顔面に攻撃が突き刺さる……

筈だった。

その瞬間に同じく響いた叫び声と、そしてネギの“この状況に小太郎を陥れる為の策”は今成ったのだ。

「今だ、ネギ！！！！」

その声に一瞬気を取られる小太郎。

それと共に魔法使いの少年（少女）の凜とした声が響き渡った

シム・イブセ・バルネル・セラウンドム・ディーミア本キウス　・スプリングファイエルデース  
「契約執行0.5秒間……ネギ・スプリングフィールド！！！！」

響き渡った言葉に振り向いた時、小太郎の表情は勝利の確信ではなく目を一杯まで見開いた驚愕の表情を呈していた。

何故なら先ほどまでボロボロで半死人のような状態であったネギが、目に光を湛えて小太郎の攻撃を捌いていたのだから。  
・・・それは魔力供給と呼ばれる、本来は従者に対して行う身体能力の強化法だ。

「な・・・なんやと!？」

「何時までも馴れ馴れしくボクの頭を掴むな!!　そうして良いのは・・・お兄ちゃんだけだああ!!!」

放たれる強烈なアッパーカット。

いきなりの事にガード出来ず、小太郎にクリティカルヒットし・・・そのまま空中に跳ね上げられた。  
軽々と吹き飛ばされながら、小太郎の脳裏は何が起こったのか理解出来ない。

更に　小太郎の落下点に回り込むと詠唱を唱える。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル・・・ウヌース・フルゴル　コンキデンス・ノ闇夜切り裂く一条の光!!!  
クテム我が手に宿りて敵を喰らえ・・・!!!」

そして、落ちて来た小太郎の背中に紫電纏う右手を当てると

フルグラティオー・アルピカンス  
「白き雷!!!!!!」

その手の雷光を全力で解放した・・・!!!

白き雷光を直接背に受けた事により吹き飛ばされ、再び地を転がる



小太郎。

先ほどの場合は護符によってある程度は威力を抑えられたであろうが、今回はその頼みのつなも無い。

よって、小太郎はネギの白き雷を全開でその身に受け、身体は痺れて動けなくなっていた。

「グッ……」

（な、何やと……か、身体が動かん……一体何や、何をされたんや……）

アホな……この俺が……この俺がこんな所で……」

ふと見上げれば其処には先ほどまで舐めていた西洋魔術師の少年が立っている。

姿は血に汚れ、埃に塗れ、無残な物だ……だがそれでも、何処か誇らしくも見えるのだ。

「……どうだ、これがボクの……西洋魔術師の力だ!!」

そんな風に誇らしげに言うネギの頭の上に何時の間に戻って来ていたのかサイが拳骨を落とす。

「ふぎや!? な、何するのお兄ちゃん~~~~!!」

「馬鹿野郎、何を格好付けてるんだテメエは。」

それに何を玉砕覚悟の作戦なんぞ考えてボロボロになってんだ……魔法障壁つてのが抜かれなかったから良かったものの、もし抜かれてたらテメエの頭なんぞ潰れたトマトと同じようになってたぞこの馬鹿」

だが、其処まで言うと今度はネギの頭を撫でる。

ネギには表情は見えなかったが・・・この時の表情を見た明日菜は『仏頂面ばつかじゃなくて、あんな風に笑う事も出来るのねアイツ』と感心していた。

「だが・・・テメエは良くやった。

ボロボロで、小汚ねえ埃塗れの面だが・・・今までの中で一番良い面をしてる。

誇れ、テメエは自分の選んだ道を確りと貫き通したんだ・・・お前を信じた甲斐があったぜ」

その瞬間・・・緊張の糸が切れたのだろう。

ネギの双眼に涙が溜まり　そしてゆっくりと溢れ出した。

「う・・・うっ・・・うわあああああん！！

お兄ちゃああああん、痛かったよおおおおお！！！」

泣いて抱きつくネギの頭をポンポンとあやす様に撫でながらサイは苦笑する。

背伸びしていても、天才魔法使いなどと言われても・・・考えてみれば10歳の子供なのだ。

痛みに泣く事もあるし、信頼に応えられた事で嬉しくて泣く事もあるだろう。

「やれやれ・・・泣く程我慢なんぞするんじゃないよ、この馬鹿。

それに泣きたい時は確りと泣いとけ　（ボソッ）じゃねえと、

俺みたいに枯れ果ててから後悔する事になるぞ」

そこに自分を捕らえていた狗神なる黒い犬達が消えた事により明日菜も駆け寄ってくる。

「もう、ネギ！！ 無茶しちゃってボロボロじゃない！！  
後、サイ！！ アンタももう少し早く来なさいよね、男の意地だか  
誇りだか覚悟だか知らないけどネギは“女の子”でしょ！？」

「何だ、気付いてたのかよ。」

「だがな男だろぅが女だろぅが、テメエが選んだ道でテメエ自身で『  
出来る』て言ったのを邪魔するなんて俺にや出来ねえよ・・・痛え  
事や辛い事、嬉しい事や悲しい事、そういった経験して反省する事  
によってどうすべきかをテメエで考えて次に繋げる事が出来る」

「それが成長つっつうモンだ」

そう言い終わった後、サイは手に持った七魂剣の柄を確りと握る。  
すると七魂剣の柄に付いている、角度によって色々な色に見える水  
晶玉のようなものが紫色の宝珠に変化し、更に光り輝くと姿を変え  
た・・・どうやら、杖のような姿になったようだが。

「ほれネギ、とつとと左腕こっちに向ける」

「ぐすつ・・・う、うん・・・こっつ？」

見るからにボロボロ、折れていないのが不思議な程の左腕をサイに  
向ける。

其処にサイは持っていた杖の先端を向けると、法力を開放した

すると、今までボロボロだった左腕が傷一つない腕に戻っていた。

「嘘・・・傷が、治っちゃった・・・？」

「す、凄い！！ ど、どうやったのお兄ちゃん！？ うわ、痛み  
が全部なくなっちゃったよ！！」

傷が治ったのを驚く二人。

サイは持っていた杖を七魂剣の姿に戻すと、説明を始めた。

「別に傷を治した訳じゃねえよ。  
今の杖・・・俺の戦友タチだった奴の神具アーティファクト、聖杖ヤツフサを召喚して俺の法力を使って肉体の傷の再生能力と鎮痛作用を普通よりも活性化させただけだ。

見た目の傷が治っただけだから中身は完全じゃねえ・・・今日一日は無理に動かすんじゃねえぞ」

そう、サイはあのフェイトなる不気味な少年と戦った際に戦友達の事を思い出し、彼等の魂の結晶とも言える魂石クリスタルを取り戻し・・・それにより、戦友達の神具を召喚出来るようになった。

これはかつて麻帆良に現れた『テストロス』を倒す際に使用した、六道拳に記憶されていた模倣神具（姿形だけが同じだけの能力を持たない神具）とは違うのである。

・・・ただし、あちらと違って一つつつしか召喚出来ないのが欠点だが。

ちなみに何故、先ほどからネギの左腕の怪我を強調しているのか・・・それには理由がある。

実は最初から・・・それこそネギは、わざと散弾の様にバラけさせた魔法の矢の中心部を小太郎が抜け、そこで白き雷を喰らっても立ち上がってくるのではないかと“想定していた”のだ。

その時、戦闘経験も修行もしていない自分ではもの凄いいスピードで動き回る小太郎には当てられないと考え・・・利き腕と逆の左腕を犠牲にする事によってわざと相手に有利だと思わせて油断を促したのである。

その為か確かに血は撒き散らされているが・・・それら殆どは左腕によって直接ヒットせず、致命傷を受けていなかったのだ。（ただし、左腕は複雑骨折にほぼ近い状態だったが・・・）

『肉を切らせて骨を断つ』

まさにそのように表現出来るようなその戦い方は、自然とネギが慕うサイと同じような戦い方であった。

まあ・・・真似したいとも思わない戦い方とも言えるが、実力が相手よりも劣っている場合は何かしらのリスクは背負わねばならないと言う事だ。

(実際サイの場合はそうではなくて護る為に身体を張って、結果ボロボロになってるのだが)

・・・そればさておき閑話休題。

痛みと傷が治ったネギは嬉しそうにしながら、ふとある事を思い出した。

「うん、ありがとうお兄ちゃん!!」

・・・って、そう言えば明日菜さん!? な、なななな、何でボクを今女の子だって・・・!?!」

「えっ、もしかしてバレて無いと思ってたのアンタ?

アンタねえ・・・そもそも、何でアンタが必ずお風呂に入る時に誰も入って来なかったと思ってるのよ?

それに、お風呂が苦手だって言うから使い方解らなくちゃいけないから・・・何度か悪いと思ったけどアンタの事を監視してたのよ。

・・・その時にアンタが女の子だって気付いたんだけど、隠そうとしてる事を誰かにバラすのって私キライだからさ」

そう、実はサイよりも先に明日菜はネギが女の子だと気付いていた。しかし彼女の性格上、隠そうとしてる事をぺらぺらと人に語るのは嫌いな為黙っていたのだ。

・・・エヴァとの試合とも言える戦いの際には、倒れていたのを見て気が動転していた為に忘れていたのだが。

「あ、あううううう・・・あ、明日菜さあぁん！！　お願いです、お願いですからこの事は・・・」

「心配しなくてもさつき言った通り、誰にもバラさないわ。

何度も言うけど私は人が秘密にしようとしてる事を暴露させたりするの大っ嫌いなもの。

・・・私を朝倉と一緒に考えられたら、それこそ心外よ」

その言葉に一安心するネギ。

ネギは何故、性別を偽れと祖父のように思っているメルディアナ魔法学校の校長に言われているのかは知らない・・・しかし、隠せといわれているのだから隠さねばならない理由があるのだろう。

その理由を尋ねても教えてはくれなかったが・・・。

そんな二人のジャレ合いを見ながらサイは一つ大きな溜息のような呼吸を吐く。

そろそろ、十分に準備は完了しただろう・・・先ほど結界内を歩き、それによって結界の綻びを発見した。

其処にはちびせつなを待機させているので間違える事もない。

「さて・・・んじゃそろそろこの結界から出るぞ。

明日菜、ネギ、付いて来い・・・この先の6番目の鳥居の所が結界のループの終始点だ、そこを・・・」

その時だった

「ま、待て・・・や・・・オラア！！」

突如として響き渡った一声に振り返る。

視線の収束点に居た人物・・・それは、ネギの白き雷を無防備のまま背に受けて気絶しているだろう思われた人物。

「まだや・・・まだ、終わらへん・・・終わらせる訳にいかんねん！！！」

強引に痺れる身体に鞭打って立ち上がるその姿。

其処に居たのは黒髪の目付きの悪い人物でありながら・・・著しく姿は変化していた。

「此処で負けたら・・・また俺は一人ぼっちや・・・また居場所がなくなつてまうんや！！！」

まるで肥大し、狼のような白い毛皮に覆われる肉体。

黒かった髪は体毛と同じく白銀に染まり、腰に届く程の長髪となつていた・・・。

「もう嫌や・・・この“身体の所為”で・・・“こんな風に産まれた所為”で、拒絶されるのは・・・嫌や！！！」

だがそれだけではない　いや、寧ろ驚愕は其処からの方が大きかった。

小太郎の着ていた学生服が破れ、シャツが破れ・・・其処から出たのは、何故か胸から下を覆うサラシだ。

何の為にこんな物を身体に・・・確かに任侠の者達などが七首等を通し難くする為に腹に巻く事はある。

しかしそのサラシは肥大化する肉体を痛めつけるかのように思いつ

きり、ギチギチに巻かれているのだ。

「・・・テメエ、まさか・・・」

「も、もしかして・・・」

「嘘・・・じゃあアンタも・・・？」

そこで三人は気が付いた・・・そう、そのサラシは防御の為に巻かれているのではない。

小太郎が自分の身体的特徴を隠す為に　いや、寧ろ嫌悪しているが故に巻かれているのだ。

しかし、隠そうとしても肥大していく肉体にたかが布切れが耐えられる訳もなく耐え切れなくなったサラシは弾ける。

「奪わせへん・・・絶対に・・・奪わせへん・・・」

そこから現れたのは、本来なら男には決していないもの。

白き体毛がまるで大切な部分を護る様にして生えている・・・胸にも、腹にもだ。

獣人の如き姿となり、その身に着ていた全ての衣装がなくなった時  
其処に居たのは特有の丸みを帯びたフォームをした小太郎だった。

そう　小太郎もまた、ネギと同じく男ではなく女の子だったのだ・・・。

「殺してやる・・・俺から居場所を奪おうとするお前等・・・全員、殺してやる！！！！」

先ほどまでを裕に越える殺気・・・いや、寧ろ狂気を孕んだ目で三人を見つめる小太郎。

産まれ出でた性別が望まれる物でなかったが故に、絶望と拒絶と孤



独の中で生きてきた悲しき少女。

その狂気の目が視点をなくし、無我の境地のような状態になったその時・・・彼女は石段を蹴ったのであった・・・。

### 第三十三話・狂気の獣（後書き）

投稿完了です。

うを、またやっちゃったあああ！？

流石に読者の皆さんも小太郎までTS性転換してるとは思わなかったですよ。

私も勢いでそう言ったネタを思いついてしまい書いてしまった次第です。

実はこの設定、もう少し後まで引つ張る心算でした。

ですが・・・寧ろこの後の事を考えて、この辺で暴露しちゃった方が良いかななんて思っちゃいました・・・。

小太郎（漢）ファンの方、ゴメンなさああい！！

さて、そんなこんなで次回に続きます。

狂気の塊と化した獣人の少女・・・それをサイは救う事が出来るのか？

・・・まあ、救うにしても結構無茶なやり方するんだろうなあ。

P.S.

小太郎の外見が解り辛いと思いますので補足を。

一応外見としては格闘ゲーム『マーヴルVSカプコン3』に登場するカプコン側の“フェリシア”つつキャットウーマンを元にしてます。

・・・この子も体毛で大事な部分だけ覆ってる、半ば裸族みたいなキャラです。

（まあ、解らない方や知らない方は上記の作品の公式ホームページでも見てみるか名前検索してみてください、直ぐに出てきますから・

•  
•  
多分  
(

### 第三十四話：救いたいと願うからこそ

「オオオオオオオオオオ！！！！！！」

天に木魂する程の絶叫、周囲に存在する者を畏怖させる程の咆哮。狂気に己の思考を任せて獣化した狗神の少女・犬上小太郎は、その目を目の前の獲物達に向ける。

もう既に今の彼女に感情などない・・・しかし怒りに任せて獣化する程度で此処まで変化してしまう物だろうか？

「拙い、来るぞ！！」

サイのその言葉に危機感を感じたのか慌てて手に携えていた武器を構えるネギと明日菜。

しかし、ネギの場合は無茶をしたツケが回ってきたのか、ヨロヨロと力無く杖に身体を預けてしまう。

「ネギ、大丈夫なの！？」

「だ、大丈夫です・・・！？ 明日菜さん、危ない！！」

「へっ・・・？ つて、うわわわわあああ！！？」

それは直観か、それとも危険を察知出来たからか。

ネギの声に合わせる様にして後ろを向きながらよろけた瞬間、今まで明日菜の立っていた石段がひしゃげて陥没したのだ・・・。

立ち上る土煙・・・陥没した石段の場所には荒い呼吸をした小太郎が拳を大地に叩きつけている。

信じられない程の速度、更に先ほどの状態を裕に超える程の驚異的な破壊力だ。

「クロス・・・クロス・・・コロシテ、ヤルウウ！！！！」

呻き声の様にも聞こえる憎悪を孕んだ言葉を吐きながら明日菜達の方角を見る。

するととんでもない事に、小太郎は何と・・・爪を石段に突き立てたまままで明日菜達に向かつて突貫してきた！！

「ちょよ！？ えっ、ええええええええ！？ 嘘でしょおおお！？」

慌てて明日菜はネギの襟首を掴むと走り出す。

後ろから迫ってくる小太郎は、本来そう簡単に壊れる筈もない石段を自分の爪で切り裂きながら迫ってくるのだ。

彼女の通った後は、まるで最初からそのような跡があったかのように石段に鋭利な溝が出来ている・・・もし、こんな物を喰らったらそれこそ五体満足でなど居られないだろう。

「た、たたた、助けてええええ！？ そ、そそそそそ、そんなのズツコいわよおおお！！！！？」

「あ、ああああ、明日菜さん！？ 明日菜さん！？ く、首が・・・首が絞まってますってええええ！？」

「ちっ・・・何やってんだデメエ等は！？」

咄嗟にネギ&明日菜と小太郎の追いかけてこの間に割って入り、腰から抜いた七魂剣で迫っていた爪を止める。

だが、凄まじいパワーだ・・・男であり、実戦経験もあり、少なくとも力を抑えられていてもそこそこに実力がある筈のサイが何と押されているのだ・・・。

「クツ・・・なんつう怪力だ！？ さっきまでとはまるで段違いだぞ、この力は！！！」

上から迫る鋭い爪に押し切られそうになっているサイ。少しでも力を抜けば、たちまち押し切られてあの石段をもカットする爪で切り刻まれてしまっただろう。

「お、お兄ちゃん！？ 待ってて、今……！！」

「サイ、堪えなさいよ！！ 助けに行くから……！！」

押し潰されそうになっているサイを見て助けようとするネギと明日菜。

だが、二人の方にゆっくりと首を向けると、まるで力を振り絞るように怒鳴る。

「い、良いからテメエ等は先にこの先のちびせつなが居る鳥居に走れこの野郎……！！」

逆に足手纏いが居る方が邪魔だ……！ さっさと行つちまえ馬鹿共がああああああ……！！」

顔を真っ赤にして小太郎の爪を押し返すサイ。

言い方は実に失礼なように聞こえるが、これは言うなれば体力を消耗してるネギと明日菜を慮って言ったサイなりの優しさである……！ 本当にそういった事は悉く苦手としている漢だ。

しかし確かに現状考えれば二人を庇いながらこの狂気そのものと化した小太郎を退けるのは至難の業。

そもそも化物じみた小太郎の力を目の当たりにした事により、聡明なネギがそれに気付かない筈もない……ネギと明日菜に出来る事は、先ほどサイがネギを信じたように信じ任せる事だけなのである。

「………たく……！！ 先に行ってるわよ、サイ……！！」

「お兄ちゃん……お兄ちゃんはボクを信じてくれた、だからボク

「もお兄ちゃんを信じる!!!」

後ろ髪を引かれるようにだが、それでも振り向かず走り出す二人。そう、この状況を考えればこれで良いのだ。少なくともサイが押されている相手になまじ少々戦術をかじった程度の素人二人が挑んだ所で先に待っているのは“死”だろう。

それに・・・言い方は悪いが、お荷物が居ない方がサイも周りを気にせず戦えるのだから。

「オラアアアア!!!」

「ガ、ガアアアアアア!?!」

拮抗していた力同士に均衡が崩れる時が来た。

ネギや明日菜が走り去った事により、此処にはサイ一人しか獲物がいなくなった事を見越して横に回避しながら力を抜いたのである・・・それにより支えを失った小太郎は勢い余って竹藪に突っ込む。

798

竹藪を破壊し、大地に突っ込む小太郎。

凄まじい勢いで叩きつけられたような物・・・普通なら意識を失っても可笑しくない。

だが、サイは竹藪の方を見つめながら顔の前に七魂剣を天を向けて構えると力を解放した

「ソウルアツ  
魂鎧装!!!」

二本の尾が現れ、身体を白き狐を象った鎧が纏われる。

自らが法力を消費するのではなく、法力自体を鎧と変えて身に纏う技法・・・人形のような少年との戦いの際に取り戻したサイの能力。鎧を纏った状態で七魂剣の切っ先を竹藪に向けるようにして構えると、それと同時に碎けて降り積もった竹が吹き飛ぶようにして周囲

に飛び散る

「コ・・・クロス、コロシテヤル・・・オレカライバシヨヲ・・・  
ウバオウトスル・・・オマエヲヲオオ！！！！」

現れた小太郎に傷など無い。

少々の汚れやらかすり傷やらはあるようだが、それ以外は獣人特有の強固さによって殆ど無傷。

だが、少なくともその視点の消えた目には先程よりも強烈な憎悪と殺意が溢れていた。

それを見ながらサイもまた静かに変わり果てた小太郎を見据えて咳く。

「やってみるよ、クソガキ・・・流石に尻叩きだけじゃ済まさねえぞオラア！！！！」

二つの怒声が響き、同時に石段を蹴る。

此処に白き獣と狂気の獣の戦いが始まりを告げるのであった

「オラオラオラオラオラオラオラア！！！！」

「ゴガア！！　グガアアアアアアアア！！！！」

斬撃と共に入り混じる拳や蹴りによる打撃・・・それを弾く様に繰り出される打撃の応酬。

一撃一撃が確実に相手を倒す為の遊びの無い攻撃だが、二人とも拳やら何やらがぶつかり合うか回避しあっている為か致命傷は一発たりとも当たっていない。



どちらも全力を込めてやっている。

サイはその目による驚異的な動体視力を利用した“見切り”により、時には的確に時には変則的に小太郎の急所を狙う。

それに対し小太郎は荒々しく無茶苦茶な戦い方だが、サイを圧倒するスピードと直感で攻撃を避け続ける。

「二人の実力が拮抗している故に致命的な一撃は出ず、まさに『千日手』と言っても過言ではない状態だ。」

「グラアアアア！！」

「・・・何っ！？」

そんな状況に埒が明かないと狂気に蝕まれながらも察したのか。

小太郎は七魂剣の平の部分で蹴ると、その勢いを利用して高速スピードでサイと距離を取る。

すると・・・まるで本当の獣のように四肢を地に付いて、力を溜めるように構えを取ったのだ。

それはまるで、肉食獣が獲物を捕獲する際に飛び掛るかのような体制をしている。

そして次の瞬間　　後ろ足に溜めていた力を一気に解放するかのようには大地を蹴る。

それと共に握り締めた拳がサイの居る場所に向かって全力で叩きつけられたのだ！！

「チツ・・・全体重を掛けて攻撃する方法にシフトしやがったか！？だがそんなモン一発で俺を倒せると思うな、クソガキが！！」

横に飛び、直撃を避けるサイ。

そのまま小太郎は勢い余って石の灯籠に突っ込み、土煙が再びあがった。

全体重を掛け、身体ごと相手に攻撃を叩きつけるボクシングで言う所の『ジヨルト』と呼ばれる技法。

しかしこれは幾らダメージが高いとは言え、下手すれば自分すら傷つける・・・故にサイは『埒が明かなくなつて攻撃を仕掛けてきた』と彼らしくない思い込みをした。

・・・それが間違いだとも知らずに。

「グ、ガアアアアアアア！！！！！」

「！？ 何だかつ・・・グアツ！？」

何かが向かつて来る感覚に咄嗟にガードする。

だが、防御した筈なのにその一撃はガードの上からサイをふっ飛ばし、千本鳥居を幾つもぶっ壊しながら背中から石段に叩き付けられてしまった。

「チツ・・・クソが、ガードしてもこれかよ・・・！？」

背中痛みを尾を利用して幾分か軽減したが、無傷と言う訳ではない。

しかしサイが驚愕したのは其処ではなく、何と再び目に映っている小太郎は身体ごと呐喊しようとしていたのだ！！

「オイオイ、本気かつ！？」

痛みなど気にせず立ち上がり倒れていた場所から飛び去ると、一度間一髪の所で小太郎が突っ込んでくる。

すると、またも竹藪に自分から突っ込んで血を流すも・・・サイの居る方に視線を向けると足に力を溜めて居るようだ。

戦い方が無茶苦茶だ・・・。

まるでパンチングマシーンを殴るかのように全力で体重を乗せて殴

りかかってくる。

遊びやフェイントといった物が一切無く、避けられて自分から壁や石段や竹藪に突っ込んで血を流しても止まる事が無い　これこそがまさに『狂気の所業』であろう。

「クソツ、何つつ戦い方しやがるんだ!？」

しかも拙い・・・明らかにスピードは向こうの方が上だ、避け続けたとしても追いつかれちまう!！」

そう、サイの言うとおりである。

小太郎のスピードは意識がある時を裕に超え、下手をすれば力を抑えられる前のサイに匹敵する程に早い。

今はまだ裂け続ける事が出来たにしても、このままではジリ貧となってしまう　サイは何とか避けながら策を練ろうとした。

・・・しかし、どうやらそのような時間も相手は与える心算は無いらしい。

「グガオオオオオオ!!!」

「何!?　更にスピードを上げただと!?!?　うおおおお!?!」

何とか強引に防御したが、サイはそのままゴムボールを大地に叩きつけるかのように跳ね返って鳥居に叩きつけられた。

「グツ!?　痛ツ・・・」

(拙いな、こりゃアバラが二、三本イッたか・・・)

脇腹に激痛を感じる、叩き付けられた時の衝撃でアバラ骨が折れたようだ。

痛みを堪えて立ち上がって周囲を見れば、どうやら此処は本来脱出する心算だった『無間方処の結界』の先端である・・・離れた場所

で戦っていた筈なのに、此処まで吹き飛ばされて来てしまったのだらう。

「お、お兄ちゃん!!」

「サイ!? だ、大丈夫なの!？」

「サイさん!!」

後ろを見れば其処にはネギに明日菜とちびせつなが居る。

アバラが折れ、呼吸をしづらいような状態だったが・・・それでもサイは表情に出さずに背を向けたまま親指を立てるジェスチャーをした。

そして向かってくるであろう小太郎が来る方向を見据え、攻撃に備える・・・。

だが・・・目の前から来たのは、全身中から血を流している小太郎だ。

先ほどまでの狂気的な戦い方が祟ったのだろうか？ しかし・・・フラフラと目線を泳がせてサイに照準が合つと、再び力を溜めるように構えを取っていた。

しかし、構えを取ると小太郎から血が噴出す。

全身中・・・特に酷く足の到る所から破裂したゴムホースのように血が流れ落ちているのだ。

多分、限界ギリギリまで身体を痛めつけた事によって筋肉が断裂したのであるらう。

それでもそれを気にする事無く、再び立ち上がると構えを取ろうとしていた。

「・・・ウソ、でしょ？」

何で・・・何であんなに身体から血が噴出してるのにあんな事しようとしてるのよ、あの娘!？」

明日菜が困惑するのも無理は無い。

血が噴き出していると言うのにそれに構わずにサイを狙っている。完全に正気の沙汰ではない・・・下手すれば出血多量で死、下手せずつも血が足りなくなり過ぎて患部が壊死してしまうような状態だというのに・・・。

だがその時、小太郎の痛々しい姿を見たちびせつなが気付いた。小太郎の体毛の生えていない素肌の部分や顔に入った奇妙な隈取のような物を見て、何故これ程までに戦い続けるのかを・・・。

「あ・・・あれは・・・まさか・・・禁術・狂転変生の呪法!？」

そんな・・・あの術は禁術として長が封印した筈なのに・・・どうして・・・?」

「・・・禁術・・・だと？」

おいちびせつな、あのガキは何かの術が掛けられているのか?」

サイの疑問にちびせつなは確証は完全には無いが頷く。

かつて、まだ刹那が関西呪術協会に身を置いていた頃に一度だけだが彼女の剣の師匠とも言える人物から聞かされた事がある。

しかし、その呪法はあまりにも陰湿で危険な物であった為に封印されていた筈だが。

「ハイ、確証はありませんけど・・・。

あの娘に掛けられている術は多分『刹那狂転変生の呪法』と言う、まだ本体が生まれる前の時代にあった戦争の際に使われたものです。術を掛けられた者は脳にあるリミッターを解除されて凄まじい身体

能力と戦闘能力を得る事が出来ます……ですが代わりに思考能力や感情といった物を一切財奪われて、文字通りの狂戦士バクサーと変えてしまう欠点がありました……。

その非人道的な術の内容を知った関西呪術協会の長によって戦争の終結後に嚴重に封印された筈ですが……』

だが今、その術らしきものを掛けられた者が居るという事は誰かがその術の封印を解除して奪って小太郎に掛けたという事だろう。

それを聞いた瞬間……サイの表情が変わった。

「待て……じゃあ、もしかあのガキは……」

言いたい事は解つたのだろう……ゆつくりとちびせつなは頷くと口を開いた。

『ええ……サイさんのお考えになっている通りだと思います。』

彼女は　あの犬上小太郎と名乗ったあの娘は、無理矢理に術で凶暴にされて戦わされているんですよ……』

それを聞いたサイは、ネギや明日菜が制止しようとするも聞かずにゆつくりと小太郎の方へと歩き出した……。

「グ、ガ、ガアアア、アアアアア……アアアアア……」

血まみれで何度も倒れ込む小太郎。

だが……それでも立ち上がり、襲いかかろうとしている。

その姿は何処までも痛々しく、何処までも悲痛だ。本来なら出血の量が多過ぎるが故に立ち上がる所か動く事すら困難だろう。

だが、それでも同じ動作をまるで壊れた人形のように続ける。

「サイ!?」「お兄ちゃん!」

そんな声が発達した耳に聞こえ、小太郎は血の海に倒れながら目線だけを上に向ける。

見つめた方向にはサイが立っている・・・その手に自らの愛剣である七魂剣スサノオの柄を握り締めて。

「グウウ・・・ガアアアア!!!」

殺気と狂気に蝕まれてもう正常な思考の無い小太郎。

目の前に立つ敵を・・・目の前に居る敵を唯殺す為に立ち上がろうとするが立ち上がれない。

するとサイはゆっくりと七魂剣を振り上げると・・・。

「・・・悪いな、この方法しか思い付かねえんでよ」

何と・・・自分の腕を斬ったのだ。

かつてエヴァが苦しんでいる時も使用した事があるが・・・白面九尾の、特に九尾一族の長の血族の血は呪を無効化させる力を持っている。(エヴァの時は実際に登校地獄の呪を解除していた)

腕から流れ落ちる血が、狂気に蝕まれる小太郎に降り掛かると・・・一度淡く輝く。

その光が収まった後　何と小太郎は元の姿に戻って居た。

「・・・え・・・?」

いきなりの事に小太郎は弱弱しく間の抜けたような言葉を呟く。その横に座り込むと、サイは七魂剣を再び戦友の神具・聖杖ヤツフサに変えると小太郎の傷を治療し始めたのだ。

「な・・・何・・・してるんや・・・アンタ・・・？」

「黙ってる・・・予断許さねえ状態だが血を止めりやまだ何とかなる、余計な事喋って無駄な体力使うんじゃないねえ」

杖の先の宝珠が輝き始める。

だが、どうやら先ほどネギを治療した時と比べると明らかに光は弱い。

それもその筈だ・・・サイはアバラを何本も折り、全身打撲のような状態で神具を使っているのだから。

魂鎧装していた姿も消耗に合わせたように元の姿に戻ってしまった・・・。

「あ、アンタ・・・正気か・・・？俺は・・・アンタを・・・殺

そうと・・・したんやぞ・・・」

「黙ってるつつつのが聞こえねえのか・・・喋るなクソガキが」

黙って居ると言われて黙っていられる訳が無い。

サイがやっている事、それは・・・弱った敵を助けようとしているのだから。

しかも、自分の状態など気にする事もせずにな・・・明らかにサイもまた軽くは無い傷を負っている。

「アンタ・・・だけやない・・・あそこのチビも・・・姉ちゃんも・・・殺そうとした・・・んやぞ・・・？」

哀れみ・・・や・・・自己満足の為・・・なら・・・止める・・・俺・・・は、もう・・・価値なんぞ・・・無い・・・役立たずや・・・



・。  
居場所・・・も・・・何も・・・アンタに・・・やられた時点で・・・  
無くなつて・・・るんや・・・このまま・・・独りで・・・」

瞳から涙を零しながら呟き続ける小太郎。

別に彼女は負けてなど居ない・・・だが事実、足止めをしろと言われた相手を殺す事も再起不能にする事も出来ずに生き恥を晒している自分にはもう行くべき場所など無い。

ならばせめて、己の記憶の残るこの千本鳥居で死ぬ事が孤独に生きて居場所を求め続けた己の末路だろうと考えていた。

そんな生きる価値も無い自分を生き永らえさせるのがどれだけ辱めなのか、目の前に居る男は理解していない。

だが・・・そんな小太郎は急に頬に痛みを感じた。

どうやら血は全部止められたらしいが・・・いきなり持ち上げられたかと思うと、何とサイが小太郎をぶん殴つたのだ。(と言っても軽くだが)

そして再び肩を掴まされると引き摺り起こされた・・・。

「・・・テメエが此処で死んで何か変わるのか、ああ!？」

解つたような面でガキが語るんじゃねえよ!! 何が価値がねえだ!?! 笑わせんじゃねえよクソガキ!!

高々5年、10年程度しか生きてねえガキが生意気抜かすな!!」

頬を押さえながらサイを呆然と見る小太郎。

そんな事などお構いなく、サイは小太郎に向かって吐き捨てるように続けた。

「人の人生つてのはなあ、一度しかねえんだよ!!」

テメエのようにやれ孤独が嫌だの、役立たずだから死にたいだなん

て言う奴も居ればな・・・生きてえのに生きる事が出来ず、それでも後に続く奴の為に笑って死んでいく奴も大勢居るんだ！！

テメエに解るか！？ 死にたくねえのに死ななきゃならねえ連中の無念が、苦悩がよお！？」

何故だろうか、頬が熱い・・・。

今まで生きてきた中で小太郎は強くなる為に色々な事をして来た。

少女にはきつ過ぎるような事、苦しみや悲しみの中で・・・居場所が欲しいが故に涙を堪えて耐えてきた。

女だと言う事など関係なく殴られた事もある・・・だが寧ろ、そんな時の方が自分が女だと言う事を忘れる事が出来た。

「居場所がねえ！？ ふざけんな！！

居場所つてのはなあ・・・人に見つけて貰うモンじゃねえ、テメエで見つけるモンだ！！

テメエで努力もしねえで、やれ女に生まれたからだの何だのなんて言い訳やら御託やら並べてんじゃねえ！！」

だが・・・この頬の熱さは何だ？

そしてこの温かさは一体何なのだ？

今まで生きてきた中で感じた事の無い感情をぶつけられて戸惑う小太郎。

思えば居場所を人に求め、見捨てられないように耐えてきた。

痛みを感じるような術を施されても、唯の捨て駒のように扱われても・・・今の居場所を失いたくなかった。

だが・・・所詮それは、仮初の居場所に過ぎない。

するとサイは小太郎の頭を掴むと目線を合わせて座り込む。

何故だかは解らないが、小太郎は抵抗出来ないでされるがままにさ

れていた……。

そしてそこで、サイはある事を呟いたのだ。

「……約束する。」

テメエを人扱いしねえような連中も、そんな世界も……俺が必ず  
ブツ壊す。

テメエの未来も、あした苦しまねえで済む現実も……必ず俺がこの手で  
掴み取ってやる。

だからもう……無茶してまで居場所を求めるような事は止める」

それは全てに耐え、『居場所』と言う幻想を人に求め続けた小太郎  
の胸に深く突き刺さる。

彼女はそこで、今まで感じていた違和感や頬の温かさの意味を理解  
した……。

本気で彼女は誰かに怒られた事などない。

本気で彼女は誰かに心配された事もなく、誰かに優しくされた事も  
無い。

今まで向けられたのは役立たずとなれば捨てられると言っ心無き現  
実、そして女の癖に男の真似事をする事への奇異の視線だ。

だが……今日の前に居る敵の筈の人物は、本気で小太郎を怒って  
くれた。

敵でありながら命の心配をし、自分の状態などまるで無視して助け、  
そして今……途方も無い約束をしてくれた。

口ばかりではない　その真剣な目は、本気で自分を助ける心算  
なのだろう。

「……本当に……本当に、アンタは……俺を助ける心算なん  
か？」

そんな事したつて、アンタには何の利もないやんか・・・いや寧ろ俺は関西呪術協会を乗っ取るうとしてる連中の一員や、そんな事が知れたら・・・」

だが、そんな小太郎の一言をサイは叩き切る。

彼の、彼らしい・・・寧ろ彼と言う存在を象徴するかのような言い方で。

「んなもん、関係ねえな！！」

俺が、俺自身の意志でテメエを助けるつて誓ったんだ・・・それを今更覆す心算もねえよ！！ 文句あるか！？

俺を舐めんなよ、ガキ 俺を、誰だと思つていやがる！！！！」

無茶苦茶な言い方だ・・・だが、その言い様に小太郎は黙り込む。

サイは小太郎の姿にかつての自分を見た 人と魂獣スピリッツ、相容れる事の無い時代の犠牲とも言える存在を両親に持ったが故に卑下され、嫌悪され、現実に絶望して人を傷つける事でしか自分の生きる意味を見出せなかつた幼き日の自分を。

だが、どうしようもない自分を泥沼の底から這い上がらせてくれた戦友ともがいた。

その戦友のお陰でサイは少しずつだが変われ・・・人を信じるという事の意味を教えられたのだ。

だからこそ放つて置けなかつた かつての自分のように殻に閉じこもつた目の前の少女を。

サイは不器用だ、戦友のように共に笑う事など出来ない。

胸を貸し、抱きしめてやる事も出来ない・・・そうするには自分の手は汚れ過ぎている。

だから、こんな不器用で辛辣な物言いで・・・ぶっ潰すなどという

物騒な方法と勝手な約束しか出来ない。

だが・・・それしか出来ないからこそ、彼は誰よりも自分の身体を張るのだ。

その生き様に迷いが無いように、迷わないようにひたすら前を向いて。

そんな彼の不器用な生き方を少女も理解したのだろう・・・いや、もしや自分と同じ様なものを彼の目に見たのかもしれない。

心の奥底が熱くなり、視界が滲む　　頬に伝う暖かい何か“涙

”だと気付くのに時間を有す。

・・・今まで生きてきた人生の中で初めて、悲しみや苦しみが理由ではない涙がその頬に伝っていたのだ。

「誰って・・・ひつく・・・知らんわ・・・」

ぐすつ・・・兄ちゃん・・・俺、俺・・・えぐつ・・・信じて、良  
いん・・・やな・・・？」

答えを返す代わりに、サイは裸になっている小太郎に自分の魂衣を頭から掛ける。

そして背を向けて天を見上げると・・・言い切った。

「当然だ・・・それに俺は俺自身を信じるなんて言わねえ。

テメエを救うと誓った漢の誓いを・・・漢の覚悟を、漢の誇りを信じればそれで良い・・・」

その背は何処までも大きく見える。

決して逃げる事無く・・・困難や悲壮な現実にぶち当たっても、その度に壁を乗り越えてきた漢の背中。

余計な事は語らない、漢は背で生きてきた生き様を語るものだ。

「う、うつつ・・・ひくつ・・・えぐつ・・・。  
う、うわあああああ・・・うわああああああん!!!」

小太郎は頭から掛けられたサイの魂衣を抱きながら泣いた。  
悲しみでも苦しみでもない、喜びから流れ落ちる涙を・・・人目を  
気にする事もなく、枯れ果てるまで。

泣き終わって疲れたのだろう・・・小太郎は瞳を真つ赤に腫れさせ  
てサイの背で眠っていた。  
そのまま小太郎をちびせつなの近くに連れて行くと、ゆっくりと鳥  
居の根元に起こさないように横たえる。

・・・その少女の姿を見ながら明日菜が声を掛けてきた。

「大丈夫なの、この娘・・・？ 凄い血を流してたみたいけど・・・」

「心配ねえ、血は全部止めた。後はコイツ次第だろうが、獣人つ  
てのは無茶をしなければ暫くしたら動けるようになる筈だ・・・自  
己再生の力が強いとかキティに教えて貰った事がある」

そう言い終わるとサイは何処から出したのか、丈夫な布のような物  
を脇腹に巻く。

途中、何度も痛々しそうな表情をしていた・・・折れたアバラを保  
護する為に巻いているのだろう。

・・・彼は神具で人の傷は治す事は出来るが、アビリティキヤンセラー能力無効化の力が強  
過ぎるが故に自分の傷は治す事が出来ないのだ。

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃんこそ大丈夫なの？ 何だか凄く痛そ  
うだよ・・・」

「問題ねえよ、俺も半分は人間じゃねえからな。　時間は掛かるが、普通の人間よりは早く傷が治る　それよりも問題はコイツをどうするかだ、こんな所に置いてく訳にやいかねえだろ？」

確かにこの様な場所に上からサイの魂衣を羽織っているとは言え、ほぼ裸に近い少女を置いていく訳にはいかないだろう・・・しかしそれに対してはちびせつなが言葉を返す。

「それならば関西呪術協会の本山に一緒に行けば良いかと。先ほどの状況や、禁術の狂転変生の咒法が使われていたようですから長に事情を説明すれば、この娘は利用されていただけと解って貰える筈です・・・それよりも問題なのは、どうやって此処から抜けるかですね」

そう、考えても見れば最大の問題はそれだ。

永遠に同じ道をループするこの結果、無間方処の咒法を何とかして外に出ねば意味が無い。

だが脱出方法を知っているであろう小太郎は眠っており、ループの切れ目のみは理解出来ているがそれ以上は脱出の仕方さえ解らなかつた。

「それも心配ねえよ、ループの切れ目が解ってる今ならな」

言い終わるや否や、サイは七魂剣の切っ先を横に向けて水平に構えると刃の平を撫でるようにゆっくりと手を動かす。

すると　根元からゆっくりと刃が光り輝き、虹色の輝きを纏う、まるでビームソードのような姿へと変わったのだ・・・。

その光の太刀と化した刃を切っ先を鳥居に向けて構える。

そして、刃を鳥居の前で思いっきり袈裟懸けに振り下ろしたのだ

背を向け、まるで剣についた血を払うかのように振り払う。

その瞬間　　ネギや明日菜、ちびせつなは目の前で起こっている事に目を疑った。

何と・・・空間がサイの振るった刃の軌跡をなぞる様に一筋の光が現れ、景色が切り裂かれるようにズレたのだ

「・・・我が次元刃に、断てぬものは無い」

そうサイが某剣一本で神までぶった切った漢のような台詞を呟き、七魂剣が元に戻って腰の鞘に仕舞われた瞬間・・・。

ズレていた空間はまるでガラスを割るかのように砕け散り、そして消えたのだ。

何が消えたか？　言うまでも無い・・・千本鳥居に張られていた無間方処の結界が、跡形もなく粉々に。

「う・・・ウソオオオオ！？」

『そ、そんな・・・結界を、次元の歪んだ空間を・・・断ち切った・・・？』

今までサイの無茶苦茶を見てきたが、今回程無茶苦茶過ぎる力は見えない。

本来ならば無間空間の中の何処かに隠された印を壊し、更にその後現れる空間の亀裂を破壊する事で脱出出来る・・・それが結界と言う物なのだ。

それをそれら全ての工程を飛び越して、結界自体を断ち切ってしまったのだから驚かない方がおかしいだろう。



「前に言つたる・・・出来ねえ事は言わねえよ」

そう呟くと、上の方を見るサイ。

かすかだがその視線の先には先ほどまでは見えなかった建物のような物が見える。

張られていた罫を突破した事により、無限に続くループは終わりを告げ・・・本山の位置が見えるようになったのだ。その本山を親指で指しながらサイは言う。

「ホレ、あそこに親書届けりや良いんだろ。」

とつと行け・・・その親書が長つての手に渡れば、ちつたあ今の状況を改善出来るだろ。

それがテメエの役目だ、解つてるよなネギ？」

「うん！！ 解つてるよお兄ちゃん！！」

それに・・・この親書が渡れば、少しはこの娘のような子が出ないで済むようになるよね・・・？」

その言葉にサイは小さく『・・・ああ』と応える。

裏に張り巡らされた負の連鎖は、東と西が手を結んだとしてもそう簡単には消えない・・・それが事実だ。

しかしそれでも、少しは小太郎のような犠牲者が出なくなるはなるだろう。

「明日菜・・・ネギと小太郎を頼む。」

ちびせつな案内をしてやってくれ、最後まで気を抜かずにな・・・

「

「まっかせなさいよ、サイ。」

今から何か出てくるかもしれないけど・・・ネギもこの娘も私が絶対に護るから。

「・・・こう見えても自慢じゃないけど、逃げ足の速さには自信があるからね」

「ハイ、解りました!!」

「・・・あれ? でも、その言い方はサイさんは本山に行かないんですか?」

サイの物言いの歯切れの悪さにちびせつな疑問を持つ。

それに対してサイは、少しバツが悪そうにぶつきら棒に言葉を返した。

「悪いな、野暮用思い出してよ。」

まああれだ、人間として当然起こる生理現象という・・・要するに用足した用足し。

あんだだけ戦ってたからな、大も小も我慢しまくっててよお・・・ちと時間掛かりそうだし漏らしたくねえからな、だから先に行ってる」

その言葉を聞いて苦笑する明日菜。

彼女も無間空間に閉じ込められた際にトイレに行きたくなり、漏らしそうになった経験がある。

故に気持ちが解るのだろう・・・。

「キツタナイわねえ・・・トイレ位済ましときなさいよ。」

まあ良いわ、だったら先に行ってるからとつと追いつきなさいよ?」

明日菜の言葉に背を向けて手を振るサイ。

そしてそのまま少し下にある休憩所に向かって歩き出す。

その後姿が見えなくなったのを確認した後、小太郎を背負った明日菜と肩にちびせつなを乗せたネギはまだまだ遙か天に聳える関西呪術協会の本山に向かって歩みを進め始めたのであった。

休憩所に向かうサイ、足早に到着するとトイレに・・・は行かなかった。

そうではなくトイレの裏に回り、竹藪の中を進んでいく  
—  
体何処へと向かおうというのか？

暫く歩いた後、ふとある場所で立ち止まる。

その目線の先には、何やら読めないようなミミズの這い回ったような文字の書かれた光る丸い円があった。

昔の知識も何も無い状態のサイならば、この様なものがあつたとしても何だかは気付かなかつただろう。

しかし、この目の前に展開される“魔方陣”は、小太郎と戦っている時に見つけたもの。

「これが強制魔法転移陣って奴か。

こんな所にあるって事は少なくとも、ネギとは関係ねえだろうし・・・  
・梵字でも漢字でも無さそうだから関西呪術協会とも関係ねえだろ」

だが・・・その魔方陣から放たれている気配をサイは知っている。  
まだたつた一度出会い、死合ったただだが・・・間違いなくこの寒々しい気配はフェイトと名乗った少年の物だ。

「何か用事があつて此処に張ってるのか、それとも逆に何かをした後に脱出する為に張ってあるのか。

理由は解らねえが、少なくともコイツはあの小僧が居る所まで繋がってるのは間違いないだろうな  
じゃなけりゃ、こんなに濃い

気配を放つちやいねえだろ・・・」

一人そう誰に聞かせる訳でもなく呟くサイ。

これを小太郎との戦いの時に見つけた時点で既にサイの腹は決まっている。

・・・それにこのかを護るのと学園長からの依頼以外にも、果たす約束が増えた。

ならば迷う必要は無いのだ・・・。

恐らくこれは、敵のど真ん中に向かう可能性が高い。

そうなればフェイトだけでなく、他のこのかを狙う刺客と対峙し、不利な状態で戦わねばならないだろう。

今の体力を消耗している状態で勝てる訳は無い・・・恐らく99%の確率で振り返ちだ。

しかしそれでも・・・サイは不敵に笑う。

「最初はテメエ等から吹っかけてきやがったからな。

今度は　俺から喧嘩売りに行つてやらあ、そこで待ってる

┌

だが99%振り返ちにされるから何だ？

残り1%でも確率があるのなら、サイは喜んでその先に向かう・・・分の悪い賭けなど、今まで何度も打ってきた。

それに、少なくとも思い出した能力を使えば勝つ事は出来なくとも引き分けに持ち込める可能性もある。

意を決し、魔方陣の中に飛び込むサイ。

すると方陣は光り輝き、その光が彼を包み込むと・・・その姿は消えていたのであった・・・。



### 第三十四話：救いたいと願うからこそ（後書き）

投稿完了です。

やれやれ・・・やっと親書側のイベントが終わりました。

小太郎のTSに明日菜の神具召喚とネギの成長・・・意外に漫画の方では短かったストーリーなのに熱い展開が多く書いて良かったです。

次からは護衛側ですね。

こちらもどうなのか今の所全然解らないっす・・・何せ気合とノリで書いてるような作品ですので。

ま、少なくともサイが介入しますし、原作と違ってエヴァに茶々丸にザジがいますからねえ・・・またぶっ飛んだ展開になるでしょう  
^^

では次をどうか楽しみに^^

作者のZEROからお伝えいたしました・・・さよ～なら

P.S.

【某剣一本で神も斬り捨てる漢】

我が尊敬する【スーパーロボット大戦OG】に登場する漢の中の漢、ゼンガー・ゾンボルト親分の事。

この人は幾ら色々な武装を装備しているダイナミック・ゼネラル・ガードイアン DGG（通称、ダブルGと呼ばれる機動兵器）に搭乗しながら、斬艦刀と呼ばれる刀一本で戦ってしまつまさに漢の鑑とも言えるモノノウラ 武士です。

決め台詞は『我が斬艦刀に、断てぬもの無し！！』

補足？

サイの現在の格好は、小太郎に魂衣を貸してますので上はほぼ裸で

す。

(実際は魂衣を分けて作り出したサラシでアバラから脇腹を巻いている姿ですが)

第三十五話：恋の華 咲かせて見せよう どこまでも

サイにネギ&明日菜の三人が暴走した小太郎を助け、別れたと同じ頃

刹那とエヴァ、それに茶々丸&さよとザジに木乃香とパール&のどか&夕映は京都のシネマ村に居た。

「ほらほらっ　　せっちゃん、どうや〜」

更衣所で借りた和服の着物を身に纏い、嬉しそうに笑いながら刹那に見せに来る木乃香。

まだまだ硬くはあるも、サイのお陰で少しずつだが木乃香に歩み寄る事が出来ていた刹那は微笑みながら答えを返す。

「はい、良くお似合いですよ・・・その、お綺麗ですし・・・」

まあ・・・そう言う刹那自身も既に木乃香によって衣装を着せられていた。

格好は新撰組の衣装、しかしこれが意外と刹那に似合っている

男装の麗人とでも言うべきか？

ただし、野太刀である為に普通の刀より長い刹那の愛刀・夕凧を腰に差しており、その部分だけがそぐわないのだが。

「刹那さんも良く似合ってるよ、新撰組の男装が此処まで似合うなんて思わなかったけどさ」

そう言うパールも男装をしている。

彼女の場合は片目の眼帯やら腰に差した刀と脇差から、劍豪・柳生十兵衛の格好だろうか？



「そ、そうですね。．．．似合ってますよ、刹那さんも木乃香さんも．．．」

「．．．所で、私達まで仮装する必要があったのででしょうか？」

そう呟くはのどか&夕映の仲良しコンビ。

のどかは西洋風のお嬢様のような格好、夕映は巫女のような格好をしている。

．．．実際、この二人もパルも意外と似合っているように見受けられるが。

「うむ、一度してみたかった願いが叶った。シネマ村という所に来たら、仮装しなければ始まるまい」

「マスターも良くお似合いです」

『（小声）茶々丸さんも似合ってますよお』

「．．．．．（コクコクッ）」

どうやらエヴァはこのシネマ村という場所に來れるのを楽しみにしていたのだろう。

何処その時代劇にでも登場しそうなお姫様の格好をして感慨深そうに頷いている 実は彼女、時代劇などを見るのが大好きなのだ。

その横に居る茶々丸は西洋風のお姫様のようなドレスを着ている。手に抱いているウサギ人形のさよも洋風のドレスのような衣装をつけているのでマッチしていた。

．．．まあ、その更に横に居るザジの格好は何処その侠客のような格好であったが。

何だかんだで彼女たちは修学旅行を満喫しているようだ。

まあ、刹那とエヴァと茶々丸とザジの場合は最低限の警戒をしながら

らではあるが。

例え一般人が多い場所とは言え、木乃香を奪う為にどのような策を使って来るかなど解らないのだから。

しかし・・・刹那が木乃香を見る眼差しは本当に変わった。

最初の頃は木乃香に見つからないように、言い方を変えるなら関わりにならないように避けていたが・・・最近、特に今回の旅行の中で木乃香との蟠わだかまりのような物が改善に向かっていている為か、彼女の笑顔を見て温かい眼差しを向けている。

「（・・・こうして再びお嬢様と過ごせている、そんな日が来るなんて思わなかった。

サイさんの言う通り、一步踏み出す事が出来たお陰だ・・・踏み出して本当に良かった・・・）」

そんな心内を見抜いたのか、エヴァが少々苦笑のようなものを見せながら話しかける。

「・・・良かったな、桜咲刹那よ。

最初の頃に比べれば随分と腑抜けた面構えになったが・・・それで良い。

自分の大事な物から目を背けるような事はするな・・・大切な物と言うのは、簡単に手から零れ落ちてしまうからな」

思えばエヴァも実に変わった。

かつての彼女ならこんな行事に参加する事もないし、今の刹那を見たら辛辣な物言いをしていただろう。

所謂、人から“化物”と揶揄される存在同士の為か同族意識のようなものから幸福に笑う刹那を貶していたかも知れない。

だが・・・彼女も刹那と同じくサイのお陰で此処まで変れたのだ。

「はい・・・ありがとうございます、エヴァンジェリンさん。  
あっ、でもご心配には及びません　周囲への警戒は決して怠っ  
ては居ませんので」

「ふむ、それは重畳・・・しかし大切なお嬢様と再び絆を取り戻せ  
て結構な事だ。

・・・サイの言葉を信じ、奴自身を信じて間違いではなかっただろ  
う？」

エヴァのその言葉に刹那は頬を赤く染めながら静かに頷く。  
てつきり否定すると思っていた為か、エヴァは刹那のその反応に一  
瞬だけ驚いたような表情をした。

勿論それが恋心なのかどうかは不明だが、純粹に慕っているのは見  
て取れる。

だからこそ、サイの過去を知るエヴァはかすかに一瞬だけ悲しげな  
表情もした。

「そうか・・・それも良かろう」

それ以上は何も言わない　言っても詮無き事だ。

恐らく刹那の抱く感情は彼女の性格上、愛と尊敬の間という所であ  
ろう・・・。

ならば、此処から恋愛感情に発展するかそれとも尊敬心だけで終わ  
るかはその人の決める事である。

その感情が恋愛感情となった時は、一応ある事を伝える心算  
だが。

そんな風に二人が話をしているその隣。

少々バツの悪い空気を打ち破るかの如く、木乃香達は変わらず賑やか

に騒いでいたのだった……。

「うーん、それにしてもやっぱり木乃香が一番似合ってるねえ。何ていうの、こう……まるで普段着みたいに着こなしてるように見えるよ」

少し周囲を歩いた後、そんな風に感想を呟くパール。

その横に居たのどかも夕映も同じような感想を持っていたのかしきりに微笑みつつ頷く。

木乃香の場合、普段から和服を着慣れている為かその姿は見ているものを感嘆させるなど当然の事だろう。

その事を知らないパルヤのどかや夕映、更にシネマ村の通行人であっても感心したように見つめていた。

「ええ、ほうかな？」

ウチ、結構こう言う格好なんかしとるで？ 実家に帰ったりしたら」

当の本人とすれば普段実家で良くしている格好に過ぎない。

まあ、パル達は木乃香の『実家』というものを知らないのだが、少なくとも裕福な家庭だと言っ事だけは理解出来たようだ。

「自身持ちなさいよ、木乃香

今のアンタを見たらどんな男でもそれこそイチコロよ、それだけ良い素材持つてるんだからね」

パルが笑いながらそんな台詞を呟く。

すると・・・いつもはポヤッとしていただけの木乃香が珍しくパルの言葉に食付いた。

「えっ・・・ほ、ホンマに？ ホンマにそう思うん、パル？」

その物言いに一度首を傾げるパル。

木乃香は基本的に恋愛事を言われたとしても笑いながらスルーするようなタイプの人間だ。

更に恋愛事に対して噂も何も全く無い筈・・・なのにこの反応は一体何なのか？

「（・・・あれ、木乃香・・・恋愛事に全くと言って良い程に何も無いと思っただけど・・・。」

この反応はもしかして・・・そう言えば修学旅行に来てから・・・はっ、成る程ねえ・・・。」

『ギュピーン！！』等と言う擬音を放ちながら目を光らせるパル。恋愛事（要は人の恋バナ）を大好物とするパルにとって、これ程に楽しめそうなものはない。

しかも考えてみれば、多分目の前に居る和服の大和撫子の少女が恋愛感情を抱いているのは自分の親友の内の一人と同じ人物だ・・・。

その様子に親友であるのどかや夕映も何かを感じ取っただらしい。

疑問を浮かべたような表情で、口元をにやけさせているパルの口から放たれる言葉を待った。

「そっだよ木乃香、自信持ちなっつて

た・と・え・ば・・・サイ君だって今の木乃香見たらメロっちゃうかもよ」

「「「なっ!? え、えええええ!?」」」(声：刹那、のどか、夕映)

「「「・・・・・・」」」(声：エヴァ、茶々丸、ザジ)

驚愕と無言、まるで反対の反応を持つ者達。

そんな反応をよそに、木乃香は頬を赤らめながら少し驚いた様子で口を開く。

「え・・・・ええ〜? サイ君・・・・?

でも、ウチとサイ君じゃ・・・・ウチの方が釣り合わないんとちゃうかな〜?

だってサイ君って格好良えし・・・・」

間違いない この反応は間違いない。

予想外だった、恋愛事の噂の無い木乃香のこの反応は此処に居る者達にとつて。

「(えっ・・・・ええええええ!?! こ、このか・・・・サイさんの事を・・・・)」

「(のどか、これは実に強力なライバルの登場です・・・・それに何故でしょう、私のこの胸の痛みは?)」

「(ここ・・・・ここここ、このちゃん・・・・う、ウソ・・・・やる・・・・?)」

そんな事を考える少女たち。

一方のエヴァ達は先ほど刹那に見せた何処となく悲しげな表情を湛えて何も言わずに木乃香を見つめていた。

「(ふふ、やっぱりビンゴか・・・・)」

な〜に言ってるのよ木乃香? 同じ女の私達がアンタの事をキレイ

だつてさつきから言ってるじゃない。

それに、惚れた男に対してアタックしないでどうするのよ？」

表面上は爽やかに言うパールだが、腹の中は真つ黒である。

まあ・・・どろどろとした恋愛模様を見るのが好きな彼女にとつてはこれも娯楽の一つなのだろう。

それに、同じくサイに恋愛感情を抱いているのどかに発破を掛けるという理由もあった。

と言つかパールよ。

サイの場合はドロドロの恋愛模様どころか、下手すればグチャグチャの恋愛模様だな。

何せ此処に居るメンバーならパールと夕映（彼女も怪しいが）を除いて多かれ少なかれ、触れ合い方の違いはあれど大体がサイに好意を抱いている。

更にそれ以外ならクールなスナイパーに戦闘狂の中華娘バトルマニアとのほほん忍者の三人が居り、ちみっこ双子もそう言った感情を抱いているようだ（風香と史伽の場合は兄のように慕っている感もあるが）。

おまけにそのやさぐれ感に母性を刺激されたどう見ても中学生に見えない少女も、感情の度合いは違えど喧嘩友達のような関係である凄腕ハツカー少女も、そして年上好きのオジコンだった筈の人物も多かれ少なかれサイが気になつているのは事実なのだから。

（更に更に描写が出て来ていないだけでサイに恋心のような物を抱く人物は後2〜3人居るのだから、クラスの約半分（）はサイに何かしらの感情を持っていると言う事だ）（計16人強）

まあ実際の所、チンピラのように見えるが不言実行タイプの人物。

喧嘩っ早いのが玉に瑕だが自分から手を出す事は殆どせず、言葉で語らず行動や背中で語る漢。

更に口は悪いが相手の為を思って言う事は多く、結果その言葉のお陰で救われた者も何人が居る。

更に更に、思春期の少女達のクラスの唯一の男性と言えば・・・変った性癖の持ち主か彼氏持ちでない限りはそう言った感情を抱くのが当然と言えば当然のような気もするが。

・・・少し脱線してしまつたが話を戻そう。

パルの言葉に考えるような仕草を取る木乃香だったが・・・直ぐに顔を上げて頬を赤らめたまま笑顔で言う。

「うん、そうや・・・パルの言う通り。

アタックしないでウジウジするなんてウチらしくもないわ・・・。

アリガトなくパル！！　ウチ、ウチ頑張るわ」

「（み、認めたああああ！？）」「

心の底からの聞こえぬ声を言い放ちながら慌てるのどかに夕映。

「（そ、そんな・・・！？　お、お嬢様も・・・お嬢様も・・・そんな・・・）」

一方、自分の感情が恋愛なのか何なのか解つて居ない刹那・・・それでも自分の想う人物が護るべき人と同じだと言う事にショックを受けたようだ。

「ほう、知らなかつたな。　一体いつの間に貴様はサイの奴に惚れたんだ、近衛木乃香よ？」

また一方のエヴァは真面目な顔で木乃香に尋ねる。

その表情は別に嫌悪感や動揺のようなものは映しては居ない・・・  
純粹な疑問からだろう。



「ほ、惚れたって・・・うう、恥ずいなく・・・。  
せやけど・・・せやけど前々から、三年生になるかなり前からサイ  
君が気になってたってのはホンマの事や」

まあ、バレバレだけどな。

そもそもあれだけ態度に見せていながら気付かない連中の方が凄  
いと思うが。

「実は3年になるより少し前、ウチはサイ君に会った事があるんよ。  
それが前にのどかが桜通りの吸血鬼騒ぎで襲われて、明日菜がその  
後を追いかけた時が最初の出会いや」

「(え・・・エヴァンジェリンさん!?)」

「(ああ・・・そう言えばその日に私はサイと初めて出会ったんだ  
つたな。

成る程、そう言えばあの時はサイの奴、誰かに頼まれて向かって来  
たとか言っていたような気がする)」

黙って木乃香のサイとの出会いを興味深げに聞いているパルにのど  
かに夕映。

まさかそんな、3年になるよりも前のサイが編入される前から二人  
が出会っていたなどとは思わなかったらしい。

「のどかを襲った犯人を明日菜が追いかけたんやけど・・・。  
ウチ、一人ぼっちになってもうてなく・・・のどかは起きんし、明  
日菜が心配だったのもあって心細かったんよ。そこに現れたのが  
何を隠そう、サイ君だったんや」

その語る口調は実に自慢げで嬉しそうだ。  
恐らくその日が木乃香にとってはある意味最良の出会いとなったの  
だろう。

「ウチ、パニックになってもーてサイ君に犯人を追いかけてなんて  
言ってもうたんよ。」

そしたらサイ君、見ず知らずの相手に勝手な事を頼まれたのに文句  
一つ言わずに快諾してくれて・・・ウチが名前聞いた時なんか『唯  
の通りすがりさ、名乗る程の人物じゃない』なんて言っただけで走り去っ  
てったんや。

だからその後少し経ってから、明日菜が無事だったから約束護って  
くれたって思っただけで嬉しかったん。」

・・・実際はサイ、エヴァを追いかけて行ったので厳密には完全に  
助けたかは微妙なラインだ。

しかしまあ、一目惚れとか恋愛なんて奴は大体が勘違いから始まっ  
てしまうものだ・・・それを今更説明した所で木乃香が変わると思  
えないが。

その後木乃香は自分の強引にお見合いをさせられていた時の事も  
話す。

話をしている間の木乃香は終始ご機嫌、更に嬉しそうに頬を赤らめ  
ながら得意げに話し続けていた。

・・・それを見ていた刹那が、のどかがショックそうな表情をして  
いたのは言うまでも無い。

「ふ〜ん、成る程・・・サイ君ってぶっくら棒に見えるけど、やつ  
は優しいんだねえ」

（そういえばさっき、こっそりと二日酔いに効く薬も買って渡して  
くれたっけ・・・『俺が買ったなんて言わないで良い』なんて言っ

てたけど」

そう、サイはぶつきら棒で粗暴な人物を語っているだけであり・・・  
本当は面倒見が良い。

不器用だが小さな優しさを持つサイをどちらかと言うとパールも好意的に思っていた感がある。

そんな彼を親友達が恋をしているようなのだ・・・いつしか面白そうにしていたパールは優しげに微笑むと木乃香の背中をバンバン叩きながら言葉を続けた。

「よっし、私はアンタの恋を応援するよ木乃香！！　ねえ、ゆえっち？

（ボソツ）・・・のどか、アンタも負けなないように頑張んなきゃダメよ？」

木乃香に言った後、小さく肩を叩きながらのどかにもそう伝えるパール。

おちゃらけてて、変った趣味を持ってて、楽しい事なら何にでも首を突っ込もうとする悪癖の持ち主であるパール　だがその心内は、親友の事を考える『イイ女』でもあるのだ。

「あ・・・は、はい！！　そうですよこのかさん！！　が、頑張るです・・・そう、頑張るですよ！！

（ボソツ）の、のどかも頑張るですよ！！　じゃないこのかさんに負けてしまうですから・・・」

・・・どうやらポーっとしてたのか慌てて言葉を返し、横に居た親友の肩を叩きながら呟く夕映。

そんな風に諭された二人の少女は自分の気持ちに向き合う。

「せ・・・せやな、ウチ頑張るわ!!」

「(ボソツ)あ・・・あの、あのあの・・・その・・・わ、私も・・・頑張るよ」

そんな二人を・・・いや、そこに居た者達を見つめている目線が二つ。

一人は勿論刹那　　心の中で葛藤を抱きながら、それでも木乃香の為に身を引こうとする。

「(私も・・・応援・・・応援をしなければ・・・。

サイさんは、サイさんは信頼出来る方なのだから・・・でも・・・)

」

そしてもう一人は何とも言えない表情をしているエヴァだ。

何かを考えるように顎に手を当て、少しだけ物思いに耽り・・・そして、ほんの少しだけ悲しげな表情になると木乃香に向かって口を開く。

「近衛木乃香、貴様のサイに対する想いの強さは良く解った。

サイは確かに貴様だけでなく、私にとってもそんなに簡単に会おう事の出来ないような漢だ。

故に貴様が・・・いや貴様だけではないが、サイに惹かれるのは何となく理解出来る」

そんな事を呟く光景が初めての為、其処に居た者達は全員がエヴァの方を見る。

木乃香もエヴァの言葉が嬉しいのか微笑みながら　　だがそこで、エヴァは急に真面目な表情になると小さく呟く。

「・・・だがな、先に一つだけ言っておく。

貴様たちがサイに惹かれるも慕うも勝手だ・・・しかしそれが恋愛感情なら、今のサイには重荷にしかならん。この言葉を努々<sup>ゆめゆめ</sup>忘れるな」

「えっ？ エヴァちゃん・・・それどういう・・・」

木乃香がエヴァの言葉の真意を問おうとするも、エヴァはそのまま背を向けて歩き出す。

それに続くようにしてずっと黙っていた茶々丸も、ザジもエヴァを追うようにして歩き出した。

その背はまるで

まるで『これ以上語る事はない』とでも言っているかのように木乃香達には見えた。

・・・とまさにその時の事だ。

シネマ村に居た通行人達が急に騒ぎ出し、何処かに向かって歩き出す。

それを不審に思った夕映は、先ほどのエヴァの言葉への疑問をとりあえず忘れると通行人の一人に尋ねる。

「あの、何かあったのですか？」

「ああ、何だか半裸で全身傷だらけの銀髪の兄ちゃんがこの先の橋の上で誰かと戦ってるんだとさ」

その言葉に殆どの人物は首を傾げる。

しかし・・・半裸と言うのは別として、全身が傷だらけで銀髪と言う特徴を持つ者は一人しか当て嵌まらない。

その人物が誰か気付いたエヴァや茶々丸にザジ、そして刹那は呟く。

「マスター・・・まさか・・・」

「あの大馬鹿者が・・・どうしていつも奴はああ面倒事に巻き込まれるんだ全く・・・」

「・・・(クイクイツ)」エヴァの着ている衣装の袖を引っ張っている、急かしているのだろう。

「そんな・・・明日菜さんにネギ先生と本山に向かったんじゃ・・・」

そう、一人しか思い当たらないのだ・・・そんな人物は。

四人は顔を見合わせるとその人物の名を揃って呟いた

「「「サイ(さん)!!!!」」」

「よし、月詠・・・計画通り動いてお嬢様を此処に呼び寄せるんやで」

「うふふふ・・・了解です」。また刹那センパイと戦えて嬉しいですわ」

「・・・」

時間は少しだけ遡り、少し離れた場所から木乃香達を監視する人物達。

彼女たちは密かにある計画を実行しようと機が熟すのを待っていたのだ・・・。

その作戦とはシネマ村という場所を利用し、衆人観衆の中で客を巻き込んだ劇に見せかけて木乃香を攫おうとしていた。

計画の伝言係として女剣士月詠に合図を送り、計画はスタートする。その際に千草に対して、殆ど口を聞く事もなく無言で居た少年・フエイトが、珍しい事を聞く。

「・・・しかし良かったのかな？　まだあの狗族小太郎の娘には利用価値があつたんじゃないのかい？　それなのに、態々わざわざ禁呪を掛けて使い捨てる駒にする必要も無かつたと思うけど？」

フェイトとすればまた小太郎は利用価値があつたように思われる。作戦と言うのは二重にも三重にも策を巡らせ、失敗に終わった際の保険を作っておくのが最も効果的な方法だ。

それにこの作戦が失敗した時に少しは戦える人物が居た方が他の策を講じ易いのである。

だが・・・刺客の頭たる天ヶ崎千草はフェイトの言葉に嫌悪感のよくな表情を浮かべて返す。

「はあ？　あんな半端者の小娘が何の役に立つんや？」

それにな・・・ウチは今から『関西呪術協会』を乗っ取って正しい方向に導くんやで。

あんな人間と化物の混ざりモンのゲテモノなんぞを置いておきたくなんぞないわ、気持ち悪い」

・・・一つだけ解つた事がある。

どんな理由で関西呪術協会を乗っ取るうとしているか、その理由は本人でなければ解らないだろう。

しかし・・・この天ヶ崎千草と言う人物が“腐った輩”だと言う事だけは良く理解出来た。

所謂、この人物は血筋やら種族やらと言つた物を重視するタイプなのだ。

血統が尊いからこそ素晴らしい、純血の人間であるからこそ価値が

ある・・・まるで昔の貴族のような考え方である。

・・・そんな歪んだ価値観を持ちながらも目的の為なら利用する事も厭わない、そして必要なくなったらゴミ屑のように平気で捨てる・・・まさに外道や下種の代名詞が服を着て歩いていているようなものだ。

「・・・まあ、どうでも良いけどね」

一方、フェイトはそんな言葉を聞きながらも感情を全く表す事もない。

別に言うなれば彼にとってはどうでも良いのだ　雇われたから手を貸している、それだけの事なのだから。

例え最低な下種の類の輩でも雇い主は雇い主だ。

そんな事を考えながら、フェイトも準備に向かおうとした　まさにその時。　　ま

『フン、成る程・・・随分と下種な輩だな。

貴様のような輩が正しく導くだと　寝言なら寝てから言つが良  
い』

現れる魔方陣、放たれる輝き。

響いた声の持ち主は一人しか居るまい　その轟いた声に驚いたのか、千草は慌てて光り輝く魔方陣を見た。

「な・・・何や・・・一体誰や!？」

「此処で来たか・・・気概を考えれば来るとは思っていたけどね」

フェイトにとっては想定内の範囲だ。

そう、寧ろ『此処で来なければ何処で来るのか?』などと彼は考え



ていた。

魔法とも気とも思えぬ不思議な力を持つ人物・・・出来れば計画の  
為にはさっさと退場願いたい相手。

魔方阵から放たれる光が止み、目を眩ますほどの光が消えた後

魔方阵があつた場所に現れていたのは勿論、サイだ。

上着を纏わず、脇腹に巻いたサラシと着物風のズボンのみの外見で  
あつたが・・・その覇気は最初に会つた時以上に感じる。  
その鋭い目がフェイトを捉えると

「よう、フェイト・アーウェルンクス・・・。

売られた喧嘩をあの時強引に買ったからな、今度は俺が売  
りに来てやつたぜ」

不敵に笑いながらサイは呟いたのであつた・・・。

第三十五話：恋の華 咲かせて見せよう どこまでも（後書き）

投稿完了です^^

今回はほぼサイの出番は御座いません・・・ほぼ、少女達の恋バナがメインっす

まあしかし『恋は盲目』と言いますが、木乃香だのどかだのにはまさに似合い過ぎる言葉ですね。

一方、サイの過去を知っているエヴァと茶々丸。

更に何故か過去を知らない筈なのに知っているような素振りを見せるザジ。

彼女たち（特にエヴァ）の言った言葉の真意は何なのか？

それは次回の講釈をお楽しみに^^

### 第三十六話：戦友の魂

無言で見合う二人の人物

一人は半裸で全身傷だらけの目付きの悪い少年、もう一人は人形のように感情の起伏が現れない少年。

周囲の観光客や通行人は、いきなり現れた全身傷だらけの目付きの悪い少年に驚きざわついている。

・・・しかし、二人はまるで普通の表情だが火花を散らすかのよう  
に睨み合い、周囲の人間の事など無視していた。

時間にして数十秒

それなのに二人の雰囲気の所為で十分にも数十分にも及ぶように感じた無言の時間・・・観光客たちも木乃香を狙う刺客の中心人物である天ヶ崎千草もその異様な雰囲気に吞まれて音一つ立てられない。その沈黙を破ったのは人形のような少年、フェイトであった。

「やはり来たね、光明司斉　　どうやら君はこの争いの舞台に最後まで残るようだ。

ならば初めての出会いの時とは違い、最初から手加減せずに相手をさせてもらおうとしよう」

淡々と、それで居て何処か寒々しく感じるような言い方で口を開くフェイト。

対して彼とは全く逆で、荒々しいような雰囲気を放ちながら半裸の目付きの悪い人物、サイが口を開く。

「上等だ、フェイト・アーウェルンクス・・・。

こつちもデメエと最初に戦った時とは違う

ハナから本気で行

ってやらあ」

ただ口上を述べただけ・・・そう、唯それだけの筈だ。  
なのに何だ、この心臓を握られるかのような感覚は？ その理由は  
武に精通する者ならば理解出来たかもしれない。

それは殺気の応酬。

覇気と呼ばれる気のぶつかり合い・・・少なくとも外見通りの年齢  
では決して身に付く事のないものだ。

勿論サイの場合は700年以上は生きている　大妖怪・金毛丸  
尾クラスの覇気やら殺気やらを持ち合わせていてもおかしくない。  
しかしもう一人のフェイトも同じ程の殺気や覇気を放てるのだ・・・  
少なくとも外見通りの年齢と言う事はないだろう。

勿論、周囲に居る連中も冗談ではない。

二人の少年が睨み合っているだけで息苦しさや身体のだるさなどを  
感じ、気絶しないから良いようなものの気分を悪くしてしまってい  
る。

威嚇だけで周囲を其処までさせるのだ・・・此処から本気でやりあ  
ったとしたら、一体このシネマ村はどうなってしまうのか？  
その答えは多分、神や仏といった存在でも解らないだろう。

「・・・天ヶ崎千草」

不意にフェイトがそう呟く。

それを聞いているのか聞いていないのかは解らない　だがそん  
な事などはどうでも良く、フェイトは言葉を続ける。

「周囲に人が多くなって来た

彼の相手は僕がする・・・君達は計画の方を実行してくれ」

「あ・・・？　あ、あああ、アンタに言われるまでも無いわ新入り

「！」  
強がった心算だが震えが止まらない　当然だ、二人から放たれる強烈な殺気が彼女の身を弛緩させてしまっていたのだから。

それでも優位に立つ様な上から目線の口調の理由は・・・高々子供程度の殺気で恐れを感じてしまった事を隠す為のブラフだろうと思われる。

・・・本当に無駄に自尊心だけは強く、自愛精神の強い愚かな女のようなのだ。

「って、アンタら此処で始めるんかい！？」

う、ウチを巻き込むんやないわ・・・ウチはこれから関西を率いる大事な身やぞ！？」

そんな所そこの木っ端者共と一緒にするんや　　ひ、ヒイツ！？」

自分のみを心配し巻き込まれる事を恐れ、慌ててそんな事を叫ぶ千草。

だが・・・もうそんな事など関係ない、寧ろ千草など眼中にもせず

に身構えるフェイト。  
そしてそれに応えるようにサイもまた、腰の七魂剣を抜いて顔の前で構えて叫ぶ。

「ソウルアツク  
魂鎧装！！！」

声と共に纏われる白い鎧。

尻からは二本の尾が現れ、気配が一気に変わった　　その姿に千草が驚く。

「な、何やそれ！？　アンタも妖アヤカシやつたんかい！？」

しかしそんな千草の台詞など無視して睨み合う二人。

ほんの少しの沈黙の後、どちらともなく口を開いた……。

「覚悟しろ……今回の俺は前とは一味違っぜ」

「フム……大して変わっていない様に見えるけどね？」

再び訪れる沈黙……。まるで周りに何も居なくなっただかのように風の音が響く。

二人の間を一陣の風が通り抜け、辺りに植えられている桜の木が風に晒されて花びらを舞い散らす。

その花びらが風によって流されて二人の間をすり抜けた次の瞬間

二人は同時に地を蹴った……。

「オラアアアア!!!」

最初から全力でと言った言葉通り、サイは確実に相手を殺す際に使用する腕を使いフェイトに向かって呐喊する。

良く見れば肉食獣の顎の如く開かれた手の平には淡い光が纏われている。魂鎧装をした事によって鎧と化した法力が手の平まで包み込んでいるのだろう。

「……早いね、あの時よりも」

しかしフェイトはその攻撃が届く寸前に身を翻すと背後から強烈な回し蹴りを放つ。

サイは無防備な状態だ、下手にそんな蹴りを喰らえばかなりのダメージが残る。

だが　　サイは進行方向を向いたまま

「・・・何？」

疑問の声を漏らすフェイト。

何故なら彼の回し蹴りはサイの肉体には届いていない・・・蹴りは止められていた。

それは左腕で構えている七魂剣によって蹴りを止められている姿

サイは見もせず攻撃が向かって来る方向を読んだのである。

「言つたら・・・あん時の俺とは違う。

その程度で全力で訳じゃねえだろ？ 小手調べは大概にしとけよ、

小僧」

そのまま身を翻しながら放たれるサイの回し蹴り。

足の甲がフェイトの顎を捉えると・・・まるで蹴られたボールのように勢い良く壁に叩き付けられた。

立ち上る土煙、陥没する壁・・・普通ならこれ程の衝撃を受けて無傷と言う事はあるまい。

しかし、そんな考えなど否定してフェイトは無傷のまま土煙の中から立ち上がる。

埃で汚れている白い服を払い、感情の見えない表情でサイを見つめた。

「確かに、最初会った時とは雲泥の差だね。

成る程、無礼な事をしたよ。先ほどは手加減せずに相手をするといっておきながら、何処か君の事を試すような風にしてしまったようだ・・・謝罪しておこう」

その言葉が終わった瞬間、既にフェイトはサイの目の前で拳を振り浮かぶっていた。

凄まじいスピードで動きが見えない・・・これが所謂“瞬動”と言う技術だろうと思われる。

「テメエも全力でやりやあ早えじゃねえか。  
そうじゃなきゃ面白くねえよ　　オラ来いや、フェイト・アーウ  
エルンクス!!」

だが、サイも超絶的な動体視力でフェイトの一撃をガードしてから  
押し飛ばす。

再び二人の間に間合いが広がり・・・それぞれ攻撃を仕掛けられる  
ように地に付いた足に力を込めた。

その時である、声が聞こえて来たのは。

「サイ(さん)(君)　　っ!!!!」

「」

複数の女性の声のした方向をサイはチラッと見る　　其処には此  
方に走ってくる人物達の姿が見えた。

それは勿論、エヴァ達や木乃香&刹那にのどか・夕映・パル達だ。

「無事だったかテメエ等・・・」

「って、何だその格好は？　　何だか随分知らん内に服装の趣味が変わ  
たな」

今のエヴァ達はシネマ村で借りた衣装を身に纏っている。

それにサイは今自分が居る場所が何処なのかという事もまるで解っ  
ていない。

故にエヴァ達の姿を見た瞬間に目を丸くしていた・・・と言っても、  
本人も不思議な鎧を身に纏っている為かどっちもどっちのように見  
えるが。

「なっ、予定よりも早いやないか!?!　　月詠、一体どう言う事や!



？」

「え、え〜と・・・何やら良く解りまへんけど、向こうから勝手にこっちに来たみたいですよ〜」

千草の予定通りに木乃香達を誘き寄せようとした月詠。

作戦の概要はまず最初にシネマ村でいきなり始まる劇を装って木乃香達を日本橋の所に誘き寄せ、次は月詠がワザと派手に刹那や周りの者達を巻き込んで戦いを開始する。

その騒ぎに乗じて木乃香を孤立させて人払いの結界のある場所にまで誘導してそのまま攫うという腹積もりであった。

だが・・・その用意周到であった策はサイの出現によって一気に崩れ落ちる。

まあ当然だ、良くも悪くも周囲の人間がイベントだと思っただけに二人は非現実的な戦いを見せた。

しかも半裸の少年がいきなり現れたり、鎧を纏ったり、相手を殺す程の殺気の応酬や戦いに魅せられてしまった通行人が多過ぎたのだ・・・人間とは本質的に危険なものを見たり聞いたり知ったりする事を好むのだから。

「サイさん、大丈夫ですか！？ 先ほどあれほど無茶をしていたというのに・・・」

「問題ねえよ それよりも、テメエはテメエのすべき事をする。俺を心配するなんぞ10年早え」

刹那はちびせつなを通してサイがアバラ骨を折るような無茶をした事を知っている。

しかし当のサイ本人はその程度の事など些細な事なのだ・・・そう、小太郎のあの姿を見た時から。

「マスター、恐らくサイさんは転移陣を介して此方に来たのでは……？」  
「うむ……ジジイの孫娘である近衛木乃香を攫おうというのだ、策として一つや二つの転移陣を用意するだろう。(しかしあの白髪の小僧……あの面子の中で明らかに格が違うな)」  
「……(じつ)」

エヴァはどうやら一目見ただけで白髪の少年・フェイトが他と格が違う事を見抜いたらしい。

横に居るザジもフェイトの事を凝視している……何かしら感じるものがあつたのだろう。

「ん？ え〜つと……なあなあ、何でサイ君があそこで戦ってるん？」

「え、えとえとえと……サイ君もシネマ村の劇にでも巻き込まれたのかな……？」

「……いや、私に聞かれても解らないですよのどか。(劇……？ そんなものではないように感じますが……)」

「いや、その前にアンタ等はサイ君の仮装に突っ込みなさいよ……いや〜サイ君にあんな変った仮装をする趣味があるなんてね〜、冷めてると思つたら可愛い所もあるじゃんか」

どうやら彼女達の場合、事情を知らない故か訳も解らずに首を傾げている。

サイの魂鎧装の姿や耳や尻尾は仮装の一種だとも思っているのだろう。

更に此処には騒ぎを聞きつけて他の者達もやってきた。

「皆さん、一体何をしてらっしゃるのですか？」

「あらあら……凄い賑わってるわね。あら、あそこに居るのは

サイ君よね？ 耳と尻尾の仮装なんかつけちゃって可愛いわねえ」  
「・・・なぐにやっつてんだあの馬鹿は。（アイツも意外とコスプレ好きなのか？）」

「でも意外に似合ってるよね それに光明司君っていつも無愛想だから解らなかつたけど、賑やかな事好きなのかな？」

其処には委員長こと雪広あやかが班長を務める3班のメンバーが揃っていた。

ちなみに此処の班にはあやか・千鶴・千雨・夏美（台詞順）以外に朝倉も居るのだが・・・未だに昨日の恐怖を思い出してカモと共に部屋に閉じ籠って震えていたそうだ。（自業自得だが）

更に更に、本来ではこんな場所に来る筈のない連中まで来ていた。

「アレ？ 何であんな所にサイが居るアルカ？」

「いや、それは解らぬでござるが・・・ふふ、意外にサイ殿はお茶目な格好が好きでござるな」

「本当ですね、五月蠅い事は苦手だと思っただけです・・・ん？ どうかしました超さん？」

「あ、いや・・・何でもないヨ・・・成る程、アレが未知の力の正体ネ？ あの力とワタシの力があればきつと・・・」

光明司さん、もしかして無理矢理に劇に巻き込まれてしまったのかも知れませんか

「・・・いやいや、ちょっと・・・（サイ君、少しは隠そうよおお！・・・？）」

「フツ・・・（アレがサイの力が、やはり私の目に狂いはなかったな）」

「あ、あれ・・・あそこに居るん、光明司くんやんか？ あんな所

「で何やってるんかな？」

「解らないけど　危ない事じゃなきゃ良いね・・・」

「大丈夫でしょ　何かサイ君もノリノリに見えるしさ」

「あれえ、ネギ君が居ないなあ〜〜？」

何故か此処には第二班（台詞順に古・楓・葉加背・超・四葉・美空）と第四班（台詞順に真名・亜子・アキラ・裕奈・まき絵）まで来ている。

他にも日本橋の付近は観光客、通行人、他の修学旅行生でこった返し、大勢の客が集まっていた。

まあ、幸いな事に一部の人物達（美空&真名に何故か超）以外は皆イベントだと思っ込んでいるようだ

さて、こんな状況となってしまう慌てているのは千草だ。

本来はこんな状況に追い込むのではなく、もっと簡単に木乃香を攫える手筈を整えていた筈なのだが。

完全にサイとフェイトの二人の場を気にしない戦いによって目論見は外れてしまった。

「（どうします〜？　ギャラリーが増えてますけど〜？）」

「（えええい、新入りにあの小僧が面倒な事してくれやがってからに！　仕方ない、このまま行くで！！）」

ホッホッホッホッホ！！　其処の小僧、後ろのお嬢さんがウチ等の目的や！！　死にとうないなら下がるとき！！」

半ばヤケクソ気味に台詞を叫ぶ千草。

小太郎を使い捨てにするような外道で下種であっても関係ない人物を巻き込みたくないのだろう。

今の状況を劇だと認識させるように大声で叫びながら木乃香を指差した。

「えっ！？ ウチ・・・？」

「まさかあの女・・・お嬢様を劇に見立てて堂々と攫う心算か！？」

突然自分を指差されて意味の解らない木乃香は困惑し、首を傾げた。一方、この状況に自分達を巻き込ませた敵の意図が解った刹那は木乃香を護るように立つ。

その後ろには背を向けているエヴァ、その横でサイの方を見つめてパシャパシャ音を立てている茶々丸、別の方向を向いているながら横目で敵を見つめているザジが居る。

頼もしい親友とも言える人物達の姿を目線の端で捉えた後、サイは七魂剣を千草の方に向けてから叫んだ。

「舐めんな三下！！」

目の前で攫われそうになってる奴が居るってのに尻尾巻いて逃げる訳ねえだろうが！！

俺は逃げねえし、退かねえし、この手が届く範囲の奴を見捨てる心算もありはしねえ！！

それが俺の選んだ生き方だ、笑いたきゃ笑いやがれ！！」

そして自らの胸を親指で指差すと言い放つ！！

「此処こゝに宿る魂に、信念に、誇りに誓って                    テメエ等なんぞに

木乃香は指一本触れさせねえよ！！」

シネマ村に響き渡るサイの大声。

周りの人間など構いはしない・・・かつて戦友達が命を落とした時



貰いたいアル!!」

「うむうむ・・・流石は拙者の見込んだお方でござるな」

「フッフ、流石はサイだね・・・しかし本当にとんでもない人物を好きになったものだ、私も」

「（改めて考えるとサイ君で格好良いっすよね・・・はっ!? ダメダメツ!! 私は一応シスターだし、シスターもココネもサイ君の事を家族のように思ってるんすから・・・）」

「光明司くんって、あんなに熱い人やったんやな・・・」

「うん・・・荒っぽい乱暴そうな人に見えたけど・・・見直した」

「へえ、良いね良いね 今度修学旅行終わったらサイ君誘ってゲ―センにでも遊びにいこつかな」

更に刹那もまた、サイのその姿に見惚れていた。

堂々と、決して背を向けず、己の誇りを真っ直ぐ貫き通すその姿に

「（全くあの人は・・・どうして堂々とあ言った事を言えるんでしょうか・・・はっ!?）」

そして刹那は急にハツとする。

今は敵に、そして木乃香に向かって向けられた言葉だ。（恋愛感

情が含まれていないとしても）

という事は言われた本人は

慌てて木乃香の方を見る刹那。

すると其処には頬を真っ赤に染め、幸福そうな笑顔をする親友がいる。

その笑顔を刹那は見た瞬間・・・胸の奥に無性に痛みを感じた。

「（あんな、あんな笑顔で・・・）」

そうか、やはり・・・やはり、お嬢様は・・・サイさんの事を・・・」

木乃香がサイに向ける笑顔、それによつて気付いてしまった誰より大切な親友の気持ち。

そしてそれを知り、親友を応援したくても心がそれに反発して素直に応援する事の出来ない自分の気持ち・・・その鬨ぎ合いに刹那の胸の痛みは強くなった。

そして彼女も、木乃香も、他の者達も知らない・・・サイの想いを、痛みを、苦悩を。

知っているのはこの場にいるエヴァ、彼女と共に記憶を見てしまった茶々丸、そしてサイの目に“喪失”を見たさよに何故か彼の過去を教えられずとも知っていたザジぐらいだ。

例え木乃香が、刹那が、他の者達が己の想いに気付こうとも・・・サイの心には今でも存在している大切な人物がいる、戦友達がいる。そしてそれらを失った理由を『自らの罪』として背負い続けているサイにとつて、誰かを愛する事など出来ないと思っっているのだから。

その喪失感を、その想いの強さを彼女達が知るのもう少し後の事だ。

「・・・そろそろ演説は終わりと言う事で良いかな？」

「・・・テメエ、意外に律儀な野郎だな」

そんな言葉を掛けられて声のした方向を見るサイ。

そこには劇の真似事を始めた時から文句も言わず終わるまで不意打ちも掛けずに待っていたフェイトがいた。



・・・意外にこの少年、卑劣な事は仕事以外では好まないのだろう。

「別に君の為ではないさ・・・では、行くよ」

台詞が終わるや否や・・・瞬動にて一瞬でサイとの距離を詰めるフ  
エイト。

そのスピードは先程よりも上、どうやら本気でサイの事を厄介だと思  
い、潰しに掛かってきたようだ。

「チツ！！（早え！？ さっきの小太郎並・・・いや、それ以上の速度だ・・・！！）」

動物的な直感で咄嗟に身体を後ろに逸らす。

首があつた場所、その場所に凄まじい速度で風を切る音が耳に届いた・・・避けていなければ今頃、意識は一撃で刈られていたかもしれない。

まさに例えるなら斬光・・・普通の人間ではまず辿り着く事は出来ない領域の攻撃だ。

「ふむ、良く避けたね・・・」

一応、この身体で出せる全力で放った筈なんだけど」

「この身体・・・どう言う意味だ teme ！」

しかし、答えが還る事もなく二撃、三撃、四撃と連続で放たれる高  
速を超えた打撃。

紙一重で攻撃を避けながらもサイは反撃の機会を待つ。

「防戦一方では誰も護れないよ」

「チツ・・・舐めんなオラァ！！！」

右の一撃から繋ぐようにして回し蹴り、そして七魂剣による斬撃と

続けて放つ。

だが、それらの攻撃は空を切り・・・最後の斬撃が地に叩きつけられ、大地を抉った。

・・・周りの観客達は劇だと思っっているが、あまりのリアルな“殺し合い”の為か息を呑んでいる。

「君の一撃は認めるよ。」

驚異的といっても良い程に精錬されている所を垣間見れば、文字通り『血の滲む程の繰り返し』と『実戦という最高級の環境』の中で磨き続けて来ている事が良く解る。

「ただ・・・その一撃も当たらねば意味がない」

「がっ!?! チツ・・・テムエ・・・!!」

フェイトの拳がサイの頬を捉え、地に叩き付けられる。

サイの戦い方は古武術と剣術、更にその二つを組み合わせた変則的なスタイルをベースとした我流。

それらは確かに簡単に命を刈り取り、敵を沈黙させれるだろう・・・しかし、それは万全な状態であつてこそだ。

今は一応戦えるとは言え、麻帆良にいる時程ではない。

フェイトと戦う前に狂気の獣と化した小太郎と戦い、軽くない傷を身体に負っている。

更にその小太郎を助ける為とネギの治療の為に、元々少ない法力を使用して枯渴する寸前付近にまで追い込まれているのだ・・・言わばエヴァと互角クラスの相手に態々ハンデを背負って戦っていると同じ。

それは彼を見守っている刹那も良く解っていた。

・・・何故なら彼女は、自らの式神ちひせつなを通してサイがしていた無茶を

見ているのだから。

本当ならば助太刀に入りたい所だ・・・しかし、自分が動けば今は静観している天ヶ崎千草が間違ひなく介入してくるのは目に見えている。

現時点で戦えるのは刹那と茶々丸とザジ。

サキタ・マギカ

エヴァの場合は殆どの力が制御され、使えても魔法の射手の初歩程度（2〜3矢）だ。

しかし相手の場合は千草に月詠と幾多の鬼達に　最悪の場合、

観客を人質に取るような事さえもやってくる・・・自らの仲間禁術を掛けて使い捨てにするような輩なら当然選びそうな選択だ。

敢えて今それをやって来ないのは、フェイトが有利に見えるからだろう。

「（ペツ！）・・・クソが・・・」

殴られた際に歯が折れたのだろう・・・口から血の混ざった唾と歯を吐き捨てるサイ。

その姿を見て木乃香、そしてクラスの中でも常識人に数えられる夕映は目の前で起こっているのが劇だとはとても思えない　何故ならサイの怪我も、口から吐き出された血や歯も偽者だとは到底思えなかったからだ。

「（クソ・・・どうする？」

今のこの状態は悔しいが野郎の足元にも及ばねえ・・・かと言って此処で俺が諦める訳にもいかねえよ。

何とか上手くこの人の多い状況を利用して木乃香や刹那達が逃げてくれりゃあ良いんだが・・・それもこの状況じゃ無理に等しいな、下手したら逆に回りの人間を利用して攫われちまう）」

「何を余所見をしているのかな？」

腹に響く鈍い痛み　　フェイトの膝蹴りがサイの腹に深々と突き刺さっていた……。  
更に蹴りを放たれ、壁に叩き付けられる。

「クツ……思考の時間もねえってか、最悪だな」

ゆっくりと此方に向かって歩いてくるフェイトを目で捉えながらサイは策を練る。

時間も取れる方法も少ない　　こんな状況で出来る事、それは二つだ。

一つは諦める事……。

だが、諦めるという事は木乃香を敵にむざむざ渡すという事だ……胸の奥に眠る誇りに誓ってそれは出来ない。

となればもう一つの方だが……。

正直な話、その技術を思い出したのはほんの二日前だ。

今までその部分の記憶を失っていた己が、果たしてその力を使いこなす事が出来るのか？

しかしもう迷っている暇は無い、フェイトは既に攻撃が届く範囲まで近づいているのだから。

「……全く、ぶつつけ本番が多いな俺は」

そう独り言を呟きながら苦笑し、痺れる足に力を込めて立ち上がった。

サイが立ち上がるだろうと言う事を予測していたフェイトは、周囲から歓声や心配そうな声上がるのを無視して呟く。

「さて……まだやるかい？」

今の君では僕に敵わない事は理解出来ただろう？　これ以上の抵抗は無意味だと思うが」

冷静に、冷酷に・・・表情を変える事もしないまま呟くフエイト。  
そんな彼を見ながらサイは不敵に笑い、そして呟く。

「・・・無意味な事なんてこの世にねえよ。

生まれて来た事が無意味な奴も、無価値な奴もいやしねえ・・・人が生きてる間にする事で、後ろ指刺されないような事に意味の無い事なんてねえんだよ馬鹿が」

そう言うとサイは後方にいる千草に視線を向けた。

どうやら勝負が付きそうだと言う事で安心したのだろう・・・その表情には笑みが浮かんでいる。

・・・そんな彼女にも聞こえるような声でサイは再び言い放つ。

「覚えとけ、其処のクソ女。

無意味なモンも、無価値な存在もこの世にはねえんだよ。

生きる理由なんてのはな、んなもん生きてりゃ勝手に後ろから付いて来るモンだ・・・そんな事も知らねえで関西を率いるだ？ 寝言も大概にしゃがれ！！」

「な、ななな、何やおおお！！？」

は、ハン、口だけ立派で結局やられそうになってる癖に何を抜かしてるんや！？

それにウチが、痛みを知ってるウチが関西を率いた方が・・・平和ボケの長なんぞよりも有意義に出来るに決まってるやろうが！？」

怒鳴って言葉を返す千草。

『弱くて今にもやられそうなのだけの小僧が何を言っているのか』  
・・・そんな心境だろう。

それに彼女の言った『痛みを知っている』という言葉の意図は何だ

ろうか？

だが

「だから抜かすんじゃないやねえよ、この三下が！！

テメエの作るうとしてる世界は、小太郎だの刹那だの木乃香だのが利用されるだけの下らねえ世界じゃねえか！！

だったら、だったらそんな世界・・・小太郎や、小太郎と同じような連中が人間扱いされねえような世界なんぞ、俺が木っ端微塵にブチ壊してやるよ！！！！」

だがサイはそんな事などどうでも良い。

どんな理由があるうが、どんな苦悩があったろうがそんな事は関係ない・・・。

自分の仲間を捨て駒に使うような奴を許すような甘さは彼は持ち合わせていないのだから。

「チツ、減らず口を！！

もう良えわ、やってまえ新入り！！ そいつだけはウチの目の前で血祭りに上げる！！」

雇い主の命令を受け、フェイトは静かに目を細めながらサイの方を見る。

雇い主とは言え下種のような輩に命令されるのは気に食わない・・・が、それでも命令は命令だ。

小さく溜息のようなものを吐くと、ゆっくりと構える。

「さて・・・じゃあ再び演説は終わりにしようか。

僕としては殺す心算もないのだが、悪いが雇い主の命令でね。

それに何故だかは解らないが 君を生かしておくは僕達の“真

の目的”の邪魔にもなりそうだ。  
故に・・・君には此処で永遠に舞台から退場して貰おう」

そう言いながら近づくとフェイト。

確かに彼は強いが・・・手負いの状態では勝つ事など出来まい。  
親書、木乃香・・・二つの目的を得る為にはサイが居ては危険であるとフェイトは認識したのだ。

しかし・・・。

「・・・何故だい？」

ふと立ち止まるフェイト。

其処で彼が見たのは絶望に打ちひしがれる者の姿でも、憎しみに囚われている者の姿でもない・・・。

それは

「何故、この状況で君は・・・君は、笑っているんだ？」

そう、サイは笑っていた。

ぶつかつた時の衝撃や、元々受けている傷が原因か痛みにしめつ面をしているが・・・笑っているのだ。

・・・千草に向かって子供には見せられない、中指を立てたポーズを向けると呟く。

「・・・ありがとよ、クソ女。

テメエが下らねえ挑発に乗って、下らねえ事ぺらぺら吐いていたお陰で時間を稼げたぜ」

その瞬間 サイの身体から燃え上がるかのように炎のようなオーラが放たれた。

「なっ・・・これは？」

慌てて何かの攻撃かと居た場所から飛び退くフェイト。

彼が、千草が・・・他の者達が見つめるその中で、サイの身体から立ち上った炎のオーラが片手に集まっていく。

そのオーラが全て手の平に集まると 劫火の如く紅蓮の炎がてより立ち上り、そして消えた。

手の平に残っていたのはルビーのように真っ赤な宝珠。

たかが赤い玉が現れた程度だと誰もが肩透かしを受けるが・・・刹那やエヴァ、そしてサイの目の前に居たフェイトはそれを見た瞬間に表情が変わる。

「馬鹿な・・・何だ、あれは・・・？」

「データ計測不能・・・マスター、未知の巨大な力を感じます・・・」

「（目が痛い・・・これは一体？ サイさんの手のあの赤い玉が太陽のように光り輝いているのか？）」

「未知の力か・・・またもや魔法でも気でもない存在。

成る程、切り札はまだ完全には切っていないと言う事かな・・・？」

するとサイはゆっくりと構えを取る。

先ほどまでであった痛みや疲労がまるで嘘の様に力強く。

手の平に乗った赤い玉を見つめながら、静かに彼は心の中で呟く。

「（ロック・・・力を借りるぜ）」



そうして七魂剣を顔の前で構えると、フェイトに言い放った。

「覚悟しなフェイト・アーウェルンクス、そして其処のクソ女！！  
俺の戦友の魂を、誇りを、そして願いを受けついだ刃は重いぜ！！  
」

言い終わるとサイは唱える。

かつて共に行くと誓った戦友達の預けてくれた力を、魂そのものを  
己が法力と変換して戦う技法を使う為に。

「我が刃に宿りし英霊たちの魂よ

肉体は滅び、その魂は戦死者の国に召されようとも・・・それでも  
尚、我に絆を紡ぐ真の勇者達よ

時を越え、世界を超え、我が召喚に応じる永遠の朋友よ　いざ  
共に行かん！！」

言葉が終わると同時に赤き玉を七魂剣の刃に空いた孔へと装着し

天に轟くかのような怒号を上げて叫んだ！！

「バーストアップ  
覚醒鎧装

！！！！」

その言葉を最後に、強烈な光と熱気が周囲に放たれる。

あまりの光の眩しさに周囲の者達全員が目を瞑るのであった

### 第三十六話：戦友の魂（後書き）

投稿完了です。

またもや良い所で次回に続くことになってしまいました^^

まあ、とりあえず次辺りでこの木乃香護衛側のイベントも終わると  
思いますので次回をお待ちください。

では、また次までさようなら！

### 第三十七話：追憶の幻影

目を眩ませる程の圧倒的な光が放たれる中、殆どの者がその光の眩しさに目を背ける。

その中で光が放たれ、片目を瞑りながらも光の放たれている方向を見つめている者も何人が居た。

「（何と言う眩しさだ・・・だがこれは、私と戦った時に放たれた光と似ている・・・）」

一人は勿論、サイの親友であり、喧嘩仲間でもあり、気心の知れた相棒のような関係であるエヴァ。

放たれる光はかつて、己が全てに背を向けて生きていた頃にサイと決闘をした時に使った『魂獣解放』スピリッツバーストと似ている。

ただし、魂獣解放はサイの法力の保有量との関係で此处では使えない筈なのだが・・・。

「・・・・・・・・・・」

次はザジ・・・彼女の場合は眼を覆う事もなく、片目を瞑る事もなく唯見つめている。

まるで、今から何が起こるかを理解しているかのように・・・その表情を変えずに、何処となく優しげな目で。

そしてもう一人は

「（馬鹿な・・・そんな・・・何故だ・・・この気配は・・・この気配を僕は知っている・・・？）」

もう一人とは何を隠そう、サイの敵である筈のフェイトだ。今まで無表情だった筈のフェイトの表情が、サイの気配を感じて一瞬だけ変わる。

その目は何処となく悲しげであった

やがて光は収まり、天に立ち上る土煙も薄くなる。

その中には人影のようなシルエットが見えてきた・・・勿論、サイだろうが様子が今までと違う。

「待たせたな・・・」

土煙の中からゆっくりと前へと歩みを進めるサイ。

風が土煙を払い、ゆっくりと歩みを進めてきた少年の姿は明らかに今までとは違っていた。

「しっかし・・・久しぶりだ。

ロツクの力を初めて借りたのはどれ程ぶりだったかねえ・・・」

土煙の残滓を纏い出て来たサイは、今までのような白い狐を模した鎧を纏っているのではない。

全身に纏われる鎧は真紅に染まり、背には如来像の後光を模したかのような飾りが付き、胸の部分には鳥の顔を模した装飾が施されている。

更にサイが手に携える七魂剣に空いている孔には赤い宝玉がはめ込まれ、その横から赤い副刃のような物が現れていた。

そして更にサイの姿を見た千草は驚いた・・・何せサイの尾が、二本から三本に増えていたのだから。

「なあっ!?! し、尻尾が増えた・・・やと!?!」

ま、まさか・・・まさかアンタ・・・金毛九尾の血筋のモンか!?!

んな馬鹿な！？ 金毛九尾はとつくの昔の時代に調伏されて封印されとる筈やないんか！？」

千草が驚くも無理はない。

金毛九尾と言えばかつて描いたが『大江山の酒吞童子』に『怨霊伝説で有名な大天狗』と共に『日本三大妖怪』に数えられる存在であり、はるか昔の時代に多くの災厄を引き起こし、多くの犠牲者を出しながらも何とか封印された存在なのだ。その時代の陰陽師の子孫とも言える関西呪術協会に所属する千草が知らぬ筈もあるまい。。。

だが、今のサイにとっては千草の驚愕などどうでも良い。

そう。。。目の前にこの力を使ってでも退けなければならぬ相手がいるのだから。

まあ、いきなり光を放って次に出てきた時に姿が変わっていた事に通行人や見物客はもとい、木乃香達も驚いていたが。取り合えず美空やら刹那やらといったサイの事情を知っている者達が色々と理由をつけて説明した事により『あれはサイ君の早着替えだ』と納得したらしいが。。。

(ちなみに夕映と千雨は納得していなかったようだ)

「我が名は白面火炎武王サイ、朱雀が法力を得て新たなる覚醒をした者也！！」

さあ、続きと行こうぜフェイト・アーウェルックス！！」

「あ、ああ。。。そうしようか。。。

(知らない。。。そうだ、僕はあんな気配を知る筈がない。。。彼とは初めて会ったんだ、知る筈がないじゃないか。。。)」

そう言いつつサイは地を蹴る。

そのスピードは先ほどまでとは段違いだ・・・恐らくその速度はフェイトの瞬動より勝っているだろう。

「（・・・早い、先ほどまでとは雲泥の差だ）」  
今度はフェイトが驚き、何とか身体を捻らせて迫って来た刃を避ける。

しかし・・・その反動を利用して回転しながら、サイはフェイトに肘打ちを見舞う！！

「甘いよ・・・」  
だがフェイトはその肘打ちを倒れるように伏せながら避ける。  
そのまま片手を地に付き、独楽が回転するかのようにサイに足払いを放った。

「甘えのはテメエだ！！」  
するとサイは持っている七魂剣を地に突き刺しながら足払いをガードする。

そして徐にフェイトの服の首元を掴むと無造作にブン投げたのだ！！

「くっ！？ やるね・・・」  
地を陥没する程の衝撃で叩きつけられながらも何とか体勢を立て直すフェイト。

だが一息を吐いている暇など無い・・・早く立ち上がらねば、やられてしまうだろう。

しかし、サイは攻撃を仕掛ける事もなく立っていた。

「・・・どう言っ心算だい？」

「あん？ どう言っ心算も何もねえ・・・これはテメエと俺の喧嘩  
だろ？」

全力でぶつかり、全力でやりあい、全力で決着をつける。それが喧嘩ってモンだ。相手が倒れてる所を殴るのは喧嘩じゃねえよ、唯の暴力って奴だろ  
うが」

何とチャンスだというのにサイはフェイトが立ち上がるまで待つている。

その行為の意味を理解出来ないフェイトは立ち上がり、服に付いた埃を払い落としながら呟いた。

「・・・愚かだね。

今のチャンスを利用すれば君は僕を完全に倒せたかもしれないというのに・・・。

君の独り善がりのプライドで、周りの者達に危害がいたらどう責任を取る心算だい？」

それは当然の言葉だろう。

戦場でそのような事をしていたら少なくとも自分だけでなく周りにも迷惑が掛かる。

無駄を極力しないフェイトにとっては理解し難い事だ。

だが

「・・・抜かすんじゃないやねえよ馬鹿が。

テメエこそさつきから何だその腑抜けたザマはよ。テメエはさつきから何を他の事考えながら戦ってやがる。

余裕の心算か？ それとも・・・全力で戦えねえ理由でもあんのか、  
ああ？」

サイもまたフェイトが今までとは違う事に気付いた。

確かに攻撃のキレは良い……だが、何処となく上の空で攻撃を仕掛けていたように見えたのだ……。

黙り込む両者、流れる沈黙　　周囲で見ている者達も固唾を呑んで見守る。

どちらから第一声が響くか解らないこの状況で、全員が全員『劇』の次なる展開を待っていた。

すると不意に、フェイトが先に口を開く。

「……かつて君にした質問をもう一度させて貰えるかな？

君には裏に……裏の世界に精通した肉親などは居なかったか？

良く考えて答えて欲しい」

フェイトの言葉に顎に手を添えながら考えるサイ。

……しかし考えてもその“裏の世界”とやらに精通する者が思い当たりはしない。

まあ、元々サイはこの世界の人間ではないのだから当然の事なのだが。

「思い当たらねえな……。

それに最初にテメエとやり合った時に言った筈だ……あれに虚偽はねえよ」

だが、何故だろうか？

最初にフェイトと邂逅し、戦った時から妙な違和感のような物をずっと感じていた。

あの時は力を使えない事に苛立ち、荒れ、気にもしなかった事なのだが　　同じように感じた事が何度かある。



一度目は初めて明日菜を見た時だ。  
二度目は初めてネギを見た時・・・そして今回が三度目。  
一度の事は偶然かもしくは他人の空似かと思うだろうが・・・それが立て続けに二度も三度も起こればそれは偶然ではなく必然。  
しかし・・・必然だとしてもそれを思い出せない事がサイに疑問を浮かばせていた。

「そうか・・・そうだね。」

君の目を見ればそれが嘘ではない事は理解出来る　第一、その事に君が嘘について利点もない。

（だが、ならば何なんだ・・・僕のこの心に浮かぶモノは？　僕は人形だ・・・人間の言う心などと言うものは存在しない筈なのに・・・）

一方のフェイトもまた疑問を感じていた。

事情により此処ではまだ全てを説明出来ないが、フェイトは所謂“人間”ではない。

どちらかと言えば茶々丸に近い存在であり、主のある目的を果たす為に尽力するだけの駒なのだ。

故に彼は感情表現というものが殆どが排除されており、機械的に淡々と役目を果たす事しか頭にない。

・・・そう、頭にない筈なのだ。

なのに存在しない筈の“心”と言うものを感じるのは何故だ？  
痛みを感じる筈も無い、作られた肉体が・・・その中心が痛むのは何故だ？

答えを出そうとしても答えなど出る筈もないのだ。

「・・・まあ良い、今の僕にはそんな事など・・・どうでも良い事

だ

「同感だな・・・俺あ馬鹿だからよ、んな考えても答えが出ねえ事を考えた所で意味なんてねえぜ」

言つと笑つサイ、ゆっくりとサイに目を向けるフェイト。

そう　　そんな事などどうでも良いのだ。　　今彼等がするべき事は百の言葉を交し合う事ではない。

二つの拳で存分に語り合う事なのだから

「さあ・・・続きだ（といこうか）！！！！」

それぞれの拳がぶつかり合った瞬間、その場所から飛び退く二人。言葉など必要ない　　強者同士の戦いは拳を交える事こそが言葉の代わりなのだから。

それぞれの成すべき事、それぞれの主張、それぞれの選ぶ道・・・それを貫くには戦い、勝つしかない。

かつて誰かが言った

『この世に正義も悪も無い、あるのは勝者と敗者だけ』だと。

そう、正義も悪もこの世には存在しない　　言つならば、勝者こそが正義なのだ。

そして人は己の正義を貫く為に強くなる・・・サイは生きてきた過酷な運命の中でそれを誰よりも解っていた。

だからこそ力を得た。

だからこそ幾千、幾万の敵にも怯まずに戦い続けた。

己の独善的といわれるかもしれない、己自身の正義を貫く為にだ。

それはさておき  
閑話休題、場面をサイとフェイトの戦いに戻そう。

二人の戦いは先程よりも更に激しく、荒々しくなる　　見る者全てが興奮するかの如くに。

「オラオラオラオラア！！！」

斬撃、拳撃、脚撃・・・それら全てが入り混じるサイの攻撃。

機械のように正確に、狂獣のように荒々しくと言う二つの戦い方が入り混じっているというのに、フェイトは紙一重で全ての攻撃を避けている。

「フツ・・・」

逆にフェイトは沈着冷静に急所を狙って攻撃を仕掛ける。

しかも相手がどのように避けるかを想定し、その部分に（周囲にバシないように）石の槍を放ちながらだ。

無駄が無いその攻撃法・・・だが、サイは七魂剣や己の手に装着した六道拳を利用して時には打ち砕き、時には急所を護るようガードする。

まさに互角、何かによって均等が崩れるだけで決着が付くであろう危うい状態。

しかし周囲でサイとフェイトの戦いを見ている者達は殆どの者が同じ感想を戦い続ける二人に見た。

それは・・・まるで舞踏。

命を削り、魂をすり減らし続けている筈の戦い。

しかし・・・その中心で戦う二人の人物は、まるで踊っているかのように見えていた。

「ええい、こつち見ろや小僧！！！」

・・・だが、そんな舞踏の如き見る者を惹き付ける戦いは一人の人

物の声によつて邪魔されたのであつた。

「ああ？　邪魔すんじゃないやねえよこのクソ女が。  
折角、本気で楽しくなつてきたつてのによ……！？　チツ、下ら  
ねえマネで邪魔しやがつて……」

声と共に周囲から響く観客たちの驚愕の声と視線。

サイはその声に人々が見つめる方向……声のした方向を見る。  
すると其処に見えた光景は　　巨大な和弓を握り、今にも矢を発  
射する事が出来る様になつてゐる怪物と天ヶ崎千草が共に居る光景  
だ。

その矢が狙つてゐる先に存在する人物。  
それは刹那と木乃香の二人……どうやらサイとフェイトの戦いに  
魅入つてゐる時に狙いをつけたのだろう。  
近くに茶々丸やらエヴァやらザジも居るが……動けば矢を直ぐに  
でも放てるようにしてゐる状態では身動きが取れない。

「聞こえとるやろう、小僧！！」

この矢がびたりとお嬢様と神鳴流のヒヨッコ剣士を狙つとるんがな  
！！

お嬢様の身を案じとるんなら、手を出さんとき！！！！」

「チツ……クソが……」

しかし、現状に汚いも何もあるまい。

どのような手を使つても木乃香を攫おうとしている連中だ……  
一般人さえ平気で人質に取るだろう。

それを読めずに戦いに集中してしまっていたサイにも非はある。

そしてそれは木乃香を庇っていた刹那も同じだ。

絶対に護ると誓っておきながらむざむざと危険に晒させてしまったこの体たらく……。

日光を浴びて鈍く光り輝くあの矢がもし全力で放たれれば、例え身を挺して護った所で軽々と自分を貫通してしまうだろう。

まさに『万事休す』とはこのような状態の事を言う……。

「……申し訳ありません、お嬢様……」

己の無力さから吐いたその一言は空しく雲の無い空に吸い込まれる。刹那の頭の中は自責の念で一杯であった。だが、返って来た言葉は意外な物であった。

「大丈夫やて、せつちゃん」

「……えっ？」

その言葉に振り返ると……其処には木乃香の微笑んだ顔がある。

「サイ君が絶対に助けてくれるて

それにウチ……せつちゃんと一緒やもん、何も不安な事なんてあらへんよ」

その穏やかな笑顔を浮かべる表情に不安の色は一切無い。

信じているのだ、幼馴染で大事な親友である少女と初めて理解した自分の想い人である少年の事を。

「このちゃん……」

木乃香の言葉に愕然とした表情で、昔の呼び方で木乃香の名を呼ぶ

刹那。

しかしその時、偶然にも一陣の風が吹く。そしてその風は運命の悪戯か、木乃香を多少よろけさせてしまう。

つまり、木乃香は『動いて』しまったのだ。

それを敵対行動だと認識したのだろう。

巨大な和弓を構えていた悪魔が指を開き・・・それによって限界まで引き絞られていた弦が戻り、風を切る音と共に矢が発射されたのだ！！

「あああああ！？ 何で射つんや！？

お嬢様に死なれたら困るやろうがあああああ！？」

鋭利な鏃<sup>やじり</sup>はまるで迅雷の如く速度で木乃香に迫る。

人体など簡単に貫かれてしまうだろう・・・だがそれでも刹那は少しでも自分の身を挺して木乃香を護ろうとした。

迫る命を奪うであろう矢・・・その引き起こす避けられぬ運命に、せめて彼女は木乃香だけでも助かれば良いと思いい目を閉じる。

そして静寂と共に矢が突き刺さる音が刹那の耳に響いた

だが・・・痛みはいつまで経ってもやってこない。

先ほどの鈍い音は何か矢が突き刺さった音だ・・・ならば外れたのだろうか？

恐る恐る目を開け、刹那は歪む目線が落ち着くのを待つ。

ぼやけていた視線が確り見えるようになったその時

何故、刹那が・・・そして木乃香が傷一つ負わず無事だったのか、その理由を彼女は理解した。

「チツ・・・馬鹿野郎が・・・」

前に言っただろつが、誰かを護って死ぬなんてのは自己満足に過ぎねえつてよ・・・覚えとけこの馬鹿娘・・・」

そう・・・其処にあったのは赤き鎧を纏う漢の背中。

人体を簡単に貫く程の矢も、纏った鎧のお陰で肩を貫通して止まっていた。

「・・・えっ？」

頬に掛かる熱い何か、それが目の前に立っている漢の傷口から噴出したものだど気付くのに時間を要す。

呆けたような言葉を呟いた二人の目の前に立っていた人物・・・それはサイだ。

「・・・随分と舐めた真似してくるじゃねえか。」

つて　もう居ねえか、全く逃げ足の速い連中だなオイ・・・」

そう呟くと、何を思ったのかサイは突き刺さった矢を掴む。

そして強引に引き抜くと投げ捨て、代わりに・・・燃え盛る自らの愛刀の刃を傷口に押し当てたのだ。

「ぐっ・・・があああああ！！？」

「さ、サイ！？　馬鹿、何をやってるんだお前は！？」

エヴァの制止などお構いなしに傷口に焼けた刃を押し当て続ける。

『ジュウウウ』と言う肉が焼ける音と共に傷口が焼け爛れ・・・流れていた血も止まり、傷口も塞がった。

・・・そうして元の半裸の姿に戻ると、スベリットトローブ魂衣の布切れを利用して作り出したサラシのような布を肩に巻く。

「・・・これで、良い。」

医者探してる暇もねえからな・・・取り敢えずの応急処置だ」

・・・確かに応急処置かもしれないが、強引過ぎる方法だ。

見ていた刹那も木乃香も・・・そう言った応急処置の方法も知って  
いるエヴァさえも絶句していた。

サイの行動を見ていた少女たちも絶句するか、それとも気を失うか  
どちらか・・・あまりにも手馴れている事から、サイはいつもこう  
やって大怪我をした時は治療していたのだろう。

たとえ自己再生の力を持つているにしても・・・正気の沙汰ではな  
い。

言い終わるとヨロヨロと歩き出すサイ。

エヴァを含め、殆どの者達はその姿を見つめている事しか出来な  
かった・・・。

「悪いな・・・待たせた。 さあ、続きと行こうぜ・・・」

サイが歩いて来た所の先に居たのはフェイトだ。

先ほど刹那と木乃香を助けに行こうとした時・・・フェイトはサイ  
が背を向けていたと言うのに決して何も手を出さなかった。

そして今、到着した半死のサイを見つめながら小さく呟く。

「律儀な人物だね君は・・・戦闘中に傷を負っても戦いに来るとは

・・・」

「ハッ・・・テメエも随分律儀じゃねえか、無防備に背を向けてた  
のに攻撃してこねえしよ・・・」



弱々しく呟くと構えを取るサイ。

だが、サイのその姿を見てフェイトは小さく首を横に振る。

・・・その意図を理解したサイが構えを解くと、フェイトは無表情のままに言葉を紡ぐ。

「前は僕が勝っていたが、今回は君の勝ちだ。

その傷では満足に戦う事も出来ないだろうし、その傷の原因となつたのは言うなれば僕の落ち度とも言える。

・・・ならばどうだろう？ この戦いは仕切り直しとして、次の戦いで決着というのは？」

意外な答え・・・だが、武人らしくお互いのハンデが無い状態で戦う条件にサイは言葉を返す。

「・・・上等だ。

じゃあ前はテメエが先に退いたからな・・・今回は俺が先に退くとするぜ。

その代わり次は・・・最後の最後までやり合おうや」

「良いだろう、光明司斉。

次はお互い、どちらかが倒れ伏すまで戦おう・・・」

言葉が終わると背を向けて歩き出すサイ。

その背中を見つめていたフェイトは、見えなくなったのを確認すると小さく溜息を吐く。

これ程までに厄介で、これ程までに無い筈の感情を高ぶらせ、これ程までに存在しない筈の心を揺さぶる存在など会った事は無い。

無言でサイの居なくなつた場所を見つめ続けていたフェイトだが・・・  
一人呟く。

「光明司斉・・・僕の記憶には無い筈の男。  
しかしこれ程までに感じる感情は一体何なんだ・・・解らない。  
だが少なくとも・・・面倒な相手だという事だけは良く理解出来た  
よ・・・」

三度目の戦い・・・いや決着を約束した相手を思い返すフェイト。  
やがてそれに飽きたのか　　ゆっくりと人気の無い路地裏の方へ  
と消えて行った。

一方、エヴァ達と合流したサイはというと・・・。

「この大馬鹿者が！！　　どうしてお前はいつもああ言った無茶ばかり  
りするんだ！？

大事無かったから良かったものの、あんな事を目の前でされたら見  
ている者がどれだけ心配すると思っっている！？」

「そうですサイさん・・・。

サイさんに矢が刺さった時、それを強引に抜いて傷を治した時・・・  
どのような気持ちで私たちが居たかお分かりになられますか？」

「・・・・・・・・！！（怒）」（ペシペシ・・・）

「何やってるんですか、サイさん！？

私に『誰かを護って死ぬなんて自己満足に過ぎない』とか言っただ  
のに、自分はどうなんですか！？」

「そうやそうや！！

しかも自分で自分を傷付けるような事して・・・ウチあの時、本っ  
当に怖かったんやで！？

幾らお芝居やからってやって良い事と悪い事があるん解ってる!？」

「・・・あゝ、ハイハイ。

悪かった、悪かったからもういい加減に解放してくれつつの・・・  
こっちは疲れてるんだつつに・・・」

延々と説教とも愚痴とも取れないような言葉の羅列をステレオで聞かされていた。

まあ・・・あれほど無茶をするのだから、これだけ怒られても仕方ないような気もするが。

(一名は無言のままブチ切れていたが・・・)

この後も約30分以上長々と説教をされた後にようやく解放されたサイ。

その三十分は大分きつかったようだ・・・解放された時、サイはげっそりとしていた。

そして興奮冷めやらないギャラリを見回しながらコーヒを買ってきて一息吐く。

・・・と、其処へ言う事を言ったらすつきりしたのか、刹那が歩いてくる。

そんな彼女へサイはコーヒを飲みながら呟く。

「さて・・・此処からどうする、刹那？」

俺の所為とは言え、流石に目立ち過ぎた  
此処に居続ける事に  
利は無いと思うぞ」

「そうですね・・・それに敵が多いです。

正直な話、このままでは拙いでしょう・・・仕方がありません、明

日菜さん達と合流しましょう」

明日菜達と合流する・・・その言葉の意味。

それを理解出来ているサイは小さく頷いた　　本当なら刹那は木乃香に知って欲しくは無いだろうし、サイも非戦闘人物を巻き込みたくは無い。

しかし・・・状況的にはそれしか方法が無いのも事実だ。

「なら向かうかね・・・気は進まねえが」

「私たちも行つても別に構わんな、桜咲刹那よ？」

「はい。お嬢様、これからお嬢様のご実家へ参りましょう・・・明日菜さん達と合流します」

「ん？ ほえ・・・？ なあなあ、ウチ何がなにやらさっぱり何やけど・・・？」

話について来れない木乃香を刹那が抱き上げると、目的地に向かって走り出す。

エヴァや茶々丸、ザジの走る横で走るサイ・・・その脳裏には少しだけ前に言っていた天ヶ崎千草の言葉の意味を思い浮かべていた。

「（『痛みを知っている』・・・か。

ありゃ、その痛みが原因で歪んじまったタイプだろうな。

だがどんな理由があるうが、何だろうが、テメエのつまらねえ目的の為に仲間を使い捨てにする野郎に同情なんてもんは湧かねえよ・・・次は本気で目的ごと潰してやるから待ってる」

そう心にサイは誓い、明日菜とネギの待つ合流地点に向かって走り続けるのであった・・・。

### 第三十七話：追憶の幻影（後書き）

投稿完了です。

やれやれ・・・これで遂に残すは決戦のみとなりました。

いやはや・・・ストーリー的に無理なく書くって大変ですねえ・・・。

ちなみに本来なら矢で貫かれた際には木乃香が治す此処のシーン。  
何故あそこで木乃香を覚醒させなかったかという・・・ぶっちや  
け次への為と、サイは強力な無効化能力持ってますからね。  
要は覚醒させてもサイを治せないんですよ。

さて・・・ではそろそろ次回へと続きます。

あと約3〜4話ほどで京都編も終わりを告げます・・・どうぞお待ち  
ください^^

### 第三十八話：先に行くもの、後を追うもの

「そうなんだ、お兄ちゃん・・・シネマ村でそんな事が・・・」

シネマ村の乱闘騒ぎから30分ほど後、サイ達は先に関西呪術協会の近くで待っていたネギ&明日菜と合流していた。(ちなみにちびせつなはシネマ村で乱闘が始まった際に紙に戻ったらしい)

「・・・まあな。」

悪かったな、テメエ等に黙って行ってよ　　だが、少なくとも連中の目的が親書と木乃香である限りは一緒に行ったら拙いと思ったからよ」

サイはその背に眠っている小太郎を背負っている。

今までは明日菜が背負っていたようだが・・・確かに馬鹿力を持つ人物だとしても明日菜は女子だ。

こういった際には男が背負った方が体力もあるし都合も良いだろう。・・・まあ、少しだけ歩き難い状態となっているのだが。

「・・・全くアンタは。」

エヴァちゃんに聞いた話じゃまた大立ち回りして馬鹿やって、しかも自分で自分を傷付けてたとか聞いたわよ？　アンタ本当に大馬鹿よ大馬鹿、そうやって傷ついたら心配する人がいるって何で考えないのよ？

現にアンタの腕にくっ付いてるのを見れば解るでしょ？」

そう・・・歩き難いと言う原因はサイの腕に抱き付いているネギにあった。

最初の合流した時、サイ自身は起こった事や事情を掻い摘んで説明

しようとしたのだが　それよりも先にエヴァが起こった事全て（無茶な応急処置の方法も）をネギと明日菜に話してしまったのだ。それにより明日菜はパニックになってキレルわ、ネギは泣き出して抱きついて離れないわ散々な状況となってしまうたのである。

「あゝ、頼むからもう説教は止してくれ。

此処に来る前に延々と囲まれてステレオの如く愚痴と文句言われ過ぎて耳痛えんでよ・・・」

「だったらまず、説教されるような行動は慎みなさいよ・・・。  
（ボソツ）・・・全く、心配掛けんじゃないわよバカサイ」

サイの耳を以つてすれば明日菜の小声も聞こえなくも無い。

だが、敢えてサイは聞こえないフリをした・・・無愛想で失礼な人物でも、そういった部分には気を回せるらしい。  
それを知ってか知らずか、明日菜は話題を変える。

「それにしても長い階段よねえ刹那さん・・・一体どの位あるの、  
此処の石段つて？」

「その、良くは解りません・・・改めて数えた事も無いですから・・・  
ごめんなさい」

「ウチも良く知らんねん、何せこの辺に来るの久しぶりやし・・・」

そんな世間話のような事をしながら石段を登り続ける明日菜達。

しかし・・・不意に今の光景に疑問を思っていたサイが後ろを見ながら口を開く。

「所で一つ気になつてる事があるんだが良いか？」

「奇遇だなサイ、私も疑問になつていた事がある」

「あつ、それ私もよ・・・」

「私もです・・・」  
「ボクも疑問に思ってた事があるんだ・・・」

サイと同じように後ろを振り向きながらエヴァに明日菜に刹那にネギが口々に呟く。

そして其処に見えている光景を垣間見て、全員が声を揃えて言葉を吐いた。

「……何であんた達（テメエ等）が此処に居るのよ（居んだよ）  
！！？」「」「」

「いや、実は桜咲さんのカバンにGPS付き携帯を仕込んでおいてね。

ほら、さっきの劇で演出とは言えサイ君大怪我してたじゃん、それをのどかと夕映が心配しててさ。

そんなに怒らない怒らない　メンゴ、メンゴ」

反省してるんだかしてないんだか解らないような態度でパルが答えを返す。

本来ならばサイにネギ、明日菜に刹那と木乃香、それとエヴァに茶々丸にザジの8人で来る筈であった。

だが元々大所帯だった上に其処にサイの事を心配してパルが機転を利かせた事により、のどかと夕映とパルまで来た為・・・計11人にもなってしまう。

こればかりはサイも予想は出来なかったのだ、大きな溜息を吐きながら“ヤレヤレ”とジェスチャーで今の心境を表した。

「ああああ、もう！？　何でまあこうウチのクラスは好奇心旺盛なのが多いのかな本当に！？」

「へっ、何怒ってんの明日菜？　あ、見てみて、あれが入り口じゃ



ない？」

「へ・・・へううう・・・な、何だか雰囲気がありますね」

「中々良いですね、風情があります」

ブチ切れる明日菜・・・君の気持ちは解らんでもないが諦める、3

- Aの連中は大体がそう言う感じだ。

パル達が見つけたのは歴史の深さを感じさせる寺院の門だ　多  
くの歴史を積み重ねを容易に感じさせるその門構えは、見る者達に  
独特の威圧感と威厳のような物を感じさせるには充分過ぎる。

「よし、んじゃレッツゴー!!」

「ああああ!?!　ちょ、ちよつと皆待ちなさいってば!!　其処は  
敵の・・・」

パルの掛け声を皮切りに少女達は門に向かって走っていった。

その後ろを慌てて明日菜とネギが追いかける　　言うなれば彼女  
達の認識では此処は“敵の本拠地”なのだ、どんな危険が待ってい  
るかも解らないのだから。

しかし・・・逆に刹那と木乃香は照れ臭そうな困って苦笑したよう  
な表情を見せている。

更にその後ろで小太郎を背負うサイは学園長から事情を聞かされて  
いたので此処が何なのか知っていたし、エヴァは昔馴染が居る場  
所故に問題ない、茶々丸とザジは無表情な為か何を考えているのか  
わからない。

「・・・つたく、元気だねえ。　若い証拠かね全く。

そもそもそんなに慌てる必要も無いってのに・・・まあ、聞いちゃ  
いねえか・・・」

「オイオイ、老け込むにはまだ早いのではないのか？」

それにお前はジジイから必要な事は聞いていただろうが、坊やと神楽坂明日菜は何も聞かされていないんだ　　慌てるのも当然だろう？」

「あつ、サイさんは学園長からお聞きになられていたのですか・・・では早く参りましょう」

三人はそんな会話をしながら門を潜る。

その先に見えたもの、それは・・・吹雪のように舞い散る見事な桜並木。

そして、大勢の巫女姿の女性に囲まれて目を白黒させているネギと明日菜の姿であった。

「あつ、せ、刹那さん・・・これって一体どういう・・・？」

後ろからのんびり歩いてきた刹那達やサイ達を視線に捉えた明日菜は疑問を口にする。

それに対して刹那は明日菜が予想していなかった答えを返した・・・。

「は、はい、黙っていて申し訳ありません。

実は此処は関西呪術協会の総本山であるのと同時に・・・木乃香お嬢様のご実家でもあるのです」

刹那の説明に初めて聞いた事により驚きを隠せない明日菜達。

一方の木乃香の方は自分の実家を今まで黙っていた事を少し恥ずかしそうにはにかんだような笑顔を浮かべていた。

「やれやれ・・・また見事な景色だなこりゃ」

一人総本山から見える桜並木と美しい夜景を見ているサイ・・・。  
本殿に通された後、ネギ達は関西呪術協会の長にして木乃香の父親  
である近衛詠春と対面した。

そこでネギは学園長から託された親書を差し出し、長もまたそれを  
受け取った事で無事に任務を成功させる。(ちなみに封の中には親  
書と共に学園長の手書きの似顔絵と叱咤する文の書かれたものも入  
っていたそうだ)

そして長の懇意で今夜は総本山へと泊まる事となり・・・現在は回  
りに住宅があれば間違はなく近所迷惑になる程のドンチャン騒ぎに  
興じていた。

「ったく、五月蠅えな・・・。」

ありや確実に酒でも混じってるな ヤレヤレ、こういう時にも  
酔えねえ自分の体質を呪うぜ本当に」

無礼講とばかりにはしゃぐ少女達とは別にサイは元々興味が無い為、  
少々付き合った後に直ぐに外に出た。

元々盛り上がるなどというタイプではなく、更に考えても見れば得  
体の知れないような人物が東西の親和の場に居るのも相応しくは無  
いだろう。

・・・エヴァ達(エヴァ、茶々丸、ザジ)もそう考えたのか、少し  
だけ料理やら酒やらを飲むと宴会の場から姿を消したらしい  
大方、そこらの桜でも見物しているのだ。

「サイ君・・・もしかして、口に合わなんだ？」

ふとそんな声が後ろからした為か振り向く。

其処には綺麗な花の模様の入った着物を着ている木乃香が心配そうな表情で立っていた。

「ああ？ 別にそんなんじゃないよ……メシも旨かったしな。唯俺は賑やかな雰囲気苦手だな、静かに夜景見てる方が性に合ってる。

それにまあ他にも理由はあるが……」

他の理由というのは小太郎の事だ。

一応総本山に入った際に長に事情を説明して、長の信頼する治療師ヒーラーに預けたが……。

何しろ禁術によって精神を蝕まれ、肉体を蝕まれていたのだ……元通りの生活が出来る確率は半々、激しい運動やら何やらが出来るようになる確立は30%を下回るとさえ言われていた。

……それ程に少女の受けてきた苦痛は酷い物だったのだ。

「サイ君……あんな、あの……その……シネマ村の事やけど……」

ふと木乃香が小さい声で話しかけてくる。

いつもののんびりしながらも言いたい事ははっきり言う木乃香、しかし今回はやけにモジモジとしていた。

その理由をサイが知る筈も無いのだが

「あん時な……ウ、ウチの事を護ってくれらって言ったやんか。……あれな、凄く……凄く嬉しかったえ……」

「……大した事じゃねえよ。

それにガキは大人に頼るのが仕事、大人はガキを護るのが仕事……そんなだけのこった。

別に感謝される必要もねえし、当然の事を言っただけだ」

・・・お前、精神は大人でも外見はガキだけどな。

だがそんなあべこべな事を言っている筈なのに、何故か納得出来てしまふ木乃香。

頬を赤らめながら更にモジモジし、そして答えを返す。

「良えねん、あれが劇でもサイ君にとって当然の事でも！ 本当に・・・本当にありがとうな、サイ君」

「だから礼はいらねえって・・・まあ良いや、どういたしまして木乃香」

そうサイが言うのと木乃香は嬉しそうに微笑み、そして手を振って宴会に戻っていく。

その後姿を少しの間見つめた後・・・サイは再び夜景の方に目を向けた。

一方、サイと木乃香の会話を遠くで見つめていた者達が居た。

それは先ほどまでネギと刹那と話をしていた関西呪術協会の長、詠春だ。

「（何故でしょう・・・彼を見ていると、誰かに似ているような気がしてならないのですが・・・）」

思えば最初にサイと顔を合わせた時からそうだった。

見た瞬間・・・会った事も無い筈の人物の筈なのに、何故だか懐かしく感じたのだ。

・・・雰囲気は何処と無く、誰かに似ているような気がしたが。

「ネギ君・・・彼は魔法使いなのですか？」

この疑問が出るのも当然といえば当然の事  
衛など頼まれないだろう。

普通、一般人が護

しかし説明が難しいのかネギは少しだけ考えるような仕草をとると  
・・・考えて答えた。

「うーん、解りません」

「・・・解らない、ですか？」

考えても見ればサイは魔法使いでも呪術師でもない。

剣士かといえば剣士に一番近いのだろうが・・・近接戦闘武術に長  
けているかと思えば魔法のような力で傷を治したり、武器を召喚し  
たり、鎧を纏ったりと何でもござれだ。

故にサイの存在が何なのかを言い表すとすれば・・・“解らない”  
以外に答えは無いのである。

「でも一つだけ解る事はありますよ、長さん」

「・・・？ 何ですか、解る事とは？」

聞き返す詠春に対し、ネギは胸を張って答える。

「お兄ちゃんの事をボクはまだ良く知りません。

でも一つだけ解る事があるとすれば・・・お兄ちゃんは口が悪くて  
キツイ事を言うけど、それは信じてくれているから言っんです。

それにお兄ちゃんは絶対に約束を破らない  
格好良い人です！

「！」

ネギの答えに笑みを浮かべる詠春。

この少年は信じ、そして正体が解らない人物にせよ慕っているのだ。  
誰かに此処まで慕われる相手に悪人は居ない・・・彼が生きてきた

人生はエヴァなどに比べれば明らかに短いが、それでもその位の手は理解していた。

・・・と、そこで・・・。

「（ああ、そうか・・・彼が誰かに似ているという理由がやっと解った）」

詠春はサイの面影に誰を感じていたのかやっとな理解した。

そう・・・誰でもない、サイは詠春の戦友にして魔法界の英雄と呼ばれた男に良く似ているのだ。

無茶苦茶で無謀、それでありながら自分の信じた道を貫き通して英雄と呼ばれるようになったあの男に・・・。

まあ、実際は魔法界の英雄と呼ばれた人物が、かつて救われた相手に憧れて居た事を知る者は殆ど居ないが。

そしてもう一つ・・・。

「（そう言えば先ほどエヴァンジェリンが言っていましたか・・・。木乃香や刹那君がああサイ君に惹かれているというのは・・・本当なんでしょうか・・・？）」

それを知るのは本人のみという奴だろう。

宴もたけなわ、宴会も終わり静かになった総本山の本殿。

しかしサイは休む事も気を抜く事も無く、壁に寄りかかって周囲を警戒していた。

親書は既に長の手に入った・・・もうこれ以上気を張る必要は無い

筈だが。

「(さて・・・連中はどう出る?)

流石に総本山に正面切って乗り込んで来るような愚考は起こさねえだろうが・・・)」

しかし此処で諦めるなら始めから木乃香の誘拐など画策しないだろう。

全てが終わるまでは決して気を抜けない・・・それはかつて居た世界で起こった大戦争によつて嫌と言うほどに教え込まれた教訓だ。

その時・・・不意に後ろから声が掛けられた。

「おや、この様な場所にいらつしやつたのですか。

ゆっくりと休めるように部屋を用意しましたが、もぬけの殻でしたので・・・)」

掛けられた声に後ろを振り向くと、其処には詠春が居た。

その顔を一瞬だけ見ると直ぐに視線を戻すサイ　　本当に誰に対しても態度は変えないらしい。

他の方向を向いたままサイは口を開く。

「俺に用か長さんよ?」

「いえ、こうやってゆっくりと話す機会がありませんでしたので・・・  
・お邪魔でなければ横、宜しいですか?」

サイは何も答えない。

だが、人が一人入れるように場所を移動した事を見れば・・・『好きにしる』という意味表示と言う事だろう。

ゆっくりと横に座り込む詠春　　其処から何も語られる事無く、



沈黙が暫く続いた。

と、そこで詠春が頭を下げながら先に口を開く。

「ありがとうございます

刹那君から聞きました・・・己の身を呈して木乃香と刹那君を護つてくれたと。

君が居なければ今頃、刹那君は重傷を負い・・・木乃香はそれにシヨックを受けていたと思いますから」

それに対してサイは

「頭上げるよ、木乃香の親父さん。

全く親子揃って律儀というか何と言うか・・・俺は別に礼を貰いたくて護つた訳じゃねえよ。

テメエが勝手にやって、勝手に傷付いたってだけの話だ

話しかけてみて詠春は自分の考えていた事が正しいと理解した。

確かにこの少年は魔法界の英雄、ナギ・スプリングフィールドにそっくりだ。

損得など関係なく、自分がやりたいようにやり・・・結果それが誰かの助けになる。

謝礼や名声などという俗な理由の為ではない、唯己が気に入らないからという理由で戦う真っ直ぐ過ぎる漢　　言つなれば自由な風のような存在と言えるだろう。

そんなサイを見て、何故刹那やらエヴァやらが変わる事が出来たのかを詠春は納得する。

「成る程、良く解りました・・・。

サイ君でしたかね？　君は今まで色々な事があつたみたいですね・・・木乃香の事だけではなく、ネギ君の事や刹那君の事、それにエヴァ

ンジェリンの事と・・・」

一度だけ月の顔を見せた夜空を見上げる詠春。

「ネギ君が君の事をとても慕っているのが良く解ります。

刹那君には元々境遇上色々な問題があり、木乃香以外には殆ど心を閉ざしていましたが・・・依然見たときよりも表情が穏やかになっていました。

更にエヴァンジェリンもそうです・・・彼女はサウザンドマスターの事もあつて危ういと思つていましたが・・・まさかあれ程に面倒見が良く、優しい表情を見せているとは思いませんでしたから」

詠春の言いたい事が解つたのだろう。

サイは首を横にゆつくりと振つた後に静かに呟く。

「俺は何もしてねえよ、木乃香の親父さん。

刹那の奴に俺がした事と言えば、アイツの秘密を訳知り顔で語つて後悔しねえ様にと諭しただけさ。

キティの事だつてそうだ・・・唯アイツの境遇を理解は出来ねえが、気持ちは解るつてだけの事だ。

そつから変れたのはあいつ等の努力の結果、ただそんだけさ」

ふと其処まで語つた後にサイは詠春に問う。

「・・・そう言えばあれから小太郎の様子は？

預けた後から大分時間が経つたから　そろそろ何かしらの進展があつたんじゃ？」

礼儀知らずで口が悪い・・・だが、その奥底には優しさを持つ。

サイとすれば気になるのは当然だろう、出来れば不具が無く生活出

来るのが理想だが。

その言葉に対して詠春は小さく微笑むと答える。

「ああ、それを真つ先に話すべきでしたね。

ええ、小太郎君は大丈夫です　禁術によつてかなりの深刻なダメージを身体中に受けていましたし、精神的なものも酷い仕打ちを受けていたのでしょうか・・・意識が無いのになされていました。ですが傷の方は治癒術で塞ぎましたし、精神の方も少しだけ苦しんでいましたが直ぐに穏やかな物になりました　直ぐに元気に動ける程ではありませんが、身体的にも精神的にも不具は残りません・・・唯、あまりにも酷い全身の傷は多過ぎるが故に完全には消せませんでした」

「・・・そう、か。

良かった、アイツとも約束したからな　その約束を果たせねえ  
ままクタバられても敵わねえしよ」

安堵したような表情を浮かべるサイ。

本来なら小太郎は人と狗族のハーフだ、人とは違うのだから奇異の目で見える者が多い。

だがサイにとつては何と何のハーフだろうが関係ない・・・そんな小さい事などハナから気にしない漢なのだから。

そんな表情を見ながら再び詠春が口を開く。

「サイ君・・・君は自由な人ですね。

ああいや、別に貶している訳ではありませんよ？

ですが君は魔法使いであろうが呪術師であろうが人外であろうが何であろうがその枠組みに囚われる事が無い　口で言うのは簡単ですが、何よりも態度で表す事が難しい事を君は普通にしている。

刹那君やエヴァンジェリンが変れたのも、君のその『本当の優しさ』

に触れられたからでしょう。

・・・本当に君は私の親友であったサウザンドマスターに良く似ています」

「さっざんどもすた〜？

ああ、確かネギの親父だったか？ キティの奴に少しだけ聞いた事がある。

魔法界の英雄とか呼ばれてるのにバカで喧嘩っ早い単細胞、だけど魔力だけは底抜けで、どんな時でも明るい前向きな奴でそれで多くの奴に慕われてたとか言ってたな・・・まあ確かに俺もバカだけだよ、それ以外の所なんて全く似てねえよ」

全く隠す気もないストレートな言い方に一瞬目が点になる詠春。

しかし、次第に口を押さえながら笑い出す・・・こんなに笑ったのは久しぶりだ。

「ふふふ・・・ええ、そうです。

バカで何も考えてなくて喧嘩っ早い・・・だけどそんな飾らない生き方が誰よりも慕われた理由でしょうね。

ですが・・・結果的に魔法界の英雄となって多くの者達に慕われる存在となった事が逆に様々な事態を起こしてしまった事もまた事実なのです」

そう呟くと詠春は悲しげな表情をする。

確かにネギの父親であるナギは英雄だ  
それは紛れも無い事実  
である。

だがそれは“戦争”と言う現実の上で生まれたものだと言う事を忘れてはならない・・・。

戦争に正義も、ましてや悪もない。

己たちの主義・主張がぶつかり、結果的に多くの犠牲者を出し・・・勝った方こそが正義となる。故に戦争で英雄となると言う事・・・それは慕う者と同じ位の数の憎む者を生み出し、その憎悪がまた新たな戦いを生む。

負の感情が新たな負を生み 負の連鎖が永遠に、永劫に続く。  
憎しみが新たな憎しみを生み、それが結果的に小さな小競り合いから国をも揺るがす大戦おおいくちとなる。

恨みから人は人を殺し、その殺された者の近しい者が新たな恨みを抱く・・・決して終わらない憎悪の螺旋、それが戦争であると同時に英雄と呼ばれる者が背負わねばならない“業”。

結局、極論で言うなれば戦争の英雄などと言うのは『どれだけ人を殺したか』と言う事に過ぎないのだ。

・・・それを語られたサイこそ、誰よりも知っている事である。

「今回の天ヶ崎千草が中心となった行動も、負の連鎖が生み出してしまった事例です。

彼女は今から20年前に起こった戦争で西洋魔術師によって両親を失いました・・・それが彼女自身を歪めてしまったのでしよう、それに西洋魔術師に蟠わたかまりを持っているのは彼女だけではありませんしね」

つまりは復讐心と言う負の連鎖の頂点に立つ存在が天ヶ崎千草と言う女性を変えてしまったのだ。

実にいたたまれない、そして救われない話だ だが、サイは無表情のまま言う。

「だからって何やっても許される訳じゃねえだろ。

あのクソ女はテメエの目的の為なら小太郎が傷付こうが死のうが関

係ねえらしいからな。

・・・俺はそう言う、テメエの孤独を言い訳にして人の事を何も考えねえクソ野郎が一番嫌いだ」

『それに・・・』とサイは続きを何か言おうとしたが黙りこむ。

何故黙り込んだのか　それは、此方に近づいてくる不振な気配を感じ取ったからであった・・・。

「オイ、そこで盗み聞きしてる奴・・・さっさと出て来い」

サイの台詞と共にそこから出て来た人物は予想だにしない人物。

本来なら周囲に張つてある結界が関係し、決して忍び込む事など出来ない筈の人物だ・・・。

「やはり気付かれたか、光明司育。

だが残念だけど僕達が少し前に入り込んだ事には気付けなかったみたいだね・・・お嬢様は既に頂いたよ」

其処に居たのは　白髪の少年。

無表情で無感情で見る度に人形を思わせる中性的な容姿を持った・・・天ヶ崎千草に雇われている西洋魔術師、フェイト・アーウェルンクスだ・・・。

「なっ！？　馬鹿な・・・本山の結界に引つかからなかったのか！？」

詠春がフェイトが居る事を見て、そして言った事を聞いて驚愕の声を上げた。

本来ならば関西呪術協会の総本山には侵入者対策の為の結果が張つてある・・・それに感知されずに通り抜けるなど、本殿に招かれた者以外は不可能な筈だ。

だがサイは忌々しそくに遠くの空を睨む。

「チツ・・・クソが。」

テメエ　　結果と境界の重なっている間をすり抜けて入って来やがったのかよ・・・!!」

「ご名答、その通りだよ。」

まあ流石に普通の境界程楽にはすり抜ける事は出来なかったがね」

結果とは本来、大小のものを複数組み合わせ町やらを覆うような物を作り出すのが基本だ。

それ故に必ず結果と境界同士の部分に小さな隙間のような物が出来てしまう　　本来そういった部分は警備を厳重にするか、更に上から結果を重ねるかと言う方法を使用するのだが、此処本山の場合は後者だったようである。

ちなみに結果同士と言う物は幾ら何枚も何枚も上から重ね掛けしようが必ず小さな綻びと言うものは出てしまう・・・要はフェイトはそういった部分をすり抜けて中へと入り込んだのだ。

「そんな・・・そんな事が簡単に出来る筈がない・・・。  
それこそ霊体のような存在で　　はっ!?!　　ま、まさか・・・この静けさは!?!」

詠春の言葉にサイも疑問を浮かべた。

これ程大きな声で侵入者であるフェイトと語り合っているとと言うのに、誰一人警備の者はおるか大勢居た巫女達まで出てこないのだ・・・

・そしてそれは二人に嫌な予感を感じさせる。

「ああ、それと残念だけど此処には誰一人出て来ない。  
この屋敷に居た者達は殆ど、僕の魔法で動けなくなっている・・・  
まあ、若干何名かには逃げられたけどね。  
非戦闘員を巻き込むのは僕としても本意ではない」

するとフェイトはある場所を指差す。

その目は目の前で木乃香を攫われた事により静かなる怒りを浮かべている詠春など見ていない。

真っ直ぐに・・・サイの目を見ていた。

「天ヶ崎千草からの伝言だ。

『馴れ合いなんて温い環境を作った長殿と散々邪魔をしてくれた魔法使いのガキ達は生かしておいたる・・・精々その目で大事な木乃香お嬢様の力を焼き付け、ウチが協会を牛耳るのを指を啜えて見ていればええ!!』だそうだ・・・精々、こんな所で殺されない事を祈るよ光明司齊」

そう言うつと背を向けるフェイト。

その背中に向かってサイは疑問を持ち、ある事を聞いた。

「テメエはどうする心算だ？ テメエもあのクソ女に雇われているクチだろうが・・・」

サイの言葉に立ち止まるフェイト、そのままの体勢で言葉を紡ぐ。

「元々僕はターゲットの近衛木乃香を得るまでの間の契約でね。

契約は完了した故にこれ以上彼女の知らない幻想に付き合う心算もない・・・それだけさ。



それに君と戦えないのは残念だが、事情が変わったんだよ……すまないね。

まあ、代わりにこの戦いの行く末をじっくりと見物させて貰うよ」「

そう言い終わるとフェイトの姿は消える。

残っているのは水溜りのみ……これは上位の術の、水を利用した転移術だ。

それを詠唱も唱えずに行うとは　　どうやらかなりの実力者だと  
言う事である……。

「大丈夫か、サイ!?!」

「サイさん、ご無事ですか」

「……………(ぶんぶんっ)」

フェイトが居なくなると同時に走り込んで来るエヴァに茶々丸にザジ。

どうやら三人は元々宴会にも出ていないし、夜桜見物をしていた為に無事だったようだ。

更に其処へ……。

「サイ、長さん、大丈夫……!?!」

「良かった、サイさんも長もご無事だったのですね!?!」

「ど、どどど……どうしようお兄ちゃん!?　木乃香さんが、木乃香さんが!?!」

目の前で木乃香が攫われた事がショックだったのだろう。

明日菜もネギも、表に出さないが刹那さえもパニックになって慌えている。

そこにサイの一喝が響く……。

「落ち着けテメエ等！！  
んな慌てた所でつまらねえへマやらかすだけだ！！ 木乃香助けて  
えならまずは冷静になれ！！」

怒号に近い言葉に慌てていたネギや明日菜や刹那が落ち着く。  
しかし・・・千草の目的が理解出来た詠春によって、落ち着いてい  
た者達は追い討ちを掛けられる。

「恐らく天ヶ崎千草は木乃香の膨大な魔力を利用して、かつて封印  
された大鬼を召喚する心算でしょう。」

拙い リョウメンスクナ この付近には古き時代に封印された両面宿難と言う大鬼  
以外にも凶悪な妖獣が東西南北にそれぞれ一体ずつ封印されている  
のです！！

もし両面宿難が封印から解放されれば、その妖気に呼応して他の四  
体の妖獣まで復活してしまう・・・そんな事になれば、この関西呪  
術協会は・・・いやこの京都自体が滅ぼされてしまいます！！」

「な・・・何だと！？」

馬鹿な、聞いた事がないぞそんな話は・・・此処に眠っているのは  
貴様とナギの二人が18年前に封印したリョウメンスクナだけでは  
なかったのか！？」

エヴァの言葉に詠春は無言で肯定する。

実はこの京都にははるか昔・・・それこそ洋間が跳梁跋扈し、陰陽  
師が活躍していた平安の時代に多くの犠牲を出しながらやっとの事  
で封印された4匹の妖獣が居た。

東門に封印された妖獣・双頭龍（西洋で言えばファーヴニル）。

西門に封印された妖獣・参首獣（西洋で言えばケルベロス）。

南門に封印された妖獣・大翼鵬（西洋で言えばフレスヴェルク）。

北門に封印された妖獣・鎧顎蛇（西洋で言えばニーズヘッグ）。

四匹が四匹とも両面宿難に匹敵する程の力を持つ妖獣。

・・・唯でさえ山にも匹敵する大きさの大鬼だけでも無茶だと言うのに、その後四匹も封印が開放されたとしたら目も当てられまい。説明を聞かされた明日菜達の顔が一瞬で青褪める。しかしこの状況でも表情を変えない人物達が居た。

「ハッ・・・要はその鬼をぶっ潰せば良いんだろ？」

一回は既に潰されて封印されてるんだ、本気でやりゃあ出来なくもねえな。

上等じゃねえか ソウルアツブ ガタイがデケエだけの独活の大木なんぞ叩き潰してやらあ・・・魂鎧装！！」

「（ピッ）・・・ジジイか。

何も聞かずに私の封印している魔力を解放しろ

つべこべ抜かすな、貴様の娘婿が長をしている京都が灰になっても良いのか！！？」

「（ピピピピッ）・・・武装、支援要請完了。

さよさん、すみません。もう暫くの間だけ大人しくして下さい」

「・・・魂鎧装」  
ソウルアツブ

白の鎧を纏うサイ。

学園長に魔力の解放を催促するエヴァ。

生みの親の一人とも言える存在、超鈴音の作った転移システムにアクセスして転移要請をする茶々丸。

そしてサイと同じように法力を鎧と変え、黒翼と悪魔のような様相の鎧を纏い、両手に黒い鋭い爪の付いた鉄甲を召喚するザジ。

その意図を理解する明日菜達。

サイ達は戦う心算なのだ　山をも越える程の大きさの鬼と。

いや・・・寧ろそれだけではなく、その後には解放されるであろう4匹の妖獣との戦いも想定しているのだ。

「しょ、正気なのサイ！？　それにエヴァちゃんに茶々丸さんにザジちゃん！？

相手は山よりも大きいって言ってたじゃない！？　それに他にも化物が居るんでしょ！？

私たちがなんか・・・私たちがなんか勝ち目がある訳ないじゃないのよおおお！？」

絶望的な状況で弱音を吐く明日菜。

いや、例えば明日菜でなくても・・・刹那も、ネギも、そしてかつて大鬼を親友と共に封じた詠春であっても感想は同じだろう。

あまりにも絶望的で、己の無力を知ってしまう者にとって　それが当然なのだ。

だが

「勝ち目がねえって誰が決めた？」

「・・・えっ？」

サイの言葉に彼の顔を見る明日菜。

「やってもいねえ前から何で勝ち目がねえなんて解るんだ？  
封印されてたつて事は勝つた奴が居るんだろ？ だったら何で俺達  
だつて勝てるつて信じねえ？  
絶望的だ？ 最悪だ？ ハッ、んなモン人が勝手に決めた限界だろ  
うが」

サイは不敵に笑う。  
それに続くようにしてエヴァと茶々丸が口を開いた。

「確かに絶望的だな、神楽坂明日菜・・・貴様の言う通りだ。  
だがな 私は今まで生きて来る中でこれ以上の絶望など何度も  
経験して生き残ってきた。

今更、絶望して無力に成る程に若くもない・・・それに今は私の背  
を任せれる心強い戦友ともが居る。  
故に今更 過去の遺物程度に物怖じする私ではないわ！！  
貴様等に教えてやろう、悪の魔法使いの底力と言う奴を嫌と言うほ  
どな！！」

「私はマスターを、そしてサイさんを信じています。  
その二人が諦めずに戦おうと、勝つと言っているのです それ  
を信じずに何が従者でしょうか？  
それに例え勝てる確率は少なくとも最後まで全力でやってから諦め  
る・・・それが最も大事だとサイさんは教えてくれましたので」

ザジもまた同意するように頷く。  
そう、彼女達は信じているのだ・・・何処までも不敵で、何処まで  
も真つ直ぐで、何処までも揺らぐ事のない瞳と魂を持つサイの事を。  
そして最後にもう一度、サイが口を開く。

「それに俺は約束した。  
木乃香を護ると、小太郎のような奴等が泣くような世界をブツ壊すと。」

そんな俺が　　木乃香攫われたまんま、あのクソ野郎共の良い様にする訳ねえだろ！！

俺はもう・・・絶対に見捨てねえって、俺の魂に誓ったんだ！！」

何故だろうか・・・無茶苦茶で無謀な事を言っているだけに過ぎない。

なのにその言葉の重みは、そしてサイ自身の何処までも諦める事のないその大きな背は・・・絶望に顔を青褪めさせていたネギや明日菜や刹那の目に力を漲らせる。

普通ならば強がりには聞こえない言葉　　だが、その筈なのに不思議と信じてしまえる。

それはサイが今までやって来た事が故。

例え傷付こうとも、死に掛けようとも・・・己の誓った事は決して違えない。

逃げず、媚びず、諦めず　　唯我武者羅に真っ直ぐ進み続けるその生き様こそが言葉に重みを持たせ、信じさせる結果となっているのだから。

「・・・ああもう、解ったわよ！！」

私もアンタを信じる、信じるわよ！！　　んで、絶対に木乃香を助け出すわ！！」

「ウン、ボクもやるよお兄ちゃん！！」

木乃香さんを利用しようとしている人達をそのままになんかしておけないよ！！」

「私もです、サイさん  
お嬢様を護る・・・それが私のこの胸に誓った信念です!!」

三人の表情にもはや絶望はない。

サイの言葉を、サイの魂を、サイの誇りを皆は信じた・・・サイが一緒ならば本当に出来る<sup>レジスト</sup>と信じたのだ。

・・・するとそこで、エヴァが詠春に向かって口を開く。

「詠春、貴様は此処に残れ。

多くの者達があの白髪の小僧によって石化させられてしまっている。

・・・今の現状であれを解除出来るのは貴様しか居ない」

「なっ、エヴァンジェリン!? し、しかし・・・」

詠春とすれば自分の可愛い娘が攫われて利用されようとしているのだ。

娘の命が掛かっている現状で自分ばかりが残るなどと言う事は出来はしない。それに言い方を変えるならば、今回の事は20年前に起こった己達の関わっていた“大戦”に端を発しているのだから。しかし・・・了承を洩る詠春に対し、エヴァは言葉を続けた。

「貴様やナギ達・・・“魔法界の英雄”の時代はもう終わった。

これからは坊や達若き世代の者達が未来を紡いで行く時代なのだ・・・

・貴様は坊や達を信じて待っている。

それが先を歩む者達がすべき事だ。解ったな?」

かつての英雄達の懸念は、後に続く者達に託す。

そう提案したエヴァを見つめ・・・そしてサイ達を見つめて詠春は決心した。

「ネギ君、明日菜君、刹那君・・・サイ君・・・お願い出来ますか？  
そしてエヴァンジェリン　私に代わり、この戦いの行く末を見  
届けてください・・・」

「ハッ・・・言われるまでもねえ」

「任せる詠春」

「了解いたしました」

「・・・(コクッ)」

「はいっ！！」

「任せてよ、長さん！！　絶対に木乃香連れて帰って来るから！！」

「お任せを、長」

その言葉に全員が肯定の意を表す。

自信に満ちた目で友を救うと約束した　最後にサイが掛け声を  
上げる。

「行くぜ野郎共！！」

あの勘違いのクソ女に誰に喧嘩売ったのかったのを嫌ほど刻み込ん  
でやるぞ、良いな！？」

「「「おおおおおおお！！！！」「」「」

「・・・まあ、正確に言えば野郎はお前しか居んがな」

「(録画完了・・・) はい、では向かいますようマスター、ザジさ  
ん」

「・・・(コクコクッ)」

友を救う為に、傷付いた少女が平穩に生きる明日を得る為に。

サイを先頭とした全員は、此処より始まる死闘の為に戦場へと赴く。  
その背は皆、誰もが先ほどまでの絶望的な状況を知った時とは違う

堂々とした物だ。



「（・・・ナギ、何処かで見ているか？

後に続く次代の子達の姿を　　エヴァンジェリンの言った通り、  
これからは彼等の時代なんだろうな。

振り向かず前に進むと言う事で私たちは大戦で多くの傷を世界に残  
した、だがその影でこんなにも強い芽が育っていたんだ　　お前  
が、そして“アイツ”がやった事は間違いではなかったぞ」

戦地に赴くサイ達の背中を見て詠春は笑った。

そう、ナギ・スプリングフィールドが・・・そしてもう一人の自ら  
が汚名を被る事を選んだ英雄の姿を思い浮かべながら。

### 第三十八話：先を行くもの、後を追うもの（後書き）

投稿完了です。

遂にこれで両面宿難との戦いが始まりますよ

ですが本編に比べてかなり変わってしまったので、敵側にも色々な敵を加えています。

変更点

本来は敵側にフェイトと小太郎が居るのですが

小太郎は既に戦線離脱、更にフェイトはこの作品の千草の場合だと最後まで使いそうにもないので此処で離脱させました。

その為、敵側には現在は千草と月詠しか居ませんし・・・そもそもサイ側が本来居ない筈のエヴァ&茶々丸&ザジが居ますから・・・。

なので敵側の封印されていた存在を増やしています。

元になっているのは神羅万象に昔登場していた魔獣ですけどね・・・それ以外にも、召喚する数も原作より増えていますよ。

さあ・・・この大喧嘩、一体どのように幕を引くのかをお楽しみに

^^

### 第三十九話：真の戦士

「オイオイ・・・なんだこの数はよ・・・チツ、面倒臭えな」

戦場に着いて最初に周囲を見渡してサイの口から漏れたその一言。それは見渡す限りに存在する鬼やら鴉のような姿をしたものやら化け狐やら・・・更に見た事もないような化物、完全に生きてる存在とは思えないような肌の色をした人間の成れの果ての群れだったサイ達の後ろから着いて来ていたネギや明日菜達も流石の状況に固まってしまう。

特に元々一般人である明日菜など、あまりの光景に肩が恐怖で震えている。

「じよ、冗談でしょ・・・な、何よこれは・・・」

「おそらく追って来ると思った私達を止める為にお嬢様の力を使って召喚したのです。

ですが余りに多すぎる　これは推測ですが、天ヶ崎千草は京都の地脈に眠る“龍穴”と言う部分を解放したのでしよう・・・」

冷静に分析しながらも刹那も恐怖を抑えるので精一杯だ。

元々、化物を退治調伏するのが彼女の所属していた神鳴流の仕事だとしても・・・数が多過ぎる。

何せ百や二百程度の数ではない　下手すれば千に近いが、それ以上の数の化物達が存在しているのだから。

「(ビビッ、ビビビッ・・・) 検索完了・・・。

どうやら木乃香さんは此処から北へ向かった先にある祭壇に居ます

しかし其処まで行くにはこの状況を何とかして打破しなければ難しいでしょう」

「チツ・・・面倒な。」

仕方がない、少しばかり作戦を考える時間を稼ぐ  
坊や、私の方に手を向ける!!」

「は、はいっ!!」

言われた通りにエヴァの方に手を差し出すネギ。

その手をエヴァは確りと握ると自らの手を天に向けて言い放つ。

ニウイス・ケラキエダ・バリエース  
「氷葬障壁・銀閃華!!」

台詞と共にネギ達を包み込むように張られる氷の壁。

それ自体がまるで意志があるかのように近付こうとする者達に対して氷刃を生やし、身を貫く。

この術はまだエヴァが麻帆良に捕らえられていない頃、自らに近付こうとする輩を拒絶する為に編み出した攻防一体の障壁術である。

「さ、寒っ!? え、エヴァちゃんコレって!？」

「私が昔編み出した大群戦闘用の絶対防御の障壁だ、それと攻撃も兼ねている。」

だが坊やの魔力を借りて使ったが精々4〜5分程度しか持たないだろう、その間に作戦を考えるぞサイ!!」

辺りを見れば障壁に近付けば貫かれるという事を理解していないらしい人間の成れの果てが、壁に血飛沫を浴びせながらもヨロヨロと近付いてくる。

まるでB級ホラー映画のような光景だ、こんな状況でゆっくりなどしている暇もないだろう。

「・・・ネギ、明日菜、刹那。」

お前等はこの障壁が解除された時のドサクサに紛れて此処を離脱して木乃香の所に向かえ。

この連中は俺等4人で何とかするからよ」

「なっ・・・お兄ちゃん、無茶だつて!!」

少なくとも百や二百の数じゃない・・・それを四人でなんて危険過ぎるよ!!」

サイの言葉に反論するサイ。

それは当然だろう・・・例え自らの慕う兄のような人やエヴァが強くとも流石に今回は無茶過ぎだ。

ネギに続くようにして明日菜も刹那も反論の異を唱える。

「馬鹿っ!! アンタやエヴァちゃん達だけ置いていくなんて出来る訳ないじゃない!!」

わ、私も怖いけど戦うわよ!! この剣ならコイツらにも通用するしね!!」

「私も残ります!! 元々こういつた連中を退治調伏するのが私の仕事です!!」

それに余りに多勢に無勢過ぎます だから・・・っ!!」

だが・・・そんな三人をサイは一喝する。

「テメエ等は何しに此処に着たんだ、ああ!？」

こんな所でこの途方もねえ数の鬼共と戦う為か!？ 違う、木乃香を助ける為だろうが!？

だったらとつと行け!! 迷ってる時間がねえ位の事はテメエ等が一番良く解つてんだろ!!」

確かにこの様な場所で禅問答などしていればそれこそ手遅れとなる。間に合わないかもしれない、されど上手く間に合えば両面宿難の召喚を止められるかもしれない。

確率の低い分の悪い賭けかもしれないが・・・それでもこんな所で辺りを埋め尽くす程の数の時間稼ぎの鬼達と戦っているよりも数段マシだろう。

「間に合わずに両面宿難が召喚されたら直ぐに合流してやる、だから此処は俺等を信じて行け！！」

そう言うと不敵に笑い、七魂剣を構える。

サイの姿に、後ろに居るエヴァや茶々丸やザジの姿を、その言葉を信じると誓った三人はまだ何か言いたそうな表情をするが・・・迷いを吹っ切って前を向く。

「そつだ・・・それで良い。

行け、テメエ等の進む道は切り開いてやるからよ！！」

もう既に障壁は限界時間を過ぎ、罅割れ始めている。

それを知った鬼達が、人の成れの果てが、異形の怪物達が今か今かと障壁が消滅するのを待つ。

そして障壁が消滅した瞬間・・・サイ達に襲いかかるうとする鬼達は、迫り来る虹色の閃光と無数の氷の矢によって何十匹かが喰われた！！

「今だ、前だけ向け！ 後ろを振り返んなよ！！」

サイの怒号と共に切り裂かれ生み出された鬼の大群の間に出来た道から三人が飛び出す。

本当は心配だ、千に近い数に囲まれたサイ達を置いていくなど本当

はしたくはない　　だが、ネギ達は託されたのだ。  
ネギ達を先に行かせる為に此処に残る事を選んだ者達に報いる方法は唯一つ、木乃香を救う事だけ。  
だからこそネギは強く己の父の形見の杖を握り締めながら・・・振り向かずに言った。

「お兄ちゃん・・・エヴァさん、茶々丸さん、ザジさん・・・。  
絶対に・・・絶対に無事でいて！！　無茶をしないで！！　必ず無事でまた後で会おう・・・約束だよ！！」

言葉にはしなかったが明日菜も刹那も想いは同じ。  
開かれた活路を唯前を向き、少女達はその道を全速力で駆け抜けていくのだった・・・。

「ヤレヤレだぜ・・・こりゃとんでもねえ数だな」

「何だ、今更坊や達を先に行かせた事を後悔してるのか？」

辺りを見回し、少しずつ迫ってくる人外の鬼達の大群に呆れるサイ。先ほどから周囲で禍々しい魔力を感じる・・・どうやら何者かがこの周辺で大量の人外達を召喚し続けているのだろう。

先ほどサイとエヴァで切り開いた活路はもう既に塞がれ・・・サイ達四人を囲むように幾千の目が見ている。

最早逃げ場などない　　だが、こんな状況でもサイとエヴァは軽口を叩き合っていた。

「ああ？　馬鹿かテメエは？　誰が後悔してんだ誰が？」

寧ろ問題なのはテメエの方だろ？　結局ジジイに頼んでも力の封印は解除されてねえじゃねえか・・・怖えんだったらベソ掻いて隅に

でも転がってる」

「フン、抜かすな大馬鹿が。

私は魔法界でも五本の指に入るクラスの最強の魔法使いだぞ・・・  
例えば魔力が半分以下しか解放されていないでもそこらのぽつと出の  
三下風情に負ける程に弱くもないわ。

貴様こそ力のほぼ殆どが封印されてる状態だ、やせ我慢せずに茶々  
丸にでも護られてろ」

笑いながら文句を言い合う二人。

その態度に周囲の鬼達は呆気にとられてしまう。

しかし茶々丸とザジは寧ろ楽しげに二人を見つめていた・・・。

「まったく口が減らねえなテメエは・・・。

その最強クラスの魔法使いの癖に魔法も碌に使えねえ魔法学校中退  
の奴に負けてビイビイ泣いてたのは何処のどいつだ」

「ほう、誰の事かなそれは？

私は別に罠に掛けられて強引に閉じ込められた記憶はあるが、負け  
た記憶はないぞ。

その年で虚言癖があるとは・・・実に嘆かわしい」

どんだん口調が悪く険悪な感じになっていく二人。

だがこれはこの二人にとって挨拶代わり・・・いや、言い換えるな  
らじゃれ合いのようなものだ。

元々口の悪い同士の二人故とも言えるだろう。

「・・・テメエ、誰が虚言癖を持つてるだ、ああ！？」

やんのかオラ！？ 周りの連中始末する前にテメエを先に始末すん  
ぞ！ー！」



「黙れこのノータリンが！！  
しかも誰がパイパイ泣いていただ！！ 何も考えんと何をこんな所  
で人の恥部バラしている！？  
私の方が先に貴様を始末してやるわ、この大馬鹿が！！！」

そんな二人を周囲で見っていた鬼達。

溜息のようなものを吐きながら中でもリーダー格らしい大柄の鬼が  
口を開く。

「はあ・・・そこのおぼ幼いこい嬢ちゃんに目付きの悪い兄ちゃん。

聞いとらんかもしれへんが呼ばれたからには例え相手が寡兵でも手  
加減出来んのや。

まあ、此処で死んでも恨まんといてや？」

だがそんな言葉を二人は聞いていない。

睨み合つて険悪な雰囲気のような物を醸し出し、周囲になどまるで  
目も向けていない。

そんな自分達を眼中に入れていない態度を見た鬼の何匹かが怒気を  
上げながら前に出る。

「ゴラア、餓鬼共が！！」

オヤビンが話をしているのを無視してるとはどういう見だ、さつさ  
とこつち見・・・「」

だが・・・その言葉が最後まで続く事はなかった。

何故なら二人に近付いたその瞬間 　ある鬼は真つ二つにされ、  
ある鬼は頭を握り潰される。

更に鋭利な刃のような物で全身中穴だらけにされたかと思うと、揃  
って消滅したのだ。

「五月蠅えな・・・外野は黙ってる、この三下共が!!」

「ああ・・・そうだ、無駄に外野の連中が多いんだったな・・・実に目障りだ」

驚く鬼達・・・。

しかし二人は凶悪な、それこそ悪魔でも裸足で逃げ出すような笑みを浮かべるとゆっくりと構えを取る。

そして・・・呆気にとられてる鬼達に向かって挑発するようなジェスチャーをした。

「チツ・・・雑魚共が多いとゆっくり喧嘩も出来やしねえな。

しゃあねえ、取り敢えずテメエとも喧嘩は一旦お預けだ・・・良いな、キティ?」

「待て、ならばこの喧嘩のケリは私と貴様の二人の内のどっちかが生き残るかで着けるとしよう。

そう言う訳だからさっさと掛かって来い　先に言っておくが私達は力を封印されているが手加減など不要だ、寧ろそんな事したら今送り返された連中と同じ道を辿る事になるぞ?」

勿論、それに頭に来ない鬼達ではない。

全員が各々持っている得物を構えると、有無も言わずに一斉にサイとエヴァに向かって襲い掛かった。  
だが・・・。

「武装、転移完了。

マスター、サイさん、私達も一緒にさせていただきます」

鬼達の眼前に躍り出た茶々丸。

その両手には・・・大の大人でも片手で持ち上げる事などほぼ不可能に近いポッドガン（小型の対人用ガトリングガン）が一丁ずつ握られていた。

「へっ???」

間の抜けた声を上げる突進して来ていた鬼達

次の瞬間、茶々丸の両手に持たれていたポッドガンが一斉に火を噴いた!!

“ズガガガガガガガガガガアアアア!!!”

撃ち放たれる幾百、幾千、幾万に到る数の魔法処理された鉛の玉が鬼達の全身を撃ち抜く。

いきなりの事に対処出来なかった鬼達が纏めて消滅していく・・・。だが、それだけではない。

「・・・邪魔」

月明かりに照らされた鬼達の影から現れた黒い爪の鉄甲。

それが一匹の鬼の胸板を貫き・・・更にその周囲にいた者達を細切れにしてしまう。

影より現れた人物は闇夜に照らされる月の光により、悪魔のような姿をしていた　　これこそがサイと同じく魂獣スピリッツと人間のハーフで

あるザジ・レイニーデーの魂鎧装した姿だ。

神具・黒妖爪ヤタガラスを手に纏い、敵を刈り取るその姿は言い換えるなら“死神”か・・・。

「行くぜキテイ、確り合わせろよ!!!　不動剣・アカラナータ!!!

」

「言われるまでも無いわ!!!　リク・ラク　ラ・ラック　ライラッ

ク!!!

魔法の射手・連弾・氷の38矢!!!

サイの七魂剣スサノオから放たれる虹色の地を這う衝撃波。  
それに追従するように放たれる壁をも簡単に撃ち貫く氷塊の矢・・・  
二つの力は鬼達を巻き込み、喰らい、切り裂いていく。  
・・・本当にこれで力が封印されている状態なのだろうかと疑問に  
思えてくる。

まさに修羅、まさに羅刹。

4人は凄まじい数の鬼達と人ならざる者達を薙ぎ倒して行く。  
これには流石の鬼達も驚いて空いた口が塞がらない・・・それはそ  
うだ、明らかに自分達よりも少ない寡兵を相手に直ぐに決着など付  
くと思っていたのに、それが逆に自分達が押される等とは思わなか  
っただろう。

それ程に・・・それ程に此処に残った四人は強いのである・・・。

「ガッハッハッハ！！」

こりゃ驚いたわ、まさかたかが四人で千近くおる兵を殆ど倒してま  
うなんてのお！！

まっこと実に元気な嬢ちゃん達や小僧や、気に入ったで！！」

「そりゃどうも、褒めても何も出ねえぞ」

群れのリーダー格の大鬼と対峙するサイ。

辺りを見回して見てみれば、今まで周囲にいた大量の鬼達も人なら  
ざる存在も殆どが消えている。

残るのは相手も残り僅か・・・リーダー格の大鬼と一つ目の大鬼、  
鴉天狗のような人物に狐の仮面の人物、それと巨大な剣を担ぐ鬼と  
軟体生物のような怪物だけだ。

「だけどワシもこれでも此処を任された身の上だからのう。  
本来なら酒でも酌み交わしてぶっ倒れるまで飲みたい所やが・・・  
勘弁してくれや」

そう言つてサイの背丈を裕に六倍も七倍もあるような金棒を構える  
大鬼。

大鬼の姿を見つめたサイは静かに溜息を付くと七魂剣を構えつつ呟  
く。

「まったく律儀な大鬼だなオイ。

もう解つてんだろ？ “アンタじゃ俺には勝てねえ” って事ぐらい、  
アンタの実力ならよ。

あんなクソ女の為に律儀に散らす必要のある命じゃねえだろ？」

だが、サイの言葉に大鬼は豪快に笑いながら答える。

「がっはっはっは、言つこのう小僧。

まあ確かに、あんな式神も人すらも道具程度にしか思つたらんよう  
な主なんぞ本来なら願ひ下げたいがのう・・・子が親を選べんよ  
うに、召喚する主を選べんのかやワシ等は。

じゃが例えどんな相手だろうが護るべき相手は護るべき相手や・・・  
どんな召喚者やろうが、それを命をかけて護る事、それがワシ等の  
成すべき事でありワシ等の生きとる誇りや」

大鬼はサイの方を見て更に言葉を続ける。

・・・たとえ運の無いような、耐え難い現実があろうとも、それに  
悲観しない強さを見せながら。

「それにの、小僧・・・ワシ等は今回、すこぶる機嫌が良いわい。

何しろワシ等が勝てそうにも無い猛者にこうして会えて、今まさに本気で死合おうとしてるこの現状がの。

久々に本気で、本格的に楽しませてくれそうなこの現実・・・ワシ等じゃこれで充分よ。

強者に挑み、敵わずとも戦い、そして満足して逝く　それこそ武人冥利に尽きるという奴よ！！」

強者と戦う・・・それこそが武人の最も喜び。

サイの強さを、その小さな身体に秘められた力の大きさを知った大鬼にとって・・・本気で戦える事こそが何よりも嬉しいのだ。

そんな戦闘狂のような心境をサイもまた解っている　故にこの大鬼を倒さねば、先に進ませて貰えぬ事も。

「・・・上等だ、テメエ。

それに俺、テメエみたいな奴は嫌いじゃねえよ。

気に入った奴を殺りたくねえが、要は先に行きたいなら・・・テメエを“潰せば”良いつて事だな？

なら良いぜ　アンタを此処で潰して万事解決、俺達は先に進む・・・それで良いよな？」

言葉を言い終わった瞬間に放たれる殺意。

殺気ではない・・・完全に相手を殺すと決めた漢の呟いた宣言にして宣告。

叩き潰すという絶対的な意志の発露　この強烈な殺意に大鬼は一瞬気圧されて後退りしそうになった。

それは何処までも暗く、何処までも深く、何処までも無慈悲な力。人はそれを“闇”と呼び恐れ、闇に近き者達は賞賛する“絶対的な絶望”・・・。

それを目の前の年若く見える少年が放っている事に大鬼は驚き

それと同時にその余りの無慈悲な強さに賞賛の念を抱いた。

「本気でやれっつていつたよな？」

まあ悪いが本気はある事を考慮して出せねえが……代わりにそれに近い力で潰してやるよ。

バーストアップ  
覚醒鎧装！！！！！」

赤き鎧を纏うサイ。

白面火炎武神と呼ばれるその形態となった後……彼は赤き玉の嵌った七魂剣に法力を込める。

すると……紅蓮の劫火の如き気がサイ自身の身体からあふれ出し、七魂剣へと集まっていく……。

それと同時に大鬼は大きな水音を耳に感じる。

総毛立つ全身、目の前の人間とはかけ離れた化物のような殺意を放つ少年の覇気に怯えて後ろに下がった事に気付くのに少しの時間を要し……同時に羞恥により憤怒の感情が沸き上がった。

「（アホな……ワシが、このワシが怯えたんか？

恐怖を感じるだけならまだしも……こんな小僧っ子一人に気圧されて、完全に飲み込まれたんか！？」

巫山戯るな……巫山戯るなあ！！ これだけの強敵を、これ程の武人を前にして後退して怖気づくなんぞ 死合を、ワシ自身の誇りを汚しとると同じや！！

そんな……そんな無様な事、誰が許してもワシ自身が許せる訳無いやないかああああ！！！！！！」

大鬼はそう己を奮い立たせると金棒を片手に下がった足を前に出す。相手が何をしようとしているか等解らない……だが相手が何をしようが関係ない、そもそも考える必要も無い。

必要なのは唯一つ、覚悟のみ。 相手が何をしようとしてそれを受け止め、打ち破ると言う決意のみだ。

「ウオオオオオオオオオオオオ！！！！！！  
かかって来いや、小僧  
！！！！！！」

大鬼は笑い、叫ぶ。  
的と見定めた武人に対し、己の決意と覚悟を込めて

「ああ・・・言われるまでもねえよ！  
白面九尾の力と朱雀の力 二つの融合した力、止めれるモンなら止めてみやがれええええええ！！！」

劫火の鬨気は七魂剣に纏われ、それそのものをまるで“レイヴァーティン激痛の剣”  
のように見せる。  
ニルヴァーナ煉獄をも想像させる紅蓮の魔剣を片手に、サイもまた笑いながら大鬼へと迫る。

必殺の気概を、必殺の意志を込め、眼下の敵へと全力で見舞う為に  
・・・

大気が軋む。  
次元が、空間が、まるで陽炎の如く歪む。  
大地を蹴り、一直線にまるで閃光の如く空間を薙ぎ、サイは大鬼へと迫る。

対して大鬼は後退しない。  
左右への回避も選ばずに唯大地に根を下ろしたかのようにどっしりとした体勢で金棒を構えている。  
・・・まるでサイのいかなる攻撃をも全て受け止めると言わんばか



りに。

そんな大鬼を見るサイの表情に再び笑みが刻み込まれる。  
敬意、好意といった感情が現れた・・・鮮やかで愉しげな笑みが

そして。

「  
不動神皇剣・鳳翼天昇！！！」

まるで月をも砕かん程の爆炎を纏った一撃が周囲の河原を蒸発させ、  
大鬼ごと大地を切り裂いた・・・。

立ち上る土煙が風に吹かれて視界が明瞭になるまでに少しの時間を  
要す。

周囲が普通に確認出来るようになった時・・・多分、見物人が居た  
としたら今の状況を一体どのように思うだろうか？

薙ぎ倒された木々。

見ればサイと大鬼のいる場所にはまるで隕石が衝突したかのような  
巨大なクレーターが生まれている。

更に周囲に満たされていた小川は一滴残らず蒸発し、無残な大地を  
晒しているだけだ・・・。

最早、此処が『河原だった』などといっても誰も信じない程に原型  
すら留めていない様な状態となっている。

「あゝ、久しぶりに全力でぶっ放したから力の加減出来なかったぜ」  
「・・・やりすぎだ、この大馬鹿（ボカツ！！）」

サイの頭をグーで殴るエヴァ。

『もしこれを最初に出会った時に使われたら確実に死んでいたな』  
などと思い、冷や汗を掻いている。

ちなみに背の違いがあるが故に茶々丸に抱き上げられてサイをぶん殴っていた・・・近くにザジも居る所を見ると、生き残った他の連中も送り返して来たのだろう。

「貴様はもう少し周りの迷惑を考えて技を放て！！」

力が封じられてる状態でこれでは、完全に封印が解除された状態で放つたら学園が消えるわ！！」

「ああああ、心配すんな。

そう言う時はテストロスと戦った時みてえに結界張るからよ」

「そう言う問題ではないわ、この超弩級馬鹿！！」

まあ・・・エヴァの気持ちも解らなくも無い。

サイが祖母や父親から習った不動神剣や阿修羅真拳をも超える、己自身で生み出した奥義・不動神皇剣。

今は亡き戦友達の魂の結晶である魂石の力を七魂剣で解放し、己自身の法力に融合させるといふこの奥義は全力で放てば京都の嵐山一帯を焼け野原にする位は簡単に出来るものなのだから。

「良いか、これからその技をポンポン使うな！！」

こんなものを何度も使われたら魔法の秘匿もヘツタクレも無くなるだろうが！！

良いなサイ、どうしても使わなければ勝てないような相手が出た時

「だけ使え・・・返事は!？」

「・・・あゝはいはい、解つたよ。  
だからそう耳元で怒鳴るんじゃねえよ、つつか頬を引つ張んじゃねえ」

まあ元々、不動神皇剣は魂鎧装形態の切り札だ。  
そうポンポン何度も使えるようなものではない　　今回これを使つたのは、武人として真つ向から挑んできた大鬼に対する敬意の証である。

「く・・・ははは、ははははは・・・」

不意に力無い笑い声が聞こえてくる。  
お互いの頬の引つ張り合いをしていたサイとエヴァ、それと茶々丸とザジは声のした方を見る。  
其処には肩口から股にかけて両断され、黒い煙を身体から立ち上らせている大鬼が笑っていた・・・。

「強いの小僧・・・それに嬢ちゃん達が此処にいるって事は他の連中も送り返されたようやな。」

ぐははははは、完全にワシ等の完敗や完敗・・・やけどありがとうな小僧、本来ならあんなモン使わんともワシに勝てたやろ？」

それなりに全力でワシをぶっ倒してくれたって事・・・それはワシを格下やのうて、戦士と認めてくれたって事やな・・・」

「まあな、テメエは立派な戦士だったさ。」

戦士には戦士の、誇りには誇りを以って返す　　それこそが“本  
当の戦士”ってやつだろ？」

大鬼にもサイにも最早敵愾心など残っていない。

唯純粹に己を倒した者への賛辞の念と、誇りを最後まで貫き通した者への敬意の念のみが在った。

サイは笑い、大鬼は満足げに深く頷く……大鬼の身体は煙となつて半分以上が既に消滅している。

どうやら別れの時は既に近いのであろう

その時……周囲の土が盛り上がり、其処から骸達が現れる。

どうやらこれ程の攻撃の中でも屍を操っている存在はまだ倒れては居なかつたようだ。

どンドン空気も読まずに出て来る骸骨達を目で見ながら大鬼が呟く。

「ハア……全く以つて良い気分を害す連中やな……。

まあ良えわ……ワシもそろそろお別れの時みたいやし、出来ればまたどつかで会いたいモンやな。

おお、そうや……戦士をいつまでも小僧扱いしとつたら失礼やの……最後に名前を教えて貰つて良えか？」

「あ、俺の名か？」

光明司齊、それが俺の名だ……また会おうぜ、そんな時はこの続きと行こうや」

サイの答えに大鬼は豪快に笑い

「がっはっはっは!!!」

それも良えが、次に会う時は戦場でやのうて満開の桜の樹の下でぶつ倒れるまで一緒に飲もうや。

他の連中も誘つて来るやさかいな……嬢ちゃん達ものう!!!」

その身体を殆ど消失させ、殆どが煙になり輪郭をなくしながら……

最後に唇を動かす。

「ほなな、また会おうや・・・光明司齊」

「　　ああ、そんじゃあな・・・再び会い見えん事を」

戦士には戦士の礼儀を。

一礼を以ってサイは消えてゆく大鬼を見送る・・・再度頭を上げると、既に大鬼は居なくなっていた。

「さて・・・今度はコイツ等か・・・」

周囲を見回しながら呟くサイ

辺りには再び大量の骸骨達が兵士のように整列して4人を取り囲んでいる。

「これ程の密度の強い屍を同時に操る死霊使いネクロマンサーが居るなどと聞いた事はないな」

サイと背中合わせで同じく周囲を見回すエヴァ

彼女は長く裏の世界で生きてきた経験上、多くの者達を見てきたが・・・これ程に大量で、中には強力な力を持つような死霊を使いこなす者などお目にかかった事はない。

「・・・データ検索。」

該当無し　　マスター、サイさん、ザジさん・・・周囲の屍から正体不明の力を感じます・・・」

茶々丸はエヴァの魔法によって魂を作り出され、更に生みの親の葉加瀬と超の意向により驚異的な演算能力と索敵能力を兼ね備えてい

る言わばスーパーコンピュータークラスかそれ以上の能力を持っている。  
それなのに調べられないという事は・・・本来、存在しない力という事だ。

「……………この気配、皇魔族の一つ……………羅震族でも変……………羅震族、遙か昔に滅びた筈……………なのに、羅震族の気配……………」

気配を感じ取ったザジは首を捻りながら呟く。

そんな彼女に対してエヴァが「羅震族……………」と聞き返すと、彼女はたどたどしい口調で説明を始めた。  
それを説明するところだ……………。

羅震族とは、かつてサイ達が生まれた魂獣界が出来るより千年以上前に存在した種族である。

現在の十種族の内の一つ、最古参の『皇魔族』が統一される前に存在していた種族の一つで、地上界より大きくかけ離れた世界“羅震獄”に存在していた者達の事。

しかし、その強大な力を以って三界（天界・神魔界・地上界）を支配しようとした際に首謀者達は滅ぼされた筈なのだが……………。

「ヤレヤレ……………んじゃ相手はまた俺の生まれた世界の連中かよ？ どうなってるんだ？ 俺の生まれた魂獣界平行世界ってのは一種の多次元世界って奴じゃねえのか？」

ゆっくりと考えたい所だが今は暇など無いだろう。

周囲に居た屍達はその手に得物を握り締め……………今既にサイ達に襲いかかる準備は完了していた。

「まあ・・・今は考えても仕方ねえ。

キティ、茶々丸、ザジ、この屍共の奥の方でかなり大きい気配を三つ感じる・・・その内の二つは生気を感じねえ。

多分、生気を感じる強力な気配を持つてる野郎がこの連中を操ってるんだろつよ。

俺は此処の連中を蹴散らしてそいつをぶっ倒す　　残りの二人は、頼む」

サイの頼みを理解したエヴァ、茶々丸、ザジは頷く。

しかしこれ程の数の屍を、消耗した状態で蹴散らすのは容易ではないだろう。

だがそんな事を考えても仕方が無い　　七魂剣を構えて屍を蹴散らそうとしたその時・・・。

不意に、目の前に居た屍達が何かによって吹き飛ばされた

サイ達が吹き飛ばされた屍達の居る場所を見ると・・・其処には巨大な十字手裏剣が突き刺さっている。

それと同時に“ガアアアン！！”と言う耳に響く音と、“ドスンッ！！”と言う何かをぶつけたような音が響く。

其処に居たのは

「オイオイ・・・何でテメエ等が此処に居るんだ？」

そう、其処に居たのは・・・。

サイに対して好意を寄せる、麻帆良学園で刹那と併せて“武道四天王”などと呼ばれる少女達。

。 拳道家・古菲、甲賀忍者・長瀬楓、銃使い・龍宮真名であった・・・。

### 第三十九話：真の戦士（後書き）

投稿完了です。

さあ、此処から始まるジェットコースターロマンスならぬジェットコースターアクション。

サイの生きている別世界の存在の筈の者達がサイ達と戦います^^

まず現れるは『王我羅旋の章』より王我血族の羅震将。

これより戦いがどうなっていくのか、それはこれからのお楽しみ

ではこれにて失礼。

次回の講釈をどうぞどうぞお楽しみに・・・。

補足：サイの必殺技の説明（七魂剣&六道拳）

不動剣（阿修羅連拳）・・・格闘ゲームで言う所の必殺技

サイが七魂剣（六道拳）のみで使える技であり、制御形態セーブモードでも使える

不動神剣（阿修羅真拳）・・・格闘ゲームで言う所の超必殺技

魂獣解放かもしくは魂鎧装の状態で見える、法力を消費して使う大技  
尚、魂獣解放状態の方が魂鎧装状態よりも遥かに強力

不動神皇剣（阿修羅真獄拳）・・・格闘ゲームで言う所の究極奥義

上記の不動剣（阿修羅連拳）、不動神剣（阿修羅真拳）とは違い、  
サイが己で編み出した奥義

本気で放てば言った通り、嵐山を焼け野原にする事も可能な程に強力（ちなみにVSテスタロス戦に出て来た『超究念動阿修羅神獄斬』もこれの応用）



#### 第四十話：月下の死闘・巻く語られぬ戦い

「ヤレヤレ・・・何でテメエ等が此処に居るんだよ？」

目の前に居る者達　　本来この場所に居る筈も無い少女達に向かつて質問を飛ばす。

前にも言った通りサイは事情を知らない、もしくは戦う覚悟も持たない連中を巻き込む事を嫌う。

故に、本来なら古やら楓やら真名やらが此処に居る筈が無いのだが・・・。

「・・・サイ、それはつれないな。」

折角手助けに来たと言うのに・・・例えお前達が強くとも、流石にこの数を蹴散らして術者の所に行くのは無茶だろう？」

肩にライフルを担ぎ、反対の手には短銃を携えてクールに呟くは真名だ。

本来なら依頼料を貰い、戦いに介入する事が多い彼女だが・・・惚れた弱みと言う奴だろう、今回は無償でサイを助けに来ていた。

尚、惚れた男の顔を見ながらも近付いてくる骸骨兵の頭を短銃で撃ち抜いているのだから、彼女の銃の才能やら何やらが凄いと云うのは改めて説明する必要も無いだろう。

「真名の言う通りでござる、サイ殿。」

詳しい事情は良く解らぬでござるが・・・此処で助太刀せぬは名折れ。

それに・・・拙者はサイ殿を我が主と見定め、そして共に行くこと誓ったでござる。その主殿を先に行かせる事こそが今拙者のすべき事だと思っただけでござるよ。」

その可憐な手の指の間に苦無を挟み、周囲に向かって投げ放ちながら言う楓。

苦無は骸骨兵達の頭蓋を砕き、大地に突き刺さる・・・其処を楓が素早く手を動かすと、苦無が手元に戻って来た。

どうやら目に見えない程の細さの糸を苦無の持ち手に縛り付けてあるようだ・・・。

「サイ〜〜、こんな愉しそうな事を独り占めなんてズルイアルヨ！！

てか・・・アイヤー！？ 私生まれてこの方、キョンシー僵尸なんて初めて見たアルネ！？

あつ、でも僵尸は骸骨じゃないアルから・・・この場合はなんて言えば良いアルカ、ゆえ吉？」

惚けた事を誰かに言いながらも近くに居た骸骨兵に崩拳（中国拳法の正拳突き）を叩き込み、吹き飛ばす古。

迫っていた骸骨たちは粉々になり、消滅する　まあ、数はまだまだ居るようだが、それでも彼女達が居れば先には進めるだろう。

・・・そんな中、古に声を掛けられた人物が後ろの森の中から顔を出す。

「・・・あの、くーふえさん？」

それに龍宮さんに長瀬さんも・・・この状況を普通はおかしく思うものではありませんか？

それにサイさんにエヴァンジェリンさんに絡繰さんにザジさん

その姿は、一体？」

其処に居たのは・・・本来、この様な戦いの場所には一切関係が無い人物。

親友、宮崎のどかの恋を応援し・・・己の心の向いている場所に故意に気付こうとしない少女。

本来ならば読書をしている方が似合っている、麻帆良図書館島探検部の一員。

そう・・・綾瀬夕映その人であった。

「オイオイ・・・何でデメエまで此処に・・・？」

この戦場とも言える場所に非戦闘員である夕映が居る事に疑問を持つサイ。

それに確かフェイトの話では『非戦闘員は巻き込まない為に石化した』と言っていた筈だが・・・。

だが・・・そんな疑問を浮かべたサイに対し、エヴァが袖を引つ張って告げる。

「サイ、今は禅問答をしている暇などあるまい。

どうやら此処らに現れている屍共は妖気の密度が薄い故に雑兵程度の力しかないようだ・・・恐らく、あの天ヶ崎千草とか言う女が両面宿難を召喚するまでの間の時間稼ぎを補助しているのだろう。蹴散らして進んでもいいがそれでは時間も力も消費してしまう

ならば此処は小娘共に任せて私達はこの状況を作り出している者を叩くぞ。

放って置いて先に進んでも良いが・・・後々面倒な事になるのは目に見えている、良いな？」

確かにエヴァの言う通り、時間を掛けていてはジリ貧だ。

なればこの様な状況を作り出している死霊使いを始末する・・・最初にサイが出した案を実行に移すチャンスだ。

・・・サイとしては納得し難いが、三人がそこらの雑兵より強い事はサイ自身がかつて手合わせをしたのだから良く解っている。

だからこそ。

だからこそサイは少しだけ迷っていたが、三人の顔を見ると・・・背を向けた。

「チツ・・・だったら任せるぞ真名、楓、古！！

俺等がこの状況を作り出ししてる野郎をぶっ潰して来るまでの間・・・頼む」

彼は信じた・・・三人を。

それに対して三人も信じて託してくれたサイの思いを汲み、はにかんだ微笑を浮かべて言葉を背に返す。

「ふっ、任せておけ・・・ただし、修学旅行から帰ったら一度映画にでも付き合ってもらうぞ?」

「あいあい、心得たでござるサイ殿　では拙者の場合は甘味処にでも付き合って貰うでござるよ」

「あゝ、二人ともズルイアル！！　ならサイ、私は暫くの間は稽古に付き合って貰うアル」

その言葉に答えるように背を向けたまま手を振る。

そしてサイは一度エヴァ、茶々丸、ザジと顔を合わせる・・・すると三人も何かを心得たかのように頷く。

三人の仕草を確認したサイは、今だ目の前で起こっている現実を信じられずに疑問を問おうとした夕映を余所に全速力で駆け出し始めたのであった・・・。

「ふむ・・・さて、任されたは良いが・・・」

「然り、実に嫌になる程に敵の数がいるでござるな・・・倒しても倒しても蘇ると言うのは面倒でござる」

周囲を見回しながら溜息を吐く真名と楓。

先ほど此処に乱入して来た際に纏めて何十体かの骸骨兵を倒した筈だが・・・バラバラになった身体を再生して再び立ち上がって来ていた。

どうやら粉々にされた部分を別の屍の無事な骨を取り込んで再生しているのだろう。

「だが、どうやら倒せない訳でも無いらしい。

完全に粉微塵になってしまった奴は再生出来ていない・・・と言う事は、再生出来ないように完全に粉碎してしまえば良いと言う事だ」

「ふむ、なれば真名殿は不利でござるな。

急所を的確に狙う狙撃の技術は凄まじいでござるが、彼奴らを粉々に粉碎するにはいかんせん弾数が必要となってくる・・・鉄砲の弾がどこぞのゾンビを撃つゲームの如く無限と言う訳ではござるまい？」

楓の言葉に真名は苦笑しながら頷く。

確かに彼女はどのような状況でも戦えるように銃弾の準備や銃の整備を欠かさず、サイの様に常に最悪の状況を想定して戦うと言う『戦場を生きる者』として最も必要な心構えを持っているが・・・まさか敵が倒しても倒しても蘇る様な相手と言う事は想定外の範囲外だったようだ。

そんな彼女に楓は微笑みながら言葉を続ける。

「なれば此処は拙者と古に任せるでござるよ。

真名殿は後方からの援護を　拙者たちは真名殿に比べればまだ

まだ未熟故、フォローをお頼み申したいでござる・・・返答や如何に？」

「フツ、私もサイやらエヴァンジェリンに比べればまだまだ未熟さ。しかしこの状況で、更に“最悪のシナリオ”を想定しておくとしたら、流石に全弾使い切ってしまう訳にも行かないな・・・解った、援護は任せておけ楓」

すると真名は手に携えている狙撃銃を肩に背負うと短銃を一丁ずつ両手に構える。

広範囲の援護の為に威力は高いが取り回しの悪い狙撃銃よりも威力は低いが連射出来る短銃の方が効果的だと考えたのだ。そんな二人の会話をウズウズしながら聞いていた戦闘狂の少女は・・・。

「そろそろ戦って来て良いアルカ？ 良いアルよね楓に真名！？ヨシ、そうと決まれば・・・早速、行つて来るアルヨオオオオオ！！！！ ホワチャアアアアア！！！！」

戦闘狂の少女は瞳をキラキラと輝かせながら脇目も振らずに飛び出す。

強さを求め・・・そして何より、惚れた漢の手助けになりたいと言う想いを抱いた古を止めれる者など殆ど居ないだろう。

半ば暴走気味に、喜悦の表情のままに拳法家の少女は『某一騎当千な三国ゲーム』のキャラクターの如く敵の群れの中に飛び込んで大暴れを始める。

己の強さを試すかの如き古の暴れっぷりを見ながら楓と真名は苦笑しあう。

そして・・・お互いに巨大な手裏剣と苦無、二丁拳銃を構えると・・・。

「それでは行くか、楓？」

「あいあい　早く行かねば古に手柄を全て取られてしまいそうでござるからな」

共に笑い・・・そして共に地を蹴り、敵の群れに向かって駆け出した

乱闘、乱戦・・・そう言った言葉で言い表す事が最も相応しい現状。古が骸骨たちの懐に飛び込み強烈な崩拳にて叩き砕き、真名は迫ってくる骸骨たちの脳天を撃ち抜き隙を作り、そして楓が分身と共に骸骨たちを粉々に破壊していく

まさに目の前で起こっている事は御伽噺かファンタジー小説の中のような光景だ。

本屋小説で読むならば問題ないが、明らかに目の前で起こっている事は一般人である少女にとっては刺激的過ぎる光景であったようである。

今己の目で見、そして感じている光景をにわかには信じがたくも・・・隠れながら戦場を見つめている夕映は米神を押さえつつ独り言を呟く。

「こ・・・これは、これは本当に現実の事・・・なのでしょうか？まるでどかやパルが読むジュニア小説のような・・・明らかに人間離れした運動能力や既存の物理法則を無視し、超越した現象

まさか、この様な御伽噺のような光景に遭遇するとは夢にも思いませんでした」

この場所に古、楓、真名、そして石化された筈の夕映が居る事には『ある事情』がある。

事はドンチャン騒ぎを終わらせた後の関西呪術協会総本山にて、皆が寝静まった所を夕映が用足トイシしに行きたくなり、部屋を出たのが始まりであった。

偶々用足しから帰ってきた後に夕映はフェイトによって友人達が石に変えられてしまうのを目撃してしまい、そのえもいわれぬ恐怖から総本山を脱出した。ファンタジー小説などを読んでいた事がある意味彼女を救ったとも言える。

その後、石にされたのどかやパルの事を心配しつつも起こってしまった事に困惑する夕映。

しかし・・・非現実的な事態に対処出来るであろう人物達が脳裏に浮かんだ彼女は、例え夢であつてもやるべき事は問題への対処だと考えて楓へと連絡する。

俄かに信じがたい連絡ではあつたが楓は直ぐに夕映の呼び出しに応じ、共に古と真名を連れて電車と自らの足で総本山へと駆けつけ、首尾よく夕映と合流を果たすと・・・サイ達が囲まれている場所へと介入したのだ。

「・・・この不可思議な光景。

あのサイさんやエヴァンジェリンさん、茶々丸さんにザジさんの格好、運動能力・・・。」

成る程・・・つまりはこれが・・・。」

夕映は頭の良い娘だ、故に今の現状を垣間見て理解してしまった。これが・・・これこそが所謂、“魔法”と言う物だろうという事を

更に・・・という事はだ・・・。



「という事はサイ君やエヴァンジェリンさんは・・・魔法使い。そして恐らく・・・いつも共に居る事が多く、現実では到底言い表せないような現象を時々起こしていたネギ先生もまた・・・」

現実には決して存在しない物。

物語の中でしか語られる事の無い現象。

知らない人間に語れば『頭は大丈夫か？』などと心配されるであろう存在・・・そんな存在が現実として今、目の前にある。

しかもそれが己のクラスに転入してきた唯一の男子生徒とクラスメイトに担任ときた。

まさにまるでジュニア向け小説の一説のようである。

「パルヤのどかが聞いたら、目を輝かせそうな展開ですね・・・」

まあ実際、自分自身の目で見た者にそのような余裕があるかは甚だ疑問だが。

それでも夕映は知ってしまった・・・現実と言う存在を超越する非現実的過ぎる光景を。

そしてこの事が、後の彼女を変える事になる事を知る者は、この場所には一人もいなかった・・・。

一方、その頃

真名、古、楓の三人に囿を任せたサイ達は、明らかに数の減った骸骨兵達を蹴散らしながら地を駆ける。

気配が大きくなっていく所を垣間見れば、どうやらこの大量の敵を召喚している人物の居る場所はもう直ぐのようだ。

・・・不意に、走りながら茶々丸が後ろを見つめてから呟く。

「龍宮さんに長瀬さん、それに古菲さん・・・大丈夫でしょうか・・・」  
此方に居る屍の兵の数がこれだけ減っていると言う事は、向こうには大分負担が掛かっているのでは・・・？」

茶々丸は『心が無い』等と自分で言うが、それは違っただろう。

先に進み、召喚を続けている死霊使いを倒す為とは言え・・・クラスメイトを囮にして来た事を心配しているのだから。

「・・・茶々丸、それ以上は言うな。

先ほどもサイが『頼む』と言っていた筈だ・・・それは奴等を信じて託したと言う事。

なれば私達がするべき事は後ろを振り返ってあの娘共を心配する事ではない　　奴等が心配だと言うのなら、それよりもこの先に控えている連中を倒す事を考える」

エヴァの言葉は冷たいようだが事実だ。

此処で心配などしていて敵兵が更に増えれば、それこそ三人の体力が持たずに犠牲者が出てしまう。

ならば先に行く者達がすべき事は・・・残った者達が少しでも楽が出来るように、この状況を作り出している者を倒す事のみ。

「・・・ハイ、マスター」

その言葉に茶々丸は小さく頷く。

気付かぬ想い人が、己の主が三人の事を信じているのだ・・・それを己が信じずにどうする？

サイとエヴァ同様、三人を信じる事を決めた茶々丸はもう振り向く事無く前を向いた。

だがその時・・・ザジの声が響く。

「・・・避けて!?!」

その声に咄嗟に二手に分かれて横に飛ぶサイ達。

すると“今まで自分達が居た場所に、何かを通り抜けた”・・・一瞬、風のようにも感じたが・・・。

通り抜けた何かは後ろから追って来ていた骸骨兵達を真っ二つに切り裂いたのだ。

「な・・・何だ、今のは!?!」

追って来ていた骸骨兵達がまるで紙を切るかの如く簡単に切り裂かれた光景を見て驚くエヴァ。

だが、後ろから迫る巨大な何かが迫ってくる気配を感じ取る・・・少なくとも、この場所に居たら危険な事は容易に理解出来た。

「クツ・・・後ろか!?!」

サイ、茶々丸、ザジ・・・とにかくこの場所から離れる!!」

言葉が放たれ、転がるかのように飛び退くや否や

広範囲を吹き飛ばすかのような炎球が大地に叩きつけられた!!

それによりサイ達は直撃を避けたが・・・中心に居た骸骨兵達が蒸発して灰となったのだ。

とんでもない火力である。

『・・・避けた、か・・・見事・・・我が斬撃を・・・避けたる剛の者よ・・・』

『・・・私の・・・術も・・・避けれた・・・もしかして・・・貴方達なら・・・』

陰惨とした声が戦場に響く

サイ達は声のした方向に視線を向ける……すると、其処には明らかに周囲の骸骨兵とは格が違う覇気のようなものを纏う男女が居た。

男の方は赤い血の痕のついた鎧とボロボロになったマントを羽織り、黒い刀身の積刃剣を持つ人物。

女の方は同じようにボロボロになったローブを羽織り、白薔薇のヴェールを被った人物。

見ようによつては美男美女の騎士と魔法使いのように見える……だが、少なくともその青白く土気色した肌や虚ろで深紅に染まった眼はとても人間だとは思えない。

『そうだな……この剛の者達ならばもしくは……』

しかし……我等はネクロミノスに反魂術にて蘇らされた身の上……望みとは違い……戦わねばならぬ……』

『……そう……また私達の願いとは裏腹に……戦わなければ……ならない。』

もう……戦いたくない……私達は……唯……安らかに眠りたいだけなのに……』

彼等は人形

誇りある死を迎えながらも、野望の手駒として尊厳ある死を奪われた悲しき英雄の成れの果て。

主が死ぬその時まで終わる事すら許されない存在……。

その名は。

『なれば……名乗ろう。』

我が名は・・・屍廻仙・・・ハーディアス・・・屍鬼王・・・ネクロミノスが親衛隊の一人也・・・」

「・・・私の名は・・・タナトリア。」

屍廻仙・・・タナトリア・・・ハーディアスと同じく・・・屍鬼王ネクロミノスが親衛隊・・・」

その名を聞いた瞬間にサイは一瞬表情が変わる。

名乗ったその名　それこそ、今より七百万年前に伝説の三英雄として今でも魂獣界に伝わる存在。

“ 剣聖・ハーディアス” に“ 賢者・タナトリア” だったのだから

「チツ、ハーディアスにタナトリアだと・・・？」

魂獣界に遥か昔から伝わる三英雄の名じゃねえかそりゃあよ。

それにネクロミノス？　魂獣界でも最もイカれていた死霊術士の名前じゃねえか。

何でそんな連中がこんな所に出て来るんだよオイ・・・」

基本的にサイは無学な人物である。

しかし・・・そんな勉強嫌いな彼であつても聞いた事のある名前を耳にし、内心舌打ちした。

だが、ハーディアスにタナトリアは先ほど本人達が言った通り、反魂術によって蘇らされたにしても・・・その主と彼らが言っているネクロミノスは現在より200万年前に滅ぼされた筈だ。

なのに、何故その名が世界を隔てた別の多次元世界にて語られるのか・・・？

・・・いや、そんな事を考えている暇など無いだろう。

『屍鬼王』と呼ばれたネクロミノスの使う反魂術、“禁術・涅槃回歸の呪”は死人を生き返らせるだけではない。

蘇らせた死者の意思を無視し、殺戮マシーンへと変え、肉体が滅びても強制的に再生させて戦わせる・・・本人が戦いたくないと願っても、安らかに眠りたいと願っても、術者が死ぬまで他者の命を奪って糧とし、永劫に戦わされ続ける呪縛である。

そのような事によって安らかな死と尊厳を汚され続けるこの外法の所業を、サイは許せなかった。

『頼む・・・我等を・・・終わらせてくれ・・・』

この・・・無限の闇から・・・我等を・・・我等を・・・救ってくれ・・・。

我が戦友とも・・・ハウセンや・・・その主たる姫様の・・・眠る場所へ・・・グ、グガアアアアアアア！？』

『こ・・・こんな事を・・・見ず知らずの・・・貴方達に・・・頼むのは・・・筋違い・・・』

だけど・・・お・・・お願い・・・もう戦うのは・・・イヤ・・・イヤなの・・・。

モルテ様や・・・ハウセン・・・それに・・・マ、マキシウス様に・・・似た・・・強い眼差しの・・・貴方なら・・・ア、アアアアアアアアア！？』

急に頭を押さえて苦しみだす二人。

何が起こったのかと驚いたような表情で見つめるサイ達を余所に苦しみ続ける。

直ぐに悲鳴のような絶叫が収まると・・・二人はゆっくりと伏せていた顔をサイ達の方に向けた。

その眼は鮮血のように禍々しく赤く光っている。

有無も言わずにハーディアスは黒い積刃剣、タナトリアは目玉のような装飾の付いた杖を出す。

そしてサイ達に向かって構えると

『……滅殺・無双鳳翼刃』

『……滅殺・無双鳳仙花』

まるで機械のように感情無く、サイ達に向かって巨大な斬撃と魔法球を放った！！

「チツ……もう開始かよ!?!」

「拙い!! あんな攻撃を何発も続けて放たれたら、恐らく此処ら周辺の結界など一溜りも無いぞ!!」

その言葉に咄嗟に四人は構えると……。

「不動神剣・八幡大菩薩!!!!」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック!!」 ニウイス・カースス 氷爆!!!!

「充填率50%……レルガン電磁砲、発射します」

「……月光神姫・アルテミシア……」

同時に必殺技と魔法を放つ!!

双方からぶつかり合う二つの巨大な衝撃波は、互いに斥力と引力を放ち中心で周囲の骸骨兵達を吹き飛ばしてしまう程の大爆発を引き起こした

こんな物が実際、関西呪術協会の総本山に張つてある結界になど直撃したら……数発どころか、下手すれば一撃で結界など破壊されてしまっていたかもしれない。

立ち上る豪煙。

周囲が見えない程の量の土煙の中、エヴァがサイに向かって言葉を飛ばす。

「・・・今だ、サイ！！」

この視界が覆われる程の土煙が立ち上っている時を利用して、貴様  
は奴等を使役している『ネクロミノス』とか言う輩の元へ向かえ！  
！」

「ああ！？ 馬鹿か teme ！？」

あの攻撃力見たろ！？ 連中は自分の法力だの何だのに関係なくさ  
つきのを連発出来るんだぞ！？

此処で俺が抜けたら、完全に封印が解けてねえ状態の teme じゃ例  
え茶々丸とザジが居ても耐えられる訳ねえだろうが！！

俺等四人で放ったモンと、連中二人が放ったモンが互角なんだぞ！  
？」

そう、相手は屍だ。

故に命を持つ存在のように力が有限ではない・・・。  
それに痛みも感じない故にリミッターを解除して放つても何の問題  
も無い。

そんな状態で四人で何とか抑えられたものを三人で抑えるなど無茶  
や無謀以外の何者でもないのである。

だが・・・そんな事を言うサイの頭をエヴァはぶん殴ると言葉を返  
した。

「この大馬鹿者が！！ 今はそんな事を言っている暇などあるのか  
！？

このまま此処で千日手の状態でやっていても此方は何れ魔力や法力



が底を尽く・・・そうなれば誰が尊厳ある死を踏みにじられているあの二人を救ってやれるんだ!？」

エヴァは一度深呼吸をすると笑いながら言葉を続ける。

「それに貴様は私を誰だと思っている？」

世界でも最強クラス、人々が伝説や事象として恐れる存在・・・  
「ダイク・エヴァンジェリン闇の福音」だぞ？ 貴様と同じく、己よりも力に差がある強い輩と戦ってきた事など数え切れん程あるわ。

それに私は『不老不死の吸血姫』だから貴様が思う程に簡単に死なんし、茶々丸やザジも貴様が思う程に弱くなど無い・・・だから此処は私達に任せろ、貴様は貴様のやるべき事をやれ」

後ろで頷く茶々丸とザジ・・・此処まで言われて居るのに行かねば漢が廢る。

エヴァも茶々丸もザジも、そして此処に来る為に置いて来た真名も楓も古も、そして先に行ったネギも明日菜も刹那も今迫る未曾有の危機を食い止めようとしているのだ。

此処で迷い、時間を浪費する事は・・・それらの者達の思いを踏み躪る事に過ぎない。

「・・・チツ、解ったよ。

その代わりテメエ、俺がネクロミノスを始末するまで絶対に無事で居る!!」

無事じゃなかったら・・・蹴り入れるからな!!」

その言葉に対し、エヴァも茶々丸もザジも直ぐに返した。

「当然だ、先ほども言ったが私を誰だと思っている？」

「サイさんに決して辛い思いをさせるような事は致しません・・・

そう、決して」

「・・・だから、サイ・・・信じて・・・」

答えを聞いた・・・もうそれ以上は言葉など要らない。

サイは一度目を瞑り、この状況を作り出している死霊術士・ネクロミノスの居場所を探り当てる。

そして背を向けたまま言葉を飛ばした・・・。

「んじゃ、行つてくらあ・・・此処は任せたぜ！！」

野郎をぶっ潰して帰ってきた時のテムエラの馬鹿面、楽しみにしてるぜ？」

そう言つて拳を上げてエヴァ達の方に向けるサイ。

それに対してエヴァも茶々丸もザジも同じように拳を上げると、サイの拳にぶつけ合わせながら言う。

「フン、任された　　貴様の馬鹿面も楽しみにしているぞ？」

「ご無事で、サイさん・・・必ず皆無事で合流しましょう」

「・・・・・・・・（コクコクッ）」

拳を離すサイ。

その行為を最後に、彼は振り向く事無く立ち上る土煙を利用して消えて行つたのであつた・・・。

始まるは月下の死闘

消して語られる事無き戦いの記録

運命の進む先は一体何処なのか？  
それを知る者はまだ居ない

第四十話：月下の死闘・巻く語られぬ戦い（後書き）

投稿完了です。

さて、此処で余計な事を書けば楽しみが減ってしまいます。

故に今回は簡単なあとがきで終わりとさせていただきましよう。

今より始まる戦いは・・・まだ前哨戦。

真なる鬼神との戦いを前に、熱くなってください！！

（まあ文才が無いので熱くなれないかもしれませんがね）

## 第四十一話：月下の死闘・忒くそれぞれの成すべき事

「さて・・・しんがり殿を引き受けたは良いが・・・。

此処で戦い続けるのはまさに愚の骨頂、特にあの二人を共に戦わせるのはお互いの欠点を補わせあっている・・・例え私が不死身だとしても、あれ程の攻撃と連携に晒されては滅ぼされてしまう可能性が高い。

となれば、考え付くのは二手に分かれて戦うと言う方法のみか」

完全に封印が解除されていない状況でも冷静に思考を巡らせるエヴァ。

彼女が呟いた通り、敵の二人『ハーディアス』と『タナトリア』は一人ずつでも普段お目に掛かる事は稀な程の覇気を放っている・・・恐らくナギ達『紅き翼』程ではないにしても、それに迫る位の力を持っているだろう。

剣士には剣士の、魔法使いには魔法使いの欠点と言うものがある。剣士は高い戦闘能力を持ち、前衛として魔法使いの剣となり盾となれる存在だ。しかし、代わりに魔法関係や遠距離からの攻撃には弱い・・・魔法使いはその逆に遠距離への戦闘を得意とするが、接近戦を挑まれてしまえば魔法を唱える時間も無くやられてしまう。これこそが魔法使いが従者と言う形で前衛を必要とする理由。そう言った意味では、この二人はそれが驚くほどに顕著に現れ、そして脅威となっていた。

凶悪なまでの魔法、凶悪なまでの斬撃。

その二つがお互いの欠点を補い、そして高めあう事で絶望的なまでの破壊力と戦闘力を生み出しているのだ。

ならばどうするべきか？ それは聡明な人物で無いにしても理解出来るだろう。

「・・・だが、それは・・・」

しかし・・・その方法を取る事をエヴァは躊躇する。

別に命が惜しい訳では無い　しかし、その状況になってしまえば彼女は目の前の敵に集中しなければならなくなるのだ。

その為、幾ら仲間が危険な状況になったとしても・・・助けに入る事は出来ない。

だがこのままの状況で二人を相手にしたとしても確実に圧倒的な力に押し切られてやられるだけだ。

ならば少しでも、それこそ1%にも満たない勝率を少しでも上げる為にはその方法が一番良いと考えた。

・・・そんな考え事をし終わった後、エヴァは静かに自らの従者ともう一人に向かって小さく作戦を呟く。

作戦の概要を話し終わった後・・・険しい表情をするエヴァに対し、茶々丸は口を開いた・・・。

「マスター・・・お任せください。

必ずザジさんと二人で果たして見せます・・・ですので私達を、信じてください」

分の悪い賭けだと言う事は茶々丸自身も気付いている。

しかしその方法が最も勝率を上げる方法なのだという事を、彼女自身のスーパーコンピューター並の人工知能でも理解していた。

ここで死ぬ可能性もある・・・だがそれでも、可能性が少しでもあるのならばそれに賭けて見ようと茶々丸は考えるようになっていたのだ。

その己は人間ではなくガイノイドだ、いざと言う時は己を犠牲に

してでもザジを護れば良い　　サイに会えなくなる事、エヴァに  
会えなくなる事は実に辛い、それでも自分に出来る事を精一杯や  
れば良いと茶々丸は考えていた　　まあそれは無事に会おうと  
言う約束を違える事なのだが。

「フン・・・お前も言うようになったな茶々丸。  
良からう、なればザジ・レイニーデイと共にあのタナトリアと言う  
女の方を任せる。」

先ほどから見るにあの女は攻撃を放つまでに此方の魔法使いと同じ  
く時間を必要としているらしい・・・なればその隙を利用して一気  
に距離を詰めて攻撃を放たせる合間を作らせるな」

そう言うとエヴァは肩から吊るしていたポーチから小太郎が持つて  
いた物と似たような呪符を取り出す。

これは魔法の殆どが封印されている事を考慮してエヴァが修学旅行  
に来る前に己の知識をフル活用して自作した魔法障壁展開用の魔法  
符である・・・本来は強力な相手と戦う際に使用しようとしていた  
物の為、障壁の防御力はそんじょそこの安物の呪符などとは天と  
地ほど差がある代物だ。

「これを使え。」

先ほどの破壊力を考えて此方の魔法と換算すれば、恐らくは中級魔  
法に匹敵する破壊力を兼ね備えているだろう・・・魔法障壁を持つ  
ていないお前達二人には脅威となる。

私はハーディアスとか言う剣士の方を倒す　　そんな心配そうな  
表情をするな、一応私は力を抑えられているとは言え昔とは違い不  
死の特性が復活しているから心配要らん」

それにもう一つ、エヴァはハーディアスと言う男の攻撃を見、そし  
て感じて一つの疑問を持った。





「ラス・テル マ・スキル マギステル・・・魔法の射手 サキタ・マギカ 連弾 セリエ・  
ス・ルキス  
光の11矢!!!」

桜が散るかのような連続の斬撃。

型もヘツタクレも無い力任せな斬撃に放たれる光の矢。

それらは周囲に存在する“何か”をまるで猛獣が獲物を喰らうかの  
ように切り裂いていく。

祭壇の近くには誰かしらが来る事を想定したのか・・・不気味な姿  
をした魔獣達が護るように鎮座している。

数はおおよそ40〜50と言った所だろう、先ほどの所よりは明ら  
かに少ない。

「・・・クツ、お嬢様はもう直ぐ近くに居るといふのに!!!」

鎮座する魔獣達を切り裂き、進もうとする刹那。

それと背を合わせるようにして周囲に居る魔獣達を睨みつつ大剣を  
振り回す明日菜と魔法の詠唱を唱えるネギ。

素人の無茶苦茶な斬撃やネギの魔法によって魔獣達は切り裂かれる  
が・・・その屍骸を踏みしめ、感情も無いままに少しずつ三人の元  
に迫ってくる。

「ちょ・・・ちよつと・・・何なのよこいつ等は!? 倒しても倒  
しても減らないじゃないのよ!?!」

時間にして10分〜20分ほどの間、迫ってくる敵を倒し続けてい  
た三人。

しかし切り捨てつつ場所を少しずつ移動し続けていると言ふのに一  
向に敵は減る兆しを見せていない。

魔獣達は敵ついで外見をしている割に見掛け倒しと言って良い程に弱

く、先程から戦い続けているのだから少なくとも数は減っている筈なのだが……？

その時、ネギが倒している魔獣達を見て気付いた。

いや、言うなれば気付いたのは切り裂かれて倒れた魔獣達を何気なく見つめていた故だが。

なんと……魔獣達は屍を踏み散らしながらそれを自らに取り込むと、増殖していたのだ

「なっ……そんな!？」

さっきから倒しても倒しても数が減らなかったのは、アメーバみたいに分裂しているから!？」

こ、こんな魔物は魔物図鑑でも見た事無いよ!!」

実際の所、増殖する魔物と言うのは居ない訳ではない。

スライムやブロボと言った軟体型の魔物は自らアメーバやミトコンドリアのように体を分割して数を増やす事が出来る。

しかし……ネギ達三人が戦っている魔獣は明らかに軟体型の魔物ではない。

それは魔獣達を自らの刃にて切り捨てている刹那の方が良く解る筈だ……その独特の“肉を斬った”と言う慣れたくも無いような感触が、目の前の魔物の群れが軟体型魔物でない事を表している。

ならばこれらの魔物は一体、なんなのだろうか……？

「……まさか……」

そこでふと刹那がある事に気付く。

よくよく考えてみればあの天ヶ崎千草という敵の頭は、嚴重に封印されていた筈の禁術を解放していた。

確か長から昔に聞いた話では、禁術は全部で三つあったと記憶している。

一つは『狂転変生の呪法』

圧倒的な戦闘能力を得る事と引き換えに対象者を狂わせて狂戦士バサカーと変える術。

この術の危険さはサイチ小太郎の戦いによってもう十二分に理解されているだろう。

二つ目は『涅槃反甦の呪法』

本来は死んだ筈の存在を甦らせ、自らの尖兵として使役する術。

要はハーディアスやタナトリア、それ以外の骸骨兵などがそれに含まれるのだが・・・しかし彼らの使役者はネクロミノスなる人物である筈だが・・・。

そして最後の三つ目が『屍魂創操の呪法』

屍や魂、肉体に幽体、物質に無機質など存在する物をその“存在する為のエネルギー”を強引に使う枯れ果てるまで無限に増殖させ続けると言う術だ。

恐らくはこの魔物達にはこの術が施されているのだろう。

この術は説明を変えるなら『使い捨ての駒を時間稼ぎに使う』と言うもの。

確かに無限に増殖し続けると言うのは脅威以外の何ものでもない・しかし、数が増えれば増える程に魂や肉体と言う物はどんどん劣化していつてしまう。

要はビデオやDVDをダビングするのと同じ事　最初は画質は良いかもしれないが、最終的には画質がどんどん荒れて見れたものではなくってしまふ。

まさに完全に“捨て駒”に施す為の禁術であり、他二つと同じくそ

の非人道的な効果が理由で封印された“最低”の禁術。  
そんなものを使ってまで足止めをしようとするとは・・・完全に天  
ヶ崎千草と言う人物は腐っている輩の様だ。

「クツ・・・此処で戦っていても埒が明きません！！  
ネギ先生、明日菜さん・・・此処はこいつ等を無視して先に進みま  
しょう！！」

元々、増殖をし過ぎた所為で数がいるだけの烏合の衆に過ぎません  
それに早くしなければ・・・」

今の状況を考え、時間稼ぎに過ぎないと言う事を理解した残りの二  
人も頷く。

しかし、不意に響いてきた声によって言葉は途中で途切れてしまう

「うふふふふ・・・やっつと、見つけましたえ？

さあ、センパイ　ウチと一緒に“イイコト”しまひよ　」

後ろから掛けられた言葉に振り向く刹那。

そこに居たのは双手に小太刀を握り締めながら恍惚とした表情で嫌  
な笑いを浮かべながら近付いてくる少女。

・・・そう、天ヶ崎千草の協力者である・・・人を斬る事に狂った  
剣鬼である月詠が其処にはいた。

ちなみに彼女の言う“イイコト”とは、『斬り合い』だと言う事は  
言うまでも無い・・・。

「チツ・・・貴様、月詠か！！　こんな急いでいる時に　」

月詠と相対す刹那。

その間に切り裂かれた魔獣達はどんどん増殖して行き、例え弱くと

も周囲を覆い尽くす程の数となってしまうていた。  
この状態では無視して先に行く事も、敵を全滅させる事も難しいだ  
ろう……。

まさに最悪の状況となってしまうた先遣隊。

この間にも両面宿難の復活への儀式は進んでしまっている　　だ  
が、今はそんな事など考える余裕を敵はくれない様だ。

嬉しそうな笑いを浮かべる月詠。

そして周囲の大量の魔物たち……その二つは一瞬の沈黙の後に囲  
んだ三人へと踊りかかって行くのであった……。

そして場面は変わり

サイは一人、死霊達を生み出している張本人である人物“ネクロミ  
ノス”の居る場所に向かっていた。

自らの気配を感知出来る能力をフル活用しながら進んでいく。

『『『『『オオオオオオオオオオオオ……』』』』』

勿論、途中で妨害もあつた。

サイの目の前で地面の土が盛り上がると、其処からまるで死神のよグリームリバー  
うな姿をした者達が現れる。

ボロボロのコートに鋭利な大鎌を持ち、先に進まんとするサイを食  
い止めようとしているのだろう。

「邪魔だ、退け!!」

しかし、そんな妨害で止まるようなサイではない。



て行く。

『ギ、ギガアアアアア!?』

それはまるで一陣の風。

いや、風と言うよりも暴嵐に近いだろうか？

両手に携えられた刃はサイの進路上に居る屍兵達を切り裂き、砕き、吹き飛ばしていく。

『ガアアアアアアアア!!!』

サイの目の前にいた一匹が空中に浮かぶとそのまま鎌を構えて斬り掛かって来た!!

だが・・・サイはそのまま走り抜けながら更に銀戦斧アマツマラを投影して口に咥えると、迫っていた鎌の刃を食い止める。

更に二振りの刃を後ろに迫ってくる屍兵達の群れに向かって投げてから指を鳴らすと、二本の刃が屍兵達を巻き込んで大爆発を引き起こしたのだ

「ウウウオオオオラアアアアア!!!」

巨大な刃渡りの斧を口から放して両手で握り、横薙ぎに一閃する。

それにより目の前にいた屍兵は押されてバランスを崩し、そのまま横一文字に胴を切り裂かれて消滅した。

するとサイは片手に銀戦斧アマツマラを持ち、もう片手に身の丈に近い長さの水嶺槍ワダツミを投影してからまた走り出す。

突き、断ち、斬り、裂く・・・。

まさに八面六臂の如き大暴れをしながら進んでいくその様は“暴風”シユトウルムウインドと言い表すが相応しいだろう。

疾風怒濤と冠しても間違いではない。

シユトウラム・ウン・ト・ドラク

しかし、何処から現れているのか敵は減らない。  
先程から文字通り羅刹の如く戦い続けて先へ進んでいると言つのに、  
直ぐに進路を塞がれてしまうのだ。  
周囲を走りながら見渡しながらサイは呟く。

「そうか・・・此処は古戦場か。」

さつきからブツ倒してもブツ倒しても敵が減らねえと思ったたら

そりゃあ戦場なら死体も屍も多いわな」

そう、何故これ程に大量の死霊を使役できるのか。

考えても見れば此処に来る前に関西呪術協会の長が『かつて此処には両面宿難と共に暴れまわった四体の大魔獣が居る』と言っていた。と言つ事は 少なくともそれらを封印する為に“犠牲者が出なかつた”などと言つ事は決してありえないだろう。

千か、もしくは方に近い数の犠牲者が出、それらがこの場所に安らかな眠りについていたらとおかしくは無い。

・・・ネクロミノスはそのような安らかな眠りについていた者達を強引に使役しているのだ。

安らぎを奪われ、尊厳ある死を奪われ、人としてや戦士としての誇りさえも踏み躪られる それがどれ程の苦痛なのかサイは理解していた

『『『『『オオオオオオオオオオ・・・』』』』』

またも大地を隆起させて現れる屍の兵。



最早、言葉すら語る事も出来ず・・・使い捨ての駒にされるだけの存在と言っても過言ではない人の成れの果て。だがサイの耳には悲痛な彼らの想いが、そして彼らの望みが届いていた。

助ケテクレ

痛イ、痛イヨ

苦シイ

モウ止メテ、モウ戦イタクナイ

誰デモ良イ、俺達ヲ

私達ヲ、解放シテクレ

静かに眼を閉じるサイ。

戦場で目を瞑るなどと言う事は命取りになると言う事は誰よりも良く知っている。

しかし、それでも 安らかな死を奪われた者達の声を聞く為に彼はあえてその身を危険に晒した。

そしてゆっくりとその瞳が開かれると、小さく口から言葉を溢す。

「ああ、アンタ等の望みは良く解ったよ。

心配すんな、ゆっくりと眠らしてやるから安心して逝けや・・・アンタ等を利用したクソ野郎も直ぐに地獄に送ってやるから・・・」

するとサイの手に握られていた銀線斧アマツマラと水嶺槍ワダツミが消える。

更にどうした事かその手に纏われていた六道拳アスラまで光を放ちながら消えてしまった。しかし、いつの間にかサイの双手にはグリップと銃身が変わった装飾の付いた白と黒の拳銃が一丁ずつ握られていた。

これこそがサイの持つ、サイ自身の神具アーティファクトの一つ。

七魂剣スサノオ、六道拳アスラと共に存在していた・・・サイの“他人からの借り物ではない”もう一つの神具。

ある意味ではサイの固有能力により、強力で残酷な力を持つ存在・・・。

その名は

「双魔銃ニユクス　　アンタ等を再び眠りに帰すモンだ。

さあ、掛かって来いよ・・・時間もあんまりねえんでな、束になって向かって来い！！」

その言葉に合わせるようにして襲い掛かってくる屍兵達。

鎌を振り上げて纏めて向かっていくその様は、さながら百鬼夜行とでも言い表した方が良いか？

しかし、サイは慌てる事もなく・・・拳銃を手に携えながら構えのようなものを取った。

そして

「オラアアア！！！！」

掛け声と共に向かってきた屍兵を回し蹴りで吹き飛ばす。

そのまま至近距離、まさに屍兵達の懐に飛び込むと 顎に双手の拳銃の銃身に付いた刃を突き刺し、引き金を引いた！！

ダン、ダンッ！！！！

銃声と共に吹き飛ぶ屍兵の頭蓋、撃ち抜かれた屍兵は今までと違いバラバラになって崩れるのではない。

銃弾が当たったその部分からまるで削り取られたかのように跡形もなく消えたのだ。

「オラオラオラオラアアア！！！！」

するとサイは身を翻し、まるでフィギュアスケートのスピンの様に回転しながら銃弾を撃ち放つ。

接近戦でありながら巧みに蹴りにより敵を蹴り飛ばし、接近して銃弾を撃ち放つという技法 真名が使っていた華麗な二丁拳銃による乱舞とは違い、どこか荒々しい戦い方だ。

見方によっては何処となく格闘術のようにも見えるこの戦い方で、屍兵達はどんどん跡形もなく消えていく。

だが、撃ち続けていた所為か拳銃から銃弾が発射されなくなる。

どうやらこの銃、弾切れもあるらしい・・・するとサイ、今度は銃のグリップではなく銃身の方を握った。

そのまま特殊な装飾の付いた拳銃のグリップで屍兵を薙ぐと、まるで鋭利な刃物で切り裂かれたかのように腕や足や体が切り裂かれたのである・・・。

そう、この双魔銃ニユクスはただの拳銃ではない。

元々この拳銃はサイの能力である“アビリティキャンセラー能力無効化”を銃弾として撃ち出せる力を持つ。

アンチアビリティ・アビリティファクト

“対能力者用神具”と呼ばれ、魂獣界全土を見渡しても他に類を見



握られていた双魔銃ニユクスが消える。

この神具は七魂剣スサノオ、六道拳アスラを上回る程の異能と破壊力を持つ。

しかし、その代わりに使用する法力の量も能力に比例してかなり消費してしまうという欠点を持っていた。

故にサイは七魂剣や六道拳に比べても使用する事が少ないのである。

周囲に居た屍兵はもう跡形もない。

サイがその双眼で見つめる先　まるで黒い霧のようなものが発生している場所から不快な気配が立ち上り続けていた。

・・・どうやら先程までは周りを埋め尽くす程の数の屍兵が居た為に見えなかったが、恐らくあの黒い霧の中に件の死霊術師くだんネクロマンサーノスが居るのだろう。

「・・・やっと見つけたぜ」

小さくそう呟きながらゆっくりと立ち上がるサイ。

その手にはサイの持つ三つの神具の中でも、模倣神具を多重召喚しない限りは一番法力の消費の少ない六道拳が纏われている。

そして体の調子確かめるように腕を回したり、首を回した後

おもむろにその黒い霧に向かって駆け出したのであった・・・。

第四十一話・月下の死闘・式（それぞれの成すべき事）（後書き）

更新完了です、皆さんお待たせしました。

つじつまが合つて居ない部分が多いですがご容赦ください。

今回も物語の途中ですのであえて書くべき事はありません・・・次からがバトルとなりますので、どうぞお楽しみに^^

P.S.

【双魔銃ニユクス】

オリジナルの神具で元ネタはOVA『マシンカイザーSKL』の主武器の一つ

グリップに刃、銃身に鉄杭の付いた二丁拳銃“ブレストリガー”

元々銃身に鉄杭が付いている為にそれを突き刺して銃撃が可能、更に残弾が無くなった際にグリップの刃を使って手斧のように使用したり、二つを合わせて大斧のように使用する事も出来る遠近両用の武器。

また、作者は『真（チェンジ！）ゲッターロボ（世界最後の日）』が好きなので、ゲッター1で大量の量産型ゲッタードラゴンと戦うシーンをオマージュしました^^

上記の二つは本気で良作ですので、もしも興味がある方がいましたらお近くのレンタルショップで借りて見てみてください^^

## 第四十二話：月下の死闘・参る対決、魔女タナトリア

Side 茶々丸&ザジ

凄まじい爆発により離散させられてしまった茶々丸とザジ。

立ち上る土煙の向こうで赤く光る何かが目につえられる・・・どうやら人の影である所を考えれば、自分達が戦う相手だという事が嫌でも理解出来た。

ゆつくりと土煙が薄くなり、其処にまるでマネキンのように微動だにせずに立っていた人物。

それは勿論、かつて此処ではない別の世界で英雄と呼ばれたらしい人物の一人・・・魔女・タナトリアである。

「・・・・・・・・どうするの？」

既に敵は茶々丸とザジの場所を見つけている。

立ち止まっていたら直ぐにタナトリアの強力な魔法によって悉く消滅させられてしまうだろう。

今、もう既に選べる選択肢は殆どないに等しいのだ。

「マスターはあの方が魔法を放つまでに時間が掛かると言っていました。」

確認した所、強大な力の反応は感じません・・・だから今、魔法の準備が終わる前に距離を詰めてしましましょう。

・・・時間がありません、少しでも相手に時を与えてしまえば相手の方が有利となってしまうでしょうから」

更にザジの耳元で何かを囁く茶々丸・・・その説明を聞いたザジは一度不安そうな心配そうな表情をする。

しかし茶々丸の意志が曲がる事がないという事を理解すると頷き、再び自らの神具である黒妖爪ヤタガラスを構えると地を蹴った。茶々丸もまた双手にサブマシンガンを転送すると同じように地を蹴り、タナトリアとの距離を詰める為に走り出す。

「距離想定完了、射撃を開始します」

走りながら双手に携えるサブマシンガンを発射する茶々丸。

弾丸は空を切り、天を駆けてタナトリアへと迫る・・・彼女は直ぐに魔法の詠唱を止めると目の前に杖を向けてバリアのような物を張った。

弾丸はバリアによってタナトリアに当たる事無く地へと落ちて行く。しかし、当たらない事を茶々丸は気にする事も無く、寧ろある程度の近くまで来ると立ち止まりサブマシンガンを乱射し続ける。

所詮ただの鉛の玉に過ぎない銃弾は空しくタナトリアの障壁を貫く事無く先程と同じように地に落ちた。

本来、大量の法力を持つ者達には大抵の普通の攻撃は通用しない。たとえ至近距離でRPG-7を撃ち込もうが、戦略兵器の火炮を叩き込もうが、空爆を落そうが傷一つ付けられない。その事を茶々丸はサイの過去を主と共に垣間見て知っていた。

法力による障壁を打ち破る方法は二つ。

一つは敵の有する法力に匹敵するか、それとも上回る程の力をぶつけて障壁を無効化させるという方法。

そしてもう一つは・・・法力回路を破壊出来る同じ力を持った存在、つまり神具を使って敵を倒すという方法である。

茶々丸は自らの主のように圧倒的な魔力を有している訳ではない。



更にサイヤザジのように神具を持っている訳でもない 故に彼女が幾ら攻撃を続けたとしてもタナトリアの強力な障壁に傷一つ付ける事など不可能なのだ。

・・・だからこそ彼女は“自らが囷となり、ザジが攻撃を仕掛けられるチャンスをも命がけで作る”と言う選択肢を選んだのである。

“カチンッ、カチンッ！！”

引き金を引いても弾丸が出なくなる・・・どうやら弾切れを起こしたようだ。

しかしそんな事など元々想定範囲内、囷となる為にはもっと派手に戦わなければならぬ事は理解している。

「・・・ポットガン転送開始」

淡々とした口調で呟く茶々丸。

サブマシンガンが光を放ちながら消えると、今度はその双手に小型のガトリングガンが二丁握られる。

その重みを気にする事無く茶々丸は持ち上げると、タナトリアに向かって再び銃弾を乱射し始めた。

全ての弾丸は空しく地に落ちる。

本体どころか障壁にすら傷一つ付けられぬ状態であり、攻撃を防御し続けていたタナトリアは先に面倒な攻撃をしてくる茶々丸の方に意識を向け、先程のように弾切れになるのを待つ。

表情が殆ど無く、人形のようなその姿で一步ずつ茶々丸の方に近付き始めているその様は・・・さながらホラー映画の不死身の怪物を想像させる。

・・・しかもなまじ容姿が美しいのだから、恐ろしさは倍増していた。

しかし、先程も書いたがこれこそが文字通り“チャンス”である。

「……今ですザジさん、私に相手が気を取られている内に」

その無言の目線の意味を理解しているザジ。

タナトリアの全ての意志が茶々丸に向いているこの好機……隠れてチャンスを伺っていたザジは深い藪から一気に飛び出し、全速力で背を向けたタナトリアの元へ迫った。

『……!?!?』

後ろから感じた気配に慌てて振り向こうとするタナトリア。

だが、その身体は弾を撃ち尽くして必要の無くなったポッドガンを投げ捨てていた茶々丸によって掴まれて身動きが取れなくなっている。

強引に手を外そうとするが、ガイノイドである茶々丸の万力のような力で掴まれている身体はびくともしない……。

そして、一瞬の静寂の後

「……月光神姫・アルテミシア……」

ザジの神具、黒妖爪・ヤタガラスに黒い闘気が纏われる。

まるで猛禽種の鋭い爪のようなオーラを纏った鉤爪……それが背中の方からタナトリアの腹を貫く。

その瞬間　タナトリアの赤い目から焦点が消え、力無くゆつくりと崩れ落ちるのであった……。

「これで・・・勝ったのですかね？」

警戒しながら倒れているタナトリアを見つめる茶々丸。

倒れているその背中には大きな傷跡がある　普通どころか、流石に人外の存在であったとしても胸に穴が開けられて生きている者など居ないだろう。

しかし相手は本来は安らかに眠っている筈の“死者”、故に完全に沈黙させられたのは見たただけでは解らなかった。

「・・・・・・・・（コクッ）」

茶々丸の問いかけに倒れていたタナトリアを見つめていたザジは頷く。

もうタナトリアが起きる事はないだろう・・・たとえ不死者であれ、心臓の代わりである死霊術師によって作り出された擬似魂石を破壊されれば動く事はない。

要は電化製品が大なり小なりの電池を抜かれてしまえば使えなくなるのと同じ事である。

「そうですか・・・では、ネギ先生達の元へ向かいましょう。

マスターやサイさんの事も心配ですが、お二人がもし此処に居れば『自分達の心配など良いから先に行け』と仰る筈です」

その言葉に再び無言で頷くザジ。

そう、今は関西呪術協会の長である近衛衛春の言っていた“両面宿難”の復活を阻止しなければならぬ。

確かにネギや明日菜、刹那が先行しているが・・・少なくともサイやエヴァと違い、戦闘経験が豊富という訳ではないのだから間に合わなくなる可能性もある。

それならば例え頭数だけであつたとしても数が多いほうが阻止出来る可能性は少しは高くなるだろうと彼女達は考えたのだ。

ゆっくりとネギ達が向かつた方向に視線を向け、歩き出そうとした茶々丸とザジ。

完全に倒れていたタナトリアから視線が外された次の瞬間　　瞑  
られていた彼女の目がかつと見開かれ、双眼が禍々しく紅く怪しげに光つた

そしてまるで操り人形のように立ち上がると・・・その掌をザジの方に向けて言い放つ。

『・・・滅殺・煉獄禍風』  
めっさつ・れんごくまがかぜ

不意を突かれた・・・。

そう気付いた時には既にタナトリアの掌から巨大な風の衝撃波が放たれていた。

偶然、後ろで物音を感知した茶々丸は警戒していたが・・・ザジは完全に気付いては居ない。

「!?!? 危ない、ザジさん!?!」

茶々丸が叫び声を上げた事によりザジも気付くがもう遅い。

既に放たれた衝撃波は咄嗟に避ける事も出来ない距離へと迫っていた。

不意に眼を閉じてしまうザジ・・・だが、横から強烈な衝撃を受けて彼女は吹き飛ばされる。

「・・・!?!?」

眼を開けたその時、彼女の目に映つたのは茶々丸に風の衝撃波が叩

き込まれる光景。

まるでスローモーションのように爆風が巻き起こり・・・茶々丸は吹き飛ばされて大地に叩きつけられた。

そう、庇ったのだ・・・茶々丸が自らの身を呈して、ザジを攻撃から・・・。

「・・・ピ、ガアア・・・破損率・・・90%・・・。  
だ・・・だい・・・(ザー)・・・じょう・・・(ザッツ)・・・ぶ・・・  
でしたか・・・(ザザー)・・・ザジ・・・さん・・・?」

体中からスパークを放ちながら呟く茶々丸。

着ていた洋服は見る影もないほどに炭化してぼろ布と化し、いたる部分に輝が入っている痛々しい姿。

だが、己の事など気にせずエラー音を出しながらも茶々丸はザジの事を心配していた。

「・・・茶々・・・丸・・・さん・・・!!」

急いで助けに駆け寄ろうとしたザジ。

しかし・・・目の前に居たタナトリアの存在がそれを許してはくれなかった。

『・・・ウ、ウアアアアアアアア!!!!』

悲痛な叫び声のような物を上げるタナトリア。

するとその身の背中からどす黒い液体が噴出したかと思うと、身体を貫いてまるで蛸の足のような姿をした触手が現れたのだ

今まで以上に生気をなくした虚ろな表情で、背中から生えた触手をまるで蜘蛛の足の如く大地に突き刺しながらタナトリアは狂ったように晒いだす。

『ウフフフ・・・フフフフ・・・フフフフフフフフフフ！！！！』

辛うじて人の形をしているが・・・もう、これは完全に化物だ。クリーチャー

一頻り晒い終わった後、タナトリアの形をした化物はザジの方を見・  
・其処に向かつて触手を伸ばした。

「・・・・・・・・くっ！！」

凄まじい速度でその身を貫かんとするかのように伸びてきた触手を  
紙一重で避けるザジ。

余りのスピードの速さに避けきれず、肩に鋭利な刃物で切り裂かれ  
たかのような傷跡が付く。

そして後ろを見れば、触手の突き刺さった場所は周囲に輝一つ入れ  
る事もない綺麗な円状の穴が空いていた。

当たったら最後、確実に身体に風穴が開いてしまう程の一撃  
という事だ。

『クフ・・・クフフフフフフ・・・』

休ましてくれる時間を与える心算はない。

連発して触手をザジに向かつて放つタナトリア・・・何とか急所は  
外してはいるが、腕や足をカマイタチのような衝撃波ソニックブームによって斬ら  
れ、血を流す量が増えていく。

・・・本来ならば触手を纏めて放てば一撃で殺せるだろうに、タナ  
トリアは要はいたぶって遊んでいるのだ。

まさに完全に危機的状況となってしまうた二人。

攻撃を仕掛けようにも遠距離から触手を伸ばし、少しずつザジの肉  
を斬り、機動力を奪うタナトリア。

だが、この状況でザジに出来る事は攻撃を避け続ける事だけであつた……。

倒れていた茶々丸。

力なくその視線が見据える先には腕や足などから血を流しながら必死にタナトリアの触手攻撃を避け続けているザジが映る。

自分だけ倒れている訳にもいかない……そう考えて立ち上がろうとするが、四肢はまるで大地と一体化してしまつたかのようにびくともしない。

「……ピ、ガアアアア……破損箇所……全身……中……。  
四肢……回路……切断……状……態……センサー……  
破損……魔力……エネルギー……放出……量……増大……  
」

時より眼に仕込まれたセンサーカメラにもノイズが走る。

調べてみた所、感情を司る人工知能の回路は無事のようにだが……それ以外の部分は調べるのが嫌になる程に、見事に殆どの部分が破損していた。

しかも最悪な事に茶々丸にとっては人間の心臓と同じである魔力動力炉にまで致命的な損傷が刻み込まれてしまつていたので。

「……動力部……の、破損……箇所……被害、甚大……  
修復……不可能……」

修復が不可能という事はつまり、もう助からないという事だ。

例えば此処に自らの生みの親とも言えるクラスメイト二人、超鈴音

と葉加瀬聡美が居たなら応急処置も出来ただろう・・・若しくは此処に呼ぶ事が出来たなら助かったかもしれない。

だが・・・先程の一撃により全身の殆どが破損してしまった中で、通信装置や武装転送装置まで壊れてしまっている。

あるいはもし呼べたとしてもタナトリアによって邪魔をされてしまい、間に合わない・・・まさに“八方塞”という奴だ。

そんな風に冷静に考えながら茶々丸は無表情のまま天を仰ぐ。

「・・・私は・・・ガイ・・・ノイド・・・」

壊れても・・・また・・・直して貰えば・・・良い・・・だけ・・・です・・・」

そう、己は機械だ・・・例え壊滅的な損害を身に受けたとしても、また修理して貰えば良い。

しかし・・・これ程の損傷を全身中に受け、更に動力炉を破損したというのに、何もリスクも無く直るのだろうか？

今、動力炉がストップし、茶々丸という意識を持った人工回路がショートし、全てが消えた後・・・己と言う意識の無い個体は果たして“生きている”と言えるのだろうか・・・？

目線が暗くなっていく。

センサーアイが破損により電力供給が途絶え、まさに消えかかっているのだろうか。

四肢は動かさず、エネルギーは漏れ、眼の光すらも消えかかっている状況で茶々丸は悲しくなる程に冷静であった。

「（・・・暗い・・・寒い・・・この感覚は・・・一体・・・何なのだろうか・・・？

音も聞こえない・・・眼も見えない・・・静かで・・・世界に私一人しか居ないと感じる・・・この孤独感・・・この疎外感・・・こ



の絶望感・・・これは一体・・・？」

彼女は人造人間・・・人によって人工的に作り出された存在。

命令のままに忠実に働き、感情を持たずに淡々と事を遂行する・・・

儚き絡繰人形<sup>オートマトン</sup>。

例えば腕が取れようと、足が切り裂かれようと、致命的な傷を受けようと、修理して貰えば良いだけの事・・・代わりというのは幾らでも利くような存在だ。

「・・・ああ・・・理解出来ました・・・。

これが・・・この孤独感が・・・“死”と・・・言うもの・・・なのですぬ・・・)」

そこで茶々丸は気付いた。

この己で理解出来ぬ感覚、それこそが“死ぬ”と言う事なのだ。彼女は痛みを感じる事は無い、壊れても直して貰えば良いだけ・・・だが、茶々丸は決して人形ではない。

感情の上下、起伏は殆ど無くとも彼女には心がある。

そもそも心が無くば、己の身体を張ってザジを護ろうなどと言う事はしない。

彼女は気付けて居ない、いや若しくは気付きたくないのかも知れない・・・『己が主を護る盾だ』と己に言い聞かしているが故に。

「(マスター・・・申し訳・・・ありません・・・。

マスターを・・・お守りするのが・・・私の・・・存在理由だと<sup>レゾンデートル</sup>・・・

・言うのに・・・。

ですが・・・どうしても・・・ザジさんが・・・傷付く姿を・・・見たくありません・・・でした・・・)」

心という物に気付けば其処から多くの感情が生まれる。痛みという感情を知れば恐怖が生まれ、恐怖という感情は護るといふ己が生み出された目的を成せなくなるようになるだろう。それに他にも醜い感情が生まれる事により、苦悩や苦痛を背負わねばならない……。

茶々丸の脳裏に出会った者達の顔が浮かぶ。

エヴァを始めとして生みの親である存在の超に葉加瀬、3-Aのクラスメイト達にネギ……。

そして

「……サイ……さん……」

最後に浮かび上がったのはまだ出会って半年程度のあの少年の面影。思えばサイとの出会いは最悪であったとも言える。何せ最初は敵同士として出会ったのだから。

正直、最初はサイと言う人物が理解出来なかった。主であるエヴァの命により敵対したと思っていたのに、己が危機的な状況の時に遺恨など全く持たずに助けてくれた。さらには敬愛する主が苦しんでいる時に文句一つ言わずにその看病をしてくれた……その行動は茶々丸には理解し難かったのだ。

だがエヴァとサイが和解し、共に過ごす事が多くなった頃から彼の『人を外見で差別せず、自分の信じた事を信じる』というブレない真つ直ぐな生き方を茶々丸は好ましく思っていた。

その中で知ってしまったサイの過去……少なくとも他の誰よりも苦しみ、喘ぎ、それでも前を向いてきた人物が誰よりも幸せになれなかったその姿を見て、茶々丸はエヴァと同じように共に支えよう

と誓った。

そして・・・己では気付かぬ内に、茶々丸はサイの事を・・・。

「（・・・サイさん・・・マスター・・・）」

消えていく目の光。

その中で茶々丸は気付いた・・・サイへの想いに。

本当は気付いていたのかもしれない　だが、怖かったのだ。

己の知らぬ感情を知るとい事が、そしてそれを知りながら失うという事が

「・・・たく・・・ない・・・」

だからこそ茶々丸は願った。

もしこの消失が“死”だとするならば、全てが消えた後に『茶々丸という存在は死ぬ』だろう。

己は人間ではない、壊れたとしても再び修理して貰えば動く事は出来る

だがこのまま眼を閉じれば、自分という存在は完全に死んでしまう。

「死・・・に・・・たく・・・ない・・・」

例え身体は修理出来ても、心が死ねばそれは死ぬと同じだ。

身体が修理されたとしても、個我という意識が消えてしまえばそれはもう茶々丸ではない・・・それは茶々丸の形をした別の存在となってしまう。

そして自分という個我が消えれば・・・もう二度と敬愛する主にも、初めて心から慕う者にも永遠に会えなくなる。

その思いが・・・己自身を諦めていた茶々丸に強い意志を芽生えさせたのだ

「私は・・・死にたく・・・ない・・・!!  
マスターや・・・皆さんと・・・別れるのも・・・何より、サイさ  
んと別れ・・・同じ・・・苦しみを・・・味わって・・・貰いたく  
ない・・・!!  
だから・・・私・・・は・・・!!」

しかしその言葉とは裏腹に四肢は動かず、魔力エネルギーはどんど  
ん消失していく。

ボディに残っている魔力エネルギーの残量は後数%・・・これが無  
くなれば茶々丸という意識は完全にシャットアウトされて消えてし  
まう。

その絶望の中、それでも諦める事無く立ち上がるうとする茶々丸・  
。。

だが、魔力エネルギーの残量が後2%と迫ったその時  
不意に彼女の耳に知らない人物の声が響いた・・・。

“死なせねえよ、嬢ちゃん

俺等にはこんな事しか出来ねえけど・・・あの馬鹿の事、頼むわ”

言葉が終わった次の瞬間・・・。

エネルギーの残量が1%を下回っていた筈の茶々丸の身体が、急に  
凄まじい躍動のような物を感じた。

感じた事も無い暖かな光が茶々丸の動力炉のある胸部から溢れ出し、  
何かを形作る。

それは碧あおき宝珠。

形作られた碧く輝く光の珠が茶々丸の胸に吸い込まれる。  
そして完全に宝珠が茶々丸の身体の中に消えると・・・その全身を  
淡く眩い碧の光が包んだのであった・・・。

「・・・くっ・・・」

タナトリアの背から生えた触手に四肢と首を締め上げられ、上空に  
吊り上げられているザジ。

先程までは何とか攻撃を避け続けていたのだが、どうやら遊ぶ事を  
止めたらしく・・・確実に相手を殺す為に動きを封じられてしまっ  
ていた。

『ククク・・・ククククク・・・』

最早狂ったように笑う事しかないタナトリア。

このような姿になった理由は不明だが、どうやら人としての意志は  
完全に消えてしまっているのだろう。

目の前に居るザジを蜘蛛の巣に捕らえられた獲物程度にしか見てい  
ない彼女は、止めを刺す為に急所に向けて触手の先端を向けた・・・  
。

しかし、まさにその時　　ザジの後ろで巨大な碧の光が放たれた。  
その光量に驚いたらしいタナトリアは、不意にザジの四肢を拘束し  
ていた触手の力を弱めてしまう。

「・・・!!」

『ギ、ギアアアアアアアア!?』

拘束が弱まったのを利用し、黒妖爪ヤタガラスで触手を切り刻んで大地に飛び降りるザジ。

その視線の見つめる先に存在した揺らめく淡い光を目を凝らしてみれば・・・先程まで身動きすら取れなかった茶々丸が二本の足で立っていたのだ！！

「ちゃ・・・茶々・・・丸・・・さん？」

その・・・力は・・・玄武の力・・・どうして・・・茶々丸・・・さんが・・・？」

見た目にはボロボロで、四肢や胸部に腹部などには輝が入りスパークを放っている茶々丸。

しかし・・・その閉じられていた双眼が見開かれると、今まで機能停止寸前であったとは思えぬ程に力強い碧の光を湛えた眼が其処にはあった。

放たれている光の正体が魂獣スピリッツの力だと気付いたザジは首を捻る。

『ギ、ギギギ、ギギヤアアアアアアアア！！？』

一方、その茶々丸の放つ光を忌むように悶え苦しむタナトリア。

目の前に居たザジなど無視し、背から生えた大量の触手を立っている茶々丸に向かって連続で放った！！

だが、触手が凄まじい速度で向かってくるのを見ても茶々丸は慌てない・・・。

それどころか、初めて明日菜が神具を召喚した時の様に光り輝く胸に手を当てると　其処から何かを召喚したのだ。

それは科学的なフォルムをしたランチャーのような物。

横から出て来た照準機に片目を当てて引き金を引くと・・・付いていた羽のような四つの飾りが分離し、高速で向かって来る触手をレ

ーザーで焼き払う。

飾りはまるでビットかファンネルかのように意志を持っているかのように不規則に動き、迫っていた大量の触手を全て破壊してしまっただけだ。

『ギャ、ギャガ!???』

攻撃手段を一瞬で失ってしまったタナトリア。

慌てて触手を再生させようとするが・・・そこで茶々丸は何を考えたのか照準機を覗き込みながら呟く。

「検索完了・・・どうやら彼女の“胸部に巣食う影”がこの様な力を生み出しているようですね。

ザジさん、私が彼女の行動を封じます・・・そしたら私を信じて彼女の胸部中心を貫いてください!!

・・・それが彼女を救える方法です!!」

答えを聞く事も無く茶々丸はランチャーを天に向ける。

更にランチャーを身体にドッキングさせ、頭部(耳部)にランチャーから伸びた配線を接続すると人工知能内に搭載された量子コンピュータを起動させた。

「データ転送完了・・・距離計算完了・・・照準計算完了・・・エネルギー充填率、20%・・・システム、オールクリア・・・支援衛星による砲撃準備、全完了!!!」

そして最後に引き金を引く茶々丸。

その瞬間　天より光り輝く砲撃がタナトリアに向かって正確無比に放たれたのだ





・解き放たれた・・・わ・・・。  
ごめん・・・なさい・・・貴女達には・・・辛い思いを・・・させ  
てしまつて・・・』

既に崩れ始めている身体。

灰となり散つていくその様は悲痛な姿にしか見えない。

しかしそれでも、タナトリアはこれで永劫に死ねず、戦い続ける輪  
廻から解放されたのだ。

茶々丸とザジの2人が首を振ると、タナトリアは優しく微笑みなが  
らもう崩れてしまつている手を伸ばす。

『・・・私の・・・最後の力・・・。  
完全に治す事は・・・出来ないけど・・・貴女達の・・・傷を・・・  
癒させて・・・』

崩れ去つた手から放たれる淡い光。

それが茶々丸とザジを包むと、二人の身体に合った輝や傷が塞がれ  
ていく。

細かな傷などは治っていないようだが、それでも致命的に近い傷な  
どは殆どが止まつていたのだ。

（ちなみに魂獣界には機人という種族も居るので、茶々丸の輝など  
も致命的な部分だけは治せた）

力を使い果たすと一気に身体が崩れるスピードが速くなる。

だがそれでも、タナトリアは微笑みながらも一度礼を呟いた。

『本当に・・・ありが・・・とう・・・。』

例え・・・死ぬ・・・身の上でも・・・貴女達が・・・してくれた  
事は・・・絶対に忘れない・・・よ。

ほんと・・・に・・・あ・・・りが・・・と・・・』



無いだろう。

2人はお互いにもう一度頷きあうと、西面宿難の復活したらしい祭壇へと全速力で駆けて行くのであった……。

## 第四十二話：月下の死闘・参る対決、魔女タナトリア（後書き）

更新完了です。

いやいや、今回も大概な暴走具合ですな・・・細かい事の複線回収は後々にやりますので。

まあ今回も余計な事は書かずにおきましょう。

次は不死の吸血姫と剣聖の戦いです、派手なバトルにしますのでお楽しみにー^^

では次回へと続きます^^

補足：茶々丸の神具

所謂、ビームランチャー光線砲のような外見の大型銃。

数々の装飾や武装が組み込まれており、ビットやレールガンにキャノン砲からランチャーなどの火器を使用出来る優れもの。

更に相手の状態などを調べる事の出来る高性能照準機を装備しているという特徴を持つが、この神具最大の能力を考えれば今までの能力など副産物のような物だろう。

この神具の最大の真価は、宇宙空間に存在する衛星砲にアクセスする事により巨大な高出力衛星レーザーを射出する事が可能な点。

全エネルギーを注ぎ込み、最大までチャージすればコロニーレーザーかソーラーシステム並のレーザー砲も放てるとんでもない一品。

（簡単に言えばサテライトキャノン並の殲滅力を持った兵器）

尚、元ネタは茶々丸自身のアーティファクト『アル・イスカンダリア空とび猫』と機動戦士ガンダムシリーズに出て来た殲滅用戦略兵器のコロニーレーザー及びソーラーシステム。

その為、破壊力は全力で撃てば地球に風穴を簡単に開けられるク  
スの代物。

#### 第四十三話：月下の死闘・肆く血戦、剣鬼ハーディアスく

Side エヴァ

茶々丸とザジがタナトリアとの戦いを始めていた丁度同じ頃。

其処から少し離れた場所にある断崖にてエヴァとハーディアスが対峙している……。

二人とも見合つたまま微動だにせず相手の次の動きを注意深く見ていた……茶々丸とザジ、タナトリアの戦いが“動”だとすれば、此方はまさに“静”の戦いだと言えるだろう。

流石は外見は子供でも600年もの歳月を生きた吸血姫であり魔法使い、戦いとは先に隙や手の内を見せた方が不利だという事をよく理解しているようだ。

しかしこのまま動かなければいつまで経ってもこのままだ。

時間があるならばこのまま千日手でも退屈だが問題は無い……しかし今は何時までも睨み合っている様な時間は余り無い、早くこの男を倒して心許ないネギ達を助けに行かねば面倒な事になるのは必然だろう。

だが。

「(クツ……流石にサイの奴が慌てていただけの事はある。

この男、一見無防備に立っているだけにしか見えないが隙が無い……自然体のような立ち位置で居るのは、私の動きに合わせて一刀の元に切り捨てる為だという事が……)」

人の戦い方というのはそれぞれだ。

サイやネギの父・ナギのように考えずに戦場の気配を感じて戦う“

天性の才能”を持つようなタイプ。  
エヴァのように相手の行動を想定して幾重もの策を張り巡らせて戦う“策士的な才能”を持つタイプ。  
古菲や楓のように魔法のような特別な能力を持たないが、代わりに血が滲む程の努力により戦う技術をえた“努力の才能”持つタイプとそれぞれだ。

だがその中でも最も戦い辛いタイプとも言えるのがハーディアスだろつ。

所謂ハーディアスは敵の隙を突けるまでどんなに長い時間でも神経を集中出来る“待ち”を得意とするタイプだ。  
相手が焦れて行動を移した瞬間に一刀の元に切り捨てる・・・殆ど  
のタイプが最も苦手とする戦い方を得意としている。

故にこのまま動きを見せずとも、ずっと待ち続ける事も可能だ・・・  
まさに最も面倒臭い相手だろう。

「・・・やれやれ、ならば敢えて火中の栗を拾わねばならん、か」

そう呟くとエヴァは素早く肩に吊るしていた可愛らしいポシエット  
に手を入れると何かを出してハーディアスに向かって投擲する。

それは装飾やら何やらが一切合切排除されている、飾り気の無いナイフ・・・それを指の間に挟んで投げたのだ。

しかし、少なくともその程度の物を投げた所でハーディアスに通用  
するとは思えないが・・・。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック・・・障壁突破“氷精の槍

”！！」

エヴァの口から簡単な詠唱が紡がれる。

その瞬間、ハーディアスに向かっていた何本かのナイフが冷氣と氷

を纏った槍となり空を駆けた。

どうやら投げたナイフに予めエヴァ自身が魔力を込め、その魔力の籠ったナイフを媒介に、サイが戦った人物であるフェイトの使ったドリュウ・ペトラス“石の槍”のように槍を作り出したのだ

この魔法は“障壁突破”の冠する通り、魔法使いなどが自身の魔力を使つて張っている『魔力障壁』を貫通させる事が出来る魔法・・・相手は魔法使いではないにせよ、エヴァの魔力を考えれば完全に封印が解けていなくとも障壁を貫通させる事は可能だろう。

『・・・虚空刃・・・』

しかし、その氷の槍はハーディアスの斬撃によつて切り裂かれる。ゆっくりと見える斬撃の軌跡・・・それは遅いのではない、余りのスピードの速さにより斬撃が残像となつて残っているが故に『遅く見えるだけ』なのだ。

「チツ・・・なんて速さだ、サイの斬撃の速度を裕に超えている・・・」

言葉が終わるのを待つ事無く、空を切る音が耳に届く。

エヴァは地を蹴り横に飛ぶと・・・今までエヴァが居た所の後ろにあつた大木が突然横に倒れた。

倒れた大木は鋭利で実に滑らかな切り株を其処に残している・・・。

「!?!?・・・やれやれ、後一步動くのが遅かったら私も其処の木と同じ運命を辿っていたか」

そう、大木は“斬られた”のだ。

しかも斬れ痕が完全に崩れも輝も何も入っていない、綺麗な断面を



晒している所を垣間見れば　切れ味も半端な物ではない。

それこそこんな斬撃が当たれば・・・当たり所が良くて肉体の欠損、悪ければ一瞬で絶命する。

エヴァが避けられたのも単に実戦経験の多さによる危機を認識するのが鋭かった故だろう。

『・・・コクウジン・ツラネ虚空刃・連』

再び空を切る音がエヴァの耳に届く。

・・・しかも今度は一度ではない、連続して何度もだ。

「クツ、拙い・・・氷楯！！」レフレクシオー

逃げ場を奪うようにして見えない斬撃が向かって来る。

避けられない事を理解したエヴァは咄嗟に目の前に氷の楯を発生させた。

この楯は魔法を跳ね返すだけでなく、物理攻撃も遮断出来る能力を持つ　これとエヴァ自身の魔法障壁を合わせれば例え凄まじいスピードの斬撃でも防御は可能だろうと思われた・・・。

だが、不意にエヴァの頬から一筋の血が流れる。

更にいきなり着ていた洋服が切れ、その腕やその足から頬と同じように血が流れ落ちた。

氷の楯や魔法障壁のお陰で斬撃はエヴァ自身には届いては居ない・・・だが、その代わりにハーディアスの剣から放たれる音圧や衝撃波をガードし切れない事によって皮膚や衣服が切り裂かれているのだ。

「障壁や楯があつてこの威力か・・・本当にサイの住んでいた世界の連中とは規格外だな」

似たような規格外な輩などエヴァが知る限り片手で数えられる程度しか居ない。

サイのとんでもない強さと生命力の片鱗が見えたように感じたエヴァは、楯と障壁を発生させながら苦笑いを浮べていたのであった。。。

放たれる鋭い斬撃

それはまるで嵐のように、濁流のように息をつかずにエヴァの張っている氷の楯へと叩き付けられていた。

本来はかなりの防御力を持つ筈の氷の楯は次第に削れたような傷が多くなっていく。。。

。「まさか・・・本来、削れる事の無い氷の楯が削れているとは・・・。

やはりな、この男からは武の気配だけでなく魔法と似たような力を感じたから私が戦うのを選んで正解だったようだ」

ハーディアスとタナトリアと対峙した際に感じたもの。

それはハーディアスからは武人としての匂いだけでなく、魔法に匹敵する存在の“法力”の力を感じたのだ。

確かに15年もの間は実戦から殆ど遠ざかっていたエヴァ。

しかし剣術と魔法のような力を同等に使える相手がどれ程厄介な相手かは、そこらの有象無象の魔法使いよりも理解している心算だ。

恐らく本来では魔法を反射、物理攻撃を遮断出来る筈の氷楯レフレクシオーを削れるというのはハーディアスが剣自体に魔法のような力を纏って攻撃をしている故・・・その為、この様な剣術も魔法も得意としている

ようなタイプの猛者を茶々丸やザジのような実戦経験の少ない連中

に相手をさせる訳には行かなかった。

『・・・この様な輩の相手は、老獪な手口や実戦を生き抜いてきた己で無ければ勤まらないだろう』と考えて。

「しかし、このままではジリ貧という奴か。

・・・ならば、封印が解除されていない状態でやるのは少々キツイがやるしかないな」

独り言を呟いている最中も放たれ続けるハーディアスの魔法の楯を削り続ける斬撃。

どっちにしてもこのまま膠着していれば直に楯と自身の魔法障壁は破られ、あの刃にその身を晒す事となってしまう。

前まではナギが死んだと聞かされ、麻帆良から解放される事がないと諦めた時から自分の命にさえ余り興味は持っていないなかった。

所詮、“悪の魔法使い”だの“誇り高き悪”だのと理由を付けていようと死にたくなかったただだ・・・もう一度初恋の男に出会い、想いをぶつけたかったが故に彼女は自分に向かって来る者を滅し続けた。

その想いが打ち砕かれ、絶望に苛まれ、無気力に惰性に生きていた時に再び出会ったのが・・・かつて愛した男と似たような、居や寧ろそれを超えた無茶振りと苦悩を背負った人物だ。

命を懸けて戦い、その先に新たな道を見出したエヴァ・・・故にこんな所で死にたいとは思っては居なかった。

「・・・リク・ラク ラ・ラック ライラック・・・」

小声で魔法の始動キーを呟くエヴァ。

氷の楯を片手で張りながらそのまま小さな声で詠唱を始める。

ウエニアント・タビサキ中タスタントウル・アーエーリ  
「来たれ氷精、大気に満ちよ。  
トウンドラム・エト・グラキエム・ロキー・ノクティス・アルバエ  
白夜の国の凍土と氷河を今此処に」

詠唱を唱え終わると、ハーディアスが居る場所とは全く違う後方に指を向ける。

・・・そして、そのまま高らかに放つ魔法の名を言い放った。

「クリュスタ母塔ストウズ  
凍る大地　　ツ！！」

この魔法は本来、大地から氷柱を生み出して攻撃するタイプの魔法だ。

その為、敵ないし敵の近くの大地から隆起させなければ意味の無いもののだが・・・エヴァはハーディアスに向かって放つ事無く、別の場所に手を向けて放ったのである。

・・・これに一体何の意味があるのか・・・それを気付いた時点でもう勝負は付いていた。

「・・・な・・・何・・・？」

今まで興味を持たずに攻撃を連続していたハーディアス。

自分の方に魔法を放つ為の掌が向けられていればそれを阻止しただろうが・・・相手はその手を別の方向に、しかも完全に自分とは関係のない位置に向けていた筈。

だが・・・何故かは理解出来ないが、自らの四肢を突き出した氷の柱が貫き、凍結させていたのだ。

四肢が動かせれなくなったハーディアスに対してエヴァは呟く。

「・・・確かに貴様の剣撃は特筆したものがある。

だが、悲しい事に貴様を操っている存在は攻撃にばかり集中させている所為で周囲への警戒が散漫となってしまうようだ。

何故、貴様が簡単に私の魔法を感知出来なかったのか冥土の土産に教えてやるう」

するとエヴァは氷の楯を消滅させるとハーディアスに向かって両掌を向ける。

その細い可憐な指に何故か月明かりに反射して光るものが見えた・  
・それは肉眼では目を凝らさなければ見えない程の細さの糸、それが何処かに向かって伸びているのだ。

その糸が伸びる先、それが何を表すというのか・・・？

「・・・そうか、そう言う事か。」

貴様の最初の小刀の投擲・・・その時点から貴様の言う“策”とやらは始まっていたという事だな・・・」

「う」名答、その通りさ。

私は現時点では強力な魔法を何度も使う事が出来ない非力な状態だ。故に卑怯であれなんであれ、策という方法に頼るしかなかったという事さ・・・まあ、貴様を甦らせた輩が私の事を見縊っていてくれなければ読まれていたかも知れんがね」

糸の繋がっている先にあるもの・・・。

それは先程、最初にエヴァが先制攻撃として放った氷の槍の触媒となっていたナイフの柄だ。

刃の部分はハーディアスが攻撃を弾いた際に砕けてしまったようだが・・・エヴァの本位はわざとナイフを破壊させる事にあつた。

説明したかもしれないがこのナイフにはエヴァの魔力が込められている。そして先程エヴァの使った中級魔法である『こおる大地』は、使用者の好きな場所に氷柱を発生させられるが威力を上げれば上げる程に魔力の制御が難しくなり、更に消費する魔力の量が多くなるとい

う欠点を持っていた。

しかし、例えば小物や道具などに魔力を予め込めておけば・・・自分自身の魔力量と道具に込めた魔力をプラスして魔法を放つ事が可能であったのだ。

つまりエヴァは始めから氷の槍は捨て石に過ぎなかったのである。

自分の魔力を込めたナイフを魔法を纏わせて放ち、その柄に見えないほどの細い糸を繋いでおく・・・あたかもそれが均衡状態を打破する為の先制攻撃だと相手が認識してくればそれで準備は完了だ。

投擲されたものに対する相手の対処法は十中八九避けるか弾くかの二通りが多いだろう。

弾かれればナイフは破壊されて込められた魔力が外へと放たれる、避けられたとしてもナイフには糸が繋がっているが故に自由に操って最終的には相手はナイフを破壊する・・・例えば屍兵という特性を生かして相手が避ける事もなく腕や足といった致命傷にならない部分やマントなどに突き刺させて避ける可能性もあったが、その場合は刺さった場所に『こおる大地』を発生させれば事足りる。

つまり、投げたナイフの意図を理解出来なかったその時点でもう決着は着いていたと言えるのだ。

勿論この意図が読まれた時点でも他にも二重、三重の策は既に考えられていた・・・流石は長きに渡って裏の世界で生きてきた真祖の吸血姫、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルといった所である。

「さて・・・では種明かしも終わった所でこれで仕舞いだ。

眠るが良い、古き時代の猛者よ

」

そう一言言い指を鳴らすエヴァ。

その瞬間、腕や足に突き刺さっていた氷の柱が砕け・・・ハーディアス自身に絶対零度の冷気が襲い掛かる。  
そのままハーディアスは購う事もせず氷の彫刻と化すのであった。  
・・・。

「さて・・・少しばかり時間をくった。

まったくジジイめ、さっさと私の封印の解除をすればこんなに手間を取らないというのに。」

傷は致命的なものはないようだな、ではそろそろ行くと・・・。」

全身中に付いた切り傷を確認してから呟くエヴァ。

予想以上に傷の数は多いが、殆どが皮一枚を切られた程度だという事が解った。

・・・本来ならば皮一枚どころか、腕やら足やらが欠損しててもおかしくない様な斬撃だったのだが。

そう言う意味では魔力が封印されているとは言え、凄まじい魔力障壁をもっているという事が良く解る。

流れていた血も止まり、傷が魔力によってゆっくりとだが自然と癒えて行く。

全ての切り傷が瘡蓋となったのを見計らってエヴァは先を急ごうとするが・・・その耳に何か割れるような不気味な音が響いた。

・・・まあ、そのような状況は二度目であるが故に立ち止まると溜息を吐く。

「やれやれ・・・まあ、これで終わると思っでは居なかったが」

エヴァが振り向いたその先に映った光景

それは氷の彫刻と化した筈のハーディアスの背から、異形な二本の腕が生えて氷を貫いている姿だ。

いや、腕と言うには余りにも禍々しい・・・それは人の腕と言うよりも、甲殻類か昆虫の足のように明らかに人のソレとは違う姿をしていた。

もつと説明を単純にするなら、まるで刃自体が腕と融合しているかのような・・・タナトリアの時の触手とはまた違った不快感を人に与えるような物である。

『グウウウウ・・・グオオオオオオオオオオ！！！！』

獣のような咆哮と共に氷像全体に刻まれる輝痕。

まるでガラスが割れるかのように氷が四散すると・・・其処には氷漬けにされる前と同じように刃を構えているハーディアスが居た。

更に、背から生えている刃と融合したような腕の切っ先もエヴァの方に向けられている。

「随分とまた歪んだ姿となったじゃないか・・・此処からが本領発揮とでも言いたいのか？」

軽口を叩くエヴァだが

ハーディアスの発する覇気や闘気が先程とは段違いとなっているのを内心舌打ちしていた。

少なくとも今の封印状態で勝てるような存在では無い事は火を見るより明らかである。

「(クツ、拙い・・・ジジイまだなのか、私の封印が解けるのは！  
?)」

学園長も必死になって魔力の開放をする為の準備に追われている所



だろう。

しかし、そんなエヴァの焦りや思いとは裏腹にハーディアスは攻撃を仕掛けていた！！

『グオ・・・ガアアアアアアアアア！！！！』  
「何っ！？」

その咆哮が響いた瞬間、エヴァの目には信じられない光景が映った。なんと背から生えた異形の腕と、手に持たれていた剣を離れた場所でハーディアスが振るうと・・・斬撃が質量を持った巨大な斬光となつて、地を切り裂きながら此方へと向かってきていたのだ！！  
・・・しかもそれは一発ではなく、まるで目の粗いネットのように交差しながら何発も。

慌てて横に飛ぶエヴァ。

すると今までエヴァが居た場所の付近やその背後にあつた林や藪が巨大な獣が暴れ回つたかの如く無残に切り裂かれたのだ。

しかも切れ味は氷像から復活する以前以上に鋭い・・・当たつたとしたら、魔法障壁など紙切れ程度の如く切り裂ける程に圧力も法力による密度も上昇していた。

『ガアアアアア・・・ガアアアアアアアア！！！！』  
「拙い、連発する心算か！？」

斬撃を質量を持つ斬光と化し、更に巨大化させて連発する。

周囲の事も何の事も一切考えていない広範囲を殲滅する為の攻撃・・・まさに最悪な戦い方だ。

しかし相手に対して絶望感を与えるとこの事に対しては最も適した攻撃とも言える。

なにせ、一発当たっただけでも重傷や致命傷になり得る様な攻撃な

のだから。

「ならば・・・リク・ラク・ラク　ラ・ラック　ライラック！！  
ウンデトリレギンタオズズウトウエ　サギタ・マギカ　・セリエス　・オプスクーリー  
闇の精霊29柱・・・魔法の射手・連弾・闇の29矢！！」

エヴァの手から放たれた闇の矢は一直線にハーディアスを狙う。  
しかし、幾ら数が多いとは言え初級クラスの魔法である魔法の射手サギタ・マギカ  
が果たして唯でさえ猛者であるのに更に強化狂化されたハーディアスに  
通用するのか？

だがこれは、向かって来る斬光やハーディアスの目を逸らす為の時  
間稼ぎに過ぎない。

放たれた魔法の矢はハーディアスの目の前で炸裂、更に大地に叩き  
つけられて土煙による天然の煙幕が作り出された。

この状況でエヴァは殆どが封印されている状態の現段階の自分の中  
で最も強力な魔法の詠唱を始める。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック  
ウエニアント・スピリトウキアレス・オプスタラムテオズスクララビヤオーテンベスターズ・ニウアーリス  
来たれ氷精　闇の精。　闇を従え吹けよ常夜の氷雪・・・。  
（これが今の私の精一杯の魔法だ　頼む、効いてくれ・・・！  
！）」

彼女は神などは信じない。

ある意味では運命という名の神によって文字通り“人生を狂わされ  
てしまった”のだから。

だがそんな彼女でも祈らざるを得ない・・・この魔法は己に残って  
いる魔力をかき集めて放つ、一か八かの一撃なのだから。  
これが通用しなければ先に待っているのは“死”のみだ。  
最早残された数少ない魔力を全て込め、彼女は言い放った



肩の傷は鎖骨まで簡単に切れ目が入られ、脇腹は見るも無残に臍の近くまで斬られて背骨で何とか繋がっているような状態。

更に腕も太腿もまるであたかも其処には肉が無かったかのように抉り取られ、腹部と同じく骨一本でギリギリ繋がっているような状態である。

普通の人間ならばこの時点でショック死か出血多量で失血死している筈だが、不死の吸血姫の特性故に瀕死の状態でもエヴァはまだ生きていた。

しかし傷が酷すぎる。

何とかギリギリの所で生き残っているような状態だ・・・もし、これがサイと会う前で登校地獄の呪やら魔力を封印する呪が解除されていない“外見相応の状態”であったとしたら、既に意識など残っていなかっただろう思われた。

「(ま、ずい・・・早く傷、を。

この、状態で・・・先程の斬撃など、喰らった・・・ら、今度こそ・・・か、確実に地獄、行きだ・・・)」

ハーディアスの追撃を恐れ、急いで傷を治そうとするエヴァ。

しかし思うようには行かない・・・魔力は既に底を尽いている、言うなれば今の魔力は“魔法障壁として自然と張られていた”魔力を傷の回復の方に回している状態故。

封印が解除されていれば面倒ではあるがかなりの速さで強引に傷を治せるのだが・・・。

『グ、グガアアア！！！！ギヤアアアアアアアアアア！！！！？』

だが、そんな事を考えながらハーディアスを警戒していたエヴァの

目に映ったもの。

それは、何故か頭を押さえながら悶え苦しむような姿を見せているハーディアス自身の姿であった。

「(・・・どう、言う事、だ？」

奴は生ける屍・・・故、に・・・痛み、など感じる事は、無い筈・・・？

・・・！？ な、何、だ・・・アレ、は・・・！？)」

ハーディアスの胸に開いた孔。

其処がやけに蠢いているかのような錯覚を感じたかと思っただが・・・なんと傷口を塞ぐように気味の悪い蟲が孔から這い出していたのだ・・・それも一匹や二匹ではない。

どうやらお互いを共食いし合い、粘土細工のように気持ちの悪い身体を捏ね合わせあつて傷を塞いでいるのだ。

しかし・・・それをされているハーディアスは寧ろ苦しんでいるようにも見えるが。

その時、不意にエヴァのポシェットに入っていた携帯電話の着信音が鳴る。

4〜5度ほど着信音が鳴った後、自動的に通話状態になる携帯・・・其処から聞こえて来たのはこの場には居ない、ある意味ではエヴァが最も待ち望んでいた人物の声であった。

『済まぬ、待たせたのうエヴァ。』

お主に施してあつた封印の解除、ようやくと終わったわい・・・全く、肝心な時に封印書が見つからんなどとは・・・』

その声に合わせてエヴァは自分の身体に膨大な量の魔力が満たされていくのを感じる。

それに合わせて凄まじいスピードで再生されていく致命傷であった  
全身の傷。

身体中の傷が再生し終わった後、ゆっくりとエヴァは立ち上がり携  
帯電話を拾った。

「・・・オイ、クソジジイ。

今頃人の封印を解放出来たとは良いご身分だな・・・一度、地獄が  
見えたぞ今回は。

帰ったら覚えておけ・・・その頭に残った数少ない貴様髪の毛の命、一本  
残らず筆取り取ってくれるからなあ！！！」

『えっ、ちょ！？ な、何の話じゃエヴァ！？

こりゃ！？ ワシちゃんと封印を解いてやったじゃろうが！？ そ、  
それに頼む！！ 髪は、髪の毛だけ・・・（ピッ！！）』

学園長の言葉を最後まで聞く事も無く電話を切るエヴァ。

彼女の目線の先では気持ち悪い傷の再生の仕方を終わらせたハーデ  
イアスがエヴァの方に向かってまた斬光を放とうとしている姿が映  
っていた。

『グガアアアアア！！』

またも放たれる斬光、更に今度は先程と違い逃げ場が無い程に連続  
して飛んで来ている。

避ける場所など無い・・・だが、エヴァは避ける事もせずにその斬  
光に向かって掌を向けた。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック・・・。

魔法の射手・連弾・氷の108矢！！」  
サギタ・マギカ ・セリエス ・クラキアーリス

掌から放たれるは今迄など足元に及ばぬ数の氷の矢。  
しかも速度も、斬光を破壊しながらハーディアスに迫る貫通力も今  
までとは桁違いに違う。

それを表情を変える事無く、エヴァは簡単に撃ち放ったのだ・・・。  
更にそれに続け、魔法を詠唱する。

「リック・ラク　ラ・ラック　ライラック・・・。  
ト・ティコス・ディエルタサズキキアール  
障壁突破・氷の槍！！」

放たれた百を超える氷の矢は続けての魔法で鋭利な氷の槍と化し、  
ハーディアスの全身中を穴だらけにする。

これも少し前に使った氷の槍とは段違いだ　更に鋭く、更に大  
きくなり普通の魔法使いならば一発喰らっただけでもかなりの損害  
を受けるだろう。

まるで自分の力を試すかのように二つの魔法を融合させて放ったエ  
ヴァ・・・その表情は氷のように冷たく、また見方によっては悲し  
げにも見えた。

「・・・やはりか。

どれだけ攻撃を喰らっても、どれだけ肉体が欠損しようとも、その  
身体に居る気持ち悪い蟲の所為で死ねんようだな・・・」

大量の氷の槍はハーディアスの四肢を千切り、身体中に風穴を開け  
た。

だが・・・その傷も、千切れてしまった四肢も先程と同じように気  
持ち悪い蟲が大量に現れ、お互いを共食いし合って肉となり治して  
しまう。

更に先程の苦しみようを見れば、蟲による傷の再生は本来痛みを感  
じないはずの屍にさえ責め苦を与え続けるという事だろう・・・実  
に下種の極みの様な方法で蘇らせられた存在の悲しい現実だ。

「・・・強引に生かされ続けると言うのも哀れなものだ。これでは少々の魔法程度では再生させられ続けて死ぬ事も容易ではない。」

ならば・・・消滅させるには“あれ”を使わねば敵わんか」

死んでまでも平穩が脅かされる。

それがどれ程死と言う物を冒瀆する事なのかエヴァは良く解っていた。

それに元々雑魚を髑り殺したり、戦いで死ぬ覚悟も持っていない女子供を殺めたり、他人の生きたという誇りを汚すという行為を嫌う彼女にとって、今のハーディアスの姿は何よりも終焉を望んでいるようにも感じられた。

だからこそ彼女は静かに目を閉じると呪文を唱え始める。

かつて彼女自身が生み出した、こういった者達を永遠に眠らせる事の出来る禁断魔法の一つを放つ為に。

「我が命の元に

汝が御名により我は深遠の闇と変わり堕ちし魔王を見る

そして汝の足元、ありとあらゆる敵を打ち滅ぼす力を我に与えん

来たれ無価値なる者、罪悪の王

されば我が前に闇よ在れ  
し深遠の王の威光を示せ」

今此処に血の報復を成し、憤怒司り



それは今までのようなギリシャ語の詠唱ではなく日本語の詠唱。だが、明らかに今までの魔法とは毛色の違った・・・言うなれば魔法とは全く別物とも言っても良いような異質さが其処にはあった。しかし・・・これこそが長き時代を生きた経験と絶え間ぬ努力の果てにエヴァが編み出した“大魔法”と呼ばれる禁忌の力。

そして最後にかつと目を見開くと魔法の名を口ずさむ。人の七つある罪を司り、深遠に座する究極の征服者・・・死すらも超越したる究極の魔王の名を冠する“暗黒魔法”。

「テトラグラム・ネクロム・サタナイル  
征服王の無限の闇！！！」

放たれた黒き霧・・・それは霧などという生易しいものではない。取り込む存在を喰らい、蝕み、消し去る深遠の闇を形とした魔法の産物。

黒き霧はハーディアスを包み・・・購う事も出来ずにその身体を黒き霧と同化させて行く。

闇は命を喰らい、漆黒は魂を蝕む。生きる者も、ましてや死屍たる者も、虚無の暗闇にて購う事は敵わない。

究極にして極限たる闇の極致の魔法・・・それこそがエヴァが唯一と言って良いほどの己の使う技能や魔法の中で自ら使う事を禁じた禁術。

その名は カラミティ・スベル  
禁断七煉術式。

闇に吞まれ、闇に喰われ、その屍すらも残さずに消滅するハーディ



あれは飛驒の大鬼神の目覚めの咆哮だ　　という事は、ネギ達が  
両面宿難の復活の阻止を出来なかったと言う事だろう。  
最後に残された大仕事を前に、エヴァは他の者達の安否を気にしつ  
つも前へと進んでいくのであった・・・。

## 第四十三話：月下の死闘・肆く血戦、剣鬼ハーディアス（後書き）

投稿完了しました^^

いやはや・・・またも軽く（と言うかかなり）暴走しまくってしまいました。

ハーディアスとタナトリアを強化したものに関しては次回明かされますので次回を楽しみに。

簡単に恐縮ですが、この辺で次回へと続きます^^

P.S.

### 【カフミティ・スベル禁断七煉術式】

長きに渡り（600年以上）裏の世界を渡り歩き、魔法の真理に到達したエヴァが作った禁忌の七属性広範囲殲滅魔法の総称

正確に言う魔法と言うよりは召喚術の方に近く、明らかに普通の魔法よりも強力なものとなっている

しかし、余りの危険さとエヴァがかつて多くの者達に命を狙われ続けて自暴自棄になり、その後長き努力や研究、真理の追究の結果生み出されたものであり、後々に正気に戻った際に自ら封印を施した。

魔法の属性である火、水（氷）、風、雷、地、光、闇の七属性それぞれの上位古代魔法を強化、覚醒させたもの。

しかし余りの殲滅性と敵味方など関係なく喰らい尽くす広範囲殲滅禁術である。

尚、名前はそれぞれ人間の【七つの大罪】を司る魔王達が元。

テトラケラマドン・ネクロム・サタナイル  
征服王の無限の闇

闇の属性を司る禁断七煉術式

憤怒を司る魔王の中の魔王、サタンの座する深遠世界の全てを蝕む闇を現世に生み出す

生み出された闇の周囲にあるものを取り込み、喰らい尽くし、闇の一部と化させてしまう凶悪な術式

名前の元ネタは以下の通り

テトラグラマトン・・・グノーシス教の四代神聖文字の“ヤハヴェ”の別称

ネクロム・・・ネクロシス（肉体が内的・外的因子によって壊死する事）の別の言い方（尚、ネクロ＝死体）

サタナイル・・・魔王サタンが墮天する前の天使だった頃の名前

#### 第四十四話：月下の死闘・伍々隠れし一族の陰陽師

「Side サイ」

屍を操っているであろう敵の親玉が居るらしい暗き霧の張られた場所に入り込んだサイ。

霧の中は完全な暗闇となっており、自分の手足程の近くしか確認出来ない程に濃い・・・しかし、サイは臆す事も立ち止まる事も無く前に進み続けていた。

どうやらこの暗き霧は一種の結界のようになっていているようで、歩いても歩いてても暗闇が薄くなる事も外に出る事も無いようだ。

「・・・オイ、居るんだろう？」

何時までも“隠れんぼ”なんぞしてるんじゃないやねえよ、さっさと出て来い。

俺はテメエに付き合ってもらえる程、暇じゃねえんだよ馬鹿が」

声は暗闇の中で空しく響く。

まあ、サイ自身も元々これで相手が出て来るとも思っても居ない。しかしどうにもこの少年（青年か？）は戦闘狂的な側面も持っているらしく、何も無い退屈な場所は好まないようだ。

まあ、つまらない時間稼ぎなどされて『両面宿難などという化物が解放されると倒すのも面倒臭い』という思いもあるのだろう。

「チツ、面倒臭え・・・次元刃でこの結界を叩っ切ちまうか・・・」

例え切れ味が普通の刀程度しかなくとも次元刃で結界を切り裂く事は可能だ。

また残り少ない法力を消費してしまうが、この際そんな事など言っ

ていても詮<sup>仕方ない</sup>無き事だろう。

サイの手が腰に帯刀されている七魂剣の柄に伸びた　まさにとの時。

周囲の見えない闇の先から、まるで虫の足のような鋭い“何か”が伸びてきたのだ。

「ケツ、下らねえ・・・。」

周囲が見えなきゃ俺に攻撃を喰らわせられるとでも思ってたのかよ」

伸びて来た爪のような物を七魂剣で払うサイ。

しかし、今度は続けて連続で爪のような物が伸びて来た　しかし数が増えようがサイにとってそんな物は物の数でもない。

・・・そもそも、この程度では済まないエヴァの魔法の矢を彼は実戦訓練で何度も見て来ているのだから。

それにサイの人間離れた動体視力を駆使すれば、例え近くで拳銃を撃たれたとしても避けてしまう程だ。

「オイ・・・こんなモンが通用しねえ事位は理解してるだろう、幾ら馬鹿でもよ」

連続で伸びて来た爪のような物をサイは七魂剣で切り払う。

更に伸びて来た爪は横から蹴り払って叩き折り、手で掴んで引き千切る。

すると今度は、サイを囲むように周囲八方向から爪のような物が襲い掛かって来た。

「チツ、本当に面倒臭えな・・・。」

仕方ねえ、まあ魂<sup>スピリッツ</sup>解放をするよりや法力を消費する量もマシだろ・・・」

すると何を思ったのかサイは七魂剣をホルダーに仕舞う。

続けて六道拳アスラを召喚すると迫る爪を気にせず目を瞑る・・・  
どうやら魂鎧装ソウルアツクをするようだ。

・・・だが、本来は七魂剣を装備した状態でする筈なのに何故に六道拳を装備しているのか？

その答えは直ぐに解る事だが・・・。

「魂鎧装

ッ！！！！」

言葉と共に放たれる眩い光。

それはまるで暗闇を切り裂くかのように圧倒的な光量を持ち、周囲の闇を悉く消し去る。

しかし、そんな事はお構いなしに爪のような物は光り輝くサイへと襲い掛かった

“ガギイイイイン！！！！”

その爪がサイの肉体を貫く音ではなく、鋼や鉄など同土をぶつけ合ったような音が響く。

放たれていた光が収まり、サイの姿が見えるようになると・・・周囲全ての爪のような物による攻撃は受け止められていた。

「舐めんな馬鹿野郎、周囲全方向から攻撃した所でこっちにやこう言う方法もあるんだよ。

こんな所で使う心算も無かったが・・・まあ使っちゃったのをありがたく思いやがれ、三下野郎が」

サイの姿はいつもの白銀の狐を模した鎧とは違う姿をしていた。

上半身は裸のまま鍛え抜かれた肉体に多くの傷を負っている姿、下半身は黄金の鎧を纏っているものとなっている。



しかし驚くべきはそこではなく・・・何とサイの腕が黄金の鎧に包まれ、その背には同じく黄金色の鎧の腕が四本も現れ　更にそれぞれ腕にサイがよく使う模倣神具の炎皇剣ヒノカグツチ、雷塵刀タケミカツチ、銀戦斧アマツマラ、水嶺槍ワダツミがそれぞれ握られ、爪のような物を食い止めていた。

更にサイ自身の二本の腕には轟縛鎖マリシテンが巻かれ、前から来た爪を絡み取っている　まるでその姿を言い表すならば『阿修羅』だとも言う所の最も相応しいだろう。

この姿はサイの今は無き父親が六道拳を使っていた頃に使用した戦闘形態。

神具を武装へと変化させて身に纏うもう一つの魂鎧装　その名は武装覚醒。アイムスアップ

そしてこの姿が冠する名、その名は

「阿修羅明王サイ、罷り通る  
影に隠れてなけりやあ戦えねえ三下野郎が、  
テメエの眼に確り俺の姿刻み込んで逝きやがれ！！！」

“阿修羅明王”の名を冠したサイの必殺技。  
それはかつて魂獣解放をした状態、更に六道拳を装備しなければ使えなかった秘奥義を放たせる。  
六道拳の能力の“高速化”を要い、阿修羅の如き連撃にて敵に避ける暇すら与えずに屠る『阿修羅真拳』の極致とも言える必殺奥義の一つ。

それをサイは闇を晴らされ、其処に存在した人影に向かって打ち放った

「阿修羅真獄拳」

第六天魔王・魔破羅琉輝！！！！！！」

まるで鬼神のような風貌の人物の幻影がサイ自身に重なるように映り、放たれる神速の連撃はその一撃を余さずに人影へと叩き込まれる。

そしてその暴風の如き攻撃が収まった後　影に隠れて卑劣な攻撃をし続けていた存在は大地に深く叩き付けられていた・・・。

「フン、手間取らせやがって・・・」

大地に叩きつけられ、うつ伏せに倒れている人影。  
サイはゆっくりと近くに歩いていくと足で蹴り転がして倒れている人物を仰向けにした。

「グ、グググ・・・！！！」

仰向けにされるとその人物は攻撃を仕掛けようと身を起こそうとする。

だが、サイは表情を変えないまま相手の胸を踏みつけると再び大地に縫い付けてしまう。

立ち上がるうと悶える男だが、どうやらサイが踏み付けている方が力が強いらしく立ち上がれない。

男の年恰好はマスクで顔を覆っているが故に良くは解らないが、くすんだ灰色のような髪から見れば相当な年齢だろうと思われる・・・魔法使いのようなポロポロのローブを身に纏い、頭には二本の角。

その手に握られている杖はまるで目をモチーフにしたようなオブジェクトが付いており、先程対峙したタナトリアと同じ物だ。

また、この人物から放たれている気配はハーディアスやタナトリアに今まで倒して来た屍兵達が発していた物と同じ。それだけの情報から推測するに、この男が恐らく『屍鬼王ネクロミノス』だろう。

だが、おかしい事がある。

ハーディアスとタナトリアの会話から察するに、少なくとも彼等や他の多くの屍を操っていたのはこの男だろう。

しかし、サイから見ればこのネクロミノスという男は他の者を操っているような正気を持っていないとは思えない・・・様子だけを見ればまるで某ホラーゲームに登場するゾンビのように、三大欲求の内一つの“喰欲”しか思考に無い様に見えたのだ。

『・・・ギ、ギギギ、ギギギギギ・・・』

言葉にはならない、いや寧ろ言葉ですらない呻き声を漏らすネクロミノス。

胸に空いた巨大な孔を見れば確実に決着は付いているだろう・・・何気にサイは胸から下の方を見た。

そこで思いもしない、そして二度と見たくも無い物がネクロミノスの身体を這い回っているのを目撃してしまったのだ。

・・・それはハーディアスやタナトリアを化物に変生させた、あの気味の悪い蟲である。

サイはその蟲を踏み潰して始末する　　すると悶え苦しんでいたネクロミノスが灰となって崩れ落ちた。

踏み潰した蟲にネクロミノスの死に様を思い浮かべながらサイは思考する。

「これは・・・呪隗虫シユカイチュウじゃねえか。  
何でこんな胸クソ悪いあの“クソ野郎”が使つてやがった式神がこ  
んな所に？」

待てよ、そう言えば連中と戦い始めた時からやけに何かが引つかか  
ると思つたが・・・」

思えば口には出さなかったが、小太郎と戦つた時からやけに引つか  
かる物があつた。

チビ刹那が教えてくれた関西呪術協会に伝わる封印された禁術であ  
る『狂転変生の咒法』・・・あれはかつてサイがまだ今より遙か昔  
に起こつた、後に『第二次魂獣界大戦』と呼ばれる戦の中で使われ  
た呪術に良く似ていたのだ。

それに残り二つの禁術である『涅槃反甦の咒法』も『屍魂創操の咒  
法』もその時代に使われた呪術と同じような物・・・その三つの禁  
術と呼ばれる術は、ある一人の男が編み出した物であつた。

その男の名は

思い出したくも無い、間違いなくサイ自身が殺した筈の男の名を思  
い出そうとしたその時・・・不意に肩に激しい激痛を感じる。

それは一本の禍々しい彩色と装飾を施してある一本の矢であつた・  
・。

「チツ、野郎・・・!!」

肩に突き刺さつた矢を抜くサイ。

その瞬間、凄まじい程の身体の熱さと激痛を感じる　　どうやら  
矢には鏃やじりに“返し”が付いており、それが刺さつた部分の肉を抉つ

ただ。

更にこの熱さは多分<sup>コトク</sup>蠱毒（ ）か何かだろう・・・急速に身体の熱が上昇し、四肢がまるで欠損したかのように感覚がなくなってしまうのだから。

（ ）【壺や箱などの中で多くの蟲（蜘蛛、百足、蠍などの節足動物、蛇や蜥蜴などの爬虫類、蛙のような両生類も含む）をお互いに喰い合わせて最後に残った一匹を用いて呪いとする儀式、またはそれにより生み出された呪毒の事。 呪の強さから平安時代などでは相手を呪い殺す事などにも多く使われた】

「ククク・・・愚かですねえ。

一応、貴方にもさっさと気付く事が出来るように複線は多く残しておいた心算ですが。

早く気付いていたただかなければ、つまらないじゃないですかぁ・・・  
ククククク

声のした方を振り向くサイ。

そして其処に居た人物を見て強烈な殺気を露にした。

・・・このようにサイが本気で殺気を向ける相手など、今まで一度も見た事が無いが。

サイの目線の先に居る人物。

暗い緑と黒の法師服を着た、髑髏をモチーフにしたかのような仮面で鼻から上を覆う男。

サイとは違い、茶色の太い尾・・・狸だろうと思われる尾を生やした、隠神刑部と呼ばれるサイが生まれた魂獣界の一族の存在。

・・・そしてサイの母であるイズナを呪法により呪い、卑劣な方法で死なせる原因を作った憎き陰陽師。

男の名は『阿志<sup>あしやうま</sup>耶道幡』。

サイが産まれる前に起こった第一次魂獣界大戦、そして後の次期魂獣大帝を決める『七天大武会』の最中に勃発した第二次魂獣界大戦を起こした隠神刑部族が長・聖異大將軍 徳我輪とくがわいえやす威慧耶主の側近である『隠神刑部三巨頭』の一人・・・隠神刑部の最狂最悪の陰陽師でもある人物だ。

だが、かの大戦の際にサイが確実に息の根を止めた筈であつたが・・・。

「ドウマン・・・テメエは俺が確実にこの手で始末を付けた筈だ！」

そう、サイの言う通りだ。

先の大戦の際に白面九尾の長であるサイの母・イズナに呪いをかけたドウマン。

その事を切欠として母を失ったサイは憎しみに駆られ、ドウマン率いる陰陽師部隊を皆殺しにし、更にその後自らの側近三人を喰らつて変化したドウマンさえも殺した筈だ。

しかし、目の前に居るのは殺した筈のドウマン本人。

一体、何故生きているのかは理解出来ない・・・だが、生きているのならばもう一度始末するだけの事。

唯、それだけの事である。

だが・・・。

「ククク・・・貴方の考えている事はよく解りますよ。

憎いでしよう、憎いでしようねえ・・・殺したと思つていた母親の仇が生きていたのですから。

で・す・が、貴方には何も出来ません、何故なら我が特製の蠱毒を

宿した矢をその身に受けたのですからねえ……」

馬鹿にしたかのような口調で話すドウマン。

先程から矢を受けた傷口から力が抜けていくような感覚が続いていた。いつの間にか阿修羅明王携帯も元の姿に戻ってしまっている。

……次第に四肢の感覚どころか、目までばやけ始めているのだ。

「テ……メエ……まさ……か、これは……」

その症状の意図が理解出来たサイ。

これはかつての戦いの際にドウマンが使っていた最大の呪……母・イズナが施された呪いだ。

最初に呪をかけた対象の法力を封印し、次に四肢を麻痺させ、視覚を潰し、嗅覚を潰し、味覚を潰し、聴覚を潰し……生きていくのに必要な五感を少しずつ侵食していくというもの。

そして最終的には身体組織全てを衰弱させ、苦しませながら命を奪うという狂気の呪いなのである。

少しずつ五感が麻痺していく中で、ドウマンは下卑た笑いを浮かべながら呟く。

「嬉しいでしょう？　嬉しいでしょうねえ。」

この呪法は貴方の愚かな愚母を追い込む際に使ったものですから……でも大丈夫、直に動く事も出来なくなりますから。

さあ悶え苦しんでくださいよ、私に苦しんで苦しんで苦しみぬいて、絶望の果てに死ぬ姿を見せてくださいよ。

それで貴方に一度命を奪われた恨みが晴れますからねえ……キヒヒヒヒヒヒッ！！！！」

「野……郎……！！！！」

サイはまだ身体が何とか動く内にドウマンを斬ろうと七魂剣を手に握ると薙ぐ。

しかしもう既に四肢が麻痺しているサイの手に七魂剣を握ってられるだけの握力も無い。

痺れた手から七魂剣は零れ落ち、力無く大地に倒れてしまった……。

「おお、怖い怖い……危ないじゃないですか。

こんな危ない事をする手は、こうしなければいけませんねえ!!!

！」

“グシャ!!!”と言う嫌な音が響く。

ドウマンによって踏みつけられたサイの腕は本来は曲がらない方にひん曲がった。

「グ、グアアアアアアアアアア!?!」

激痛に悲鳴を上げるサイ。

だがドウマンはこの程度では終わらせない 今度はゆっくりと後方に回り込むと……。

「ああ、そう言えば先の大戦では私を足蹴にしてくれましたっけねえ。

ダメですよお、こんな癖の悪い足にはお仕置きしないといけませんから……こんな風に、ね!!!」

“バキッ、バキッ!!!”という音が続けて鳴り響く。

サイの膝の裏を思いつき踏み潰して骨を砕き折った音だ……今度は両足が曲がらない方向にひん曲がり、サイは激痛に悶え苦しむ。





る。  
更に殆ど麻痺してしまつて動かない折られていない方の腕を上げると……。

「クソ……喰らえ、だ……クソ野……郎……!!」

そのまま中指を立てたポーズをしながら呟く。  
それを見たドウマンは怒りに顔を紅くすると、残っているもう一本の腕を蹴り折った。

「この小僧がああ!!!」

ならば望みどおりに苦しんで死ねええええ!!!!!!!」

ドウマンの法師服の袖から現れる蟲、咒隗蟲。

まるで獲物を前にした肉食動物のように涎を垂らしながら瀕死のサ  
イに向かつて歩き出す。

生きたまま蟲に喰わせると言う事だろう……自らが蠱毒で作りに  
出した蟲に任せておけば、跡形もなく喰い尽してくれるだろう。

その苦しむ様を見たい所だが……実はある事情によりドウマンは  
戻らねばならない場所があった。

「さて、後はあの連中を始末しなくてはいけませんねえ。

眠らされていた両面宿難なる怪物もそろそろ目覚めますし、生贄の  
小娘さえ居れば自由に操る事も出来ますし。

ククク……奴を利用してこの忌々しい関西呪術協会とやらを滅ぼ  
した後、此処に私の住処でも作りますか。

男共は皆殺し、女共は次代の私の依代よりしろを作る為に精々利用させて頂  
きましょう……特に魔力とやらの強そうな連中が多かったですか  
らねえ……クククククク、クヒヒヒヒ、キヒヒヒヒ!!」

そんな事を呟きながら歩き出すドウマン。  
サイを始末し終わった今となっては他の連中など物の数ではないの  
だろう。

この時、ドウマンがサイに自らの手で止めを刺さなかった事  
が間違いだと気付かずに。

“・・・始末スル？ 誰ヲダ？”

“ 奴八何ヲ言ツテイル マタ、我カラ奪オウト言ウノカ？”

“ 許サナイ モウ何モ、奪ワセルモノカ・・・”

“ 殺ス・・・殺シテヤル・・・欠片スラ残サズニ消滅サセテヤル・・・”

『ギ、ギイイイイイイ！！！！？』

突如鳴り響いた金属音のような悲鳴、体液を垂れ流しながら握り潰  
された咒隗蟲。

その声に驚き、振り向いたドウマンが見つめる先に居たもの。  
それは・・・本来なら四肢をへし折られ、毒の所為で五感全てが麻  
痺して、死を待っているだけであった筈のサイが何も無かったかの  
ように立っている姿だ。

「なっ！？ ば・・・馬鹿な！？」

何故だ、何故立っている！？ いや・・・それ以前に何故動ける！？」

顔を伏せていたサイが急に顔を上げる。

その顔は流れた血によって銀髪の髪が倒れ、表情が見えないように隠れているが・・・片目だけが禍々しく深紅に光り輝き、ドウマンを見ていた。

ゆっくりと歩き出すサイ。

歩いている間に身体中に付いた傷は急速に治癒されて行き、折れて引き摺ったり垂らしていた筈の腕や足もいつの間にか完治していた。

ドウマンは静かに歩いてくるサイを見つめながら呆気に取られていた。

いや、認めたくは無いが恐怖していたのだ・・・それ程までに今のサイが放つ覇気はとんでもない物であった。

それはかつて仕えていた主である聖異大將軍イエヤスの覇気をも上回る程に禍々しい気配・・・。

「お、おのれええええ！！！」

式神を袖から放つ。

だが、式神はサイに触れる前に急に止まってしまつと紙に戻り、大地にヒラヒラと舞い落ちた。

「何っ！？ おのれ、ならばこれでどうだ！！！」

袖から放たれる先程サイの肩に突き刺さった物と同じ装飾を施された矢。

しかしそれもサイに触れる前にまるで煙のように消えてしまったの

だ・・・その光景にドウマンは驚く。

「お、おのれえええ、どんな小細工かは知らぬが面妖な事を！！  
ならばこれならば 道摩どうまおんみん陰陽術・伍ご霊神蝕りょうしんじよく！！！」

ドウマンの手から放たれるのは怨霊にドウマン自身の法力を融合させて放つ奥義。

それに更に法力を込め、サイを跡形もなく消滅させる為に全力で打ち放った。これはかつて隠神刑部でも最強と謳われた猛将、本ほん陀だ蛇だ蝮ぼうにさえて傷を負わせれた奥義だ。

直撃で無傷で居るなどという事は絶対がない・・・その筈だった・・・。

「ば・・・馬鹿な・・・！？」

しかし、その一撃はサイが無造作に払っただけの腕で薙ぎ払われ消滅した。

サイには傷どころか皮一枚さえ傷付けられても居ない・・・この奥義が効かないなど、ドウマンにとっては予想外であったのだ・・・。

「く、来るな・・・来るなあああ！！？」

全ての攻撃が一切切通用しない・・・。

それ程の信じられない状況にドウマンは慌てて逃げ出そうとした。しかし、サイの禍々しく深紅に光る片目が光った瞬間・・・ドウマンはまるで金縛りにあったかのように身動きが一つも取れなくなってしまったのだ。

「いげあ！？」





「・・・どうなってんだ？」

さすがにサイの傷などの自己再生能力が高いにしても高々十数分で瀕死の状態から此処まで治る等は到底無理だ・・・。  
何せフェイトと最初に戦った時などエヴァの魔力供給と言う補助があっても半日は死んだように寝ていたのだから。

誰かが意識が無くなった際に治癒術でも掛けてくれたのだろうか？  
いや、それも無いだろう。サイの能力無効化アヒリテイキャンセラによって生半可な力では術でも何でも殆どを無効化してしまう・・・それは回復や補助なども然り。

エヴァ程の強力な魔力の持ち主ならばあるいは大丈夫かもしれないが、もとより彼女は別の場所で戦っている・・・更に元々エヴァは不死故に回復魔法が苦手である筈だ。

「・・・まっ、そんな事を今は考えてる暇なんぞねえか」

目に見えて巨大な光の柱を見れば、あそこから出て来る存在が“面倒な相手”である事は一目瞭然。

更にサイの視線は己の近くに落ちていた『阿志耶道幡』の名が記された人形ヒトカタへと向かう。

此処に陰陽術の変わり身とも言える人形ヒトカタが破れているとは言え落ちているという事は・・・どうやらドウマン本人は何処かにいるという事だ。

両面宿難にドウマン、面倒な相手が二体もいるとなれば早く行かねば取り返しの付かない事となるだろう。

不幸中の幸いに落ちていた人形ヒトカタを拾い上げて調べてみれば、サイを倒す心算で相当な法力を込めて分け身を作ったようだ・・・なので残りの法力の量はそんなに多くは無いようである。



「確か『次代の依代を作る』とか言つてやがったなあ、クソ野郎。つて事は今の奴は寄生虫のように誰かの身体に寄生してやがるよつだな。」

「・・・ああ成る程、道理で考え方がドウマンに似てやがると思つてたが・・・それが感応したか、それとも利用されて寄生されたな、ありやあ」

そんな事を呟きながら人形ヒトカタを投げ捨てるサイ。

そして腰の七魂剣の柄に手を添えると、一気に抜き放つて紙吹雪の様な大きさになる程度にまで粉々に切り裂く。

その双眼は唯真つ直ぐに光の柱が立ち上る儀式台のある場所に向けられていた。

そして、唯一言。

「・・・今度こそ、化けて出れねえように跡形も無く消滅させてやる。」

精々首を洗つて待つてる、ドウマン・・・」

そう呟くと、決戦の場所へと向かつて走り出したのであった・・・。

## 第四十四話：月下の死闘・伍々隠れし一族の陰陽師（後書き）

投稿完了です^^

いよいよ今回はサイのバトルてな感じでしたが、思いのほかあっさりと終わらせました。

しかし、後半に出て来たサイの変貌は一体何を表しているのか？

そして復活してしまった飛騨の大鬼神をサイ達は一体どのようにして倒すのか？

更に京都四方に封印されているらしい怪物たちは何時現れるのか？

それは次回をお楽しみに^^

補足

ドウマン・・・神羅万象 七天の覇者・第三弾に登場した隠神刑部の長・聖異大將軍イエアスの三人いる側近の一人。

陰陽師・導師・法師達の揃った軍団を操る人物で、残忍で非道、部下の命など捨て駒程度にしか思っていないような最狂最悪の変態陰陽師。

後々に部下を喰らい、姿をどこぞの某大作RPGのラストボスの魔界の貴公子・変身後のような姿へと変えてサイと戦うも最終的には敗北して膨張し続ける力に身体の器が付いていかずに自壊して果てる。



で勝負は決したも同然やな・・・」

両面宿難の肩に乗り、千草の晒いが戦場に轟く。

一方、そんな巨大過ぎる敵の姿を見てしまった明日菜や刹那は呆然としてしまい、何も出来ない。

人間とは自分の考えの範疇を、想像の範疇を超えてしまった事態に直面すると思いが停止してしまう物である。

・・・だが、そんな二人を正気に戻すようにネギが叫ぶ。

「何を呆然としてるんですか、明日菜さん、刹那さん！！

あんな化物がここで暴れまわったら・・・それこそ大変な事になっちゃいますよ！！」

その言葉に正気を取り戻す明日菜と刹那。

しかし・・・目の前にいる存在は今まで戦ってきた連中とは明らかに格が違う。

「そ、そんな事言っても・・・どうすんのよ、あんな馬鹿でかい怪物を相手に・・・」

双眼に映る巨大な鬼を見上げながら明日菜が呟く。

確かにあんな巨大な怪物、一体全体どうやってブツ倒せば良いというのか・・・？

更に面倒な事に、どうにかしようとしても周囲には増殖を続ける魔物に大量の妖怪、そして

「何を余所見してはるんですか、センパイ？」

そう、それに刹那と同等クラスの剣鬼・月詠が此処にはいる。

何とか斬撃を避けながら、攻撃を弾きながらこの場を離れようとする

る三人を行かせぬとばかりに攻撃を仕掛けてくるのだ。  
この状況を何とかしなくてはあの巨大な鬼と戦う事も、ましてや木乃香を助ける事も出来はしない……。

「くっ……仕方ない、ここは最早……あの力を使うしか……」

この様な切羽詰った状況で、木乃香を助けるにはそれしかない。  
己の忌々しい力、人から化物と蔑まれる力、だがそれでもサイのよう  
に誰かを護れる力。

本来なら使いたくは無い、だがそれでもこの状況を打破するにはそれ  
れしか……そう考え、刹那が己に眠る“人外の力”を解放しよう  
とした、まさにその時

「リック・ラク ラ・ラック ライラック！！ 魔法の射手 連弾・  
・オブスクリー  
闇の120矢！！」

台詞と共に周囲に放たれる黒い光を纏った幾百の矢。

それらはネギ達の周囲にいた増殖する魔物達を射抜き、纏めて消滅  
させる……増殖などしている時を与えずに、だ。

「形態変化、連砲形態……砲撃、開始します！！」

続くのは地を削り取る程の銃弾の雨  
弾丸は周囲にいた魔物と共に妖怪を巻き込み、今まさに攻撃を仕掛  
けられようとしていた明日菜とネギを護る。

「……邪魔」

更に続くのは影より現れし黒い刃。

見れば周囲にいた妖怪達の影より刃が現れ、それぞれを貫いて消滅させていた。

影を操り黒き刃を発生させていた人物はそのまま地を蹴ると、刹那に斬り掛かるうとしていた月詠の刃を弾く。

「あや？ 誰でつか、あんさん達……」

ウチとセンパイの愉しい時間を邪魔せんといて欲しいんやけど？」

月詠がそう漏らす視線の先にいた人物……それは先程までタナトリアと戦っていたザジだ。

更に空中には月詠を見下ろすエヴァ、先程自らが召喚した神具を手に携える茶々丸の姿もある。

……どうやら、無事に合流出来たと言う事だ。

「エヴァちゃん、茶々丸さん、ザジちゃん!!」

明日菜が嬉しそうに声を上げる。

彼女達にしてみれば例え『先に行け』と言われたにしてもその安否には気が掛かっていた。

此処にサイが居ないのが引っかかったのだが、取り敢えずは無事だった事を喜ぶ。

「……何をのんきな事を言っている、走れ!!」

あんなデカブツがこんな所で暴れまわったらそれこそ此処ら周辺は焦土と化すぞ!!

見た所、今ならばまだ完全覚醒していない状態だ さつさと近

衛木乃香を助け出せ、そうしたら私がああ化物の息の根を止めてやる!!」

と、再会を喜ぶ時間も取らぬままエヴァが走り出す。

エヴァの言葉を聞いた明日菜も、刹那も、ネギも目的を思い出したように走り出した。

そう、彼女達がすべき事・・・それはこんな所で時間稼ぎに付き合っている事ではないのだから。

更に今、エヴァは『木乃香を助け出せば化物の息の根を止めてくれる』と言っていた。

ならばその言葉を信じ、木乃香を助け出す事に全力を賭ける・・・それが今、三人の成すべき事だ。

「え、逃がしませんよ。」

だってウチ、まだまだセンパイと愉しく“斬り合い”したいですからあゝ」

しかし、その後ろを小太刀を双手に構えた月詠が追ってくる。

彼女にとっては何処が滅びようが、何が消滅しようが関係ない・・・例え世界が滅びるなどと言っても興味など無いだろう。

彼女が望む事、それは唯“斬り合う事”・・・唯そのみなのだから。

「チツ、仕方ない・・・。」

茶々丸、あの既知外小娘の足止めをしる！！ さっさと行かねばあの大鬼以外の化物連中が目覚めてしま・・・」

追いかけて来た月詠の足止めをさせようとしたエヴァ。

現在の彼女は魔力を完全解放されており、月詠を倒せない訳ではない・・・寧ろ瞬殺出来るだろう。

しかし、もう今は一刻の時間も無い。

例えば両面宿難があそこから動いてしまえば、その強大な波動を契機に京と周囲四方向に眠る化物たちも目覚めてしまう。

そうなれば完全にアウトだ、両面宿難の動力源とも言える木乃香は力を吸い尽くされて死ぬ可能性が高いし、四方向の敵を一辺に相手をする事など出来はしない。

更に一気に四体もの化物が復活すれば、竜脈と呼ばれる力の流れの多い京都の地盤が暴走し、他にどんな悪影響が出るかも解らないのだ。

その力の所為で富士が噴火したり、最悪は日本自体が力の暴走で消滅する可能性もある。

だが・・・台詞を途中まで言ったエヴァは口を閉じる。

彼女の目に、走って迫ってくる月詠を邪魔するように刀が投げ込まれたのを目で捉えたからだ。

そしてそれ以上は何も言わずに前を向くと、空中浮遊しながらネギたちと共に先を進む。

間違いない、そんな確信がエヴァにはあった。

「・・・邪魔をせんといてくれます、お兄さん？」

笑顔で殺気を飛ばす月詠。

彼女とすれば絶好の獲物とも言える、尊敬する刹那との斬り合いを邪魔されたのが気に入らないのだろう。

自分の追うのを邪魔するように刀を投げて来た人物を血走った目で見ながら、その表情は晒っていた。

「それとも・・・お兄さんがウチを愉しませてくれるんですか？」



まるで走り去っていった刹那の背を追うように遠くに目をやる月詠。目の前にいる人物に興味など無い、目の前の人物は自分が斬りたいと願う刹那とは違い・・・全くそそられないのだ。

そこら辺にある路傍の石と同じ・・・まあ、彼女にとっては刹那以外は所詮は誰もが“その他大勢”に過ぎないのだが。

それでも少しでも殺気でも何でも向けてくれれば愉しめると言うのに　目の前の人物からはそれすら感じないのだから、全く以って興味が湧く訳も無い。

先の台詞は所詮、答えなど期待していない言葉であった・・・。

だが

唯、目の前に居た半裸の銀髪の少年は静かに言い放った。

「・・・悪いが時間が惜しいんでな。

禅問答がしてえなら、どこの寺か神社にでも言っつて坊主相手にして貰えよ“小娘”」

その言葉が言い終わるや否や、月詠は斬り掛かった。

しかし　その瞬間、剣撃を一合だけ接触させた後に月詠の意識は消える。

次に目が覚めたその時、月詠は自分に起こった事を理解して狂ったように晒っていた

「アハツ、アハはハ・・・アハハはハハハハハっ！！！！」

四肢を大地に縫い付けられて晒い続ける月詠。

その腕にも、その足にも、絶妙に腱や骨、神経や筋肉などといった部分をすり抜けて刃が何本も突き刺さっている。

何の変哲も無い唯の日本刀・・・彼女を雇った千草が木乃香の力を利用して召還した鬼達が戦場に残した刀を利用して己を倒す、それは即ち“相手は本気で戦っていない”と言う事が簡単に理解出来た。

「アハははハハ・・・ハハハはははハハハっ！！！」

月詠が対峙した相手は殺気を感じなかったのではない。

言うなれば殺気を放つ必要が無かったのだ。それこそ人が道端の雑草を踏み潰す事や、虫を潰すのに一々理由を付けないのと同じ事である。

月詠は相手を“その他大勢”程度にしか考えてなかったが・・・相手はそれ以下にしか自分を見ていなかった。

「アハハハハッ！！ あはハ、ハハはハ、アははハハハッ！！！」

今まで感じた事も無いような屈辱と凄まじい喜悦に月詠の笑いは止まらない。

屈辱だった。強くなる為に唯、只管に斬り続けた己の剣が眼中に無いどころか路傍の石以下に切り捨てられた事が。

そして喜悦だった。刹那以外に己が初めて“斬り合いたい”と本気で願う相手が現れた事が。

狂ったように晒す月詠の表情は、まるで恋をした初心な少女のように紅く染まり・・・快感にその身は包まれている。

嬉しい・・・実に嬉しい。

こんな想いに駆られたのは、初めて人を斬った時以来だっただろうか？

屈辱と、その屈辱が齎す愉悦感に笑いが止まらない。



その中で唯一、エヴァと同じく魔法使いであるネギがその眩きに対して疑問をぶつけた。

「拙い・・・？ エヴァさん、一体何が拙いんですか・・・？」

するとエヴァは何も言わずに宿難の方に掌を向ける。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック・・・魔法の射手 セリエス  
連弾・  
闇の150矢！！」

その掌から放たれるのは、一発一発がネギの現時点で使える最も強い魔法の『雷の暴風』ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズよりも膨大な魔力の籠った大量の魔法の矢。全弾が宿難に叩き込まれるが・・・それでも、エヴァは続けて魔法を唱える。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック・・・魔法の射手 セリエス  
連弾・  
氷の150矢！！」

更にその掌から放たれる、先ほどと同じ規模の魔法の矢。

放った二つの魔法の矢は最もエヴァが得意としている属性の物

しかもエヴァは学園長によって封印を解放された状態である。

これを喰らって生きていられる存在が果たして居るのであるのか・・・？

だが

『GUUUUUUUUU・・・』

魔法の矢を弾幕射撃のように計300発も放ったというのに。

全員の視線の先に存在している宿難は、損傷どころか傷一つすら付

かずに其処に佇んでいるのだ。  
それを見たネギは驚いてしまう……。

「なっ!?!? そ、そんな……あんなに大量の魔法の矢を放ったのに!?!?」

驚き、呆然とするネギ。

そんなネギを見ながらエヴァは親指で宿難を指差しながら忌々しそうに言う。

「やはりか……アレは強力な魔法障壁だ。

恐らく近衛木乃香の内に眠る膨大な魔力があの大鬼を囲むようにしてとんでもない規模の魔法障壁を展開させているようだな 詠  
春の話では、内に眠る素質だけなら私の封印解放後の魔力すらも上回るらしい。

正面切って広範囲殲滅魔法や古代上位魔法を使った所でアレをブチ破るのは不可能に近い……最悪だな」

なんと宿難にはエヴァやネギが己の魔力で張っていると同じ魔法障壁が張られていたのだ。

……しかも、当代最強最大クラスの魔力を有している木乃香を利用して制御している為はその魔法障壁は生半可どころか上位クラスの魔法でもブチ破るのが不可能なまでに強度が高いと来た。

某悪魔狩りのゲームの主人公が此処に居たら“Jackpot!<sup>大当たり</sup>!”  
”とでも言いそうな最悪の状況となってしまうている。

「そ、そんな……じゃあエヴァちゃん、あの怪物は倒せないの!?!?」

明日菜は説明を聞いても、魔法関係の事は今一理解出来ない。

だが、少なくともネギの驚きようや、明らかにネギよりも強いエヴァの魔法が一切通用しなかった所を見て状況の深刻さは理解出来た。その横に居る刹那もまた同様な表情で宿難を見ている……。

「いや、手が無い訳でもねえだろ？」

その言葉に皆が後ろを振り向く。

其処には声の主であるサイが両腕を胸の前で組みながら宿難の方を睨んでいた……。

「……やつと来たのか、お前は。」

先に女を待たせていると言うのは、男としての甲斐性がないぞ？」

「悪いな、野暮用があつてよ」

会った瞬間に軽口を言い合う二人。

この様な絶対的に最悪な状況でもこの二人は決して絶望しない……これ以上の絶望をこの二人は生きる世界は違うであれ、何度も経験して来ているからだ。

そんなサイの言った言葉の真意を刹那は問おうとすると、その前にその意図を理解したエヴァが口を開く。

「方法としては二つある。」

一つは近衛木乃香の有する膨大な魔力と相対するか上回る攻撃をぶつけて魔法障壁ごと両面宿難を打ち砕けば良い。

それと魔法障壁は魔力に比例してより強力な物となるが、零距离射程で放てばどのような強力な魔法障壁でも効力は最小になる……それを利用して超至近距離で古代上位魔法クラスの攻撃を放てば破れるだろう。

しかし、現状である膨大な魔力を超える程の攻撃など放つ事は消耗

している我々では無理に等しい・・・仮にもし放てたとしても、その場合は両面宿難と共に居る近衛木乃香まで巻き込んでしまう」

勿論、エヴァと魂獣解放したサイが全力で力を放てば魔法障壁は破れるだろう。

しかしそれは木乃香を巻き込んでしまうし、サイが全力で力を解放すれば残り少ないに等しい法力を全解放してしまう為に確実に倒れてしまう。

この後に起こる可能性のある“更に最悪な状況”を想定すれば、悔しいがサイが欠けてしまつては此方には確実に被害が出る事は明白だ。

故にエヴァはもう一つの方の策を語つた

「もう一つは両面宿難の魔法障壁を無力化させれば良い。

その方法は、まずは奴の肩を見てみる・・・」

その言葉に全員の視線が宿難の肩へと向けられた。

肩に居たのは空中に浮いている千草と、その横で猿轡をされながら同じく宙に浮いている木乃香の姿が見て取れる。

「あそこに近衛木乃香が居るのは見て取れたな？」

もう一つの方法とは両面宿難を操る為ないし維持する為に媒介とされている近衛木乃香を奪還する事だ。

元々奴の魔法障壁は近衛木乃香の大量の魔力が作り出している・・・言わば“借り物の力”という事、故にその力を生み出している力の源である存在が居なくなれば私の魔法で消滅させる事が出来る」

二番目にエヴァの言った方法ならば木乃香を傷付けずに助ける事は出来る。

だが・・・その為には越えなければならぬ大きな壁という物が存

在した、それは……。

「しかし、この方法はあの天ヶ崎千草とか言う女に近付くまで気付  
かれないという事が前提だ。」

接近に気付かれてしまえば此方の意図は余程の馬鹿でない限りは理  
解されてしまう、そうならば近衛木乃香を助けるどころか……ア  
リの魔力の所為で制御可能となったデカブツの一撃を喰らって形も  
残らん。

となれば必要となる物は必然的にあのデカブツの注意を向けさせれ  
る存在だ　　有り体に言えば“囷”と言う奴さ」

そう……もう一つの方法を実行する為に必要となるのは囷である。  
敵の注意を逸らす為にはどの時代であっても必要とされる　　最  
も血を流す事になる“潰れ役”。

それをすれば生き残れるかさえも解りはしない、だがそれでもあの  
両面宿難から木乃香を奪還するには誰かがやらなければならない事  
なのだ。

……あんな巨大な怪物を相手に囷などして、生き残れる確率など  
無いに等しいだろう。

「そ……そんな……他に、他に方法は無いのですかエヴァンジ  
エリンさん!？」

刹那がそう問うが答えは返ってこない……唯、静かに首を横に振  
るだけだ。

もっと考える時間があれば他にも策が出たかもしれないが、今はも  
う既に時間が殆ど無いに等しい。

ある意味ではこの様な問答をし合っている時間すら惜しい状況なの  
だから。





つつかお前・・・俺を誰だと思つてやがんだ、コラ」

見ようによつては空元気にしか見えない。  
絶望的な状況・・・言い方を変えれば『時間を稼ぐ為に死んでくれ』  
と言われている様なものだ。

だが、どんな状況であろうと絶望的であろうと・・・自分の選んだ  
生き方を曲げないのがこの男なのである。

その横で心配な表情でサイを見つめているネギや明日菜、刹那に対  
してもサイは言う。

「それにな、俺は別に自己犠牲の精神なんてモンは持つちやいねえ  
ぞ。

唯、こんな重要な役回りをあんなデカブツ相手にやれるのはこの中  
じゃ俺しか居ねえ。

・・・だから俺がやる、そんだけのこつた」

そう言い終わるとサイは七魂剣を掲げながら紅い珠を召還して剣の  
孔に装着する。

姿が赤い鳥を象つた胸当ての付いた鎧を纏つた姿に変わった。

「・・・だからよ」

するとサイは更にその手に力を集中させる。

その掌に現れたのは・・・先ほどの紅い珠と同じ形の碧の珠。  
掌に現れた珠を見つめながら、サイはゆっくりと剣に碧の珠を装着  
しながら呟いた

「だから刹那・・・それにネギに明日菜、茶々丸、ザジ・・・キテ  
イ、その先は任せたぞ」

放たれる光

凄まじい力の奔流が周囲に放たれ、サイを包み込む。

その光が止み、目が見えるようになったその先に現れた存在、それは

「白面氷炎武王サイ、見参

」

其処に居たのは赤と蒼、それぞれ左右に二色に分かれた鎧。

仏像の後光のような飾りを背に纏い 併せて背から一對の翼、

二本の尾を生やしたサイの姿であった……。

「サイ……その姿も魂鎧装ソウルアツプの一種なのか？」

姿が変わったサイにそう言葉をかけるエヴァ。

サイから感じるのは炎のような熱い気と氷のように冷たい気……その相対する二つの気を組み合わせ、相対しながらもお互いを高めあつて居るようにも感じた。

「まあな……またぶつつけ本番だったがよ。

これで少しは良い圏になれるだろ……っと、今は喋ってる時間も惜しいんだつたな。

んじゃな……行つて来るぜ!!」

翼を開き、天を飛翔して駆けんとするサイ。

しかし、其処で一度立ち止まると……背を向けながらサイはもう一人の“美しき天を駆ける翼を持つ少女”に言葉を飛ばした。

「踏み出す事を望むなら、勇気を出して踏み出せ。

テメエを否定する奴なんぞ此処には居ねえ・・・後は“テメエ次第”だ。

テメエを信じる俺を信じる・・・テメエを信じる木乃香を、ネギを、明日菜を・・・そして何よりもテメエ自身を信じる」

その言葉を最後にサイは天を駆ける。

サイに言われた言葉、今まで自分が見て来た事、そして最愛の親友の事・・・それらを信じた刹那は意を決したように前を向く。

彼女の目は強い意志を宿し、己の隠してきた秘密を此処で自ら語る事を決めたのだ。

「ネギ先生、明日菜さん・・・お嬢様は私がお救いします！

お嬢様の居る位置、両面宿難の肩の場所には・・・私ならば行ける方法を持ち合わせていますから」

その言葉に、そして光景に明日菜とネギは驚く。

先ほど、サイの姿が変わった事に呆気にと取られていた・・・。

だが、考えても見ればサイは凄まじい力の持ち主なのだ　今更尻尾が増えようが、翼が生えようが、腕が増えようが驚く事もないだろう。（ある意味、サイも規格外過ぎるのだから）

しかし・・・いきなり純白の羽を舞い散らせながら刹那の背に白き翼が生えたのだ、驚くなと言う方が無理である。

「すみませんネギ先生、明日菜さん・・・私はお嬢様にもコレの事は秘密にしていました。

これが私の正体・・・私は皆さんとは違って純粋な人間ではありません、奴等と同じ化物なんです。

でも・・・誤解しないで下さい、私のお嬢様を護りたいという気

持ちは嘘ではありません！！」

まるで懺悔をするかのように・・・それで居て強い意思を込めながら刹那は語る。

空に舞う白雪の如く、舞い落ちる純白の羽が作り出す幻想的な光景に明日菜とネギは思わず見惚れていた。

・・・そのまま震える声で刹那の告白は続く。

「私がこの事を今まで秘密にしていたのは・・・自分の勇気が無かったからです。

私は本当は理解してたんです　自分は化物だから誰かに知られれば拒絶される、そんな言葉を言い訳にして居ました。

だけど本当は・・・本当は、自分のこの姿を見られて皆さんに拒絶される事だけが怖かったんです！！

お嬢様・・・このちゃんは絶対にそんな事無いというのに、それ自分で信じられなかった！！

そんな勇気の無さを言い訳にして逃げていた・・・情けない女ですつ・・・」

口を挟む事も無く言葉を聞いているエヴァ。

そしてその横に居るザジと茶々丸・・・ある意味ではエヴァもザジも刹那の思いは痛い程に理解出来る。

だからこそ何も言わず、刹那自身の口から語られる事を待っているのだ。

「だけど・・・もう私は逃げません。

私を、私自身を何処までも信じてくれた人が・・・信じ続けてくれる人が居ます。

たとえ拒絶されても良い、化物だと蔑まれても良い・・・それでも

私には護りたい人が居ますから！！

だから明日菜さん、ネギ先生・・・化物と一緒にでは不快かも知れませんが、今だけで良いから私を信じてください！！」

そう言っつてサイと同じように背を向ける刹那。

誰も何も言わない・・・当然だ、化物となど共に居る者はいないだろう。

だがそれでも、彼女の脳裏には例えどのような状況でも己の誇りを信じ、そして何よりも自分の目で見たものを信じ貫く漢の背中が刻まれていた・・・例え拒絶されたとしても、信じてくれる者が一人でも居ればそれで彼女にとっては大きな力となったのだ

すると・・・急にむず痒い様な、くすぐつたい様な感覚を己の翼に感じた。

その感覚を疑問に思い、後ろを向くと・・・刹那の吐露など殆ど気にする事も無い様子で明日菜が刹那の翼を触って感触を確かめたり、頬擦りしたり、匂いまで嗅いでいる。

それらの行為を心行くまで堪能した後、明日菜は刹那の背中を思いっ切り引っ叩いてから口を開く。

「な〜に馬鹿な事言ってるのよ刹那さん。

こんな綺麗な翼が背中から生えてくるなんて格好良いじゃないのよ

」

「・・・えっ・・・？」

“格好良い”・・・そんな感想を持たれたのは初めてだ。

幼き日は白い翼は生まれた里では『禁忌』とされ、人間にも鳥族にも排斥されるだけの忌むべきもの。

引き千切れるのならば引き千切りたい・・・幼いながらに泣きなが

ら千切ろうとした事さえある。

しかし、笑顔でそう断言した明日菜は呆気に取られている刹那を抱きしめると言葉を続けた。

「本当に馬鹿よね・・・あんたって木乃香の幼馴染なんでしょ？」

しかも二年間も影からずつと見守ってたんでしょ・・・その間にあんたは一体、木乃香の何を見てたのよ？

木乃香がこの位で誰かの事を嫌いになつたりすると思う？ 本っ当に馬鹿なんだから・・・」

「あ・・・明日・・・菜・・・さん・・・」

抱きしめられながら刹那は目に涙を浮べる。

此処に自分を拒絶する者は居ない・・・それどころか、自分を抱きしめてくれる人が居てくれた。

それだけで刹那の心は、刹那の思いは、刹那の今まで生きてきた不遇の人生は救われたのだ。

「行って、刹那さん！！ 行って木乃香を取り戻して！！」

もう一度、刹那に発破をかけるように背中を思いつ切り引つ叩く明日菜。

「は・・・はいつ！！！」

その思いに、その優しさに、刹那は力強く頷くと・・・翼を開いて天を舞った。

残された明日菜に対して、今まで静かに黙っていたエヴァが口を開く。

「・・・フツ、成る程な」

「・・・何よエヴァちゃん、そんな人の顔を見ながらニヤニヤして？」

「いや、お前とサイが何故気が合うのかが解ったような気がするの  
でな」

その言葉の意図は理解出来ず、首を捻りながら『どう言う意味よ、  
エヴァちゃん』と尋ねる明日菜。

しかしその問いに答えが返ってくる事は無かった 何故なら、  
エヴァの視線はもう既に両面宿難のみしか捉えていなかったのだから・・・。



第四十五話：月下の死闘・六〇飛驒の大鬼神（後書き）

投稿完了です・・・遂に出ましたサイの七魂剣式玉形態。

そして遂に語られた刹那の秘密と、それを受け入れて抱きしめる明

日菜の男気（女気か？）。

いやはや・・・まさに『惚れてまうやろー！！』ってな感じですか？

さてさて、大体物語としては後3〜5話で京都編終結ですかね。

最後の最後までお楽しみに^^

#### 第四十六話：月下の死闘・七つ貫く意地、その覚悟

「・・・しっかし、まあ。

明日菜の奴が言ってたが、近くに来ると改めてこの木偶の棒のデカさが嫌って程解るな」

両面宿難の全長が完全に見えない程の近くにまで来た所で地に降り立つサイ。

背中に生えていた翼は淡く光るとその姿を消し、代わりに尻から生えている尾の数が4本に増えていた。

これは白面九尾族の妖狐の持つ能力の一つ、4尾以上になった妖狐が己の法力を利用して自らの尾を好きな物に変化させられる『尻尾変幻能力』と呼ばれるものだ。

近くに来れば刹那が隠密に動いている事を考慮して空を飛ぶよりも、大地の方に目を向けさせるのが良いと考えたのだろう。

「さて、どうするか。

こつちに注意を向けさせるんならある程度派手な事をしなけりや意味がねえ。

だが、こんな所で不動神皇剣を使ったら・・・確実に此処らの地形を変えちまうし、何より木乃香を巻き込んでしまう」

白面氷炎武王形態になった事により究極の剣技とも言える『不動神皇剣』も更に強化されたものを使えるようにはなった・・・。

しかし、ぶつつけ本番で第二覚醒したばかりの現状で不動神皇剣を放てばそれこそ先ほどのように力の加減が出来ずに本気で放つてしまう可能性が極めて高い。

壱玉形態の白面氷炎武王状態で小川を消滅させて周囲の地形を変えてしまう程なのだ、その強化状態である今なら湖に浮かぶ祭壇を消

滅させるなど簡単に出来てしまう。

・・・それで木乃香が傷付いてしまつては元も子もない。

「・・・まあ、要はこつちに目が向けば良いだけだよな」

そう呟いたサイは何を思つたのか七魂剣を腰のホルダーに仕舞う。

そして六道拳を装備して精神統一するように目を閉じる・・・すると、全身中がまるで雷光を纏つたかのように光り輝きだす。

更にその光が収束すると、その両手の間にまるで光り輝く球体のよ  
うなオーラが生み出されたのだ。

「クツ、流石に全法力を込めて放つ訳にもいかねえからな・・・。

しかしまあ・・・式玉形態なら全盛期程じゃないにせよ、野郎の注  
意をこつちに向けるのは可能な筈だ」

身体のがが一気に抜けるような感覚を感じるサイ。

元々この技は光明司流古武術の中でも『三神技』と呼ばれる秘奥義  
の一つから派生した奥義だ。

故に今まで使つてきた必殺技などとは威力も法力の使用量も段違い  
である・・・しかしこの状況で木乃香に危険がなく、一番派手な技  
とさえもこれしかなかった。

その光はまるで太陽。

全てを照らし、全てをも包み込む日の光そのもの。

サイの両手の間に生み出された光の球体はサイの身の丈をも越える  
程に膨張し、凄まじい光を周囲に放ち続ける。

そして、その光が膨張を止めた所でサイは腕を振りかぶり

「光明司流古武術奥義・・・天照！！」  
アマテラス

その両手から巨大な太陽を思わせる光を撃ち放った！！  
光は大気を揺るがせ、まるで大地を鳴動させるかのように周囲を震わせながら一直線で両面宿難へと向かう。

「は、はいいいいい！？ な、何やアレはあああああ！？」

両面宿難の肩でふんぞり返って笑っていた千草も流石にそれには驚いた。

そりゃ当然である　小さな太陽を思わすような球体が此方に向かつて飛んで来るのだから。

慌てて宿難の腕を動かして防御するが・・・球体は激しい大爆発を引き起こし、宿難の防御に使った腕を悉く粉碎してしまったのだ。

「ハ、ハア、ハアツ・・・な、なんちゆう爆発や・・・」

両面宿難には木乃香の魔力を利用して張られた障壁がある筈

なのにそれを以って、更に防御したというのに・・・防御に使った腕が粉碎されるとは思わなかった。

先ほどの光の球体に向かって来た方向に目を向けると

「ま、またあのクソガキの仕業かい！！」

何や、何なんやあのクソガキは！？　何であんな巨大な力を使いこなせるんや！？

薄汚い半妖の分際で　ウチの目的の邪魔なんぞさせへん！！！！」

其処にはお茶の間には見せられない中指を立てたポーズをしているサイの姿が映った。

その姿に挑発され、怒りを覚えた千草は宿難の残った腕をサイの居る方向へと向ける。

「死に晒せ、このクソガキがあああああ！！！！」

その指から放たれるエネルギー砲。

残った二本の腕のそれぞれの指から放たれた光線砲の数は計十発もの数・・・それらがまるで激流の如くサイに向かって飛んできたのだ！！

「ケツ、汚えだけでボキャブラリーのカケラもねえ女だな！！」

ギヤアギヤア喚いてる暇があるなら当ててみる、このクソババアが！！！！」

向かって来るエネルギー砲を身を翻し、飛び去りながら避けるサイ。エネルギー砲が当たった場所はまるで元々其処にあったかのような巨大で深い穴がぼつかりと開いている。

こんな物がもし当たったとしたら、欠片も残らないだろう・・・だがサイは飛来するエネルギー砲を避けながら更に千草を挑発した。

「オラ、嘗めんじゃねえぞこの行かず後家が！！」

テメエのようなヒステリーババアは根暗に何も言わねえお人形さんとでも遊んでろ！！！！」

「こ、ここここ、このクソガキがあああああ！！！！？」

更に挑発された千草は怒りに我を忘れてサイを始末しようと攻撃を放つ。

・・・やはりあの位になると年齢関係の挑発はタブーなのだろうか？

このように目の前の事にしか目を向けられないような状態では、例え木乃香の力によって制御可能になった宿難が居ても宝の持ち腐れだ。

そう、その所為で千草は周囲に対する注意が完全に散漫になっていた。

故にもう既に宿難では攻撃を仕掛けられない程の近くに刹那が近付いていた事に気付く事が出来なかったのだ……。

「はっ、お前は!? まさかあのガキは……!?」

気付いた時にはもう遅い……サイの挑発の意図を理解した千草。しかしもうこの時点で飛翔してきた刹那は既に目と鼻の先だ。

「天ヶ崎千草、お嬢様は返してもらおうぞ!!!」

慌てて式神を召還しようとするが、何かが千草が手に持っていた式神召還の札を貫く。

それは……遠距離から狙撃して援護してくれた茶々丸によるもの。刹那がそちらの方を一瞬振り向くと、茶々丸は小さく頷いた……命を賭けて囷となったサイに、援護をしてくれた茶々丸に、助けてくれたエヴァに、ザジに、ネギに　そして、明日菜に心の中で礼を言いながら刹那は囚われた木乃香に向かって唯一直線に突っ込んでいく。

そして遂に刹那は木乃香を奪還した。

夜空に向かって天を翼で駆ける刹那に、そして宿難の囷を買って出たサイに聞こえるようなエヴァの声が響く。

『よし、二人ともさっさとその場所から離れる……そのデカブツを始末する!!』

リク・ラク　ラ・ラック　ライラック

ト・シユンボライオン　・ディアークネット　・モイ・ハイ

契約に従い、我に従え、

氷の女王……来たれ永久の闇、永遠の氷河!!!』

詠唱を唱え終わった瞬間、宿難の足元が凍り付く。先ほどまでは『絶対防御』とも言える木乃香の強力な魔法障壁を張られていたが、もう既に木乃香は奪還されている。故に例え相手が飛驒の大鬼神であろうが何であろうが・・・相手が悪すぎた。

「なっ!?! う、嘘や、スクナが!?!?」

1600年前に封印された飛驒の大鬼神。

この存在さえ居れば恐れる物など何一つもない・・・その筈だったが・・・世界にはそんな大鬼神さえも霞む様な“最強の魔法使い”と言う奴が居るといふ事を覚えておくべきであったのだ。

『愚か者が・・・近衛木乃香の加護の無くなった今、それは唯の木偶の棒と同じ。』

女、確かに“飛驒の大鬼神”と言うだけあって凄まじい力を持っていたよ　だが、相手が悪かったな。

これはほぼ絶対零度、150フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文だ・・・そのデカブツでも防ぐ事は敵わぬぞ』

完全に宿難の全身が凍り付く。

もうこれで逃げる事など不可能　いや、元より逃がす心算もない。

これで決着は付く、自らの家族のように・・・いや、それ以上に愛する人物が傷付く事はもうない。

だからこそエヴァは全力で、止めの詠唱を口から紡ぐ。

『消えるが良い、旧世界の遺物などもう必要ない。』

いや違うな、この際建前を語るのは止そう　私の大切な者達を

傷付けた報い、確りと受けて消え果てる!!!  
ハイサイズ・ソーアイス　・トン・イソク・タナトン　ホス・アタラクシア  
全ての命ある者に等しき死を・・・其は安らぎ也!!!」

「な、ななななな、なああああ!?!」

千草の驚愕の声を尻目に輝が入っていく凍り付いた大鬼神。

極限に近い低温により凍結した相手を粉碎するエヴァの得意魔法にして氷属性最強クラスの殲滅魔法。

その名は

『砕け散れ、木偶人形が・・・  
コスミケイ・カタストロフエー“終わる世界”!!!』

静寂に鳴り響くエヴァの指を鳴らす音。

それと共に飛騨の大鬼神は炸裂し、バラバラに砕け散って湖へと沈んでいくのであった・・・。

「やれやれ・・・やっとこれで終わったようだな」

ゆっくりと空中を浮遊しながら祭壇の方を見つめるエヴァ。

どうやら既に暴発するかのような魔力の流れは感じない　京都  
の周囲四方向に封印されている妖獣達が解放される前に決着を付ける事が出来たようだ。

少しの間だけ湖の方向を見ていたエヴァであったが、粉々に粉碎されて生きていられる存在など居ないと理解したのだろう・・・  
囧として宿難と天ヶ崎千草の注意を引いていたサイを探す為に孔だらけの戦場に目を向けた。



「大丈夫ですか、サイさん・・・？」

其処では既に茶々丸がサイの事を探しに行っていたらしい。

どうやら大分無茶をしたのだろう・・・顔は土と泥に血で汚れ、腕には模倣神具の亀甲盾スミノエが装備されていた。

余りにも放たれたエネルギー砲が多かった故に回避が間に合わず、咄嗟に盾を召還して防御したのだろう・・・骨は折れては居ないようだが、衝撃波の所為で大分塞がっていた傷口が再び開いていたのだ。

「あゝ、本気で法力切れでぶっ倒れるかと思つたぜ・・・」

茶々丸に肩を借りながら歩くサイの姿は実にシユールだ。

『天照』を放ち、超高速化を使い、更に模倣神具を召還してフルパワーでエネルギー砲を防御したのだから、例え魂石を二つ使用して法力を増幅させたとしても限界ギリギリであつた。

「全く・・・本当に無茶をする奴だなお前は」

サイと茶々丸の近くに浮遊しながら近付いてきたエヴァ、それを追いかけるようにして歩き出すザジ。

まあ見ればエヴァも全身中傷だらけ、サイに肩を貸す茶々丸も全身中が輝だらけ、近くに歩いてきたザジも埃と血によって汚れている。更に明日菜もネギも刹那も傷を負っていない奴など一人も居ない・・・それだけ無茶苦茶なまでに戦い回つた結果だ。

「サイさん（くん）！！」

最早自分の足で立っているのもやっとな状態のサイを気遣い走ってくる刹那と木乃香の二人。

ソウルアップ パーソナルアップ  
魂鎧装も覚醒鎧装も自分の法力や魂石に込められた戦友達の法力を使つて覚醒する故に身体には影響がないように見えるが・・・元々、法力を使つて肉体の超強化もしている為にいざ解けた際の身体への影響は少なくはない。

所謂、超覚醒と呼ばれる式玉以上を装備する覚醒能力は常人離れした反射速度や筋力を得る事が出来る代わりに全身中へのフィードバックも凄まじく、並みの存在で体調によっては急激な能力増加に肉体が付いていかずに血管の破裂や心停止などを伴うような危険な能力なのである。

サイの場合は半ば死に掛ける程に身体を鍛えている為に命には何とか別状はないが、それでも全身を襲う激痛や法力をこっそりと消費した事による疲労で満足に歩く事も出来なくなってしまうていた。

「おつ・・・無事、だったか・・・。  
そりゃ良かったぜ、あんなだけ啖呵切ったのに傷でも負ってたなんて  
いったら格好付かねえからな・・・」

不敵に笑うサイ。

木乃香が無事なのを見て明日菜も喜んで抱きつく・・・が、木乃香の顔は浮かない表情をしていた。

それは当然だろう、彼女は半ば天然ボケのような性格であっても流石に目の前でポロポロになっている者ばかりいれば理由は理解出来ないにせよ『自分の為に皆が無茶をした』と言う結論を出せてしま  
う。

特にサイ、エヴァ、茶々丸、ザジの四人の傷付き方は尋常ではなかった・・・。

「せつちゃん・・・明日菜・・・ネギ君・・・」

サイ君・・・エヴァちゃん・・・茶々丸さん・・・ザジちゃん・・・  
それに、楓さんに龍宮さん、古ちゃんに・・・夕映まで・・・」

丁度後ろにはサイ達を先に行かせる為に戦ってくれた楓、古、真名、そして三人と共に来た夕映が居た。戦っていた三人は所々に傷を負い、夕映は傷こそなかったが着ていた浴衣が埃だらけになっている。

四人とも程度は違えど木乃香を、先行した者達を、そして何より満足に立っている事も出来ないサイの事を心配そうに眺めていたのだ。

「ウチ・・・ウチ・・・よくわからんけど・・・みんながウチの為に何かをしてくれたんやろ・・・？」

でもその所為でみんなが怪我を・・・サイ君も・・・エヴァちゃんも・・・茶々丸さんも、ザジちゃんも・・・!!」

何があつたのかは理解出来ない。

だが、少なくとも皆が自分を助ける為に駆けつけてくれ、その所為で傷付いたと言う事だけは理解した。

その事にシヨツクを受けた木乃香は涙目になっている。

「ごめん・・・ごめんな・・・ウチの、ウチの所為で・・・うつ、本当にごめん・・・!!」

嗚咽しながら涙を流す木乃香。

何とか木乃香を宥めようとネギや夕映が声を掛けるが・・・。

「何を言ってるんですか木乃香さん、木乃香さんは何も悪くないじゃないですか!!?」

「そ、そうですね!! 私も非現実過ぎる事が起こりすぎて何があつたのかは良く解りませんが・・・木乃香さんは何も悪くありませんよ!!」

しかし、二人の言葉は耳に届きはしない。

「うっ、えぐっ・・・ごめん、ごめんな・・・うっ・・・ウチなんかの、ウチなんかの為に・・・」

泣き続けている木乃香、彼女は優し過ぎるが故に“自分なんか”の為に誰かが傷付いたのが申し訳なくて仕方がないのだ。

・・・其処へゆっくりと地に下りたエヴァが黙って近付く。

そして

「ごめん・・・うっ、本当にごめ・・・『パシント!!』・・・きや!?! え、エヴァ・・・ちゃ・・・ん・・・?」

乾いた音が鳴り響く、それはエヴァが木乃香の頬を叩いた音だ。いきなりの事に呆然とする木乃香、叩かれた本人以外の『その意図を理解出来ている者達』以外も目を丸くした。

サイに茶々丸、ザジと真名・・・そして明日菜は黙って見つめている。

「え、エヴァンジェリンさん、一体何を!?!」

刹那がエヴァに詰め寄ろうとするが・・・その肩を明日菜が掴む。疑問に思っただけ明日菜の方を見るが、明日菜は黙ったまま静かに首を横に振った

「・・・貴様は悲劇のヒロインでも気取ってる心算か、近衛木乃香?」

その言葉に木乃香は叩かれた頬を押さえながらエヴァを見る。

「私なんかの為？ 私の所為？ 囀るな小娘が。それは何時でも己の心を捨てて貴様を護り続けていた桜咲刹那の前で言っただけの良い言葉ではない」

誰よりも共に居たいと願っているのに、その思いを捨てて心の中で泣き続けていた少女が居た。

己が人間とは違うと言う現実から、せめて影からでも大切な親友を護ろうとしたその誇りを・・・己に価値がないような言い方で汚す事はエヴァには許せなかった。

「勘違いをするな愚か者が。」

私達は誰かに言われて貴様を助けに来たのではない・・・己達の自らの意思で此処に集まり、戦ったんだ。

結果、確かに傷付きはしたが・・・それは自分達で選んだ選択肢の結果だ、貴様が悔やむ必要など一つも無い」

「エヴァちゃん・・・」

エヴァの意図を理解した刹那もまた、木乃香の肩を抱いて優しく咳く。

「・・・このちゃん、エヴァンジェリンさんの言う通りや。」

みんなこのちゃんの事が好きだから・・・大切な親友やから自分の意思で助けに来たんよ。

だから・・・だから謝る必要なんて何一つないんよ」

「まっ、もしそれでも良心の呵責があるってんなら屋敷に戻ったら腹一杯食わせてくれ。」

それで充分さ・・・何せ大暴れして腹減っちゃまったんでよ」

刹那の言葉に続いたサイの言葉。

それにタイミング良く合わせる様にして明日菜やサイの腹の虫が『ぐうううう……』と鳴く。

その瞬間、場に笑いが零れた

「なっ？ 腹の虫も黙ってられねえようだ。

……だからもう泣くんじゃねえよ、女の泣き顔ってのは苦手なんだよ俺あ」

「う、うう……せつちゃん……サイ君……みんな……。

うっ……ぐすっ……みんな……ありがとう……ありがとう  
な……うっ、うわああああん!!」

その言葉に木乃香はもう一度蹲って泣く。

しかし、これは今までのように申し訳なさから流していた涙ではない……皆の思いを知り、嬉しさで流す涙。

泣き続ける木乃香を皆が温かい目で見守る  
此処こゝに漸く、木乃香を完全に取り戻せたのだ……。

「さて、それじゃあ帰りましょう!!」

長さんも心配して待っているでしょうし、早く安心させてあげないと……」

ネギのその言葉に皆が頷く。

両面宿難はエヴァの魔法によって完全に消滅させられたのだ、もう脅威は残っては居まい。

そう思って帰ろうと振り返った……まさにその時!!

「ま、未だや・・・まだ、終わらせへん・・・」

その声と共に周囲四方向から立ち上り始める光の柱。

大地は再び鳴動し、凄まじい力の流れが京都周囲四方向へと集まっ  
ていく。

「何ッ!? はっ・・・貴様、生きていたのか!?!」

エヴァの言葉に振り返るサイ達。

彼女の視線の先にあるのは先ほどまで木乃香が両面宿難を復活させ  
る為に寝かされていた祭壇。

其処の祭壇の上に立つのは・・・エヴァの魔法に巻き込まれて両面  
宿難と運命を共にしたと思われていた天ヶ崎千草だ。

どうやら身体中に傷は負っていたようだが、命には別状がなかった  
らしい・・・千草は狂ったような笑いを浮かべながら恨めしそうな  
目でサイ達を見つめていた。

「ク、ククク・・・あんた等の所為で全てが台無しや。

ウチが関西呪術協会を牛耳るちゅう目的も、東に巢食う西洋魔術  
師共に一泡吹かすちゅう目的さえも・・・あんた等クソガキ共の  
所為で全てが水の泡や」

すると千草は何を思ったのか懐剣のような物を懐から取り出す。

そしてそれを・・・祭壇に乗せている手に向かって思いっきり振り  
下ろしたのだ!!

「「き、きゃあああああ!?!」」

「馬鹿な・・・貴様、一体何を・・・まさか!?!」

いきなりの事に悲鳴を上げる木乃香と夕映。  
その行動が理解出来ないエヴァは疑問に思うが・・・その意図を直ぐに理解した。

「ク、ククク・・・こうなればあんた等も、関西呪術協会も全て道連れや。」

京都四方に封印された妖獣四匹・・・ウチの命を利用して地脈を暴走させて覚醒させたるわ！！

今の疲労したあんた等じゃあ京都の地脈に流れる龍の気によって暴走した両面宿難クラスの妖獣を四匹も相手に出来る訳あらへんからなあ・・・ククク、ククククク！！！！」

祭壇が千草の血を吸い、怪しく紅く蠢く。

それと共に京都を襲う鳴動は大きくなり、天に向かって放たれていた四方の光の柱は禍々しく紅く光り始める。

更に千草は手に突き刺した懐剣を抜くと、祭壇の上に登って首筋に刃を当てた

間違いない・・・天ヶ崎千草は、己の命を代償に四匹の妖獣を復活させて京都ごと全てを滅ぼす心算なのだ。

「どうして・・・どうしてですか!？」

何で、なんでそこまでして皆さんを巻き込もうとするんですか!？  
あなたに・・・あなたに一体、何があつたつて言うんです!？ 魔法使いつてのは世の為、人の為に尽力する・・・それは東だろつが西だろつが関係ないんじゃないんですか!？」

ネギには理解出来ない・・・何故自らの命を犠牲にしてまで多くの人を傷付けようとするのか？

魔法使いとは人知れず人々を護る立派な仕事  
それが別に東西  
がいがみ合っつていようが関係無い。



困っている人を助ける為に魔法や呪術と言うのは存在するのではないのか……。

だが、そんなネギに対して狂ったように笑っていた千草は急に忌々しそうな表情になる。

「はっ……世の為、人の為？」

笑えるわ、ちゃんちゃら可笑しくて反吐が出そうな程に甘ちゃんやな……何も知らん餓鬼が！！」

吐き捨てるように言う千草。

それに気圧されたネギ……そんなネギに千草は憎しみを込めながら言葉を続ける。

「何が世の為や……何が人の為や！？」

お前みたいなの僧に、お前等みたいなぬくぬくと生きてる連中に一体何が解るんや！？」

その世の為人の為とか偽善を語る連中に肉親を奪われて唯一人遺されたモンの気持ち、大切なものを根こそぎ奪われたモンの恨みが、何も失った事のないような餓鬼に解ってたまるか！！」

そこで初めて千草は語り始めた……この様な凶行に及んだ理由を。なんて事はない。それはサイが木乃香の父である詠春に教えて貰った通りの理由……“復讐”だった。

「お前等ガキ共は良く知らんやろうがな、20年前に今では“大戦”なんて呼ばれる戦争があった。

魔法使いや陰陽師達が入り混じり、血で血を洗う戦争……そんな戦争にウチの両親も参加しとったんや」

この戦争は銃弾や砲弾が飛び交うような戦争ではない。火炎が、稲妻が、吹雪が、旋嵐が入り混じり、咆哮する魔法使い同士の悲しい戦争。

当時幼かった千草の両親もこの戦争に参加していたのである。

「……『必ず帰ってくる』、この言葉だけがウチにとって唯一の糧やった。

どんなに寂しかろうと、どんなに辛かろうと……お父ちゃんとお母ちゃんが帰って来るのを涙を堪えて待ち続けたわ。

その結果が……骨も残さずに戦死したつちゆう知らせだけやった」

その知らせに彼女の希望は一気に打ち砕かれた。

目の前が真っ暗になり、苦しいほどに悲しいと言つのに……涙すら流れない。

後に彼女は戦災孤児として関西呪術協会に引き取られたが  
既  
に壊れた心が治る事も癒される事もなかった。

……そして彼女は誓つ。

残された者の痛みを、奪われてしまった者の苦しみを、そして憎しみを両親の命を奪った西洋魔術師達に思い知らせてやると。

壊れてしまった心は憎しみと言つ思いを糧に再び目を覚ます

その結果、心を壊す程の憎しみが彼女を更に歪めてしまい現在に到ると言つ事だろう。

「だからウチはこの命を懸けて刻み付けてやるんや……  
のうのうと生きている奴等に失った事の苦しみを……残された者の痛みを……！」

千草の暴露に誰もが言葉をなくした。

特に魔法使いと言う存在に羨望や夢を持っていたネギなどは、その告白に涙ぐんでいる。

だが そんな中でもサイ、エヴァ、真名は全くの無表情のままだ。

「……………下らねえ」

「なっ!?!? な……………なんやと……………!?!?」

呟かれた一言が耳に入り、千草は声のした方を向く。

其処には極めて無表情で淡々と言葉を紡いだサイが居た。

「下らないやと……………お前に何が解るんやクソガキ!!」

何も失った事も無いような奴が偉そうに……………「……………勘違いしてるみてえだが……………?」

なおも言い募ろうとする千草の言葉を遮り、サイは再び淡々とした口調で語りだす。

其処から彼が言ったのは想像もしなかった事だ。

「俺は別に復讐を否定する気はねえよ……………果たさなけりや前に進めない事だつてあらあ。

復讐だの、仇討ちだの、したけりや勝手にすりゃあ良い それ  
でテメエの気が済むなら存分にな。

……………第一、俺らにやテメエを否定する資格なんぞねえ」

血と埃と泥で汚れた表情でありながら鋭い眼光で千草を射抜くサイ。それに何かを続けようとした千草であったが……………何も言えずに黙り込んでしまう。

そこでサイは言葉を続けた

「だがな・・・テメエ一人の復讐なんつう“自己満足”に他人を巻き込もうってんなら話は別だ。

所詮自己満足に過ぎねえ復讐なんて代物に勝手に周りの奴を巻き込んでんじゃねえよ・・・迷惑だから一人で勝手にやって、一人で勝手に死ぬ。

そもそもテメエは孤独になった苦しみてのを理由をつけて紛らわせようとしてるだけじゃねえか、それを下らねえつって何が悪い？」

「く、クソガキが言わせておけば・・・あんだなんぞにウチの気持ち解つてたまるかい!!」

怒りによつて顔を真っ赤にし、表情まで歪めて千草は怒鳴る。

そう、解る筈が無い　　のうのうと生きているような連中に失つた者の気持ちなど永遠に・・・。

しかしサイには理解出来ていた・・・いや寧ろ、その後待っている事までもサイは誰よりも理解していた。

その事を理解出来ている者など、サイ以外のこの中では年齢的にもエヴァぐらいのものであろうが。

「・・・解るぞ」

淡々と、それでいて通る声でサイは呟く。

「俺も・・・テメエと同じだったからな」

その瞬間　　憎悪でサイを睨んでいた千草の表情が変わる。

サイの周囲にいた明日菜達も同じように表情を変える・・・その中でエヴァと茶々丸とザジは何ともいえない表情をしていた。

「俺は両親だけじゃねえ・・・共に生きた同胞達も皆失った。その命を奪った奴等を殺す為に、復讐を果たす為に唯只管に強さを求め続けた。」

・・・その過程でどうして良いのか解らずに足掻き続けて、数え切れない程の多くの命を奪ってきた。

そんな俺が憎悪を糧に強くなって復讐を果たした後　　何を感じたかテメエに解るか？」

外見は完全に少年の筈

しかし、その目は何処までも空虚で空っぽ・・・まるで老人のような目をしている。

何処と無く感じる寒さに空間が支配され始めている　　最早此処はサイの独壇場だろう。

その見方によつては他人を恐怖させるようなサイの姿に千草は身震いを感じていた。

・・・そんな千草に、サイは再び静かに口を開く。

「答えは・・・“何も感じねえ”だ。」

憎しみを晴らす相手に復讐し、本懐を遂げたが・・・後に残つてたのは消える事の無い憎悪と、喪失感。

満足など無い、かえって虚ろで空しいだけだった　　「

その目には何の感情も映してはいない。

言うなればサイも過去を思い出した・・・いや、過去を思い出す以前から“壊れて”いるのだ。

さながら宛らそれは、まるで心無き人形が人を模すかのように。

「それで俺は理解したさ・・・俺は復讐をしたかつたんじゃねえ。

俺が望んでいたのは　　壊れちまった俺自身の心の空虚を埋める為に、復讐者つて生き方を選んだだけだつてな・・・。」

目的も何もねえ大き過ぎる目的を失った虚無感に、これからの未来に希望も抱けない絶望感・・・そして唯生きているだけの屍のような生き方がどれだけ空しいかをテメエは味わった事があるのか？」

一度瞑られる目。

再び次に目を見開いた時 其処には怜悯な光が宿っていた。

「自己満足で死ぬのはテメエの勝手だ。

だがな、テメエ一人が自分に酔って被害者面してんじゃねえよ・・・テメエと同じ所かテメエ以上に苦痛を感じて、苦悩を背負って、それでも歪まねえで生きてる奴だって数え切れねえ位いるんだよ。それも知らねえで生意気抜かすんじゃねえ・・・反吐が出るんだよ、クソが」

その目に見据えられた千草は急に震え始める。

懐剣を持つ腕が、祭壇の上に立つ足が、全身中が得も言えぬ感情に支配されていた。

脂汗が身体中から溢れ、流れ落ちる 　　こんな感情を感じるのは生まれて初めてだ。

そこで千草はその感情の意味を理解する。

これは・・・今まで生きてきた中で見た事も感じた事も無い程の“恐怖”だ。

別にサイの外見や口調が怖い訳ではない 　　彼女がサイを恐れた理由は、その目だった。

何も無い、何も感じない・・・まさに空虚。

何の感情も映さないような先ほどの眼、それはまるで老人というよりも死人のような眼だったのだ。

元から空虚だったとすればまだ良い 　　例えば人形などの眼も元

々虚ろだが、それは元より空虚な物として生み出された物だ。人形はそもそもそれ以上もそれ以下もそれ以外の眼も知らず、それ故に誰もその瞳が空虚であろうとその事を嘆きはしない。そもそも嘆く必要すらないのである。

だが 死人の瞳は違う。

其処にはかつて何かがあった筈・・・屍が腐り落ちても骨が残り、やがて化石となっても形が残るように。

それは空虚という“結果”そのものを内包しながらも、かつて其処に満たされていたものの影を引き摺り続ける。

始めから有り得ない、つまり存在しない事は恐怖ではない。だが喪われる事とはどのような時代でも恐怖そのものなのだ。

『憎んで、憎んで、憎み続けて・・・その最後はあんな風に自分もなるのではないか？』

己が己の命を賭けて妖獣を召還しようとしていた状況でありながら、千草は“その事実”に固まってしまふ。

憎しみを糧に生き続ける事・・・。

それは『復讐』という目的があるが故に心は完全に壊れる事無く、何とか心を満たして生きていた。

しかし純粹なまでに憎悪し続け、その目的を達した後 目的を失くしたと言う現実が容易く人の心を形骸へと変えてしまふのだ。

形骸となった生きる人間に残るのは骸骨の眼窩にも似たどうしようもない欠落のみ。

それを抱き生き続けると言う事は きっと途方も無く辛く、重く、苦しく、そして今の千草よりも絶望的なものに違いない。

死者は己が死者たる事を自覚しないからこそ全ての憎しみから解放

される・・・ならば己の心が死んだ事を自覚したまま生きるという事がどういう事か

その事を理解し、寧ろ自分の方が救われていると理解出来た時・・・無性に千草は恐ろしくなったのだ。

「あつ・・・ああああ・・・ああああああ・・・」

意味も解らぬ呟きが口から漏れ、その手から懐剣が落ちる。

己の命を賭けて成そうとした呪も、恐怖という感情に囚われたが故に効果を徐々に弱め・・・立ち上っていた光の柱の輝きが弱くなった。

大気の鳴動も収まり始めたその時　　千草の瞳からは涙が流れていた。

それは恐怖からではない。

己が目の前の少年のように極限まで墮ちる事が無かった事を喜ぶ安堵の涙だ。

自らは生きているだけの屍にならずに済んだ・・・ある意味では命などどうでも良いと思っていた千草にサイは“喪失の恐怖”を思い出させたのである。

そして・・・次第に光の柱の輝きは止み、周囲から放たれていた禍々しき妖気も治まったのであった・・・。

安堵の涙を流し始めた千草を見、もうこれ以上何も出来ないだろうと理解したサイ。

不安定要素であるドウマンの気配も感じず、先ほどから何のコンタクトも取って来ない所を垣間見れば大方逃げたのだろう。

何れ決着は付ける心算で天を一度睨むと、サイはゆっくりと千草か



ら背を向けた。

本来ならば殺すべきだ。

しかし・・・もう既に“復讐を成す事の末路”を理解したであろうあの人物にはこれ以上の事など出来まい。

後の事は千草の所属する関西呪術協会の手任せればそれで良いだろう。

「サイ・・・あの・・・その・・・」

後ろからそう話しかけてきたのは明日菜だ。

先ほどの話の生々しさにどうサイと接して良いのか解らなくなったのだろう。

そんな明日菜に、そして後ろにいる連中に向かってサイは意地悪そうな笑顔を向けながら言った。

「・・・とまあ、俺のホラ話はとうだった？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

サイの予想外の一言に惚けたような一言を漏らす明日菜達。

その表情を面白そうな顔で見ながら、サイは意地悪そうな笑いを浮かべた表情で続ける。

「あ？ 何、お前等さっきの話信じたの？」

アホか、大体こんなナリで復讐だの何だのをしたように見えるか？  
ありゃあ俺の愛読漫画の受け売りだ受け売り  
常識考えりや直ぐ嘘だつて事ぐらい解るだ・・・ぬがっ！？」

言葉を言い終わった瞬間

サイの顔に明日菜の飛び蹴りが入っ

た！！

思いつきりぶつ飛ばされるサイ・・・どうやらサイによって半魂獣状態になった明日菜の一撃は今までとは比にはならないらしい。

「痛つてえな、何すんだ脳筋女」

頬を押さえながら何事も無かったかのように立ち上がるサイ。

・・・とは言っても、かなり法力を使い過ぎてフラフラだった故に立ち上がった後もフラフラしているが。

「・・・何すんだじゃないでしょ！？

何こんな状況であんた、漫画の話をも自分の事のように語ってるのよ  
おおお！！！！

こんな状況でそんな事語り始めれば信じちゃうのは当然でしょうが  
ああああ！！！！」

「いやいや、普通信じねえだろ？」

てかお前、そんな事なら俺は一体何歳だよ？ そんなモン考えれば  
直ぐに・・・ぶへえ！？」

再び叩き込まれる飛び蹴り。

・・・どうやら話が嘘だという事に明日菜は大変ご立腹のようだ。  
まあ、他の者も助け舟を出さない所を見れば、明日菜と心境は同じ  
なのだろうが・・・。

そんなこんなで乱闘が暫く続く 流石にそれを見つめていたエ  
ヴァは咳払いをしてから茶々丸とザジに小さく呟いた。

「・・・茶々丸、ザジ、見てないで止めてやれ。

このままでは戦いが終わったというのに、サイが神楽坂明日菜によ  
つて息の根が止められかねん」

「はい、マスター」

「……………（コクコクッ）」

頷いた後に止めに入る二人。

……この三人だけは先ほどの話が漫画の受け売りでない事を理解している。

だが、あくまでもサイが先ほどの話を嘘だと言う事にしたいのならば……それを尊重してやる事も優しさだ。

結局、暴れるだけ暴れた明日菜とサイが疲れた事によってこの不毛な争いの幕は下りた。

最初の内は冗談だったという事に怒っていた刹那達であったが……最後の方では皆が笑顔に溢れていたそうだ。

全ての戦いが終わったという事が、そのような安堵感を与えたのだろう。

しかし、全てはこれで終わりではない。

運命の神なんて存在がもし居るとすれば、それが相当ロクデナシだという事は理解出来るだろう。

何故なら……。

「ぐっ……げっ、えっ……!? あっ、ああああアアアア嗚呼  
あア嗚呼あアあっ!!!?!?!?!?」

その悲鳴とも苦悶とも取れるような声がサイ達の後ろから響き渡る。明日菜が急いでそちらを振り返れば 其処には悶え苦しんでいる千草の姿があったのだ。

「なっ・・・何、何なの・・・今度は一体何よ!？」

明日菜の慌てたような言葉に皆が千草を見る。

すると彼等の目の前で起こっていたのは、急激に身体から立ち上る光のような物を何かに吸収されている彼女の姿だった。

「なっ・・・あれは!？」

そうか、道理で野郎の気配を感じねえと思ったたら　クソ、尻尾巻いて逃げた訳じゃなかったのかよ!」

サイの目に留まったもの・・・それは千草の真上に浮いている一つの面。

それは『髑髏仮面・奈落』と呼ばれる、サイの生きていた魂獣界の種族・隠神刑部族の陰陽師であるドウマンの神具だ。

その能力は『他の種族の属性を強制的に隠神刑部に変えてしまう』という物だったが・・・どうやらそれだけでは無さそうである。

『ククク・・・御機嫌よう、白面鬼神殿。』

感謝させて頂こう、君達がああ『両面宿難』なる大鬼を倒してくれなければ我は復活までももう少し時間を要したであろうからねえ』

それは空に浮いている面が語った言葉。

更に身体から溢れる光のような物が面に吸収され・・・光を発しなくなるると同時に地に倒れ付す千草。

先ほどの身体から溢れていた光は彼女に宿る“魔力”だったのだろう　倒れている千草は辛うじて呼吸はしているようだが、まるで生気を吸収されてしまったかのように枯れ果てていた。

「・・・どう言う意味だ」

サイの尋ねる言葉に呼応するようにして面は光り輝き、人型を成してゆく。

禍々しい光が収まると其処にはサイの仇である隠神刑部三巨頭が一人、道摩法師ドウマンが居た。

ドウマンは晒いながら祭壇の方を指して口を開く。

「いやいや、貴方達は随分と役に立ってくれましたよ。

当初の目的としてはあの小娘が両面宿難を復活させ、その余波を利用して地脈を暴走させて膨大な力を得てからその力を我が面に吸収させて復活する心算でしたが・・・それには膨大な力を操れる器が必要でしたから。

それを生み出すのに難儀していましたが・・・両面宿難を殲滅してくれたお陰で奴の屍骸に籠っている膨大な力を吸収して何とか人型になれるようにはなりました」

そう言いながら身体の動きを確かめるドウマン。

素手を回したり、足を動かしたりとし終わった後に目の前で倒れている千草を一瞥してから吐き捨てる。

「しかし・・・実に役に立たない女でしたねえ。

折角、我が復讐の為に狂うこの女に力添えをしてやったというのに・・・まさにゴミ以下の価値しかありませんか。

ああ、ゴミではなく絞りカスの間違いでしたが、クククククク」

倒れている千草を踏み潰そうとするドウマン。

しかし・・・その足が踏み下ろされる前に彼の首元にはサイの七魂剣が突き付けられていた。

そんな様子を怪訝そうな表情で見ながらドウマンは呟く。

「おや、白面鬼神殿？」

所詮、我に肉体に残る力を全て吸い尽くされてしまった絞りカスなどを助けようというのですか？

無駄ですよ、例え助けた所でこの“ゴミ”はもう二度と人間以下の生活しか出来ませんからね。

そもそもこのゴミを貴方は気に入らないのではなかったのですか？

「・・・だから何だ。」

気に入ろうが気に入らなかつても無抵抗な奴を殺されるのを無視する程、俺は腐っちゃいねえよ。

それよりもテメエの首でも心配してろ、クソ野郎が」

その後ろではエヴァや茶々丸、ザジなど戦闘要因たちが武器を構える。

ネギと明日菜と刹那は戦えない木乃香や夕映を護るようにそれぞれの得物を構えていた。

なのに・・・首に刃を突きつけられている状態だというのに、ドウマンは晒う。

「何が可笑しいんだ、テメエ」

サイがそう睨みながら聞くとドウマンは嘲笑う表情をしながら呟く。

「いえいえ、実に滑稽だなと思ひましてねえ。

かつての貴方なら、そのような甘い事はしなかったと思いますし

随分とお優しくなつたようで。

それにかつての貴方なら、有無も言わずに我の首を切り裂いていたでしょう？

・・・何せ貴方の“お母様の仇”ですからねえ、我は」

ドウマンの一言に明日菜達の表情が変わる。

サイの母親が目の前の人物に殺されていたなどという事は知る由もなかったのだから。

「・・・それについてサイは一言も発する事無くドウマンを睨んでいた。」

「それに、貴方は忘れていたのではないですか？」

無言での睨み合いの際にドウマンが一言呟く。

「我が真なる姿にそんな不完全な状態の神具の攻撃など通用しないという事を・・・ね」

瞬間、ドウマンの身体から放たれた強大な妖気の障壁によって弾かれる七魂剣。

凄まじい力だ・・・それはまるでドウマンの内から膨張するかのようになを包み込む。

そつだ、ドウマンにはもう一つ強力な・・・そして醜悪な姿があったのだ。

「では白面鬼神殿、我が復活を祝して最初から全力で殲滅して差し上げましょうか。」

オン・ベイシヤ・マンダヤ・ソワカ・・・我に喰らわれし幾多の魂よ、この身に眠る“呪霊王”の力を解放したまえ・・・」

「チツ・・・拙い!!」

飛び掛り、斬撃を放つサイだが・・・攻撃はドウマンの周りに現れた妖気の障壁によって阻まれる。

すると彼等の目の前で禍々しいオーラが膨張し、先ほどの両面宿難

が復活した際と同じように光の柱を天に向かって立ち上らせたのだ  
周囲を眩ませるかのような光が辺りを包み、光の柱は段々と大きな  
人影を思わせる形に変わっていく。

新たに現れんとする怪物を前に、呆気に取られてしまふ明日菜達

その中で、サイは光の柱を一度見つめた後にエヴァに向かって  
口を開いた。

「キティ・・・悪いが俺がブツ倒れたら後頼むぜ」

その言葉の意図を理解したエヴァはゆっくりと拙く。

そう、サイもまた・・・この戦いがこの京都での最後の戦いになる  
と理解し、惜しみなく全力で力を使う事にしたのだ。

その後は多分、サイ自身の全ての法力が枯渇して確実に倒れるだろ  
うが・・・そんな事など気にして入られない。

護ると誓ったものを護る　　サイは己自身にそう誓ったのだから。

「  
魂獣覚醒オオオオオオオ!!!」

戦場にサイの決戦の為の咆哮が鳴り響く。  
天を貫くほどの光の柱がサイからも放たれ、サイのその姿を“本来  
の姿”へと変えていく。

### 白面鬼神と呪霊王の決戦

世界を越え、時代を越え、次元すら越えてこの修学旅行の最後を飾  
る戦いの幕が、今開こうとしていた





第四十六話・月下の死闘・七ヶ貫く意地、その覚悟（後書き）

投稿完了です。

さあ、遂に次回が京都編の最終決戦　　巨大化した敵とサイ達の戦い。

ドウマンを倒し、京都を、関西呪術協会を、そして皆を護れるのか？  
それは次回の講釈をお楽しみに・・・。



更に下半身は悪魔の頭蓋を模したような姿へと変わり、足は人間のそれではなく何処となく恐竜を思わせるような四本指の禍々しい姿、更に爬虫類を思わせる尾が現れていた。

『馴染む・・・実に我に両面宿難の力が馴染むぞ!!』

クハハハハハハ!! 素晴らしい、まさかこれ程に強大な力とは思わなかった!!

これならば代替品の身体など必要ない、この世界の全ての存在を我が足元に平伏させてくれるわ!!』

“ 神滅呪霊王 鬼哭ドウマン ”

サイが生まれた魂獣界にてかつて起こった『第二次魂獣界大戦』と呼ばれる戦争で猛威を振るった存在。

魂石を得て自らを覚醒させて行くサイに対抗する為に、ドウマンが自らの部下を喰らって五行を操る力を得た・・・まさしく狂気の沙汰とも言える形態である。

しかし・・・その急速の力の増幅や膨張に身体が付いて行かず、最終的には自壊して果てた筈だが。

「チツ・・・どういう事だ。」

寧ろ今回は力が前の比じゃねえぞ 両面宿難つてのが幾ら化物でも、一匹であれ程の力が出る筈が・・・」

今回は寧ろ前回戦った時とは違い、巨大過ぎる力を暴走させずに内包させているのだ。

確かに両面宿難と対峙した際に強力な力を感じたが・・・今のドウマン程強大ではなかった筈である。

・・・ならば一体、この圧倒的な量の力は何処から現れたと言うのか？

「・・・待てよ、確か・・・」

そこでサイはふと考える・・・ドウマンはかつて自分の部下を喰らい五行を操る力を得た。

ならばそれと同じように何らかの力を持つ存在を喰らえ<sup>吸収すれ</sup>ば、より強力な力を手に出来るのではないか？

そしてよくよく考えてみれば、この京都には両面宿難と同クラスの妖獣が四方に眠っているのだ。

其処まで考えて、サイはドウマンがかつてよりもより強力になった理由に見当がついた。

「野郎・・・この京都の四方に眠ってる化物共の力を地脈を操って吸収しやがったのか。」

それに両面宿難なんて怪物を喰らえばそれこそ土地神クラスの力を手に入れる・・・それで京都そのものの地脈を操れば昔のように力を制御し切れずに自壊する事もねえ。

全く、クソ野郎はクソ野郎なりにつまらねえ悪知恵だけは働きやがるな  
「

サイが忌々しげに言うと、ドウマンは晒う。

その嘲笑う表情は肯定という事だろう　　するとドウマンは晒いながら巨大な拳を振り下ろす。

「・・・！？　拙い、全員逃げる！！！」

エヴァの言葉に呆然としていた者やサイの姿に眼を奪われていた者は慌ててその場所から飛び去る。

そこで“ズドオオオオオン！！”と言う耳を劈くような音が鳴り響き、舞い上がった土煙が薄くなると・・・今まで己達が居た場所には巨大なクレーターのような物が出来ていたのだ。

「な．．．なななな、何よこれは!？」

「クツ．．．何と言う力、これは規格外過ぎるでござるよ!！」

「そんな．．．サイさん、あんな相手に一体どうやって勝てば．．．!？」

皆がサイの方を向けば、サイは七魂剣を身の丈程もあるような長さの剣に変化させると肩に担ぐ。

更にもう一方の手には双魔銃ニユクスを合体させた大斧に、拳には六道拳を装着していた。

三つの神具アーティファクトを同時召還、同時装備して既に全力で攻撃を放つ準備は終わっていたのだ。

「行くぜドウマン、最初から全力でブツ潰してやらあ!!」

不動神剣・八幡大菩薩! 阿修羅真拳・アフラマズダ!! 獣霸剛

双撃!!! おらああああ!!!」

召還した三つの神具の必殺技を同時に放ち、ドウマンに突撃するサイ。

この技は今まで何度も強敵を打ち倒してきた技だ、それを三つ同時に放てば流石に無傷ではいられまい。

サイの怒号にも近い雄叫びと共に、全ての攻撃はドウマンに叩き込まれた。

しかし

『ククク．．．無駄ですよ、時間のね』

「何っ!? グオオオオオ!?」

ドウマンはサイの必殺技三連撃を喰らっても身動きをせず、寧ろ晒いながら巨大な拳で弾き返した。

今まで幾多の敵を倒して来たサイの必殺技が、ドウマンの巨大な胸板に傷一つ付けられぬままに叩き落される。

大地に叩き付けられる寸での所で明日菜が落ちて来るサイをキャッチしたが、それでもダメージを受けていた。

「さ、サイ!!! ちょ、ちょっとアンタ、しっかりして!!!」

大地に叩きつけられこそしなかったが、ドウマンの拳の一撃を喰らったのだろう。

そのままサイはダメージと急激な法力消費によって意識を失った……。

「くっ、あの大馬鹿者が無茶をしおつて……!!!」

サイの攻撃が通用せず、弾き返されたのを見るや否やエヴァは空中に浮くと詠唱を唱える。

本当ならば大地に叩き付けられそうになったサイを助けたい

だが今は、それより先にこの巨大な怪物を何とかせねばなるまい。

サイの突撃した時に気付いたが、サイの魂獣解放は本調子ではない。スピリッツ・バースト今までサイが魂獣解放をする所を見て、本来ならば九本の尻尾が生える筈なのに今回は3本しか尾がなかったのだ。

・・・エヴァは「本来の法力の量に合わせて尻尾の数が増減するのではないか？」と仮説を立てる。

しかしそれを聞く前にサイは攻撃を仕掛けてしまっ  
『本来な  
ら法力が枯渇し掛けている事を考慮するべきだった』とエヴァは内  
心舌打ちをした。

更に横目でサイと明日菜の方を見れば、サイは急激な法力消費によ  
り意識を失っている。

召還されていた神具がサイの意志に反して消える　これは即ち、  
神具を召還し続ける事すら困難な程に法力を消費してしまったとい  
う事。

それは言い方を変えればそれ程にサイの現状が“瀕死状態”という  
事だ。

「この木偶の坊が・・・貴様のした事は万死に値する！！

リク・ラク　ラ・ラック　ライラック

ウエニアント  
・ケラキアレス・オグムタオフネカヌティオサレット・テンベヌターリス  
来たれ氷精、闇の精！　闇を従え、吹雪け常夜の氷雪！！」

しかし、口では強気であろうがエヴァもまた限界に近い。

確かに彼女は『最強の魔法使い』と自らを称するだけの事はあり、  
無尽蔵に近い魔力を行使出来る。

だがそれはあくまでも“満月の影響下”だけであり、それ以外では  
魔力は有限なのだ　何しろハーディアス戦で傷の急速再生に魔

力をごっそりと消費する禁断七煉術式、更に両面宿難戦で最上位広  
ハイエン  
シャント・スベル  
カラミティ・スベル  
範囲殲滅魔法を放っているのだから。

故に今の状態のエヴァには今唱えている魔法を放つのが精一杯であ  
った。

「お、お兄ちゃん！！　く・・・くっそお、よくもお兄ちゃんを  
おおー！！

ラス・テル　マ・スキル　マギステル

ウエニアント・スピーリトゥスエウラガレステス  
クム・フルグラテイオーニフレット・テンベヌターリス  
来たれ雷精、風の精！

雷を纏いて、吹き荒べ南洋の嵐！！」



「さ、サイさん！！ クツ・・・神鳴流決戦奥義      ツ！！！」

「チャージ充填完了      ツ！！！」

「・・・させない！！！」

エヴァに続くようにしてネギが、刹那が、茶々丸が、ザジがそれぞれ動く。

各自の現時点で使える最も強力な技を放つ為に準備し、そして

「ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス闇の吹雪      ツ！！！」

「ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンス雷の暴風      ツ！！！」

「しん・らいこうけん真・雷光剣      ツ！！！」

「レールランチャー電磁収束砲、発射      ツ！！！」

「月光神姫・アルテミア      ツ！！！」

全員が力を振り絞って必殺技や魔法を撃ち放った！！  
流石に五人もの人物が攻撃を放ったのだ、通用しない訳があるまい。  
五つの波動は一つに融合すると、まるで螺旋の如く回転しながらド  
ウマンへと迫った

だが、しかし

『ククク、実に無駄な足掻きをしますね……。この神にも匹敵する力を得た我に、そのような攻撃が通用するなどと言う甘い考えは捨てる事です』

ドウマンは両腕で向かって来た螺旋状の波動を押さえ込む。

そのまま両方から腕に力を込めると　　気弾を簡単に四散させてしまったのだ。

5人の現時点の最強技を束ねて放つても傷一つ付けられない、その状況に見ていた全員に絶望の影が差す。

しかし、この様な状況でもドウマンは容赦も手抜きもしない……。手をエヴァ達の方に向けた。

『さて……。神たる我が力を貴様等に見せてやるっ』

その指に大量のエネルギーが溜まる。

地脈のエネルギーを取り込んだ事により、そのエネルギーの流れは両面宿難のものを裕に越えていた。

「クッ、皆散開しろ!!」

エヴァの声に全員が四方に飛ぶ。

ドウマンの手から放たれた光線は今までエヴァ達が居た所に直撃し、一瞬にしてその周囲までを荒野へと変えた。

更に当たり構わず光線が散開すると、周囲の山肌を溶かして荒野へと変えてしまう。

まさに見ているだけでも嫌気が差して来る程の一撃だ……。

「あ……。あああ……。…」

「馬鹿な……。何と言う破壊力だ……。このまま構わず連発される

だけで、此処は全壊するぞ・・・！」

それだけではない

これ程の攻撃を連発されれば、京都の地脈を流れるエネルギーは簡単に枯渇してしまう。

そんな事態になればこの京都という町は日本地図から姿を消すのは確実だ。

「ク、ククク・・・クハハハハハ！！！」

素晴らしい、実に素晴らしい！！ この力は実に最高だ！！

さあ愚者共よ、苦しめ、許しを請え！！ この力、このチ力、ラのマエニ！！

グ・・・グヒ、ヒじぎおお p j v g r ・ j ・ j にヴおお k ・ ・ ・ ！！」

すると急にドウマンの様子がおかしくなり始める・・・一体何があったというのか？

実は大きな力というのにはリターンもあればリスクもある。それは、その力を吸収した人物そのものが力に侵食されてしまうという事だ。

つまりドウマンは力の強さに酔い、その所為で力の制御を見失って妖獣達や両面宿難の力に侵食されてしまったのであろう。

・・・この状況では寧ろ、人としての意識があった方が良かっただろうと思われる。

「ギハ、 f d s j k 、 、 。 ン b g y d f c x y g フイ ツ！！

キカ、キカカカカ、ヒ r s c アア s d f g h j k l ; 、 ゲア、ヒヒヒヒヒ！！！！」

するとドウマンは狂って何を言っているのか解らないが・・・その

両手が倒れているサイに向いた。

どうやら意識はなくなるとも、かつてサイに殺されたという記憶が無意識にサイをターゲットとして認識させたのだろう。

指にはエネルギーが溜まり、既に攻撃の準備を完了していた

「あ、アカン・・・サイくん!!!?」

悲痛な木乃香の声が響く。

丁度エネルギー砲の乱射によって場所を離れてしまっていたエヴァ達ではもう間に合わない。

指先から大量のエネルギー砲が発射された・・・。

「サイいいいい!!!」

其処へサイを護るようにし、防御するようにして立ち塞がる人物が居た。

それは先ほど落ちて来たサイをキャッチした明日菜だ　　どうやらサイを肩に担いでエネルギー砲から逃げていた為、比較的近くに居たのだろう。

まるで防御するように構えた明日菜の神具により、飛んできたエネルギー砲は弾き返された。

これは一般人の筈の明日菜に何故か『魔法無効化』マジックキャンセルと呼ばれる力が宿っており、それと神具を利用して防御結界のような物を張れているが故。

だが　　元々魔法使いでも、裏の世界の住人でもない一般人の明日菜に長い事防御を維持するなど不可能だ。

既に一撃防御した時点で腕が折れ、結界にエネルギー砲が当たった強い衝撃で額から血が流れている。

しかし、それでも明日菜はサイの目の前に立って逃げようとはしな

い。

「まったく・・・何時も何時も何て無茶してんよコイツは!!  
こんなに痛い思いをして、自分の身体を張って・・・あの狼っ娘の  
時もさつきも傷付いてたのね・・・。  
アンタ一人で無茶するんじゃないわよ      アンタが傷付けば悲し  
む子だって沢山居るんだから!!」

そんな明日菜に向かってエネルギー砲を更に撃つドウマン。  
薄く膜のように張られている境界のような物の表面に大量の輝が入  
り、既にもう限界に近い事を教えていた。  
だが、自分に危機が迫っていようと・・・痛みを感じようと、明日  
菜は凜として其処から逃げはしない。

「アンタが無茶しまくってたつてのは解ってる!!  
だけど・・・だけどあの怪物は、アンタじゃなきゃ倒せないでしょ  
!？」

皆、アンタが目を覚ますのを・・・そしてアンタ自身の事を信じて  
るのよ!!」

既に明日菜が限界なのは皆も明日菜自身も解っている。  
そして、あの巨大な怪物を倒せるのもサイだけであり・・・サイに  
再び無茶をさせる事も理解している。  
だからこそ、だからこそ明日菜は傷だらけで巨大なドウマンの攻撃  
から逃げる事もせずに叫んだ!!

「だから・・・何時まで寝てるのよおお!!  
さっさと起きて、あんな怪物ブツ飛ばして、皆で帰るんでしょ!?  
だから起きなさいよ、サイいいいい      ツ!!!!!!!!」

その叫びをかき消すかのように両手のエネルギーを収束させたエネルギー砲が明日菜とサイに迫る。

あんな物が当たれば確実に二人は消滅してしまうだろう・・・だが、魔力が殆ど枯渇している状態のエヴァ達ではどうする事も出来ない。

「い、いやあああああああ！！！」

誰も間に合わず、響き渡る木乃香の悲鳴。

誰もがこの絶望的な状況にサイと明日菜の死を確信した・・・

暗い・・・何処までも暗く、先すら見えない世界。

しかしサイにとって見れば、此処に来るのは三回目だ　正確に  
言えば四回目だが。

しかし、前に来た時と違うのは・・・始めからサイがこの世界で腐  
っていない事だ。

「チツ・・・ドウマンとの戦いはどうなったんだ？」

こうしちや居られねえ・・・早く戻らねえと、奴の所為で京都自体  
がなくなっちまう・・・」

暗い闇の中、先が見えぬ暗闇でサイは必死に出口を探そうと動き回  
る。

だが暗闇の中では先も後も何も見えず、出口を探そうにも何も見え  
ない世界で延々と歩き回っているだけだった。

何処まで行っても何も見えず、まるで延々と道がループしているの  
かとまで考え始める。

「オイオイ・・・こんな所で俺は立ち止まっちゃ居られねえってんのに・・・」

段々と苛々して来たサイ。

しかし、何処まで行こうと何を呟こうと全ては深い暗闇に飲まれる。サイの苛立ちが最高潮に達しようとした丁度その時　不意に誰かの声が聞こえてきたのだ。

『・・・何故、購う？』

「ああ？　誰だ、何処に居やがる・・・？」

声を掛けてきたのはかつてこの暗闇の中で思い出した戦友達の声ではない。

どうやら声の質から若い人物ではなく、ある程度の年齢の人物のようだ　かと言ってサイが覚えている両親の声という訳でも無いようだが・・・。

何処となく無骨で豪胆そうで・・・時代劇の侍や映画に出て来る騎士のようにも感じる声だ。

その声が再び暗闇の中で鳴り響く

『何故、無駄な努力をして購う？』

今の貴様は既に法力の枯渇した・・・無力な人間と同じ存在に等しい。

その状態であのドウマンに勝つ事など出来ないと言うのに　何故、諦めない？』

暗闇から響く声は何処となくサイを哀れんでいるようにも、蔑んでいるようにも聞こえる。

だが・・・そんな感情の奥底でサイの事を心配しているようにも感

じるのは気の所為だろうか・・・？  
そんな暗闇からの声に、サイは表情を変えずに返した。

「無駄な努力かなんてテメエが勝手に決めんなよ。

テメエの限界も、戦いの勝ち負けも他人が決めるモンじゃねえ・・・  
ブツ倒れても立ち上がればそれは負けじゃねえ、負けってモンを認めねえ限りは何時だって立ち上がり続けりゃそれで良いだけだ」

サイの言葉に暗闇からの声が止む。

・・・すると今度は、何処となく冷静そうな人物の声が聞こえてきた。

『貴様が購って、己の身を削っても・・・認めてくれる者など存在しない。』

なのに何故、貴様は己の身を削りて多くのものを護ろうと願う？  
結果が報われる事などないと言うのに』

その言葉に対してサイはさっきと同じように表情を変えずに答える。  
何処となく聞いている内に、この声を発している人物達に心当たり  
が出始めていた。

「別に認められてえから戦ってるんじゃないよ。

俺はこの胸に眠る魂に誓った　俺が護ると誓った者は、決して  
命を奪わせないと。

他の誰でもねえ、俺自身が俺自身に科して誓った約束だ・・・それを  
違えはしねえ」

再び聞こえなくなる影からの声。

そして次に聞こえて来た声は・・・威厳に満ちた二人の人物の声だ。



『これ以上苦しんで何になる？ 貴公は再び苦しむ為に権限したの  
ではあるまい？』

『生き残りたいのなら簡単だ、小娘共を見捨てて逃げれば良い……  
元々、あのような小娘共に義理などあるまい？』

『そう、生き残りたいのならば切り捨てよ……さすれば……』

そう、二人の人物の声が重なり合って言葉が紡がれた次の瞬間

「五月蠅えな、老い耄れ共はゴチャゴチャ抜かさねえで黙ってる！  
」

サイの怒号が暗闇の中に響き渡る。  
黙り込む二つの声 それに対してサイは続ける。

「どいつもこいつも勝手な事ばかり抜かしやがって！！  
報われねえだ？ 苦しむだ？ 上等だ！！ 俺はもう二度とテメエ  
の進む道を曲げねえよ、誰が何と言おうとな！！」

俺は俺自身の誓った誇りを信じて行動して来たんだ 何も知ら  
ねえ連中が訳知り顔で御託並べんじゃねえ！！

護ると誓ったモンは絶対に護る……少なくとも俺のこの手が届く  
範囲の連中だけは絶対にだ！！

そんな事よりもとっとと此処から出しやがれ あいつ等が待つ  
てんだ！！」

空間を揺るがす程の怒号、それを聞いた謎の声は黙り込んだ。

サイはそれ以上は何も言わず、外へと出る為の方法を探そうとした

その時・・・再び声が鳴り響いた。

『フン・・・相も変わらず生意気な小僧だ。

しかし安心したぞ　　どうやら記憶は完全でなくとも、貴様の心の闇は少しは晴れたようだな。

流星は我が娘が一族をも捨てて仕えただけの事はある漢よ』

喋り方は今までのように嘲るような口調ではない。

言葉からは信頼や優しさのような物が感じられる　　かつて、己が娘に自らの意思で自分の元を離れて行った時には理解出来なかった『親心』という物をサイに倒された際に理解したのだ。

『小僧　　我等は貴公の心に抱かれし闇が形となった存在よ。

我等が言葉に耳を傾け、その心を乱した時　　貴公は闇へと墮ちる筈であった。

・・・良くぞ我等の言葉に惑わされずに己が意志を貫いた』

最強の武神と呼ばれ、何度も戦った猛将。

最後はサイを認め、卑劣を嫌い・・・自らの武士道を貫き果てたその生き様をサイは忘れない。

敵であれ、ある意味ではサイが認める師と言っても過言ではない漢であった。

『忘れるな小僧、自らを信じて疑うな。

例えどのような苦悩や苦難が待ち受けようとも・・・己の選んだ道を貫き通せ。

さすれば必ず、貴様の前に道は開かれる・・・』

敵でありながらも一人、サイにとっては師のような人物であった



聞こえる　　近くに居る程に大きく。

皆が呼んでいる・・・サイが再び眼を覚ますのを信じ、呼んでいる。それを認識した次の瞬間、暗闇に囚われていたサイの心の世界は・・・一気に光を取り戻したのだ！！

まるで荒野のような光景。

大地に突き刺さった幾百、幾千もの武器・・・その中で輝く九本の神具。

それら神具はまるで心臓の鼓動のように呼应し、光を放つ人影となりサイに言葉を飛ばす。

『行けよサイ、俺達も共に行く！！』

『貴方を護る為に　　貴方と共に進む為に』

『我等が魂を、我等が神具を今一つに！！』

『そして今度こそ護れ・・・己が誓ったものを！！』

『今、白面大帝が守護神獣を此処に　　』

『天馬の如き翼を駆って、闇を切り裂き魔を断つ天駆ける騎馬！！』

『サイ、これこそが我等の覚悟にして誇り　　！！』

『一緒に行こう、サイ君！！　僕達の魂と共に！！』

『私達の魂が融合した神具を、今顕現せん！！！！』

サイの身体に飛び込む九つの光。

それらの力の脈動を目を瞑ってサイは感じた後  
を向く。

光の差す方向

最後に明日菜の声が響いた!!

『だから起きなさいよ、サイiiiiiiii』

ツ!!

「ううううおおおおおおおお

ツ!!!!!!」

咆哮と共にサイの心象世界での意識は消えて行った

痛みを感じない・・・何故だろうか？

必死にサイを護ろうと、サイを目覚めさせようとした明日菜。

目の前には確実に自分を、後ろに居る皆を、そしてサイを死に追い  
遣る様なエネルギー砲が迫っていた。

それが防御するように構えていた大剣に当たった瞬間、もう駄目だ  
と諦めた筈・・・。

だが 明日菜の思いは、叫びはサイに耳に届いていたのだ。

『ヴ？ サア a d f g j h k e t j y k h j i n k。クギイイイイイ  
???!!??!!?』

ドウマンがまるで疑問を持つかのように首を傾げる。

元より、先ほどのエネルギー砲を撃てば確実に生命反応など残る筈  
はないのだ。

なのに・・・後ろに居る者達ならなまだしも、何故エネルギー砲の

直撃を受けた筈の奴等の生命反応があるのだろうか……？  
その答えは立ち上った土煙が晴れた際に理解出来た

「……馬鹿、何時まで寝てるのよ……心配したじゃない！」

「重ね重ね悪いな……だが良く聞こえたぜ。

テメエの声も、キティや茶々丸やザジヤ、ネギ達の俺を呼ぶ声が

」

其処に居たのは 眼を覚ましたサイだ。

身体中は傷だらけでフラフラし、今にも倒れそうな姿でありながら……その二つの足は確りと大地を踏みしめている。

目の前にはまるで防御障壁を張るように宙に浮かんでいる多くの武器 一つ一つがサイの召還する模倣神具を裕に上回るなどという言葉が生易しい程に強大な力を有しているようだ。

それら武具はサイと明日菜の周りどころか、後ろに居るエヴァやネギ達の周囲をも圧倒的な力で防御障壁を張り護っている。

『グギ！？ カタ s g シュ f d v d w s x c j k j。 m、ニテエエ m ン ヴ オ ガ！……！』

ドウマンは理解不能な言語を言い放ちながら両指十本からエネルギー砲を全発射してサイ達を狙う。

しかし……サイの目の前に浮かんだ輝く武具が張った防御障壁には傷一つ付けられずにエネルギーが四散する。

何発も何発も攻撃を連発するが……全て障壁を破壊する事は敵わない。

「俺は負けられねえんだよ」

「グガア！?!?!?!?!?!」

ふとサイの一言にドウマンは疑問を聞き返すかのように咆哮を上げる。

サイはドウマンの方を見ながら・・・己の誓った事を、そして貫くべき事を言い放った。

「テメエがどれだけ力を持つが、どれだけ巨大な壁だろうがキティが、茶々丸が、ザジが・・・ネギが、刹那が、木乃香が・・・古が、楓が、真名が、そして明日菜が!!! 皆が俺の事を信じてんだ!!!」

俺を信じて未来を託した奴等も、俺を信じて後を続く奴等も俺を信じる今を生きる奴等も!!!

皆が信じる俺は、俺が信じる俺は　こんな所でテメエ如きに負けてもいらねえし、折れてなんか居られねえんだよ!!!」

そして自らの胸を指しながら吼える!!

「それが　それが俺の自分で決めた誓いだ!!」

今更過去の遺物の力を借りる事でしか戦えねえ様なテメエ如きを往來させてたまるか!!

人の生きる未来<sup>あした</sup>を絶対にブツ壊させはしねえ、俺の魂に誓ってな

「

サイの言葉と共に輝きを増す宙に浮かぶ武具。

魂に呼応するかのようにそれぞれ違う色の光を放ち、その光が一つになっていく。

「行くぜ、白帝王ビャクテイオウ!!!」

サイのその怒号に呼応し、9の武具は互いに一つとなり形を変える。更に其処にサイの神具である六道拳と双魔銃が融合すると・・・一つの姿に形を成した!!!

それは白銀の天馬

目が眩む程の光を放ち、神々しくも見える鋼の守護獣。

魂獣大帝の名を継ぐ者に受け継がれる、至高の神馬 幾百、幾千ある神具の中で唯一の“獣型”の神具。

その名は 神皇轟騎しんおうこうき・白帝王びやくていおう

白銀の神馬の咆哮が、ドウマンの放つ巨大なエネルギー砲を掻き消すと・・・ゆっくりとサイの前に跪いた。

「ああ、行くこう。」

お前等の力と、俺を信じる奴等の想いの力 それがあれば、俺達に断てねえモノは何一つねえ!!!」

白帝王の背に乗るサイ。

その片手には母の親友であった神具鍛冶師がサイ自身の魂石を元に作り出した、無限の力を有す刃。

白帝王から膨大な法力を吸収し、その刃はまるで雷光が形を成したかのような形態へと変わる。  
するとサイは大声で叫ぶ!!!



「ネギ、明日菜!!」

「「えっ!?!」」

いきなり呼ばれた事に驚く二人。

サイは手綱を放すと明日菜の方に手を伸ばし、ネギの方を向きながら続ける。

「乗れ、お前達も一緒に!!」

この中では一番お前等が魔力や法力が残ってる だから俺に、

その力を貸してくれ!!

俺達の信念を、想いを乗せて明日を必ず勝ち取る!! 無理なんて壁は俺の刃とお前達の力で粉々にブツ壊すぞ!!!!」

その言葉はこの最後の局面で自分達の力を必要としてくれたという事。

超常的なまでの強さの敵に己の攻撃が通用しなかった明日菜にとっても、更に己の信じてきたものを否定された故に役に立たないと思っていたネギにとってもそれは何よりも嬉しい事だった。

だからこそ二人は

「う、うん、お兄ちゃん!!」

「わかったわ、私が役に立つかどうか解らないけど・・・やってやろうじゃないの!!!!」

迷わずその手を握り返し、白帝王の背へと乗った。

更にサイは障壁によって護られている、力をかなり消耗しきったエヴァ達に言葉を飛ばす。

「キテイ、茶々丸、ザジ！」

それに刹那に古に真名に楓　　唯一つだけで良い、俺を信じる！！  
お前達のその想いが力となる・・・だから、頼む！！」

その言葉に対してエヴァ達は笑い返す。

それはさながら『今更何を言っている？』とでも言うかのように。

「行け、サイ！！ 私達に“奇跡”とやらを見せてみる！！」

戦友のその言葉にサイは笑いながら前を向く。

それと共に地を駆け出す白帝王　　その全身は、まるで太陽のよ  
うに光を纏い輝いていた。

「見せてやるぜ、ドウマン　　ッ！！

魂獣大帝の、白面九尾の・・・いや、俺達今を生きる者達の底力つ  
て奴をなあああああ！！！！」

サイの怒号に合わせ、その手に携える雷光のように光る七魂剣が白  
帝王と同じく太陽のように輝く。

それに今度はネギが手を添え、残った魔力を全力で注ぎ込みながら  
言い放つ。

「諦めない・・・ボクは絶対に諦めない！！

誰かが信じてくれるから、自分自身を信じれるからボク達は強くな  
れるんだ！！

お兄ちゃんが信じるボクは、ボクが信じるボクは・・・こんな所で、  
立ち止まっては居られないんだああああ！！！！」

七魂剣に纏われる魔力の力、それは七魂剣を更に輝かせる。

それと共に明日菜もまた七魂剣に手を添えて己の内に眠る法力を・  
・そして自分やサイさえも知らない膨大な量の気と魔力を注ぎ込み  
ながら言う。

「アンタのような怪物はさつさとやられちゃいなさい!!」

私達は負けない 自分達自身の信じるものの為にもアンタを絶  
対ブツ倒して明日を掴むんだから!!

このデカブツが・・人間を嘗めんじやないわよおおお!!!!!!」

七魂剣はその姿を雷光を纏いし大剣へと姿を変えた。

背丈をも裕に超える程の姿となった七魂剣を、まるで重みを感じて  
いないかのようにサイは天に向けて構える。

更に、その強大な斬艦刀のような姿と化した七魂剣にエヴァ達から  
闘気のようなものが注ぎ込まれた。

想いは剣を究極な刃と変える。

新たな力を得、多くの想いを纏い、七魂剣は次元をも断つ剣へと・  
・。  
ツルギ

「「「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」」」

天駆ける神馬は太陽の如く、撃ち放たれるドウマンのエネルギー砲  
を掻き消しながら突っ込む。

この技はサイが両面宿難に対して使った“天照”の究極の昇華とも  
言える、天照の閃光をその身に纏いて次元をも切り裂く刃と共に敵  
へと呐喊する秘奥義。

「「「光明司流・・三神義 天照・零式

」」」

その名をサイは、ネギは、明日菜は言い放った!!!

「アメノムラクモ」  
“天叢雲”

ツ!!!!!!」

天を突く程に振り上げられた雷光の刃をドウマンに叩き付けるサイ。しかし刃は確実にドウマンの身を捉えるが・・・その身に張られた障壁が刃を肉体に届かせず、切り裂くまでには到らない。

所詮は唯の足掻きなのか・・・いや、そんな事はない!!

人の想いを、誇り高き魂を、揺ぎ無い信念を込めた刃は少しずつだがドウマンの肉体に喰い込み始めている。

あと少し、あと少しの力があれば切り裂けるのだ

「クソが、嘗めんじゃねえぞオラア!!!!

ネギ、明日菜　もうちつとだけ踏ん張れ!!　こんなクソ野郎に負けんじゃねえぞ!!!!

「う、うん・・・だ・・・大丈夫・・・夫!!

絶対に・・・絶対にこの壁だけは、この道だけは・・・切り開くよ、お兄ちゃん!!!!

「あ、あたしも大丈夫・・・!!

見てなさいよ・・・こう言う土壇場の、女の底力つてのを、見せてやるんだからああああ!!!!!!

例え中では比較的魔力だの法力だの気だのが残っている量が多いにせよ、ネギも明日菜も消耗が激しい・・・更にサイなど、法力切

れで気絶していたのを戦友達の魂石クリスタルに込められている法力で強引に身体を動かしているのだ。

サイの使う技の中でも五本の指に入るような秘奥義を放つても、消耗しきった肉体が着いては行かないのである。

このままでは天叢雲は通用せず、強引に身体を動かしている法力まで枯渇してしまう・・・そうならば勝てる確率は完全に皆無となってしまうだろう。

だが、その時。

「えっ・・・このちゃん!？」

刹那の驚愕した声　　エヴァ達が刹那の見ている方向に振り向く。其処にはなんと、フラフラとした足取りの木乃香がサイの張った結界をすり抜けて前に出てきたのだ。

「何・・・馬鹿な、何をしている近衛木乃香!？」

（どう言う事だ・・・奴の居た場所にはサイの強力な結界が張ってあった筈だ。

ハッ、まさか　　己の内に眠る魔力が結界を強制解除したのか!

?　それが事実だとすれば、何と言う魔力だ・・・)「

これもまた一つの意志の力という奴なのだろう。

「こ、木乃香さん、駄目です!!」

私達にはこの状況では何もする事など出来ません・・・危険ですから下がっていた方が良いでしょう!!」

共に後ろに居た夕映は冷静に状況を判断し、自分達では何も出来ない。木乃香を止めようとす。

だが、その言葉では木乃香は止まらない　　木乃香もまた、その  
穏やかな性格からは想像出来ない強い意志を持っているのだ。

黙っていたらなかった、何もしいままではいらなかった。

皆が自分を助ける為に多く傷付き・・・特に“最も大事な親友達”  
や自分が“生まれて初めて恋した”人物がボロボロになってまで戦  
っているのに、自分は何もしないなどというのは・・・。

「皆が・・・せつちゃんが・・・明日菜が・・・ネギ君が・・・サ  
イ君が頑張ってるんや!!」

皆がウチを助けてくれたんや・・・だから、今度はウチだって力に  
力になりたい!!

ウチだけ何もしないなんて・・・嫌や!!!!」

その強き意志は奥底に眠る木乃香の魔力を・・・強大な力を解放さ  
せる。

叫びはその身体から膨大で、それでいて温かく優しげな光を周囲に  
放ち、この戦場に存在する者全てを包み込む。  
すると

「こ、これは・・・!?!」

「マスター・・・傷が修復されています」

「これが・・・これが、このちゃんの力・・・」

戦場にいた者達の受けた少くない傷が見る見るうちに癒されてい  
く。

そしてそれは、今まさにドウマンと全力でぶつかり合っていた三人  
の傷を癒したのだ



ドウマンの身体に縦一閃に線が刻まれ、断末魔の悲鳴のような物を上げながら半身がゆっくりと縦にずれる。

そして・・・閃光に溶けるかのように巨大な肉体は四散し、完全に消滅したのであった・・・。

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・か、勝った・・・勝ったぞ、馬鹿野郎が・・・」

「や、やった・・・やったんだよね・・・ボク達、あの怪物を倒せたんだよね・・・お兄ちゃん・・・」

「も・・・もうダメ・・・もうクツクツだよ・・・早く帰って布団で寝たい・・・」

全力で力を使いきった三人・・・。

いつの間にかサイの魂獣解放も解けて何時もの少年姿に戻っている・・・白帝王が地に降り立ち、消えた瞬間に緊張の糸が解けたのだらう。

サイ達三人はヨロヨロと力無く大地に座り込み、立ち上がる事も出来なくなっていた。

「~~~~~サイさ~~~~ん！！ 明日菜さ~~~~ん！！ ネギ先せ~~~~い！！」~~~~

其処に声を上げながら走り寄って来る人物達。

皆、表情は明るいものだ・・・当然だ、あれ程の強大な力を持つ敵を相手に犠牲者も出ずに勝ったのだから。

ネギや明日菜は皆から手を叩かれあったり、抱き合ったりして喜び



を表している。

そして、何時も通りサイはゆっくり皆の輪から外れると……。少し離れた所にあつた樹に寄り掛かると、ゆっくりと大きな溜息を付いた……。『やつと終わった』という、安堵から出た溜息だろう。

「全く……。本当に貴様には驚かされるな、サイ」

「ハツ、当然だ……。俺を誰だと思つてんだテメエは」

そこに何時も通り茶々丸と、今回はザジを連れて何時も通りの掛け合いをするサイとエヴァ。

だが、この時ばかりは何時もとは違いお互いの無事を言んでいるようにも見えない。

今回は最初から無茶ばかりし続けていたのだから、全てがやつと終わったという感慨深さもひとしおだ。

「ヤレヤレ……。死ぬかと思つたが、これで木乃香の親父さんと小太郎との約束は果たさせたぜ。

……。どうやら悪運が強えのか何なのか知らねえが、あのクソ女もドウマンの野郎に魔力を吸い尽くされても何とか生きてるみてえだしよ……。山肌と祭壇にやちつと被害が出ちまつたが、この程度なら上等だろ？」

「先ほど解析した所、敵の主犯格の天ヶ崎千草に身体及び精神の不調は見当たりません。

どうやら魔力を行使する為の内包魔力のみは完全に枯渇してしまつたようですが、日常生活には支障は無いようです。言い遅れました、ご苦労様でした……。サイさん」

最早完全に自分の足では立ち上がれないサイに肩を貸す茶々丸。  
その表情は何時ものように無感情のようだが・・・何処と無く嬉し  
そうにも優しげにも見える。

茶々丸にとって己の主と同じ位に大切な存在だという事を認識出来  
た相手が無事だった事がその様に見せているのだろう。

「あゝ、本気で腹減ったぜ・・・。

こうなったら飽きる位、京料理とやらをたらふく食ってやるぜ・・・  
なあ、ザジ？」

「・・・・・・・・（コクコクッ）」

極限を突破し、限界を超えて戦い抜いたのだ。

それにサイだけではない・・・エヴァも、茶々丸も、そしてザジも  
限界ギリギリまで戦い続けた。

故に腹が減るのは当然であり、全てが終わったからこそこんな風に  
笑い合えるのである。

そして・・・この戦いを影で見つめていたもう一人にサイは言葉を  
飛ばす。

「・・・・・・・・つう訳だ、フェイト・アーウェルンクス。

テメエの想像してた結果だったかどうかは知らねえが、テメエは今  
回の舞台から降りたんだろ？」

だったら此処で斬った張ったは無しにして貰いてえんだが？」

サイに名を呼ばれると草むらが動く。

茶々丸とザジはサイとエヴァを護るようにして神具を構える  
其処からは無表情な少年、フェイトがゆっくりと歩いて来た。

エヴァが茶々丸とザジを手で制する様にして武器を下げさせると、

フエイトは小さく呟く。

「そうだね・・・僕としては予想外の結末だったよ、光明司齊。まさかあれ程の強大な存在を倒してしまうとは思わなかった。僕達の目的の為には此処で倒しておくべきだが・・・」

その言葉にエヴァに手で制されていた茶々丸もザジも危険を感じて再び神具を構える。

だが・・・無表情のままフエイトは小さく首を横に振ると言葉を続けた。

「今のその状態では、三度目の決闘を最後までとは行かないだろう。それでは意味が無い。故に三度目の決闘の機会は次に持ち越しという事にしようか」

「ヘッ・・・次、ねえ。」

んじゃこういう事が“次”もあるって事か・・・？」

フエイトは表情を変える事無くサイを見つめているだけだ。

その態度を肯定と受け取ったサイは、不敵な笑いを浮かべながら言葉を紡ぐ。

内心は可笑しかった・・・何せ、何にも興味を持っていなさそうなこの無愛想な少年が自分との約束を曲げもせず覚えて居ると言う事が。

「上等だ、フエイト・アーウェ・・・いや、フエイト。」

そんじゃあ次会った時、そんな時が三度目の決闘って事で・・・愉しもうぜ」

「そうだね、光明・・・いや、サイ。」

その時までには出来ればネギ君も強くなっていてくれればありがたいね・・・それじゃあサイ、再びの邂逅を僕も愉しみにしていよう」

そう言い終わるとフェイトは姿を消す。

次の邂逅が何時になるのかはまだ解らない・・・一週間後か、一月後か、それとも一年後か。

だがそれでも、何れ決着を着けなければならぬ日が必ず来る

その時を楽しみにサイは笑っていた。

不意に最後までサイとフェイトとの間に口を挟まなかったエヴァがサイの手を握って引つ張る。

「ほれ、そろそろ帰るぞ。

中々な好敵手を見つけたのは良いが、今の貴様は完全に限界を超えているのだろうか。

こんな所でブツ倒れられて眠りに着かれると運ぶのが面倒だ・・・詠春も待ちわびているだろうしな」

エヴァの言葉にサイは頷く。

「ああ、そうだな・・・。

あゝ、安心したら急に疲れと眠気が・・・キティ、後は頼・・・ZZZZ・・・」

そしてそのままぶっ倒れると寝息を掻き始めた。

そんなサイを見つめて『ヤレヤレ・・・』と呟きながらエヴァもまた茶々丸に呟く。

「済まん茶々丸・・・私も流石に・・・限界だ・・・。

お前とザジも疲れ・・・ていると・・・いうの・・・ZZZZ・・・

「  
サイと同じように魔力を限界まで使った事により睡眠に入ってしまったエヴァ。」  
二人を見つめていた茶々丸とザジは小さく頷き合つと、二人を背負つて関西呪術協会の総本山へと向かうのであった。

長い夜はようやく明ける。

新たな時代を生きる者達が巻き起こす風によつて

だがこれはようやく始まつた世界の命運を賭けた戦いへの第一歩に過ぎないのだ。

これより先に待つのは絶望なのか、はたまた希望なのか・・・それはまだ解らない。

だが　　今と言うこの時だけは

長き夜を越えた者達に穏やかな休息が訪れる事を切に願おう。

しばしの休息に、戦士達は駆けて行くのであった・・・。

## 第四十七話：月下の死闘・八ヶ闇を切り裂く幾重の光々（後書き）

投稿完了しました・・・。

いやはや、苦節23話にして漸く京都編の終わりが見えてきましたよ・・・；；

これにて次回で京都編は終わりとなります・・・付き合ってくれた方、ありがとうございます。

とそしてネタを使う事を許可していただいたSS作者兄貴さんには謹んで此方でお礼を申し上げます。

では、次の話にて京都編の幕は降ります。

其処から少しの平穩の時を戴き、次の章へと続く事となりますのでお楽しみに^^

では、次回までさようなら

補足：内容彼是

神滅呪霊王・鬼哭ドウマン（本作表記：ドウマン）

神羅万象 七天の覇者 第三弾に登場した隠神刑部三巨頭の一人、道摩法師ドウマンの超覚醒形態

契約締結により五行の力を得たサイに対抗する為に自らの部下三人と陰陽師団（ ）を喰らい、限定的に五行を操る力を得た

ただし、元々が強引な力の得方だった故に肉体に法力の膨張がついて行かずに自壊 最後には更に六人目の契約締結をしたサイによって葬られる

（ 扇法師カタラ（扇を使った道術を得意とする術師）、鏡法師マ

ズ二（鏡を使った法術を得意とする術師）、紙法師マデア（紙を使った陰陽術を得意とする術師）の三人  
更にこれに合わせて千に軽く匹敵する陰陽師団（つまり兵卒）が存在する

#### 神皇轟騎・白帝王

オリジナル神具の一つで、全神具中唯一の獣型（と言うか天馬型）にして可変型神具

本編には登場していないが通常時は白銀と黒のバイクの形態をしており、魂獣解放状態時のみ白銀に輝く天馬の姿となる

基本的に移動用だが、サイの封印されてしまっている能力の増幅の際に使われる事が多い

この騎馬に騎乗した状態で使えるのが『光明司流 三神義・天照“天叢雲”』<sup>㊦</sup>

（サイの奥義全ての中で五本の指に入る必殺技）

尚、元ネタは『マジンカイザーSKL』に登場するバイクから馬型に変形する支援獣“カイザーウィングル（仮名）”

#### 光明司流 三神義・天照“天叢雲”

“三神義”と呼ばれる技の一つで、自らに天照の波動を纏った状態で七魂剣を次元刃と変えて呐喊し、敵を切り裂く秘奥義

次元刃はサイ自身の意志の力を糧とし、法力や気に魔力などといった全ての超常的な力や人の意思や自然の力などといった森羅万象の力を纏って何処までも巨大化する事が可能

尚、元ネタは以下の通り

騎馬騎乗＋波動を纏う 『真（チェンジ！）ゲッターロボ』世界

最後の日』の真ゲッター1と真ドラゴンの合体攻撃【真シャインスパーク】

大剣を構えて呐喊 『スーパーロボット大戦OG』のダイゼンガー  
&アウセンザイターの合体攻撃【竜巻斬艦刀・逸騎刀閃】より

それ以外の疑問は次回の京都編最終話にて



## 第四十八話：別離（わかれ）ても好きな人

全ての戦いを終わらせて夜明けと共に帰って来た少年少女達。

サイとエヴァは全力で力を使ったと言う理由から完全にノックダウンし、他の者達も全員が埃や泥だらけではあったが・・・結果的には死人は一人も出ずに木乃香を取り戻すと言う快挙を成し遂げたのだ。

関西呪術協会の総本山にて石化された者達を解除レジストした後に待機して娘達の無事を祈っていた詠春。

そんな彼は娘が無事であると言う事を知ると、西の長という立場も忘れて木乃香を抱きしめ無事を喜ぶ。

・・・勿論、それに対して木乃香も嫌がるような素振りは一切見せずに嬉しそうに笑っていた。

その後　まさに“死闘”と呼べる戦いの中で精根を使い果たした明日菜達は身体の汚れなどを気にする事も無いままに爆睡し始めた。

結局、その後に彼女達が起きたのは次の日の朝の時間であったと言う。

（尚、修学旅行の不在には詠春が式神を使って誤魔化していたそうだ）

そしてその日の昼過ぎ

起きて直ぐに風呂には入ったのだがまだ埃っぽい様に感じた明日菜達は、遅めの昼食の前に二度目の風呂に入る事にしたのであった。。。

「はあ……しっかし、昨日の事は本当に夢か何かかって思っちゃうわよね〜」

空の良く見える露天風呂に浸かりながらそう呟く明日菜。

その近くには同じく肩まで風呂の中に浸かって気持ち良さそうな表情をしている刹那と木乃香が居る。

「本当ですよね……」。

まさか、あれ程の怪物を相手に誰も深刻な傷を受ける事もなくこうして次の日を迎えられるなんて思いませんでした」

確かに昨日の戦いは人知などと言う言葉を完全に超えた、文字通り命がけの戦いであった。

下手をしなくても無事には帰って来る事など出来ないであったろうが……結果的には多少は問題はあれど（天ヶ崎千草の魔力の枯渇、月詠の行方不明など）命に別状は無く事を成し遂げられたのだ。

勿論それはサイや皆の実力、木乃香の内に秘めた魔力の開花などと言った要因もある。しかし結局の所は最後までどのような状況でも諦めなかった心の強さが全ての要因であろう。

尚、木乃香は力の開花や攫われた理由など諸々に多くの疑問を持っていたが

それについては流石に『映画の撮影だった』や『CGだった』などという言い訳が通用する筈も無い為に刹那が知ってる限りの事を説明した。

……本当はエヴァやネギなどに説明して貰いたかったのだがエヴァは昨日の戦いの疲れでサイと共に爆睡中だし、ネギはネギで千草の言っていた『現実』と言う物に対して色々と一人悩んでいたので頼む事が出来なかったのである。

まあ勿論その後には木乃香の父親である詠春が、細かい所を補足して

説明はしていたのである程度の事は理解出来ていたのだが。  
(ちなみにネギは早朝一番で風呂に入っていた)

「やけどウチ、まだ良く解らへんねん。

エヴァちゃんやネギ君は魔法使いで、エヴァちゃんの“ぱーとなー”  
ってのが茶々丸さんやる？

で、せつちゃんは呪術師・・・それじゃあ、ザジちゃんやサイ君は  
どうなん？」

木乃香の質問に明日菜も刹那も答えが出ない。

例えば真名なら傭兵、楓ならば忍者、古ならば武道家と括る事は出来るのだが・・・サイとザジは正直、正体不明の不思議な力を持った人間としか説明出来ないだろう。

かつてエヴァから『サイはお前と同じだ』と聞かされた事があり、更に戦っていた時のあの姿を垣間見れば半妖だと言う事だけは解るのだが・・・。

こんな事を木乃香が尋ねた事にはある疑問があった故だ。

実は刹那と詠春が裏の世界の事や魔法使いの事、そしてその世界にもし進むのであればそれは大変危険な事だと言う事も説明はした。その上で詠瞬は『どのような道を選ぶかは木乃香自身で良く考えて決めなさい』と優しく言い、娘の意思を尊重する事を選んだのである。

・・・刹那自身としては木乃香に危険な世界に足を踏み入れて欲しくないと考えてはいたが、それでも此処まで来たら長の言う通りに本人の意思を尊重すべきだと考え、決断は木乃香に任せる事にしたのだ。

しかし、次に口を開いた木乃香の言葉と一緒に風呂に入っていた明日菜と刹那は思いつきり噴出す事となる。

「うーん、成る程な。」

ならうち、魔法使いになるんやったらパートナーはせつちゃんとサイ君が良えな。」

「ぶ

ッ!?!?」

木乃香の天然爆弾投下に二人が噴出す。

当の本人の木乃香は頬を赤く染め、微笑みながらそんな二人を見つめていた。

「えっ、ええ、えええええええええ!?!? こ、ここここ、このちやん!?!?」

「ちょ、ま、待った!! 刹那さんはあんた達の仲の良さ見れば解るけど・・・何でサイも!?!?」

二人は慌てふためき、明日菜は木乃香に質問を投げかける。

そりや当然だろう・・・刹那はもとより、明日菜の場合も魔法使いのパートナーとなる事の意味やらその為に必要な事はネギから聞かされていて知っていた。

魔法使いのパートナーとなると言う事は昨今の現代では恋人選びと同義だ、これはかつてサイがエヴァと初めて親友になった頃に彼女の口から語られているので解っているだろう。

しかしパートナーになる方法と言うのはこの本編の中ではさらっとしか触れていなかったもので知らない物も多い、なので此処で一応説明しておく事にする。

パートナーになる方法と言うのは幾つか方法がある。

その中で最も危険が少なく、更に比較的簡単に、お試し感覚で出来

るのが『バクティオー仮契約』だ。

これは原則的に一人しか契約出来ないパートナーを選ぶ為のお試し期間として何人とても仮に契約出来る方法である　尚、方法は契約の為の魔法陣の中で魔法使い（若しくは仮契約を結びたい相手）とキスをする事だ。

・・・ちなみに契約を行うと契約者が描かれた『バクティオーカード従者カード』という物が出現し、契約主の力の如何によつて各パートナー事に潜在能力を更に引き出す事の出来る固有のアーティファクトが与えられるという恩恵もある。

（このアーティファクトはあくまでも“魔法のアイテム”に過ぎず、神具とはレベルは段違いだが）

尚、京都編の中頃で変態小動物とパパラッチ女が『唇争奪戦』を開いた理由も軽く触れたと思うが改めて此処で一応説明しておこう。実はこの仮契約、オコジョ妖精が行うと『オコジョ協会』なる所から多額の報酬がゲット出来る（一人につき50万オコジョ\$）・・・つまりあの馬鹿二人は目先の利益に目が眩んだ事が切欠でサイによつてキツイお仕置きを受ける事になったのだ。

まあ、まさに自業自得と言う奴であろうが。

それはさておき  
閑話休題

そんな内容を理解していた二人は、それを理解しているのかしてないのか解らない木乃香の発言に驚く。

だが・・・この後に更なる天然爆弾の投下にまた噴出す事となるのだが・・・。

「ん？　いや実はちょっと前にパルと話をして気付いたんよ。」

もっと前からだと思っけど・・・ウチ、サイ君に初めて会った頃から惚れてもつてたんやっとな。」

その言葉に啞然として言葉を失ってしまう二人。  
確かに木乃香の学園での態度やらサイに対する眼差しやらを垣間見れば理解出来た事。

だが改めて本人の口からその事を語られるとは予想だにしなかった。  
。。。

「い、いや、ちょ、ちよつと木乃香!？」

あ、そ、そう言えば前にネギから聞いたけど、パートナーってのは本来は一人だけらしいわよ!？」

恋に恋するが故に暴走寸前(若しくは暴走済み)の木乃香を冷静にさせる為に明日菜はネギに教わった事を口に出す・・・だがこの事が更に木乃香に天然爆弾を投下させる原因となった。

「え、そうなん？」

あつ、じゃあせっちゃんが魔法使いのパートナーで・・・サイ君はウチの人生のパートナーや」

「ぶは

ッ!？」

まるでボディブローを受けたかのような衝撃クラスの噴出しをする二人。

当の本人の木乃香の方はそんな二人を微笑みながら見つめながら首を傾げる・・・実にとんでもない天然っぷりである。

てかこの娘、実は反応を楽しみにしているんじゃないだろうか・・・?

「こ、ここここ、木乃香・・・!？」

じ、人生のパートナーって、あ、ああああ、アンタ何時の間にそ

「こまで!？」

人生のパートナー発言に空いた口が塞がらないという言葉を直に表している明日菜。

実は胸に浮かぶほんの少しの懐かしい“何か”に胸が少し痛くなったが、直ぐに否定するように激しく首を横に振る。

一方、目に見えて呆然として元気が無くなっているのは刹那  
彼女は親友の想いと言う奴に複雑な感情を抱いてしまったのか、少しだけ悲しげな表情をしていた。

そんな時、空気も読めずに『ガラガラガラ』と入り口が開く音。

更にそれに続いて

「へえ、これが露天風呂って奴か？」

「おや、サイ君は露天風呂に入った事が無いのかな？」

「ああ・・・この馬鹿は余り常識やら何やらを知らんなので・・・」

響いてきた声の主は今丁度噂していた人物の声。

更に続いて低い渋めな男の声に少女のような可愛らしい声が響く

まあ、口調で既に誰かは理解出来るだろうが。

実はこの露天風呂は混浴となっていて故に男女が共に入っても問題は無いのだが・・・それでも流石に外見が自分達と同じ位の少年と完全に大人の人物と共に入るのは勇気が必要だ。

流石に鉢合わせになる訳には行かず、明日菜&刹那&木乃香は急いで近くにあった大きな岩の裏に隠れたのである。

「・・・アレ? 今誰か居なかったか？」

「いえ、そんな事は無い筈ですが・・・この時間は一応、貸切の間ですのぞ」

「気の所為だろう？　そもそも先ほど綾瀬夕映に聞いた話では女共は先に風呂に入ったと言っていたぞ」

「どうやら丁度この昼過ぎの時間は露天風呂が貸切の時間だったようだ。」

大方昼まで爆睡していたサイとエヴァが起きたのを見計らって貸切にでもしたのだろう。

それに・・・実は詠春自身もサイとある話をしたかったが故に露天を貸切にしたと言っ意図もあった。

「どうやらタイミングが悪く明日菜達はそれを聞き損なって今の状況になってしまったのだ。」

「ちょ・・・ど、どうするのよ、この状況!？」

「うーん、入り口の方にサイ君やお父様が居るから出れへんし・・・で、何でエヴァちゃんが一緒に入ってるん？」

「こ、このちゃん、そんなに身を乗り出したら見つかってしまします!　と、とにかく此処はサイさん達が出るのを待ちましよう・・・」

三人は岩の後ろで小声でこのままやり過ごす事を決める。

その選択がかってエヴァが彼女達に対して言った言葉・・・『抱くのが恋愛感情ならばサイの重荷にしかならん』と言っ言葉の意味を知る事になるとはこの時は知らずに

「うおおお!？　凄え、空が見える!!　しかも広え!!　おい見ろよキティ、風呂の中で泳げるぞ!」



「・・・そうか解った、解ったから湯船で泳ぐな・・・はあ、ヤレヤレ・・・」

「ははは・・・どうやらサイ君はお気に召してくれたようで私としても嬉しいよ」

・・・そんな浮かれたような言葉がサイの露天風呂に初めて入った際の第一声であった。

プールばりに湯船に飛び込むサイを見ながらエヴァは呆れたように溜息をついた・・・内心『サイの奴にも可愛い所があるではないか』などと思いつつながら。

一方、そんな二人を微笑ましげな表情で詠春は見つめている・・・此処に自分の娘とその友人が裸同然で隠れているなどと知ったら、どれだけ取り乱すであろうか解らないが。

暫く湯船で泳いで満足したのかサイは壁に寄り掛かりながら一息吐く。

その表情は実に極楽気分だと言うのが裕に解る程に緩みきっていたのは言うまでも無い。

と言っても、有事の時には直ぐに動けるように完全に気を抜ききつては居ないようだ・・・風呂と言うのは誰もが一番気を抜く場所だ、故にそう言う場所で襲い掛かって来ようとする者も居無くは無い。

戦いと言う物が終わっても、サイはどうやらそう簡単に気を抜けない人物なのだろう　その様子は『まるで職業軍人が傭兵のようだ』と思いつつ詠春はサイを見つめていた。

と、ふとそこで詠春がサイとエヴァに対して深々と頭を下げる。

大々的な決戦の前にも同じように深々と頭を下げていたが・・・今度はその時より更に万感の想いを込めてだ。

「改めてこんな場所で恐縮だが礼を言わせて貰うよ。

ありがとう　　サイ君、それにエヴァンジェリン、君達のお陰で人的被害は殆ど出ないで済んだ。

関西呪術協会に巢食っていた問題を解いてくれ・・・それに君達は私の大事な娘を、そして同じように娘のように思っていた刹那君の間にあつた問題を解決してくれて更にその命まで助けてくれた。どれだけ感謝をしてもし切れない程だよ」

それに対してサイは笑いながら彼らしい答えを返す。

「オイオイ、木乃香の親父さんよ。

んな恐縮して礼なんてする必要なんてこれっぽっちもねえさ・・・俺は唯、自分のやるべき事をやってその結果が誰も犠牲が出なかつたっただけだ。

それに傷が殆ど無かつたのも俺がやった訳じゃねえよ、木乃香が全部治しちまつたんだからな」

「私もサイと同じ意見だ、詠春。

だから頭を上げる、組織の長がそんなに易々と頭を下げるな馬鹿者が」

この二人はどうやら礼を言われたりするるのが苦手なのだろう。

そんな心内をぶつきら棒な物言いの端々から理解出来た詠春は微笑みながら頭を上げる。

其処で少しの沈黙が訪れた。

三人とも良い湯加減の為に気持ち良くなり、ボーっとしていたのだろう。

そこでふと、サイが口を開く。

「なあ、木乃香の親父さんよ……一つ聞いて良いか？」

「詠春で良いですよ……お聞きしたいと言うのは刹那君の事ですか？」

その言葉にサイは『……まあな』と答える。

すると詠春は少しだけ悲しげな表情をしながら言葉を紡いだ。

「……彼女の生い立ちについてはある程度ご存知ですね？ ならば其処は省きましょう。

ある事情で両親を亡くされまして、両方の親類から爪弾きにされて居た所を私達が引き取ったのです。

実は彼女には言っていないませんが……刹那君の父親は私の昔からの友人でしてね、『もし自分達に何かがあったら娘の事を頼む』と頼まれていたのですよ」

まるでその姿は懺悔をする咎人のようだ。

自分の父親が詠春の友人であり、そのような言伝を頼まれていたなどと言う事を知らなかった刹那は驚いたような表情をしていた。

「本当ならば娘として引き取る心算だったのですが

当時の私は長と言えども新任故に多くの事に追われてしまい、刹那君を半妖だと言う事で快く思わなかった者達が私の与り知らぬ所で勝手に神鳴流の弟子と言う事で手続きしてしまったのです。

……まあ、結局の所は私の不甲斐無さが刹那君を拒絶させる切欠を作ったと同じ事です」

そう……本来なら刹那は木乃香の義理の姉妹のような形で今以上に幸せな人生を送っていただろう。

しかしその“現実”が人生をがらっと変え、関西呪術協会から拒絶されると言う今を作り出してしまった。

言うなればかつての刹那を形作つたのは詠春自身・・・その事を詠春はずっと申し訳なく思っていたのだ。

「・・・後悔をしても何も変わらねえよ」

不意に今まで黙って言葉を聞いていたサイが口を開く。

最初の頃の愚直なまでに木乃香を護ろうとしていた刹那の姿を見た際にサイはその姿にかつての自分を見た。

自分もまた、偶然の悪戯によりいつ死んでもおかしくない様な少年時代を送り・・・生き残る為に迷い、足掻く中で多くの命を奪って生きてきた。

故に、だからこそ・・・刹那にかつての自分を重ね合わせたのだから。

「詠春さんよ・・・アンタがまだ過去の事を後悔してるんなら今からでも遅くはねえよ。」

今からだって良いじゃねえか　刹那の奴の父親になつてやつたつて。

孤独つてのは人間の心を確実に蝕む・・・アイツは今までずっと一人だったんだ、だったらこれからでも良いからアイツの家族になつてやれよ」

『・・・失つてから後悔しても遅えんだからよ』

そんなほんの小さな呟きを聞き取れたのは、サイの横に居たエヴァ位だろう。

「ええ・・・そうですね。」

遅くなんか無い　木乃香も刹那君も、私にとっては大事な“娘

”なんですからね」

岩に隠れながらその言葉を聞いていた刹那。

その双眼からは苦しみや悲しみから流れ落ちるのではない涙が頬を伝っていた。

家族を失い、人間からも烏族からも否定され・・・それでも得た“木乃香を護る”と言う居場所。

自らの正体がばれて否定される事を恐れ、自ら拒絶し続けて影から木乃香を見守り続けてきた今までのことが全て報われるかのような言葉を長自身の口から聞いた。

・・・それだけで刹那にとっては充分だったのだ。

「ありがとうサイ君・・・。

君は言葉遣いは乱暴だが、誰よりも大事な事を知っていると云う事だね」

サイの物言いは乱暴で、不躰で、無作法で・・・。

彼の心内を外面だけで考えて、内面を理解出来ない人間ならば真っ先に嫌悪するようなタイプだ。

しかしその言葉の端々に上辺の物だけではない重みを感じ取った詠春は言葉を続ける。

「それに話を改めて試みて君は魔法使いや陰陽術、人外などと言う枠組みに囚われる事の無い人物だ。

外面や風評ではなく自分の目で見た事や自分の耳で聞いた事を信じ、信じた事を貫く為にならどんな困難でも笑って跳ね除ける・・・その風のように自由な生き方と信念がエヴァンジェリンや刹那君を救ったのかも知れませんね。

ふふふ、君を見ていると私の親友であった“ある馬鹿”を思

い出しますよ」

詠春の言葉にエヴァの脳裏には一人の男の姿が浮かんだ。

まあ、詠春は“その男”の親友だったのだから・・・初めてエヴァがサイと出会った時の様に重ねて見てしまう物だろう。

「そんな君のような人物が、新たな時代には必要なのかもしれん・・・」

ブツブツと独り言を呟く詠春。

急にそんな様子になった詠春を不思議に思ったのか首を傾げるサイとエヴァ。

そして嬉し涙を流し終わった刹那に自分の事のように喜んでいた明日菜と木乃香・・・。

そんな彼等が一瞬で驚いて大量に噴出すような爆弾発言を顔を上げた詠春は呟いた。

「サイ君！！もし君が良ければだが・・・木乃香の婿となって皆を導いてはくれないか？」

「・・・はっ？」「・・・何？」

『『『なに

ッ！？』『』『

詠春の爆弾発言にサイとエヴァは呆気に取られ、隠れていた明日菜達三人は思わず大量に噴出して隠れているのが危うくばれる所であった。

「いやいや・・・何で俺よ？」

それに先に言っておくが俺はこんなナリしてるが少なくとも木乃香

達より歳は上だぞ？

しかも俺は身元も過去も不明で、更に半妖だぜ？ 無理だっつうに、俺より適任ってのが居るだろうが」

サイは詠春の言葉を冗談だと思って誤魔化そうとする。

ちなみにサイは言わないがこんなナリをしてエヴァよりも年上だ（記憶が正しいなら約七百歳以上）。

すると詠春は発言が冗談ではないと言う事を証明するかのように真面目な表情で続けた。

「サイ君、木乃香や刹那君と親しいようだから聞いているかもしれないが……。」

実は私の義父（学園長こと近右衛門の事）の趣味で木乃香は多くの見合いをさせられている。それこそ肩書きだけは人一倍の男達だ」

「……あんの腐れジジイ、まだんな事してやがったのか。

こりゃやはり、数少ねえ髪の毛を一本残らず筆り取ってやらなきや解らねえようだなあ……。」

「……サイ、せめて少しは口を濁せ」

物騒な事を口走っているサイと冷静に突っ込むエヴァ。

そんな二人を尻目に詠春は真剣な表情のまま言葉が続けていた。

「木乃香はまだ中学生とは言え、後数年で大人になる。

このままつまらない男に愛娘を渡す位なら、私自身が認めてあの子が想う相手が良い。

……その想う相手というのは恐らく君だろう、木乃香の態度を見ていれば解るよ」





ヴァだけは何とも表現し辛い顔をしている。

当の本人サイは詠春が真剣だと言う事を察す。

すると・・・サイも今までのように冗談などで誤魔化すのではなく、真剣な表情となって答えを返した。

「詠春さんよ、悪いな・・・俺は木乃香とは結婚する事は出来ねえよ」

「・・・不満でもあるのかい？」

詠春の言葉にサイは空を見上げながらどこか遠い目で言葉を返す。

「いや・・・木乃香のような奴だったら誰も不満なんぞ言わねえだろうよ。」

アイツと結婚出来ねえってのは俺の方の問題さ　アイツが何一つ悪いって訳じゃねえって事だけは間違いねえさ」

『では、一体何故？』・・・。

そう聞こうとした詠春はふと、サイの遠くを見つめるような眼を見て自然と言葉を嚙む。

すると　サイはエヴァ以外が予想だにしなかった答えを返した。

「だが悪いが俺、結婚はしてねえが・・・それに近い関係の女が居るんでな」

その言葉が紡がれた瞬間、一瞬エヴァとサイ以外の人物の時が止まった。

「え・・・？　き、君・・・結婚に近い関係って・・・」



話しながら天を見上げるサイ。

その表情がどこか空虚に見えた詠春だったが、気の所為だと思いい言葉に耳を傾け続ける。

「一方、未だにショックから抜け出せない少女三人は口々に呟く。

『嘘でしょ……ど、どどどど、同棲って!？』

あ、あれ？ で、でもおかしいわよ？ サイって彼女が居るような素振りを一度も見せた事ないし……そもそも美空ちゃんのお勤め先の教会で暮らしてるんじゃないかなかったっけ?』

『た……確かに……前に住んでいる所を聞かれた時にそう言っていたような……このちゃん?』

『あ……えつ……? う、うん……確かそんな事を……』

サイが言っている事に辻褄が合わないと感じた明日菜と刹那。

だがもう一人の木乃香の耳には二人の言葉は良く入らず、先ほどと打って変わって呆然とした表情になっていた。

……この状況の中で唯一人、サイの横に居るエヴァだけはばつが悪そうに背を向けて湯船に鼻から下を埋めていた。

「いや……それはまた、なんと行って良いのやら。

全くそう言う素振りも、そう言う風にも見えなかったから慌ててしまったよ……。

式は挙げていないと言っていましたけど、ではお子さんはもう居るんですか?」

それは当然の疑問とも言えるものだろう。

結婚と言う形は取らないにしても、子を宿して家族として生きてい

る者も大勢居る・・・そもそも、己の悪友とも言える人物も表立って式を挙げる事の出来ない人物と結ばれ、子も授かっている。だからこそこの質問は深い意味は無く、軽い気持ちでの事だった

それが更に衝撃的な告白を生むとも知らずに。

サイは静かに首を横に振ると・・・。

「居ねえよ・・・少し前にムジナとは死に別れちまったからな」

「!?!?」『『『!?!?!?!?』』』「・・・」

その言葉が紡がれた瞬間、詠春や明日菜達は言葉を失う。

そこで詠春は理解した　　サイのあの遠くを見るような空虚な眼の意味を。

「死んで居なくなっちゃった今でも俺はアイツの事を愛してる。アイツが生きてる頃は・・・皆が生きてる頃は、何時でも共にいるのが当たり前だと思ってた。

俺は馬鹿野郎だからな、何時だって大切なモンを失ってから初めて大事だったって気付くんだ・・・当の昔に涙も枯れ果てちまったよ」

一度言葉を切ると、小さく溜息を吐いてから再びサイは口を開く。

「だからムジナを俺が愛している限り、俺は誰も愛する事なんてねえさ。

それが理由だ　　悪いな、詠春さんよ」

サイは静かに頭を下げると、詠春は申し訳無さそうな顔をしながら微笑み首を横に振った。

失う事の苦しみや悲しみを誰よりも知り、そして誰よりも多くの友を失っている・・・そんな多くの後悔や絶望を越えて来たが故にサ

イは大切なモノを失わない様にと厳しい言葉を使って諭すのだ。そして、その苦しみを知らなかったとは言え偶然に垣間見たからこそ・・・エヴァはサイの友と言う関係を選んだのである。愛して貰うのではなく、共に歩める関係　　言い方を変えれば“家族”と言うような絆を育む事を。

其処からは誰も口を開かずに気まずい雰囲気沈黙が流れる。

詠春はそれ以上の事を聞こうとせず、サイもそれ以上の事を語りもせず・・・エヴァが先に出たのを切欠に互いにそのまま頃合を見て風呂から出て行く。

そこで岩陰に隠れていた明日菜達が顔を出す　　やはり長湯の所為で顔は少し赤くなつてはいたが、3人ともサイの告白にショックだったのか誰も言葉を発する事は無かった。

失う事の悲しみ、苦しみ・・・。

知っていたが故の言葉の重みが刹那を救ったといつても過言ではない。

そして刹那は前にエヴァが言った言葉の意味をここで漸く理解するに到ったのだ。

『抱く想いが恋愛感情ならばサイの重荷にしかならん』

過去を知つてしまい、大切な者を涙が枯れ果てる程に失つて苦しんだ事をエヴァを理解していたが故に。

己の抱く想い、親友の想い、応援したいという思いと自分の気持ち。事情を知っていたエヴァへの嫉妬、色々な思いや考えが交差する中で知ったサイの過去の一部。

その中で死して尚、愛する人を想うサイの気持ちを知ったが故に・・・己も木乃香も想いを伝える術も無かった。

明日菜の場合は誰かを真剣に愛した事は無い。

確かにタカミチ・Ｔ・高畑という己の憧れる存在はいるが・・・それは親愛であって真摯な愛ではない。

心から異性を愛するという想い、そしてそれを失くした喪失感

その全ての内のほんの些細な量の感情をサイの姿から、その空虚な眼から感じて明日菜は胸の奥底に小さな痛みを感じた。

そして。

「・・・木乃香、アンタ・・・」

その言葉に刹那が木乃香の方を振り返る。

其処に呆然とした表情で居た木乃香の双眼からは一筋の涙が頬を伝わって落ちていた。

「この・・・ちゃん・・・」

唯呆然と・・・それでいて止め処無く瞳から流れ落ちる涙。

最初の内は理解出来ていなかったが、明日菜と刹那の二人に注目されて漸く己が涙を流している事に気が付いた木乃香は慌てて涙を拭くと笑う。

「あ、あれ・・・何でウチ、泣いとるんやろか・・・ははは・・・」

しかし、拭えど拭えど涙は流れ続ける。

無理矢理に明るく振舞い誤魔化そうとするも　その姿は誰が見ても無理していて痛々しかった。

「い、いややわ〜二人とも・・・な、何でもあらへんってでもウチ、驚いたわ〜・・・さ、サイ君・・・サイ君が、そんなに大好きな人が・・・い、居るやなんてね？」

あゝあ、ウチって格好悪いな〜・・・こ、告白もせんと・・・ぐすつ・・・ふ、振られて、もうたんやからな〜・・・うつ・・・ぐすつ・・・」

我慢しようとも、耐えようとも、無理に笑おうとも・・・零れ落ちる涙は止まりはしない。

親友に諭されて己の気持ちに気付き、それを親友達の前で口にした事によって彼女は決意を新たにした。

己のサイに対する想いを、これから頑張ると口にした木乃香。

だが、元より“これから”などと言う未来は無かったのだ。

サイは今、己の心内に隠して生きていた思いを口にした・・・木乃香と一緒にいる事は無い、と。

始まるうとした少女の淡い恋は、その矢先に終焉を迎える。

そのシヨックに、己の不甲斐無さに、切ない程の心の痛み木乃香の頭は真っ白になってしまっていた。

「うつ・・・うつうつ・・・」

あは、あはは・・・何でやるな〜、涙が・・・涙が止まらんわ〜・・・ひ、ひっく・・・うつうつ・・・」

まるで迷い児のように、泣きながらも心配を掛けまいとして懸命に笑おうとする木乃香。

その姿を見ていた明日菜は

「・・・木乃香!！」

木乃香の肩を抱きしめる。

もう見てはいられなかった・・・優しいが故に、他人に迷惑を掛けまいとする親友の姿を。

「このちゃん・・・もうええ、もうええんや・・・泣いても、ええんよ・・・」

同じように後ろから木乃香の肩を抱く刹那。

本当ならば刹那もまた木乃香のように泣きたかった　しかし、己の想いを心の奥底に仕舞いこんで絶対に泣かずに堪え続ける。

「うつ・・・うつうつ・・・えぐつ・・・うわあああん!！」

生まれて初めて人を恋し、そして失恋し、今は唯々親友達の腕の中で木乃香は心から泣いた。

サイ自身はまさか己の告白を聞かれているとは思っても居なかったが・・・風呂上りの明日菜達とは少し気まずい雰囲気となってしまうのであった・・・。

そして修学旅行の最終日へと日は進む。

サイは風呂から出た後の明日菜達の態度やネギの何かに悩んでいるかのような姿が気に掛かり、居心地が悪くなったのか旅館に帰る事にした・・・勿論、言うまでも無くエヴァと茶々丸とザジも着いて来た。

まあ元々身元や正体が良く解らない半妖が呪術師の総本山に居るというのもつまらない想像を抱かせてしまい、詠春に迷惑が掛かる可



能性も考慮した上の行動だが。

ちなみにあの大乱戦の事後処理は詠春がしてくれる事となった。本当ならば愛娘を救い、その親友達を救い、更に関西呪術教会・・・ひいては京都そのものを救ってくれたサイ達の事も説明する心算だったのだが、サイ達自身がそれを辞退した為に真相は当事者達だけが知る事となったのだ。  
・・・元々サイ達は賞賛されたり、英雄扱いされる為に巨悪を倒した訳ではないからである。

「ふむ・・・この餡蜜は中々美味だ。  
やはりジジイに無理を言って魔法を封印して貰ってこちらに来て正解だったな」

サイとエヴァ、茶々丸にザジは茶店に寄って本格和菓子に舌鼓を打っている。

・・・と言っても基本的に食べているのはエヴァとザジだけであり、茶々丸はエヴァの横に寄り添い、サイは自動販売機から缶コーヒーを買って来て飲んでいたが。

「しかしサイ、良かったのか？」

「あん？ 何がだよキティ？」

一気にコーヒーを飲み干して二本目を買うに行こうとした所を声を掛けられ振り向くサイ。

エヴァは餡蜜の三杯目を店員に注文し終わった後に言葉を続ける。

「いや、お前は確か綾瀬夕映やら宮崎のどかやら早乙女ハルナやらに誘われていたのではないのか？」

ナギの奴の隠れ家に今日坊や達が行くからその付き添いで」

そう、確かにサイは上記の三人に『ネギの父親の居た別荘に行くから一緒に行かないか?』と誘われていた。

だがサイ自身はそれを辞退して最終日はエヴァ達に労を労うの感謝を込めて付き合っただのである。

・・・それに話をしておかなければならない事もあった。

「いや、元々俺はネギの親父とやらの興味ねえしな。

アイツが知らねえ親父の事を俺が知った所で意味もねえだろ・・・おまけに連中の態度が何だか余所余所しくてよ、気まずかったから付き合うのを止めただけさ。

それ以上に他意はねえよ・・・そもそもお前の方こそ昔の男だろ、見に行かなくて良かったのか?」

サイの言葉にエヴァは三杯目の餡蜜を優雅に食べながら答える。

「馬鹿者、余計な気を回さんでも良い。

それに坊やから奴が生きていると前に聞いた、それで充分だ。更に昔の男などではない、かなり昔に惚れてただけだ・・・今はもう、何とも思っただけおらん」

少しだけ言葉に間が空いたが、確かにもう既にエヴァはナギの事は何とも思っていない。

考えても見ればかつての時もまた、危ない所を助けてくれたという感謝の念と人から拒絶されていた己に気にせず語り掛けてくれたという事が好意となったのだろう。

だが今はもう、共に歩いて生きたいと本気で願う相手に会う事が出来た・・・ならばその想いを大事に歩いていけば言いだけの事である。

「……………(じい〜)」

そんなサイをみたらし団子を食べ終わったザジが見つめている。

『じゃあこれから如何するの?』……喋っては居ないが、そんな言葉を物語っているようだ。

「……まあ、取り合えずシャークティとココネの土産でも買いに  
行くさ。」

その前に茶々丸、ちと手の甲を見せて貰っても良いか? 元々此処  
に來た理由のもう一つがそれだからよ」

その言葉に『はい、畏まりましたサイさん』と茶々丸は言うど手の  
甲を見せる。

其処にはエヴァが見に覚えの無い、それで居てどこかで見た事のある  
ような紋章が刻まれていた。

どうやら亀のような動物に蛇が絡まっているかのような姿を現した  
紋章のようだか……。

「間違いねえなこりゃ……玄武の紋章だ。」

しかもこの紋章から放たれてる法力を感じるに半魂獣が刻んでる代  
物じゃねえ……完全な魂獣、しかも機人種の奴だな……」

「機人種……?」

機人種……聞きなれない言葉が出てきた為聞き返すエヴァと茶  
々丸。

サイは二人にその説明を始める。

「機人種ってのは人間で言う黒人や白人……要は人種みたいなモ  
ンだ。」

十の種族に分かれてたって言っても、それは簡単に言えば“属性”

毎の種族の事・・・言い変えるなら“種属”って所だな。  
その属性ごとに分かれた種属の中でもいくつかの種類があつてよ、  
その内の一つが“機人種”だ」

サイの説明を補足すると種属毎の人種には人獣種、獣人種、鳥人種、  
龍人種、魔人種、機人種、鬼人種の七つに大別されている。

その中でも比較的希少な種が魔人種、機人種、鬼人種の三つだ・  
・その内の一つに茶々丸が大別されるとは流石のサイでも想像が付  
かなかつたのか、珍しく驚いたような表情をしていた。  
だが、その表情が急に真面目なものとなると言葉を続ける。

「・・・恐らくだが、茶々丸は俺と触れ合う機会が多かつたからな。  
本来、魔力とやらを動力源に動いてるんだろ？　そこに俺自身の法  
力が融合して何らかの変化を起こしたんだ・・・更にタナトリアと  
の戦いの際に一度死に掛けたつて言つてたよな？

多分その所為で体内に融合して蓄積されていた法力が変異を起こし、  
本来は魂獣変生スピリッツ・フェノメノンをしなければ変わる事の無かつた肉体変化を齎した  
んだ。

済まん　完全に魂獣と化した存在を元に戻す方法はねえ、メル  
トの奴が居れば何とか出来たかも知れねえが・・・」

そう、これはまさに“変異”と言うものだろう。

本来はガイノイドであつた茶々丸は、タナトリアとの戦いの際に瀕  
死の状態となり・・・其処から復活した際に既に魂獣と化していた。  
それも明日菜のように半魂獣ではなく、完全なもの　つまり、  
もう二度と元には戻れなくなつてしまつたのだ。

しかし、頭を下げて謝罪するサイに対して茶々丸は首を横に振りな  
がら返す。

「良いんです、頭を上げてくださいサイさん。」

あのタナトリアと言う方と戦った際、瀕死となって消え逝く意識の中で生きたいと望んだのは他の誰でもない私自身の意思です。それにこの力があれば、マスターだけにご負担をお掛けする事無くサイさんをお助け出来ますから・・・だから謝らないで下さい」

茶々丸は後悔などしていない。

寧ろ、サイやエヴァやザジのように魂獣界の怪物達と戦える力を得た事を喜んでいた。

あの戦いの中で彼女は己の心の中に居る人物の存在に気が付けたのだから。

「フツ、馬鹿者・・・サイ、余り舐めるなよ？」

私も茶々丸も、お前と共に行くを決めた時から既に覚悟など決めている。

そんなつまらん事を一々何度も口走らせるな　ほれ、さっさと土産でも買いに行くぞ」

そう言うと背を向けてさっさと歩き始めるエヴァ。

その後ろにはサイに一度頭を下げてから茶々丸が付いて行く

その背を見つめていると、横からザジがサイの上着をつまんでクイクイと引っ張る。

「・・・私、も・・・一緒・・・」

か細い声で呟くと、腕を組んでサイを引っ張るザジ。

そんな三人の様子を見たサイは、小さく鼻を鳴らすと誰にも聞えないように呟いた。

「（・・・強えな、女って奴はよ。」

ムジナ・・・メルト、ルーグ、デヒテラ、ロック、ダレス、カヌキ、

アガート、ミツキ、ユーナ、ボルト、キリク、ギギ      どうかで見てるか？

別の世界に来て、独りぼつちだと思ってたが・・・馬鹿だよな俺はお前等のような新しい仲間、そして新しい家族のような奴等をこの世界でも見つけられたぜ。

そっちに帰る方法はまだ解らねえし、必ず帰る心算だが・・・俺はもう暫くこの世界で生きてみようと思う。

・・・許して、くれるよな？」

記憶を失っていたが故に日々を楽しみながら生きていたサイ。だが、徐々にその記憶は戻り始め・・・知らぬ世界に放り込まれたという事実が多くを失ったサイの心に一抹の寂しさと言う感情を与えた。

しかし・・・己は一人ではない。

自分を助け、家族のように接してくれるシャークティやココネに美空。

そしてこんなにも気心の知れた親友が居る      それだけでもこの世界に居る価値はある。

「おい、何時までレディを待たせる心算だサイ~~~~!!」

そんなエヴァの声が聞えるとサイは苦笑した。

ザジに引つ張られながら『今行くから待ってる!!』と言葉を返す。

そして寂しさを捨てると、今は新たな世界で出来た親友達との時間を楽しむ事にしたのであった。

第四十八話：別離（わかれ）ても好きな人（後書き）

更新完了です^^

つて、あるうえええ？　今回で京都編終わりませんでした・・・。  
いや、一応今回で終わらせる心算だったんですが、伸びちゃいまし  
て・・・。

では今度こそ次回で京都編は終結します^^  
次回をどうぞお楽しみに

注）補足なども次回書きますので

## 第四十九話：帰郷、そして日常へ

サイ達が土産物屋に向かったと丁度時を同じくしたその日の午後

待ち合わせをしていた近衛詠春と合流したネギ達は、かつてネギの父であるナギの使っていた別荘のある場所に連れられて来ていた。

メンバーはネギに明日菜、刹那に木乃香、のどかに夕映にパールと七人。

しかし・・・のどかと夕映とパール以外、つまり本来なら明るいであろう連中と自分の父親を探す手がかりを少しは知れるかもしれないので元気である筈のネギが実に暗い表情で其処にはいた。

・・・その理由は明日菜達の場合は前回のサイの独白、ネギの場合は天ヶ崎千草の言葉によるのだが、それを知らぬ詠春やのどか・夕映・パールの三人にとってはしきりに首を捻るだけである。

「さて、着きましたよ・・・此処です」

ネギ達が元気の無い理由は理解出来ないが、取り合えず歩き続けている場所であち止まる詠春。

その言葉に元気の無かった明日菜達や、その逆に元気一杯なのどか達が詠春の示す先を見た　其処には草木の生い茂った合間から見える、まるで秘密基地か何かのようなお洒落な建物が顔を見せていたのだ。

「10年ほどの歳月の間に草木が茂ってしまいましたが、中は綺麗なものですよ。」

「さあどうぞネギ君、それにお嬢さん方」



その言葉に歩き出すのどか達。  
ネギも、そして明日菜達も雰囲気は暗いままだったが・・・取り合えず、気を取り直して建物の中に入る。

「わ　　！！

凄い、本が沢山あるね〜！！　それに外見は秘密基地みたいだったけど、中はすつごくくお洒落だわ。

何ていうの・・・そう、モダンって言うか何ていうか・・・」

意外にも色恋沙汰の話や同人誌を書く事だけでは無く、読書も趣味なパル。

周囲に置いてあるかなりの数の本の束にのどかと夕映も目を輝かせていた。

「彼が最後に訪れた時のままに保存しています。  
宜しければご自由に見て頂いて良いですよ　ただし、故人の物ですので余り本などは手荒に扱わないで下さいね」

そう言われるや否や、のどか達は本棚にある本を取りに行く。  
元々、此処には魔法関係の本が大量にあるのだが・・・パツと見や余程の語学力が無ければ読めない本が殆どなので自由にさせているのである。

勿論ネギも父親の手がかりを探す為に階段を登っていったが・・・  
明日菜ら三人はソファーに俯いたまま座り込んでいた。

それが気になる詠春だが、落ち込む理由が解らずにどう声を掛けて良いのか解らない。

落ち込んでいる三人にどう声を掛けるべきかと考えながら視線を動かしている・・・丁度、二階で調べ物をしながら溜息を付いているネギの姿が見えたのであった。

「……はあ……」

「如何しましたネギ君、溜息なんて吐いて？」

ゆっくりと階段を登ってきた詠春に優しく声を掛けられるネギ。

知らず知らずの内に溜息が出ていた事に気付かなかったネギは、声を掛けて来た詠春を誤魔化すように言葉を返した。

「あつ……え、えつと……な、何でもないんです！！」

そ、そうだ……凄いですね此処は！！ 見たい物や調べたい物が  
沢山あって……じ、時間がもつとあれば沢山見られるんですけど  
！！」

その慌てたような早口の言い様に詠春は何かを感じるが……。

例え十歳の少年（本当は少女）であれ、話したくない事も無くは無  
いだらうと結論付けて微笑みながら答える。

「ハハハ……良ければいつでも来て良いですよ、此処の鍵はお渡  
ししますので。」

それにナギも自分の息子に見られるんだったら文句も言わないでし  
ようから……いや、息子ではなく“娘”でしたね」

最後の方の言葉はネギにしか聞えない程の小さな声。

言葉の意味を聞いて理解して、ネギは頭の中が真っ白になり慌てて  
否定しようとするが……。

「……知っていますよ、貴方の母親の事も隠さなければならぬ  
理由も良く。」

そもそもナギは私の親友ですよ？ 生まれた子供がどっちかなんて、

近しい人間なのでから知っていて当然です。  
多分、ナギの戦友達なら皆知っている事ですよ  
唯一人を除いて、ね」

最後の方の言葉は何処が寂しげな表情する詠春だが、直ぐに何時もの朗らかな表情に戻った。

そう、よくよく考えてみれば詠春はナギの親友だと言っていたのならば知っていても別におかしい事ではないだろう・・・落ち着きを取り戻したネギはそこで詠春に尋ねる。

「あの・・・長さん。」

父さんの・・・父さんの事を聞かせて頂いても良いですか？」

そのネギの言葉に対して詠春は一瞬、考えるような素振りを見せる。だが直ぐに表情を戻すと、優しく答えた。

「・・・ええ、良いですよ。」

私の知っている限りのナギの事とその後の情報しかありませんが、それで宜しいのであればお話ししましょう」

そう言うと詠春は下に声を飛ばす。

・・・彼女たちにも知っておいて貰うべきなのだから。

「このか、刹那君・・・それに明日菜君もこっちへ。

貴女達にも色々と話しておいた方が良いでしょうから」

何の話かは解らないが、取り敢えず俯いていた明日菜達は詠春の元へと向かう。

・・・その後ろを静かに着いて行く人影が二人居た事を、明日菜達

は気付いてはいなかった。

詠春に案内されるままに着いて行くネギと落ち込み娘三人組（＋）  
。一番上の階、一番奥の部屋まで案内されると・・・周囲の桜が良く見える、実に風景の良い小部屋だった。どうやら此処はナギがこの別荘で良く入り浸っていた、言うなれば彼の“自室”といった所だろう。

その部屋にネギ達が入った後、徐に詠春はテーブルの上にあった写真立てをネギ達に差し出す。其処には赤毛のヤンチャそうな笑顔を見せる中学生位の少年、無表情な小学生ほどの年頃の少年、眼鏡をかけた黒服の青年に魔法使いのローブのような物を纏った青年、更に大きな剣を肩に担ぐ大男と啞えタバコをしている人物が映っていた。

「長さん、この写真は・・・？」

ネギが写真を見ながら尋ねる。

詠春は優しげな笑みを湛えたままに答えた。

「サウザンドマスター・・・つまりネギ君、貴方の父上とその戦友達です。」

今から二十年前になりますかね　　ちなみに黒服が当時の私、そして私の隣にいるのが15歳の頃のナギですよ」

その言葉にネギは写真を見つめる。

周囲にいた明日菜達もネギの父親と言うのがどんな人物なのか興味

があつたのか、俯いていた頭を上げるとネギの持つ写真立てを同じように見つめた。

ネギの父親であるサウザンドマスター……確かにその面影は実にネギと似ていた。

前記したようにヤンチャ坊主のような不敵な笑みを浮かべているのは違うようではあるのだが

「……父さん……」

そんな父親の姿、威風堂々とした様子を見て嬉しそうな表情をするネギ。

詠春はこれがナギが十五歳の頃の姿だと言っていた……ならば、歳を重ねればあの“嵐の日に会った人物”のような外見になるだろう。

すると 写真立てを見つめているその後ろから詠春は静かに語りだす。

「私は今から何十年も前に起こったかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。

……そして二十年前に平和が戻った時、彼は数々の活躍から英雄・サウザンドマスターと呼ばれるようになったのです。

まあ、本人は英雄と呼ばれる事を余り喜んでは居ませんでしたけどね……」

そこでネギは『……えっ?』と呟きを返す。

幼き頃に姉のような存在であつたネカネや、多くの大人達から『貴方の父親は魔法世界の英雄だ』と聞かされてきたネギにとつて、英雄だと称えられる事を喜ばないという事に疑問を持ったのだ。

『立派な魔法使い』や『千の魔法の男』などと褒め称えられ、知ら

ない人間も殆ど居ないような立派な人物だというのに……。  
……詠春はネギの疑問に対して返答する。

「ネギ君の疑問は解ります……何故、ナギが『英雄』と呼ばれる事を快く思っていないかったか。

それは……私達は“戦争”と言う現実の中で英雄などと呼ばれてしまったからです」

その言葉の意味を解らないネギ、そして明日菜達は考えるように首を捻る。

どのような状況であろうと、どのような場所であろうと英雄と呼ばれる事に何の躊躇があるというのか？

……だが、その答えはそう言った“現実”を見た事のある者しか理解出来ないものだった。

「ハハハ、少し今のネギ君や木乃香達には難しいかもしれませんが、話を続けましょうか　私達が戦った大戦では多くの人々がその命を落としました。

天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています……彼女の苛烈とも言える行動や西洋魔術師への恨みと言うものが今回の騒動の原因なのでしよう。

……いや、ある意味では彼女の苦悩や絶望を理解せずに居た私こそが今回の騒動の原因なのかもしれません」

まるで懺悔をするように呟く詠春。

別に今回の事は彼が悪い訳ではない……それに彼は長として両親を失った千草を関西呪術協会に引き取って何年もの間面倒を見続けていた、寧ろ『良くやった』と言われても良いだろう。

しかし……部下の心内を理解出来ていなかった事、そして何故そんな風になる前に助ける事が出来なかったのかと言う後悔の念が詠

春に己を責めさせていた。

「・・・此処でもし、サイが居れば『テメエを責めたって何にもならねえよ』などと言ったのかもしれないが。」

「やれやれ・・・直ぐに話の腰を折ってしまうのは私の悪い癖ですね。」

二十年前に終結した大戦以降、ナギと私は無二の友であったと思います。しかし、彼は今から十年前に突然姿を消しました・・・」

そこで一度言葉を切る詠春。

その表情は実に寂しげで、実に悲しげにしている。

「彼の最後の足取りや彼がどうなったのかを知る者はいません。」

ただし公式の記録では1993年に死亡しているという事になっています。それ以上の事は私にも解りません。

「・・・すいません、ネギ君」

申し訳無さそうに頭を下げる詠春にネギは慌てて首を横に振りながら言う。

「い、いえ、そんな・・・ありがとうございます。」

少しでも父さんの姿や、父さんの事を聞けただけでも充分ですよ・・・」

そう呟いたネギはゆっくりと外を眺める。

その眼が少しだけ遠い眼をしていた事を知る者は其処には居なかった・・・。

少しの間、遠い目をして窓から見える光景を見つめていたネギ。物思いに耽るのも充分過ぎる程の時間だったのか、詠春の方を振り向くと持っていた写真立てを差し出しながら礼を言う。

その目が少しだけ赤く潤んでいた事は追及するべきではないだろう。

「あつ、これも有難う御座いました長さん。

父さんのボクと左程変わらない頃の姿を見ただけでも来た甲斐がありましたよ」

それはネギなりの気遣いだ。

本来ならばまだ父親に甘えていても文句は言えないような年頃である少年（少女）にとって、10年間会っていない父親の足取りを知れる可能性があるのと知った事がどれだけ嬉しい事だろうか？

・・・そしてそれが叶わなかった事がどれだけの落胆を与えただろうか？

それは計り知れない物だろう事は想像する必要も無い。

だが・・・それでもネギはそれを表に見せる事は無い。

誰かを責める事も無く前を向いている　まさに『優等生』と言う言葉が合い過ぎるような性格なのだから。　まさに『優等生』と言

本当ならばそうでは無い筈なのに、歳相応な態度でも良い筈なのに・・・ネギの過去に起こった“惨劇”がある意味、違った意味でネギ自身を歪めてしまったのだ。

・・・そんな歪みに気付ける者など、殆ど居ないだろう。

「ネギ君・・・」

ネギが表立って本当の本心をひた隠しにしている事は詠春にも解った。



だが、それに対して己に出来る事も何も無いと言つ事も理解していたが故に齒痒くも思っていた。  
そして写真立てを受け取るうとしたまさにその時の事だ。

「あああああ！！？ 此処に居たんすかネギの兄貴いいい！！

ひどいじゃねえかよ、オレっちをのけ者にしてえええええ！！ それでどうなったんすか、木乃香の姉さんと親書は守れたんすか！？」

いきなり聞こえてきたのは、のけ者にされたが故に泣きながら向かつて来た力モの声だ。

そう・・・彼と朝倉は本来ならばこの場所に居て当然なのだが、サイの逆鱗に触れた事によつて最終日まで部屋の中で怯えていたのである。

・・・その間に京都の騒乱はすべて終わってしまったのだが。

「わ、わあああ！？ か、力モくん！？ び、びっくりさせないでよおおおお！？」

驚いて力モの声のした方向を見るネギ。

その瞬間、後ろで『ガチャン！！』と言う、何かが割れるような音が鳴り響いた

「・・・えっ！？」

「あっ・・・」

「あああああああああ！？」

「ちよ、ちよつとアンタ！？ 何やってんのよネギ！？」

慌ててネギが音のした場所を確認しようとして振り向きなおす。

そこで見た物とは いきなり力モに声を掛けられた事により驚き、床に落ちてしまった無残な写真立ての姿であった・・・。

「あつ・・・あああああああ！？」  
え、えと、えとえとえとえとえと・・・」「ごうごうごう、ごめんなさいいいいい！！！」

ネギの父、サウザンドマスターとその仲間達の写真の入った写真立ては目の前で輝だらけになってしまっている。

その事実にはネギは完全に頭の中が真っ白になってパニックになってしまい、涙を浮かべながらおろおろしながら必死に謝っていた。

すると詠春は涙ぐみながら頭を下げているネギの頭に手を添えて撫でてから視線を合わせるように座り込むと優しく言う。

「頭を上げてください、ネギ君。」

形あるものは理由は色々であれいつかは壊れてしまうものです・・・やった事を素直に謝罪出来るのであればそれ以上責める心算はありませんし、自分を責める必要もありません。

それに中の写真は無事なようですから、写真立てさえ新しいものに替えれば問題ないですとも」

そう言うと輝の入ってしまった写真立てから傷を付けないようにゆつくりと写真を引き出す。

破片は後で掃除すれば問題はないだろう・・・そう思ったその時、不意に持ち上げたナギと仲間達の写真の裏から“もう一枚の写真”がひらひらと宙を舞い、ネギの足元に落ちた。

「えっ・・・これは・・・？」

詠春に宥められて泣き止んだネギは、足元に落ちてきた写真を拾い上げる。

どうやらこの写真、ナギ達の写真の裏に入っていた物のようだ・・・

何故、そんな所に隠してあったのだろうか？

「これは父さんと・・・誰だろうか？」

写真を見つめていたネギの疑問を持ったような呟きに周囲に居た者達が写真を覗き込む。

その写真には赤毛の少年ともう一人、白いフードと全身を覆い隠すマントのようなコートを羽織った人物が写っていた。

しかも先ほどのナギと仲間達の写っていた写真の時の不適な笑顔とは違い、本当に年相応の少年の笑顔を見せながら全身フードの人物に飛び乗って肩車されているという・・・さっきの写真とは全く違うものだ。

「・・・！？こ、この写真は・・・」

ずいぶん古ぼけた写真のようで、どうやら先ほどの写真より前に撮られたものようだ。

しかし・・・写真を見た瞬間に詠春は驚き、その後どことなく懐かしそうに写真に写る人物を見つめている。

「お父様、誰なんこのフードの人？」

ネギ君のお父さんも随分懐いてる人みたいに見えるんやけど・・・さっきの写真の中には居てへんかったよね？」

木乃香が代表して詠春にフードの人物の事を尋ねる。

すると、一瞬だけだが話す事を躊躇するような素振りを見せた後に詠春は語りだした。

フードの人物が誰なのか、そして何故ナギ達の集合写真の方には載っていないのか・・・語られた事は、魔法世界に関わりを少しでも持つ者にとっては驚きの内容であった・・・。

「……ええ。」

彼は私達誰もが信頼し、そして何よりナギが最も心を許した戦友です。

どんな時でも決して諦めず、どんな逆境に立たされても笑って乗り越えてきた……ある意味、私達よりも称えられるべき『英雄』でしょう。

最も本人は自分を英雄だなんて認めないでしょうし、世間も認めないでしょうが……私達は彼と共に戦えた事を今でも誇りに思っています」

そこで一度、物思いに耽るように目を瞑る詠春。

ほんの少しの間に沈黙が流れ……その沈黙を破るようにその人物が語られた。

「彼は仲間内であつても己の名を語る事はしませんでした。

……いや、と言うよりも寧ろ酷く自分のことを自己嫌悪しているようにも見えてましたね……ガイスト（悪霊）と言う偽名を名乗つてました。

それに白き死神、亡国の怨霊、無限の死、災厄の魔獣……そんな忌み名を付けられる事は多かつた方です。

しかし私達は彼のその強さと精錬された武から、ナギと併せてこう呼んでいました」

もう一度訪れる静寂

いや、ある意味ではネギとカモは頭の中に特徴のみを聞いてその人物の最も使われていた忌み名が浮かんだ。

それは……。

「『サウザンド・アームズ千の刃を司る者』 ガイストと・・・」

それは、魔法世界に少しでも身を置いていた者ならば知らない者など居ない。

今世紀最高にして、唯一人の人物に掛けられるには余りにも多過ぎる最大の懸賞金『5000万ドル（）』を掛けられた・・・第一級国家反逆罪の大罪人。

『千の悪夢』 『千の血を纏う修羅』とまで呼ばれた裏切り者であり、英雄とは相反した場所に居る人物の名。  
死して尚、その存在に恐怖する者が後を絶たないとされる存在の事であった・・・。

（日本円なら約50億強、魔法世界で言えば小国の国家予算に匹敵する金額

その頃

京都にて土産の買出しを終わらせたサイ達は、それぞれ帰りの時間まで自由を謳歌していた。

エヴァは相も変わらず茶店に入り浸って抹茶と大量の和菓子に舌鼓を打つ。

どうやら後にエヴァ自身が語った事だが、彼女の場合はサイと触れ合って法力によって体質が変化したらしい。

満月の夜ではなく、さらに力を封じられている現在であっても『食事』と言う方法で魔力の回復が可能になったのだ。

・・・まあ、と言っても普通の成人男性の5倍以上食わなければ回復もヘツタクレもないのだが。

茶々丸は基本的に今までと同じくエヴァに寄り添って控えている。ちなみにどうやら彼女自身、サイの法力によって性質変化した為か食事を取れるようになり、しかもそこからエネルギーを摂取する事が可能となった。

と言つても、エヴァと同じく（寧ろそれ以上に）普通の人間では到底想像出来ない程の量を摂取しなければならない・・・今後のエヴァ達のエンゲル係数の急上昇が実に心配である。

ザジは集合時間が来るまでの間、ホテル近くの公園で鳥達と戯れていた。

後に聞いた話によると・・・彼女は実は夜魔に近い存在の長である母親、そしてその母が愛した旧世界の天聖族である“神族”の若き“黄金神”と呼ばれる青年を父に持つ存在であったそうだ。（つまりザジは皇魔族と天聖族という別種族間の魂獣<sup>スピリッツ</sup>ハーフ）サイの過去を知っていたのは、その夜魔としての力がサイの力を感じ取った事により偶然垣間見てしまったのだそうである。

そしてサイはと言つと

「はあ・・・何で俺がこんな事に・・・」

溜息を吐きながらサイは麻帆良に帰る前に最後のすべき用事を果たす為に関西呪術協会の総本山に戻って来ていた。

本来ならば先に済ましておくべき用事であったのだが、明日菜達が余所余所しい事で居た堪れなくなり、先にエヴァ達とシャークティとココネへの土産を買いに行ったのである。

その買い物も済み、一段落した所で集合時間までまだ時間があつたと言つ事で班を解散したと言つ事だ。

ちなみにサイは別に総本山への長い階段で疲れて溜息を吐いた訳ではない。

寧ろ疲れたのは此処に来る以前の問題・・・ある放つて置かれた人物がへそを曲げてしまい、その機嫌を直して貰う為に共に来た姿が余りにも周囲の一般人からすれば奇異に見えた事で余計な神経を使つた故である。

その理由とは・・・。

『良いじゃないですか〜サイさん

だって私今まで皆さんにずううっと放つて置かれて寂しかったんですから!!!

そ〜れ〜に〜、私つて男性の方と一緒に歩いた事がないですし

放つて置いたお詫びに何でも言う事を聞いてくれるって言ったじゃないですか〜』

「クツ・・・た、確かに言ったが・・・」

そう・・・その理由とは、サイの今の様子にあった。

実は先のドウマンとの戦いの時にその存在を忘れられてしまったさよが拗ねてしまい、その機嫌を直して貰う為にサイが尊い犠牲となつてしまったのである。

此処で一つ想像して見よう　中学生かもしくはそれよりも少し上に見える外見の少年が、可愛らしい洋服を着せられたウサギの形に話しかけている光景を・・・その時点で他人からはどう見られるだろうか？

『ねえねえお母さん、あのお兄ちゃんお人形さんに話しかけてるよ？』

『シッ、見ちゃいけません!!!　あれは『大きいお友達』と言って

とつても危険な生き物なの、近寄っちゃだめよ』

嗚呼、こんな親子の会話を此処に来るまでの間に何度聞いたか。念の為に今着ている服に付いたフードを被っているので、明確に顔は判らないにせよだ。

しかも完全に濡れ衣なのだからより一層性質が悪いのに併せ、サイは『漢は一度口にした事を曲げない』と言う考えを持っている故に、一度『何でも言う事を聞く』と言ってしまった手前、ほっぽり出す訳にも行かない。

まあ、そんなこんなでサイは総本山に来るまでの間で既に要らん神経を使つて疲れていた……。

(尚、意味は解っていないが何となく誤解されているのは理解しているらしい)

『所でサイさん、此処に何の用事があるんですか？』

さよがチャチャゼロのようにサイの頭の上によじ登ってから尋ねる。確かに端から見れば頭の上にウサギの人形が乗っている男児の姿は実にシニールなものだ。

サイはそんな事を尋ねてくるさよに小さく呟いて言葉を返した。

「……こつち(京都)に居る間に済ませなきゃならねえ野暮用だ。本当ならもつと早く済ませる心算だったが　まあ色々あつて後になつちまつたんでよ」

そう言うとサイは総本山の入り口から堂々と入り、本殿の近くにある建物の扉の前に立った。

すると、優しく頭の上に居たさよを下ろしてから言う。



「悪いな、さよ。」

此処から先は話をする相手が居るからよ、黙っていてくれ・・・後  
でまたゆっくりと話しに付き合っつてやるからよ、頼む」

頭を下げながら真剣に言う物言いに何かを感じたのかさよは人形の  
首を縦に動かした後に自分からサイの鞆の中に入っていく。

さよは実に空気が読める心優しい少女のようだ・・・それに先ほど  
までは我侂を言っていたが、孤独から自分を救ってくれたサイの頼  
みならば早々嫌とは言わないだろう。

鞆に入り込んだのを確認した後、サイはそれを背負ってゆっくりと  
扉を開けて建物の中に入っつて行った・・・。

室内に入っつて目に付いたのは、静かに寝息を立てている一人の少年・  
・・・いや、少女の姿。

本来ならこんなに簡単に包帯が取れる筈も無く、絶対安静であつた  
筈だが・・・サイが出血を止めて応急処置をしておいた事、それに  
詠春付きの治療師達が治療した事。

・・・更に覚醒した木乃香の魔力の余波によつて回復力が普通より  
活性化した事、そして持ち前の獣人の驚異的な傷の治療力といった  
事柄全てが少女を助けたと言えるだろう。

「・・・よう、気分は如何だ小太郎？」

そんな風に口を開くサイ。

勿論、目の前に居る少女・・・小太郎は目を覚ましてなど居ない。

治療に携わつた者の話では之ほどまでに傷の回復が早い事、後遺症  
すら一切残らずに再び今まで通りで居られるだろうと言つ事・・・

この二つがどちらも欠けていないと言つのは奇跡だと言つていた。

ただし、今まで受けてきた処遇を垣間見て暫くは心も身体も休息が

必要だと言う事で少女は今、呪術にて眠らされている。だが・・・サイはそんな状態であることなど関係なく、約束である『全てを終わらせたという事』を報告に来ていた。

「全部、終わったぜ。」

もうこれで、テメエは泣く必要なんか一つもねえ・・・テメエの思うように、テメエの意思で、テメエの好きなように生きて良いんだ・・・。

もう我慢すんな、泣きたい時に思いつきり泣いて笑いたい時に思いつきり笑え　　「

少女を縛っていた呪縛はもう解けた。

これから先も彼女の生まれ故に苦しむ事もあるだろう・・・だが、それでも・・・。

「そして夢を抱きしめろ。」

どんな時でも、自分自身の誇りを手放すな・・・誇りを持って生き続ける。

それでももし、挫けそうになったら　　その時は俺を呼べ、何時だってテメエの帰れる居場所になってやる」

そう言い終るとサイは背を向けた。

その背はこの修学旅行に来た最初の時に比べて格段に大きく、そして誇り高く見える。

信念を貫き通す漢の背中　　サイの背中は物言わずともその事を物語っていた。

そして

ゆっくりと扉が閉められた後、眠っていた筈の小太郎の双眼から一筋の涙が流れていた事を気付けた者は誰も居なかった。

「ハイ、皆さん。」

この後私達は麻帆良学園に到着後に学園駅にて解散、各自帰宅となります。

皆さん、修学旅行は楽しかったですか〜〜」

・・・まるで幼稚園児に語りかけるかのようにしずな先生の声が響き、生徒達は馬鹿の一つ覚えのようにはしゃぐ。

まあ、この連中は元々、はしゃぐのが大好きな連中ゆえ仕方が無いのだが・・・そんな中で冷静に周囲を見ながら溜息を吐く者も何人かいた。

「・・・幼稚園かつーの」

「・・・何だか良く解らんが色んな意味でお前も大変だな、千雨」

宥めるかのように肩に手を置いてしみじみ呟くサイ。

この二人、少し前から大分仲が良くなり・・・今では喧嘩仲間です  
- Aの中でも数少ないツツコミ要員となっていた。

「まあな・・・お前はまだ、半年位しか付き合っただけから知らねえだろうが・・・」

あの連中が調子に乗ってくるとこの程度じゃ済まねえぞ・・・私は唯、平穩に中学時代を送りたいだけだったつうのに・・・」

「・・・諦める、多分あの連中が周囲に居たら平穩なんてのは無理だ。

まあそれに・・・楽しいかどうかって尋ねられれば、少なくとも俺は極めて遺憾だがYesと答えられる方だからよ」

『本気かよ……』などと呟きつつ顔を上げてサイの方を見、途端に固まる千雨。

何せしみじみと自分を宥める様な事を言っていた、数少ない3-Aの突っ込み役の一人にして己の理解者とも言える人物が頭の上にウサギの人形を恥ずかしがりもせずに乗せている光景が映ったのだから。

……その瞬間、見てはいけないものを見てしまったかのように千雨は顔を背けつつ呟く。

「そ、そうか……よ、良かったなサイ。

い、いいいいい、いや、楽しかったようで何よりだ……わ、私は悪いが急用を……」

「待てコラ……なんかお前、激烈な勘違いしてるだろ。

先に言っておく……これには海より深い程の訳があるんだ、好き好んで乗せてる訳じゃねえ」

「いや待て、何だ海より深い訳って!？」

いい歳こいた男が頭の上に人形乗せてどんな理由があんだこのバカ!!!

てか離せ、私をそっちの世界に巻き込むんじゃねええええええ!!  
!?!?」

そんな感じで暴れる千雨と肩を押さえるサイ。

いつもは殆ど誰にも心を開かず、関らない様になっていると言つのに。

……本当にサイとの絡みでだけは素を出しているようだ。

……尚、この後にサイから『罰ゲームで乗せている』という言葉  
を聴かされて取り敢えずは落ち着いたようだ。

一方、そんな様子とは打って変わり

父親であるナギのかつて使っていた別荘から帰って来た後のネギは実に落ち込んだような、思いつめたような表情をし、その近くに居た明日菜も何かを思い出すようにしながら目尻を拭っていた。

何せ、本来ならば失恋のショックで落ち込んでいた筈の木乃香や刹那がこの二人の様子を見て、空気で空回りでありながら先ほどまで一生懸命二人を勇気付けようとしていたのだから。

「ね、ネギ君残念やったね・・・結局、ネギ君のお父さんの行方は解らへんかったし・・・」

「で、でも元気を出してください！！　いつか必ず手がかりは見つかりますよ！！」

だが、ネギは二人の言葉に首を横に振りながら元気なく答える。  
実はネギが元気がないのは、父親の事が解らなかつたからではない・・・その証拠に、ネギは手に持っている大きな包みのようなものを見せながら二人に言葉を返す。

「・・・いえ、違うんです・・・」

実は皆さんが先に出て行った後・・・もう少し長さんと話しをする事が出来て・・・それで手がかりも貰えたんです・・・だから、そうじゃないんですよ・・・ごめんなさい・・・」

そう、ネギが落ち込んでいるのはそう言った理由という訳ではない。彼が・・・彼女が落ち込んでいる理由、それは詠春に聞かされた衝撃の事実が原因だった。

それは正義の味方、立派な魔法使いなどという存在を目指す者。

それは悪を倒し正義を貫こうとする事を己の生きる意味として此処

まで来たネギにとって、思っても見なかった衝撃の事実。

それは

何よりも正義の味方だと思っていた父の最も信頼していた人物が

その人物が、悪と断ぜられる存在である“暗殺者”であったという事実だった。

京都での戦いは此処に幕を閉じ、また明日から新たな一日が始まる。今回の短くも密度の濃い戦いの中で九尾の少年は一回り成長し、魔法使いの少女は理の矛盾世界の現実を知った。それがこれから彼らに待つ道行きに一体どのような影響を与えるのか・・・それはまだ誰にも解らない。

だが今はあえてこの先や多くの謎を語るは止そう。戦いを終えた戦士達にしばしの安息を、苦悩を背負った戦乙女達に思考の時を

疲れから眠りに付く少年少女に、しばしの安らぎを。まるで揺り籠を揺らすかのように、サイ達を乗せた新幹線は麻帆良学園に向かって静かに進んでいくのであった。

そして。

『・・・!?!?』

お、長!! 長!! 長!! ー大事でございます!!!!!!!!!!』

総本山から一人の少女が姿を消したのも、サイ達が帰ると同時であった。。。

第四十九話：帰郷、そして日常へ（後書き）

投稿完了いたしました^^

いやいや、秘密がいくつか解るとか前回書いたのに・・・寧ろ秘密が多くなってしまいましたねえ。

今回にて長かった京都編は終わりとなり、いくつかの話を挟んでから学園祭編へとつながります。

ちなみに最後の少女、誰だかは説明する必要はないですよ

では、次回に物語は続きます・・・皆様、良いクリスマスをお過ごしください^^



## 第五十話 異なる世界の真ん中で

サイ達が京都から麻帆良に帰って来た丁度その頃  
この世界とは違う、別の次元の世界の外界の良く見える美しい風景  
の丘に場面は移った。

其処には地に何本もの刃が突き立てられている。

その刃の下には色取り取りの花が咲き乱れ、一見物々しくも見える  
殺風景な場所を飾っていたのだ。

例えるならばそう、多くの花そのものが大地を作っているかのよう  
に……。

「……結局、兄様は来られませんでしたね」

そんな可愛らしい少女の声が響く。

花で覆われたこの丘には何人かの人影が見て取れる。

「約束をした訳でも、待ち合わせをした訳でも無いですけど……。  
今日此処に来れば皆様に会えると思っていました……兄様にも

」

「……モエギ様、私もそうです。

この日の為に私は……いいえ、私達は此処に集まりましたから……。

ヒデヤス様、ヒデタダ様も……」

モエギと呼ばれた少女の横に寄り添うようにしてそう呟く碧髪の眼  
鏡の少女。

更にその横には巨大な体躯の鎧武者のような人物、小柄の少年武者

のような人物も頷く。

更にその後ろには忍者のような様相の少女や長身の女性、鬼のような外見の少年、背に羽を生やした少女、小柄の獣人の少女まで居る。

此処に集まっているのは、この異なる世界である『魂獣界』の中でも重役と呼べる者たちばかりだ。

かつてこの世界で星の命運を左右する程の脅威が巻き起こり、その中で自ら達が生きる現実を守る為に命を賭け、最後には成し遂げた・  
・ある意味でこの世界の“英雄”と呼ばれる者達。

最初の少女が現魂獣大帝であるモエギ。

その横に居た碧髪の眼鏡の少女が魂獣大帝補佐兼護衛役であるアサギ。

巨躯の鎧武者が隠神刑部の長の側近の一人にして弟のヒデヤス、その隣の少年が同じく長側近にしてその弟のヒデタダだ。

「実に早いものよ　あの大戦から十年もの歳月が流れたかヒデタダ？」

「はい兄上・・・此処の様子は全く変わりませんね、何時来ても美しくって・・・姉上達や父上達、あの方々が眠っているだなんて思えません」

ヒデヤス、ヒデタダが目線の先にある多くの大地に突き立てられた刃を見ながら共に呟く。

そう、此処は墓所なのだ・・・かつての大戦でその命を散らせた、誇り高き武士達<sup>モノウラ</sup>が安らかに眠りにについている安住の地。

誰かが提案した訳ではないが、亡き英霊達の魂に冥福を祈るのは“星の未来を勝ち取った”この日が良いとして、皆忙しい中を合間を縫ってこの場所に來ていた。

しかし本来ならば大切な仲間や大事な恋人が眠っているこの場所には先客が居るはずだったのだ。

いつも誰よりも真つ先にこの場所に来て、冥福を祈っている人物が居ないのを疑問に思っている者は多かつた。

「しかし実に解せん・・・我すら此処に来たというのに、奴が来ないというのがな」

少し離れた場所で大樹に寄り掛かり腕を組みながら呟くのは、隠神刑部が現長であるノブヤス。

モエギ、ヒデヤス、ヒデタダ達の一番上の兄であり・・・本来、誰よりも先にこの場所に来る筈であつた漢とは何度も命を賭けて戦つた最大の好敵手ライバルの一人だ。

「いや、ノブヤス様も義理深い方つすね。」

そもそも下手をすれば他の誰よりもお忙しいんでしょうのに態々・・・でも確かにおかしいですよ、あの朴念仁で鈍感馬鹿が此処に来ないなんて何かあつたのにかにや〜？」

この馴れ馴れしく、しかも口の悪い少女の名はマガツ。

こう見えて隠密集団組織『異駕忍軍』を率いる長の称号たる『超忍』を冠する人物である。

どうやら此処に来ていない人物の事をボロクソにこき下ろしているようだ・・・本気で心配しているようだ。

何せ十年の間、一度も欠かす事無く来ていた人物が今更この日を忘れるなどという事はありえない。

「ねえ、ライヤ〜？」

アンタなら何か知ってんじゃないの？　うちで調べられないんじゃない、アנטアン所ぐらいでしか調べられないっしょ？」

マガツに声を掛けられた長身の女性はゆっくりと首を横に振ってから口を開く。

この女性の名はライヤ・・・かつてこの世界に存在した『天空審判』と呼ばれる人物から名を継いだ二代目の『大審判長』である女性。世界の情勢に目や耳を傾け、公正に審判を下す事を目的とする存在であり・・・隠密集団に匹敵するほどに情勢に詳しい存在でもある。

「残念ながら私の元には何も・・・もしかして彼に何かあったのでは？」

そう言いながらも自分の言葉に疑問を持つライヤ。

そもそも考えても見れば、彼に勝てる人物や仇成せる人物など手の指で数える程程度しか居ないだろう。

「有り得んな　　奴は父を倒し、我と互角に渡り合い、そして我らが認められた漢だ。

それに残存する対抗勢力や帝政府へのレジスタンス達の被害や動向は我らが全て把握している。

・・・大体奴に、“サイの奴”に何かがあったというのならば森羅万象全てが大騒ぎとなるだろう」

そう、此処に来る筈の人物とはサイの事だ。

長年幾度もサイと刃を交えたノブヤスには良く解る・・・サイは例え神具を封印していたとしても、そう簡単にくたばるような人物ではないと。

しかし、そう考えれば今此処に来ていない事への理由が理解出来ないのだ。

「じゃあ・・・じゃあ何故サイ兄様は来られないのでしょうか・・・？」

サイ兄様がムジナ姉様の・・・皆様の所に来られないなんて考えられません・・・」

悲しげにそう言うモエギ。

元々彼女はムジナの事もサイの事も慕っていた・・・故に10年前にサイに魂獣大帝の座を譲られた時、少しでもその座にふさわしい人物になれるように努力していた。

そして十年の歳月が流れた今、魂獣大帝として相応しくなれたかをサイには見て欲しかったのだ。

「・・・もしかして、その考えられない事が起きてしまったのでは、なのだ？」

そんな風に独特の物言いで語るのは獣人の少女。

この人物は先のライヤの側近にして右腕である『副審判長』のネネコ。

口調と外見は幼い少女のようだが、その実力は魂獣界の種族達の長に匹敵する強さを兼ね備えている。

「うん、ネネコの言葉も理解出来ないよ。

だって僕達・・・死ぬなんて考えられない人達が死んじゃうのを何度も見てきたじゃないか・・・」

そう悲しげに呟くのはネネコと同じくライヤの側近であるハリマ。

『千里眼のハリマ』と呼ばれる人物にして、異駕忍軍が認める最高クラスの情報官である。

更にその横に居た翼の少女も口を開いた。

「そうねハリマ・・・でも私、出来る事をする。

だって私達、まだサイさんには居なくなつて欲しくは無いもの・・・

この世界もやつと呪縛から解かれたつてのに……」

少女の名はヒビキ。

ハリマの同僚にして『響天声のヒビキ』と呼ばれ、同じく異駕忍軍が認める最高クラスの伝達官だ。

この二人によつて審判組織は異駕忍軍に匹敵する情報収集能力を持っていると言える。

其処にいる者達全てが行方不明になったサイを心配し、探そうとしてくれている。

それこそ、サイという人物が多く苦難や苦悩を乗り越えて多くの信頼を勝ち取つた証だろう。

それぞれの者達がサイを探す為の方法を模索する為に帰路に着く。

そんな中で唯一人、墓所の前に残っていたマガツは小さく言葉を呟いた。

「ムジナ……まだアタシ達、アンタ達の居る場所にサイを連れて行きたくないの。」

「ただど安心しなよ、次に此処に来る時は絶対にサイの奴を連れて来るからさ……ふん縛つてでもね」

ルীগ、デヒテラ、ロツク、ミツキ、アガート、ダレス、カヌキ、メルト、ボルト、ユーナ、キリク、ギギ……アンタ達、ムジナに寂しい思いさせたら承知しないわよ？」

そこで一度言葉を切るマガツ。

ゆっくりと視線を奥の方に向けると……口を開いた。

「イツナ様、イエヤス様、タダカツ様、お師匠様……」

サイの事は任せて下さい、今度はアタシ達がサイの力になる番です

から」

頭を下げながらそう呟くと、その場を後にするマガツ。

こうして世界を隔てたその先で、彼らはサイとの再会へ向け  
て動き出したのであった。

まあ、その道が未だ前途多難なのは言うまでも無いが……。

さて、再び次元を越えた世界に場面は移る。

修学旅行から帰って来たその日にサイとエヴァはシャークティに迎  
えられて学園長の元へと向かった。

学園長の元に着いたサイとエヴァは、事情を詠春から聞いていた学  
園長に京都や孫娘や孫娘と同じように可愛い生徒達を助けて貰った  
事に労いと感謝の意を表し、それに見合うだけのバイト料を支払う。

その際に用件は終わったとして去ろうとした時にふと学園長が声を  
掛けた。

「さて……所でサイ君や、君は今後どうするかね？」

色々な話を聞いて考えてみたが、お主は未だに記憶が完全には戻っ  
ておらんのかな？」

なれば無理に麻帆良学園に居らずとも、記憶を取り戻す為に留まら  
ずとも構わぬぞ……まあ、ワシの本心としては木乃香やネギ君を  
見守っていてほしいがのう」

するとサイはその問い掛けに一度目を瞑って何かを悩むような素振  
りをする。

それが約5分間ほど続いただろうか……ゆっくりと目を開くと、

サイは学園長に言葉を飛ばす。

「・・・そーだな、まあ取り敢えずはもう少し教会に厄介になって身の振り方を考えるとするぜジジイ。

幸い、貰った金額はそこそこ多いし・・・シャークテイ達に世話にばっかなってる訳にも行かねえし、其処から先の事を考える時間も十分にあるだろうぜ」

そう自分の考えを学園長に伝えるとサイは他に用事もないようだったので部屋を出て行く。

サイは貰ったバイト料をシャークテイに預け、其処から生活費を引いてもらって教会で暫く生活する事を決めた。

まあ、いくつかの技術や失われた記憶のピースを取り戻す事に成功はしたが・・・結局、何故自分がこの世界に居るのかという部分に対しては全くと言って良いほどに何も思い出せては居ない。

ならば焦る必要などなく、その記憶が戻ってから身の振り方を決めても良からう　そして内心、サイはこの世界の事が気に入り始めていたという思いもあった。

勿論、向こうの世界には戻りたいと願う。

あの世界にはその部分の記憶が戻らない為に理由は不明だが、安らかに眠る大切な仲間達や恋人が居る。

そんな仲間達に次元を隔てた世界で会った家族のような新たな仲間達の事や、起こった多くの驚きの物語を語ってやりたいと願っている。

そんな感情同士の板ばさみの中で、サイは少しの迷いも持っていたのだ・・・。

それに



「ああ、そう言えば今日は・・・全く、今頃連中はどうしてるのかねえ・・・」

「えっ？ 今日がどうしたんですか、サイさん？」

「サイ・・・何力、今日はあつタノ？」

久しぶり（大体一週間ぶり）に夕食の席を並べているサイとシャークティにココネ。

彼女達は京都であつた出来事や、実は麻帆良から離れると自身の能力に制限がついてしまう事などを聞いた時はかなり慌てていたが、サイも美空も無事に帰つて来たと言う事で一応安堵はしていた。

・・・と言つても、京都でかなり無茶をしてまた傷が増えた事を語つた時はシャークティには本気で心配されて『汝を愛するが如く汝の隣人を愛せよ』などと言うありがたいご高説と共に説教を受け、ココネには涙ぐまれていたが。

（それでも自分の生き方や考え方はそう簡単には変わらないであろう・・・）

「いや、悪い悪い・・・何でもねえよ、どうやら京都の事があつて呆けてたようだわ。」

（・・・キティの奴がシャークティには俺の過去を大まかに説明したてくれたらしいとは言え、さすがに気を使わせたくなえしな）

サイのその態度にシャークティは微笑みながら『そうですか』と言だけ返す。

本当は何か理由がある事は見抜いていたが、それでもシャークティは何も言わずにいつもの通り接してくれる・・・実に出来た、良い女性だ。

もしくは　サイの黄昏ているかのようなその目を見て、彼の過去と関係する・・・しかも“悲しい事柄”に関連した日だったのだらうと気付いていたのかもしれない。

そう、今日は・・・魂獣界でかつて起こった大戦が終結した日。それは即ち、サイの心から愛した人物であるムジナが死んだ日であり・・・心から信頼した戦友達の命日だ。

戦争の事は漠然としか思い出せないが、少なくとも戦友達の命日であると言ふ事だけは変えられない事実であった。

本来ならこの日は戦友達の墓に行き、自らの身の上話を語るのだが・・・今は静かに冥福のみを祈る。

この世界にもし最初に現れた時に記憶があつたなら間違ひなくサイは帰るための方法を探し回って麻帆良を出ていただろうが、今ではこの世界で見る事や聞く事、知る事何もが新鮮だ。

故に・・・彼はもう少しこの新たな己の生きていた世界とは違う世界を見る事を選んだのである。

向こうに帰る方法が見つかった時、この世界で起こった多くの事柄を思い出として持ち帰り・・・胸を張ってムジナや仲間達に会う為に・・・。

それをシャークティヤココネ、美空に語った時は少しだけ寂しそうだが嬉しそうな表情をしていた。

「・・・悪いな、つう事でもう暫く世話になる。これから宜しくな、シャークティヤココネ!!」

「フッフ、こちらも宜しくお願いしますねサイさん」

「・・・ウン、宜しく・・・サイ・・・」

改めて共に生活する為に挨拶をする三人。

少しの間とは言え、共に教会で過ごした時間は確実に三人の絆を強

くしていた。

「イヤイヤ、サイ君・・・私は無視っすか・・・。  
一応、私も京都の時は他の人を誤魔化すのに散々苦労してたのに・・・  
しかも正体ばれる覚悟で戦ったのに、そりゃあんまりっすよ」

その言葉に振り返ると、其処には美空が落ち込んで床に『のの字』  
を書いていた。

そう　本編では殆どサイやエヴァ達ばかりにスポットが当たっ  
てはいたが、何気に美空も戦っていたのだ。

・・・とは言っても、彼女の場合はシャークティから正体がばれな  
いようにと言われている為か表立って正体を現す訳には行かなかっ  
た。

実はあの戦いの最中

3-Aの生徒達が宿泊するホテル・嵐山に向かって結界を抜けた不  
死者達が迫っていた。

それをいち早く気付いた美空は密かにホテルを抜け出して生徒達の  
泊まるホテルを守っていたのである。

・・・まあ、実際の所は結界からはみ出ってしまった半死状態の連中  
の足止めをしていただけだが・・・それでもサイに会う前の美空な  
ら、そんな化け物が迫っていたとしたら真っ先に魔法先生達に助け  
を求めていただろう。

相手の強さも解らずに戦いを挑むのは勇気ではなく蛮勇。

しかし・・・それが誰かを守りたいという確固たる意思を持って戦  
うのであれば、それはれっきとした勇気だ。

ある意味、サイとの出会いでエヴァの次に大きく変わった人物はも  
しかして美空なのかもしれない。

「何言つてんだ美空？」

サイがそう言うと美空は怪訝そうな表情でサイの方を見た。すると、サイは不敵で意地悪そうないつもの笑顔を見せると当然のように言い放つ。

「お前と俺はとっくの昔にダチだろ？」

いまさらこんなこっ恥ずかしい事をいちいち言わせるんじゃないやねえよ、この馬鹿」

勿論、その言葉に美空が喜んだのは言うまでもないだろう。

次元を超えたその先で絆を紡ぐサイ。

かつて失った事を忘れる心算も、許しを請う筋合いも彼には無い……。

そう自分で心に深く刻み込んでいる故だ。

だが……世界を超越したその先で彼は再び仲間や家族と呼べるような者達に出会えた。

故に心の奥底に誓う　これから己の生まれた別次元の世界に帰る方法が何時になったら解るのかは解らない、だが己が自分の意思で帰ると選ぶ事になるその時まで護ると誓った者達を絶対に護り続ける。

それまでは……この世界の事をもっと良く知って行こうと。

そして彼は知らない

かつての戦友達が、好敵手達が、サイの為に再び動き始めたという事を。

更にこの後すぐ、この教会に居候がもう一人増える事になる事をサイどころかシャーケティ達すら気付いていなかった。

一方その頃、同じ学園内の敷地にて。

一つの部屋に集まった少年少女達は皆一概に暗い表情をして溜息を吐いている。

いきなり自らの住む部屋に来て、そんな辛気臭い表情を見せられているこの部屋の主は……。

「……オイ貴様ら。」

聞いているか聞いていないかは知らんが……人の部屋にやってきた拳句、何時まで無言で黙っている？

その辛気臭い空気をさっさと何とかせんか、この馬鹿者共が」

この部屋の主であるエヴァが声を掛けるも無言で黙って溜息を吐く少年少女達。

まあ今更説明する必要も無いかもしれないが、落ち込んでいるのはネギと明日菜、木乃香、刹那の四人。

少女三人は修学旅行最後の方のサイの独白を聞いてその衝撃でサイとどう接したら良いのか解らず悩んでいる。

そしてネギの方は修学旅行の中で聞かされた善悪の矛盾、更に尊敬する父の最も慕っていた人物が魔法界で大悪と断ぜられる人物であったという事にショックを受けて悩んでいたのだ。

「……やれやれ。」

おい茶々丸、この連中に紅茶でも出してやれ……このまま辛気臭い面で頂垂れられていても適わん。

さよ、お前はキッチン奥の菓子があるから持ってきて適当にこの連中に食わせておけ」

「ハイ、畏まりましたマスター」  
『は、いい、判りました』

そう言われて奥に向かう茶々丸とウサギの人形姿のさよ。

さよは部屋が無いという事でエヴァの家人居候していた・・・しかもタダで居候するというのは本人の気が咎めたのか、自分出来る事の手伝いはする心算のようだ。

ちなみに本来ならばさよの新しい身体（エヴァ作）が既に完成している筈であったが、久しぶりの作品にエヴァは嵌りに嵌ってしまい、持てる技術の全てを結集してボディを作っている為かまだ完成はしていない。

その為、現在ではさよは修学旅行に行く際に使用していたウサギの人形の中に入りっ放し出会った・・・何気に気に入っているらしいが。

（尚、ウサギの人形が自分で勝手に動いている姿をネギ達が見た際、悲鳴を上げたらしい・・・）

『・・・アン？ 何ダマダ頂垂レテンノカ、ガキ共ハ？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ペニっ）」

すると奥からチャチャゼロとザジが出て来た。

ザジの服の汚れやら何やらを垣間見ると、どうやら今までチャチャゼロと修行でもしていたのである。

ちなみに彼女も確固たる己の意思の元、強くなる為にエヴァの家に居候させてもらっていた。

そんな家主＋従者＋居候達の視線に居た堪れなくなったのか、明日菜が口を開く。

「うっ・・・だ、だって私達・・・」

「・・・だつてもへチマも無い。  
何があつたのか私に話してみる、相談に乗れる事ならば取り敢えず  
相談に乗ってやる」

サイとの邂逅で実に面倒見の良い姉貴肌な性格となつたエヴァは落  
ち込んでいる理由を問う。

このまま塞ぎこんだまま居られてもこちらも辛気臭くなつてしまふ  
と言う思いもあつたのだが、それでも相談に乗れる事なら相談に乗  
ってやるうと考えたのだ。

・・・其処から語られた悩みは、エヴァの予想だにしなかつた事だ  
つたのだが。

「え、えつとね・・・実はエヴァちゃん・・・。

実は私達・・・あの、その・・・エヴァちゃんとサイと木乃香のお  
父さんが京都の露天風呂でしてた話、聞いちゃつたの・・・」

「・・・何？」

京都の露天風呂で話していた話・・・そのフレーズで想像出来るの  
は一つしかない。

そこでエヴァはあの日、サイが『今誰か入っていないか？』と  
尋ねた理由を理解する　　サイは露天風呂に入った時点で微弱な  
明日菜達の気配を感じ取っていたのだ。

「それで結局、サイとは顔が合わせ辛くなつちゃつて・・・。  
その後も何も話せないまま別れちゃつて、どうしたら良いのか解ら  
ないのよ」

あの日のサイの独白は明日菜達に衝撃を今でも与え続けている。

元々エヴァ達はサイの過去を偶然とは言え知ってしまったとは言え、

最初にそれを知った時は後悔したものだ。

600年もの歳月を生きているエヴァでさえサイの過去を知った際に後悔の念を覚えた程・・・それを高々10年ちょっとしか生きていない少女達が知ればショックを隠しきれないのは当然の事。

「私達の態度はサイさんを不快な気分にしたでしょう・・・。」

まだあの人には京都での事のお礼すら言っていないかもしれません・・・だからもう一度会いに行かねばならないんですけど・・・あんな話を聞いてしまった手前、なんて声を掛けたら良いか・・・。」

そう言い終ると再び溜息を吐く。

実際の所、ネギが落ち込んでいる理由は三人とは違うのだが口を挟むべき空気ではないという事は理解していた。

そんな三人に向かってエヴァは小さく溜息を吐くと言う。

「ハア・・・成る程な。」

更に近衛木乃香が先ほどから黙って見えんようにメソメソ泣いているのはサイに振られたからか。

貴様ら、そんな事で一々落ち込んだり泣いたりするなら此処ではなく他所でやれ」

「「なっ!?!?」「」

エヴァの遠慮の無い物言いにエヴァを見る明日菜と刹那。

一方、木乃香はと言うと・・・肩をビクツとさせた後、再び表情が歪んで瞳からは大粒の涙が流れ出す。

咎めるような表情をする二人や木乃香に対して、エヴァは表情を変えずに淡々と返す。

「大体、泣いた所で現実が変わるのか？」



自分ではどうしようもない現実に直面したら泣けば済むなどと考えている輩では、サイの過去がどうあれ振られて終わりだ。そもそも事情は兎も角として、貴様らは先にサイに言うべき事があるのではないのか？

礼儀も果たさずに泣いている暇があるなら、さっさと筋を通せ馬鹿者共が」

エヴァは言い終わると時計の時間を確認してから外に出て行くとした。

元々、彼女達がどのような態度だろうとサイにどんな過去があらうと今のエヴァには関係ない。

己は過去を知り、サイの苦悩を知ったあの日から・・・どんな事があるうと共に行き、友として支えると決めていたのだから。

だがその時、不意に思い出したかのように明日菜達の方を向き直すと言いつつ。

「・・・人を愛するという事はえてして辛いものだ。

それは愛だけでなく、己の信念や誇り、夢なども同じだ・・・更に人は生まれた時から平等でも無いしな。

だがその不平等を嘆くのではなく超える事が出来た一部の者が本当に大切なものを得る事が出来るといふ事だけは忘れるな。

方法は色々ある筈だ、それは自分達で良く考える・・・私は今から用事があつてサイの所に行く、着いて来るのなら勝手にしろ」

言い終わるや否や、エヴァはそのまま出て行く。

その後ろに茶々丸やザジ、さよも共に着いて行き・・・部屋の中にはネギと明日菜達だけが残った。

残った明日菜達はエヴァに言われた言葉の意味を考える。

確かに考えてみれば、色恋沙汰は別としてもこのまま余所余所しい

態度で居ると言うのも気持ちが悪い。

そこで別の事柄で悩んでいた為意味は解らないが・・・兄のように慕う人物を避けていると言う事だけは解ったネギが口を開く。

「明日菜さん、刹那さん、木乃香さん。

ボクは皆さんの事情は良く解りません　　けど、エヴァさんの言う事も間違っていないと思います。

何があったのかは知りませんが・・・皆でお兄ちゃんに会いに行きましょう。

そこで謝れば良いじゃないですか、お兄ちゃんだって許してくれると思いますよ!!」

ネギの言葉に明日菜も賛同する。

「そう、よね・・・事情は兎も角として、サイには色々と助けてもらったわ。

そんなサイに対して今の態度のままじゃ悪いわよね!!　ねえ、私達もサイの所に行こう!!

それ以外の事とかは後で考えればいいじゃない!!　ねっ?　刹那さん、木乃香?」

明日菜の提案に刹那もゆっくりと・・・一瞬、逡巡しながらも頷きつつ答える。

本当は彼女はショックから立ち直れては居ない、だが木乃香の事を気にしているが故にその態度を表に出す事はしなかった。

「は、はい・・・私は、大丈夫ですけど・・・このちゃんは・・・?」

ネギの言葉と明日菜の提案に今まで俯いていた木乃香。

しかしようやく少しだけ笑みを取り戻すと答える　　そう、落ち込んでいても何も始まらないのだから。

「・・・せやな・・・このままやったらあかん。」

うん、決めた！！　ウチらもサイくんの所に行きな、せつちやん！！」

まあ空元気かもしれない。

だがそれでも・・・少しでも前を向こうと木乃香が決めたのならば、刹那もその様子を見て、自分も一緒に行く事に賛同したのであった。

時を同じくして次元を越えた先

魂獣界にてサイの事を探し続ける者達の方へと場面は移った。

「おかしいにや〜？

こちらや天空審判の連中がこんなに探してるのに情報の一つも見当たらないなんて・・・」

部下である異駕忍軍・穴熊衆の情報を聞きながらマガツは首を捻る。此処はある事情から隔絶されていた魂獣界が一つとなり、魂獣大帝の下に平和を護っていく為に生み出された帝政府の中心都市“アマツ”の中にある異駕忍軍の隠れ里だ。

行方不明になったサイを探す為に全力で彼の足取りを追っていたマガツ達。

少しでも良いから手がかりを見つけられればと考え、穴熊衆の他にもヒデヤス率いる隠神刑部武者部隊“蛟”やヒデタダ率いる陰陽師

団“仙狸”、更に天空審判議会の力も使っているのだが・・・足取りが一切合切見つけれられないのだ。

・・・流石の『超忍』と呼ばれるマガツでも、これだけ探してみても情報が無いというのはお手上げの状態であった。

「全く・・・本当にあの馬鹿は何処に行ったんだか・・・」

悪態を吐くマガツだが、内心は不安を感じていた。

本来、死ぬ筈も無いと考えられているサイだが・・・同じように死ぬ筈も無い者達が命を散らしていく様を先の大戦にて彼女は何度も見てきている。

この世には絶対と言う概念は無い　　どのような強さを持つ猛者であっても呆気無く死んでしまう事など多々あるのだ。

考えれば考える程に悪い予想ばかりが脳裏に浮かんでは消える。そんな自分の考えを否定するかのように、マガツは激しく首を振りながら自分に言い聞かせるかのように独り呟く。

「まっ、んな訳ないか。

サイの馬鹿・・・本当に何処にいても皆に心配かける奴ねえ全くもっ」

ふとその時、一人の忍がマガツの前に跪いた。

「・・・何事だ」

「はっ、頭領・・・未だ前魂獣大帝サイ様の行方は知れず。

ですが少し気になる情報を得ました　　どうぞ、この報告書を御検分下さい」

忍から渡された報告書に目を通すマガツ。  
そこにはこの一年の間に魂獣界にて発生した不可解な現象についての情報が事細かに書き記されていたのだ。

魂獣界の隔たりが無くなり、今となつては珍しくなつた不可解な超常現象。

そんな中で時たま起こっていたのが“神隠し”の現象である・・・  
人的被害は多くは無く、殆ど場合は直ぐに見つかるのがせめてもの救いだ。

報告書の内容を読み続けてそこでマガツは一つの事に気付く。

所謂神隠しと呼ばれる現象がひき起こっているのは殆どが同じ場所・・・かつて『第一次魂獣界大戦』や『第二次魂獣界大戦』と呼ばれる戦争が起こつた場所であるという事だ。

何度も何度もその場所で不可解な力の奔流が発生していると考えれば、偶然だとは言えない。

「・・・報告ご苦労。

この情報を至急アマツ中心部の魂獣大帝様と天空審判議会へと届けよ」

「・・・御意」

一言だけ言葉を発するとマガツに渡された報告書を手に姿を消す部下の忍。

その姿が消えたのをしっかりと目で確認した後・・・マガツは空を見上げながら呟いた。

「・・・確証は無いけど、状況を考えれば間違いない。

やれやれ・・・まだ存在してたのね、暴走した転送門が・・・全部封印したと思つてただけだ」

マガツの虚しげな呟きは誰に聞かれることも無く消える。  
そして・・・もし自らの予想が間違っていないのでなければ、サイ  
を見つめる道行は間違いなく前途多難になるだろうと。

そして再び場面は次元を超え、教会へと戻る。

修学旅行から帰ってきて久しぶりにシャーケティ・美空・ココネと  
四人で昼食を取り終わったサイは、日課の麻帆良散策に出かけよう  
としていた。

おりしも今日はエヴァ達＋美空と共に散策に行く約束で、麻帆良の  
中心部である世界樹前広場で待ち合わせだ。

「んじゃ行つて来るわ、シャーケティ。

帰つて来たら修学旅行の時の土産話すつからなく、楽しみにしてる  
よココネ。

んじゃ行くべ、美空」

「はいはい、んじゃ行こうか。

じゃあシスター、ココネ、ちょっとサイ君に付き合つて行ってきま  
す」

ブンブンとまるで子供のようによく手を振るサイ、その横に居た  
美空も同じように手を振る。

それに対してココネはいつも通り不器用な笑みを、シャーケティも  
いつも通り・・・正確に言えば他の教師達の前では決して出す事も  
無い母性に満ちた笑みを浮かべて手を振りながら言葉を返す。

「早く・・・帰つてきてネ・・・」

「はい、私も土産話を楽しみにしていますので」

見送りの言葉を聞いてから勢い良く扉を開けて走り出そうとするサイと美空。

待ち合わせの時間まで後10分・・・十分間に合う時間である。

「よっしや美空、どっちが先に世界樹前広場に着くか競争しようぜ」  
「おっ、良いねえ　じゃあサイ君、負けた方がジューズ奢りね」

そう言つて二人が走り出そうとした・・・まさにその時の事である。開いた教会の入り口から見える視線の先に、何やらヨロヨロと動く黒い物体が見えたのだ。

「あん・・・？　んだありや？」

「ん？　どつたの、サイ君？」

気になったサイはゆっくりその黒い物体に近付いて行く。

良く見てみればそれは黒い物体ではなく、黒い子犬のようだ・・・首輪やら何やらが無い所を見ると野良犬のようだが、大分弱っている。

特に酷いのは足の傷だ　　どうやらかなり.....の長距離を歩いてきたらしく、四本の足には所々に血の痕や汚れのようなものが付いていた。

「あつ、犬だ・・・何処から来たんだろうね？」

「・・・見た事ねえ犬ところだな。」

茶々丸の世話してる連中（野良猫達）に新しく仲間入りでもした新入りか？

まあ良いや、このまま放つておいたら直にお迎えが来ちまう」

優しく子犬を抱き上げると教会の中に運ぶ。

自分には関係ないし、見た事も無い野良犬ではあるが・・・目の前で放置して死なれるのも目覚めが悪い。

「どうしましたサイさん、やけにお早い・・・あら、その子は？」

「まあ行き倒れって奴だ・・・教会の真ん前に倒れてたからよ。

流星に見ちまった以上、そのまま放置しとく訳にも行かねえだろ・・・  
・そしたら此処の神様に天罰喰らっちゃう」

子犬が弱っているのを見て、直ぐに毛布を持ちに行くシャークティ。  
元々此処が教会であるが故に動物を飼う事は出来ないが、彼女もココネも美空も意外と動物は好きなのである。  
まつ、元々生きとし生けるもの全てに無償の愛を注ぐのが信奉する神様なのだから当然の事か？

「・・・コノ子・・・大丈夫？」

「ちつと待つてるココネ・・・出でよ、聖杖ヤツフサ。

ああ、命に別状はねえみてえだ・・・過度の疲労が原因でぶっ倒れただけだ、それと熱もあんな。

おっと、ココネには難しいか　簡単に言えば疲れ過ぎて元気が無いだけさ、美味しいモン食わせて休ませときゃ直ぐに元気になるって事」

心配そうに子犬を見つめていたココネもサイの言葉で安心したようだ。

・・・てか、下手すれば某魔術師と使役英霊の作品の宝具クラスの代物を惜しげもなく召喚して子犬の体調を調べるのに使うとは・・・サイは豪快と言うか何も考えていないと言うか。



まあしかしこれがこの漢の正確なのだから仕方があるまい……案内、某征服王閣下と話が合いそうな人物である。

「じゃあゆつくり休ませてあげて、目が覚めたらご飯食べさせてあげれば大丈夫って事だね。

あゝ良かった……で、拙いよサイ君!! 待ち合わせの時間まで後ごふ……『ボンッ!!』……え、何“ボンッ!!”て……何のお……と!??」

美空の言葉に皆が釣られて時計の方を注視したその時

まるで小さな爆発が起こったような音が鳴り響く……何の音かと皆が音のした方を見ると、其処には目を疑う光景が映った。

何故なら、今まで子犬が寝かされていたその場所に

耳と尻尾を持つ、ネギと同じ位の年恰好の、しかもサイが見覚えのある裸の少女が倒れこんでいたのだから。

「……お前……小太郎!？」

オイオイ……何で、京都に居る筈の小太郎が麻帆良に……!??」

しかし、その問いに裸の少女……小太郎は答えられない。

ただ……荒い呼吸と全身中から噴出している脂汗を見れば、余り良い状況でない事は理解出来る。

「チツ……クソ!!」

過労の所為でヒデエ熱だ……何で此処に居るかは知らねえが、休ましとかねえと拙い……。

シャークティ、奥のベッド借りるぜ!!」

シャークティも事情は良く飲み込めないが緊急事態だと言う事は直

く理解出来た。

その為、直ぐに頷いて奥の使用していない客室のベッドへとサイを誘導する。

・・・それから暫くドタバタ騒ぎの如く緊急で着替えやら氷やらを用意し、小太郎が心地良さそうに眠るまでには30分以上かかったと言っ。

物語の歯車はくるりくるりと回る。

一つの物語は幕を下ろし、また新たな物語の幕を上げつつ・・・ただ肅々と。

次元を隔てた世界で動き出した仲間達、英雄の子の苦悩、少女達の未来、緊急過ぎる再びの再会とその真意。

それが新たなる戦いの幕開けの号砲である事を知る者は居まい。

此処より先、この邂逅やネギの心に芽生えた善悪への疑念がどのよ  
うな結末を紡ぐのか。

それは、また次回の講釈へと続くという事にしよう・・・。

## 第五十話 異なる世界の真ん中で（後書き）

投稿完了です。

ついに新章突入&五十話突破です！！（・・・実際は2話前に突破してますけどね）

新章突入の一発目で小太郎との再会、この辺は後の設定を弄くりまくってます。

まあちず姉によって出会いを作ってもよかったですけど・・・この作品の場合、小太郎君女の子ですからねえ・・・。

この出会いが後にどのような明日を作るのか・・・それは此处ではまだ語らない事にします^^

そして本編では余り触れられていませんでしたが、ネギ君の持った善悪と言う存在の矛盾・疑念。

これがこの物語の後にある事を引き起こしてしまう結果となります・・・その先でネギ君が成長できるかどうかは本人の意思次第でしょう。

商業版とは性別も全く変わってしまった二人の少年の道行き、どうか見守ってください^^

さて、ではこの辺で今回の後書きの終わりとさせていただきますように。

年末となり、2011年もあと三日と差し迫った今日この日・・・特に未曾有の大地震によって今年は多くの方が犠牲となり、日本自体にも大きな大打撃を受けてしまった今年度・・・亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

私も大地震の影響が大きくなかったとは言え少なくは無く・・・命

があつた事をありがたく感じています。  
私にはこのように文章にて書く事しか出来ず、自ら齒痒い思いをし  
ております。

ですが『暮れない朝があれば明けない夜も無い』と言つ言葉があり  
ます。

今年の方まで来年が良き年となるよう、切に願つ次第ですね。

皆様、特に寒い日をお過ごしになっている方々。

インフルエンザなどが流行り始める今日この頃に、お身体などを壊  
されぬようお祈り申し上げます。

では長くなりましたが最後に

皆様、残り少ない本年や来年が良き年となるように願います。

白面ノ皇作者ZEROより

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1474t/>

---

白面ノ大帝(ハクメンノウウ)

2011年12月29日13時52分発行